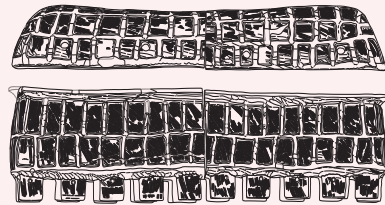


赤田横穴墓群・赤田1号墳



2015

奈良市教育委員会



1. 赤田横穴墓群出土の陶棺



1. 発掘区全景（南西から）



2. 赤田6号墓・7号墓・8号墓 墓道完掘状態（南から）



1. 赤田5号墓 陶棺・土器出土状態（南から）



2. 赤田9号墓 亀甲形陶棺（手前中央）・円筒形陶棺（奥・右）出土状態（東から）



1. 赤田3号墓出土 彩色陶棺蓋



2. 赤田9号墓出土 亀甲形陶棺と円筒形陶棺



1. 赤田横穴墓群出土 耳環

1：3号墓 2・3：5号墓北陶棺

5～7：5号墓南陶棺

8：4号墓 4：9号墓



2. 赤田5号墓 南陶棺出土 玉類



3. 赤田5号墓 北陶棺出土 玉類



1. 赤田5号墓 北陶棺出土 耳環・鉄器



2. 赤田5号墓 南陶棺出土 耳環・鉄器



1. 赤田3号墓 玄室出土土器



2. 赤田5号墓 玄室出土土器



1. 赤田1号墳 全景（北西から）



2. 赤田1号墳 出土遺物

赤田横穴墓群・赤田1号墳

2016

奈良市教育委員会

例 言

1. 本書は奈良市西大寺赤田町に所在する赤田横穴墓群・赤田1号墳の発掘調査報告である。
2. 本書に係る発掘調査の現地調査期間は以下の通りである。

赤田 (AD) 第01次調査	昭和58 (1983) 年 5月18日～ 6月15日
試掘 2010-4次調査	平成22 (2010) 年 11月17日～ 12月28日
赤田 (AD) 第02次調査	平成23 (2011) 年 1月7日～ 3月24日
赤田 (AD) 第03次調査	平成23 (2011) 年 9月9日～ 9月16日
赤田 (AD) 1号墳	平成26 (2014) 年 8月11日～ 8月20日

なお、第1次調査については『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』、第2・3次調査については『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成22 (2010) 年度』に概要を報告している。
3. 赤田横穴墓群の発掘調査は、第1次調査を奈良市埋蔵文化財調査センター 西崎卓哉・森下恵介、試掘 2010-4次調査を池田裕英、第2次調査を池田裕英・安井宣也・鐘方正樹・奥井智子（現京都市文化市民局）、第3次調査を池田裕英・安井宣也・奥井智子が担当した。赤田1号墳の発掘調査は村瀬 陸が担当し、池田裕英・鐘方正樹が補佐した。
4. 耳環の材質と構造及び陶棺に塗布された顔料については奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義・柳田明進・鶴 真美氏に科学分析をお願いし、その結果を第V章第1・2節に掲載した。
5. 陶棺の胎土、赤田1号墓の石室石材について奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田 尚氏に観察をお願いし、その観察結果を本文中に引用した。
6. 現地における遺構の写真撮影、測量には独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室 金田明大氏から協力を頂いた。
7. 遺物写真撮影については、アートフォト右文に撮影委託した。
8. 一部の陶棺の復原、実測図作成、トレース作業については、(株)文化財サービス・(株)アコードに委託した。
9. 本書の内容について要旨を作成し、英語・中国語に翻訳して付載した。翻訳は下記の方々に依頼した。

英文：Walter Edwards (奈良文化財研究所客員研究員)
中文：周 吟 (関西大学大学院博士後期課程)
10. 発掘調査及び本書の作成にあたっては、下記の方々から、ご助言、ご教示をいただいた。

茨木敏仁	岩戸晶子	ト部行弘	小栗明彦	河内一浩	白石太一郎
菅谷文則	杉本順一	須藤好直	橋本裕行	坂 靖	藤原郁代
丸山竜平	宮岡昌宣	茂木雅博	和田晴吾	(50音順 敬称略)	
11. 本書の執筆は埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介の指導のもとに、調査担当者、埋蔵文化財調査センター職員の討議を経て、各担当者が分担して執筆し、文末に執筆者名を記した。編集はセンター職員の助言を得て、池田裕英が担当した。
12. この報告に関する発掘調査で作成した図面・写真等の記録類、出土した遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。
13. 現地における遺構の保存、発掘調査の実施にあたっては、医療法人平和会並びに社会福祉法人秋篠茜会から多大なご協力があった。記して感謝いたします。

凡 例

1. 調査次数は、奈良市教育委員会が実施した赤田横穴墓群に対する調査の通算次数である。本報告書では赤田横穴墓群並びに赤田1号墳の略称としてADの表記を使用している。
2. 本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称・型式は、基本的に奈良文化財研究所及び奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。本文中では煩雑を避けるために、それらの引用・参考文献をその都度表記することはしていない。
埴輪：川西宏幸 1978 古墳時代・飛鳥時代初頭の須恵器：田辺昭三 1981
飛鳥時代の土器：奈良国立文化財研究所 1995 奈良時代の土器；奈良国立文化財研究所 1976
中世の土器：森下恵介・立石堅志 1986 菅原正明 1983
3. 挿図における遺物番号は各横穴墓・古墳で鉄器や土器、埴輪など遺物の種類毎に番号を付与している。
4. 本書の本文中には挿図・写真を掲げているが、それらを図として通し番号で表記している。
5. 本書の遺構図、土層図に示した座標値は平面直角座標系第VI系（世界測地系）の数値である。なお、図中の座標値表記については、単位（m）を省略した。また、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。
6. 高さは国土交通省街区基準点を基本とし、T.P.（東京湾平均海面）を採用した。
7. 遺構図・土層図の図面の縮尺は各図に示した。記述のない図は任意の縮尺である。
8. 遺物実測図の縮尺は陶棺が1/10、金属器が1/2、埴輪・土器が1/4を基本としている。ただし、一部の遺物は必ずしもこの限りではない。縮尺率については各スケールに示しているののでそちらを参照されたい。また、遺物図の断面は陶棺・埴輪の断面は白抜き、土器は黒塗り、金属器は斜線で表現している。
9. 本報告で使用した土層名並びに土器、埴輪の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。
10. 本文中の註記は各節ごとに1から番号を付して節末に示した。また、引用文献および参考文献については本文中の（ ）内に著者名あるいは発行機関名と発行年を記し、巻末に一括して引用・参考文献一覧を掲げた。

赤田横穴墓群・赤田1号墳

目次

第I章 調査の経過

- 第1節 赤田横穴墓群の調査 …………… 1
- 第2節 赤田1号墳の調査 …………… 3

第II章 遺跡の位置と環境

- 第1節 遺跡の位置と地形・地質の特色 …………… 4
- 第2節 周辺の遺跡の特色 …………… 4
- 第3節 明治時代の発掘と出土品 …………… 8

第III章 試掘調査

- 第1節 調査の方法 …………… 13
- 第2節 層序 …………… 13
- 第3節 試掘調査の結果 …………… 15
- 第4節 出土遺物 …………… 16

第IV章 横穴墓・古墳の調査

- 第1節 横穴墓の調査方法 …………… 17
- 第2節 横穴墓の部分名称と土層の分類 …………… 18
- 第3節 基本層序 …………… 19
- 第4節 赤田1号墓 …………… 20
- 第5節 赤田2号墓 …………… 27
- 第6節 溝状遺構 SZ03・SZ04 …………… 28
- 第7節 赤田3号墓 …………… 29
- 第8節 赤田4号墓 …………… 44
- 第9節 赤田5号墓 …………… 59
- 第10節 赤田6号墓 …………… 95
- 第11節 赤田7号墓 …………… 98
- 第12節 赤田8号墓 …………… 120
- 第13節 赤田9号墓 …………… 133
- 第14節 赤田1号墳 …………… 147

第V章 科学分析と資料調査

- 第1節 赤田横穴墓群・赤田1号墳出土
耳環の材質および構造調査 …………… 156
- 第2節 赤田横穴墓群・赤田1号墳出土
陶棺片彩色顔料の調査 …………… 158
- 第3節 赤田横穴墓群周辺出土の
土師質陶棺資料 …………… 162

第VI章 総括

- 第1節 横穴墓の特徴と変遷 …………… 174
- 第2節 陶棺 …………… 177
- 第3節 土器 …………… 187
- 第4節 赤田1号墳 …………… 192
- 第5節 結語 …………… 194

- 参考文献一覧 …………… 196
- 英文要旨 …………… 198
- 中文要旨 …………… 199
- 遺物観察表 …………… 200

図版
報告書抄録

図版目次

巻首図版

- | | | | |
|--------|--|--------|------------------------|
| 巻首図版 1 | 1. 赤田横穴墓群出土の陶棺 | 巻首図版 5 | 1. 赤田横穴墓群出土 耳環 |
| 巻首図版 2 | 1. 発掘区全景 (南西から) | | 2. 赤田 5 号墓 南陶棺出土 玉類 |
| | 2. 赤田 6 号墓・7 号墓・8 号墓 墓道完掘状態 (南から) | | 3. 赤田 5 号墓 北陶棺出土 玉類 |
| 巻首図版 3 | 1. 赤田 5 号墓 南陶棺 (左)・北陶棺 (右) 内遺物出土状態 (東から) | 巻首図版 6 | 1. 赤田 5 号墓 北陶棺出土 耳環・鉄器 |
| | 2. 赤田 9 号墓 亀甲形陶棺 (手前中央)・円筒形陶棺 (奥・右) 出土状態 (東から) | | 2. 赤田 5 号墓 南陶棺出土 耳環・鉄器 |
| 巻首図版 4 | 1. 赤田 3 号墓出土 彩色陶棺蓋 | 巻首図版 7 | 1. 赤田 3 号墓 玄室出土土器 |
| | 2. 赤田 9 号墓出土 亀甲形陶棺と円筒形陶棺 | | 2. 赤田 5 号墓 玄室出土土器 |
| | | 巻首図版 8 | 1. 赤田 1 号墳 全景 (北西から) |
| | | | 2. 赤田 1 号墳 出土遺物 |

図 版

- | | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|----------------------------------|
| PL. 1 | 1 試掘調査 西区 調査前現況 (南東から) | PL.11 | 5 赤田 4 号墓 羨門 土層と土器出土状態 (南から) |
| | 2 試掘調査 東区 調査前現況 (南西から) | | 6 赤田 4 号墓 羨門 板による閉塞の痕跡 (南西から) |
| | 3 試掘調査 西区 横穴墓検出状態 (南東から) | | 7 赤田 4 号墓 羨門 土器出土状態 (南から) |
| | 4 試掘調査 東区 横穴墓検出状態 (東から) | PL.12 | 1 赤田 4 号墓 墓道 完掘状態 (南から) |
| | 5 試掘調査 西区 赤田 11・12 号墓検出状態 (南から) | | 2 赤田 4 号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から) |
| | 6 試掘調査 東区 赤田 3 号墓検出状態 (南から) | PL.13 | 1 赤田 4 号墓 玄室 西木棺棺台・鉄釘出土状態 (南から) |
| PL. 2 | 1 発掘区全景 (上が北) | | 2 赤田 4 号墓 玄室 東木棺棺台・土器出土状態 (南から) |
| | 2 墓道完掘状態 (右から赤田 4～8 号墓・南から) | | 3 赤田 4 号墓 玄室内全景 (南から) |
| PL. 3 | 1 墓道埋土堆積状態 (左から赤田 5～7 号墓・北から) | PL.14 | 1 赤田 4 号墓 玄室 土器出土状態 (南から) |
| | 2 発掘区西壁土層と河川による土壌化の様子 (南から) | | 2 赤田 4 号墓 玄室 陶棺脚部出土状態 (南から) |
| PL. 4 | 1 玄室完掘状態 (手前から赤田 4～8 号墓・東南から) | | 3 赤田 4 号墓 玄室 平面・断面検出状態 (南から) |
| | 2 玄室完掘状態 (手前から赤田 4～8 号墓・北東から) | | 4 赤田 4 号墓 玄室 完掘状態 (南から) |
| PL. 5 | 1 AD 第 01 次調査 赤田 1・2 号墓完掘状態 (南から) | PL.15 | 1 赤田 5 号墓 墓道 土層堆積状態 (南から) |
| | 2 AD 第 02 次調査 赤田 1 号墓完掘状態 (南から) | | 2 赤田 5 号墓 羨門 板による閉塞の痕跡 (南から) |
| PL. 6 | 1 赤田 2 号墓 完掘状態 (南から) | | 3 赤田 5 号墓 墓道 土器出土状態 (南から) |
| | 2 赤田 2 号墓 玄室 奥壁検出状態 (南から) | | 4 赤田 5 号墓 墓道 土器出土状態 (南から) |
| | 3 赤田 2 号墓 玄室 土器出土状態 (南から) | | 5 赤田 5 号墓 墓道 完掘状態 (南から) |
| PL. 7 | 1 赤田 3 号墓 墓道 土層堆積状態 (北から) | | 6 赤田 5 号墓 玄室 平面・断面検出状態 (南から) |
| | 2 赤田 3 号墓 羨門 土層堆積状態 (南東から) | PL.16 | 1 赤田 5 号墓 玄室 埋没状態 (西から) |
| | 3 赤田 3 号墓 墓道 土器出土状態 (北から) | | 2 赤田 5 号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (北東から) |
| | 4 赤田 3 号墓 墓道 土器出土状態 (南西から) | PL.17 | 1 赤田 5 号墓 玄室 南陶棺南西側土器出土状態 (南西から) |
| | 5 赤田 3 号墓 墓道 完掘状態 (南から) | | 2 赤田 5 号墓 玄室 南陶棺西側土器出土状態 (南から) |
| PL. 8 | 1 赤田 3 号墓 玄室 陶棺出土状態 (南西から) | | 3 赤田 5 号墓 玄室 北陶棺東側土器出土状態 (南東から) |
| | 2 赤田 3 号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南東から) | | 4 赤田 5 号墓 玄室 北陶棺東側土器出土状態 (東から) |
| PL. 9 | 1 赤田 3 号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から) | | 5 赤田 5 号墓 玄室 北陶棺と陶栓 (東から) |
| | 2 赤田 3 号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から) | | 6 赤田 5 号墓 陶栓がはめられた状態 (陶棺内側から) |
| | 3 赤田 3 号墓 玄室 土器出土状態 (南東から) | | 7 赤田 5 号墓 玄室 北陶棺西側面 (西から) |
| | 4 赤田 3 号墓 玄室 耳環出土状態 (西から) | | 8 赤田 5 号墓 玄室 北陶棺北側土器出土状態 (西から) |
| | 5 赤田 3 号墓 玄室 耳環出土状態 (西から) | PL.18 | 1 赤田 5 号墓 玄室 全景 (東から) |
| | 6 赤田 3 号墓 玄室 第 4 層赤色顔料の広がり (南から) | | 2 赤田 5 号墓 陶棺内遺物出土状態 (東から) |
| | 7 赤田 3 号墓 玄室 第 4 層鉄鎌出土状態 (南から) | PL.19 | 1 赤田 5 号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南東から) |
| PL.10 | 1 赤田 3 号墓 玄門から玄室前方土器出土状態 (南から) | | 2 赤田 5 号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南から) |
| | 2 赤田 3 号墓 玄室 完掘状態 (南から) | | 3 赤田 5 号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南から) |
| PL.11 | 1 赤田 4 号墓 墓道 土層堆積状態 (南東から) | | 4 赤田 5 号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南から) |
| | 2 赤田 4 号墓 墓道 土器出土状態 (南から) | | 5 赤田 5 号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南東から) |
| | 3 赤田 4 号墓 羨門から玄室の土層堆積状態 (南西から) | | 6 赤田 5 号墓 北陶棺内遺物出土状態 (東から) |
| | 4 赤田 4 号墓 墓道 土器出土状態 (南西から) | | |

PL.19	7	赤田5号墓	北陶棺内遺物出土状態(南から)	PL.32	4	赤田9号墓	玄室 土馬出土状態(南から)
	8	赤田5号墓	北陶棺内遺物出土状態(南から)		5	赤田9号墓	玄室 陶棺出土状態(東から)
PL.20	1	赤田5号墓	玄室 完掘状態(南から)		6	赤田9号墓	玄室 円筒形陶棺B出土状態(南から)
	2	赤田5号墓	玄室 完掘状態(北から)		7	赤田9号墓	玄室 円筒形陶棺B出土状態(北から)
PL.21	1	赤田5号墓・6号墓	玄室重複状態(南から)	PL.33	1	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺・円筒形陶棺A出土状態 (南西から)
	2	赤田6号墓	墓道 完掘状態(南から)		2	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺・円筒形陶棺A出土状態 (西から)
	3	赤田6号墓	玄室 完掘状態(北から)	PL.34	1	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺出土状態(西から)
PL.22	1	赤田7号墓	墓道 土層堆積状態(南西から)		2	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺・土器出土状態(北から)
	2	赤田7号墓	墓道 土器出土状態(南西から)		3	赤田9号墓	玄室 円筒形陶棺A出土状態(西から)
	3	赤田7号墓	墓道 土器出土状態(南西から)		4	赤田9号墓	玄室 土器出土状態(西から)
	4	赤田7号墓	羨門 床面(南西から)		5	赤田9号墓	玄室 円筒形陶棺A出土状態(南西から)
	5	赤田7号墓	墓道 完掘状態(南から)		6	赤田9号墓	玄室 円筒形陶棺A・土器出土状態 (南西から)
	6	赤田7号墓	羨門(南から)		7	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺・耳環・土器出土状態 (南から)
PL.23	1	赤田7号墓	玄室 陶棺・土器出土状態(南から)		8	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺下土器出土状態(南から)
	2	赤田7号墓	玄室 陶棺出土状態(南東から)	PL.35	1	赤田9号墓	玄室 完掘状態(南から)
PL.24	1	赤田7号墓	玄室 平面・断面検出状態(南から)		2	赤田9号墓	玄室 完掘状態(北東から)
	2	赤田7号墓	玄室 陶棺出土状態(東から)	PL.36	1	赤田1号墓	陶棺(長側面)
	3	赤田7号墓	玄室 陶棺・土器出土状態(南東から)		2	赤田1号墓	陶棺
	4	赤田7号墓	玄室 陶棺出土状態(西から)		3	赤田1号墓	陶棺(短側面)
	5	赤田7号墓	玄室 陶棺・土器出土状態(南から)		4	赤田1号墓	陶棺蓋
	6	赤田7号墓	玄室 陶棺・土器出土状態(南東から)		5	赤田1号墓	棺蓋内面の藁縄状圧痕
	7	赤田7号墓	玄室 陶棺出土状態(東から)		6	赤田1号墓	鉄鏃
	8	赤田7号墓	玄室 西陶棺出土状態(東から)	PL.37	1	赤田1号墓	玄室出土土師器甕
PL.25	1	赤田7号墓	玄室 土器出土状態(南東から)		2	赤田1号墓	玄室出土土器
	2	赤田7号墓	玄室 土器出土状態(北東から)	PL.38	1	赤田3号墓	陶棺
	3	赤田7号墓	玄室 土器出土状態(西から)		2	赤田3号墓	陶棺(長側面)
	4	赤田7号墓	玄室 土器出土状態(西から)		3	赤田3号墓	陶棺(短側面)
	5	赤田7号墓	玄室 陶棺・土器出土状態(南から)		4	赤田3号墓	陶棺蓋(長側面)
	6	赤田7号墓	玄室 土器出土状態(北から)		5	赤田3号墓	陶棺身
	7	赤田7号墓	玄室 土器出土状態(南から)		6	赤田3号墓	耳環・鉄鏃・鉄鏃
PL.26	1	赤田7号墓	玄室 西陶棺と脚下の埴輪(南から)	PL.39	1	赤田3号墓	玄室出土土器(陶棺)
	2	赤田7号墓	玄室 西陶棺脚下の埴輪(南西から)		2	赤田3号墓	玄室出土須恵器(木棺)
	3	赤田7号墓	玄室 陶棺出土状態(南から)		3	赤田3号墓	羨門出土須恵器短頸壺
	4	赤田7号墓	完掘状態(南から)		4	赤田3号墓	墓道出土須恵器
PL.27	1	赤田8号墓	墓道 土層堆積状態(南東から)	PL.40	1	赤田4号墓	陶棺蓋
	2	赤田8号墓	墓道 土器出土状態(東から)		2	赤田4号墓	陶棺蓋
	3	赤田8号墓	墓道 土器出土状態(南東から)		3	赤田4号墓	陶棺蓋
	4	赤田8号墓	羨門 検出状態(南から)		4	赤田4号墓	陶棺身
	5	赤田8号墓	墓道 完掘状態(南から)		5	赤田4号墓	陶棺身(底部裏面)
	6	赤田8号墓	羨門(南から)	PL.41	1	赤田4号墓	陶棺身(長側面)
PL.28	1	赤田8号墓	玄室 土層堆積状態(東北から)		2	赤田4号墓	耳環・鉄鏃・鉄釘
	2	赤田8号墓	玄室 陶栓出土状態(西から)		3	赤田4号墓	円筒埴輪
	3	赤田8号墓	玄室 陶棺内鉄器出土状態(東から)		4	赤田4号墓	形象埴輪
	4	赤田8号墓	玄室 陶棺出土状態(南から)		5	赤田4号墓	玄室出土須恵器(陶棺)
	5	赤田8号墓	玄室 陶棺出土状態(東から)		6	赤田4号墓	玄室出土須恵器(東木棺)
PL.29	1	赤田8号墓	羨門・玄室(南から)	PL.42	1	赤田4号墓	玄室出土須恵器台付長頸壺(西木棺)
	2	赤田7号墓・8号墓	完掘状態(南から)		2	赤田4号墓	玄室出土須恵器壺H
PL.30	1	赤田9号墓	墓道 土層堆積状態(北東から)		3	赤田4号墓	羨門閉塞出土土師器椀
	2	赤田9号墓	墓道 土器出土状態(西から)		4	赤田4号墓	玄室・墓道出土土馬
	3	赤田9号墓	墓道 遺物出土状態(南東から)		5	赤田4号墓	羨門出土須恵器台付長頸壺
	4	赤田9号墓	墓道 土馬出土状態(南東から)		6	赤田4号墓	墓道出土須恵器甕
	5	赤田9号墓	墓道 完掘状態(南から)	PL.43	1	赤田5号墓	北陶棺(長側面)
	6	赤田9号墓	玄門 断面(南東から)		2	赤田5号墓	北陶棺
PL.31	1	赤田9号墓	玄室 検出状態(南から)		3	赤田5号墓	北陶棺(短側面)
	2	赤田9号墓	玄室 陶棺出土状態(南から)				
PL.32	1	赤田9号墓	玄室 陶棺出土状態(北東から)				
	2	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺出土状態(南から)				
	3	赤田9号墓	玄室 亀甲形陶棺出土状態(北から)				

PL.43	4	赤田5号墓	北陶棺蓋の切断形態	PL.52	1	赤田9号墓	円筒形陶棺蓋
	5	赤田5号墓	陶栓		2	赤田9号墓	円筒形陶棺 A
PL.44	1	赤田5号墓	南陶棺 (長側面)		3	赤田9号墓	円筒形陶棺 A (蓋なし)
	2	赤田5号墓	南陶棺		4	赤田9号墓	円筒形陶棺 B
	3	赤田5号墓	南陶棺 (短側面)	PL.53	1	赤田9号墓	耳環
	4	赤田5号墓	南陶棺蓋の切断形態		2	赤田9号墓	玄室出土土師器碗 (陶棺下)
	5	赤田5号墓	南陶棺蓋		3	赤田9号墓	玄室出土土器
PL.45	1	赤田5号墓	北陶棺出土玉類		4	赤田9号墓	玄室出土土師器碗
	2	赤田5号墓	南陶棺出土玉類		5	赤田9号墓	玄室出土須恵器壺 H
	3	赤田5号墓	北陶棺出土耳環・鉄器		6	赤田9号墓	玄室出土土師器
	4	赤田5号墓	南陶棺出土耳環・鉄器		7	赤田9号墓	墓道出土土器・土馬
PL.46	1	赤田5号墓	玄室出土土器	PL.54	1	赤田1号墳	垂直写真 (上が北)
	2	赤田5号墓	南陶棺内出土須恵器		2	赤田1号墳	不時発見時の状態 (南西から)
	3	赤田5号墓	墓道出土須恵器	PL.55	1	赤田1号墳	埋葬施設 (北西から)
	4	赤田6号墓	墓道出土須恵器甕		2	赤田1号墳	埋葬施設 (南西から)
	5	赤田6号墓	墓道出土須恵器三耳壺	PL.56	1	赤田1号墳	埋葬施設 (南から)
PL.47	1	赤田7号墓	東陶棺 (長側面)		2	赤田1号墳	埋葬施設 (上方から)
	2	赤田7号墓	東陶棺	PL.57	1	赤田1号墳	陶棺内耳環出土状態 (南西から)
	3	赤田7号墓	東陶棺 (短側面)		2	赤田1号墳	土器出土状態 (北西から)
	4	赤田7号墓	西陶棺 (長側面)	PL.58	1	赤田1号墳	耳環・平瓶出土状態 (南東から)
	5	赤田7号墓	西陶棺蓋 (長側面)		2	赤田1号墳	石室全景 (南西から)
PL.48	1	赤田7号墓	西陶棺	PL.59	1	赤田1号墳	玄門付近 耳環出土状態 (南から)
	2	赤田7号墓	西陶棺 (短側面)		2	赤田1号墳	陶棺脚部 土層堆積状態 (北西から)
	3	赤田7号墓	鉄刀子・鉄釘		3	赤田1号墳	玄門付近 土層堆積状態 (南東から)
	4	赤田7号墓	西陶棺内出土瓌玉		4	赤田1号墳	周溝 土層堆積状態 (南東から)
	5	赤田7号墓	西陶棺下に敷かれた円筒埴輪		5	赤田1号墳	玄室出土土器・耳環
PL.49	1	赤田7号墓	玄室出土土器		6	赤田1号墳	陶棺蓋
	2	赤田7号墓	玄室出土須恵器 (西陶棺)	PL.60	1	調査対象資料および XRF の測定箇所	
	3	赤田7号墓	玄室出土土器 (平安時代)		2	X 線透過撮影像	
	4	赤田7号墓	墓道出土須恵器甕	PL.61	1	3号墓 No.7 の金色層の剥離状態	
	5	赤田7号墓	墓道出土土器		2	1号墳 No.62 の接部の状態	
PL.50	1	赤田8号墓	陶棺蓋長側面 (中央) と短側面 (両端)		3	5号墓 No.58 の最表面の金色層の剥離部	
	2	赤田8号墓	陶棺身 (長側面)		4	5号墓 No.56_3 の蛍光 X 線スペクトル	
	3	赤田8号墓	陶棺身 (短側面)		5	5号墓 No.56_4 の蛍光 X 線スペクトル	
	4	赤田8号墓	陶棺身 (長側面)		6	9号墓出土 No.2 の接部の状態	
	5	赤田8号墓	陶棺身 (短側面)	PL.62	1	SEM-EDS の結果	
	6	赤田8号墓	陶栓		2	XRD スペクトル (1)	
	7	赤田8号墓	陶棺蓋の陶栓装着状態 (復原)	PL.63	1	XRD スペクトル (2)	
PL.51	1	赤田8号墓	鉄鏃・鉄刀子	PL.64	1	陶棺の緑色の IR スペクトル (ATR)	
	2	赤田8号墓	墓道出土須恵器甕		2	3号墓の緑色 (PA FT-IR)	
	3	赤田9号墓	亀甲形陶棺 (長側面)				
	4	赤田9号墓	亀甲形陶棺蓋				
	5	赤田9号墓	亀甲形陶棺				
	6	赤田9号墓	亀甲形陶棺 (短側面)				

挿図目次

図1 赤田横穴墓群・赤田1号墳位置図 (1/3,000) ……………	1	図56 赤田3号墓 陶棺蓋短側面立面図 (左:外面 右:内面 1/10) ……………	35
図2 不時発見時の状況 (南から) ……………	1	図57 赤田3号墓 陶棺蓋口縁部端面の葉脈圧痕 ……………	35
図3 発掘調査風景 (南西から) ……………	2	図58 赤田3号墓 陶棺蓋内面のヘラ描き痕跡 (矢印) と円弧状指ナデ ……………	35
図4 現地説明会 (平成23年3月13日) ……………	2	図59 赤田3号墓 透孔周囲の不規則な小穿孔 ……………	35
図5 赤田1号墳発見時の状況 ……………	3	図60 赤田3号墓 短側面の不規則な小穿孔 ……………	35
図6 赤田横穴墓群と周辺の遺跡 (1/40,000) ……………	5	図61 赤田3号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10) ……………	36
図7 周辺の地形・地質 (1/50,000) ……………	5	図62 赤田3号墓 陶棺蓋内面平面・立面図 (1/10) ……………	37
図8 佐紀古墳群 西群 (南西から) ……………	6	図63 赤田3号墓 陶棺身外面平面・立面図 (1/10) ……………	38
図9 佐紀古墳群 東群 (南から) ……………	6	図64 赤田3号墓 陶棺身内面平面・立面図 (1/10) ……………	39
図10 菅原東遺跡 居館跡 (北東から) ……………	6	図65 赤田3号墓 脚底部の外面調整 (天地逆) ……………	40
図11 西大寺東遺跡 大型掘立柱建物の柱 (南西から) ……………	6	図66 赤田3号墓 棺身蓋受けの断面 ……………	40
図12 菅原東遺跡埴輪窯跡群 (北東から、奥に宝来山古墳) ……	6	図67 赤田3号墓 底部と脚の接合状態 ……………	40
図13 菅原東遺跡埴輪窯跡群出土円筒埴輪 ……………	6	図68 赤田3号墓 陶棺蓋・身内外面立面図 (1/10) ……………	40
図14 狐塚横穴墓群 1～3号墓 (西から) ……………	7	図69 赤田3号墓 玄室出土耳環・金属器 (1/2) ……………	41
図15 歌姫赤井谷横穴墓群 3号墓の玄室内 (南から) ……………	7	図70 赤田3号墓 玄室出土土器 (1/4、31・32は1/8) ……	42
図16 赤田横穴墓群周辺の横穴墓・陶棺出土地 (1/40,000) ……	7	図71 赤田3号墓 墓道出土土器 (1/4、36は1/8) ……	43
図17 明治37年出土の陶棺 (M37 陶棺) 略測図 (1/20) ……	8	図72 赤田3号墓 盗掘坑出土土器 (1/4) ……………	43
図18 明治37年出土の土器 (『明治三十八年埋蔵物録』) ……	9	図73 赤田4号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80) ……	45
図19 須恵器杯H法量分布 ……………	10	図74 赤田4号墓 玄室金属器・土器出土状態 (1/50) ……	47
図20 明治44年出土の陶棺 (M44 陶棺) 略測図 (1/20) ……	10	図75 赤田4号墓 墓道土器出土状態 (1/50) ……………	48
図21 明治44年の陶棺出土地 ……………	11	図76 赤田4号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10) ……	49
図22 調査地と三好多三郎旧所有地 (1/1,500) ……………	12	図77 赤田4号墓 陶棺蓋内面平面・立面図 (1/10) ……	50
図23 試掘調査 (2010-4次)・発掘調査 (AD第02・03次) 位置図 (1/2,000) ……………	13	図78 赤田4号墓 陶棺身内外面 (1/10) ……………	51
図24 試掘2010-4次調査 遺構平面図 (1/800) ……………	14	図79 赤田4号墓 蓋口縁端面の敷葉圧痕 ……………	52
図25 試掘2010-4次調査 西区東壁土層図 (1/80) ……………	14	図80 赤田4号墓 蓋内面の藁縄状圧痕 ……………	52
図26 試掘2010-4次調査 11号墓 (右)・12号墓 (左) 墓道断面図 (1/50) ……………	14	図81 赤田4号墓 陶棺蓋・身内外面立面図 (1/10) ……	52
図27 試掘2010-4次調査 西区横穴墓群平面図 (1/300) ……	15	図82 赤田4号墓 蓋短側面における突帯上面の板押圧痕 ……	53
図28 試掘2010-4次調査 西区北拡張部分 (北から) ……	16	図83 赤田4号墓 脚と底部の接合箇所断面 ……………	53
図29 試掘2010-4次調査 西区出土埴輪 (1/4) ……………	16	図84 赤田4号墓 底部外面の脚接合箇所 ……………	53
図30 試掘2010-4次調査 西区11号墓墓道出土須恵器 (1/4) ……………	16	図85 赤田4号墓 底部外面の脚接合箇所 ……………	53
図31 AD第02・03次調査 遺構平面図 (1/400) ……………	17	図86 赤田4号墓 玄室出土耳環開口部 ……………	54
図32 横穴墓の部分名称 ……………	18	図87 赤田4号墓 玄室出土金属器 (1/2) ……………	54
図33 8号墓羨門部 (南から) ……………	18	図88 赤田4号墓 鉄釘の分類 ……………	55
図34 発掘区西端部 土層断面図 (縦:1/80 横:1/200) ……	18	図89 赤田4号墓 出土形象埴輪 (1/4) ……………	56
図35 赤田1号墓 遺構平面・立面図、土器出土状態 (1/80) ……………	20	図90 赤田4号墓 出土円筒埴輪 (1/4) ……………	57
図36 赤田1号墓 陶棺蓋口縁部端面の葉脈圧痕 ……………	21	図91 赤田4号墓 玄室・盗掘坑出土土器・土製品 (1/4) ……	58
図37 赤田1号墓 陶棺蓋内面の藁縄状圧痕 ……………	21	図92 赤田4号墓 墓道出土土器・土製品 (1/4、16～18は1/8) ……………	58
図38 陶棺の各部名称 ……………	21	図93 赤田5号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/100) ……	60
図39 赤田1号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10) ……………	22	図94 赤田5号墓 玄室陶棺・陶栓出土状態 (1/40) ……	62
図40 赤田1号墓 陶棺蓋内面平面・立面図 (1/10) ……………	23	図95 赤田5号墓 玄室土器出土状態 (1/50) ……………	63
図41 赤田1号墓 陶棺身平面・立面図 (1/10) ……………	24	図96 赤田5号墓 北陶棺内遺物出土状態 (1/10) ……	64
図42 赤田1号墓 脚部の透孔配置 ……………	25	図97 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (1/10) ……	65
図43 赤田1号墓 陶棺断面図 (1/10) ……………	25	図98 赤田5号墓 墓道土器出土状態 (1/50) ……………	66
図44 赤田1号墓 出土鉄鎌 (1/2) ……………	26	図99 赤田5号墓 北陶棺 蓋口縁部端面の葉脈圧痕 ……	67
図45 赤田1号墓 玄室出土土器 (1/4) ……………	26	図100 赤田5号墓 北陶棺 蓋端側内面の閉塞箇所 ……	67
図46 赤田2号墓 遺構平面図・玄室土器出土状態 (1/80) ……	27	図101 赤田5号墓 北陶棺 蓋外面平面・長側面図 (1/10) ……	68
図47 赤田2号墓 玄室出土土器器甕 (1/4) ……………	27	図102 赤田5号墓 北陶棺 蓋内面平面・長側面図 (1/10) ……	69
図48 AD第01次調査 SZ03 (南から) ……………	28	図103 赤田5号墓 北陶棺 身表・裏面平面図 (1/10) ……	70
図49 AD第01次調査 SZ04 (南から) ……………	28	図104 赤田5号墓 北陶棺 身内外面 長側面図1 (1/10) ……	71
図50 赤田1・2号墓とSZ03・04 遺構平面図 (1/200) ……	28	図105 赤田5号墓 北陶棺 身内外面 長側面図2 (1/10) ……	72
図51 赤田3号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80) ……	30	図106 赤田5号墓 北陶棺 蓋・身外面 短側面図1 (1/10) ……	73
図52 赤田3号墓 玄室陶棺・金属器出土状態 (1/50) ……	32	図107 赤田5号墓 北陶棺 蓋・身内面 短側面図2 (1/10) ……	73
図53 赤田3号墓 玄室2層上面の赤色顔料の範囲と鉄鎌 出土状態 (1/50) ……………	32	図108 赤田5号墓 北陶棺 横断面図 (1/10) ……	74
図54 赤田3号墓 玄室土器出土状態 (1/50) ……………	33	図109 赤田5号墓 北陶棺 身裏面 ……………	74
図55 赤田3号墓 墓道土器出土状態 (1/50) ……………	34	図110 赤田5号墓 北陶棺 長側方向における底部の断面 ……	75
		図111 赤田5号墓 北陶棺 短側方向における底部の断面 ……	75
		図112 赤田5号墓 北陶棺 蓋受け接合前のヨコナデ ……	76

図113 赤田5号墓 北陶棺 脚内面に残る穿孔未遂痕跡と透孔	76	図165 赤田7号墓 東陶棺 蓋内面の藁縄状圧痕	104
図114 赤田5号墓 北陶棺 透孔に棒を刺し込んでみた状態	76	図166 赤田7号墓 東陶棺 蓋内面の藁縄状圧痕	104
図115 赤田5号墓 北陶棺 底部と脚の接合状態	76	図167 赤田7号墓 東陶棺 蓋外面平面・立面図 (1/10)	105
図116 赤田5号墓 北陶棺 脚内面に残る虫卵の痕跡	76	図168 赤田7号墓 東陶棺 蓋内面平面・立面図 (1/10)	106
図117 赤田5号墓 北陶棺 製作工程の復原模式図	77	図169 赤田7号墓 東陶棺 身短側内外面立面図 (1/10)	107
図118 赤田5号墓 北陶棺 身体部内面の板押え痕跡	78	図170 赤田7号墓 東陶棺 身外面平面・立面図 (1/10)	108
図119 赤田5号墓 北陶棺 身口縁部内面の木目圧痕	78	図171 赤田7号墓 東陶棺 身内面平面・立面図 (1/10)	109
図120 赤田5号墓 北陶棺 身底部内面外周の木目圧痕	78	図172 赤田7号墓 東陶棺 身底部と脚の接合状態	110
図121 赤田5号墓 北陶棺 身底部内面の脚形状に沿う圧痕	78	図173 赤田7号墓 東陶棺 身底部からはずれた脚	110
図122 赤田5号墓 北陶棺 玄室出土陶栓 (1/4)	79	図174 赤田7号墓 東陶棺 身口縁部内面の板状圧痕	110
図123 赤田5号墓 南陶棺 蓋口縁端面の葉脈圧痕	80	図175 赤田7号墓 東陶棺 身底部と脚部の外面調整	110
図124 赤田5号墓 南陶棺 蓋天井部内面の痕跡	80	図176 赤田7号墓 東陶棺 身底部裏面に残る板状圧痕	110
図125 赤田5号墓 南陶棺 蓋長側面の木板はめ込み孔閉塞痕跡 (外面)	80	図177 赤田7号墓 西陶棺 蓋口縁部外面に塗り込められた藁の痕跡	111
図126 赤田5号墓 南陶棺 蓋長側面の木板はめ込み孔閉塞痕跡 (内面)	80	図178 赤田7号墓 西陶棺 蓋口縁部外面に塗り込められた藁の痕跡	111
図127 赤田5号墓 南陶棺 短側内面の閉塞痕跡	80	図179 赤田7号墓 西陶棺 蓋外面平面・立面図 (1/10)	112
図128 赤田5号墓 南陶棺 蓋外面平面・立面図 (1/10)	81	図180 赤田7号墓 西陶棺 蓋内面の藁縄状圧痕	112
図129 赤田5号墓 南陶棺 蓋内面平面・立面図 (1/10)	82	図181 赤田7号墓 西陶棺 蓋内面の閉塞痕跡	112
図130 赤田5号墓 南陶棺 底部中央の糸通し孔と糸切り痕跡	83	図182 赤田7号墓 西陶棺 蓋内面平面・立面図 (1/10)	113
図131 赤田5号墓 南陶棺 第1次底部成形時の貼付け粘土	83	図183 赤田7号墓 西陶棺 身口縁部内面の板状圧痕	113
図132 赤田5号墓 南陶棺 蓋受け下辺の刺突孔列	83	図184 赤田7号墓 西陶棺 身底部と脚の接合状態	113
図133 赤田5号墓 南陶棺 刺突孔と横位突帯上の圧痕	83	図185 赤田7号墓 西陶棺 身外面平面・立面図 (1/10)	114
図134 赤田5号墓 南陶棺 身表面・裏面平面図 (1/10)	84	図186 赤田7号墓 西陶棺 身内面平面・立面図 (1/10)	115
図135 赤田5号墓 南陶棺 身長側内外面立面図1 (1/10)	85	図187 赤田7号墓 西陶棺 身底部と脚の接合状態	116
図136 赤田5号墓 南陶棺 身長側内外面立面図2 (1/10)	86	図188 赤田7号墓 西陶棺 身脚内面の粘土板落ち込み状態	116
図137 赤田5号墓 南陶棺 短側内外面立面図 (1/10)	87	図189 赤田7号墓 玄室出土鉄器 (1/2)・棗玉 (実大)	116
図138 赤田5号墓 南陶棺 横断面図 (1/10)	88	図190 赤田7号墓 玄室出土円筒埴輪 (1/4)	118
図139 赤田5号墓 南陶棺 脚内面からみた小穿孔と透孔	88	図191 赤田7号墓 出土土器 (1/4、37は1/8)	119
図140 赤田5号墓 南陶棺 長側面脚部透孔周囲にみられるへう描き沈線	88	図192 赤田7号墓 玄室出土隆平永宝	119
図141 赤田5号墓 南陶棺 底部内面の長側縁に沿う横方向の板圧痕	88	図193 赤田8号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)	121
図142 赤田5号墓 北陶棺出土耳環 (25) 開口部外側面	89	図194 赤田8号墓 玄室陶棺 (左)・陶栓 (右) 出土状態 (1/50)	123
図143 赤田5号墓 北陶棺出土耳環 (25) 開口部内側面	89	図195 赤田8号墓 墓道土器出土状態 (1/50)	123
図144 赤田5号墓 北陶棺出土耳環 (26) 開口部外側面	89	図196 赤田8号墓 陶棺蓋内面の藁縄状圧痕	124
図145 赤田5号墓 北陶棺出土耳環 (26) 開口部内側面	89	図197 同圧痕	124
図146 赤田5号墓 玉類法量分布	89	図198 赤田8号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10)	125
図147 赤田5号墓 北陶棺出土遺物 (1~24は実大、25~34は1/2)	90	図199 赤田8号墓 陶棺蓋内面平面・立面図 (1/10)	126
図148 赤田5号墓 南陶棺出土遺物 (1~6は実大、7~21は1/2)	91	図200 赤田8号墓 陶棺身内外面平面・立面図 (1/10)	127
図149 赤田5号墓 玄室出土土器 (1/4)	93	図201 赤田8号墓 陶棺身内外面平面・立面図 (1/10)	128
図150 赤田5号墓 墓道出土土器 (1/4、27は1/8)	94	図202 赤田8号墓 脚と底部の接合状態	128
図151 赤田6号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)	96	図203 赤田8号墓 底部外面の調整	128
図152 赤田6号墓 墓道土器出土状態 (1/50)	97	図204 赤田8号墓 陶棺身短側面立面図 (1/10)	129
図153 赤田6号墓 墓道出土須恵器 (1/4、3は1/8)	97	図205 赤田8号墓 陶棺身短側面断面図 (1/10)	129
図154 赤田6号墓 墓道土器出土状態 (南から)	97	図206 赤田8号墓 陶棺身口縁部内面の木目圧痕	129
図155 赤田6号墓 墓道完掘状態 (南から)	97	図207 赤田8号墓 陶棺身脚と底部の接合箇所の板押え痕跡	129
図156 赤田7号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)	99	図208 赤田8号墓 玄室出土陶栓 (1/4)	130
図157 赤田7号墓 玄室陶棺出土状態 (1/50)	101	図209 赤田8号墓 粘土が付着する陶栓 (右:1・左:6)	131
図158 赤田7号墓 玄室鉄釘・棗玉出土状態 (1/20)	101	図210 赤田8号墓 玄室出土鉄器 (1/2)	131
図159 赤田7号墓 玄室土器・埴輪出土状態 (1/50)	102	図211 赤田8号墓 玄室出土埴輪 (1/4)	131
図160 赤田7号墓 玄室土器 (平安時代) 出土状態 (1/50)	102	図212 赤田8号墓 出土土器・土製品 (1/4)	132
図161 赤田7号墓 墓道土器出土状態 (1/50)	103	図213 赤田9号墓 土層横断面図 (1/50)・遺構平面図・土層縦断面図 (1/100)	134
図162 赤田7号墓 東陶棺 蓋外面切断面付近に残る接合痕跡	104	図214 赤田9号墓 陶棺・土器出土状態 (1/50)	135
図163 赤田7号墓 東陶棺 蓋口縁部外面に残る板の押圧痕	104	図215 赤田9号墓 陶棺・土器の平面分布 (1/50)	136
図164 赤田7号墓 東陶棺 蓋口縁部端面と内面の藁縄状圧痕	104	図216 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋突起の接合状態	137
		図217 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋内面の調整と閉塞箇所	137
		図218 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋口縁部の粘土帯断面	137
		図219 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋内外面平面・立面図 (1/10)	138
		図220 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態1	139
		図221 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態2	139

図222 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態3	139	図256 中山横穴発見時の状況(南東から)	165
図223 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態	139	図257 中山横穴の奥壁(南から)	165
図224 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚外面のタテハケ調整 と板押圧痕跡	139	図258 中山横穴出土遺物の状態(西から)	165
図225 赤田9号墓 亀甲形陶棺 切断面の糸切り痕跡	139	図259 中山横穴出土遺物の状態(北西から)	165
図226 赤田9号墓 亀甲形陶棺 身外面平面・立面図(1/10)	140	図260 中山横穴出土遺物の状態(南東から)	165
図227 赤田9号墓 亀甲形陶棺 身内面平面・立面図(1/10)	141	図261 山陵町1099番地4(北東から)	166
図228 赤田9号墓 円筒形陶棺A 棺蓋外面の2次調整ケズリ	142	図262 山陵町1227番地2(南西から)	166
図229 赤田9号墓 円筒形陶棺A 棺身底部の2次調整ケズリ	142	図263 秋篠町1180番地20の北側付近(西から)	166
図230 赤田9号墓 円筒形陶棺A 棺身底部の断面	142	図264 山陵町御陵前の陶棺出土地	167
図231 赤田9号墓 円筒形陶棺B 棺身外面上半の2次調整 タテハケ	143	図265 明治44年出土の御陵前陶棺絵図	167
図232 赤田9号墓 円筒形陶棺B 棺身内面上半のタテハケ 調整	143	図266 御陵前M43陶棺(1/20)	167
図233 赤田9号墓 円筒形陶棺(1/8)	144	図267 山陵町上畑陶棺(1/20)	168
図234 赤田9号墓 陶棺内出土耳環接合面	145	図268 歌姫赤井谷横穴出土の陶棺B(1/20)	169
図235 赤田9号墓 陶棺内出土耳環(1/2)	145	図269 平城京第207次調査出土陶棺(1/4)	170
図236 赤田9号墓 玄室出土土器・土製品(1/4)	145	図270 宝来横穴出土の陶棺(1/20)	171
図237 赤田9号墓 墓道出土土器・土製品(1/4)	146	図271 大倭大本宮所蔵の陶棺(1/20)	172
図238 赤田1号墳 遺構平面図(1/150)	147	図272 脚接合箇所をの棺底に並ぶ穴	172
図239 赤田1号墳 埋葬施設～周溝土層断面 (断面1・1/60)	148	図273 底部外面中央に残る板圧痕	172
図240 赤田1号墳 玄門部土層断面(断面2・1/60)	148	図274 陶棺出土状態(『すさのお』第20号1968年)	172
図241 赤田1号墳 周溝土層断面図(断面3・1/60)	148	図275 中町陶棺出土地点(南から)	173
図242 赤田1号墳 石室裏込め～墓道土層断面 (断面4・1/60)	148	図276 各部形態の分類	175
図243 赤田1号墳 陶棺・遺物出土状態(1/50)	149	図277 1～9号墓の分布と玄室の主軸方向・斜面の区分 (1/400)	176
図244 赤田1号墳 玄室平面・立面図(1/20)	150	図278 1～9号墓の玄・羨門及び墓道の断面模式図 (縦1/200、横1/300、玄・羨門での主軸間隔で展開)	176
図245 赤田1号墳 陶棺蓋平面・立面図(1/6)	151	図279 土師質亀甲形陶棺(身)の法量分布	179
図246 赤田1号墳 陶棺身外面平面・立面図(1/10)	152	図280 棺蓋の系列的变化	181
図247 赤田1号墳 陶棺裏面板状・蕁状圧痕	152	図281 棺身長側面の系列的变化	182
図248 赤田1号墳 陶棺身内面平面・立面図(1/10)	153	図282 棺身短側面の系列的变化	183
図249 赤田1号墳 出土遺物(1/4)	154	図283 底部製作方法の分類(模式図)	184
図250 赤田1号墳 復原模式図	155	図284 陶栓の分類	186
図251 彩色部分のSEM画像	161	図285 円筒形陶棺から砲弾形陶棺へ	186
図252 赤田横穴墓群周辺の陶棺出土地(1/20,000)	163	図286 須恵器杯H身の法量分布	187
図253 新堂寺合葬古墳出土陶棺(1/20)	164	図287 赤田横穴墓群・赤田1号墳出土の主な土器と 器種の変遷	188
図254 敷島町一丁目採集陶棺(1/4)	164	図288 赤田横穴墓群出土土器器杯・椀の法量分布(1/8)	190
図255 中山横穴発見時の状況(南から)	165	図289 赤田横穴墓群出土の有蓋高杯・無蓋高杯・台付長頸壺 (1/8)	190
		図290 土師器杯Cの比較(1/4)	191
		図291 石材産出推定地と赤田1号墳	193

挿表目次

表1 西区横穴墓規模一覧	15	表16 試掘2010-4次調査 出土埴輪観察表	200
表2 赤田5号墓 北陶棺出土玉類観察表	89	表17 赤田4号墓 出土埴輪観察表	200・201
表3 赤田5号墓 南陶棺出土玉類観察表	92	表18 赤田7号墓 出土埴輪観察表	201
表4 各資料の特徴およびXRF測定結果	157	表19 赤田8号墓 出土埴輪観察表	201・202
表5 X線透過撮影およびXRFの測定条件	157	表20 試掘2010-4次調査 出土土器観察表	202
表6 調査資料と彩色	159	表21 赤田1号墓 出土土器観察表	202
表7 XRD測定条件	159	表22 赤田2号墓 出土土器観察表	202
表8 FT-IR測定条件	159	表23 赤田3号墓 出土土器観察表	202～204
表9 赤田横穴墓群周辺出土の陶棺	162	表24 赤田4号墓 出土土器観察表	204
表10 横穴墓諸属性一覧	175	表25 赤田5号墓 出土土器観察表	204・205
表11 棺蓋と棺身の組合せ	178	表26 赤田6号墓 出土土器観察表	205
表12 赤田1～9号墓出土土器一覧 (奈良・平安時代除く)	189	表27 赤田7号墓 出土土器観察表	205・206
表13 赤田横穴墓群から出土した土器の編年的位置づけ	191	表28 赤田8号墓 出土土器観察表	206・207
表14 古墳と横穴墓の関係と比較	192	表29 赤田9号墓 出土土器観察表	207
表15 赤田横穴墓群の変遷	195	表30 赤田1号墳 出土土器観察表	207

赤田横穴墓群・赤田1号墳

第1章 調査の経過

第1節 赤田横穴墓群の調査

I. 調査に至る経緯

西大寺赤田町一帯に陶棺が埋没していることは、明治37年に初めて陶棺が掘り出された後、明治44年にもその近くから陶棺が出土（後藤1924）したために一部の研究者の間で知られてはいた。しかし、その詳細な出土位置が公表されず、昭和3年には出土場所に病院が建設されて環境が変化したこともあって、いつしかその記憶はほとんど失われてしまったようである。

昭和58年5月25日、吉田病院敷地内から工事中に古墳らしいものを発見したとの連絡が奈良市教育委員会にあった。現地へ赴いたところ、丘陵の南斜面に横穴墓が開口し、その内部に陶棺片が散乱しているのが確認された。奈良県教育委員会文化財保存課と連絡を取り、病院側との協議の後、翌5月26日から6月15日までの期間で第1次の発掘調査が急遽実施された。この調査で2基の横穴墓を確認し、西から赤田1号・2号横穴（墓）として調査報告が行われた（奈良市教育委員会1984）。ただし、2号墓については玄室の上部に構造物があり、天井部が崩落する危険性もあったため一部が未調査のまま残された。

平成22年8月6日付けで医療法人平和会理事長から吉田病院整備事業に伴う病院建設及び造成工事の対象地について、遺跡の有無確認踏査願が提出された。対象地内には赤田1・2号墓も含まれ、これらは病院敷地内の

ほぼ東端に位置している。10月22日に踏査した結果、丘陵の南斜面地に横穴墓が並んでつくられており、地形的にみてさらに西側へ続いている可能性が十分に想定できた。ただし、対象地内の西側は雑木林で籬壇状に造成され、東側も病院建設時の造成で地形が大きく改変されていた。こういった現況と地表からでは横穴墓の有無を確認するのが不可能であり、雑木や植栽の伐採後に試掘調査を実施して確認する必要があると判断した。

11月17日から12月28日にかけて、1・2号墓の西側に続く南斜面地を中心に試掘調査（試掘2010－4次）を実施した。その結果、病棟建設予定地内（東区）で6基、駐車場造成予定地内（西区）で6基の新たな横穴墓の存在を確認した。遺跡の保存について事業者と協議を行い、駐車場造成予定地内の6基は擁壁工事を設計変更すること等により保存されたが、病棟建設予定地内の1・2号墓と新規確認の6基は工事内容から現地保存できないことになった。1・2号墓についても昭和58年に調査されてはいるものの、2号墓の玄室の一部が未調査のまま残っており、新規確認の横穴墓との正確な位置関係を記録しておく必要性が生じた。そこで、これら8基の横穴墓を対象にして第2次の発掘調査を実施することになった。

II. 発掘調査の経過

試掘調査の結果に基づいて、医療法人平和会から埋蔵文化財発掘届出書が平成22年12月24日付けで提出された。第2次調査は、平成23年1月7日から開始し、



図1 赤田横穴墓群・赤田1号墳位置図 (1/3,000)



図2 不時発見時の状況（南から）

病棟建設工事の工期との関係から3月末までに調査を終了するよう求められたため、土日・休日返上で実施した。当初は横穴墓8基と考えていたが、西端でさらに1基(9号墓)の存在を確認した。

地質的に地盤が脆く、玄室の天井が崩落、もしくはすでに崩落している可能性が高いため、開削された墓道を羨門部まで掘削して周辺地形を含めた写真撮影・図化を行った後、重機で玄室天井部を除去して玄室内部を調査する方針で発掘作業を進めた。また、玄室の大きさは地表面から判断できないため、1・2号墓と同様の規模と推定して調査範囲を設定した。

調査が進展するにつれて、西側の横穴墓が北へ回り込んでいくこと、3～5号墓の玄室の規模が想定以上に大きく当初設定した発掘区外に延びていくことが判明した。そこで、事業者と再協議を行い、発掘区の一部について北側への大がかりな拡張をすることとした。また、北側には工事着工直前まで利用を続ける病棟があり、その敷地内まで9号墓の玄室が続いていくことが判明したため、9号墓の玄室については改めて調査を実施することにして、玄門部までで調査を終了した。

調査も大詰めにさしかかった3月10日に調査の成果について報道発表を行ったが、翌3月11日、関東・東北地方を中心とした東日本大震災が発生した。世の中が自粛ムードに包まれる中、大きな調査成果は社会に明るい話題を提供すると考え、13日に現地説明会を実施した。現地説明会には約1000人の参加があった。

なお、未盗掘の陶棺が複数見つかリ、棺の内部に堆積した土砂を現地で篩がけする必要性が生じたが、これについては市民考古サポーターの協力を得て無事終わることができた。

第2次調査終了後、調査できなかった9号墓の玄室部分の取り扱いについて奈良県教育委員会文化財保存課と

協議を重ねた。その結果、事業者の協力を得て病棟建設工事期間中に併行して調査期間(平成23年9月9日～16日)を設定し、第3次調査を実施することができた。これによって、病棟建設予定地内の現地調査をようやく完了した。

Ⅲ. 出土遺物整理の経過

発掘調査を年度末の3月24日まで行ったため、出土遺物の整理費用を翌年の平成23年度に事業者から得て応急整理を実施した。しかし、8基の亀甲形陶棺と2基の円筒形陶棺、多量の副葬品を一度に整理するのは難しく、金属製品については早急な保存処理が必要となった。そこで、これらの遺物整理を平成24年度から国庫補助事業として4年計画で行い、調査成果の公開を図ることとした。また、陶棺の復元作業の一部については平成23・24年度に奈良県緊急雇用創出事業補助金の交付を受けて実施した。

陶棺の復原整理 平成23・24年度は奈良県緊急雇用創出事業に採択された埋蔵文化財復原活用事業で平城京出土資料等と共に赤田7号墓出土西陶棺1基(平成23年度)、3・5号墓出土陶棺3基(平成24年度)の復原・図化作業を委託により実施した。

平成25・26年度も陶棺の復原整理を進めることとし、7号墓出土東陶棺(平成25年度)・1号墓出土陶棺蓋及び9号墓出土陶棺・円筒形陶棺(平成26年度)については復原・図化作業を委託により行った。

図化作業を委託しなかった1・4・8号墓出土陶棺は、実測を効率的に進める目的で写真によるオルソ画像を作成し、それに器面調整を書き込んで図面を仕上げた。

金属製品の保存処理 平成24年度に耳環・鉄刀とその装具・鉄鏃、平成25年度に鉄鏃・鉄刀子・鉄鎌・鉄釘の保存処理を委託して実施した。

科学分析 3号墓出土陶棺に緑の彩色を確認したた



図3 発掘調査風景(南西から)



図4 現地説明会(平成23年3月13日)

め、朱彩と共にその顔料の科学的分析を奈良県立橿原考古学研究所に依頼して平成24年度に実施した。また、報告書作成に必要な情報を得るため、耳環の材質同定を同研究所に依頼して平成27年度に実施した。

展示公開 第2次調査終了後の平成23年度に夏季速報展示「西大寺赤田横穴墓群の調査」を行い、発掘調査成果を速報した。また、整理作業の進展に合わせて、復原を終えた副葬品や陶棺等の展示公開を平成26年度夏季速報展示「赤田横穴墓群の陶棺」・平成27年度夏季速報展示「赤田横穴墓群の陶棺2」で行い、成果を順次速報した。

報告書の作成 平成25・26年度に整理を終えた遺物から写真撮影を委託して行った。

陶棺をはじめとした報告書に掲載を予定した遺物は観察・実測作業を進め、並行して実測台帳及び観察表を作成したのち、製図作業を行った。

これらをまとめて現地の発掘調査を担当した者を中心に分担を決め、遺構・遺物に関する検討を重ねながら、原稿執筆、編集作業を行い、平成27年度に報告書を作成した。

第2節 赤田1号墳の調査

Ⅰ. 調査に至る経緯

平成10年に赤田横穴墓群の東側隣接地で特別養護老人ホームが建設されることになり、8月12日～14日にかけて試掘調査(98-12次)、平成12年1月31日～2月4日にかけて工事立会調査を実施したが遺跡は見つからなかった。しかし、敷地の北西端周辺で陶棺片が採集されており(中西1991)、付近に遺跡が存在した可能性は残されていた。

この特別養護老人ホームをさらに東側の山林へ増築す



図5 赤田1号墳発見時の状況

る計画が平成26年にあり、進入用道路の南端部分が平城京の一条北辺京極路にかかること、赤田横穴墓群に近いことから平成26年1月14日付けで埋蔵文化財発掘届書が社会福祉法人秋篠茜会理事長から奈良市教育委員会に提出された。そこで、工事の進捗に合わせて嚴重に立ち会って遺跡の有無を確認することとし、6月11日から30日にかけて断続的に工事立会を行なった。しかし、遺構の存在は何ら認められず、遺物の散布もなかったため、敷地内に遺跡はないと判断して工事立会を終了した。

ところが、8月5日の工事中に遺物の発見があった旨の通報が奈良市教育委員会文化財課にあった。現地に駆けつけたところ、工事立会を行った場所から約70m北で陶棺・須恵器の出土と遺構の存在を確認した。そこで、直ちに発見個所の工事を中止し、シートでそこを保護するとともに、今後の取扱いについて協議した。8月5日付けで秋篠茜会から遺跡発見届の提出があり、これを受けて原因者負担による発掘調査を緊急的に実施することになった。

Ⅱ. 発掘調査

発掘調査は平成26年8月11日から開始し、石室内に陶棺を埋葬した古墳であることが判明するとともに、周溝の一部が北から東側に遺存しているのを確認した。現況の観察から石室の天井石は既に失われていると判断できた。遺物の出土状態、石室・陶棺の平面実測と並行して、15日に奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室金田明大氏にデジタルカメラとドローンとを使用した垂直写真の撮影を行っていただいた。その後、遺物・陶棺の取り上げ、石室石材のサンプル採取を行い、20日に調査を終了した。

Ⅲ. 出土遺物整理の経過

石室内で陶棺埋葬を確認した市内初例として重要であるため、この調査成果を「平成26年度春季速報展」・「奈良県内市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会報告会」で公表した。

赤田1号墳は赤田横穴墓群と同じ丘陵上に築造された同時期の古墳であり、陶棺を使用しているという共通点をもつことから、本書に合わせて報告する方向で出土品の整理作業を進めることにした。陶棺は復原作業を行った後、写真撮影によるオルソ画像を作成し、それに器面調整を書き込んで図面を仕上げた。遺構図もオルソ画像を元に作図を行った。石室の石材と陶棺の胎土は奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏に観察をお願いした。(鐘方正樹)

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地形・地質の特色

赤田横穴墓群は、奈良市の北西部で、奈良盆地北部の西縁に沿う西ノ京丘陵の北東部で、大和川水系の秋篠川の支流である赤田川の左岸にある尾根の南斜面に位置する。現在は病院敷地の南辺部で、近くに住宅地が広がるが、かつては松林と水田が広がっていた。

奈良市の北西部の地形の概観については、西辺が西ノ京丘陵、北辺が奈良山丘陵で、これらの丘陵の裾に沿って段丘があり、その下位に秋篠川が形成した沖積平野が広がる。丘陵や段丘には、中・小河川の侵食で生じた開析谷がいくつもみられる。これらの個々の地形と構成する地質の特色は、以下の通りである。

I. 西ノ京・奈良山丘陵

ともに標高100～150mの丘陵。西ノ京丘陵は、奈良市西部から大和郡山市西部にかけて南北に延び、西から東に緩やかに下る東斜面には秋篠川支流の中・小河川の開析谷が複数みられる。奈良山丘陵は、奈良県と京都府の境界付近で東西に延び、南寄りに尾根筋があり、北から南に緩やかに下る北斜面には京都盆地へ流れる木津川支流の中・小河川の開析谷が複数みられる。

地質 更新世前期（約80万～180万年前）に形成された大阪層群下部層に相当する田辺累層と精華累層で構成されている。下層の田辺累層は砂層と泥層の互層で、上限がピンク火山灰層（約100万年前）。上層の精華累層は砂礫層と泥層の互層で、厚さ60m以上。ともに河川・湖成層が主体で、更新世後期（約10～50万年前）の奈良盆地形成につながる地殻変動により隆起したものである（尾崎他2000）。

II. 西ノ京・奈良山丘陵の縁辺の段丘

更新世後期（約10～50万年前）の地殻変動で形成された堆積面を残す地形である。

西ノ京丘陵東縁の段丘は、秋篠川支流の中・小河川の侵食で生じた東西方向の開析谷で分断される。奈良山丘陵南縁の段丘にも南北方向の開析谷がみられる。ともに段丘面の標高は70～80mで、南に向かって緩やかに下る。

地質 ともに表土層（厚さ0.5m前後）直下が段丘構成層。西ノ京丘陵東縁では上位が主に泥層であることが平城京域の発掘調査で、奈良山丘陵南縁では上部が風化し明赤褐色を呈する厚さ3m以上の砂礫層であることが地質調査で確認されている（尾崎他2000）。

III. 西ノ京丘陵の東斜面及び段丘の開析谷

赤田横穴墓群の南を東流する赤田川とその南方を東流する大池川の侵食で形成された開析谷は、丘陵西寄りの尾根筋近くまで達する。谷頭部には溜池があり、現河川の水源となっている。開析谷内には河川の沖積作用により平坦な谷底平野が形成されている。

地質 赤田川の谷壁斜面では、赤田横穴墓群の調査地内で、奈良～室町時代に形成された埋没土壌上を厚さ1～2mの崩落土層が覆う状態が確認されている。

大池川の谷底平野では、水田耕土・床土層（厚さ0.5m前後）の下で沖積層となる。黄灰色や灰色の泥・砂層で、最上面は縄文時代晩期以降の遺構面。市HJ386次調査地では、最上面の1.2m～1.6m下に¹⁴C年代値が5470～6050年BP（→縄文時代前期）を示す黒泥層を挟む（奈良市教育委員会1999）。

IV. 秋篠川の沖積平野

西ノ京・奈良山丘陵及び縁辺の段丘間にある幅0.5～1kmの河谷内に形成されており、標高60～80mで、北西から南東に緩やかに下る。秋篠川の現河川は、西ノ京・奈良山丘陵の間では沖積平野の中央を北西から南東に流れ、平城京域では西辺を南流する。

地質 水田耕土・床土層（厚さ0.5m前後）の下で沖積層となる。黄灰色や灰色の泥・砂層で、最上面は縄文時代晩期以降の遺構面。市SD28次調査地では最上面の0.5～1m下に¹⁴C年代値が2940～3170年BP（→縄文時代晩期）を示す流木を含む（奈良市教育委員会2013）。

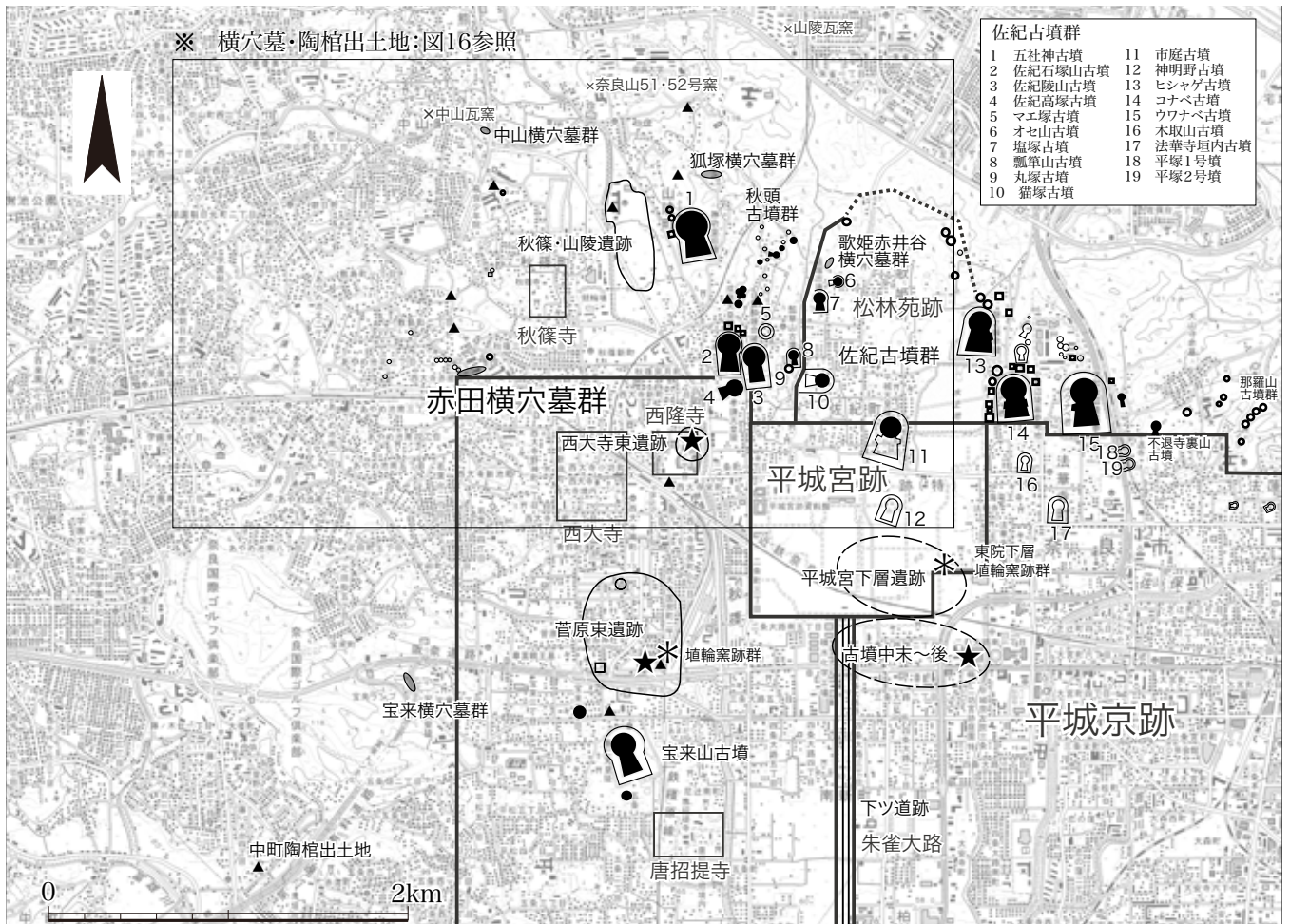
第2節 周辺の遺跡の特色

I. 地形と遺跡の分布

西ノ京丘陵や奈良山丘陵では古墳時代後期後半～飛鳥時代前半の横穴墓や奈良時代の瓦窯跡がみられる。

段丘では、特に奈良山丘陵南縁の佐紀古墳群で古墳時代前期末～中期の全長200m以上の大型前方後円墳を含む古墳が数多く築かれる。また、埴輪窯跡群（平城宮東院下層、菅原東）もみられる。

大池川の谷底平野では縄文時代中期以降、秋篠川の沖積平野では縄文時代晩期以降の生活や居住に関連する遺跡が認められる。前者の例に菅原東遺跡、後者の例に秋篠・山陵遺跡等がある。奈良時代の平城京跡は、西ノ京丘陵東縁の段丘とその東方の秋篠川の沖積平野にわたっ



地形名称
 (丘陵)
 A：西ノ京丘陵 B：奈良山丘陵
 (河川)
 1：秋篠川 2：赤田川
 3：大池川 4：佐保川
 5：菰川 6：富雄川

図凡例
 (遺跡)
 1. 古墳時代
 古墳 (現存) 古墳 (消滅)
 横穴墓群 ▲ 陶棺出土地
 ★ 居館 大型建物 * 埴輪窯
 ○ 集落遺跡 (破線は範囲推定)

2. 奈良時代
 都城・寺院 × 瓦窯
 (地形・地質)
 丘陵 段丘
 沖積平野・谷底平野
 沖積平野 (低位面)
 分水界 (尾根、谷の肩)
 河川 (破線は旧河道)
 [S] 大阪層群の層界・層名
 (新) S：精華累層
 ↓ Tb：田辺累層
 (古) To：登美ヶ丘累層

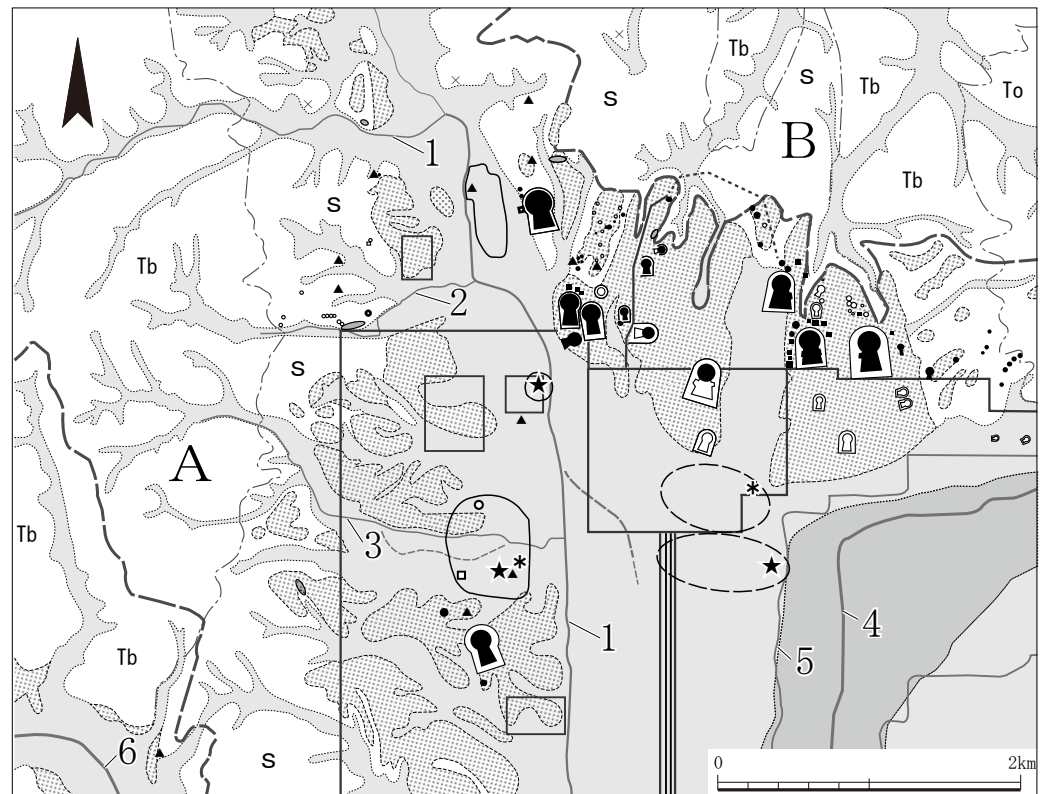




図8 佐紀古墳群 西群（南西から）



図9 佐紀古墳群 東群（南から）



図10 菅原東遺跡 居館跡（北東から）



図11 西大寺東遺跡 大型掘立柱建物の柱（南西から）



図12 菅原東遺跡埴輪窯跡群（北東から、奥に宝来山古墳）



図13 菅原東遺跡埴輪窯跡群出土円筒埴輪

て広がる。奈良山丘陵南縁の段丘には平城宮跡と後苑の松林苑跡がある。西ノ京丘陵東縁の段丘の東辺部には西大寺・唐招提寺・薬師寺や京外の秋篠寺が営まれる。

II. 古墳～飛鳥時代の主な遺跡について

(1) 古墳・横穴墓

前・中期古墳 奈良山丘陵南縁の段丘上にある佐紀古墳群は、主に前期末から中期初頭に造営される西群と、中期に造営される東群に大別できる。西群は、全長

200 m以上の前方後円墳（佐紀石塚山、佐紀陵山、五社神）と同100 m前後の前方後円墳（佐紀高塚、瓢箪山、塩塚等）、径30～40 mの円墳（マエ塚・丸塚等）で構成される。東群は全長200 m以上の前方後円墳（市庭、コナベ、ウワナベ、ヒシャゲ）と同100 m前後の前方後円墳（神明野、法華寺垣内等）で構成され、コナベ・ウワナベ・ヒシャゲの各古墳は、外提沿いに複数の陪塚を伴う。その東方の尾根には、前期末の前方後円墳の不



図14 狐塚横穴墓群 1～3号墓(西から)



図15 歌姫赤井谷横穴墓群 3号墓の玄室内(南から)

退寺裏山古墳(全長約98m)や埴輪円筒棺が主体部の那羅山1～4号墳がある。

西ノ京丘陵東縁の段丘上には、中期初頭に全長約227mの前方後円墳の宝来山古墳が造営される。

後期古墳 首長墓である大・中型の前方後円墳が全くなく、小型の古墳が造営される。

西ノ京丘陵では、今回見つかった赤田1号墳、その西方の尾根上にある4～5基の円墳や陶棺2基を埋葬した新堂寺合葬古墳、北方で埴輪が出土した秋篠少年院古墳が知られる(奈良市1968)。奈良山丘陵では、佐紀古墳群西群の北方の尾根に前方後円墳1基を含む秋頭古墳群がある。また、菅原東遺跡でも円墳や方墳の基底部分が見つまっている(奈良市教育委員会1994a・1996)。赤田1号墳と新堂寺合葬古墳は後期末のもので、その他は後期初頭～前半のものともみられる。

なお、横穴式石室を主体部とする古墳は今のところ赤田1号墳のみである。

横穴墓 古墳時代後期後半～飛鳥時代前半に西ノ京丘陵や奈良山丘陵で造営され、土師質亀甲形陶棺を玄室内に納めるものが多い。

西ノ京丘陵では、赤田横穴墓群の他に、宝来横穴墓群

や中山横穴墓群がある。前者は13基が確認され、うち1基の玄室内で土師質の砲弾形陶棺が出土した。発掘調査が行われた1～4号墓は飛鳥時代初頭のものである。(檀原考古学研究所1992)。

奈良山丘陵では、狐塚横穴墓群と歌姫赤井谷横穴墓群が知られる。前者は3基(1～3号墓)確認されている。いずれも飛鳥時代初頭のもので、玄室内に土師質亀甲形陶棺を1～2基納める(奈良市教育委員会1985)。後者は2基(1・3号墓)確認されている。1号墓は古墳時代後期後半のもので、玄室内に土師質亀甲形陶棺を2基納める(奈良市1968)。3号墓は飛鳥時代初頭のもので、玄室・墓道内の計4箇所に入骨を埋葬するが、棺を用いない(奈良市教育委員会2008)。

西ノ京丘陵では秋篠町付近や富雄川沿いの中町、奈良山丘陵では山陵町付近に土師質亀甲形陶棺の出土地があり(図6・16)、横穴墓の存在が推察できる。

花田(1990)は、奈良盆地北西部と南山城の横穴墓の構造に共通の特徴があることを指摘している。

(2) 集落・埴輪窯

古墳時代前・中期 主なものに、秋篠・山陵遺跡(奈良大学1998)や西大寺東遺跡、平城宮下層遺跡、菅原東遺跡がある。

西大寺東遺跡では、大型掘立柱建物が確認された(奈良市教育委員会2007)。平城宮下層遺跡では木製品の未製品等が出土し、手工業生産が推察できる(奈良国立文化財研究所1981)。また、中期の東院下層埴輪窯跡群を伴う(奈良国立文化財研究所1994)。これらは佐紀古墳群との関連が推察できる。菅原東遺跡は居館とみられる方形区画を伴う(奈良市教育委員会1994b)。宝来山古墳との関連が推察できる。

古墳時代後期・飛鳥時代 前述した集落遺跡のうち、秋篠・山陵遺跡と菅原東遺跡は飛鳥時代まで継続する。



図16 赤田横穴墓群周辺の横穴墓・陶棺出土地(1/40,000)

また、平城宮下層遺跡は場所を南東へ移すようで、二条大路町付近にこの時期の集落遺跡が認められる。

菅原東遺跡では前・中期の方形区画内に新たに方形区画が形成され、南端の段丘東斜面に埴輪窯が営まれる。後期を通じて操業され、製品は天理市北部の古墳に供給している(奈良市教育委員会 1992)。二条大路町内では長屋王邸跡の調査地内で古墳時代中期末と飛鳥時代前半のものらしい方形区画が確認されている(奈良県教育委員会 1995)。

III. 土師氏について

横穴墓が数多くみられる奈良市の北西部は、奈良時代以前に政権中枢で葬送等の儀礼を司り、平安時代初頭に秋篠氏や菅原氏に改姓した土師氏の本拠地である。横穴墓の被葬者や集落の動向を検討する際に留意する必要がある。(安井宣也)

第3節 明治時代の発掘と出土品

赤田横穴墓群における既往の発掘は、明治37年・明治44年・昭和58年に行われている。明治の発掘2件は、丘陵傾斜地を田畑に開墾造成した際に遺物が出土したため行われ、多くの出土品が奈良国立博物館に現在収蔵されている。昭和の発掘は、工事中に横穴墓が発見されたため、奈良市教育委員会が緊急調査した。その内容はすでに公表されており、今回の調査成果と合わせて再報告する。ここでは明治の発掘と出土品について述べ、その出土位置について言及しておきたい。

I. 明治37年の発掘と出土品

奈良市内発見の陶棺として最も早く学会に報告されたのが、旧伏見村西大寺小字新堂出土の亀甲形陶棺である(森口 1905)。明治37年12月2日に発見され、奈良帝室博物館(現在の奈良国立博物館)蔵品となった。これをM37陶棺と略称する。東京国立博物館蔵『明治三十八年埋蔵物録』の「第一二号 奈良県生駒郡伏見村字新堂ニ於テ発掘ノ土器奈良帝室博物館へ回送ノ件」には、この陶棺及び伴出土器が奈良帝室博物館に買入れられるまでの過程が文書として残されており、発掘時から陶棺は大小50個に破損していたことが

引継書に図面とともに示されている。この図面は奈良県が作成したらしく、森口報告の陶棺図と構成などが類似する。おそらく森口はその図面を簡略的に書き写して使用したものと思われる。

陶棺は、蓋身ともに二つに切断し組み合わせる(図17)。蓋には周辺出土例とは異なる特徴がみられ、横位突帯のみ貼付して縦位突帯は貼付されない。口縁部突帯1条と横位突帯4条を貼り付け、稜線突帯は最上段の横位突帯に接合して途切れる。片方の短側面にのみ一つの鉤状突起があるが、赤田9号墓出土陶棺蓋と同様に穿孔後粘土を挿入してつくっている。側面の片側に4個ずつ、片側の短側面にのみ1個、合わせて9個の円形透孔があり、キノコ形の陶栓を伴う。口縁部端面に葉脈圧痕が残る。蓋の長さは両方とも78~79cmでほぼ同じであるが、高さは28cmと36cmで大きく異なる。蓋の形状も左右で差異が認められ、つくりの異なる蓋を片方ずつ寄せ合わせて使用したらしい。身は長さ171cm・幅53cm・高さ50cmで、7行2列の脚が取り付くために真中でなく3行と4行に分けて切断する。周底突帯を1条貼付した後、縦位突帯を長側面に11条、短側面に1条貼付する。脚部高19cm前後で、脚の側面に円孔を規則的に穿つ。身の外面調整は、体部が指ナデ、脚部がタテハケである。

なお、この陶棺を実見した森本六爾による簡単な図が『森本六爾関係資料集I』(財団法人由良大和古代文化研究協会ほか 2011)に掲載されている。野帳1のNo.225・226の図で、次ページに出土した場所と年月が記されている。寸法等の注記もないので、あるいは展示品をメモしたものではないかと思われる。(鐘方正樹)

陶棺と共に出土した土器50個は、東京帝室博物館へ一度送られた後に奈良帝室博物館へ返送された。その際に作成されたのが図18で、土器50個すべてが描かれ

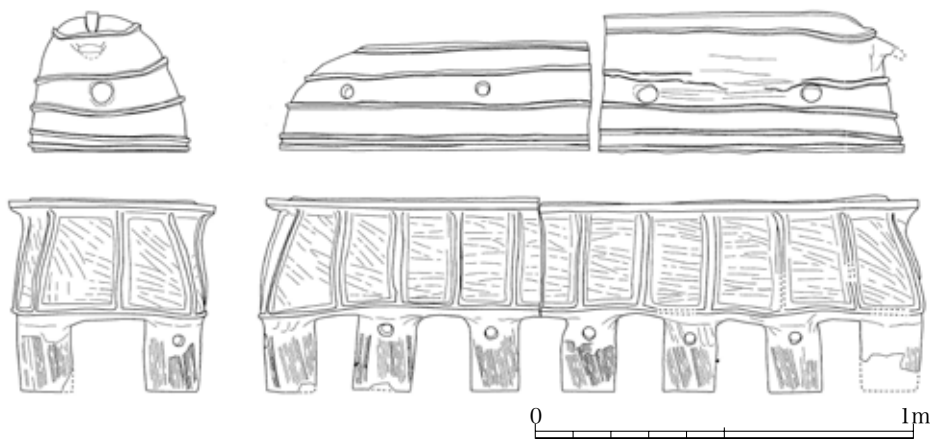


図17 明治37年出土の陶棺(M37陶棺)略測図(1/20)



図18 明治37年出土の土器（『明治三十八年埋蔵物録』）

ている。奈良国立博物館の台帳には39口但50個とあり、蓋と身とが組み合うものが1口と表現されているようである。博物館で実見できた土器には、土師器碗(2個)、壺(1個)、甕(2個)、須恵器杯H蓋(5個)・身(11個)、有蓋高杯蓋(4個)・身(4個)、短頸壺(5個)、台付長頸壺(3個)、埴瓶(2個)、壺蓋もしくは杯蓋(1個)があり、その数は40個である。図に描かれた割れ目の表現等から個体を特定できるものもあり、図中37・38号(碗)、47号(壺)、48・49号(甕)が土師器で、それ以外が須恵器であるが、須恵器は特に杯蓋の特定が困難で、全てを照合することはできなかった。杯H蓋は図では天井部を下にして描かれているが、これらは蓋としてよいものである。箱形で平底の杯Gはなかった。杯H身・蓋については法量を測り、口径(立ち上がり径)と器高について散布図を作成した(図19)。図をみると、杯身・蓋とも口径9~11cmの一群と12~14cmの一群との2つのグループに分けられるようである。調整は身・蓋とも外面にロクロケズリが施されているが、少量ヘラ切り後未調整のものもみられた。有蓋高杯は短脚で、脚部に透かしのあるものとなないものがある。土器に付されているラベルをみると、この有蓋高杯と杯H蓋がセットとされているものが幾組かあった。出土状態が不明なので、出土時にそうであったのかどうかはわからない。提瓶は把手が付くものと付かないものがあり、把手のないものはカキメもみられない。赤田横穴墓群出土の土器と比較すると、杯Hが多く、長脚の有蓋高杯がないこと、提瓶が出土している点は5号墓と似た構成である。こういった器種構成や法量からみると、これらの土器は6世紀後半のものと考えられる。(池田裕英)

出土地を実見した森口の報告によれば、陥没した「洞中に入りしに、方向は南東にして、長一丈幅七八尺、周

囲の土質は第三紀の砂質壤土」であったというから横穴墓と考えて大過ないだろう。

出土場所については「(十五社) 神社の西凡六町、標高九十余米のシンドージの南側にあり、十餘年前山を拓きて畑となし、更に昨年田に引直せし一畝餘の北西隅にして東隣に茶園連れり」と記す一方、緒方益井氏の説明として「安康帝御陵の西二十五丁、西大寺の南西十五町に於る新開田なり」とする異なった内容を編者が付記し混乱した。そのため、『考古界』第5篇第10号の彙報「大和西大寺発見陶棺の出所」で緒方益井氏の説明箇所が直ちに訂正された。それによると「安康帝御陵の北二十町西大寺よりは乾の方十町に當り舊名「ジンドウジ」今赤田と稱する八畝歩許の田地の傍より發見せり」とあり、小字名がこの頃に赤田へ変わったことがわかる。

II. 明治44年の発掘と出土品

後藤の陶棺集成(後藤1924)ではM37陶棺出土地の西北約六間(約10.8m)の地点からも明治44年5月8日に1基の陶棺が発掘されたことが地方廳報告に基づいて述べられている。これをM44陶棺と略称する。後藤の記述によれば、亀甲形陶棺で身は中央で切断し組

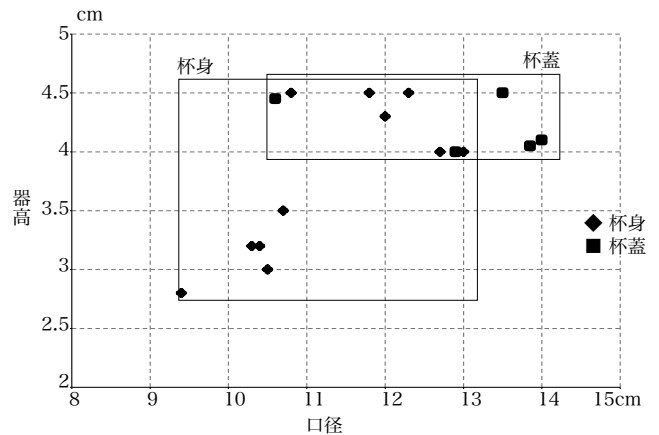


図19 須恵器杯H法量分布

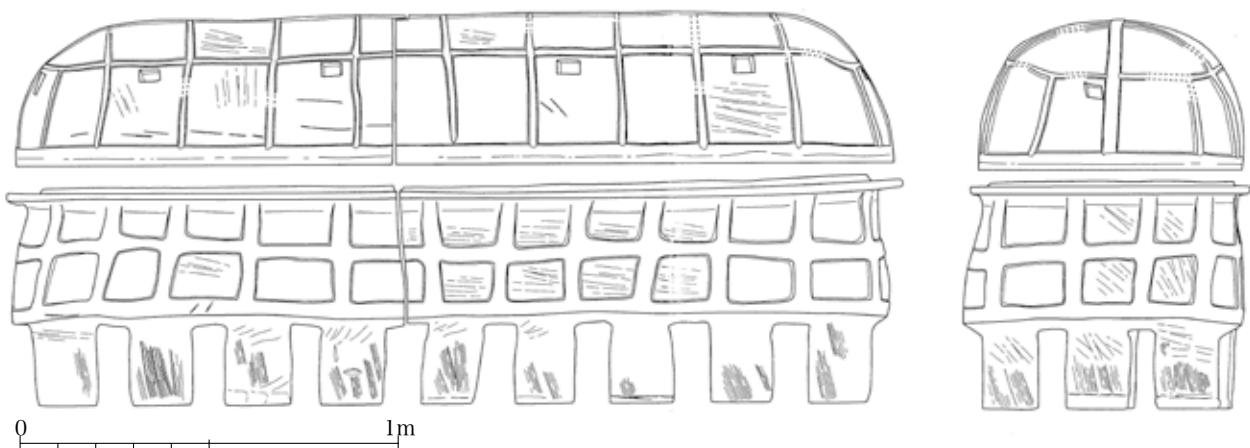


図20 明治44年出土の陶棺(M44陶棺)略測図(1/20)

み合わせる。長さ七尺六寸（約228cm）・幅一尺九寸五分（約58.5cm）・深さ一尺二寸五分（約37.5cm）・脚の長さ七寸七分（約23.1cm）で10行3列の脚が取り付く。陶器24個・同破片11個・鉄器片10数個が伴出したという。

東京国立博物館に残されている発掘地調査報告（東京皇室博物館1911）には、この陶棺の現況と身の概略図が描かれている。現況について「同人（三好多三郎）邸宅地内狭クシテ今ハ隣家床屋多某ノ宅地ニアリ。最初ハ雨覆ヒヲナシ鄭重ニ保管セシモ爰ニ年月ヲ経タルヲ以テ其雨覆ヒハ朽チ陶棺モ又破損セリ。故ニ一日モ早く處分決定ヲ希望シ居レリ」と記し、屋外に放置したような状態であったようである。そして、概略図からは幅広の突帯が2段の格子状に貼り付くこと、スカシ孔のない脚が9行あること、切断位置が真中でなく4行と5行の間であることなどの特徴が読み取れる。これらの特徴は、奈良国立博物館蔵品中にある明治45年西大寺町出土の土師質亀甲形陶棺と酷似しており、同一資料とみて間違いない。館蔵品カードと発掘地調査報告で発掘者氏名が同じであることもその傍証となろう。この資料は平成24・25年度の修理を経て平成26年末に再度公開された（特集展示「新たに修理された文化財」）。

蓋・身はいずれも糸切りによって2つに切断されている（図20）。蓋は長さ224cm・幅67cm・高さ39cmで、頂部を鋸形に切断する。稜線突帯と口縁部突帯を貼付した後、横位突帯1条・長側面縦位突帯9条を貼付して、長側面に上下2段左右8区画を設ける。短側面では、下段にのみ稜線突帯を挟んで左右1条ずつの縦位突帯を貼り付け、上段2区画、下段4区画を設ける。稜線突帯及び口縁部突帯は太く、その他の突帯は細い。透孔は方形で、両長側面に4つずつ、両短側面に1つずつ穿孔する。横断面はほぼ半円形で、外面に朱塗りを認める。

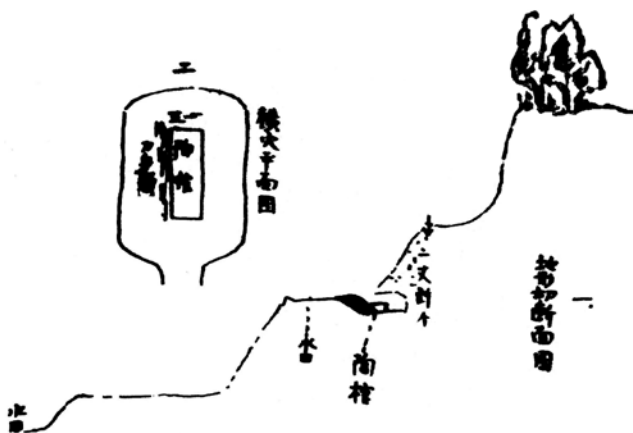


図21 明治44年の陶棺出土地

身は、長さ229cm・幅71cm・高さ58cmで、脚が9行3列であるために真中で等分割できず、片身が脚5行でもう一つの片身が脚4行となる。周底突帯と横位突帯を貼付して上下2段に区画し、縦位突帯を長側面に12条、短側面に2条貼付して長側面の上下に左右11区画、短側面の上下に左右3区画を設ける。突帯は幅3～5cmほどあり、板押さえによって扁平な形状となる。脚に透孔がなく、脚底部外周にきわめて低い突帯をめぐらせて肥厚させる脚が一部にみられる。脚部の高さ20cm・底径15～17cmである。口縁部と蓋受部の段差が1～2cmと低い。調整は、体部がヨコナデ、脚部にタテハケを確認できる。朱塗りは、体部の内面と外側面、片側の短側面脚部に認められる。

なお、後藤の記述内容と出土年や脚の数が異なるなどの相違点が若干認められる。奈良国立博物館の館蔵品カードには「採取地 明治四十五年五月八日奈良縣生駒郡伏見村大字西大寺三好多三郎所有全村大字全字赤田百十番地ノ二耕田内ニ於テ全人發掘」と記載され、出土した年は異なるが月日は同じである。公文書の地方廳報告及び発掘地調査報告が共に明治44年であるので、館蔵品カードの誤記によるものと考えられる。後藤記述における脚数の違いは、片身の脚5行をもう一つの片身が破損していたために同様と推定して記述したことによるのではないかと思われる。

館蔵品カードによると、陶棺と土器・刀刃類を合わせて16円22銭で購入しているが、土器・刀刃類の調査ができていないのでその詳細は不明である。

III. 出土場所の推定

これら2箇所の出土地点は近接しており、同一の遺跡と推定できる。昭和8年頃の現状は「西大寺菖蒲池兩驛間の中間線路の北側に沿うて狭長な平地があつてその北側は丘陵を爲している。この低い丘陵の南面傾斜地で現在では吉田病院の敷地内に當り出土地上には建築物があるといはれる。尚里人に聞くに更に一箇の陶棺が存在するが面倒なのでそのまま之を埋没し上に建築したと傳へられてゐる」と記されており（田村1933）、出土地が赤田横穴墓群中のどこかであることは確実である。

出土場所を特定する手掛かりとしては、①二つの陶棺が約10.8m離れて出土したこと、②吉田病院の建物の下にあることの2点が注目できる。①の距離から考えて、両陶棺は異なる横穴墓から出土したと推定できる。また、②から吉田病院の敷地内であることは明らかであり、敷地内の横穴墓の配置は今回の調査でほぼ判明した。よって、出土場所をある程度まで絞り込める可能性が高いと

思われる。

敷地中央に小さく北へ入り込む谷地形があり、これによって東群（1～9号墓）と西群（10～16号墓）に大きく大別できる。東群はすべて発掘調査したが、その中で陶棺が出土しなかったのは2・6号墓であり、6号墓にはもともと埋葬された形跡がなかった。一方、2号墓では副葬品の土師器甕1点だけが墓室西北隅に取り残された状態で出土し、過去に陶棺や副葬品が運び出されたように見受けられた。2号墓の上に旧病棟の建物基礎と便槽があり、②の内容とも一致する。そこで、2号墓を出土場所の一つと仮定すると、敷地内の最も東端に位置するからM37陶棺出土地となる。しかし、2号墓の西北約10.8mの地点にある3号墓では明治頃に遺物が掘り出されたような形跡が認められず、①の内容とは合致しない。このため、出土場所は西の一群の中にある蓋然性が高まる。

西群は試掘調査と立会によって存在を確認したのみで、墓室内部の発掘調査は実施していないため、詳細な検討を行うのは難しい。11号墓のすぐ東隣に唯一残る旧建物（平和会友の会事務局棟）の下に10号墓があることは平成12年の立会¹⁾で確認しており、これが②の内容と一致するとみれば、10号墓から西北約10.8m付近と想定される11号墓あるいは12号墓がM44陶棺の出土地となる。11・12号墓には墓室の陥没が認められ、11号墓では比較的新しい時期に埋まる陥没穴の存在も確認された。この点は①の内容と整合する可能

性がある。

さて、先述の館藏品カードにM44陶棺の出土地を「字赤田百十番地ノ二」と記されていたため、この地番を奈良地方法務局で調べてみたが、字赤田に110番地はなかった。これも何らかの理由による誤記と思われる。ただし、土地所有者の氏名は森口報告・東博報告・館藏品カードともに三好多三郎であり、これについては誤りないだろう。そこで、『西大寺町土地台帳（第十冊）』を閲覧して三好多三郎の元所有地を吉田病院内で探してみると、961番-1～5、967番-1～6、969番-1・2が該当することが判明した。ただし、967番-5・6は旧公図で位置を確認できない。これらの地番は、現在556番-3に合筆されて消滅しているが、その位置はいずれも赤田横穴墓群の分布する南斜面地である。このうち、961番-1～5は東の一群に相当し、地目は畑であるから除外できる。967番-1～4と969番-1・2は東西に隣接する土地で、平和会友の会事務局棟の西側に位置したことが旧公図からおおよそ推測される（図22）。967番-1を除いて、畑から田へ明治41年に地目変更されており、畑を田に引直した新開田から出土したという森口報告とも合致する。旧公図の示す土地の大きさや位置関係がもともと不正確である点を考慮すれば、そこには11～15号墓が分布したと推測され、これらが出土場所の候補となり得る。

②の内容を伝聞のため考慮しないとすれば11・12・14号墓のどれかをM37陶棺出土地とし、①から13・14・15号墓のどれかをM44陶棺出土地と考えることも可能である。また、東群での調査成果から考えてM44陶棺出土横穴はM37陶棺出土横穴よりも規模が大きいと想定できるので、中央に位置する12・13・14号墓のどれかがそれに相当する可能性がある。このような点からみると、11号墓と13号墓が位置関係や規模の違いなどから最も蓋然性が高いと思われ、13号墓にも新しい時期の陥没穴の一部が確認されている。

以上、出土場所に関する二つの推定案を述べてみた。おそらく地番と旧公図から考えた後者の推定がより妥当であると思われる。いずれにしろ、明治の陶棺出土地が赤田横穴墓群内であり、吉田病院敷地内の西群中と推定できるに至ったのも本調査の重要な成果の一つとして評価できよう。（鐘方正樹）

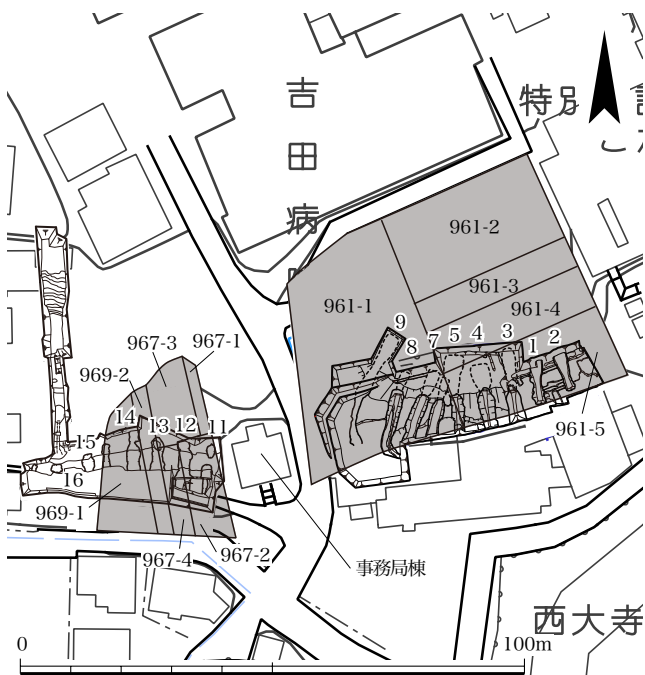


図22 調査地と三好多三郎旧所有地 (1/1,500)

1) 平成12年7月13日に現在の平和会友の会組織課事務局建物の下で降雨による陥没が発見され、横穴墓の存在が現地確認された。応急措置として砂による埋め戻しが行われ、8月21日付で医療法人平和会から遺跡発見届が提出されている。

第三章 試掘調査

第1節 調査の方法

踏査では丘陵の南斜面地に横穴墓が並んでつくられており、地形的にみて1・2号墓のさらに西側へ続いている可能性が想定できた。しかし、当該地の現況が造成地や雑木林で、植栽等もあったことや横穴墓という遺跡の性格上、踏査では横穴墓の有無を確認するのが不可能であった。このため試掘調査を行い横穴墓の有無を確認することとなった。

試掘調査は、横穴墓の有無と広がりを確認することを目的とし、駐車場造成予定地（西区）と病棟建設予定地（東区）との2箇所で行った（図23）。

試掘調査は西区から始めた。横穴墓は丘陵斜面をトンネル状に掘削して玄室を構築するため、玄室を平面的に検出することが困難である。従って、墓道の検出を主眼に置いて斜面末端部から掘削を進めた。

その結果、西区東端の地山上面で墓道埋土と思われる暗茶褐色土・黒色腐植土の堆積やその北に延長した玄室にあたる位置で天井が崩落、あるいは盗掘坑かと思われる土坑状の痕跡を検出した（11号墓）。この部分には現代のコンクリート片などが捨てられていたが、11・12号墓の墓道を部分的に掘り下げたところ、灰黒色シルト層から古墳時代のもと考えられる須恵器甕体部片が出土し、横穴墓と判断した。

東区でも同様の方法で試掘調査を行ったが、造成土や丘陵の崩落土が厚く堆積しており、排土の量が多くなった。このため発掘区を当初の計画よりも狭くせざるを得なかったものの、横穴墓の存在を確認することができた。その結果、西区には6基、東区には既往の1・2号墓に加え新たに6基の横穴墓が存在することがわかった。

また、西区の北方では過去に陶棺片が採集されていることから、北側（上段）にも横穴墓が存在する可能性を考慮し、発掘区を北に拡張した。しかし、この範囲では横穴墓を確認することができなかった。

第2節 層序

I. 西区

西区の調査前の地形は北から南に向かって下る斜面地で、大半が雑木林であったが、病院建設の際に斜面をひな壇状に造成しているようであった。表層の黒色腐植土を除去すると、病院敷地の造成を行った際の造成土（図25-2～6）、丘陵斜面を覆う砂層やシルト層が続き（7～20）、丘陵の基盤層である大阪層群の地山にいたる。遺構はこの地山上面で検出した。

II. 東区

東区は駐車場及び植栽地となっていた。土層の状況は西区と同様、病院敷地造成に伴う造成土、丘陵の崩落土



図23 試掘調査（2010-4次）・発掘調査（AD第02・03次）位置図（1/2,000）

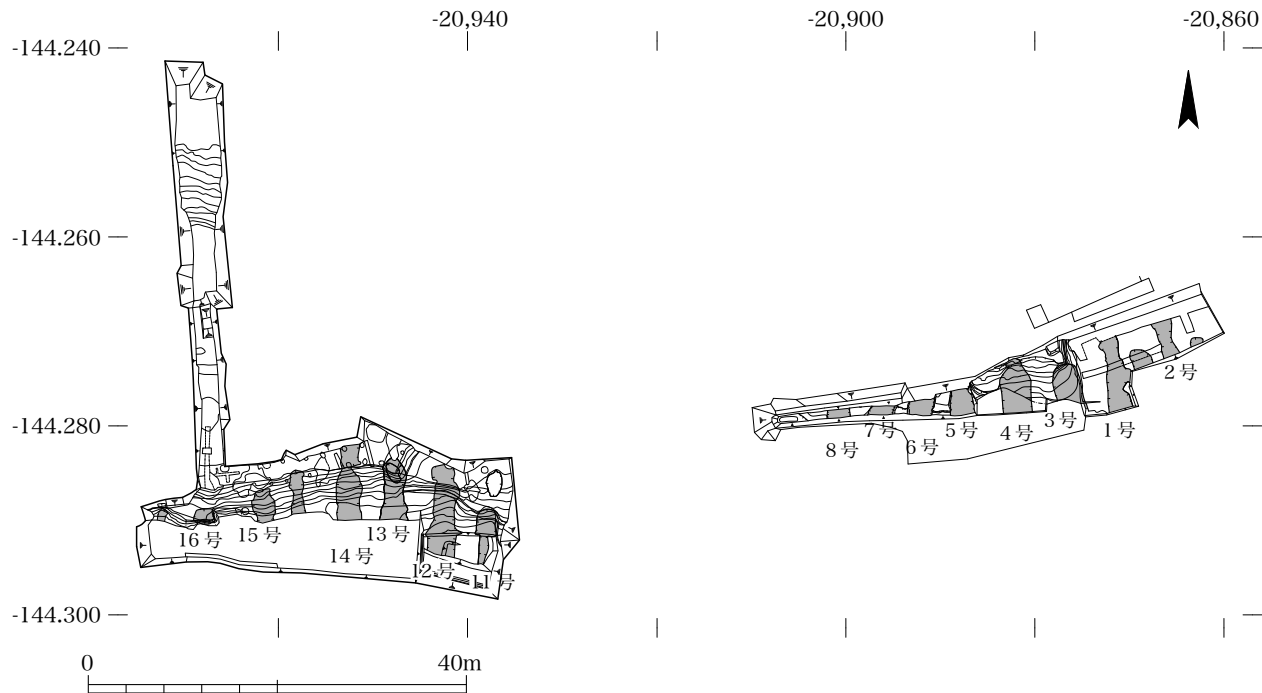


図24 試掘 2010-4次調査 遺構平面図 (1/800)

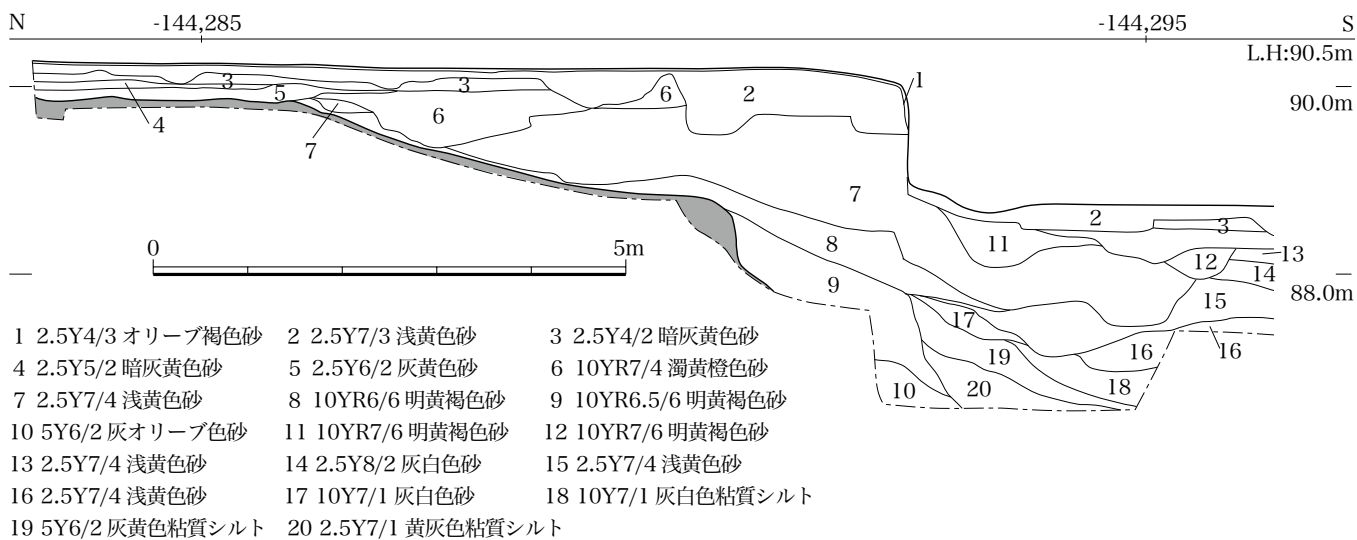


図25 試掘 2010-4次調査 西区東壁土層図 (1/80)

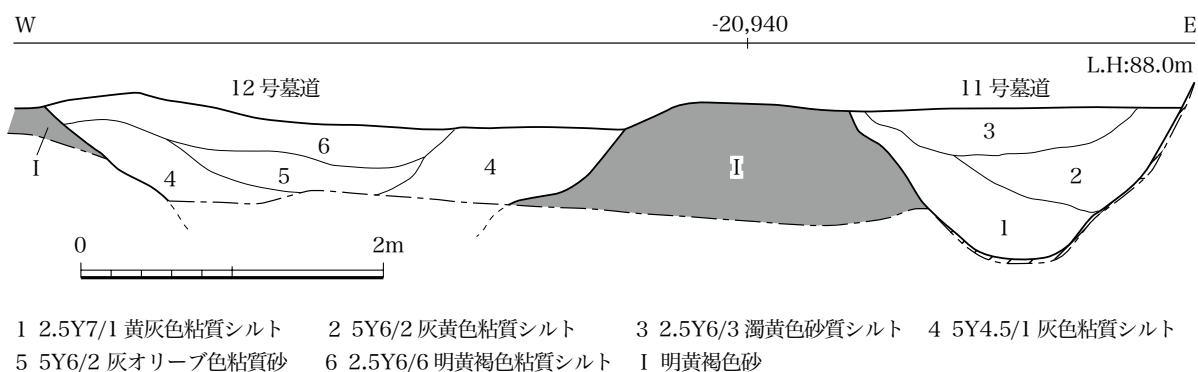


図26 試掘 2010-4次調査 11号墓 (右)・12号墓 (左) の墓道断面図 (1/50)

表1 西区横穴墓規模一覧

横穴墓	墓道の幅 (m)	墓道の深さ (m)
11号墓	2.2～2.4	1.0
12号墓	2.4～3.8	0.5以上
13号墓	2.3～3.2	-
14号墓	2.6～3.0	-
15号墓	1.8～2.6	-
16号墓	1.8～2.4	-

の下で明黄褐色砂の地山を確認した。横穴墓の墓道はこの地山上面で検出した。地山は北東から南西に向かって下り勾配であった。地山上面の標高は4号墓墓道上面で88.0 m、東区西端で86.8 mである。

第3節 試掘調査の結果

1. 西区 (図24～図28)

西区では6基の横穴墓（東から11号墓、12号墓の順で16号墓まで）を検出した。墓道を検出した地山上面の標高は概ね88.0 m、羨門付近で89.5mである。墓道の幅は1.8 (15・16号墓)～3.8m (12号墓)で (表1参照)、横穴墓と横穴墓との間隔は2.6(11・12号墓間)～4.4m (15・16号墓間)である。14号墓と15号墓との間、16号墓の西でも同じような埋土の遺構を検出したが、幅が1.0～1.6 m程度で、横穴墓に比べて幅員が狭い。1・2号墓の発掘調査の際、1号墓と2号墓の間、2号墓の東で検出された溝状遺構 (SZ03・04) のようなものではないかと思われる。ただし、後述する東発掘区の発掘調査では3～9号墓の間には溝状遺構はなく、あるいは横穴墓の可能性もあるかもしれない。

11・12号墓については墓道南端部分で一部掘り下げを行った (図26)。11号墓の墓道は幅2.2～2.4m、深さ1.0 mで、U字状の断面形である。埋土は上から濁黄色砂質シルト (土層図3)、灰黄色粘質シルト (2)、黄灰色粘質シルト (1)である。1層から須恵器杯H蓋、甕体部片が出土した。12号墓の墓道は幅2.4～3.8 m、深さ0.5m以上である。埋土は上から明黄褐色粘質シルト (6)、灰オリーブ色粘質砂 (5)、灰色粘質シルト (4)

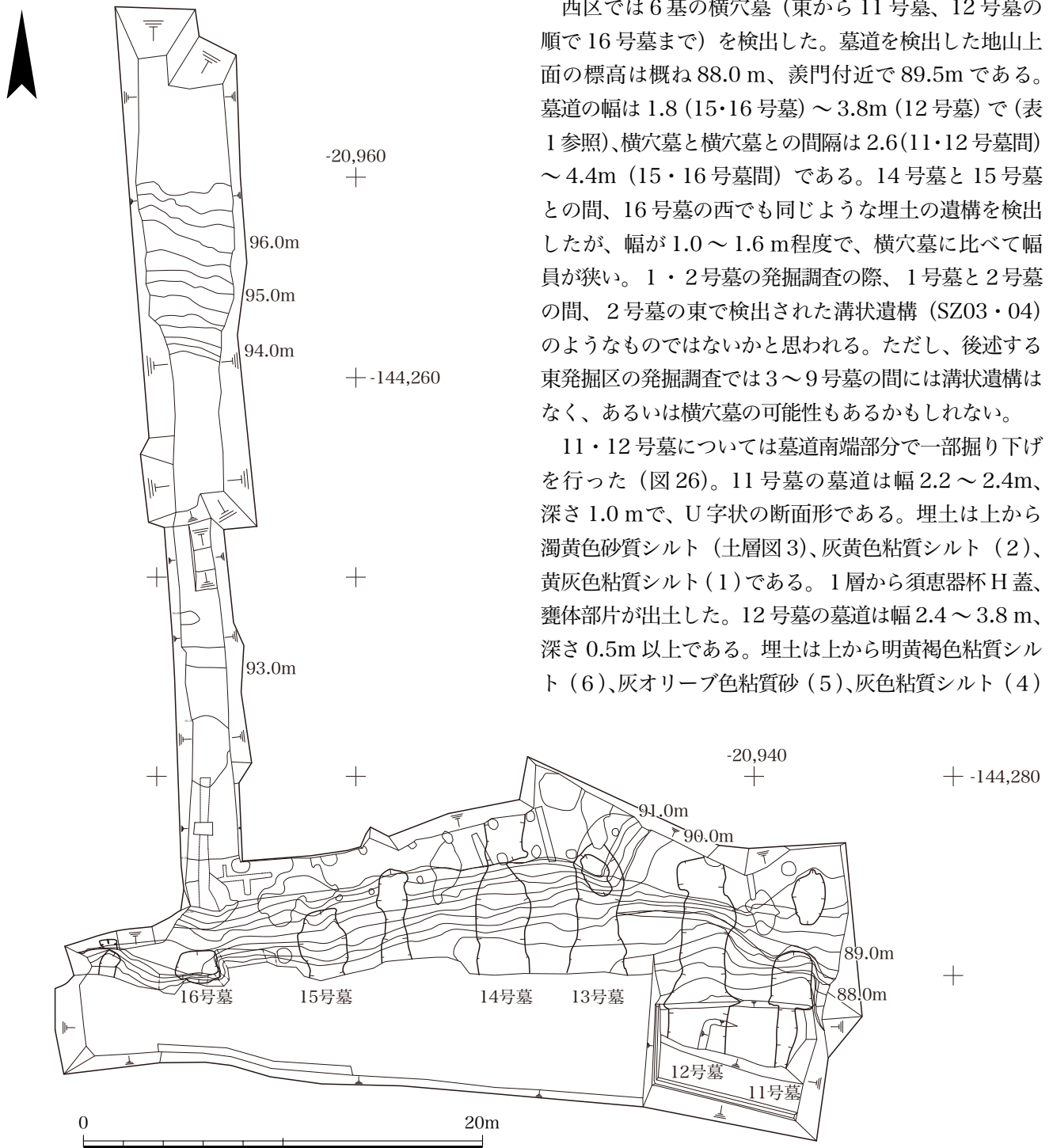


図27 試掘2010-4次調査 西区横穴墓群平面図 (1/300)



図28 試掘 2010-4次調査 西区北拡張部分 (北から)

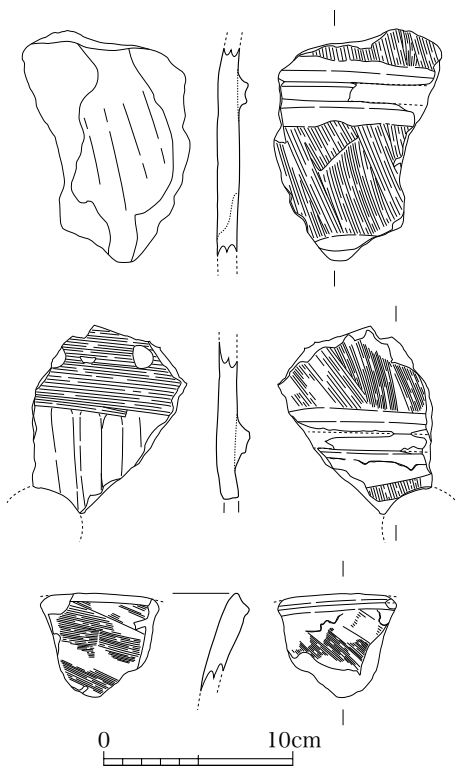


図29 試掘 2010-4次調査 西区出土埴輪 (1/4)

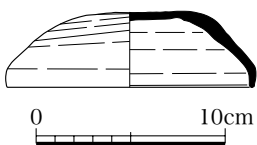


図30 試掘 2010-4次調査 西区11号墓墓道出土須恵器 (1/4)

である。掘削した範囲では遺物は出土しなかった。地形や残存状況からみて11・12号墓とも墓道上面は削平されているようである。その他の横穴墓については平面検出にとどめた。

北に拡張した部分は、以前には池があったとのことで、一部現地表面から3m以上掘削されている場所があることも確認した(図27・28)。建物が建てられていた時期もあったようで、ひな壇状に造成されていることもわかった。この拡張した部分では横穴墓に関わる遺構、遺物はなかった。

出土した遺物には上述の須恵器の他、墓道埋土から出土した埴輪片がある。横穴墓に伴うもの、あるいは本調査地北西に存在した径約10m程度の小規模な円墳群(奈良県遺跡地図第1分冊5A-30~36)に伴うものの可能性が考えられる。

西発掘区については、現地で遺構が保存されることとなり、検出した横穴墓の上に養生のための砂で覆った後、土のうで保護し、埋戻しを行った。

II. 東区

東発掘区は昭和58年度に実施した第1次調査区を含めて発掘調査の対象範囲とした。現況は駐車場と植栽地であったため、造成の盛土が厚く堆積していた。排土量が多く、西に行くにつれて掘削範囲が狭くならざるを得なかったが、新たに6基の横穴墓が存在することを確認した。

東発掘区で確認した横穴墓については事業者と遺跡の保存について協議を重ねたが、工事内容から現地保存が困難であったことから記録保存のための発掘調査を実施することになった。その内容については次章で報告する。

(池田裕英)

第4節 出土遺物

試掘調査では西発掘区から埴輪と土器、東発掘区から陶棺片が出土した。

I. 埴輪 (図29)

12号墓の墓道、14号墓の墓道埋土からいずれも円筒埴輪が出土した。外面タテハケ調整を主とし、埴輪編年V期に位置づけられる。(村瀬 陸)

II. 土器 (図30)

図30は11号墓墓道から出土した須恵器杯H蓋である。口径13.2cm、器高3.9cm。頂部外面はヘラ切り後未調整で、上半をロクロケズリする。図示できなかったが、この他に須恵器甕体部片がある。(池田裕英)

第IV章 横穴墓・古墳の調査

第1節 横穴墓の調査方法

第1次調査と試掘調査の結果、東区では舌状に張り出した尾根の南斜面に、弧を描くように斜面に直行するような形で横穴墓が築かれていることがわかった。

今回調査した3号～9号の7基の横穴墓は病棟計画地内にあり、工事内容から遺跡が保存できないということであった。このため、今回の病棟建設に係る工事範囲を対象として発掘調査を実施した。その際、昭和58年度に調査した原因者負担による1・2号墓及びSZ03・04についても、建物建設地内にあつて破壊されてしまうことや新たに発見した横穴墓との位置関係を明らかにするために再度発掘調査を行うこととした。

発掘調査は、調査のために使える敷地の範囲や排土を置く場所を確保する必要性から一度に全てを調査することができなかった。そこで、まず墓道部分の調査を行い、必要な記録をとった後、墓道を部分的に埋め戻し、玄室部分の調査を行うという二段階の方法をとった。また、横穴墓という遺跡の性格上、調査に入る前にその規模を正確に知ることができなかったことから、当初の想定より発掘区外に広がった部分については病院側と協議をおこない、発掘区を拡張した(3～5号墓部分)。9

号墓の玄室部分は第2次調査の時点では玄室上方に病棟があつて調査が不可能であつたため、病棟の解体後に改めて第3次調査として調査を行った。

墓道の調査は縦断面・横断面ともに土層観察用のあぜを残し、特に羨門の閉塞方法の観察に留意した。完掘の後、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と遺構図の作成を行った。併せて撮影台による写真撮影も行った。

玄室は、本横穴墓が脆い地盤を穿って造られていることから天井部を残したまま調査を行うと崩落する危険性があつた。このため、安全性を確保する観点から重機で天井部を除去し、残った部分の埋土を人力で掘り下げて完掘することとした。このため、玄室の高さや天井部の形状については断面の観察により記録を作成したが、やや不明確な点が残ったことは否めない。玄室も土層を観察できるよう東半、西半と段階的に掘り進めた。羨道の調査では、羨門の閉塞の方法と回数、床面の枚数と陶棺・木棺との関係等に留意して掘削を進めた。玄室部分の遺構図については、調査員の手により1/20の図を作成し、遺物の出土状態など必要な部分についてはそれぞれに応じた縮尺で図面を作成した。

以下、横穴墓の発掘調査について報告するが、報告は調査時に付した横穴墓の番号順に行う。(池田裕英)

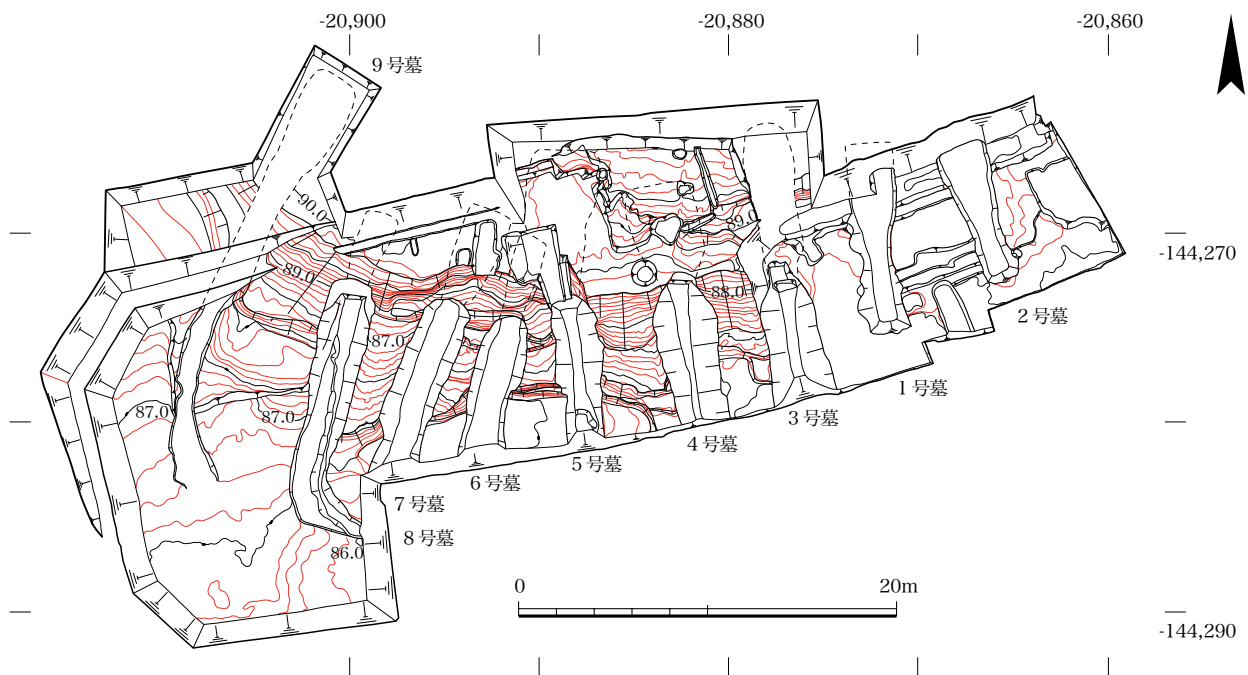


図31 AD第02・03次調査 遺構平面図 (1/400)

第2節 横穴墓の部分名称と土層の分類

横穴墓の部分名称 (図32) 本報告で用いる横穴墓の部分名称は次のとおりである。

横穴墓の最も奥に位置し、遺骸及びそれを収めた棺を埋葬する空間を玄室とする。玄室への入り口を玄門とする。横穴墓の主軸が基本的に南北方向であることから、玄室の側壁や棺の表記は西・東など方位で表わす。

玄室にいたる丘陵の斜面を切り通して溝状に開削して作った天井のない通路を墓道とよぶ。本横穴墓群では墓道の南端が発掘区外に続くため、墓道は全長を検出することができていないが、7～9号墓は墓道の南端部分が東南方向へ曲がっていく。これは発掘区の南に1～9号墓にいたる「幹」のような道があると推測でき、その意味では、ここでいう墓道は「枝」にあたるものと思われる。

横穴墓は、9号墓を除くと墓道から玄室へいたる途中で平面幅が一旦狭まり、その空間が数10cm～1m程度続き、玄室にいたって再度広がるという形態となっている。この狭まった空間は、断面の観察等から玄室部分に比べて天井が低く、トンネル状になっていたと考えられることから、この部分を羨道とよぶ。調査ではこの上部を重機により掘削したため、構造に関してやや不明確

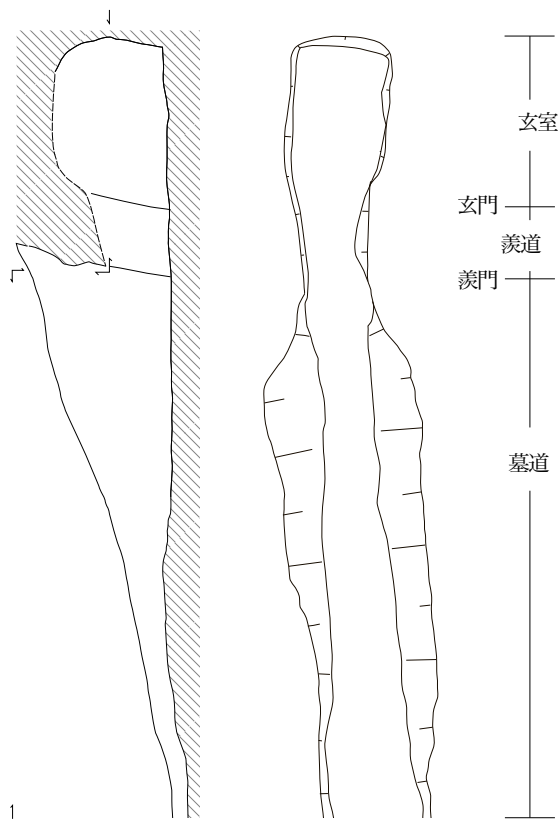


図32 横穴墓の部分名称

な点はあるが、墓道の側壁が直立あるいは上方に向かって広がり気味なのに対して、8号墓のように羨道にあたる部分の側壁が緩やかに内湾し、その部分の高さが玄室の天井よりも低いことが確認できた横穴墓もある (図33)。他の横穴墓でも盗掘により上部が壊されてはいるが、玄門付近の横断面の観察から8号墓と同様の構造で、羨道を有する横穴墓であったと推測できる。ただし、1・2・6・9号墓は羨道がなく、玄室-玄門-墓道となる。

墓道から羨道に入る部分は羨門とよぶ。玄室の閉塞は板や土を使用してこの羨門の部分で行われている。

石の使用や墓道の有無といった違いもあるが、構造的には同時期の横穴式石室と共通する点が認められる。

報告では上に述べた各部分の計測値を記載しているが、横穴墓が造られた地盤が砂質で脆いことから、崩落等で当初の形状とは若干異なっていると推測される。

土層の分類 横穴墓の埋土については、土層観察の結果、いずれの横穴墓でも埋葬に関連する層とその他の層に大別でき、構成する層にも共通性があることがわかった。この点を踏まえ、報告にあたっては共通性のある土層を下記のように分類した。

- I 埋葬に関連して形成された土層
 - A層：初葬時の床面の整地土層
 - B層：追葬時に付加された床面の整地土層
 - C層：最終埋葬時の閉塞土層
- II その他の土層
 - D層：墓道の両側面沿いの埋土層
 - E層：墓道中央部でD層形成後に生じた窪みの埋土層で、埋没土壌形成以前のもの
 - F層：墓道中央部でE層の上面を覆う埋土層
 - G層：玄室・羨道の埋土層の下層
 - H層：玄室・羨道の埋土層の上層

なお、上記に該当しない層はアルファベットのI以下を冠して、I・IIのいずれかの項に含めた。(池田裕英)



図33 8号墓羨門部 (南から)

第3節 基本層序

発掘区内でみられる基本的な土層はI～VIIの7層で、その特徴は下記の通りである。

- I層 敷地の造成土層や工事時に生じた攪乱土層。
- II層 病院建設前の水田の耕土層や床土層。主に灰黄色の砂質シルト層からなる。
- III層 丘陵裾部で後述するIV層を侵食して形成された流路（幅1m以上、深さ1m程度）内の埋土層。黄色の砂質シルト層や砂・砂礫の薄層の互層からなる。
- IV層 丘陵斜面を覆う崩落土層。黄色や灰白色の砂質シルトと砂・砂礫の薄層の互層。
- V層 丘陵斜面を覆う埋没土層。暗灰黄色の砂質粘土～シルト層で、横穴墓の墓道内も覆う。6・9号墓では層の最下位で8世紀の土器、上面から掘られた3・4号墓の盗掘坑内で14～15世紀の土器が出土したことから、奈良～室町時代前葉に形成されたことが推察できる。

VI層 丘陵裾の谷内の埋土層で、灰色の粘土～シルト混砂層からなる。

VII層 丘陵の基盤層（以下、地山）である大阪層群。厚さ1～2mの黄色や灰白色の砂礫層や砂質粘土～シルト層が互層をなす。やや固結。

なお、I・II・III・VI・VII層は遺物を含まない。

発掘区内で最も高い中央部北寄りでは、I層（厚さ約1m）の直下で地山のVII層となる。同西寄りの丘陵斜面の上部では、I層（厚さ1m程度）の下にII層（厚さ1.2m）、溝の埋土層（図中C～E）と続いて地山のVII層となり、下部ではI層の下にIV層（厚さ0.6～1.4m）、V層（厚さ0.1～0.3m）と続いて地山のVII層となる。同南西隅では、I層（厚さ0.5m）、II層（厚さ0.2m）の下に、III・V～VII層が続く。

横穴墓が築かれた古墳時代後期後半～飛鳥時代前半の遺構面はVII層上面で、標高は中央部北寄りが最も高く90.9m、南西隅が最も低く85.0mである。（安井宣也）

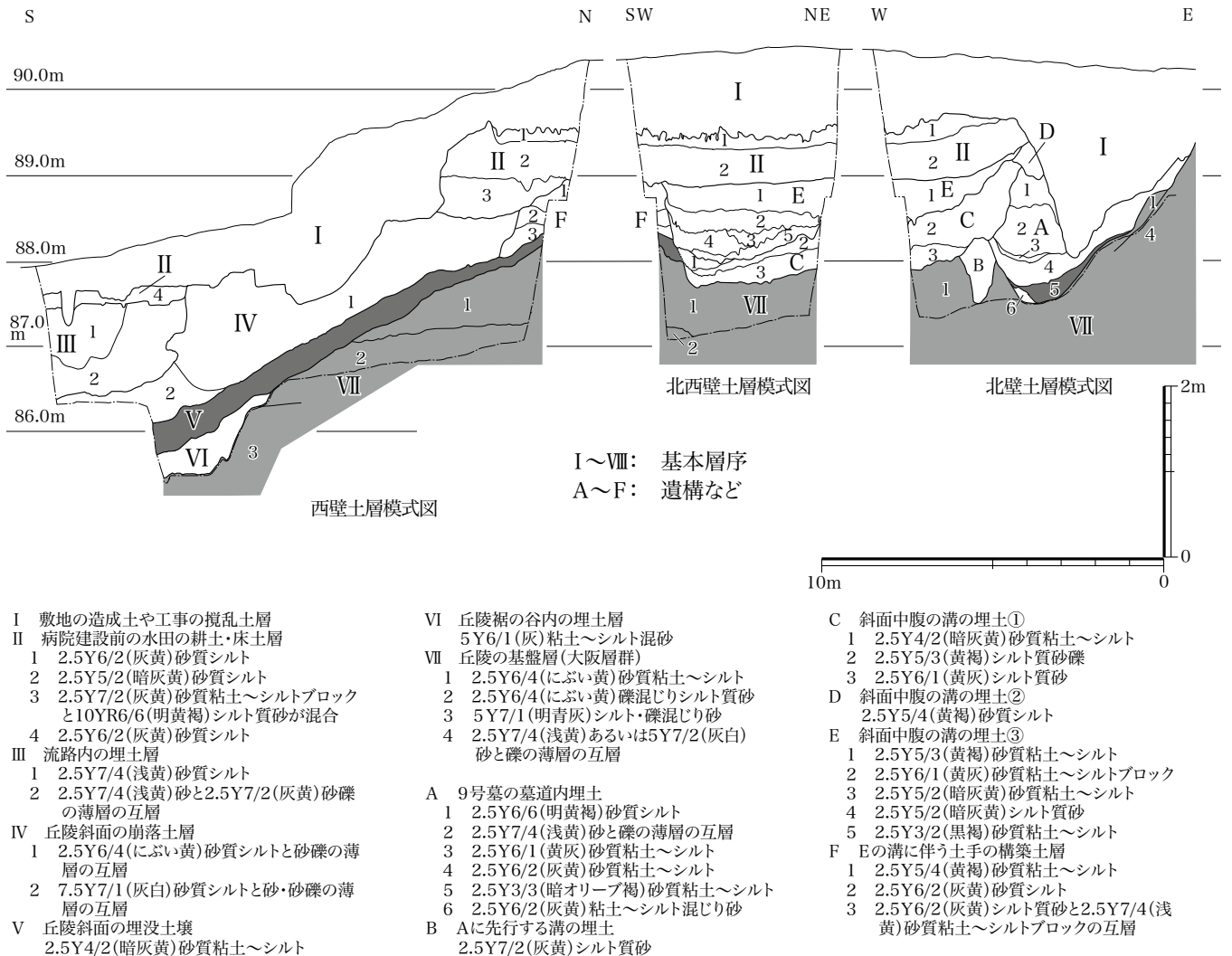


図34 発掘区西端部 土層断面図（縦：1/80 横：1/200）

第4節 赤田1号墓

1号墓は昭和58年の第1次調査後の残存状況や第2次調査との位置関係を明らかにするために再度発掘した。その結果、奥壁近くの玄室が一部残存することが判明したが、天井部が崩落する危険性があったため、東半のみの掘削にとどめた。その他の部分は、床面から高さ0.7 m程度を残して削平されていた。

1. 埋葬施設

1. 墓道と玄室の形態 (図35)

玄室は奥壁幅2.44 m、玄門幅1.26 m、長さ4.32 mである。玄室の主軸はN-5°-Wである。玄室の平面形はやや丸味をもちながら奥壁に向かって広がる羽子板形、断面形は尖頭アーチ形で、高さは1.9 mである。玄門部は工事中に一部削られたため、閉塞施設は確認されていない。

墓道は長さ11.5 m以上で、発掘区外南に続く。上面幅1.2~2.5 m、底部幅0.9 m前後で、断面形は逆台形である。墓道底部は南北方向にほぼ水平に掘削されているが、墓道上面が丘陵斜面に従って傾斜しているため、南に行くにつれて浅くなる。

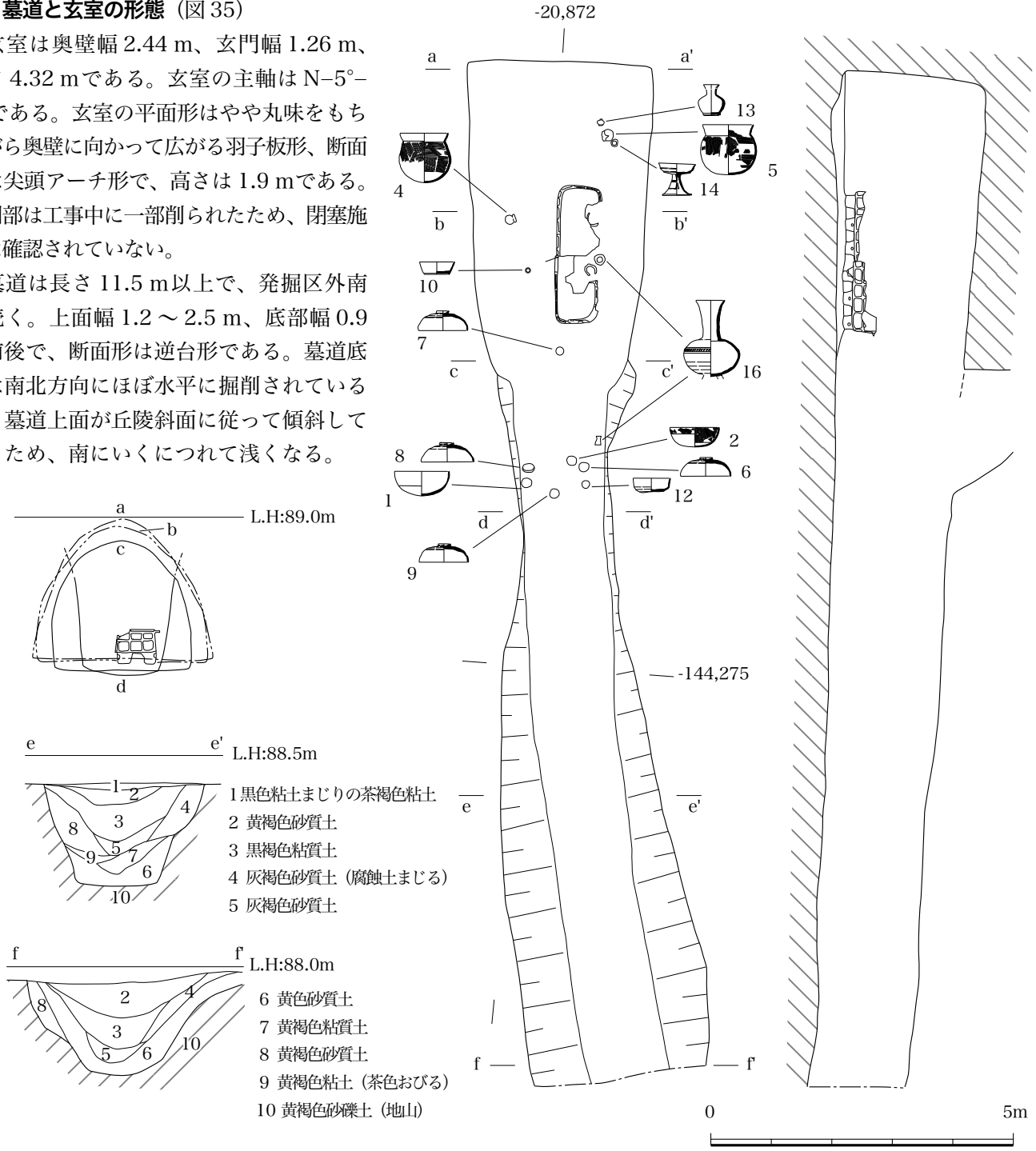


図35 赤田1号墓 遺構平面・立面図、土器出土状態 (1/80)

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図35)

玄室中央やや東よりに、ほぼ主軸にそって陶棺が置かれていた。床面を横穴掘削時の土砂で厚さ約0.25 m整地し、その上面に陶棺を据えている。陶棺の蓋は盗掘で破壊されていた。棺内に人骨・副葬品はなかった。この陶棺の他に、別個体の土師質亀甲形陶棺片が数点出土し、その中には3号墓の陶棺片が含まれていた。

2. 副葬品の配置 (図35)

玄室ほぼ中央に据えられた陶棺の西側から有蓋高杯蓋、台付長頸壺、須恵器杯B、土師器甕が、玄室北東隅近くから須恵器無蓋高杯、壺M、土師器甕が出土した。いずれも原位置を保っていない。

墓道玄門よりからは須恵器杯G、有蓋高杯蓋、台付長頸壺、土師器甕が出土した。

台付長頸壺は玄室のものと墓道のものとが接合したことから、玄室の土器は動かされていることがわかる。

(池田裕英)

III. 出土遺物

1. 陶棺 (図36～図43)

いわゆる土師質亀甲形陶棺である。昭和58年の第1次調査で出土した陶棺のうち、身と片側の蓋が復原され、それを組み合わせた写真と棺身の実測図のみが『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』に掲載されている。今回の第2次調査出土品を整理している過程で、復原されなかったもう片側の棺蓋片に3・4号墓出土の陶棺片が接合することが判明した。そこで棺蓋の接合関係を再検討した結果、以前の棺蓋の復原は誤りであり、再度復原をやり直す必要性が生じた。ここに報告する棺蓋は、再接合によって得られた成果に基づいて再復原したものである。なお、棺身については再検討を行なっておらず、前回報告した内容と大きな変更点はない。

また、陶棺の報告にあたって図38に示すような各部名称図を作成し、各部名称の統一を行った。本書における陶棺の記述は、以後すべてこれに準拠している。

棺蓋 一つの蓋を二つに切断して焼成し、再度組み合わせて使用する。片面だけ残る短側面の残存状態と棺身の大きさから復原できる棺蓋の長さから片側だけを全体的に復原することができた。それによると、片側の復原長92.4cm、幅64.2cm、高さ34.4cmである。別の片側は短側面を欠くが、残存部分の基本形態は同じで残存長83.7cm、幅56.4cm、高さ34.0cmである。棺身の長さから判断して、蓋はほぼ二等分されていると判断できるので、全長は184cm前後と推定できる。器厚

は概ね2cmであるので、内法寸法は、全長180cm前後、幅60.5cm、高さ31cmとなる。

棺蓋は口縁部・体部・天井部で構成される。

長軸中央の稜線に沿って稜線突帯、口縁部外面に沿っ



図36 赤田1号墓 陶棺蓋口縁部端面の葉脈圧痕

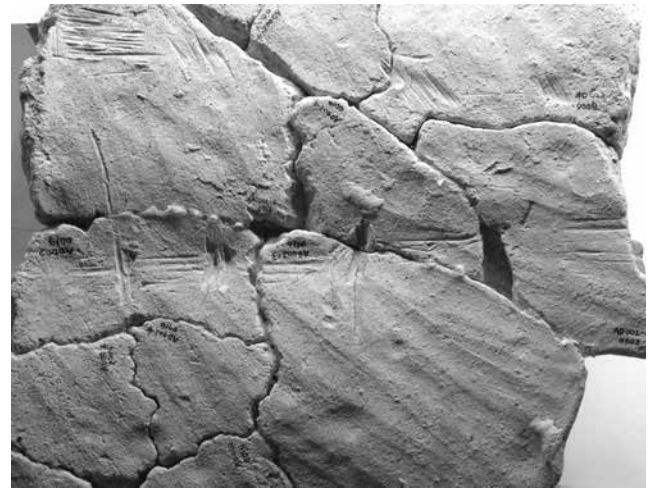


図37 赤田1号墓 陶棺蓋内面の藁縄状圧痕

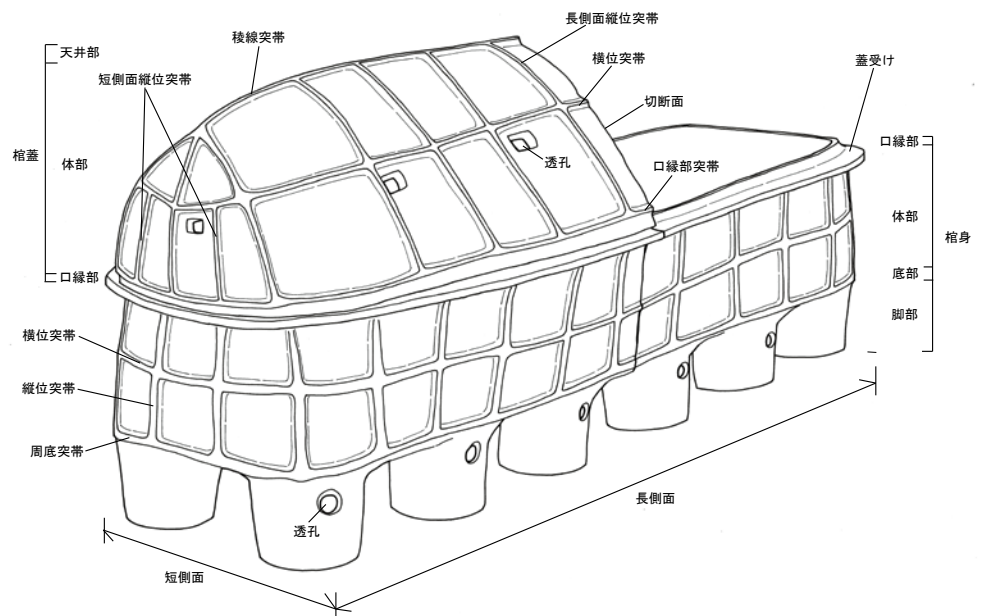


図38 陶棺の各部名称

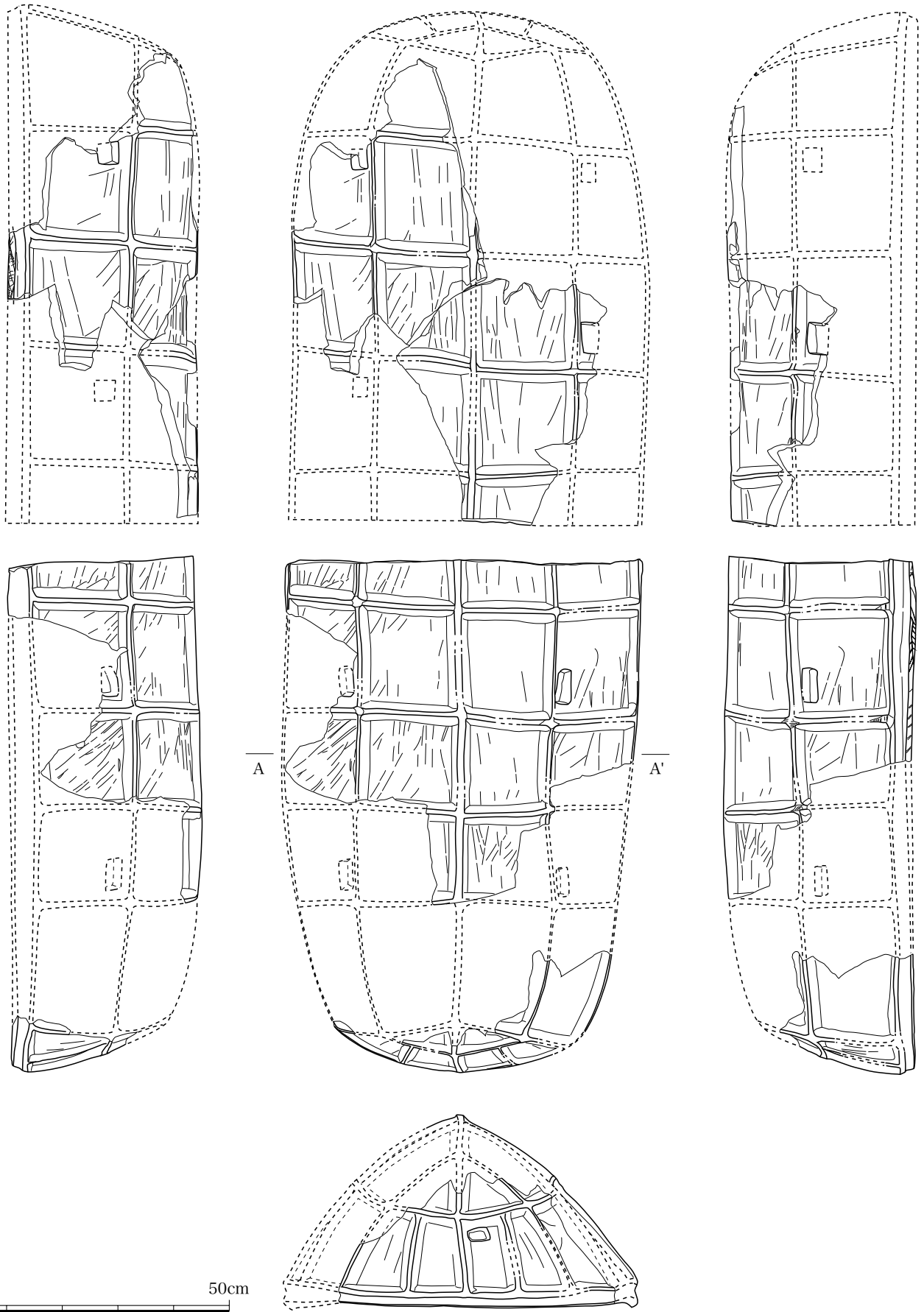


図39 赤田1号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10)

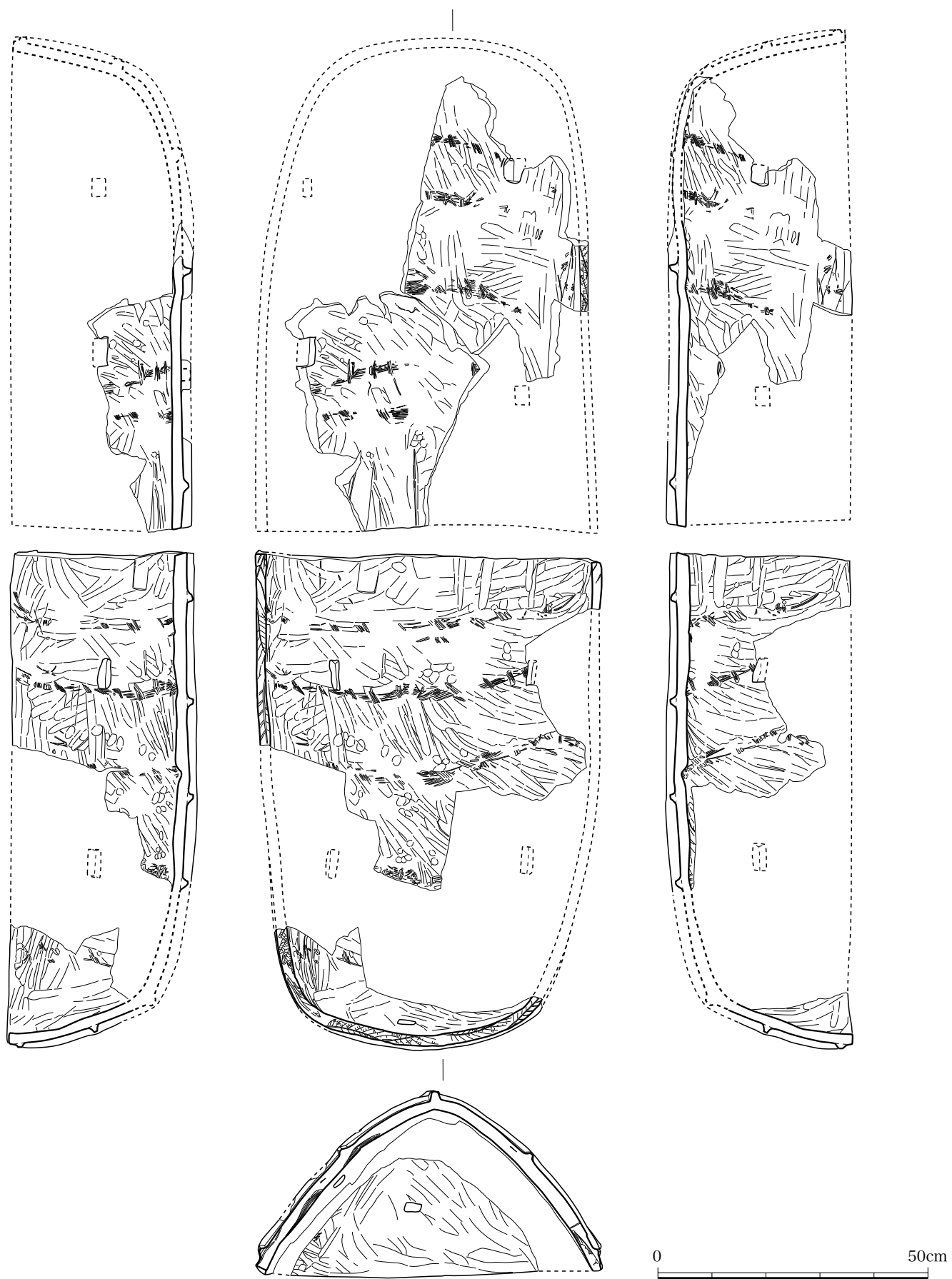


图40 赤田1号墓 陶棺盖内面平面·立面图 (1/10)

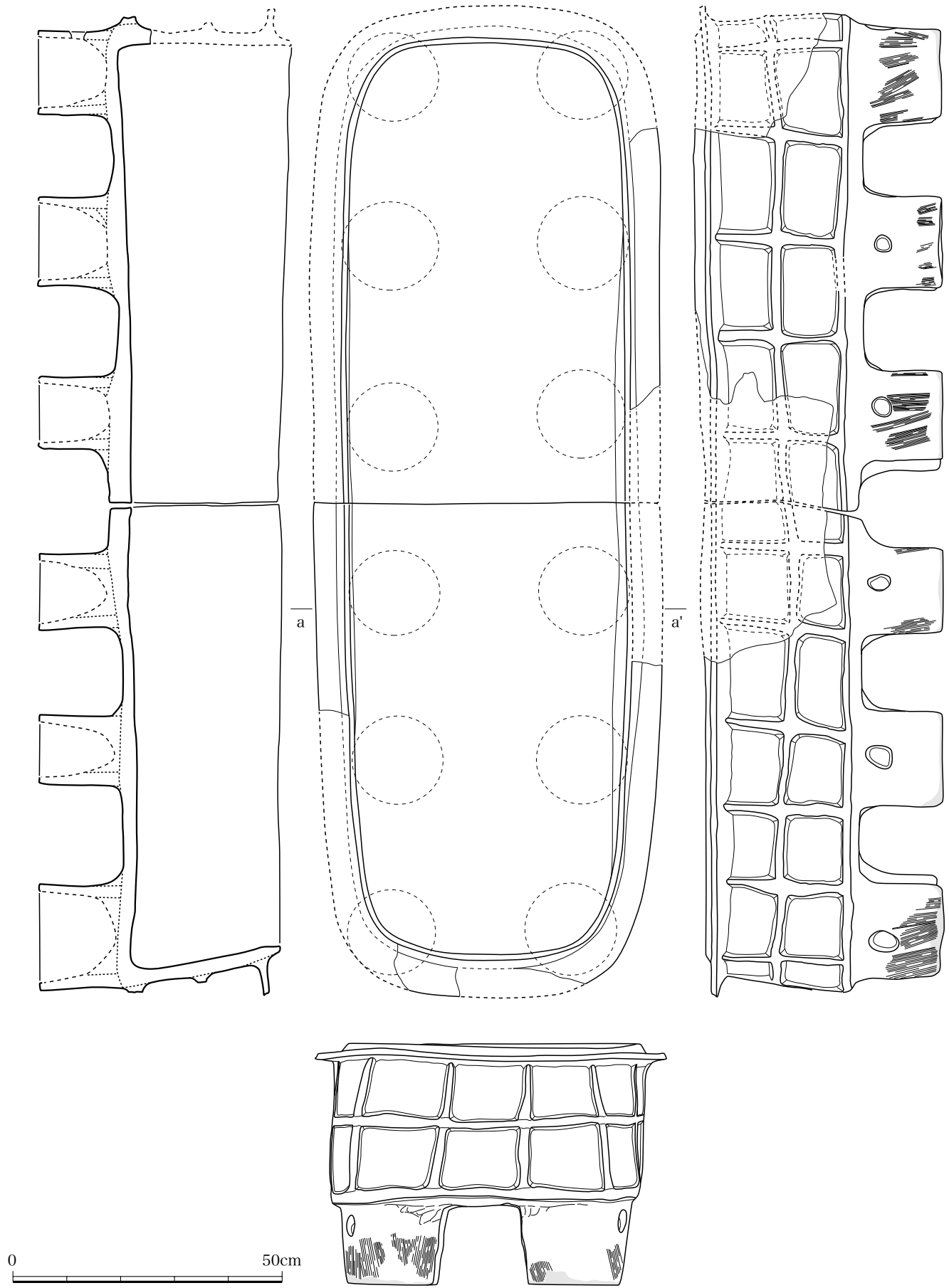


图41 赤田1号墓 陶棺身平面・立面图 (1/10)

て口縁部突帯、長側面からみて両突帯の中間に横位突帯を1条めぐらせ外面全体を上下2段に区画する。そして10条の長側面縦位突帯を貼り付けて長側面に左右9列の区画をつくる。短側面では下段にのみ短側面縦位突帯を貼り付け、左右4つの区画をさらにつくっている。突帯の貼り付けは横先縦後で、縦横の交点を板で押圧する箇所がある。突帯形状は幅1cm前後で、稜線突帯が他の突帯よりも高く突出する。

天井部から口縁部に向かって直線的に外へ開き、断面形は屋根形となる。左右の長側面に4つずつ、短側面に1つずつ合計10の方形透孔を下段にあけると推定できる。長側面の透孔は1区画おきに穿孔するようであるが、一部に不規則的な配置が認められる。外面にだけ赤色顔料を塗布する。口縁部端面に沿って黒斑がみられる。

調整は内外面ともに指ナデを基調とする。切断面には糸切り後にヘラケズリ調整した痕跡が認められる。

口縁部端面には広葉樹の葉脈が重なる圧痕(図36)が一面に残り、木葉を敷いた作業台上で蓋をつくったことがわかる。高さ6cm前後の粘土帯を何枚か接いで口縁部をつくり、その上に粘土紐を積み上げて成形する。最終の閉塞箇所の位置を想定できるような痕跡が現存部分に認められず、その位置は特定できない。

長軸方向と直交する10本の藁縄状圧痕が、内面全体に不定間隔で平行して残っている。藁縄状圧痕は、束ねた藁が平行する痕跡とそれを概ね3~4cm間隔で結束した直交する3~4条ほどの藁痕跡から成り(図37)、口縁部内面付近に藁の端が器壁へ食い込む箇所がみられるので端部は結束されていないと考えられる。また、天井部内面には、長軸方向に平行する板の圧痕が認められる。これらの痕跡から、棺蓋の形状を乾燥時に内面から支持し維持するための形持たせの存在を推定できる。

なお、器表面の砂礫種の観察結果は、流紋岩、石英、長石、角閃石である。流紋岩は茶褐色、褐色、灰色、暗灰色で、粒形が亜角、亜円、粒径が0.5~7mm、量が僅である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3~1.5mm、量が中である。複六角錐をなすものが僅である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.3~1.5mm、量が微である。角閃石は黒色、粒形が角、粒径が0.2mm、量が稀である。

棺身 過去に石膏復原されているが、接着箇所が劣化してはずれた箇所もあったため、観察は最小限度にとどめ、以前作成された図面を再トレースして掲載した。

棺身は脚部・底部・体部・口縁部から構成され、体部と口縁部の境界に蓋受けが付く。全長184cm・幅65cm・

高さ46cmである。また、器厚は概ね2.5cmあり、内法寸法は全長169cm・幅51cm・高さ32cmである。

底部外面に沿って周底突帯、これと蓋受けの中間に横位突帯を1条めぐらせ外面全体を上下2段に区画する。そして26条の縦位突帯を貼り付けて長側面に左右10区画、短側面に左右3列の区画をつくる。突帯の貼り付けは横先縦後で、縦横の交点を板で押圧する箇所がある。突帯形状は、幅1cm前後で突出する。

体部は隅丸方形の箱形で、器壁は直立もしくはやや内傾している。口縁部の高さは2cm、蓋受けは上面幅4~6cm、厚さ1cmである。底部から口縁部の調整は内外面ともに指ナデを基調とする。切断面には、底部中央に穿孔した後糸切りを行った痕跡が認められる。

脚部には6行2列、合計12本の脚が取り付け。脚には、外面方向に対して長側面から片側の短側面を経て再



図42 赤田1号墓 脚部の透孔配置

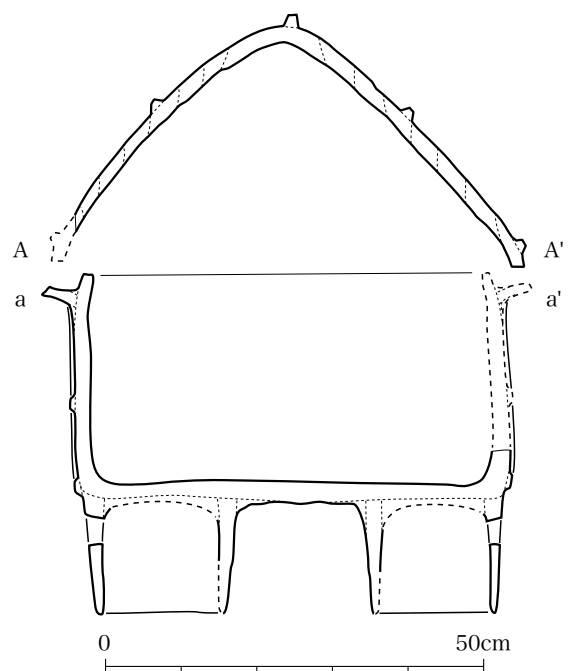


図43 赤田1号墓 陶棺断面図(1/10)

び長側面に至るような規則性のある位置に、円形透孔を1つずつ配している。脚の調整は、外面タテハケである。高さは、脚部が15cm、底部から口縁部が31cmである。脚底部に黒斑がつく。棺身内外面に赤色顔料を塗布するが、底部裏面や脚の内面及び外面内側など直接見えない部分には塗布が省略されている。

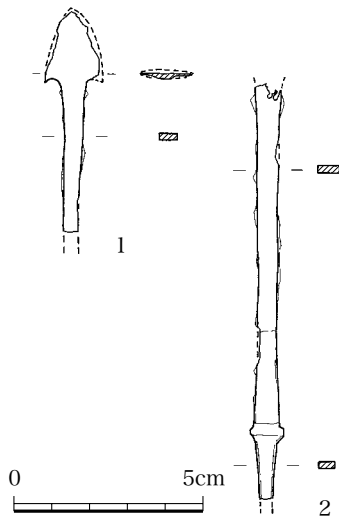


図44 赤田1号墓 出土鉄鏃 (1/2)

2. 鉄器 (図44)

鉄鏃(1・2) 長頸鏃が2点ある。1は茎部を欠失し、残存長5.8cmである。逆刺のある三角形の鏃身部から長さ4cm以上の頸部がのびている。鏃身部表面が剥離するため断面形状は判然としないが、平造と思われる。2は、鏃身部と茎部先端を欠失し、残存長11.0cmである。頸部の長さ9.3cm以上で、茎部との境に棘状関をつくる。

(鐘方正樹)

3. 土器 (図45)

土師器には碗、甕がある。いずれも色調は淡黄褐色で、軟質の焼き上がりである。碗(1・2・3)はいずれもやや内湾する口縁部をもち、口縁端部はまるくおさめる。底部外面には手持ちによるヘラケズリを加える。2は内面と口縁部外面をハケメ調整する。甕は2点(4・5)ある。4は口縁部が若干内湾し、5は斜め上方に直線的に延びる形態である。いずれも体部外面上半は縦方向のハケメ、下半は手持ちによるヘラケズリ、体部内面の調整はハケメである。

須恵器には杯G、杯B、有蓋高杯蓋、無蓋高杯、台付長頸壺、壺Mがある。杯G(11・12)の底部外面はいずれもヘラ切り後未調整である。杯B(10)は高台を外端につける形態。有蓋高杯蓋(6~9)の頂部外面の調整はロクロナデである。口縁端部は丸くおさめるもの(6)と尖り気味のもの(7~9)とがある。高杯がなく、碗として用いられていた可能性も考えられる。無蓋高杯の14は杯部に断面三角形の凸帯を2条めぐらす。脚部中位には浅い2条の沈線をめぐらし、その上下に長方形の透かしを2方に加える。15に透かしはない。杯部は14はやや丸味があり、15は角ばった形態である。台付長頸壺(16)は体部中位に2条の沈線をめぐらせ、その間に刻目を加える。体部下半をロクロケズリしている。壺M(13)は体部下半をロクロケズリし、その後ロク

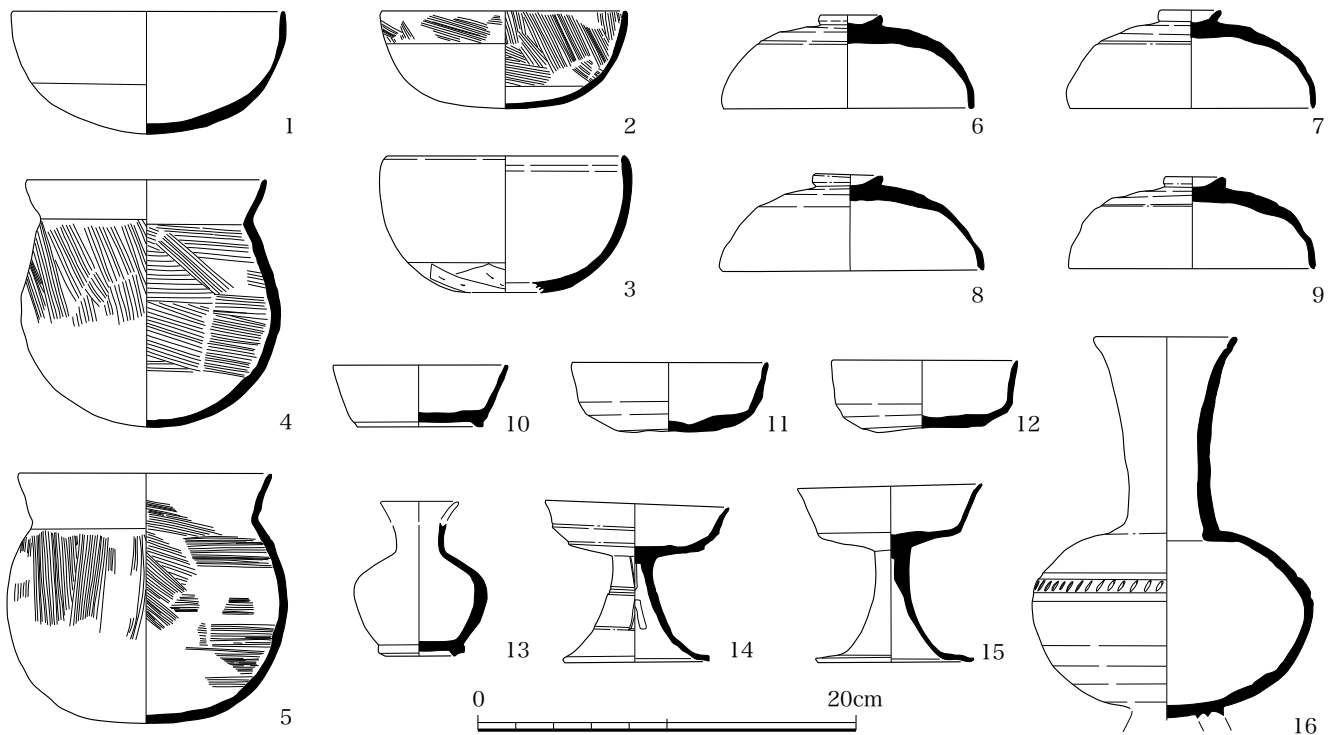


図45 赤田1号墓 玄室出土土器 (1/4)

ロナデにより調整する。

土師器碗・甕、須恵器杯 G・無蓋高杯・台付長頸壺は7世紀前半のものと思われるが、有蓋高杯蓋はやや古く6世紀後半のものであろう。1号墓の陶棺片が3号墓から出土していることもあり、これらの有蓋高杯蓋は他の横穴墓から運び込まれた可能性が高いと考えられる。須恵器杯 B・壺 M は8世紀後半に位置づけられよう。

第5節 赤田2号墓

2号墓は昭和58年度の第1次調査では玄室直上に旧病棟の基礎とコンクリート便槽が建設されていたため、奥壁まで調査することができなかった。第2次調査の際には、基礎や便槽が除去されており、奥壁まで調査することが可能となったため、玄室の規模を確定することと遺物の検出を目的に調査を行った。

1. 埋葬施設

1. 玄室の規模と形態 (図46)

玄室は天井部が上述の基礎とコンクリート便槽で破壊されている。奥壁幅2.4m、長さ4.5mで、玄門に向かって狭まる平面羽子板形を呈する。玄室の主軸はN-15°-Wである。玄門幅は1.24mである。

墓道は断面逆台形で、底部幅が0.8～1.3m、上面幅が1.26～2.48mである。長さは12.4m以上で、発掘区外南に続くが、南端部で緩やかに西に曲がる。1号墓と同様、墓道上面が丘陵斜面に沿って傾斜しているため、南へいくに従い浅くなる。

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置

玄室内に棺の痕跡はなかった。第1次調査の際に墓道埋土から若干の土師質亀甲形陶棺の破片が出土しており、本来は陶棺が安置されていた可能性も考えられる。

2. 副葬品の配置 (図46)

今回の第2次調査で玄室北西隅の床面直上から土師器甕(1)が出土した。第1次調査では墓道から土師質亀甲形陶棺、土師器、土馬が出土している。

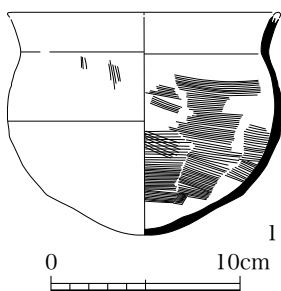


図47 赤田2号墓 玄室出土土師器甕 (1/4)

III. 出土遺物

1. 土器 (図47)

土師器甕であるが、外面は剥落が激しく、調整が不明な部分が多い。外面肩部に縦方向のハケメがかすかに残る。

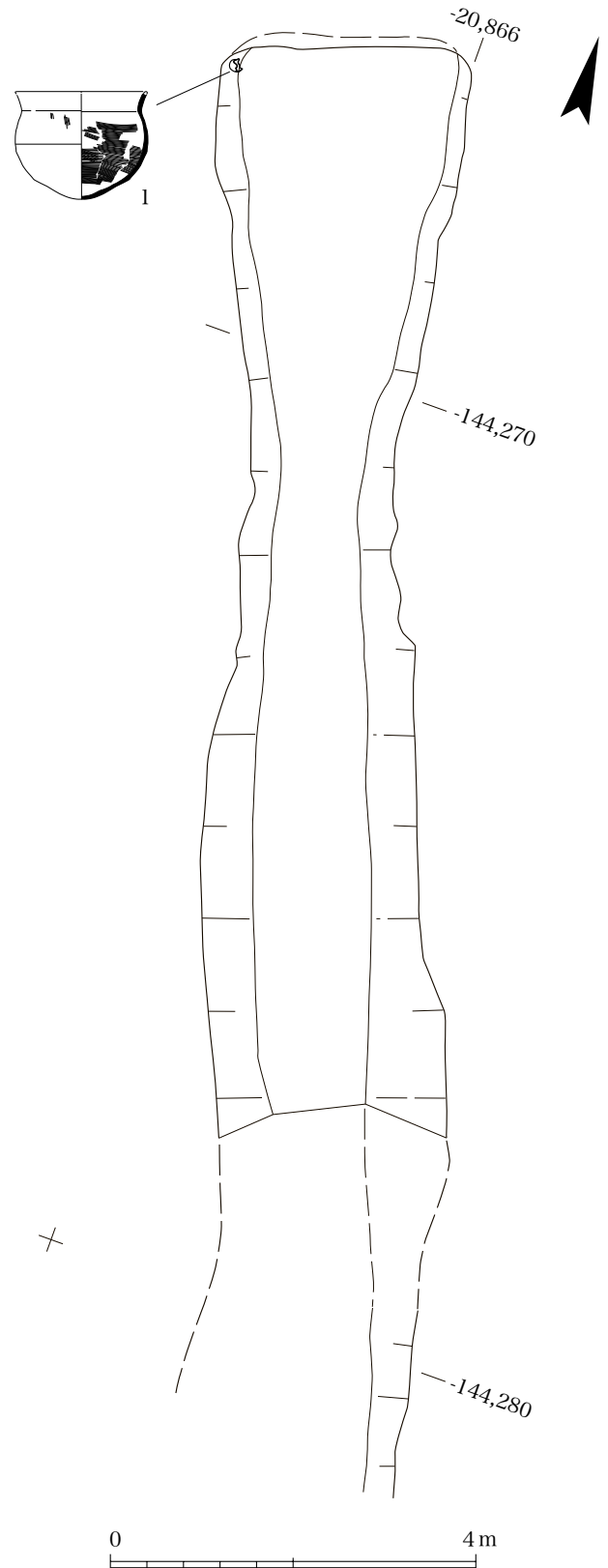


図46 赤田2号墓 遺構平面図・玄室土器出土状態 (1/80)

内面の調整は横方向のハケメである。外面肩部に黒斑がみられる。1号墓から出土した土師器甕と類似し、同じ7世紀前半頃のものではないかと思われる。(池田裕英)

第6節 溝状遺構 SZ03・SZ04

その他の1・2号墓に係る遺構として、第1次調査で検出したSZ03・04がある(図50)。

SZ03(図48) 1号墓と2号墓との間で検出した溝状の遺構である。横穴墓と並び丘陵斜面に掘り込まれている。長さは6.5m分を検出している。横断面は逆台形で、底部幅0.9～1.1m、上面幅1.4～1.5mである。底部はほぼ水平であるが、丘陵斜面に掘削されているため、南に行くにしたがい浅くなる。検出面からの深さは北端で1.24m、南端で0.2mである。上部を覆っていた痕跡は確認されておらず、遺物も出土していない。

SZ04(図49) 2号墓の東で検出した。SZ03と同じく丘陵斜面に掘り込まれた溝状の遺構である。長さ8.2m分を検出している。横断面はやや不整形な逆台形で、底部幅は0.88～1.5m、上面幅は1.73～2.0mである。SZ03より一回り大きい。SZ03と同じく南に行くに従って浅くなる。検出面からの深さは北端で1.74m、南端で0.4mである。上部を覆った痕跡はなく、遺物もなかった。

この2つの遺構は、形態は横穴墓の墓道に類似するが、出土遺物もなく、性格も明らかではない。第2次調査ではこれに類する遺構はなかった。横穴墓の間隔や底面の標高からみて削平されたとは考えがたく、2号墓の東西にのみ存在するようである。ただし、第2次調査に先立って行った試掘2010-4次調査の西区では14号墓と15号墓との間に横穴墓の墓道に比べて平面幅の狭い遺構があった。14・15号墓の墓道幅は2.1～2.3mで

あるが、この遺構は0.5～0.7mであった。あるいはSZ03・04のような遺構かとも思われるが、未発掘のため詳細は不明とせざるを得ない。(池田裕英)



図48 AD第01次調査 SZ03(南から)

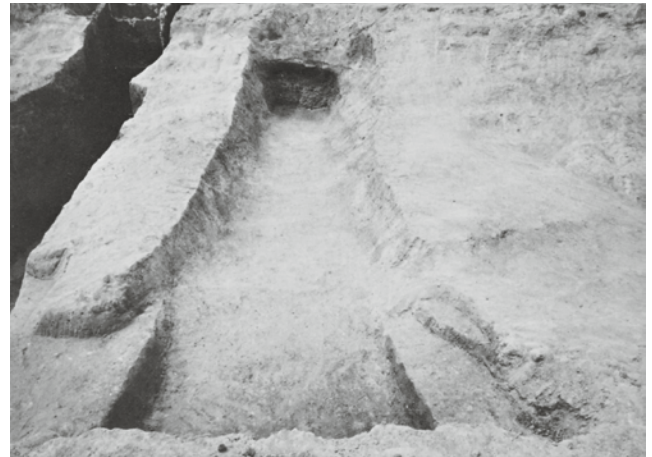


図49 AD第01次調査 SZ04(南から)

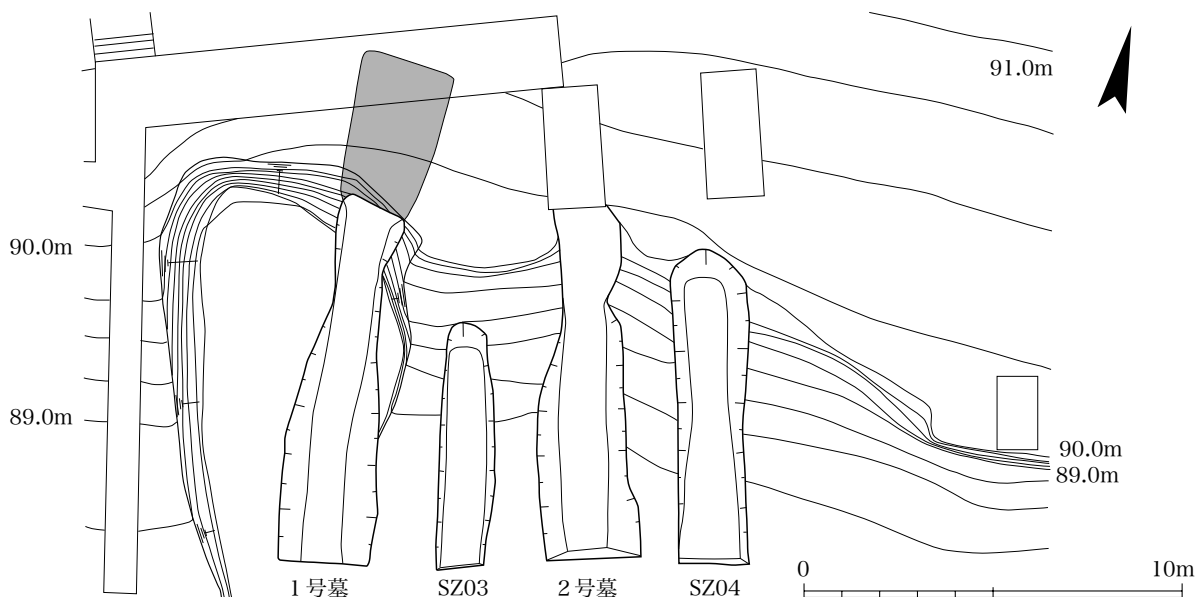


図50 AD第01次調査 赤田1・2号墓とSZ03・04遺構平面図(1/200)

第7節 赤田3号墓

全長 14.3 m 以上で、墓道南端は発掘区外に続く。玄室の主軸は N-7°-W である。玄室床面の検出状況や羨道の土層観察から、玄室の閉塞が2回以上行われていることがわかる。玄室内では床面を2面確認しており、下層床面上では埋葬の痕跡はなかったが、赤色顔料の広がりが認められ、鉄製品が出土している。上層床面では土師質亀甲形陶棺1基が出土し、遺物の出土状況から、さらに陶棺の南側に追葬があったと考えられる。玄室内は後世の盗掘を受けている。羨門付近は病院駐車場の造成に伴う擁壁工事の際に一部削平されている。

1. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図51)

玄室・羨道及び墓道は黄色の砂礫層の地山(基本層序: VII-4層)を掘削して造られ、その埋土は、埋葬に関連する土層とその他の土層に大別できる。

(1) 埋葬に関連する土層

層序と層の様相から、下記の4層(A~D層)が識別できる。

A層(1~6層) 玄室・羨道及び墓道において、陶棺埋葬時までに形成された床面の整地土層。下記の2つの部分で構成される。

① 玄室・羨道及び墓道において、地山上面に形成される層(1~5層)

② 玄門の3.5 m手前までの玄室において、①の上層で陶棺を据える床面を形成する層(6層)

①は、玄室・羨道では下部(1~3層)が黄色や黄褐色の砂礫を主とする層、上部(4層)が黄色のシルト混じり砂、墓道では灰色の砂質シルト・粘土層(5層)からなり、硬くしまる。厚さは、玄室で奥壁から玄門の2.5 m手前までの部分が0.2~0.3 m、その他の部分が0.1 m。前者の部分の上面は、南落ちの段差をはさんで後者より0.1 m高く、赤色顔料の広がりがみられる。

②は厚さ0.15 mで、灰黄色のシルト質砂礫からなる。奥壁近くで陶棺と副葬品の土器等が出土した。

B層(7~11層) 玄室の玄門寄り1.5 mの部分と羨道及び墓道において、A層上に形成された追葬時の床面の整地土層。本来は閉塞土の可能性がある。

玄室と羨道では下部(7層)が黄色の砂質シルト・粘土層、上部(8・10層)が黄色のシルトを含む砂層や砂礫層、墓道では主に前者の上部の層からなる。厚さは、玄室・羨道が0.1~0.2 m、墓道が0.3~0.6 mで、8・10層は墓道で層厚が増す。上面は平滑。玄室の玄

門寄りの7層上面では6世紀後半の須恵器壺や鉄鏃が出土し、これらを副葬品とした追葬があったと想定される。

C層(12~18層) 羨道の羨門部を中心にB層上面に形成された、最終埋葬時の羨門の閉塞土層。

主に明黄褐色や黄色のシルト質砂層からなり、ほぼ水平に積み上がる。高さは1.8 mで、上部は盗掘坑の掘削で破壊されているが、頂部の位置は羨門の天井部に近い。羨道側は緩やかに下るが、墓道側の下部は切土で垂直な面に改変されている。直下のB層の床面上で、6世紀後半の須恵器短頸壺が出土した。

I層(20~22層) 墓道内において、C層に接して築かれた土壇の構築土層(22層)とその構築面の土層(20・21層)。21層は凹みの埋土。

いずれの土層も黄色のシルトを含む砂からなり、後述するD層の後に形成。土壇は南北2.5 m、高さ0.4 m。上面は平坦で、6世紀後半の須恵器甕が出土。凹みは南北1.5 m、深さ1.2 m。須恵器有蓋高杯蓋が出土。

(2) その他の土層

a. 墓道 層序と層の様相から、下記の3層(D~F層)が識別できる。

D層(19層) 前述したB層の上面から墓道の両側面に沿って形成された埋土層。黄色のシルト・粘土質砂層で、厚さは断面観察箇所で0.2 m。層的には前述したC層と対応する。出土遺物はない。

E層(23~29層) 前述したI・D層の形成後に生じた墓道中央部の窪みにおいて、盗掘までに形成された埋土層。

厚さは0.5~1.2 m前後。下部(23~28層)は黄色や黄褐色のシルトを含む砂層で出土遺物はない。上部の暗オリーブ褐色シルト質砂層(29層)は基本層序のV層に対応する埋没土壌で、羨門近くの上面から盗掘坑が掘削されている。最下位で8世紀の土馬片が出土した。

F層(47・48層) 盗掘後に形成された埋土層で後述するI層上を覆う。主に黄褐色のシルト質砂層で出土遺物はない。

b. 玄室・羨道 層序と層の様相から、下記の2層(G・H層)が識別できる。

G層(断面図30~34層) 前述した最終埋葬に伴うC層の形成後から盗掘前までに形成された埋土層。

厚さは0.2~0.7 mで、羨道付近が厚い。玄室の南寄り~羨道の30~33層は主に黄色の砂質シルト層やシルト質砂層で、出土遺物はない。その上層で玄室・羨道内を覆う34層は明黄褐色のシルト質砂礫からなる。奥壁近くには盗掘時の陶棺の破壊で生じた窪みがあり、

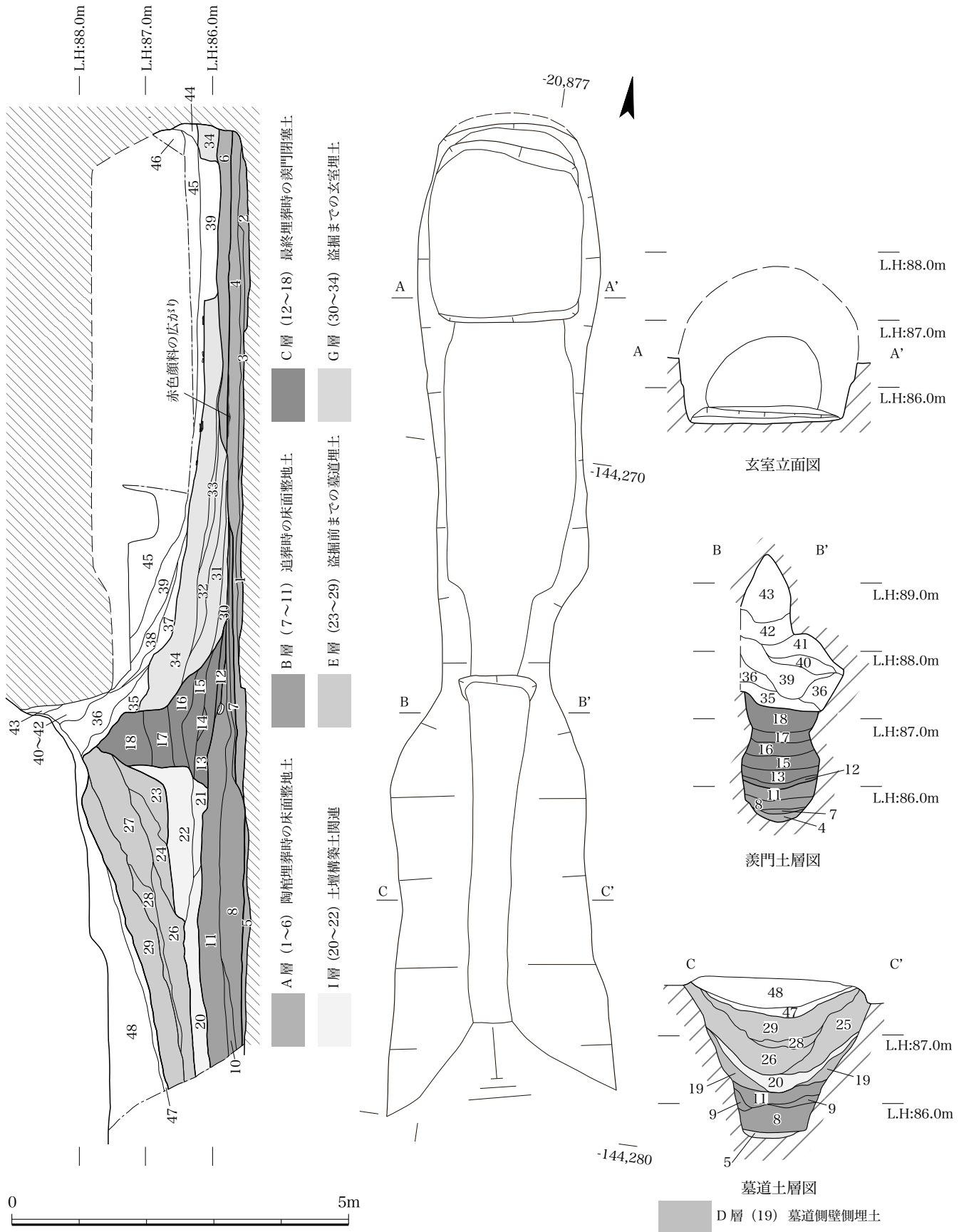


図51 赤田3号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)

A層	層の互層	32 2.5Y7/2 (灰黄) シルト混じり砂
1 10YR6/6 (明黄褐) シルト・粘土混じり砂礫	18 2.5Y7/4 (浅黄) 砂礫	33 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト混じり砂
2 2.5Y5/4 (黄褐) 礫混じり砂	D層	34 2.5Y7/6 (明黄褐) シルト混じり砂礫
3 2.5Y6/4 (にぶい黄) 礫混じり砂	19 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂	H層
4 5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂	I層	35 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂
5 2.5Y7/1 (灰) 砂質シルト・粘土	20 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂	36 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫
6 2.5Y7/2 (灰黄) シルト混じり砂礫	21 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂	37 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト
B層	22 2.5Y7/3 (浅黄) シルト質砂と砂礫の互層	38 2.5Y6/2 (灰黄) 砂質シルト
7 5Y7/2 (浅黄) 砂質シルト・粘土	E層	39 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
8 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂礫	23 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂礫	40 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂礫
9 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂礫	24 2.5Y7/3 (浅黄) シルト質砂礫	41 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂
10 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂	25 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂	42 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
11 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	26 2.5Y7/3 (浅黄) シルト質砂	43 地山の破砕物
C層	27 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂	44 地山の破砕物
12 2.5Y7/4 (浅黄) 砂質シルトブロック	28 2.5Y5/6 (明黄褐) シルト質砂	45 2.5Y7/2 (灰黄) 砂質シルトブロック
13 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	29 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) シルト質砂	46 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂と2.5Y8/2 (灰白) 砂礫の薄層の互層
14 地山の破砕物	G層	F層
15 2.5Y7/6 (明黄褐) シルト質砂	30 2.5Y7/2 (灰黄) 礫混じり砂	47 2.5Y5/6 (明黄褐) シルト・粘土質砂
16 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	31 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂と2.5Y7/2 (灰白) 礫混じり砂の薄層の互層	48 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂
17 2.5Y7/6 (明黄褐) シルト質砂と砂礫の薄層		

赤田3号墓 堆積土層名

内部に陶棺片が残る。また、上面には陶棺片が散布する。

H層 (35～46層) 盗掘後に前述したG層上に形成された埋土層。

下部(35～43層)は主に黄色の砂質シルト層やシルト質砂層で厚さ0.05～0.5m、羨道寄りで層が多く層厚も厚い。盗掘坑内の37～39層の掘り下げ時に14世紀後半～15世紀前半の土師器羽釜が出土した。

上部(44～46層)は地山の破砕物を多く含む。

c. 層の成因 地山の破砕物を主とする層は、天井部や側壁の崩・剥落物が堆積したと考える。黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のIV層と様相が似ていることから、丘陵斜面の崩落土及び羨門付近からの流入土と考える。(安井宣也)

2. 横穴墓の規模と形態 (図51)

玄室 玄室は長さ6.9m、奥壁幅が2.5m、中央部幅が2.7mと若干洞が張る。玄門から玄室に入った部分が東西に広がり、両袖式の横穴式石室と似た平面形態である。横断面は側壁がやや外方へ開く逆台形の形状である。天井部除去時の観察から玄室の高さは約2.4mのドーム形と推定できる。床面地山上面はほぼ水平で、標高は概ね85.6mである。玄室の北半に長さ2.7m、幅2.3mの範囲で地山を0.1m程度掘り窪めた部分がある。陶棺が置かれているのはこの掘り窪められた位置にあたるが、地山上面に直接置いているのではなく、0.2mほど土を盛って、床面を整地した後に棺を置いている。このような段差は羨道と墓道との境にもみられ、空間を分ける意識と思われる。京都府八幡市の女谷・荒坂横穴で

も墓道と羨道、羨道と玄室の境に段差が検出されている(京都府埋蔵文化財調査研究センター2004)。

羨道 羨道は長さ1.4m程度に復原でき、幅0.9～1.0mで、中程が若干狭まる。天井部が盗掘坑により壊されているが、残存状況から高さは約2mに復原できる。

墓道 墓道は長さ6.0m以上で、底部幅が0.6～0.9m、上面幅が2.6～3.3mの断面逆台形状である。深さは2.0～2.4mである。底面はほぼ水平で、標高は概ね85.5mである。墓道の断面(図51C-C')をみると、中位から上部が緩やかに外方へ広がり、追葬の際に掘り広げられたとみられる。

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図52)

玄室奥壁寄り、6層上面に玄室の主軸にほぼ合うように土師質亀甲形陶棺1基が置かれていた。この陶棺は玄室奥壁寄りの位置(北群)と玄室のほぼ中央(南群)の大きく2箇所に分かれて出土した。陶棺は盗掘の際に破壊されたとみられ、そのため一部が前方に動かされたようである。陶棺には赤色顔料と緑土が塗布されていたことが確認できた。北群は破壊されてはいたものの、棺身の脚部西列が置かれた位置を保って残存していた。南群には棺蓋・棺身の破片があり、北群の陶棺と同一個体のもの他に、この陶棺とは別個体の陶棺片が混在して出土した。この別個体の陶棺片は1号墓から出土した陶棺の蓋と接合した。1号墓の陶棺片が3号墓の玄室にもたらされたのは、盗掘により破壊された陶棺片とともに出土していることから、盗掘以後の行為であることが

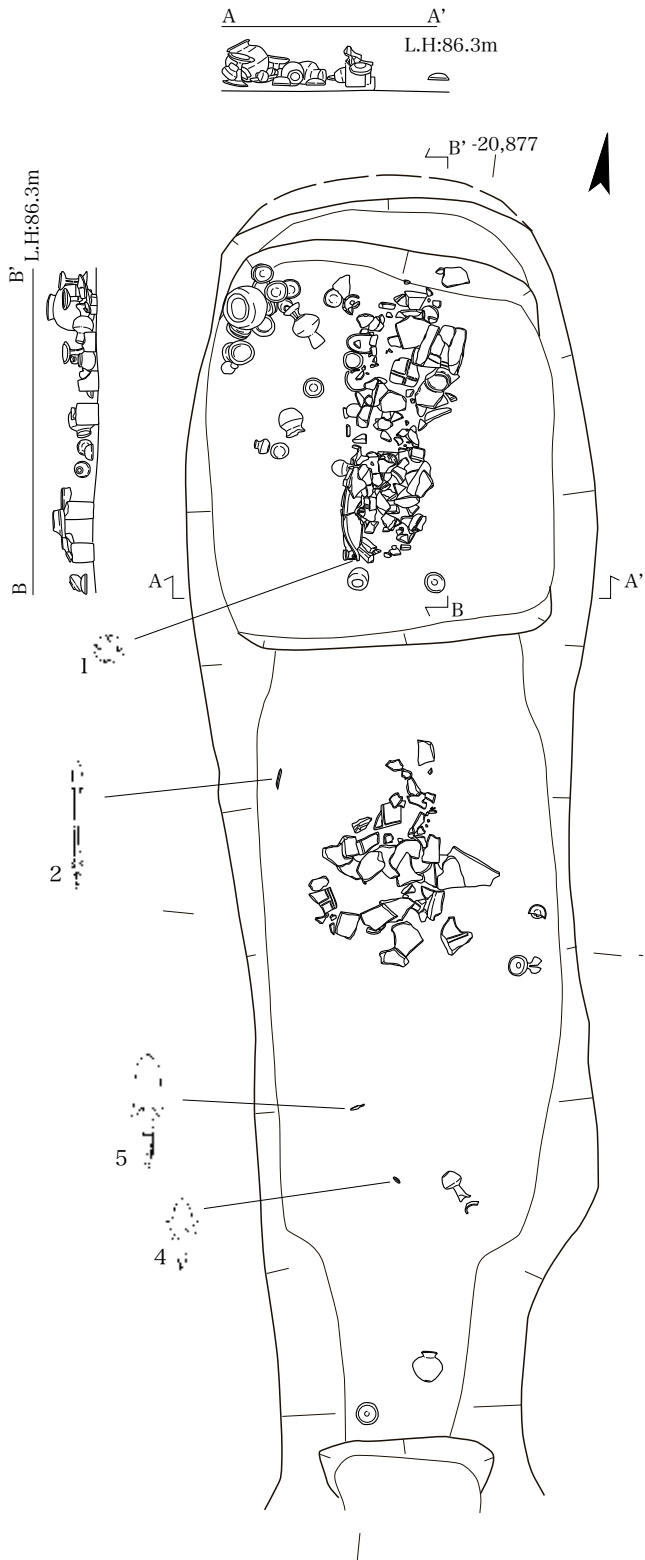


図52 赤田3号墓 玄室陶棺・金属器出土状態 (1/50)

わかる。

この陶棺の他、玄室の玄門寄りの7層上面で土器や鉄鏝が出土していることから、玄室前方に追葬があったと想定される。鉄釘の出土がみられないため、釘を使わない木棺あるいは棺を用いない埋葬であったと思われる。

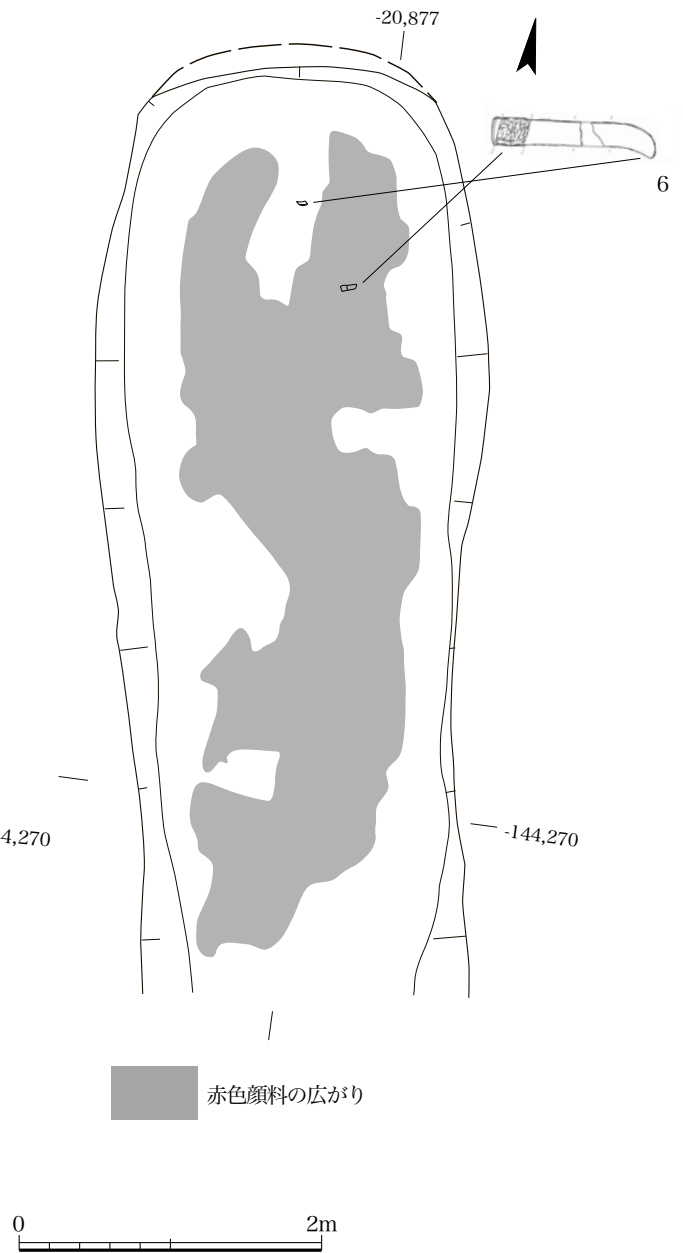


図53 赤田3号墓 玄室4層上面の赤色顔料の範囲と鉄鏝出土状態 (1/50)

2. 副葬品の配置

(1) 金属器出土状態 (図52・53)

玄室中央の第7層上面から1点、玄門付近で2点の鉄鏝 (図69-2、4・5) が、北群陶棺片の南端にある脚部内から耳環 (図69-1) 1点が出土した。前者は

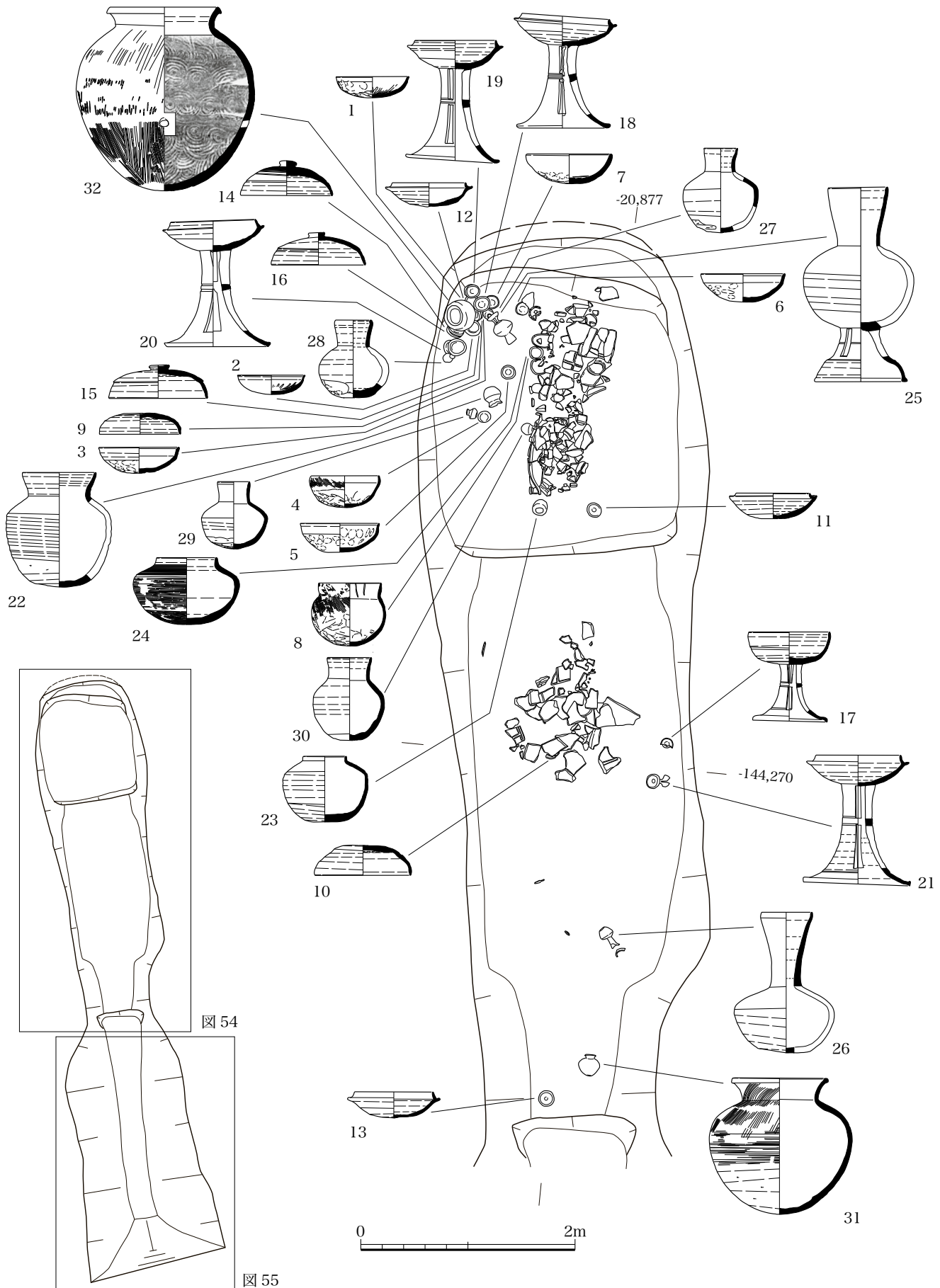


图54 赤田3号墓 玄室土器出土状态 (1/50)

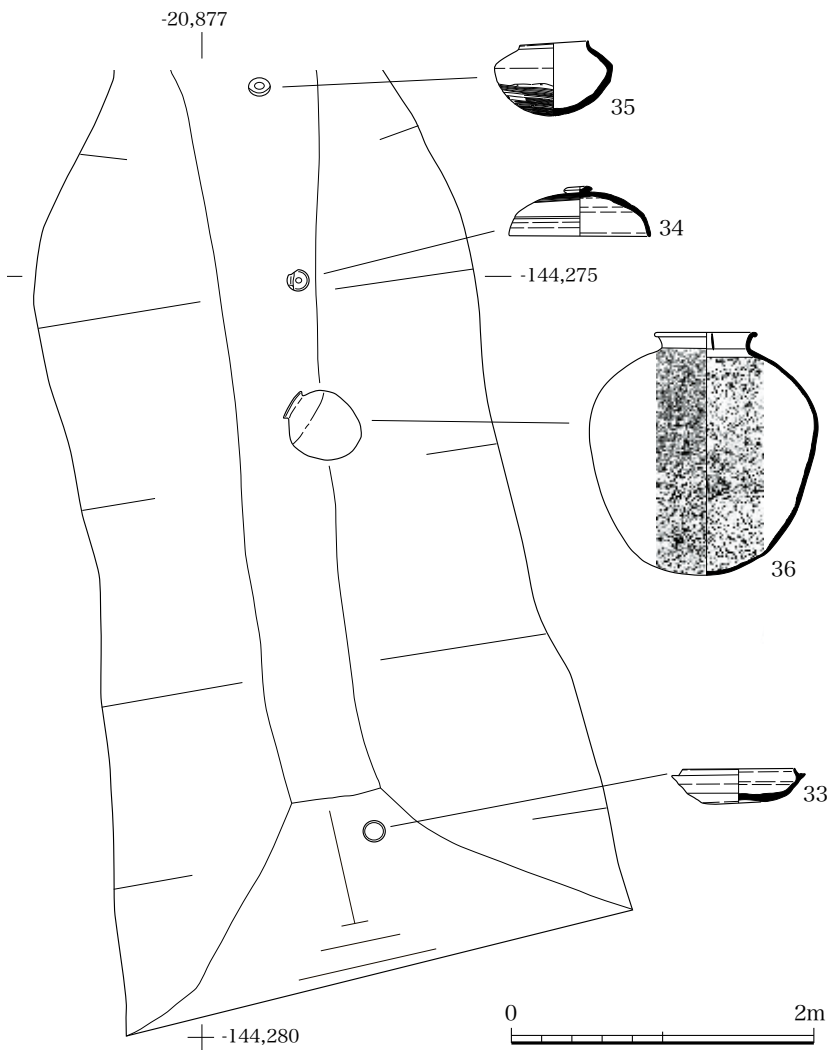


図55 赤田3号墓 墓道土器出土状態 (1/50)

追葬に伴うもの、後者は陶棺内に副葬されていたものであろう。陶棺を取り上げた後、床面の整地土を掘り下げたところ、4層上面で2点の鉄鎌片(6)が出土した。これらは形状から同一個体と考えられる。この層の上面では玄室ほぼ全域にわたって赤色顔料の広がりが見られた(図53)。埋葬の痕跡はなかったが、埋葬に先立ち何らかの祭祀が行われた可能性がある。

(2) 玄室・羨道土器出土状態 (図54)

本横穴墓群では、追葬の際に玄室内の棺・土器ともに動かされていることがわかる横穴墓がある。この他にも盗掘や天井・側壁の崩落による遺物の移動が想定され、どの程度元の位置を保っているのかは不明である。これは後述する各横穴墓にも共通する。

玄室西奥の6層上面で検出した一群の土器は出土状況からみて最終閉塞時の状態を保っていると思われる。この一群には土師器碗4点、須恵器有蓋高杯3点・有蓋高杯蓋3点・杯H身1点・杯H蓋1点・短頸壺2点・台

付長頸壺1点・甕1点がある。須恵器有蓋高杯3点、短頸壺2点、甕は立てられた状態であった。有蓋高杯蓋はいずれも逆位で出土している。1号墓でも同様に逆位の状態出土している。1号墓では高杯が出土しておらず碗として使われた可能性が考えられている。土師器碗(図70-2)は逆位で蓋(15)の中に入っていた。土師器碗(3)、須恵器有蓋高杯蓋(14・16)、杯H蓋(9)も逆位で重なった状態で出土した。この一群からやや東に離れた位置に土師器碗1点(6)、南に土師器碗2点(4・15)、須恵器短頸壺2点(22・30)がある。東の土師器碗は正位で、南の土師器碗2点は逆位であった。

陶棺南側の須恵器短頸壺(23)が正位の状態、杯H身(11)は逆位の状態出土した。出土状態から原位置を保っているとみられる。

この他、玄室中央部から出土した須恵器杯H蓋(10)は陶棺片の下から出土したものである。無蓋高杯(17)・有蓋高杯(21)は杯H蓋(10)を含めて出土位置や器種、層位等を勘察して陶棺に、玄室、羨道出土の長頸壺(26)、甕(31)杯H身(13)は追葬に伴うものと思わ

れる。

これらの土器はほぼ完形の状態、離れた位置で出土した破片が接合したというものはない。

羨門から穿たれた盗掘坑から14世紀後半～15世紀前半の土師器羽釜(図72-37)が出土している。

(3) 墓道土器出土状態 (図55)

羨道閉塞土11層上面で須恵器短頸壺(35)が出土した。墓道中央近くの第20層上面では羨門寄り須恵器甕(36)、5層上面から須恵器有蓋高杯蓋(34)、南端で杯H身(33)が出土した。有蓋高杯蓋は逆位、杯H身は正位であった。玄室からは有蓋高杯が4点出土したのに対し蓋は3点であり、玄室のものが動かされた可能性も考えられる。甕の体部下半には意図的に割られた部分が見られる。杯H・有蓋高杯蓋と甕は出土層位からみて前者が初葬、後者が追葬に伴うものと考えられる。

この他、29層から円筒埴輪片や8世紀の土馬片が出土した。
(池田裕英)

III. 出土遺物

1. 陶棺 (図56～図68)

土師質亀甲形陶棺で、棺蓋と棺身ともにほぼ二等分に切断して焼成し、再度組み合わせて使用する。欠損部分が

が多いものの概ね全体の形状を復原できた。また、1号墓及び8号墓から出土した棺蓋片の一部が接合し、1号墓出土陶棺と同様に他の横穴墓へ破片が持ち込まれていたことも判明した。

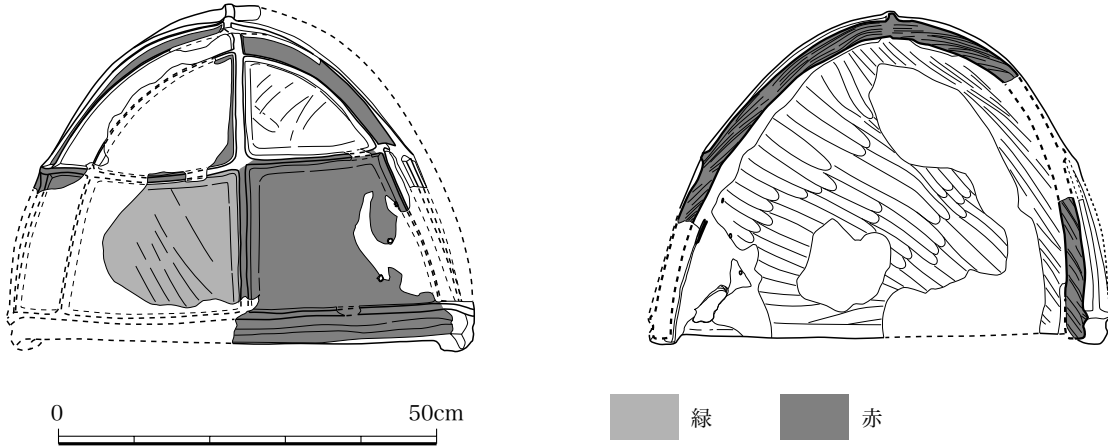


図56 赤田3号墓 陶棺蓋短側面立面図 (左:外面 右:内面 1/10)

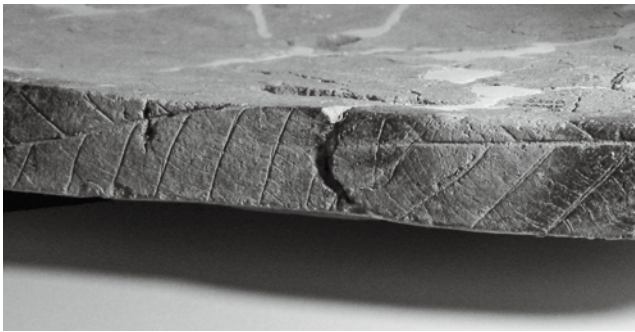


図57 赤田3号墓 陶棺蓋口縁部端面の葉脈状痕



図59 赤田3号墓 透孔周囲の不規則な小穿孔

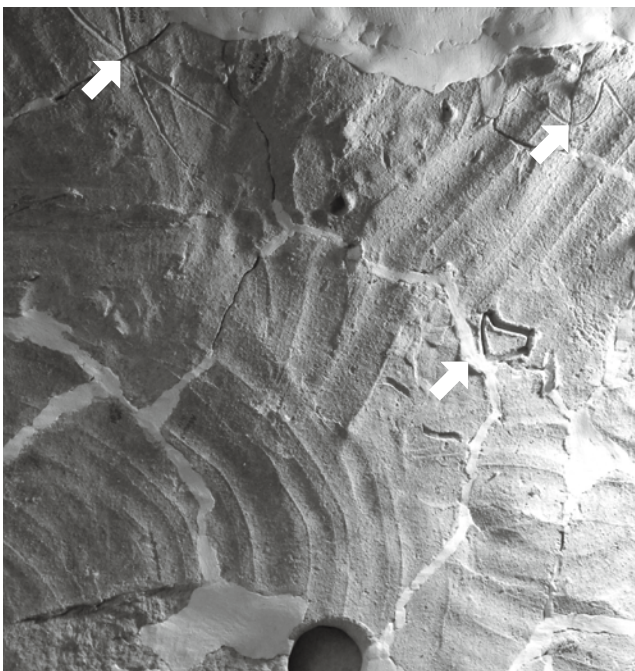


図58 赤田3号墓 陶棺蓋内面のへら描き痕跡(矢印)と円弧状指ナデ

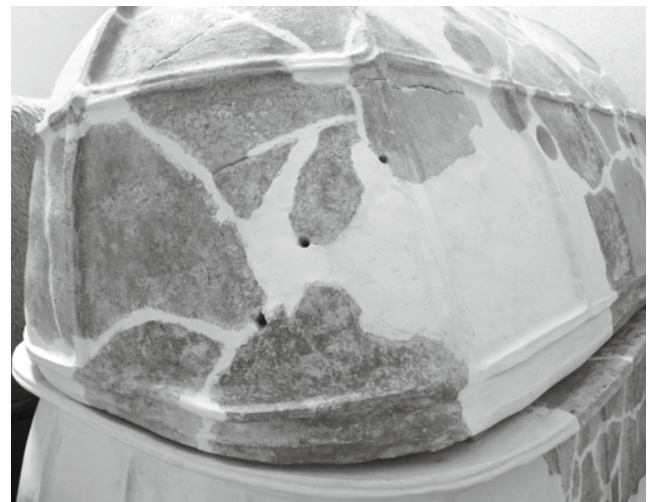


図60 赤田3号墓 短側面の不規則な小穿孔

棺蓋 全長は192cm前後と推定され、幅61cm・高さ45cmに復原できる。したがって、内法寸法は全長186cm前後で幅56cm・高さ42cmとなる。

稜線突帯と口縁部突帯を貼り付け、両突帯の中間に横位突帯を1条めぐらせて外面全体を上下2段に区画す

る。そして11条の長側面縦位突帯を貼り付け、長側面に左右10列の区画をつくる。一方、短側面には縦位突帯を貼り付けず、上下左右2区画ずつである。突帯の貼り付けは横先縦後で、突帯形状は幅1cm前後で細い。稜線突帯が他の突帯よりも高く突出する。

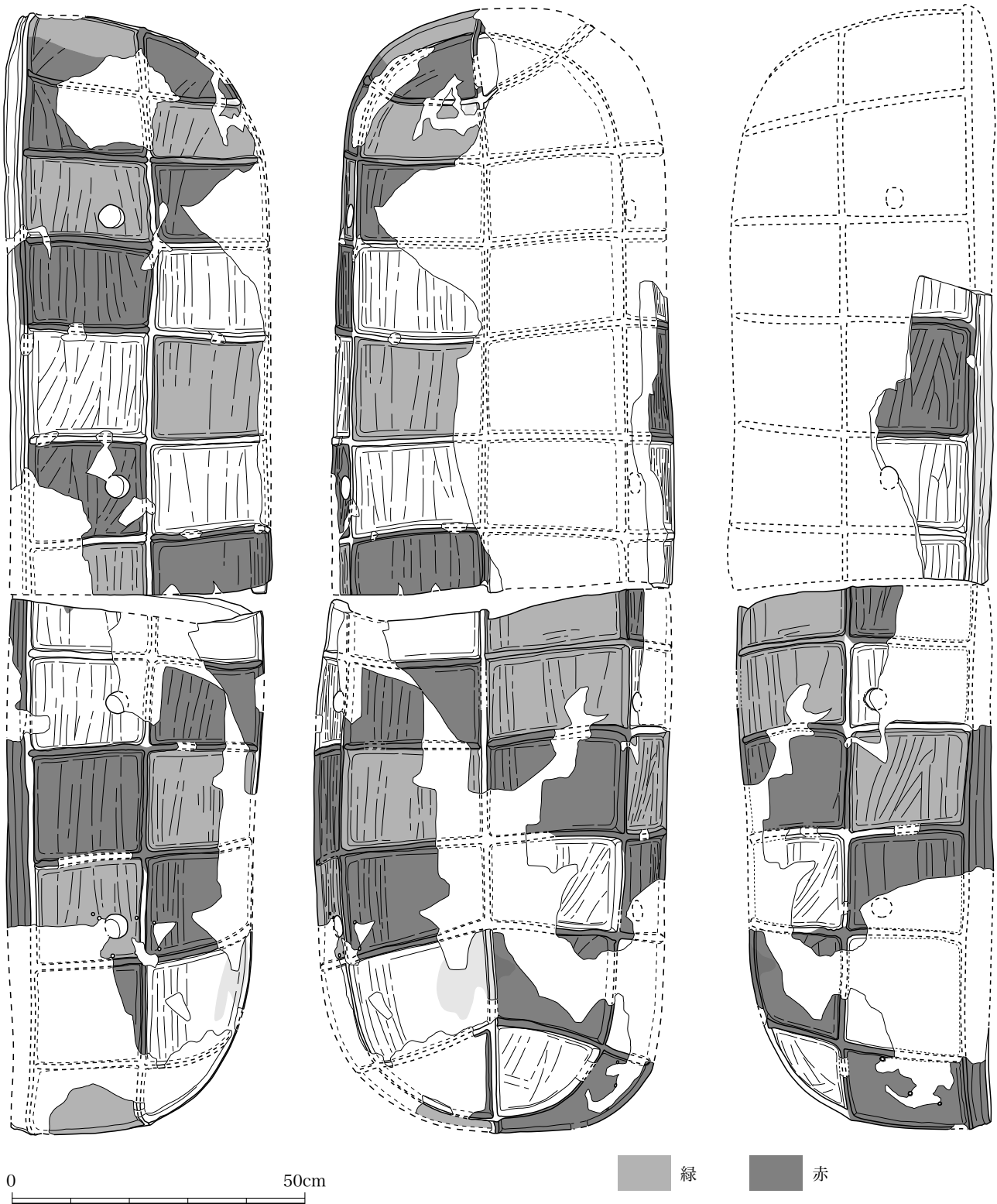


図61 赤田3号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10)

断面形状は半円形である。左右の長側面に4つずつ合計8つの円形透孔を下段にあけると推定できる。透孔は1区画おきに穿孔するのを原則とするが、区画数の都合で最後だけ2区画おきの配置となる。また、片側の短側面付近で小孔を不規則に穿つところが2箇所認められ

る。1箇所(図59)は透孔周囲の上下2区画にわたって7孔を穿ち、もう1箇所(図60)は短側面右下の区画内に3孔を穿っている。

外面には、区画ごとに彩色と無彩色が認められる。彩色には赤色と緑色がある。1つの区画内に赤緑2色を塗

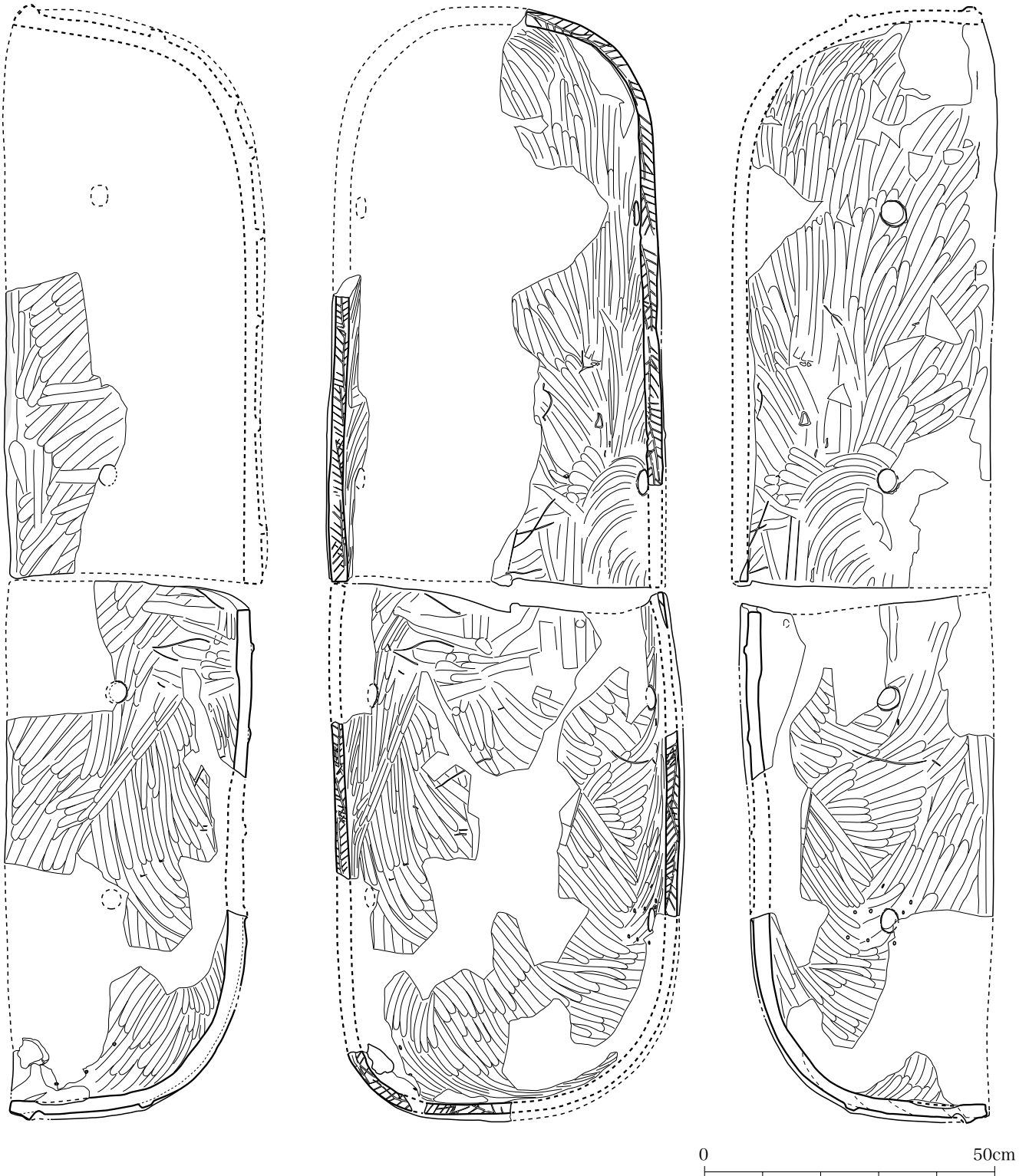


図62 赤田3号墓 陶棺蓋内面平面・立面図 (1/10)

る箇所もある。赤緑2色と無彩色を概ね千鳥式に配しているように見えるが、配色が不規則となる箇所も多い。切断面を境に同じ区画でも色が異なる点、切断面に赤色を塗布する点からみて、切断後に片側ずつ彩色されたことがわかる。内面には彩色が認められない。なお、口縁

部端面に沿って黒斑がみられる。

調整は内外面ともに指ナデを基調とする。天井部が小さく鍵形に切断されており、切断面に糸切り痕跡が認められる。

口縁部端面には広葉樹の葉脈が重なる圧痕(図57)

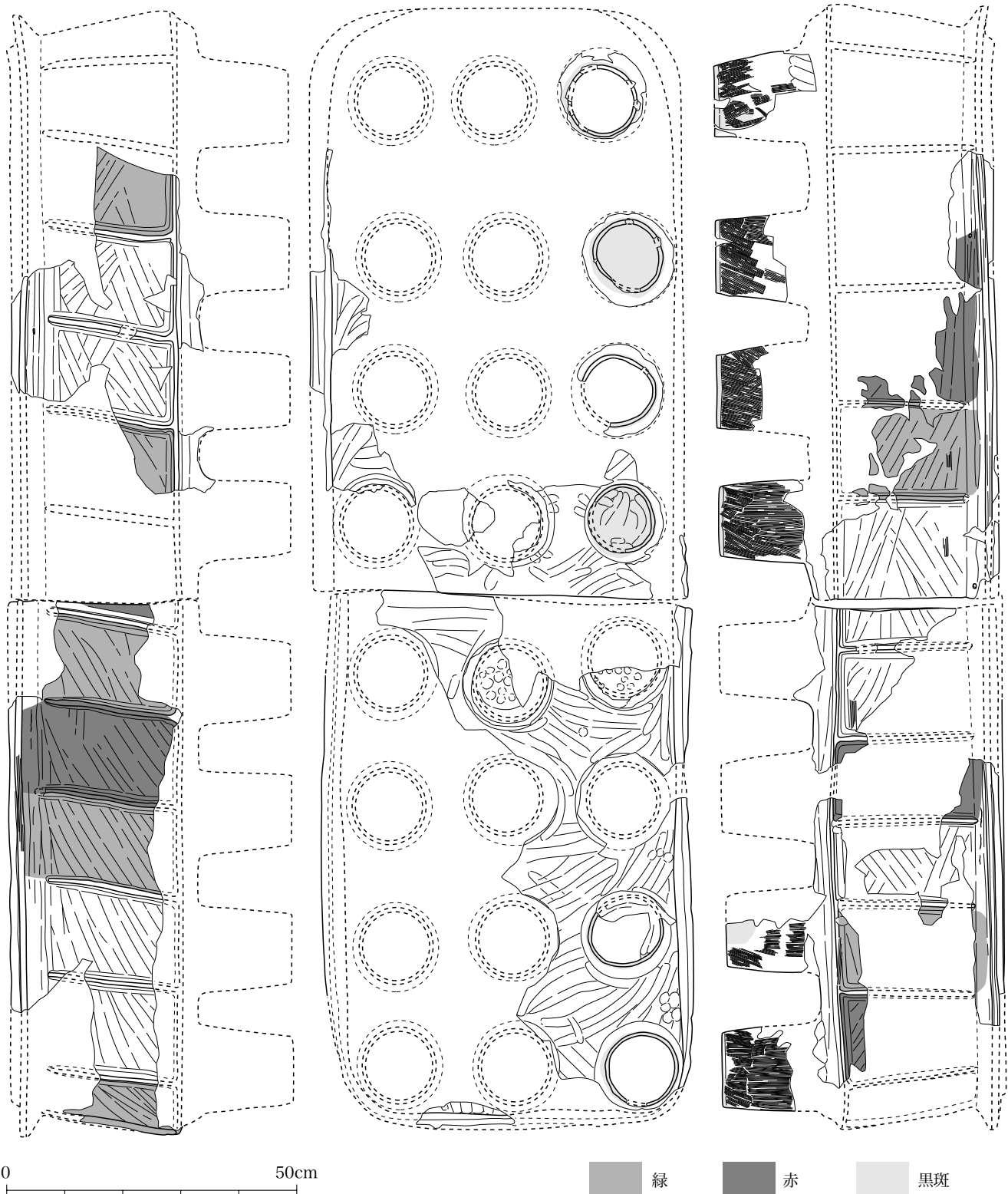


図63 赤田3号墓 陶棺身外面平面・立面図(1/10)

が一面に残り、木葉を敷いた作業台上で蓋をつくったことがわかる。高さ6cmの粘土帯を何枚か接いで口縁部をつくり、その上に粘土紐を積み上げて成形する。最終の閉塞箇所は明確でないものの、内面片側の長側面中央に円弧を描くような指ナデが認められるので、このあたり

が閉塞箇所となる可能性が高い。

内面には、明瞭な蔓縄状圧痕は認められない。内面中央付近に「×」「♡」「Ω」のようなへら描き状の痕跡がある(図57)。

棺身 全長は194cm前後と推定され、幅65cm・高

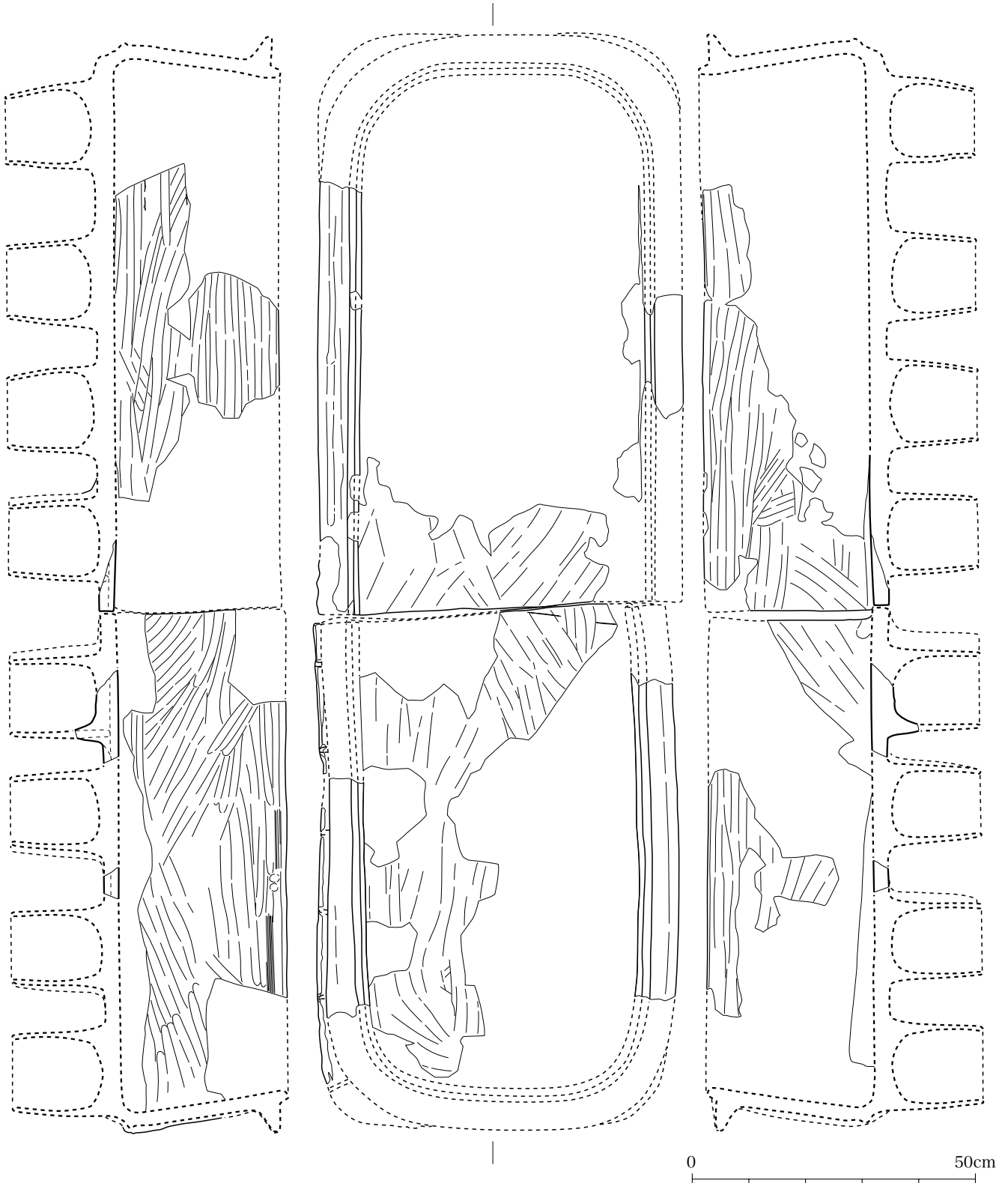


図64 赤田3号墓 陶棺身内面平面・立面図(1/10)

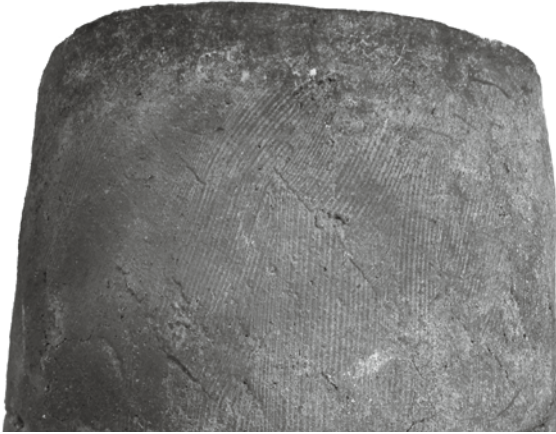


図65 赤田3号墓 脚底部の外表面調整 (天地逆)

さ49cmに復原できる。したがって、内法寸法は全長179cm前後で、幅51cm・高さ30cmとなる。

底部外面に沿って周底突帯をめぐらせ、片側の長側面に12条、短側面に2条の縦位突帯を貼り付けて長側面に左右11区画、短側面に左右3区画をつくと推定できる。突帯形状は幅1cm前後で細い。

体部は隅丸方形の箱形で、器壁は直立もしくはやや内傾している。蓋受けは、粘土帯を口縁端部から下2cmの位置に貼り付け、その下部に補充粘土を加えてヨコナデ調整し仕上げる(図66)。口縁部の高さは2cm、蓋受け上面の幅5cm、厚さ1cmである。底部から口縁部の調整

は内外面ともに指ナデを基調とする。切断面には糸切り痕跡が認められる。

外面には、区画ごとに彩色と無彩色が認められる。彩色には赤色と緑色がある。赤緑2色と無彩色を交互に配するようにもみえるが、



図66 赤田3号墓 棺身蓋受けの断面

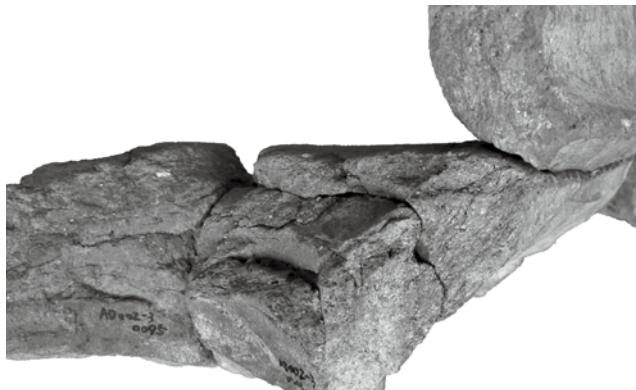


図67 赤田3号墓 底部と脚の接合状態

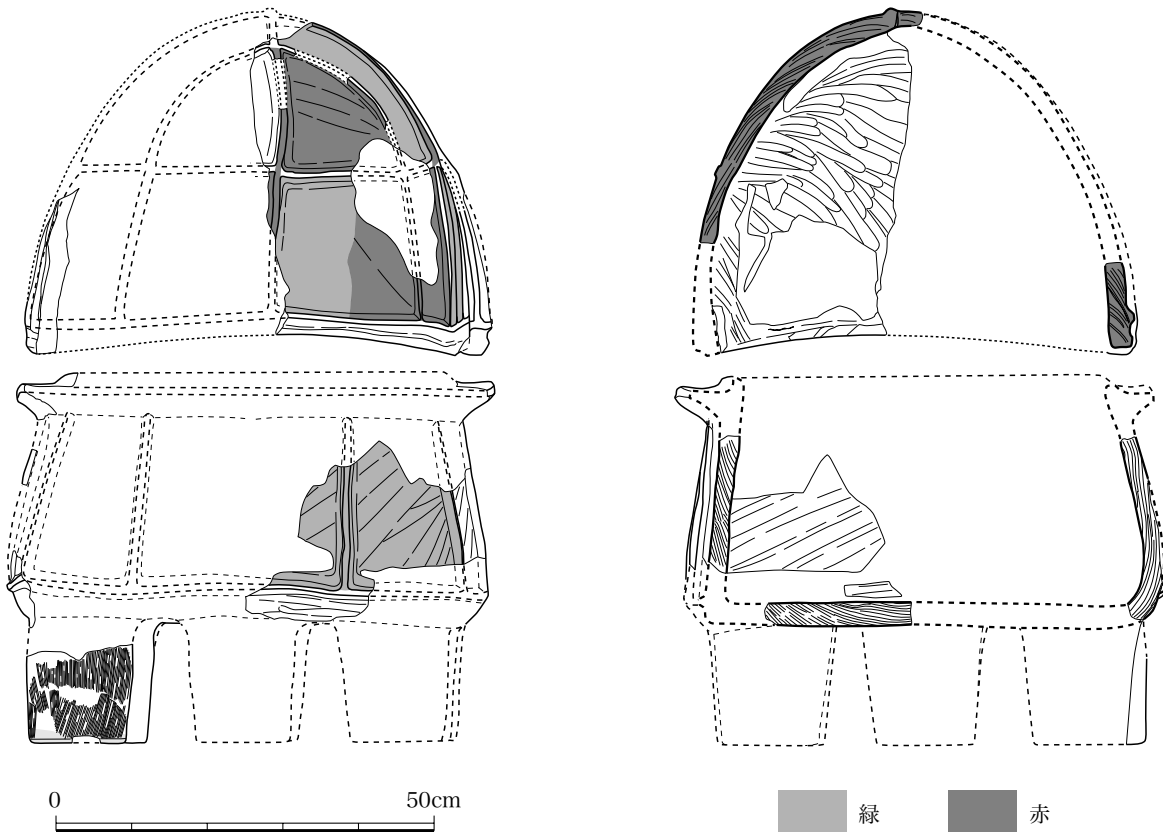


図68 赤田3号墓 陶棺蓋・身内外面立面図 (1/10)

配色順はあまり規則的ではない。内面には彩色が認められない。

脚部には8行3列、合計24本の脚が取り付く。脚に透孔は認められない。調整は、外面タテハケ、内面タテ方向の指ナデである。脚端部はヨコナデ調整されており、外面タテハケの方向が上から下へと進んでいる（図65）ため、脚は成形後に倒立して配置されたことがわかる。

脚を倒立する前に底部内面へ粘土を充填して周囲をヨコナデ調整し、底部外面にも幅3cmほどの粘土紐を貼り付けて底部の土台をつくる（第1次底部成形）。これが底部製作時の最小単位となる。次にこれを3つ並べて接合し、底部製作の接合単位を製作する（第2次底部成形）。これが脚部1行に相当する。この接合単位を長軸方向に8行分接合して底部の外形ができあがる。この外周に沿って土堤状の粘土を積んだ後、最後に厚さ1cm前後の粘土をその上面に貼り付けて（図67）底部内面を平滑に仕上げる（第3次底部成形）。

次に底部内面の外周に沿って高さ6cm前後の粘土帯を積み上げて体部を成形し、蓋受けを接合した後に突帯を貼り付けて完成する。高さは、脚部が16cm、底部から口縁部が33cmである。脚底部に黒斑がつく。

2. 金属器（図69）

耳環（1） 銅芯に金銀の合金板を巻く耳環である。開口部の接面には板のたたみ込みが認められる。板の一部が破損し、銅芯が露出する箇所がある。平面はやや横長の楕円形で、外径3.12cm×2.765cm、内径1.765cm×1.488cm。断面はほぼ円形で、厚さ0.73cm×0.86cm。

鉄鎌（2～5） 長頸鎌が2点（2・3）、腸袂三角形鎌が2点（4・5）ある。2は茎部先端を欠失し、残存長13.0cmである。鎌身部は長三角形片丸造で角関につくる。頸部は長さ7.9cmで、茎部との境は棘状関となっている。茎部には木質と樹皮の被覆が一部に残る。3は鎌身部先端と頸部の一部が残るものを同一個体と考えて図示した。鎌身部は柳葉形片丸造と

推定され、残存長1.2cmである。頸部は残存長3.2cm。4は鎌身部の逆刺と茎部の一部を欠失し、残存長7.2cmである。鎌身部は長さ3.9cm以上の長三角形両丸造。頸部は長さ3.3cmで、茎部の境に棘状関をつくる。5は茎部先端を欠失し、残存長12.1cmである。鎌身部は長さ6.6cmの長三角形両丸造。頸部は長さ2.7cmで、茎部の境に棘状関をつくる。茎部には木質と樹皮の被覆が一部に残る。

鉄鎌（6） 2片を同一個体と判断し、曲刃鎌1点として図示した。全長は不明ながら18cm前後と思われる。刃部の幅2.65cm、厚さ0.35cm。刃部と反対側の短辺を折り返して着柄部をつくる。着柄部に沿って、幅3.2cmの木質が付着する。（鐘方正樹）

3. 土器

（1）玄室出土土器（図70）

玄室から出土した土器には土師器碗・甕、須恵器杯H蓋・杯H身・無蓋高杯・有蓋高杯蓋・有蓋高杯身・短頸壺・台付長頸壺・長頸壺・甕がある。

土師器碗（1～7）は形態・調整等から二種に分けることができ、4が黄白色で口縁部を内湾させ、口縁部外面をハケにより調整するもので、これ以外は赤褐色を呈し、外面に指頭圧痕がみられ、口縁部をヨコナデするものである。後者は口径10cm程度の一群（1・2）と

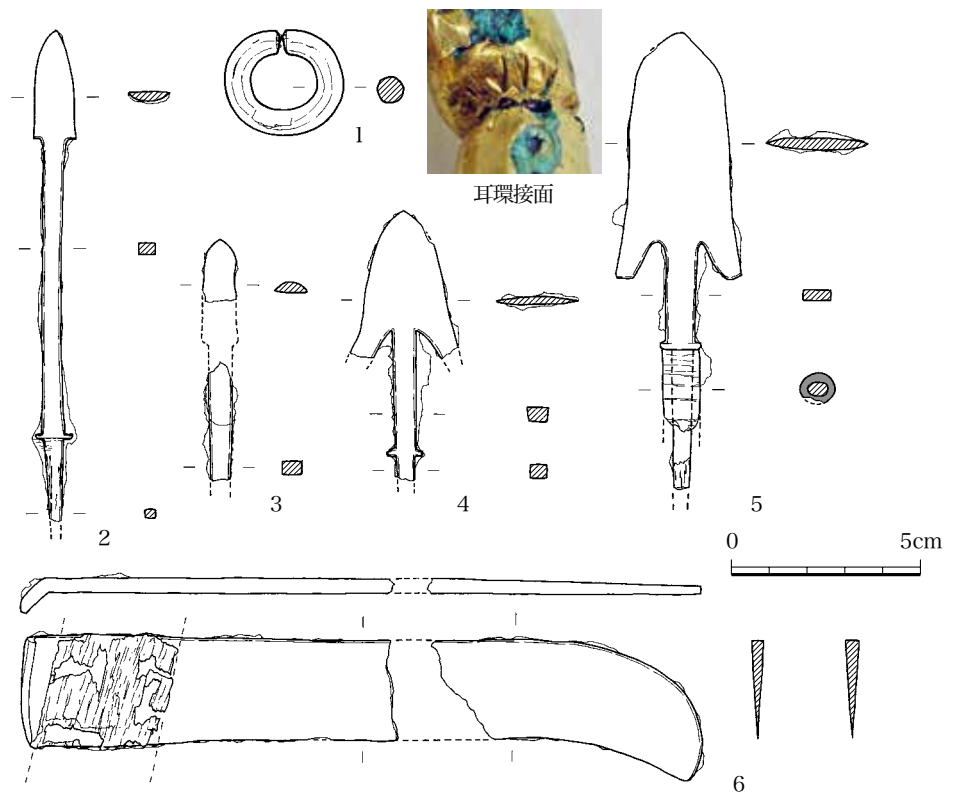


図69 赤田3号墓 玄室出土耳環・金属器（1/2）

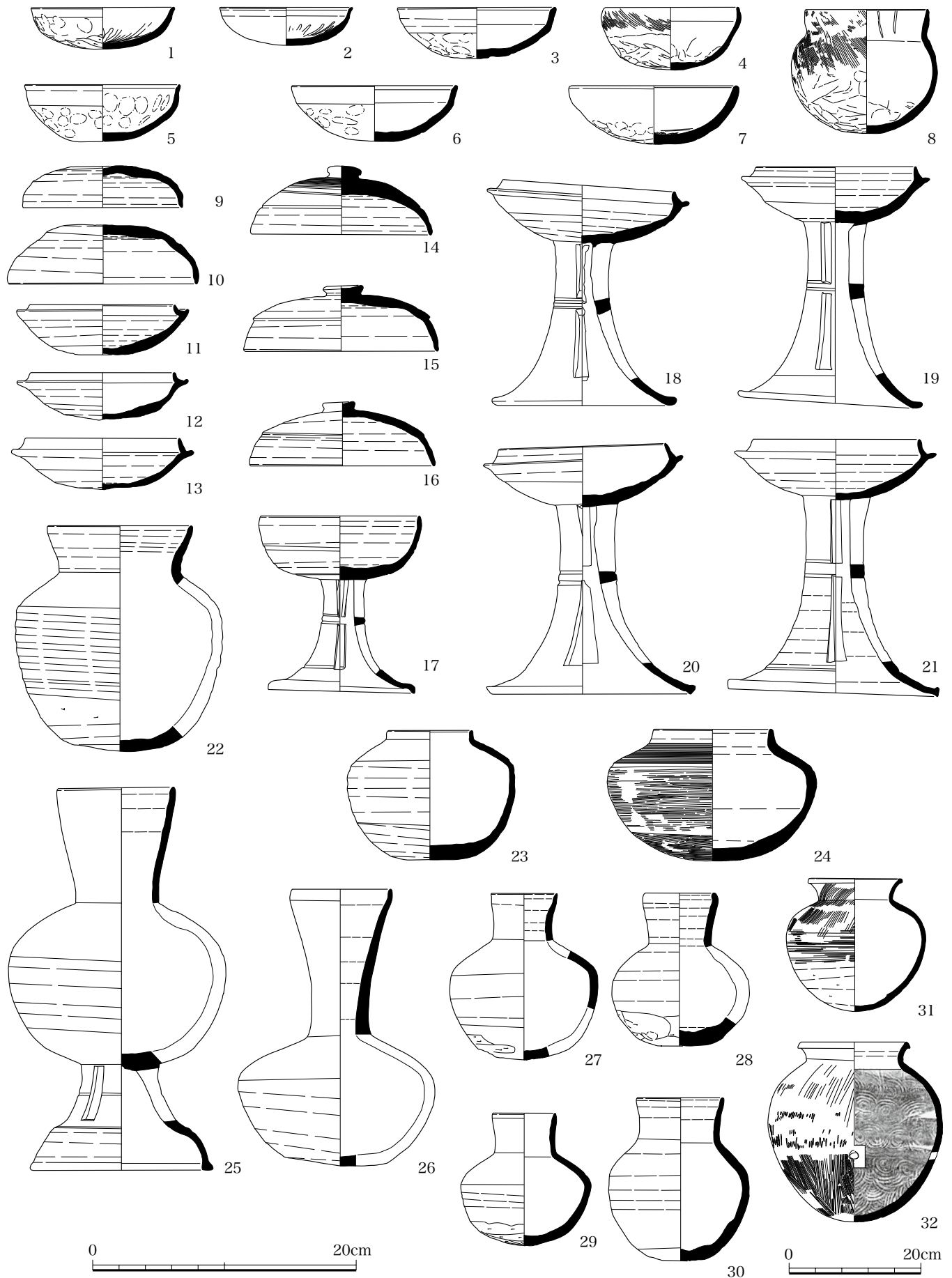


図70 赤田3号墓 玄室出土土器 (1/4、31・32は1/8)

12cm程度の一群(3・5~7)とがあり、形態も口縁端部内面側を窪ませるものと丸くおさめるものとがある。1・2には内面に粗い1段の斜放射暗文を施している。7は底部内面をハケメにより調整し、内面全体に赤色顔料を塗布している。甕(8)の調整は体部下半がへラケズリ、上半がハケメである。口縁部はやや内湾させる。

須恵器杯H蓋(9・10)はいずれも頂部外面をロクロケズリにより調整する。杯H身の底部外面の調整は11がへラ切り後ロクロナデ、12・13がロクロケズリである。有蓋高杯蓋は14が頂部外面をカキメにより、15・16がロクロケズリにより調整している。この違いは頂部のつまみの形にもみられ、14はつまみ頂部を丸く仕上げるが、15・16はつまみ頂部を窪ませている。14は赤褐色を呈し、他のものとは異なる焼き上が

りで、焼成や色調が類似している高杯(19)とセットであったと思われる。有蓋高杯(18~21)は19が3方透かしである以外は2方透かしである。無蓋高杯(17)は2方透かしである。短頸壺は頸部が短いもの(22~24)と頸部が体部の約1/2程度のもの(27~30)とがある。23はロクロケズリとロクロナデにより、24は外面をカキメにより調整する。カキメを施さない23は14・19と焼成・色調が類似している。やや頸部が長い形態のもの(27~30)は底部外面中央部がへラ切り後未調整でその周囲を手持ちによるへラケズリにより調整している。長頸壺には台付のもの(25)と無台のもの(26)とがある。台付長頸壺は体部が丸味を帯び、台部に2方の透かしがある。頸部と体部の割合はほぼ1:1である。無台ものは若干肩部が張る形態で、底部外面をロクロケズリした後ロクロナデにより調整している。甕(31)は外面下半がロクロケズリ、中位がカキメ、上半がタタキにより調整され、内面の当て具痕跡はロクロナデにより消されている。32は外面が体部下半がタタキ、上半がタタキの後ロクロナデで、内面には同心円の当て具痕が残る。体部ほぼ中央に径1cmの焼成後に意図的に穿孔した小孔がみられる。

これらの玄室から出土した土器は出土した位置、伴う棺は異なるものがあるが、いずれも田辺編年のTK43型式にあたり、6世紀後半のものと考えられる。

(2) 墓道出土土器(図71)

墓道出土土器には須恵器杯H身(33)・有蓋高杯蓋(34)・短頸壺(35)・甕(36)がある。杯H身は底部外面下半1/2をロクロケズリする。有蓋高杯蓋は頂部外面約1/2をロクロケズリする。つまみは縁部上面をやや丸く仕上げ、中央部を窪ませる。玄室内から有蓋高杯が4点出土し、その蓋が3点であったので、玄室から動かされたものの可能性がある。短頸壺は外面に灰緑色の自然釉がかかる。羨門閉塞土からの出土である。甕は外面が格子目タタキで、内面に同心円の当て具の痕跡がある。口縁部内面に「|」の線刻がある。

この他、8世紀頃の土馬の頭部小片が出土している。

墓道から出土した土器は玄室から出土した土器と同時期のものとみてよからう。

(3) 盗掘坑出土土器(図72)

37は羨門に穿たれた盗掘坑埋土から出土した土師器羽釜片である。口縁端部を内側に折り曲げる大和H型(菅原1983)である。調整は内外面ともヨコナデである。14世紀後半~15世紀前半のもので、盗掘の時期を示していると思われる。(池田裕英)

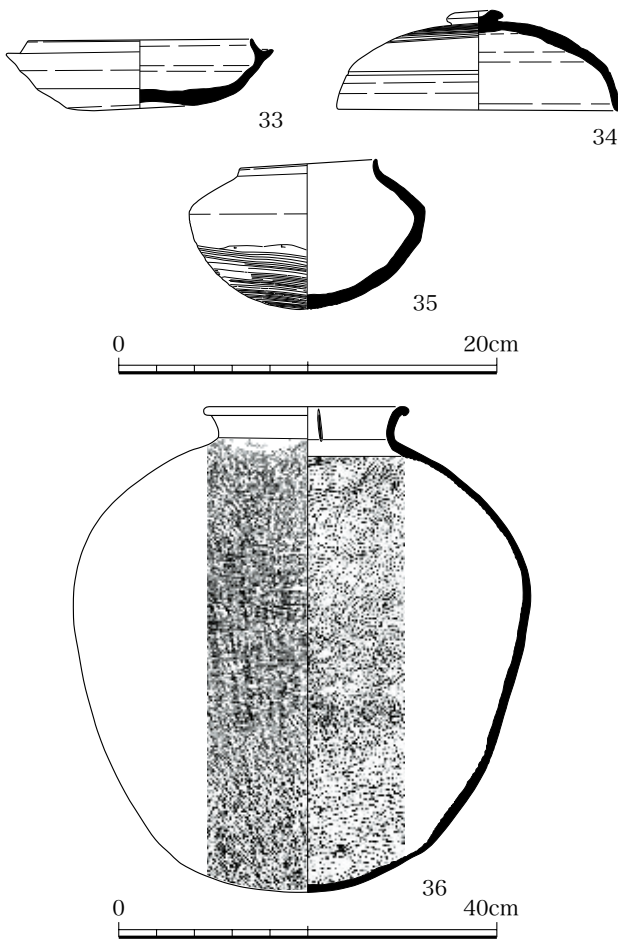


図71 赤田3号墓 墓道出土土器(1/4、36は1/8)



図72 赤田3号墓 盗掘坑出土土器(1/4)

第8節 赤田4号墓

全長は13.3 m以上で、墓道南端は発掘区外南に続く。玄室の主軸はN-6°-Wである。羨門の土層観察から、閉塞が3度行われたことがわかる。玄室内には土師質亀甲形陶棺1基と木棺2基が埋葬されていた。木棺は残存しなかったが、棺台の石が残存していた。玄室内は後世の盗掘を受けている。

1. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図73)

玄室・羨道及び墓道は黄色の砂礫層の地山(基本層序: VII-4層)を掘削して造られ、その埋土は、埋葬に関連する土層とその他の土層に大別できる。

(1) 埋葬に関連する土層

層序と層の様相から、下記の3層(A~C層)が識別できる。

A層(1~6層) 玄室・羨道及び羨門の3 m南までの墓道において、初葬時に形成された床面の整地土層。

主に黄色のシルト質砂や砂質シルト粘土の厚さ0.1 mほどの層が積み重なり、硬くしまる。厚さ0.1~0.4 mで、玄室の奥壁側から墓道側に向かって薄くなる。上面は玄室の奥壁側から墓道側に向かって緩やかに下り、奥壁近くで陶棺と副葬品の土器等が出土した。羨門には、閉塞用の板を差し込んだ長さ1.0 m、幅・深さ0.1 mの掘り込みがみられる。

B層(7~12層) 玄室・羨道及び墓道において、A層上に形成された追葬時の床面の整地土層。

主に黄色のシルト質砂の厚さ0.1~0.3 mの層が積み重なる。本来は閉塞土とみられ、2度の追葬に対応する下記の2つのまとまりが識別できる。

① 最初の追葬に伴うもの: 7~9層

② 2度目の追葬に伴うもの: 10~12層

①は玄室・羨道及び墓道でみられる。8・9層の上面は一連で平滑。7層は閉塞用の板を差し込んだ掘り込みの埋土。8層は陶棺の下にも広がることから、流入土を均したものとみる。②は羨道及び墓道で①の上面に形成される。上面は一連で平滑。羨道付近の10層は小高い高まりで、最初の追葬に伴う閉塞土層の名残とみる。玄室内の8層上面で木棺2基分の棺台の石を検出し、木棺に伴う鉄釘と6世紀後半の須恵器高杯等の副葬品が出土した。また、墓道内の9・12層上面で6世紀後半の須恵器甕片等が出土した。

C層(13~18層) 羨道から羨門の2.8 m南までの墓道にかけてのB層上面に形成された、最終埋葬時の

羨門の閉塞土層。

主に黄色のシルト質砂層からなり、各層がほぼ水平に積み上がる。墓道側の斜面が緩やかなのに対し、羨道側は急である。高さは0.8 mで、羨門付近で最も高くなるが、天井部には達しない。出土遺物はない。

(2) その他の土層

a. 墓道 層序と層の様相から、下記の3層(D~F層)が識別できる。

D層(19層) 前述したB層の上面から墓道の両側面に沿って形成された埋土層。

明黄褐色のシルト質砂層からなり、断面観察箇所での厚さは0.4 m。層位的には前述したC層と対応する。出土遺物はない。

E層(20~23層) 前述したD層の形成後に生じた墓道中央部の窪みにおいて、盗掘前までに形成された埋土層。

厚さは0.6 m前後。下部(20~22層)は主に黄色や黄褐色のシルト質砂層で、出土遺物はない。上部の暗オリーブ褐色シルト質砂層(23層)は基本層序のV層に対応する埋没土壌。最下位で8世紀の土馬片が出土した。

F層(50~52層) 盗掘後に形成された埋土層。主に黄色や黄褐色のシルト質砂層で、出土遺物はない。52層は溝の埋土である。

b. 玄室・羨道 層序と層の様相から、下記の2層(G・H層)が識別できる。

G層(24~39層) 前述した最終埋葬に伴うC層の形成後から盗掘までに形成された埋土層。

厚さ0.3~1.6 mで、羨道寄りで厚く堆積する。玄室の玄門寄りと羨道でみられる24~29層は主に黄色のシルトを含む砂層で、層理は羨門側から玄室側に向かって低くなっていく。玄室内の27層上面で8世紀の須恵器壺Hが出土した。玄室の奥壁寄りで見られる30層は前述したE層の埋没土壌である23層の流入土層。31層は地山の破砕物を多く含む。奥壁近くに盗掘時の陶棺の破壊で生じた窪みがあり、その内部に陶棺片が残る。これらを覆う32~39層は主に黄色のシルト質砂層で、羨道側が厚く、層理は羨門側から玄室側に向かって低くなる。

H層(断面図40~49層) 盗掘後に前述したG層上に形成された埋土層。

厚さは2.8 m以上。黄色や黄褐色のシルト質砂層・シルト質砂と砂の互層(40・41・43・45・48層)と、地山の破砕物を主とする層(42・44・46・47・49層)

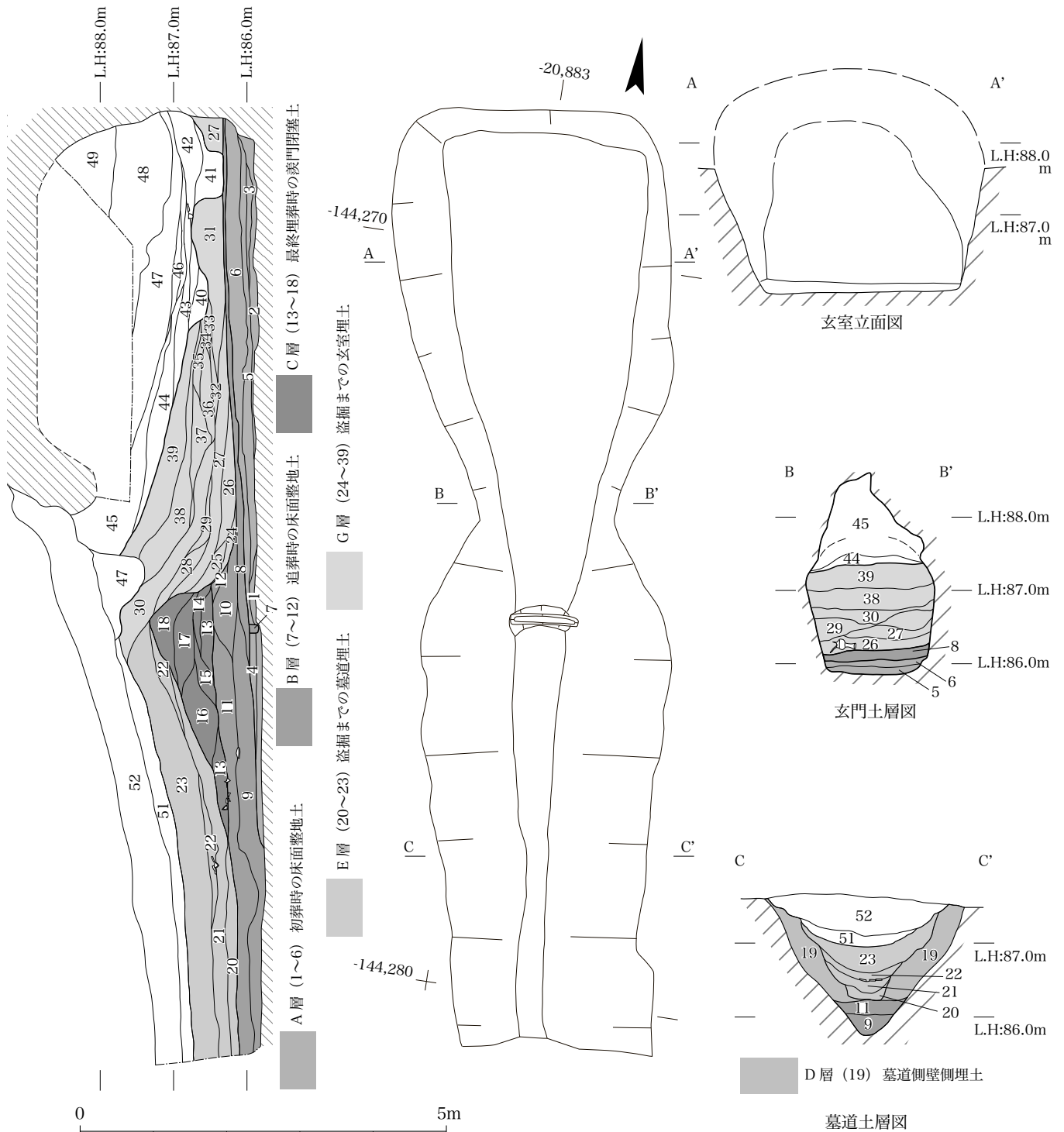


図73 赤田4号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)

とが交互に堆積する。下部の層に比べ、上部の層の方が厚い。掘り下げ作業時に14世紀後半～15世紀前半の土師器羽釜・瓦質土器蓋の破片が出土した。

c. 層の成因 地山の破砕物を主とする層は、天井部や側壁の崩・剥落物が堆積したと考える。黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のIV層と様相が似ていることから、丘陵斜面の崩落土及び羨門付近からの

流入土と考える。 (安井宣也)

2. 横穴墓の規模と形態 (図73)

玄室 長さ5.3m、奥壁幅2.8mで、玄門に向かって狭まる羽子板形の平面形態である。西側壁はやや丸みをおびた弓形になっているが、東側壁は直線的な平面形である。側壁は上方に向かって広がっていく逆台形の断面形状である。奥壁の残存状況や天井部除去時の観察

A層	D層	37 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト質砂・2.5Y8/2 (灰白) 砂の薄層の互層
1 2.5Y7/3 (浅黄) 礫混じり砂	19 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂	38 2.5Y5/4 (黄褐) シルト質砂・地山の破砕物の薄層の互層
2 2.5Y6/3 (にぶい黄) 礫混じり砂	E層	39 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂
3 地山の破砕物	20 2.5Y5/4 (黄褐) シルト質砂	H層
4 2.5Y7/2 (灰黄) 砂質シルト・粘土	21 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	40 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
5 2.5Y6/6 (明黄褐) 砂質シルト・粘土	22 2.5Y4/4 (オリーブ褐) シルト質砂	41 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
6 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂	23 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) シルト質砂	42 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂礫
B層	G層	43 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・2.5Y8/2 (灰白) 砂の薄層の互層
7 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	24 2.5Y5/4 (黄褐) シルト質砂	44 地山の破砕物
8 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂礫	25 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂	45 2.5Y6/6 (明黄褐) 砂質シルト
9 10YR7/6 (明黄褐) シルト・粘土ブロックを含む2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	26 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂	46 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂礫
10 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂	27 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂礫	47 地山の破砕物
11 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土質砂	28 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	48 10Y6/6 (明黄褐) シルト質砂・2.5Y7/4 (浅黄) 砂の薄層の互層
12 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土ブロックを含む2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	29 2.5Y7/3 (浅黄) 砂・シルトの薄層の互層	49 地山の破砕物
C層	30 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) シルト質砂 (23層の再堆積)	F層
13 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂	31 地山の破砕物+ 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	50 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂
14 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	32 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂礫	51 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
15 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト質砂	33 2.5Y8/3 (浅黄) シルト混じり砂	52 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂
16 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫	34 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂	
17 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	35 2.5Y8/2 (灰白) 砂	
18 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	36 地山の破砕物	

赤田4号墓 堆積土層名

から、玄室の高さは約2.5mのドーム形に復元できる。床面の地山上面は北から南に緩やかに下る。奥壁での地山上面の標高は85.9m、玄門付近では85.8mである。

羨道 羨道は長さ約1.3mに復元でき、幅は0.7mで、床面から上方に向かって若干広がる。高さは、上部が盗掘坑により壊されているが、側壁の残存状況から1.8m程度と推測できる。床面第4層上面で玄室を閉塞するために用いたと考えられる板の痕跡を検出した。

墓道 長さ7.0m以上で、底部幅が0.6～0.9m、上面幅が2.9～3.1mである。断面の形状は逆台形である。床面の地山上面はほぼ水平である。埋土20～23層の側壁形状から追葬の際に墓道の埋土を幅2m程度掘り返して通路としたようである。墓道南端の標高は85.8mである。

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図74)

玄室では陶棺1基と木棺2基の計3基の棺があった。陶棺は盗掘のため大部分が破壊されていたが、6層上面で埋葬時の位置をとどめる脚を1本検出した。また、陶棺が置かれた部分とその周囲とで埋土に違いがみられ、陶棺は奥壁に沿って東西方向に置かれていたことがわかる。遺存していた脚は東南隅のものである。破壊された陶棺片も陶棺の痕跡が残る付近で集中して出土した。陶棺の南西側からは副葬された土器が出土している。

木棺は8層上面で検出した。玄室の主軸に合わせて、陶棺に直交するように南北方向に東と西とに2基置かれ

ていた。棺は腐朽のため残存していないが、棺台に用いた石が遺存し、西木棺は南北両小口に2個ずつ計4個、東木棺は北側小口に1個、南側小口に2個の計3個があった。出土状況や副葬された土器の位置から、棺台の石は設置時の位置を保っていると考えられる。棺台の石の南北方向の間隔は西棺が1.8m、東棺が1.5mと若干異なる。西の棺台の周辺からは土器とともに鉄釘が出土している。鉄釘の形態から長側板と短側板とを結合したことが推定でき、棺の規模を長さ2.26m、幅1.04mに復元できる。東棺の周囲からは鉄釘は出土しておらず、釘を使わない棺であったようである。

2. 副葬品の配置

(1) 金属器出土状態 (図74)

西木棺の周囲から出土した鉄釘は、木棺が置かれていた時の位置を概ね保っているようである。鉄釘は残存していなかったが、錆が土にうつって赤褐色化し、鉄釘があったことがわかることもみられた。この他、耳環が南小口側に近い位置から1点、鉄鏃が棺中央部から2点出土した。

東木棺では南小口側に近い位置で鉄鏃が出土している。東木棺の周囲には鉄釘の痕跡はなく、釘を使わない組み合わせ式の棺であったとみられる。

玄門に近い位置からも土器(須恵器台付長頸壺)とともに鉄釘と鉄鏃とが各1点出土している。この位置での埋葬に伴うものというよりは、盗掘の際に動かされたものと考えておきたい。

(2) 玄室・玄門土器出土状態 (図74)

陶棺に伴う土器として棺の南から杯H身(図91-1)、西側から無蓋高杯(5)と台付長頸壺(8)が出土している。西木棺に伴う土器には東長側板傍に台付長頸壺(7)があるが、台部と頸部が欠損している。東木棺に伴う土器には南側棺台石の南に杯H(2)・有蓋高杯2

点(3・4)が東西に置かれていた。玄門から台付長頸壺(6)が出土している。

また、玄室中央やや東寄り、27層上面から8世紀の須恵器壺H(9)が出土した。8世紀に玄室内に人が入ったことがわかる。出土位置は東木棺のほぼ中心あたり、その頃には既に木棺が腐朽していたようである。

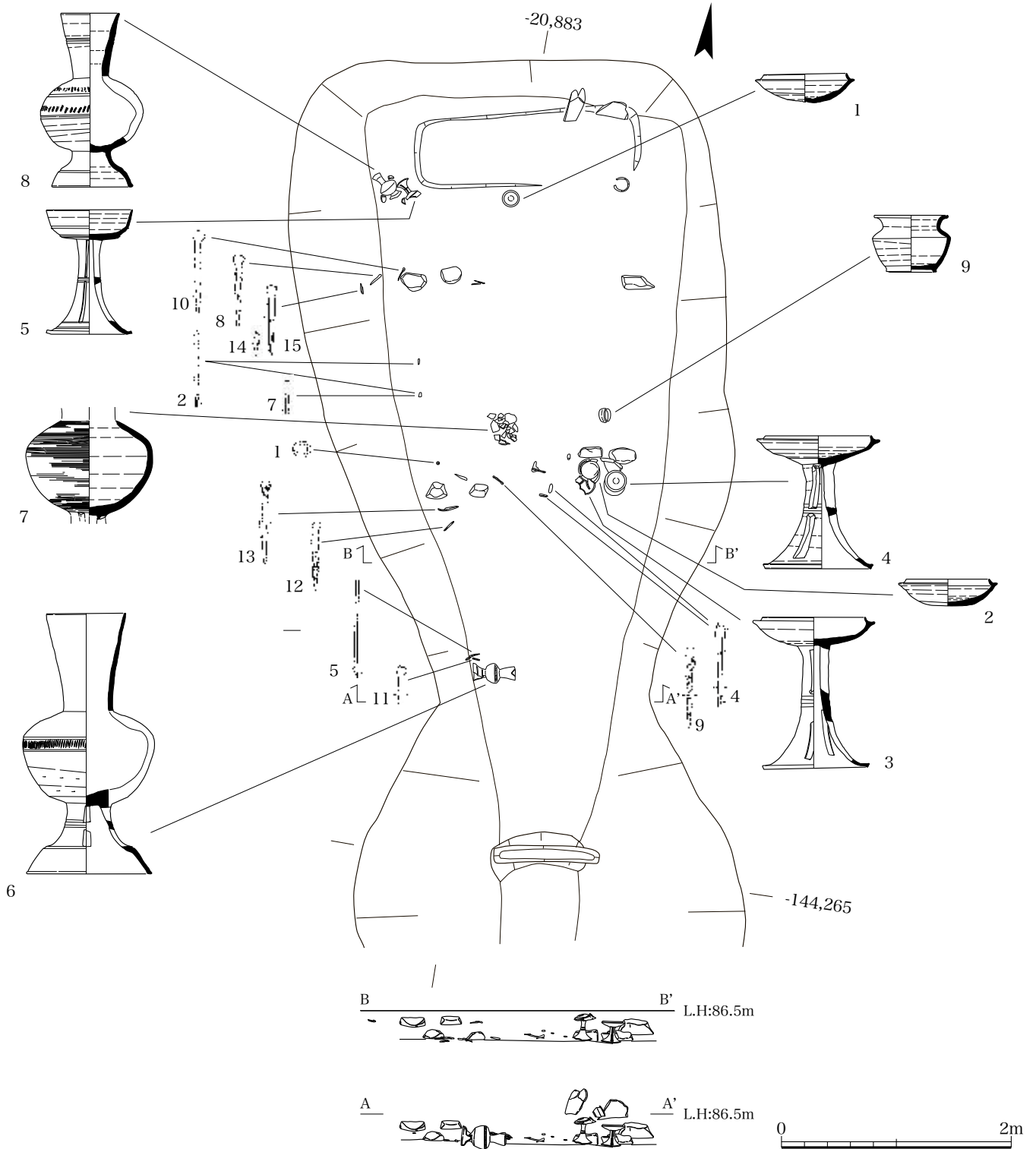


図74 赤田4号墓 玄室金属器・土器出土状態 (1/50)

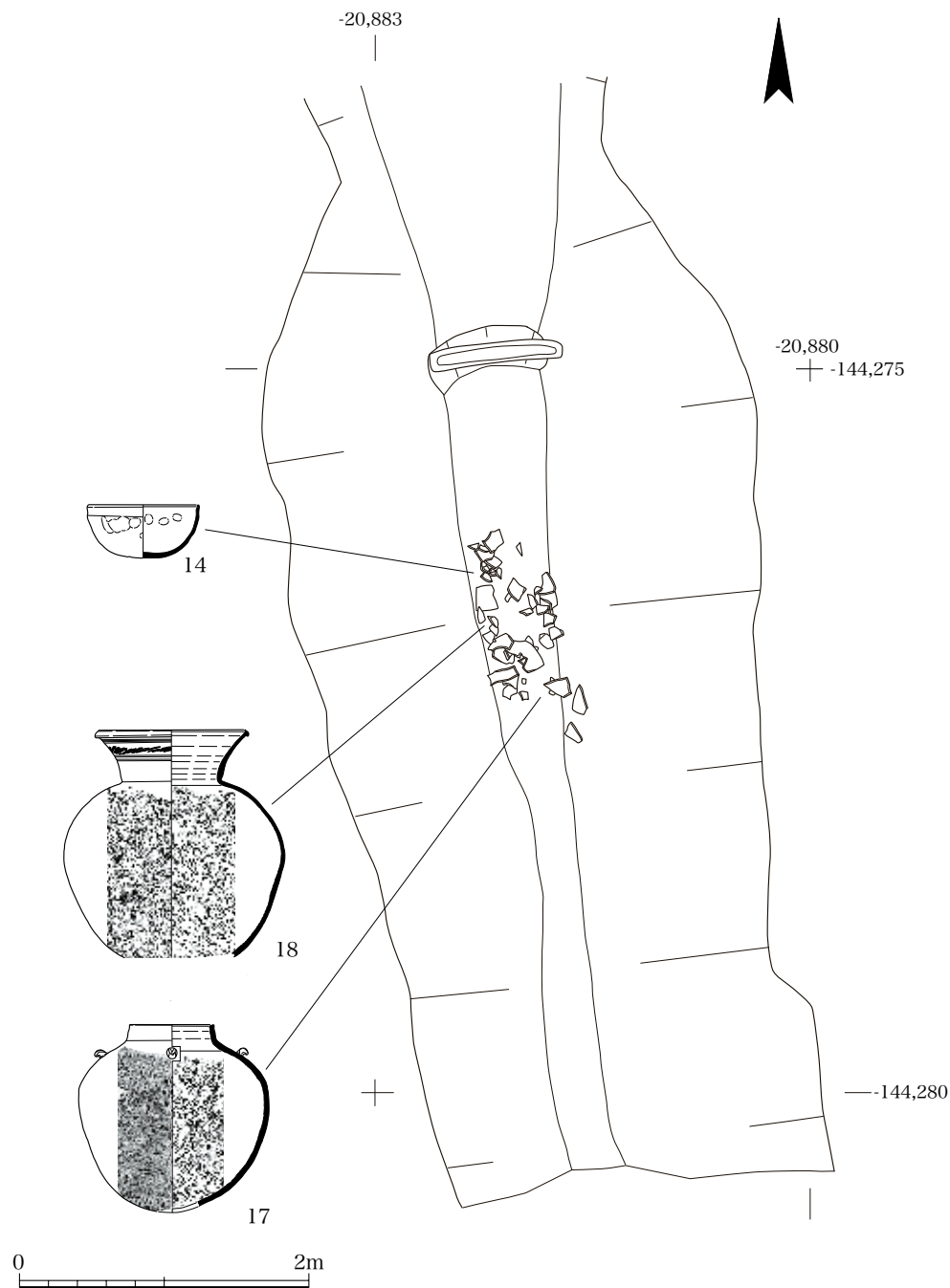


図75 赤田4号墓 墓道土器出土状態 (1/50)

(3) 墓道土器出土状態 (図75)

墓道のほぼ中央部から土師器碗 (図92-14)、須恵器甕 (17・18) が出土した。須恵器甕はいずれも破片の状態、複数の層から出土している。墓道が掘り返されたことを示していると思われる。大半の破片が墓道から出土しているが、両者とも同一個体が玄室奥にあった陶棺片に混じって出土している。

なお、51層及び玄室閉塞後の流入土層から形象・円筒埴輪片が出土している (図89・90)。いずれも小破片で、埋葬に伴うものではないと思われる。(池田裕英)

III. 出土遺物

1. 陶棺 (図76～図85)

土師質亀甲形陶棺で、棺蓋と棺身ともにほぼ二等分に切断して焼成し、再度組み合わせて使用する。壊され小片化して出土し、欠損部分が多いために全体の形状は推定復原に基づくところが多い。

棺蓋 天井部や短側面を著しく欠損するが、おおよその形状は復原できた。全長は196cm前後・幅60cm前後・高さ45cm前後と推定できる。したがって、内法寸法は全長191cm前後・幅56cm前後・高さ43cm

前後となる。

口縁部突帯と体部中央に横位突帯1条をめぐらせて外面全体を上下2段に区画する。天井部片がないために稜線突帯の有無は判然としないが、わずかに残る短側面の破片から上段にのみ稜線突帯を貼り付け、下段までは及

んでいないと考えられる。そして片側の長側面からみて上段に8条、下段に9条の縦位突帯を段違いに貼り付け、上段に左右9区画、下段に左右8区画の方格をつくる。短側面からみると上段に2区画、下段に3区画となる。突帯の貼り付けは横先縦後である。突帯形状は少し扁平



図76 赤田4号墓 陶棺蓋外面平面・立面図 (1/10)

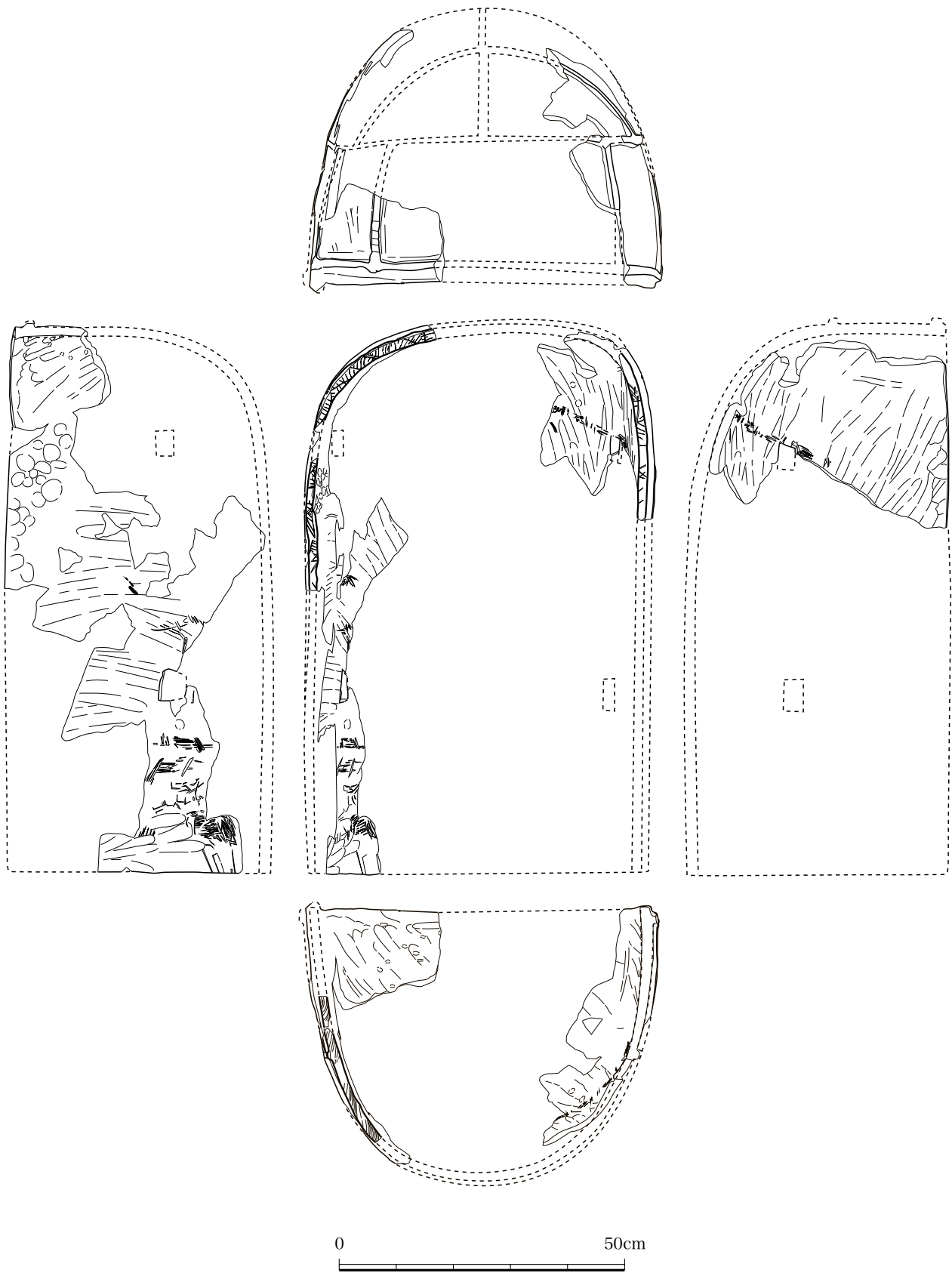


图 77 赤田4号墓 陶棺蓋内面平面・立面图 (1/10)

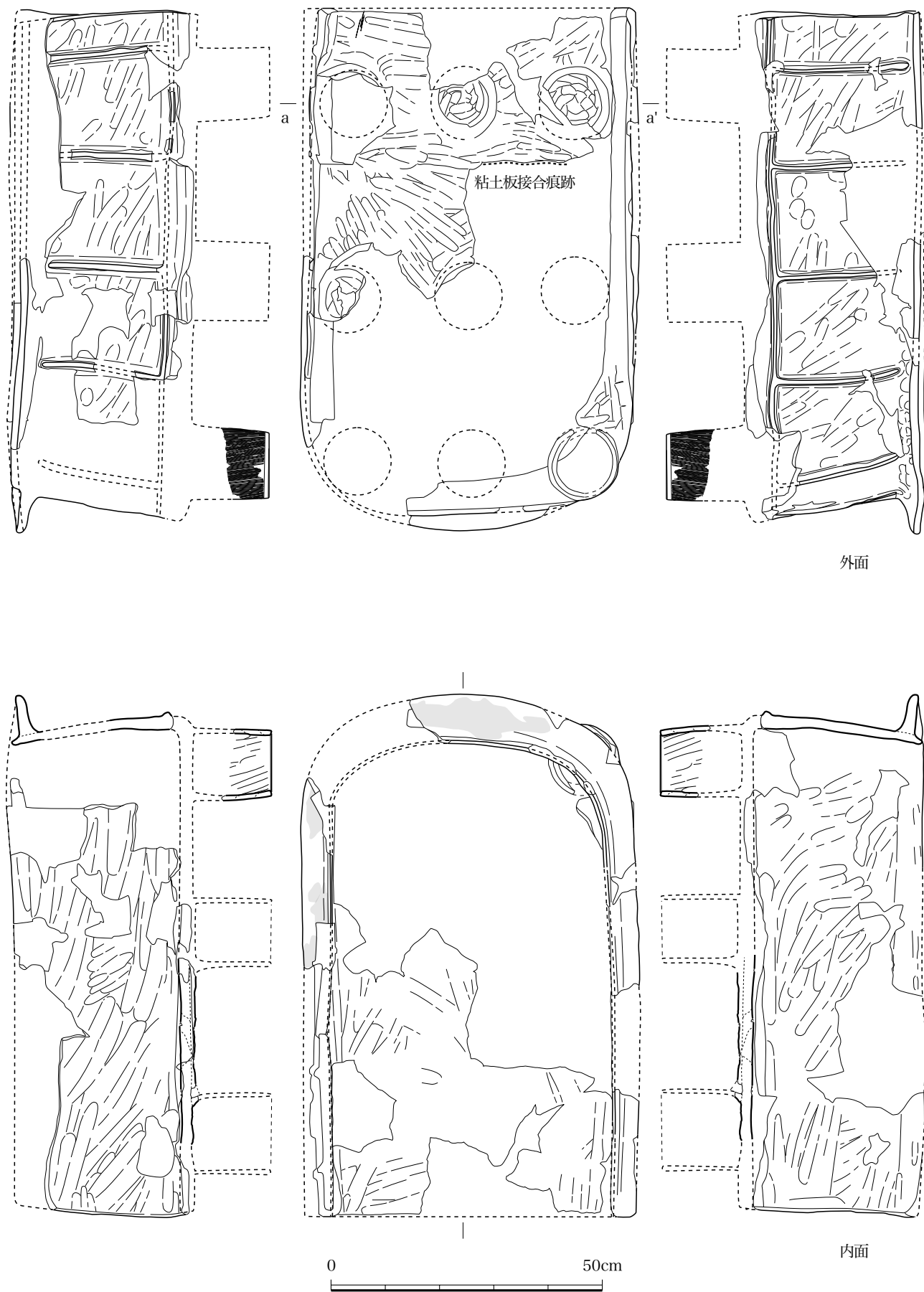


图78 赤田4号墓 陶棺身内外面 (1/10)



図79 赤田4号墓 蓋口縁端面の敷葉圧痕



図80 赤田4号墓 蓋内面の藁縄状圧痕

な幅 1.5cm前後の方形で、突帯上面を板で押圧した痕跡(図82)が認められる。

断面形状は半円形に復原できる。左右の長側面に4つずつ合計8つの方形透孔を上段にあけると推定できる。透孔は1区画おきに穿孔すると思われる。

調整は内外面ともに指ナゲを基調とする。切断面に糸切り痕跡が認められる。赤色顔料を塗布した痕跡は、内外面ともにみられない。

口縁部端面には広葉樹の葉脈が重なる圧痕(図79)が一面に残り、木葉を敷いた作業台上で蓋をつくったことがわかる。高さ8cmの粘土帯を何枚か接いで口縁部をつくり、その上に幅6cm前後の粘土紐を積み上げて成形する。最終の閉塞箇所的位置を想定できるような痕跡が現存部分に認められず、その位置は不明である。

内面には、長軸方向と直交する藁縄状圧痕がいくつか残っている。藁縄状圧痕は、束ねた藁が平行する痕跡とそれを概ね3~4cm間隔で結束した直交する3~4条ほどの藁痕跡から成る(図80)。これらの痕跡から、棺蓋の形状を乾燥時に内面から支持し維持するための形持たせの存在を推定できる。

なお、器表面の砂礫種の観察結果は、流紋岩、石英、長石、角閃石である。流紋岩は黒色、茶褐色、灰色で、粒形が角、亜角、粒径が0.5~3mm、量が微である。

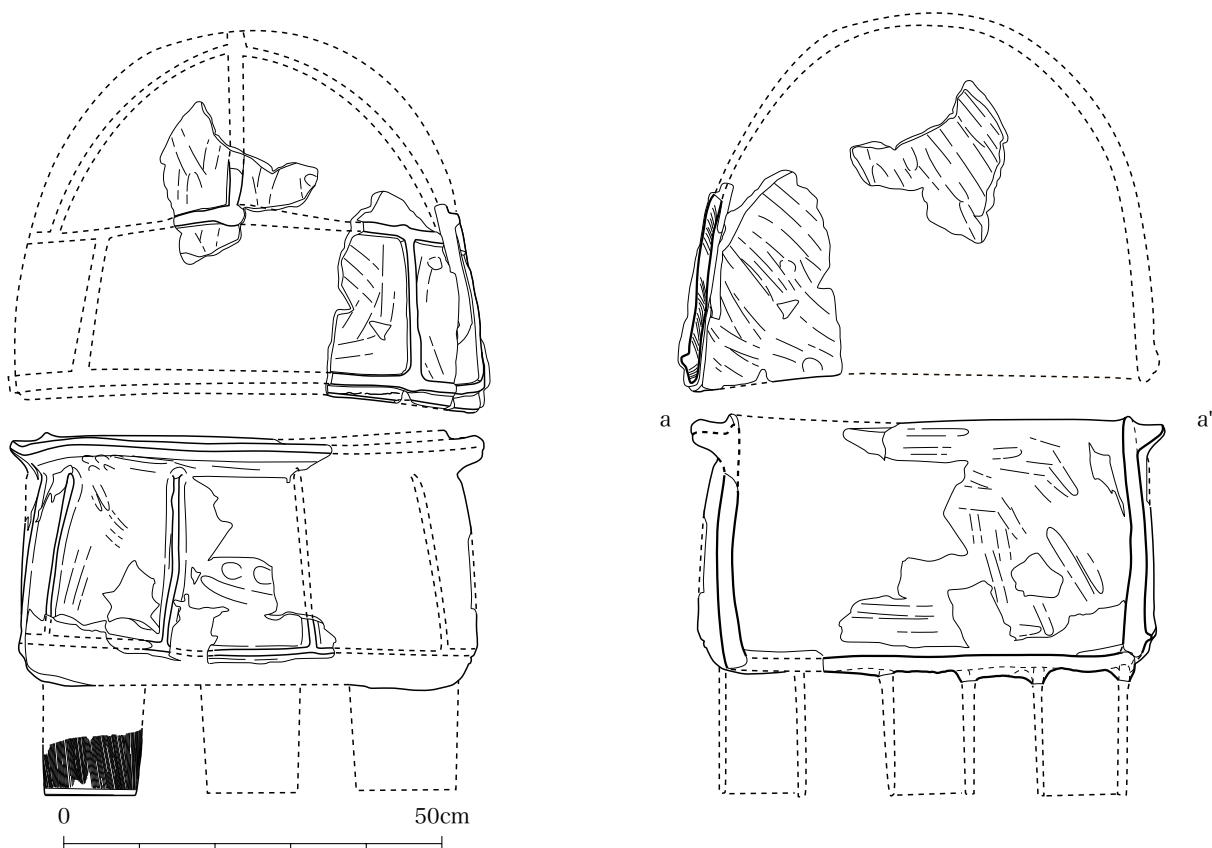


図81 赤田4号墓 陶棺蓋・身内外面立面図(1/10)

石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～1.5mm、量が多い。複六角錐をなすものが僅である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.5～1.5mm、量が稀である。角閃石は黒色、粒形が角、粒径が0.3mm、量が稀である。

棺身 片側の棺身だけが概ね復原でき、その全長は約96.5cmである。2等分されたと推測できるので、全長は193cm前後と推定される。幅は62cm、高さは48cmに復原できる。したがって、内法寸法は全長174cm前後で、幅51cm・高さ31cmとなる。以下の内容は、切断された両側の特徴が概ね同じであったという前提で記述を進める。

底部外面に沿って周底突帯をめぐらせ、片側の長側面に10条、短側面に2条の縦位突帯を貼り付け、長側面に左右9区画、短側面に左右3区画をつくる。突帯形状は幅1cm前後で細い。

体部は隅丸方形の箱形で、器壁は直立もしくはやや内傾している。粘土帯を口縁端部から下1cmの位置に貼り付け、その下部に補充粘土を加えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。口縁部の高さが1cm前後と低い。蓋受け上面の幅は4～7cm、厚さ1cmで、短側面へいくにつれて上面幅が広がる。底部から口縁部の調整は内外面ともに指ナデを基調とする。切断面には、糸切り痕を平滑になで消したような跡がみられる。蓋受けの一部に赤色顔料の付着を認めるが、内外面全体に塗布された痕跡はみられない。

脚部には6行3列、合計18本の脚が取り付くと推定できるが、残存したのはわずかに脚1本だけである。脚と底部が直接接合しないため正確な脚の高さは不明。現存部分をみる限り、脚に透孔はない。調整は外面タテハケ、内面タテ方向の指ナデである。脚端部はヨコナデ調整されており、外面タテハケの方向が上から下へと進んでいるため、脚は成形後に倒立されていることがわかる。

3脚1行の短軸方向に沿って底部の粘土板接合痕跡を確認できる箇所がある。そして、脚を底部外面に直接接合していることも観察できる(図83～85)。これらの点から、棺底幅である長さ55cm前後・幅25cm前後・厚さ1.5～2.0cmの粘土板の上に脚3本を等間隔に並べ、脚の周囲に粘土を足してそれを接合固定したと考えられる。これをひっくり返して底部製作の接合単位(3脚1行)としたことが推察できる。この接合単位を長軸方向に6行分接合し、上面を平滑に仕上げて棺身底部を製作したと考えられる。この際、外周の端部を上につまみ上げて粘土帯積上げの土台をつくっている。

次にこの外周に沿って高さ6cm前後の粘土帯を積み上

げて体部を成形し、蓋受けを接合した後に突帯を貼り付けて完成する。底部から口縁部までの高さは33cmである。

なお、器表面の砂礫種の観察結果は、石英、長石、角閃石である。花崗岩は灰白色、粒形が角、粒径が0.5



図82 赤田4号墓 蓋短側面における突帯上面の板押圧痕

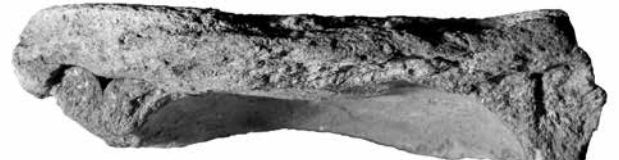


図83 赤田4号墓 脚と底部の接合箇所断面

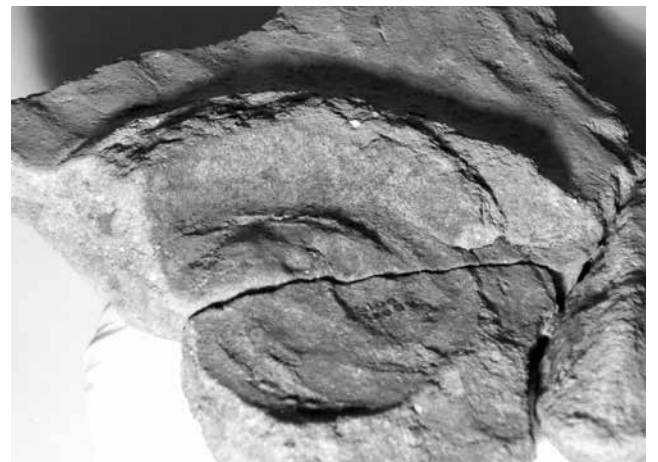


図84 赤田4号墓 底部外面の脚接合箇所



図85 赤田4号墓 底部外面の脚接合箇所

～6mm、量が微である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～2mm、量が多い。複六角錐をなすものが僅である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.5～2mm、量が僅である。角閃石は黒色、粒形が角、粒径が0.3mm、量が稀である。



図86 赤田4号墓 玄室出土
耳環開口部

2. 金属器 (図86・87)

耳環 (1) 銅芯鍍金の耳環である。開口部に木質のようなものが錆着し、接面をよく観察できない。表面の一部に緑錆がみられる。鍍金の一部が破損し、銅芯が露出する箇所がある。平面はやや横長の楕円形で、外径

2.43cm × 2.17cm、内径 1.5cm × 1.28cm。断面はやや縦長の楕円形で、厚さ 0.465cm × 0.545cm。

鉄鏃 (2～7) 長頸鏃6点のうち、鏃身部が残るのは2・4・6の3点である。2・6は長三角形片丸造であるが、6は茎部との境に棘状関をつくるのに対して2には明瞭な関がない。6は直接接合しない2片を同一個体と考えて図示した。2は全長10.65cm、6は全長17.4cm前後となる。4は三角形片丸造で、棘状関をつくる。茎部先端を欠失し、残存長11.5cm。

3・5・7は鏃身部を欠失する。3・5は茎部との境に棘状関をつくり、5の頸部は12.2cm以上で長い。

鉄釘 (8～16) 鉄釘は9点ある。11と14が同一個体となる可能性も否定できないが、出土地点が大きく離れており別個体と考えておく。すべて頭部を丸く打ちのぼして成形する有頭型の鉄釘である。大

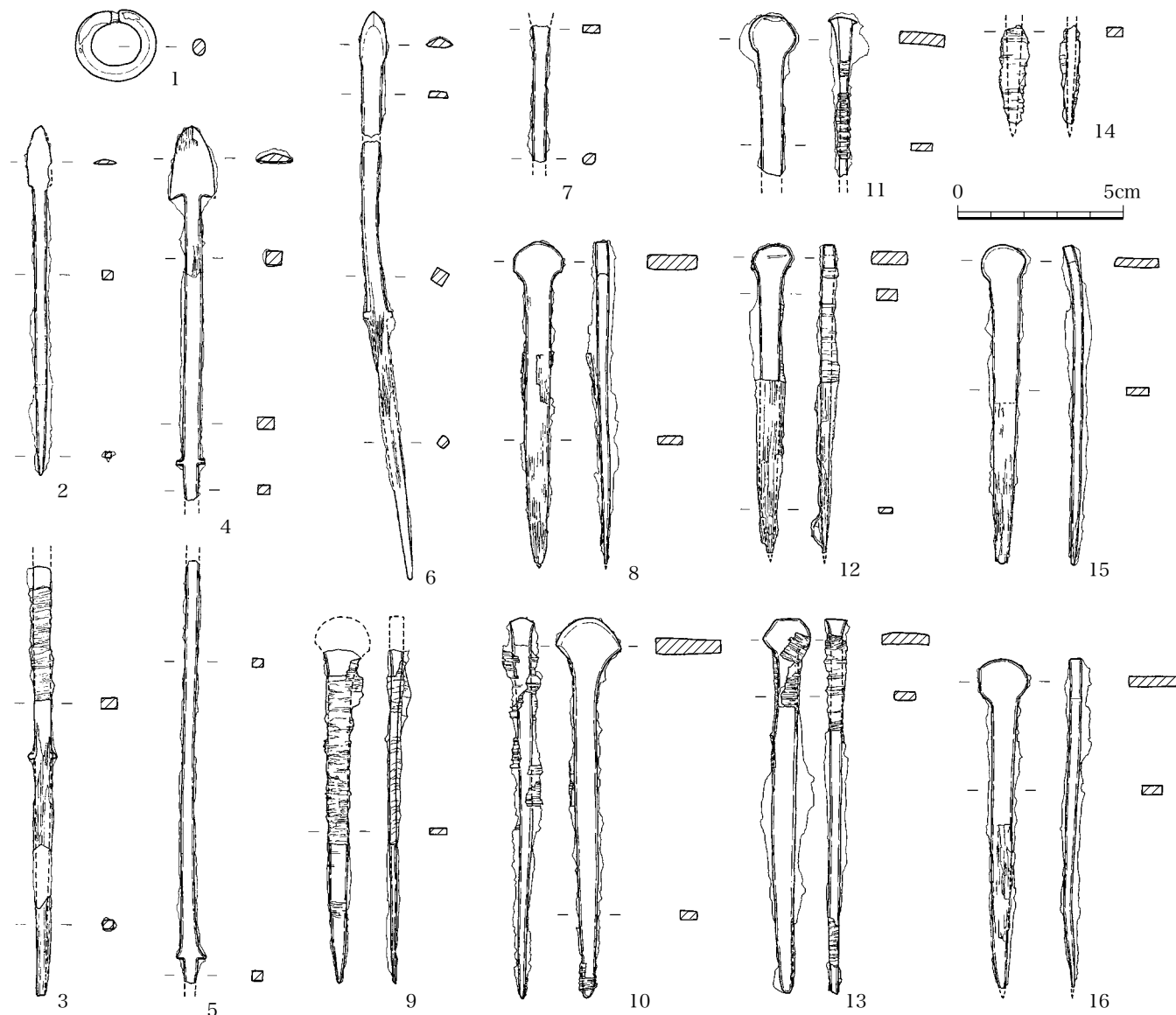


図87 赤田4号墓 玄室出土金属器 (1/2)

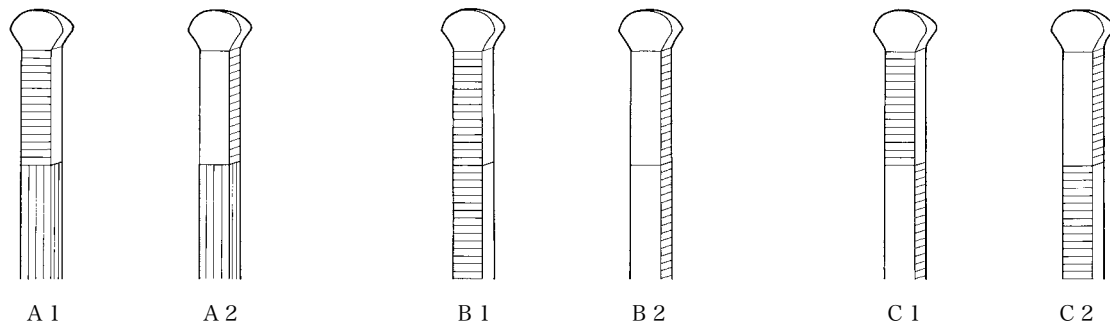


図88 赤田4号墓 鉄釘の分類

きさはほぼ同じで、長さがわかるものは9.6～11.6cm、幅は頭部で1.2～2.0cm・体部で0.6～0.9cm、厚さは0.25～0.5cm。鉄釘は付着する木質の木目方向の観察から3類型に分類され、打ち込む向きの検討からさらにそれぞれ2類型に細分類できることが報告(中町教育委員会1999)されており、本書でもそれに準拠して分類し記述する(図88参照)。8・12・15・16がA2類、9がB1類、10がC2類、13がB2類であり、11は類型不明、14はB1あるいはC2類となる。4本のA2類は長側板と短側板を四隅で結合したと推定できるので、木棺の大きさを復原するうえで重要な資料となる。12・15・16が原位置をおおよそ反映しているとすれば、長さ226cm・幅104cm前後の木棺であった可能性が想定できる。12の表面には比較的良好に木質痕跡が残っており、側板の厚さは3.5cm前後であったと思われる。10のC2類は木棺復原範囲の北面小口中央付近に位置するため、底板と短側板を結合していたと考えられる。13のB2類は復原木棺範囲で西面長側の南西隅付近にあり、長側の南端寄りでは底板と長側板を結合したと考えれば、14をB1類とみて北端寄りでも同様に底板と長側板を結合した可能性を想定できる。このように考えれば、9は東面長側の南寄りでは底板と長側板を結合していた釘が木棺の腐朽過程で西側へ飛び出した可能性を推測できる。ただし、東面長側の北寄りでは鉄釘が見つかっておらず、これについては盗掘で失われてしまったと考えるほかない。11は復原木棺範囲から大きく南へはずれて位置するが、近接して出土した須恵器台付長頸壺の一部が3号墓出土土器と接合した点から考えて、その周辺に位置する遺物は二次的に移動していることが十分に推定できる。おそらく11は、南面小口で底板と短側板を結合するC2類ではないかと思われる。底板の

厚さは、9・10に残る木質痕跡から5.7cm前後であったとみられる。(鐘方正樹)

3. 埴輪(図89・90)

円筒埴輪と形象埴輪とがある。11のみ51層からの出土で、他は羨門最終閉塞後の埋土から出土した。

形象埴輪(1～10) すべて外面に線刻が確認でき、大部分が円筒～鱗部を残す破片である。破片の部位は上下の文様面を区画するために施される綾杉文が残るもの(4・5)、上部または下部に推定できる文様面に直弧文が施されたもの(6)、下鱗部で縁取りの2重沈線があるもの(9・10)があり、その他は正確な部位が不明である。9では鱗部に近い円筒部で円形に復原できる透孔が確認できる。これらは、鞍形埴輪の可能性が考えられるが、判然としない。9の形象部に透孔を認める点からすると、9・10は盾持人となる可能性もある。いずれも埴輪編年V期に位置づけられる。文様面には赤色顔料が付着する。調整は全面がナデ調整で、調整後に線刻および赤色顔料を塗布している。胎土には赤褐色色粒を含む個体が多い。

円筒埴輪(11～18) 調整の確認できる個体はすべて外面1次調整タテハケ(8～10条/cm)、内面ナデを基調とし、埴輪編年V期に位置づけられる。全体を復原できる個体はないが、すべて突帯およびその痕跡が残る破片で、なかには円形透孔が残るもの(11・12)、底部に残るもの(18)がある。突帯は上辺上端が下辺上端よりやや突出する形状が多く、断面M字状または台形状を呈する。断続ナデ技法A(中島1991)を確認できる(11・15・16)ものがある。内径を復原できる個体が2つあり、18cm前後の小型品と、25cm前後の中型品がある。色調、胎土、特徴から、断続ナデ技法Aを認める(11・15・16)、胎土に赤褐色色粒を含む(12・13)、浅黄色系の色調(14・17・18)の3種類に区別することができる。(村瀬 陸)



図89 赤田4号墓 出土形象埴輪 (1/4)

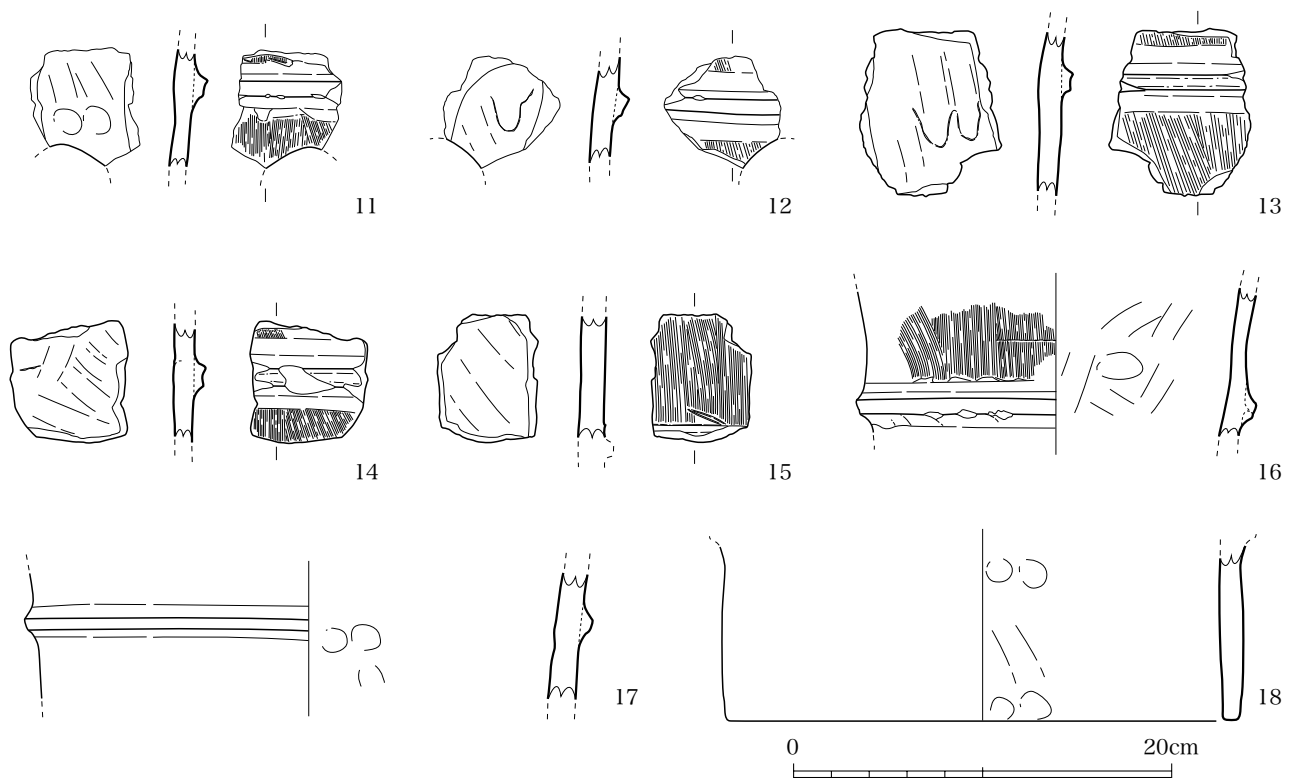


図90 赤田4号墓 出土土筒埴輪 (1/4)

4. 土器・土製品

(1) 玄室出土土器・土製品 (図91-1~11)

須恵器杯H身(1・2)の1は外面に暗灰緑色の自然釉がかかり、「×」の線刻がある。有蓋高杯(3・4)はいずれも2段2方透かしで、段間には2条の沈線がある。無蓋高杯(5)は2段3方透かしで、段間に2条の沈線がある。杯部の突帯状の稜や脚端部など非常に鋭く仕上げられている。台付長頸壺は3点あり、6は灰白色で、やや軟質に焼き上がっている。体部には刀子の先で刻みつけたような施文がみられる。この土器の小片が3号墓の羨門付近から出土している。脚部に2段2方透かしがある。7は脚部に3方の透かしがあったことがわかる。体部外面の調整はカキメである。8は外面に降灰がみられ、体部に刺突文が施される。脚部の透かしはない。

これらとは時期を隔てた遺物に須恵器壺H(9)、土馬(10・11)がある。壺Hは口縁端部を若干上方へつまみ上げ、縁部は丸味をもたせて仕上げている。土馬は脚部が逆V字形に開く、尾は斜め上方に延び、断面は10が楕円形で、11が丸味を帯びる。

壺Hを除く須恵器は杯H身、有蓋高杯の形態からTK43型式で6世紀後半のものと考えられる。須恵器壺Hと土馬は8世紀のものであろう。

(2) 墓道出土土器・土製品 (図92)

土師器碗(14)は底部外面を手持ちによるヘラケズリ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。須恵器甕は3点ある。16は頸部が短く外反する。外面は横方向の平行タタキで、粗いカキメを加えている。内面はロクロナデにより当て具痕が消されている。17は直立する短い頸部で、肩部の四方に把手が付く。外面は縦方向の平行タタキの上から粗いカキメを加えている。内面は同心円の当て具痕跡がある。18は頸部が長く、口縁部に縁帯をつくり、頸部に2条の沈線と波状文を加えている。外面は縦方向の平行タタキで、肩部にはカキメを加えている。内面は同心円当て具痕跡がみられる。

土馬(15)は目を竹管で、耳を粘土紐を貼り付けて表現している。

土師器碗や須恵器甕は玄室出土の須恵器杯H・有蓋高杯と同時期で6世紀後半、土馬は8世紀に位置づけられるものであろう。

(3) 盗掘坑出土土器 (図91-12・13)

12・13は羨門に穿たれた盗掘坑埋土から出土した。12は土師器羽釜で、口縁部を内側に折り曲げる大和H型。13は瓦質土器の蓋で、頂部付近に透かし孔がある。

盗掘坑出土土師器、瓦質土器は14世紀後半～15世紀前半頃のものと考えられる。(池田裕英)

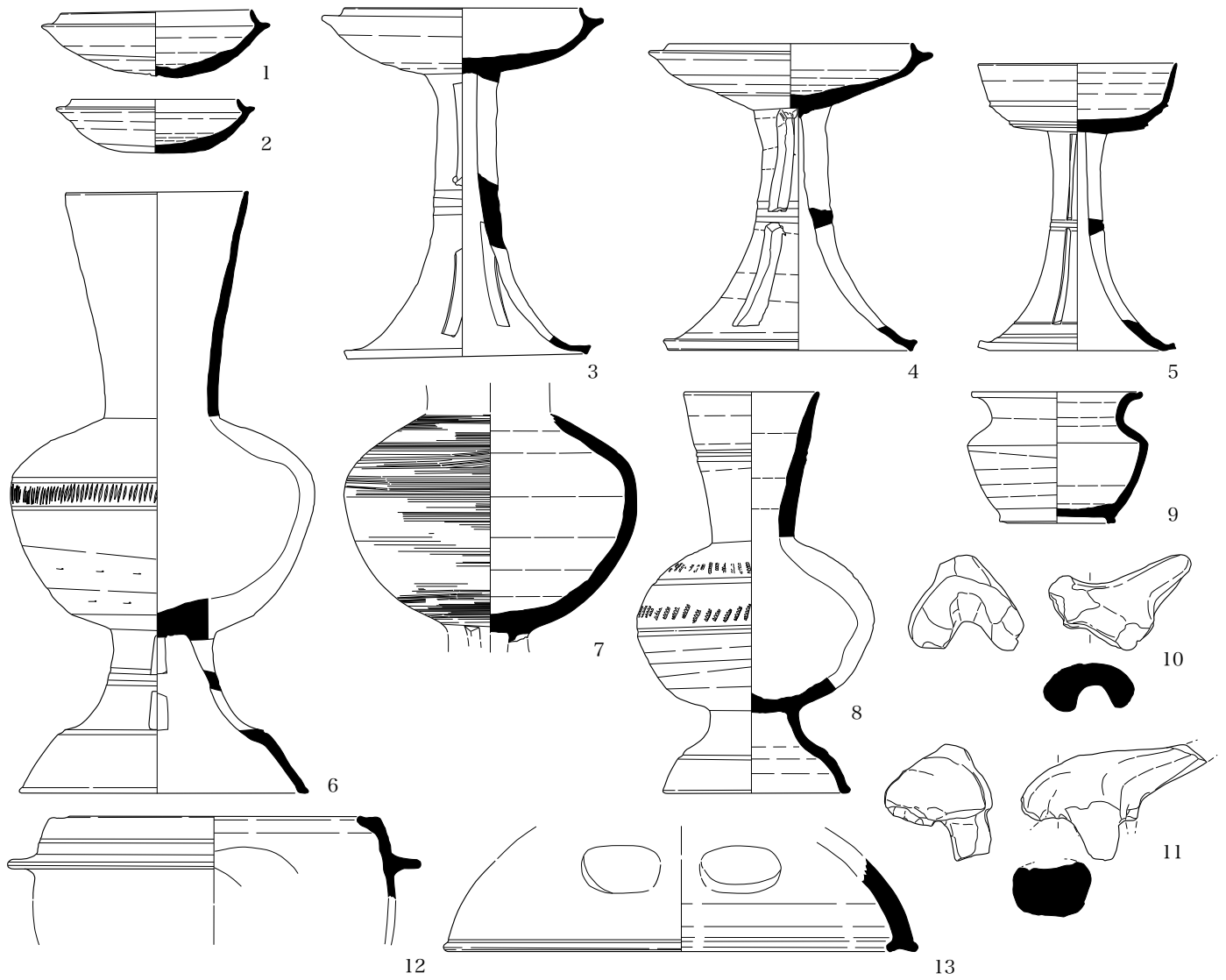


図91 赤田4号墓 玄室・盗掘坑出土土器・土製品 (1/4)

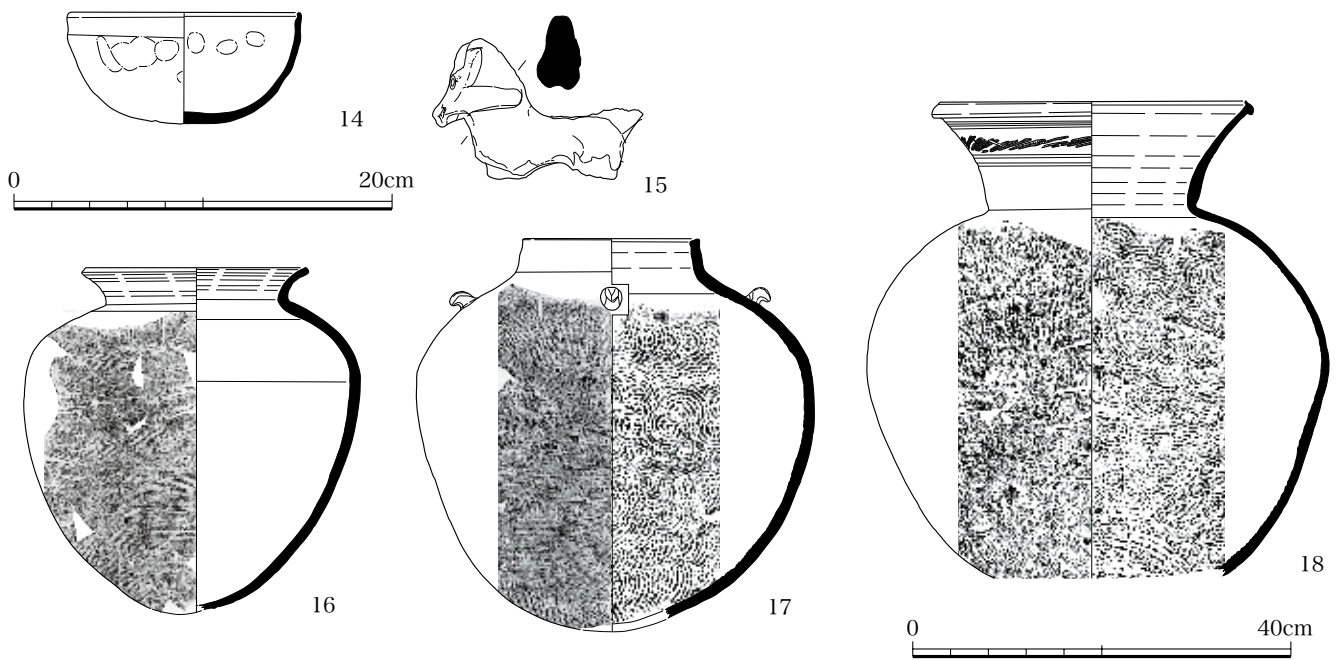


図92 赤田4号墓 墓道出土土器・土製品 (1/4, 16~18は1/8)

第9節 赤田5号墓

全長は15.7 m以上で、墓道南端は発掘区外南に続く。本横穴墓群中で最大規模の横穴墓である。玄室はやや「く」字状に曲がるが、直線的な玄室東側壁でみると主軸はN-2°-Eである。羨門土層の観察から、玄室の閉塞が3度行われたことがわかる。玄室内では横穴墓の主軸に直交して東西方向に土師質亀甲形陶棺が南北に2基置かれていた。土層、遺物の出土状態から、盗掘坑はあるものの、陶棺や土器のあるところまでは至っておらず、未盗掘といえる。

1. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図93)

玄室・羨道及び墓道は黄色の砂礫層の地山(基本層序: VII-4層)を掘削して造られ、その埋土は、埋葬に関連する土層とその他の土層に大別できる。

(1) 埋葬に関連する土層

層序と層の様相から、下記の3層(A~C層)が識別できる。

A層(1~3層) 玄室の玄門寄り・羨道及び羨門の3.2 m南までの墓道において、初葬時の床面を形成する整地土層。

厚さ0.05~0.2 mで、3・4号墓と比べて薄く、玄室での範囲に限られる。玄室南寄りには地山の破碎物層、羨道・墓道は黄色の砂質シルト・粘土やシルト質砂礫層からなる。羨門には、閉塞用の板を差し込んだ長さ1.2 m、幅0.3 m、深さ0.15 mの掘り込みがみられる。

B層(4~6層) 羨道の羨門寄り1.8 m及び墓道において、A層上に形成された追葬時の床面の整地土層。

厚さ0.1~0.4 mで、墓道の羨門寄りで厚くなる。主に黄色のシルト質砂層や砂質シルト層からなる。上面は平滑。4層は閉塞用の板を差し込んだ掘り込みの埋土。

C層(9~16層) 羨道の羨門寄り1.5 m及び羨門の2.2 m前までの墓道に形成された最終埋葬時の羨門の閉塞土層(10~16層)と床面の形成層(9層)。

主に黄色や黄褐色のシルトを含む砂層からなる。閉塞土層は、羨道では前述したB層上面、墓道では9層上面に形成され、墓道の羨門寄りに高さ0.3 mの高まりを作った後に羨道側に土を積み上げる。9層上面から高さは0.6 mで、上部に盗掘坑かと思われる侵食箇所がある。床面を形成する9層は、後述するE層の性格をもつ。厚さ0.2~0.4 m。ともに出土遺物はない。

(2) その他の土層

a. 墓道 層序、層の様相や3・4号墓との対応関係から、

下記の3層(D~F層)が識別できる。

D層(7・8層) 前述したB層の上面から墓道の両側面に沿って形成された埋土層。

黄色のシルト質の砂層や砂礫層からなり、断面観察箇所での厚さは0.3 m。出土遺物はない。

E層(17~19層) 前述したC・D層の形成後に生じた墓道中央部の窪みにおいて、3・4号墓の盗掘前までに形成された埋土層。

厚さ0.4~0.6 m。下部(17・18層)は黄色や黄褐色のシルトを含む砂層や砂礫層からなる。上部の暗オリーブ褐色シルト混じり砂層(19層)は基本層序のV層に対応する埋没土層である。17層で須恵器短頸壺が出土した。

F層(31・32・34~36層) 3・4号墓の盗掘後に形成された溝や墓道の埋土。

31・32層は溝の埋土。地山の破碎物からなり、後述のH層の33層が上を覆う。34~36層は墓道の埋土。主に黄色のシルト混じり砂層からなる。出土遺物はない。

b. 玄室・羨道 層序と層の様相から、下記の2層(G・H層)が識別できる。

G層(断面図20~26層) 前述した最終埋葬の閉塞土層であるC層の形成後から天井部の崩壊までに形成された埋土層。

厚さ0.4~0.8 mで、羨道寄りが厚い。20~24層は主に黄色のシルト混じり砂層からなり、玄室及び羨道の床面上を覆う。25・26層は黄色や黄褐色のシルト質砂や砂・礫の薄層の互層で、羨道でC層上部の侵食箇所を埋め、24層の上面を覆う。出土遺物はない。

H層(断面図27~30・33層) G層の形成後、天井部の崩壊で生じたとみられる土層。

地山の破碎物を主とし、黄色のシルト質砂等を含む層からなる。厚さ2.5 m以上。最下部の27層は層理が水平で、その上を覆う28~30層は玄門側から奥壁側に向かって下向することから、最初に天井部の表層が崩落し、その後は羨道側から玄室側に向かって崩壊が進んだことが推察できる。29層は2基の陶棺上を覆う。

c. 層の成因 地山の破碎物を主とする層は、天井部や側壁の崩・剥落物が堆積したと考える。黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のIV層と様相が似ていることから、丘陵斜面の崩落土及び羨門付近からの流入土と考える。(安井宣也)

2. 横穴墓の規模と形態 (図93)

玄室 玄室は長さ4.9m、奥壁幅2.8mで、平面形は西側壁が奥壁から玄門にいたる中程までは直線的で、そ

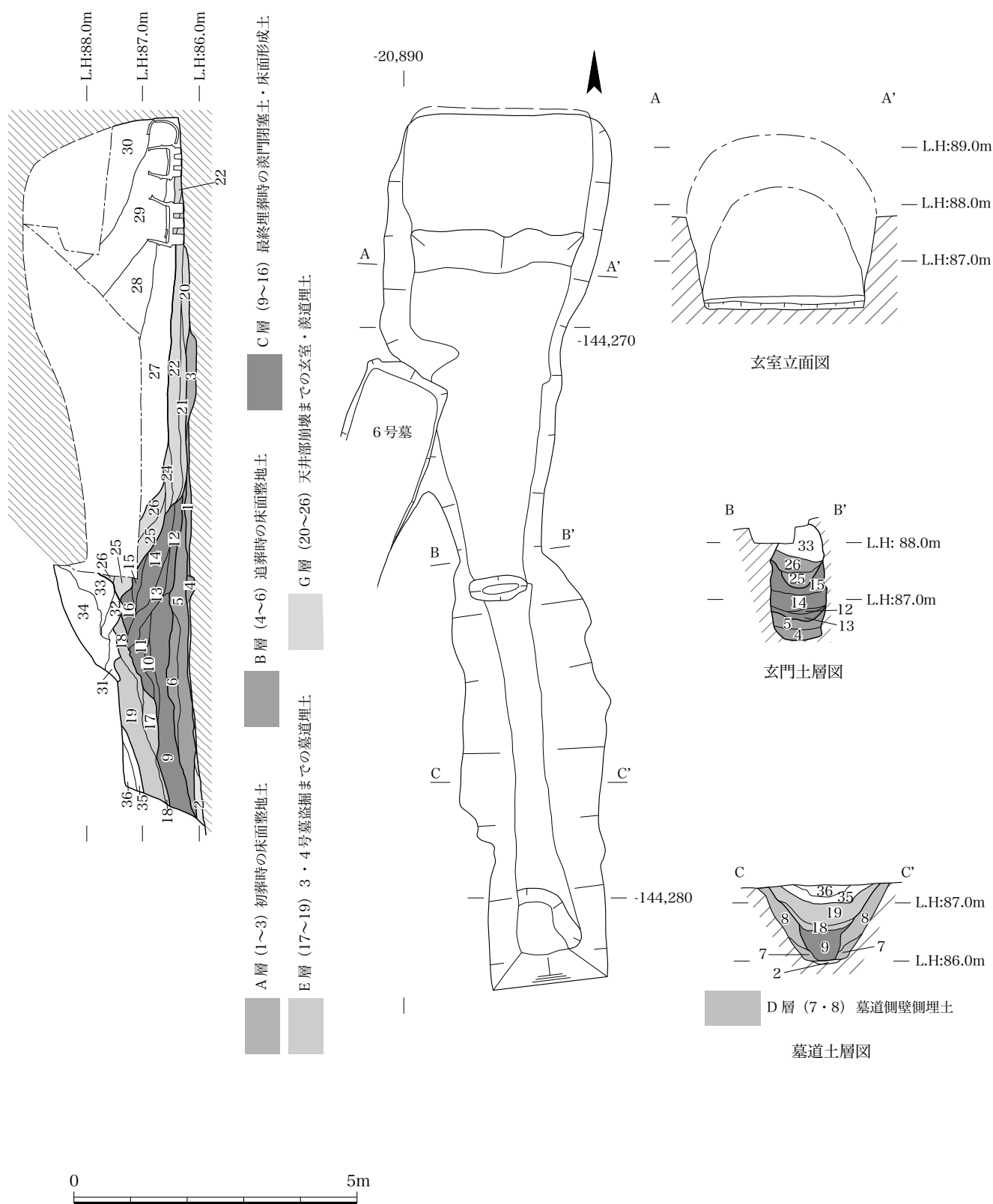


図93 赤田5号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/100)

A層	15 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂	28 地山の破砕物と5Y7/2 (灰白) 砂質シルト・粘土ブロックが混合
1 2.5Y5/2 (暗灰黄) 砂質シルト・粘土	16 2.5Y5/4 (黄褐) シルト・粘土質砂	29 地山の破砕物に2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土が混合
2 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土質砂礫	E層	30 地山の破砕物と5Y7/2 (灰白) 砂質シルト・粘土ブロックが混合
3 地山の破砕物	17 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	F層
B層	18 2.5Y5/3 (黄褐) シルト混じり砂	31 地山の破砕物
4 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫	19 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) シルト混じり砂	32 2.5Y5/4 (黄褐) シルト・粘土質砂に地山の破砕物が混合
5 2.5Y6/3 (にぶい黄) 砂礫質シルト・粘土	G層	H層
6 地山の破砕物に2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト質砂が混合	20 地山の破砕物	33 地山の破砕物に2.5Y5/4 (黄褐) シルト・粘土質砂が混合
D層	21 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂	F層
7 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	22 2.5Y7/2 (灰黄) シルト混じり砂礫	34 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土混じり砂礫
8 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫	23 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂	35 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂
C層	24 2.5Y8/2 (灰白) シルト混じり砂礫	36 地山の破砕物に2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂が混合
9 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) シルト質砂礫	25 2.5Y5/3 (黄褐) シルト質砂と砂礫の薄層の互層	
10 地山の破砕物	26 2.5Y8/3 (浅黄) 礫と砂の薄層の互層	
11 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト質砂	H層	
12 2.5Y7/3 (浅黄) 礫混じり砂	27 地山の破砕物に2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂が混合	
13 2.5Y5/3 (黄褐) シルト質砂		
14 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂		

赤田5号墓 堆積土層名

こから玄門に向かって幅が狭まっていき、東側壁が奥壁から玄門に向かって狭まる羽子板形である。玄室下半の断面形は上方に向かって広がる逆台形である。天井の正確な高さは崩落が激しかったため不明である。床面（地山上面）は南に向かって緩やかに下る。地山上面の標高は奥壁で86.2 mである。床面は地山上面を奥壁から約2 mの位置から南を削って一段低くし、その削った部分に土を盛って整地をしている。陶棺2基は奥壁側の削り残した部分に置かれていた。玄室中央部の地山上面に長さ1.4 m程度の部分的な浅い窪み（土層図第3層）を検出したが、性格は不明である。

なお、玄室西側壁が6号墓の玄室構築の際の掘削によって壊されていた。そのためか、比較的早い時期に側壁・天井が崩れ、玄室内に大量の土砂が堆積したようである。この大量の土砂があったためであろうが、盗掘坑はあるものの、陶棺にまでは至っていない。

羨道 羨道は長さ3.3 m程度に復元できる。羨門は幅1.0 mで、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存状況から高さ2 m程度に復元できる。床面の整地土1層上面で長さ1.15 m、幅0.45 m、深さ0.1 mの土坑状の遺構を検出した。3・4号墓での例から、この遺構も羨門を閉塞した際の板の痕跡と判断でき、層序から初葬時の閉塞に用いられたと考えられる。

墓道 墓道は長さ7.5 m以上で、上面幅が1.9～2.7 m、底部幅が0.6 mの断面逆台形状である。深さは1.2～1.3 mで、底面は緩やかに南に下っている。

埋土の堆積状況、堆積土の形状から、追葬の際に墓道内の埋土を掘削して通路を作っているようである。墓道南端での地山上面の標高は85.9 mである。

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図94)

玄室奥壁側を高く削り残した部分の地山上面に東西方向に土師質亀甲形陶棺が南北に2基置かれていた。北陶棺と南陶棺との間隔は0.4 mで、東西の中軸もほぼ揃う。両陶棺とも棺蓋は天井が崩落した際に壊れたようで、南陶棺は棺内に正位の状態で、北陶棺は棺と奥壁との間に逆位の状態で落ち込んでいた。陶棺内には崩落した土砂が堆積し、棺蓋は崩落土の下で検出した。ただし、南陶棺の蓋は片側の半分以上が欠損しており、追葬時に棺蓋の一部を取り除いたとみられる。北陶棺身の東短側面は透孔に栓がさされている状態であった(PL17-5)。棺の周囲からも陶栓が出土しているが(図94)、後述するように、北陶棺に嵌められていた陶栓が南陶棺の周辺から出土しており、追葬の際に副葬品を動かしていることがわかる。これらの陶棺以外の埋葬の痕跡はなかった。

2. 副葬品の配置

(1) 玄室土器出土状態 (図95)

玄室から出土した土器は地山上面と床面整地土の3層上面とで出土した。上述したように、陶栓の出土状態から、いくつかの副葬品は追葬の際に動かされていることがわかる。遺物が出土した位置を細かくみると、南陶棺西南、南陶棺東南、南陶棺下、南陶棺と北陶棺の間、北陶棺下、北陶棺と奥壁との間から出土している。南陶棺西南の一群には土師器脚付壺(図149-22・23)、須恵器杯H蓋(1)・杯H身(7・11)・台付長頸壺(17)・台付長頸壺蓋(16)がある。杯H1・7は逆位、11は正位で出土した。16と17とは若干離れて出土しているものの本来は組み合うものであろう。南陶棺南東では須恵器杯

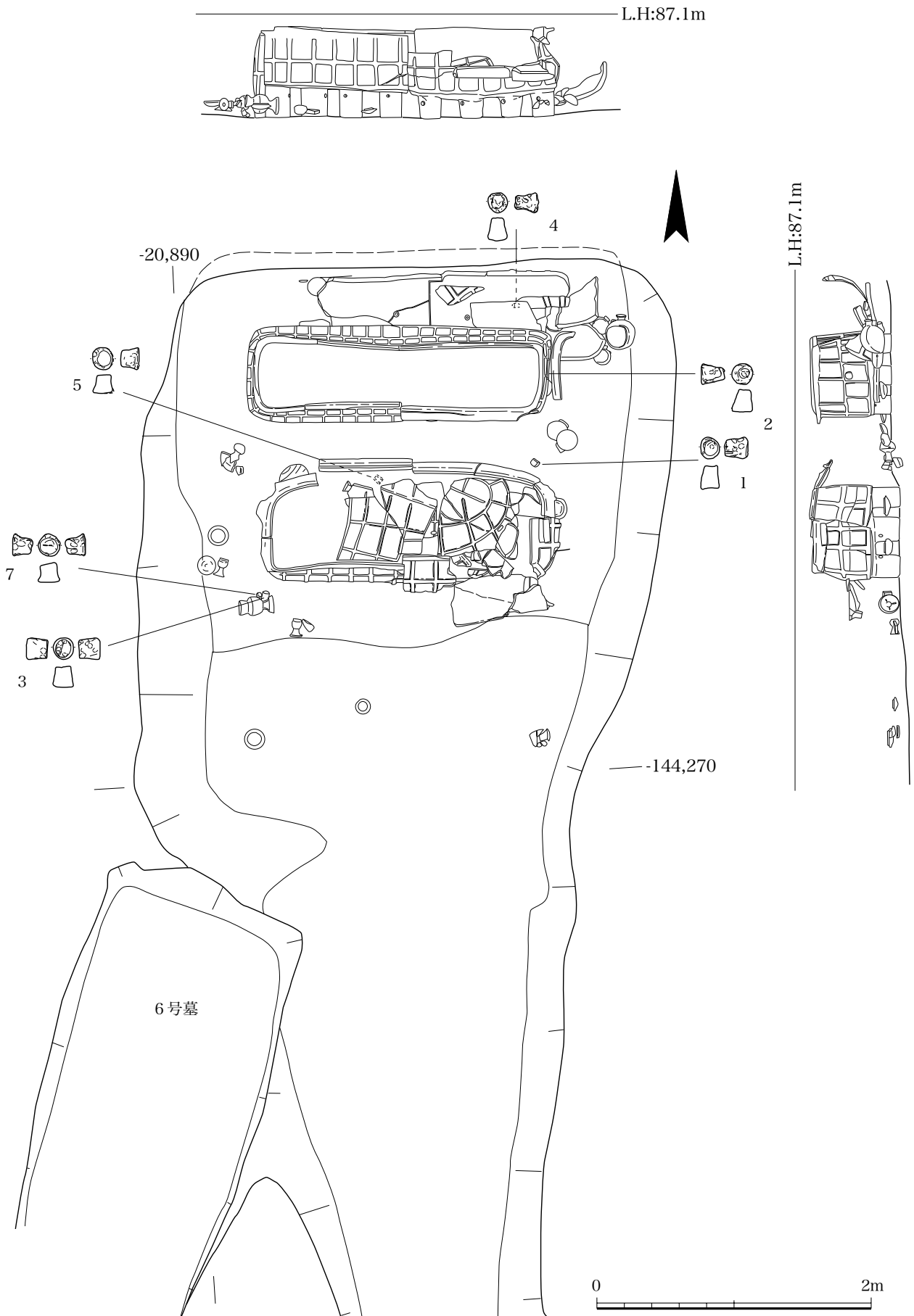


図94 赤田5号墓 玄室陶棺・陶栓出土状態 (1/40)

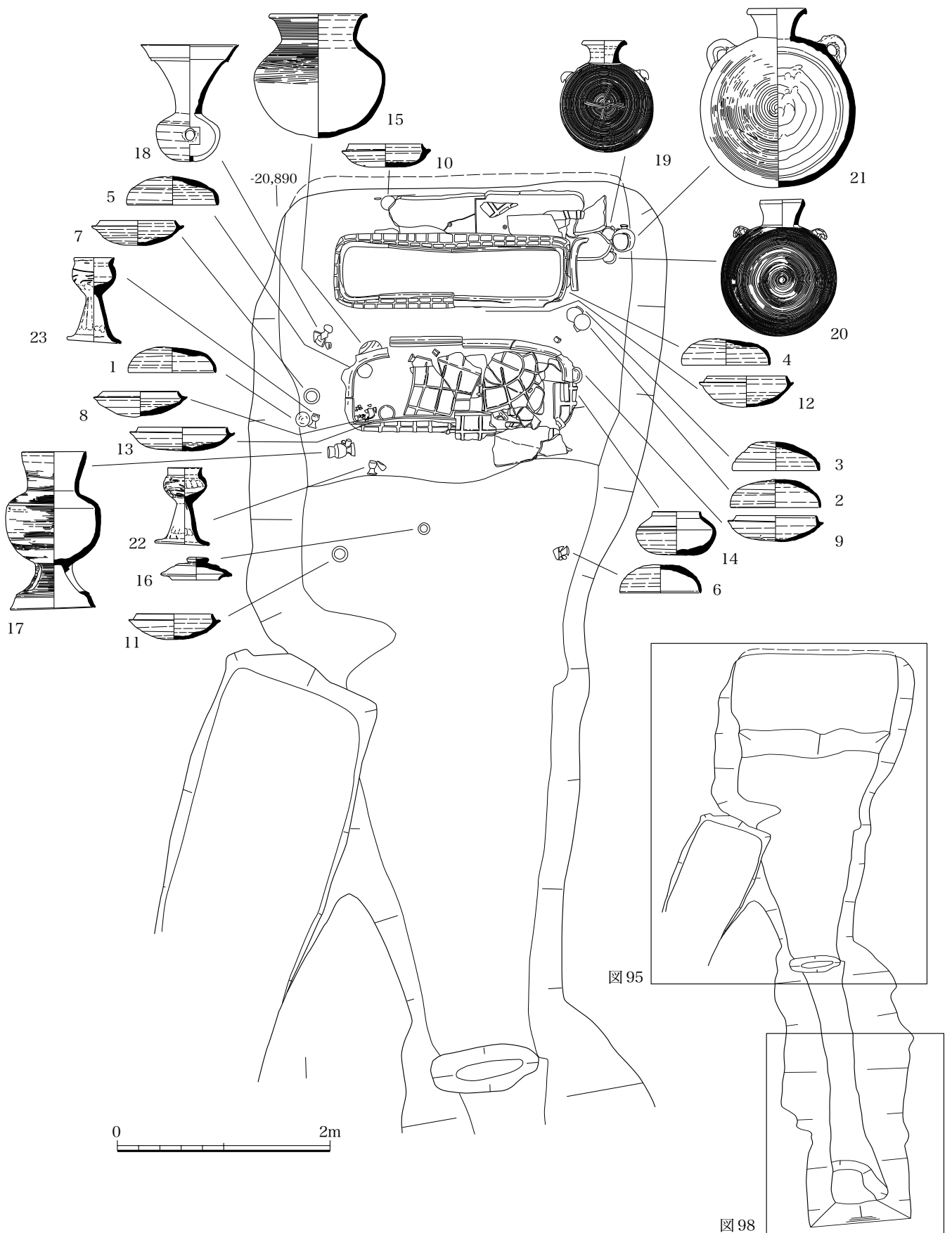


图95 赤田5号墓 女室土器出土状态 (1/50)

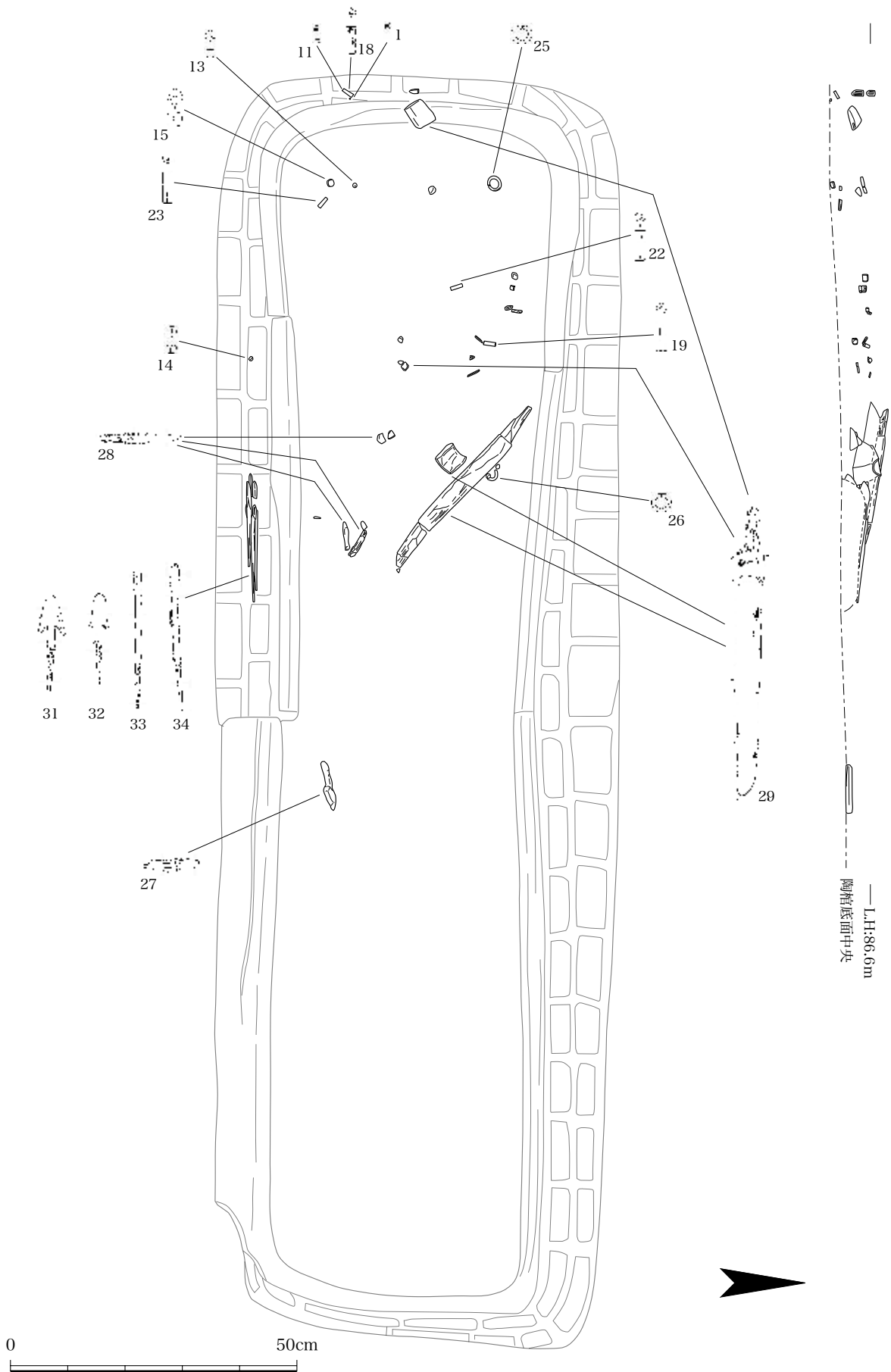


図96 赤田5号墓 北陶棺内遺物出土状態 (1/10)

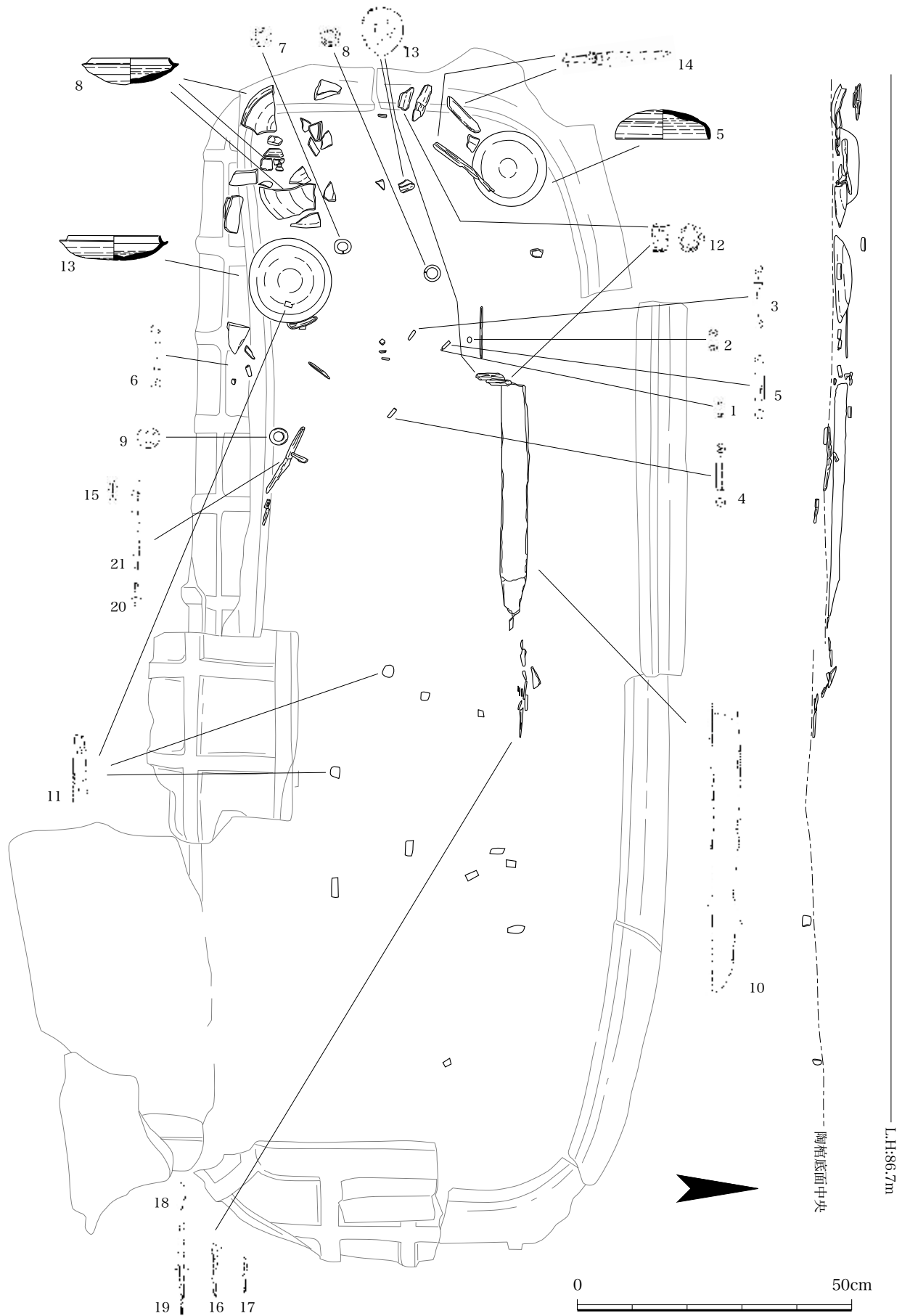


图97 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (1/10)

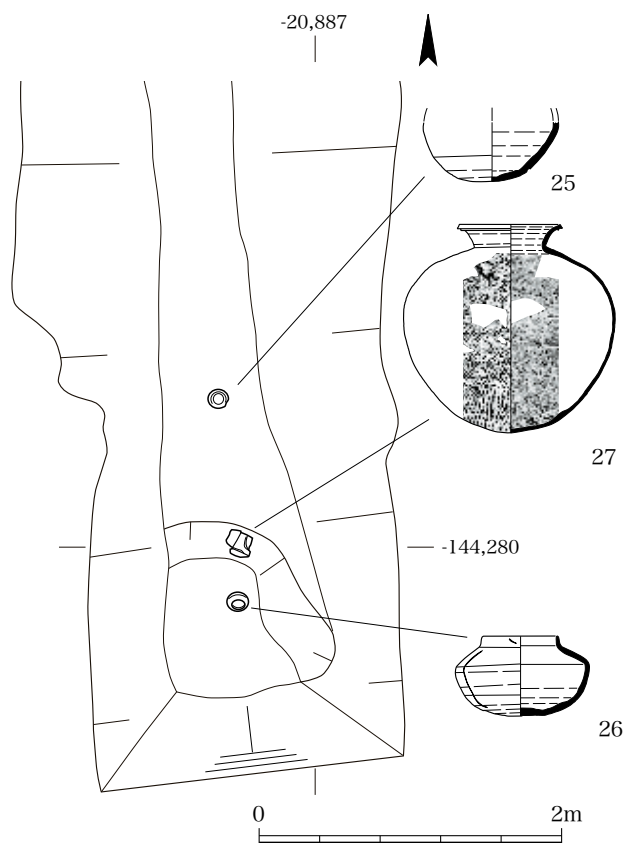


図98 赤田5号墓 墓道土器出土状態 (1/50)

H蓋(6)が正位で出土した。南陶棺下からは須恵器杯H身(9)と短頸壺(14・15)が正位で出土している。南陶棺と北陶棺との間から出土したものには西側に須恵器甕(18)、東側に須恵器杯H蓋(2・3)があり、2は正位、3は逆位で出土した。北陶棺下からは棺東側面で須恵器杯H蓋(4)が逆位で、棺中央南寄りで杯H身(12)が正位で出土している。北陶棺と奥壁の間では東側に提瓶(19～21)が3点あり、意図的に揃えて置かれたと思われる。西寄りからは杯H身(10)が正位で出土した。また、鉄鏃1点も出土している。

壺H(24)は8世紀のものである。4号墓の玄室内からも壺Hの完形が出土しているが、5号墓から出土したのは口縁部の1/4程度の破片である。奈良時代の土器はこの1点のみで、このことによって奈良時代に玄室に入ったとは決めがたい。あるいは羨門が開いており、遺物が入るような状態であったのかもしれない。

(2) 北陶棺内遺物出土状態 (図96)

北陶棺内からの出土品には玉類24点(ガラス玉13点・土玉1点・琥珀玉1点・管玉9点)、耳環2点、鉄刀子2点、鉄刀1点、鉄鏃4点がある。棺内は天井が崩落したことにより土砂が一気に堆積した状況であったため、遺物の中にはその影響で飛散したものもみられる。これは南陶

棺も同様である。

棺内の副葬品は棺中央から西に集中し、遺体は頭を西に向けていたと考えられる。玉類は西側4分の1の範囲に集中し、円を描くように分布している。耳環は2点あり、1点は西端から、もう1点は中央部近くの鉄刀の下から出土した。鉄刀子、鉄刀、鉄鏃は棺中央部付近で出土した。鉄刀は北寄りに鋒を東に向けて置かれていたが、鏃片の一部は西端で出土している。鉄刀子、鉄鏃は南寄りに置かれていたが、刀子1点はやや東寄りにある。

(3) 南陶棺内遺物出土状態 (図97)

南陶棺内からの出土遺物には須恵器3点(杯身8・13・杯蓋5)、玉類6点(ガラス玉2点・管玉4点)、耳環3点、鉄刀1点、鉄刀子1点、鉄鏃4点がある。南陶棺も遺物は中央から西側の位置に集中する。須恵器は枕と考えられ、西向きの頭位であったのであろう。

玉類、耳環は西側3分の1の範囲に集中し、頭部に近い位置から出土している。鉄刀は棺中央部北寄りで北陶棺同様に鋒を東に向けていた。鉄刀子は棺中央部南寄りからと西端部から出土している。西端部から出土したものは崩落土の影響で動いたものかもしれない。鉄鏃は棺中央部付近の北寄りと南寄りの2箇所から出土している。鉄鏃が2箇所から出土し、耳環が3点、枕とみられる土器も3点あること、土層の検討から2回の追葬が想定できることなどから、棺内には2体の埋葬あり、どちらか一体は追葬時のものである可能性が考えられる。

(4) 墓道土器出土状態 (図98)

墓道南端付近で須恵器壺底部片(25)、短頸壺(26)が出土した。25は底部に近い2層からの出土で、上半部を欠くが、正位で出土しており、椀のように使われたのかもしれない。26は17層から出土したもので完形である。甕(27)は埋土中位の17層と19層から出土したものが接合する。一部の破片が玄室からも出土している。(池田裕英)

III. 出土遺物

1. 陶棺

2基の土師質亀甲形陶棺は、棺蓋と棺身ともにほぼ二等分に切断して焼成し、再度組み合わせて使用する。玄室内の配置に従い、北陶棺と南陶棺に分けて報告する。

(1) 北陶棺 (図99～121)

棺蓋・棺身は、いずれも完形に復原できた。遺存状態も良好である。

棺蓋 全長218cm・幅63cm・高さ33.5cmの完形品である。内法寸法は全長212cm・幅55cm・高さ30cmとなる。切断された二つの棺蓋は同一品を2等分したものである

が、乾燥時の変形によって幅に4cmほどの差異が生じている。おそらくこれに起因して、長側面側の口縁部の一部が削り取られたため、両短側が高く中央が低くなる側面観になったとみられる。内外面全体に赤色顔料が丁寧に塗布されている。口縁部端面の一部に黒斑がある。

稜線突帯と口縁部突帯を貼り付け、両突帯の中間に横位突帯を2条めぐらせて外面全体を上中下3段に区画する。長側面縦位突帯は上段から中段を一連で貼り付けるが、下段では少しずれた位置に違えて多くが配されている。平面図右側の長側面（右長側面）には縦位突帯を上段から中段に15条、下段に18条貼り付けてそれぞれ左右に14区画と17区画をつくるのに対し、平面図左側の長側面（左長側面）には縦位突帯を上段から中段に17条、下段に17条貼り付けてどちらも左右16区画となり、その数は揃っていない。

短側面では上段から中段に縦位突帯はなく、下段のみ縦位突帯を貼り付ける。下段の縦位突帯と区画の数をみると、稜線突帯を挟んで左右に1条ずつ貼り付け2区画となる短側面と左2条3区画・右1条2区画で異なる短側面がある。

突帯の貼り付けは横先縦後で、上面を板で押圧した痕跡が多く残る。上段から中段の稜線突帯は、幅5cm前後で幅広くつくられている。その他の突帯は幅2～3cmである。いずれの突帯も扁平につぶれた形状をなす。口縁部突帯は、口縁端面と接する下辺にヨコナデが及んでいないため、突帯貼り付け時の押付け痕が波打って残る。

断面形状は半円形である。左右の長側面に4つずつ合計8つの円形透孔（径5cm）を下段にあける。透孔は左右両端に1区画をあけて3～4区画おきに穿孔している。なお、透孔には陶栓がはめ込まれていたらしい。調整は内外面で異なる。外面は、口縁部から下段付近までヨコナデを残すものの概ねヨコハケ調整である。内面は、口縁部から体部下半を左上がりのナナメナデ、体部上半から天井部をヨコナデするのを基調とするが、閉塞しない短側面側のみタテハケ調整が行われている。

切断面は、ヘラ切りした痕跡を丁寧にナデ消している。天井部を鍵形に切断する。

口縁部端面には葉脈が重なる圧痕（図99）が残り、木葉を敷いた作業台上で蓋をつくったことがわかる。ただし、後から口縁部の一部を内面側から削り取った際のヘラケズリ痕跡でその多くが消えている。

高さ5cmの粘土帯を何枚か接いで口縁部をつくり、その上に粘土帯を大きく3回に分けて積み上げ体部を成形する。最終の閉塞痕跡が片側の短側内面上端に認められ



図99 赤田5号墓 北陶棺 蓋口縁部端面の葉脈圧痕



図100 赤田5号墓 北陶棺 蓋短側内面の閉塞箇所

（図100）、そこへ向かって反対側の短側面から天井部を指ナデしながら仕上げていった過程が観察できる。この際、粘土は内側へ重ねて成形する。内面には、形持たせの存在を想定させるような痕跡（藁縄状圧痕や板圧痕など）を確認できなかった。

棺身 全長221cm・幅68.5cm・高さ60cmの完形品である。内法寸法は全長201.5cm・幅60cm・高さ43cmとなる。切断された二つの棺身は同一品を2等分したものである。体部～底部の内外面に赤色顔料を塗布するが、脚が取り付く底部外面には認められない。脚部については、外周に配置された脚外面の一部見える範囲のみで、ほとんど塗布されていない。脚底部に黒斑がつく。

底部外面に沿って周底突帯、これと蓋受けの中間に横位突帯を1条めぐらせ外面全体を上下2段に区画する。

そして上段に45条、下段に46条の縦位突帯を貼り付けて片側の長側面に左右17区画、もう片側の長側面に左右18区画、片側の短側面に左右5区画、もう片側の短側面に上段左右5区画・下段左右6区画の方格をつくる。上下段で縦位突帯の位置を違える箇所が多く、段違いの方格を意図的につくろうとしたようにみえる。突帯の貼り付けは横先縦後で、上面を板で押圧した痕跡が多く残る。突帯は幅2cm前後で、棺蓋ほどではないが扁平につぶれた形状をなすものが下段に多くみられる。

体部は隅丸方形の箱形で、器壁は内傾している。口縁部から下へ3～5cmの位置に一条のヨコナデを行

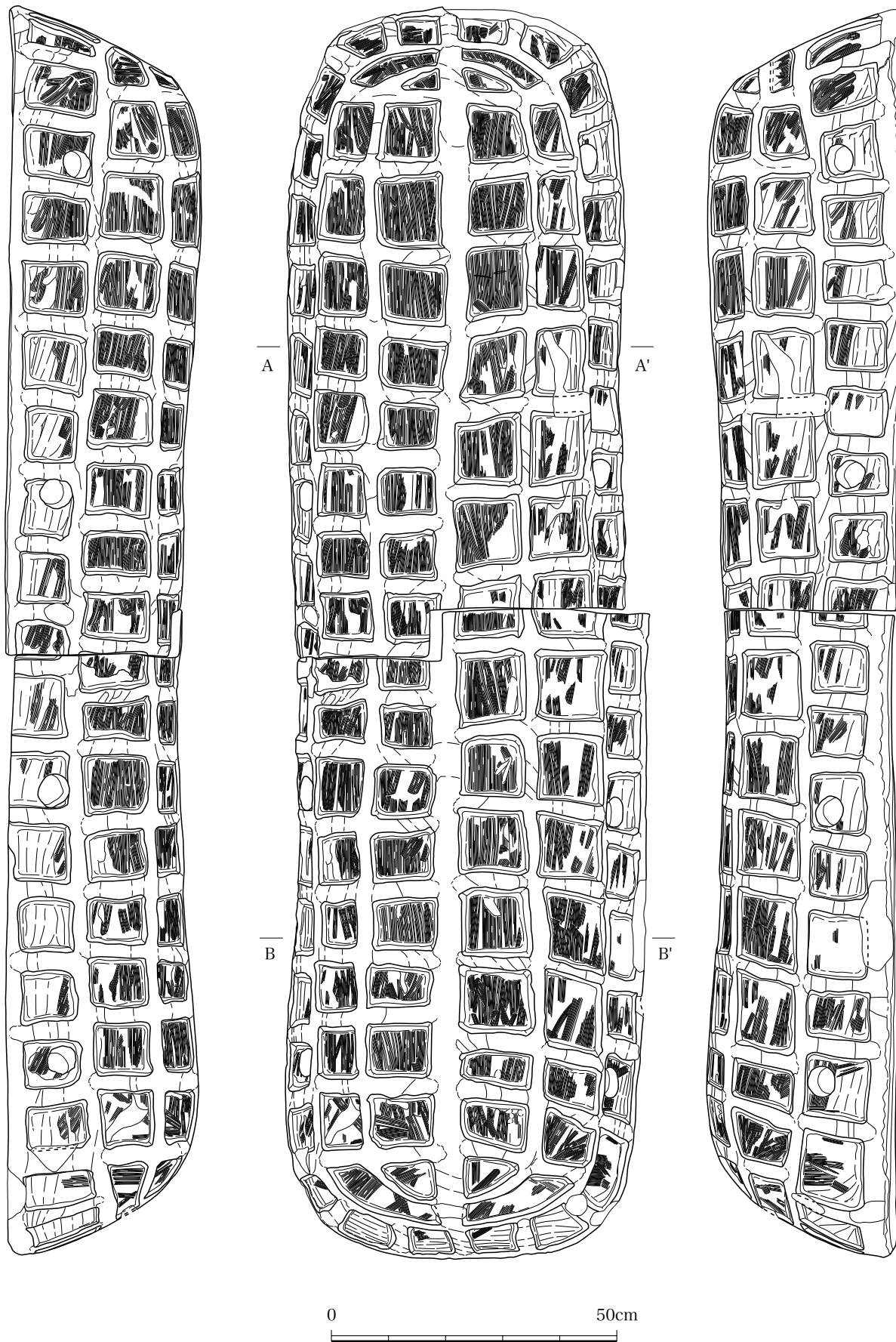


図101 赤田5号墓 北陶棺 蓋外面平面・長側面図 (1/10)

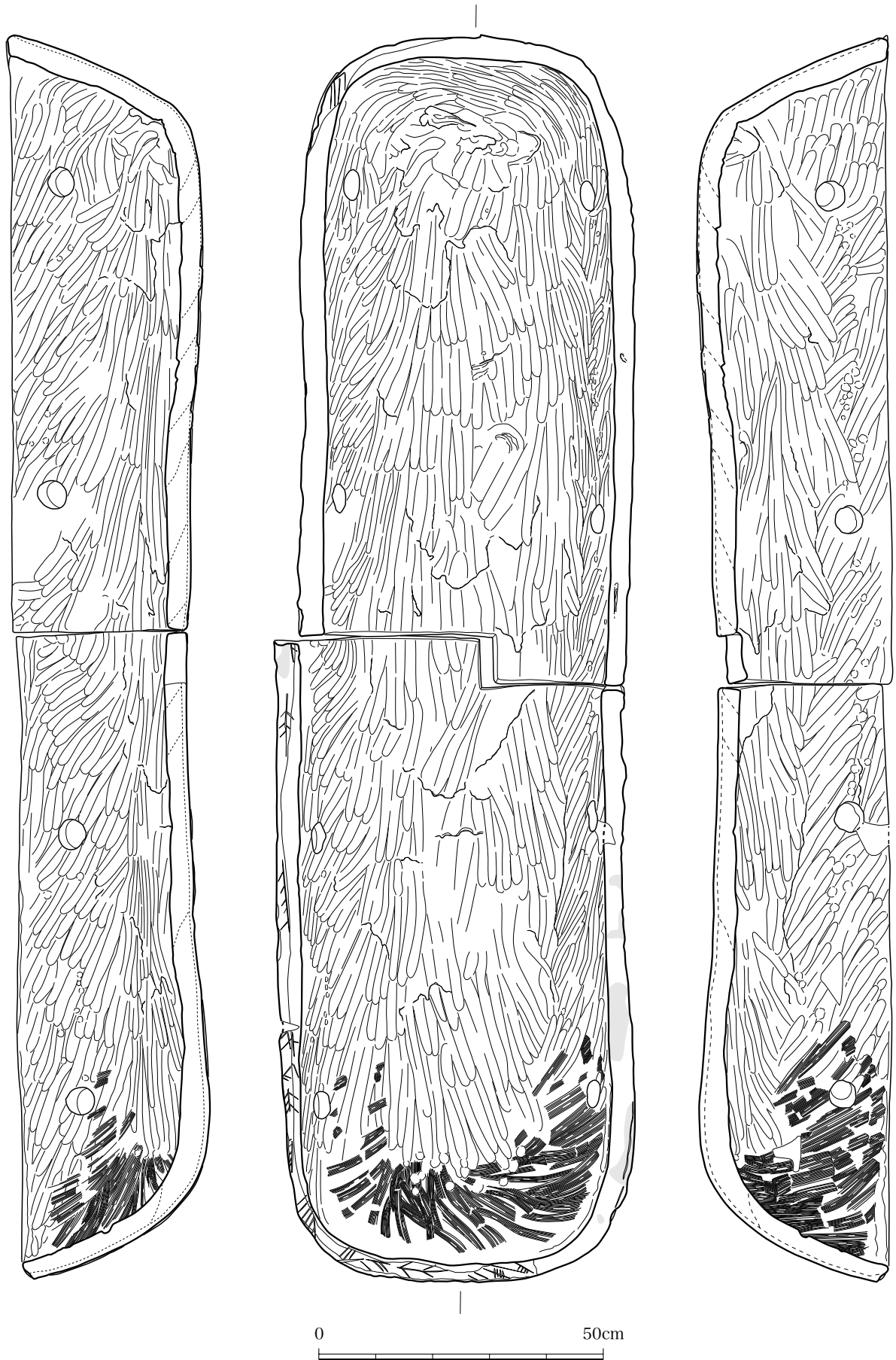


图 102 赤田5号墓 北陶棺 蓋内面平面・長側面図 (1/10)

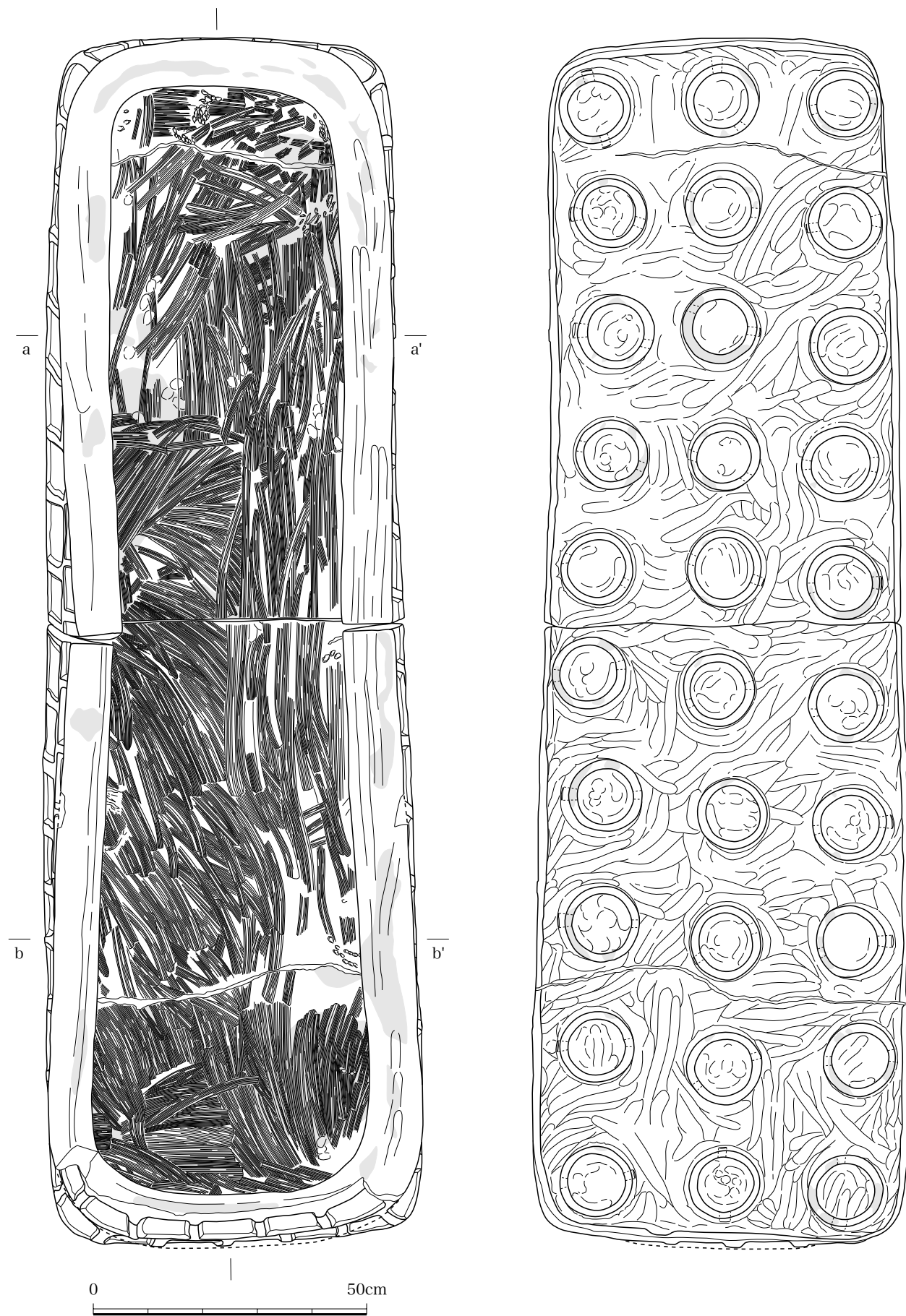


図103 赤田5号墓 北陶棺 身表・裏面平面図 (1/10)



图104 赤田5号墓 北陶棺 身内外面 長側面图1 (1/10)



図105 赤田5号墓 北陶棺 身内外面 長側面図2 (1/10)

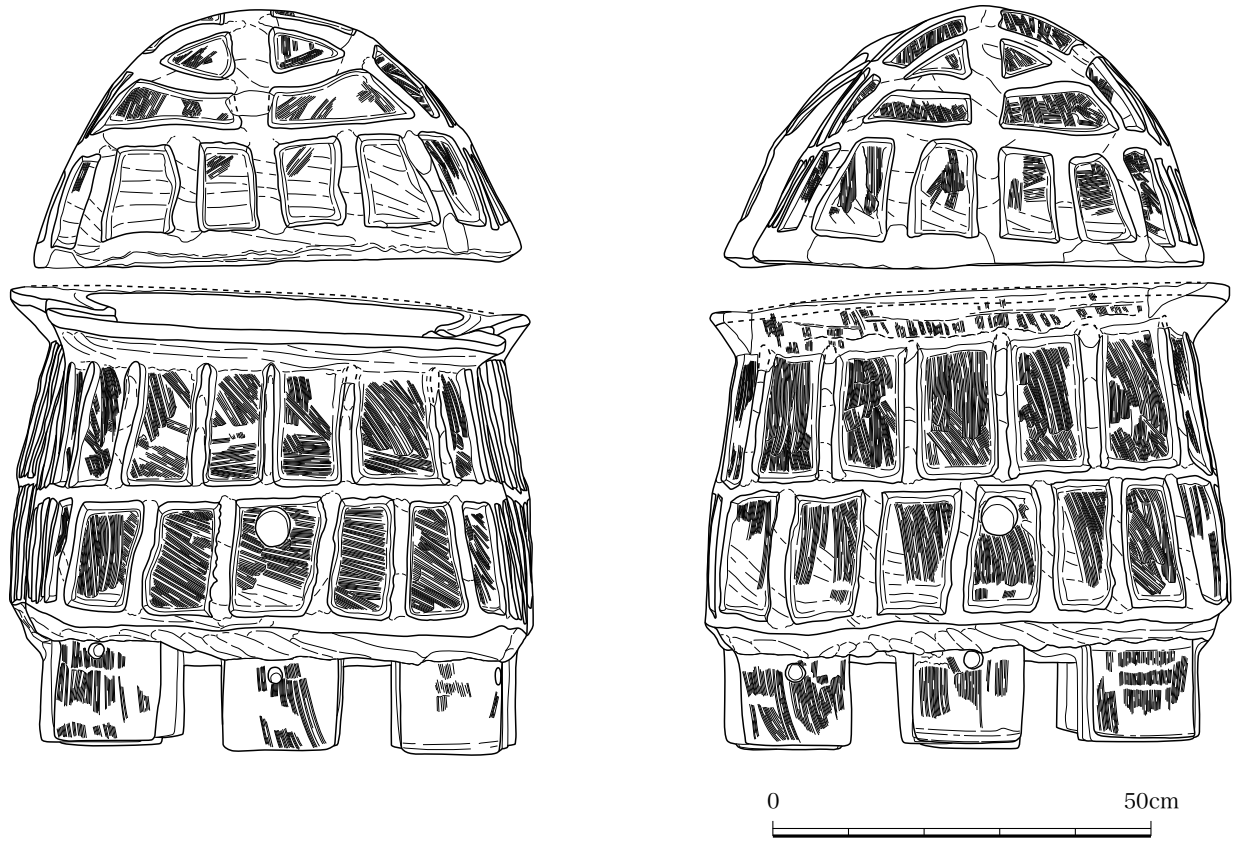


图106 赤田5号墓 北陶棺 盖·身外面 短侧面图1 (1/10)

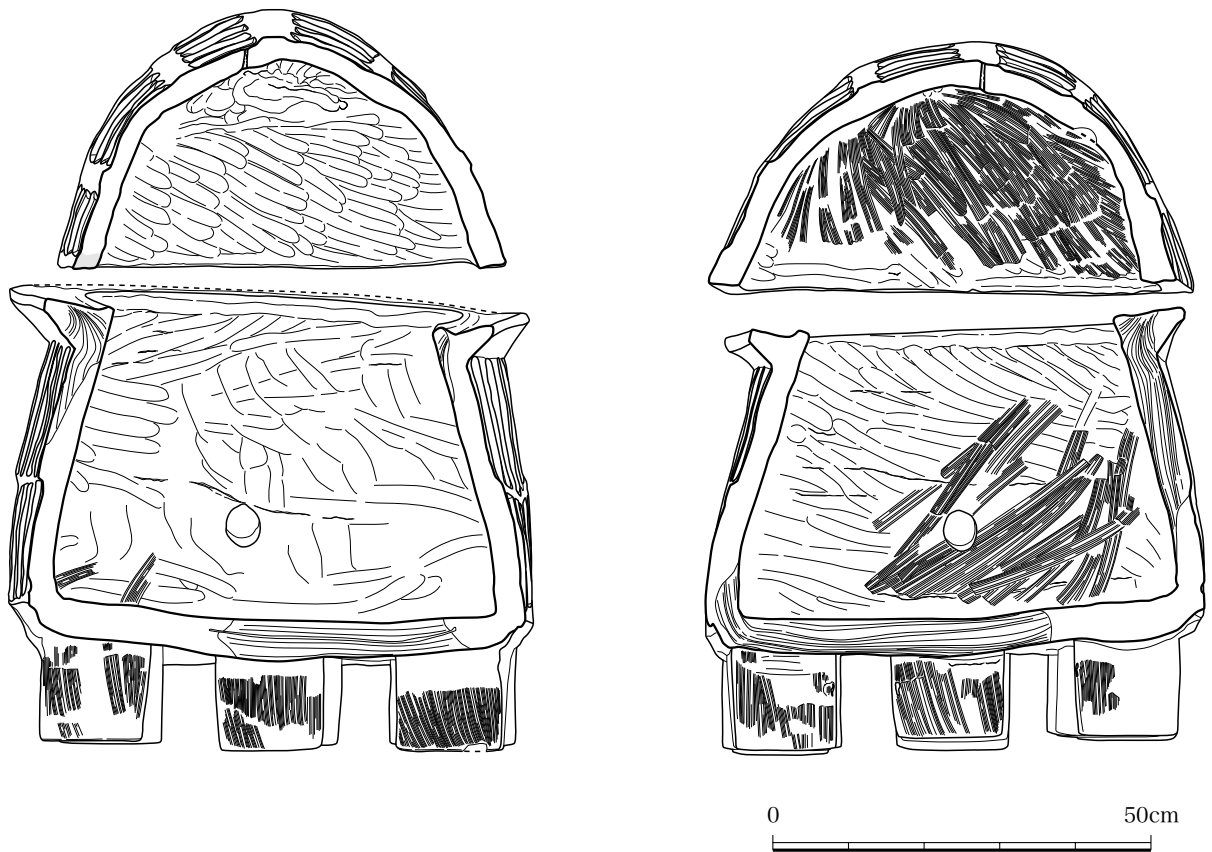


图107 赤田5号墓 北陶棺 盖·身内面 短侧面图2 (1/10)

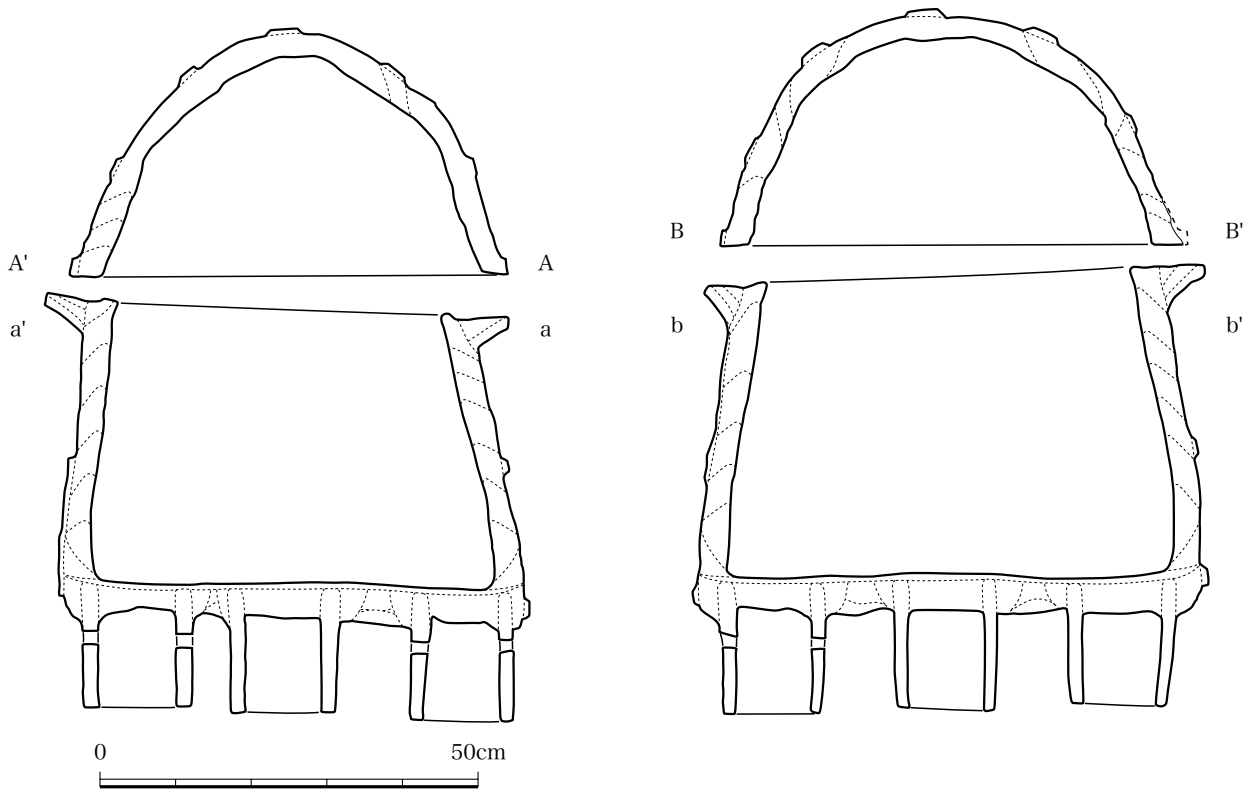


図 108 赤田5号墓 北陶棺 横断面図 (1/10)

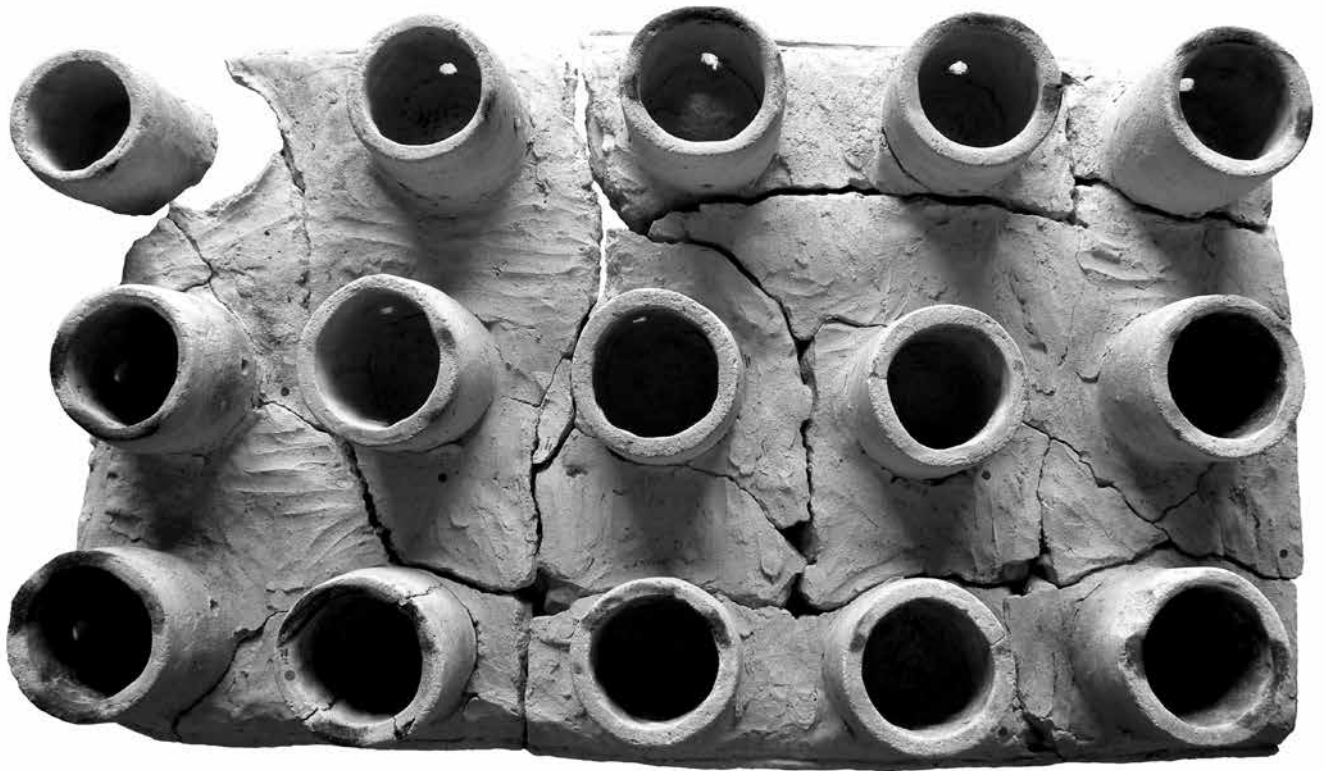


図 109 赤田5号墓 北陶棺 身裏面

い、蓋受け貼り付けのための目印となる横線をつけている(図112)。ここに粘土帯を貼り付け、その上下に補充粘土を加えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。口縁部の高さは1cm未満で、蓋受けとほぼ同一面を形成している。蓋受け上部の補充粘土は、口縁部から一連の蓋受け平坦面をつくるために行われていると考えられる。蓋受けの上面は、平滑になでて仕上げている。蓋受け上面の幅は8~10cm、厚さは端面2cm・接合箇所5cmである。両短側面には、下段中央の区画上方に寄せて径5cm前後の円形透孔があり、陶栓が差し込まれていた。

体部の調整は、下半が内外面ともにタテハケあるいはナナメハケ、上半が外面タテハケ、内面タテナデを基調

とする。その後に内面上半を板押さえて2次調整している。(図118)口縁部内面には、蓋受け貼り付け時のヨコナデ調整がみられる。切断面には糸切り痕跡が認められる。

脚部には10行3列、合計30本の脚が取り付け(図109)。外周へ配置する脚では外面側の透孔を大きく、内面側の透孔を小さく穿孔する。透孔は棒状工具を刺し込んで穿孔し(図114)、大きい孔はそれを指で拡張して作る。内側に配される脚の透孔は小孔2孔を原則とするが、透孔がない脚1点、3孔穿孔する脚1点、4孔穿孔する脚1点が混在する。また、底部との接合箇所付近の内面に虫卵の痕跡(図116)が残る脚が4点あり、

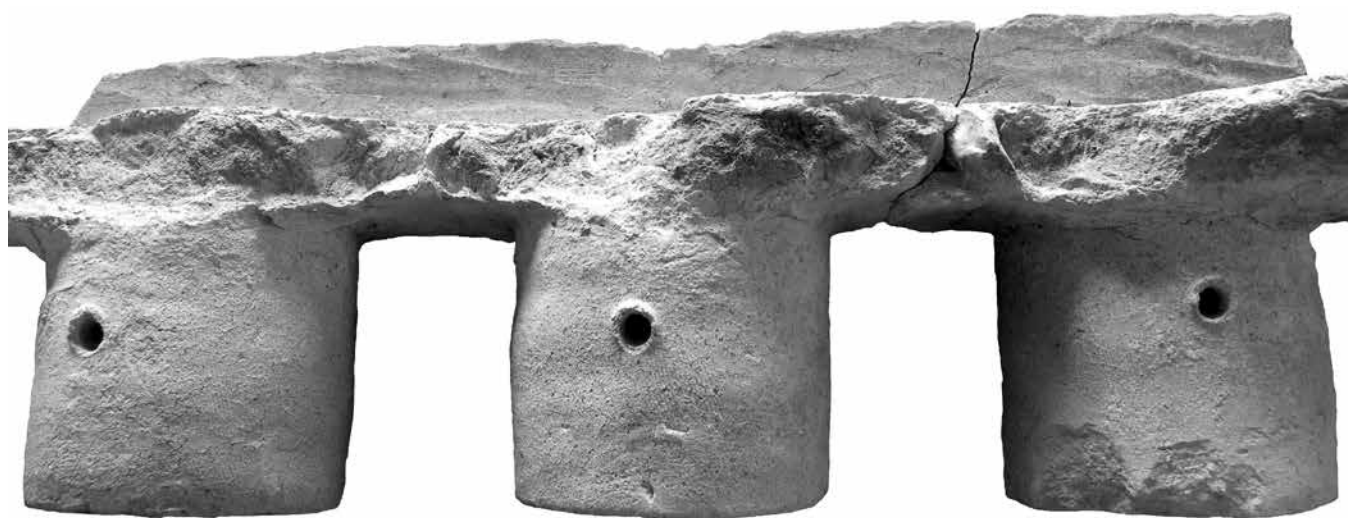


図110 赤田5号墓 北陶棺 長側方向における底部の断面



図111 赤田5号墓 北陶棺 短側方向における底部の断面

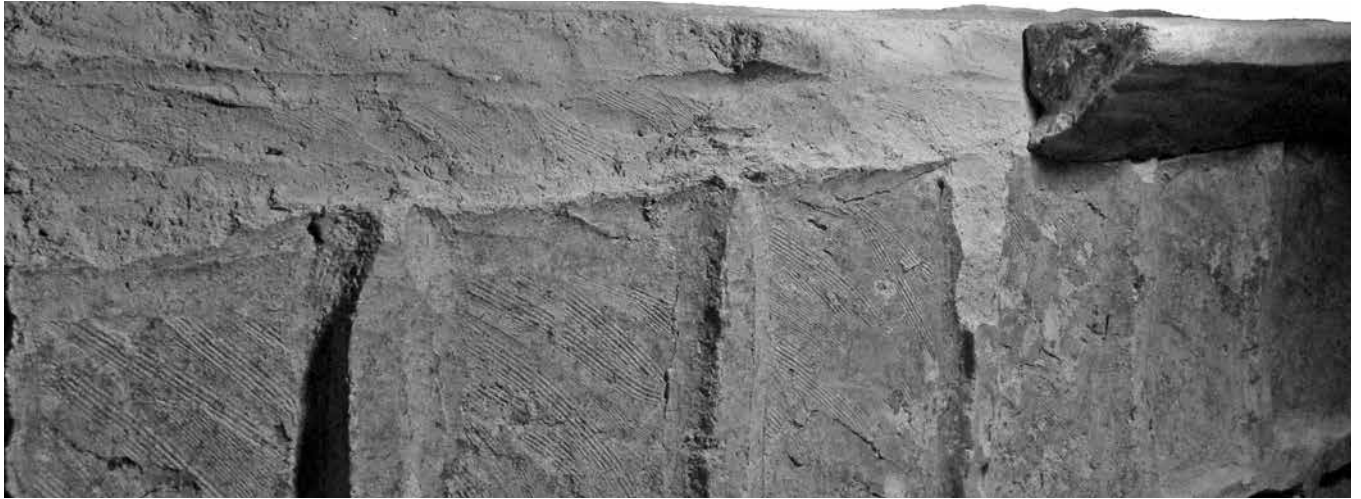


図 112 赤田5号墓 北陶棺 蓋受け接合前のヨコナデ



図 113 赤田5号墓 北陶棺 脚内面に残る穿孔未遂痕跡と透孔



図 115 赤田5号墓 北陶棺 底部と脚の接合状態



図 114 赤田5号墓 北陶棺 透孔に棒を刺し込んでみた状態

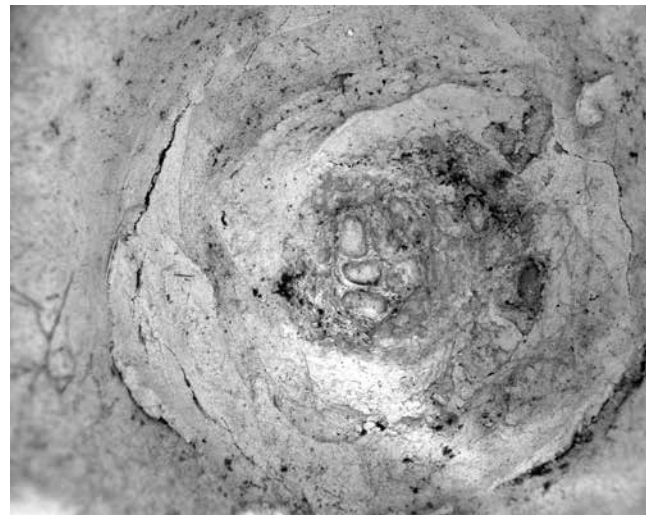


図 116 赤田5号墓 北陶棺 脚内面に残る虫卵の痕跡

乾燥期間内に産みつけられたものと考えられる。調整は、外面タテハケ、内面タテ方向の指ナデである。脚端部はヨコナデ調整され、外面タテハケの方向が上から下へと進んでいるため、脚は成形後に倒立されていることがわ

かる。

脚部から底部にかけての製作は幾つかの工程を経て一体的に行われている。まず、脚となる規格的な円筒（直径14cm前後・高さ15cm前後）を30個つくり、口縁部

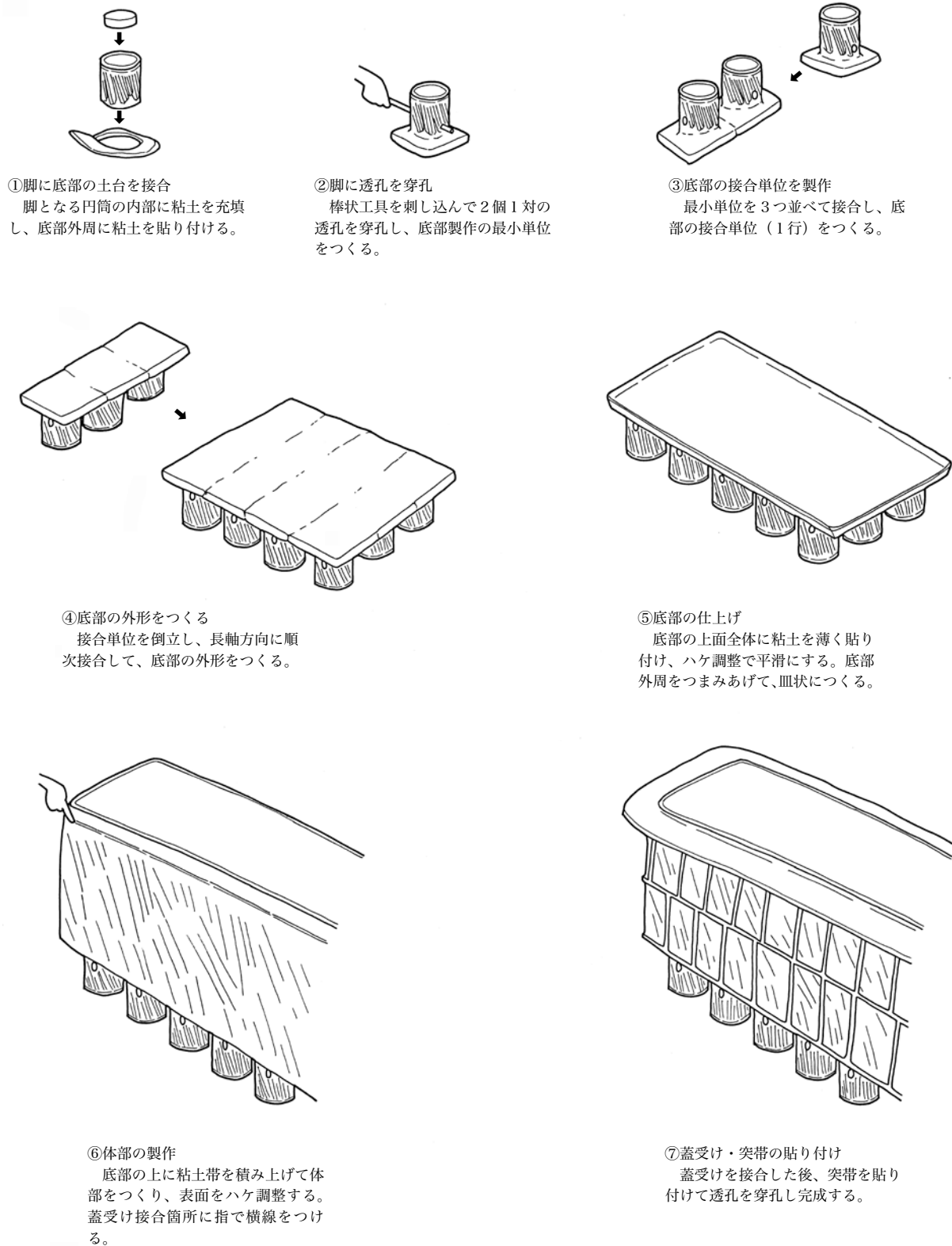


図117 赤田5号墓 北陶棺 製作工程の復原模式図

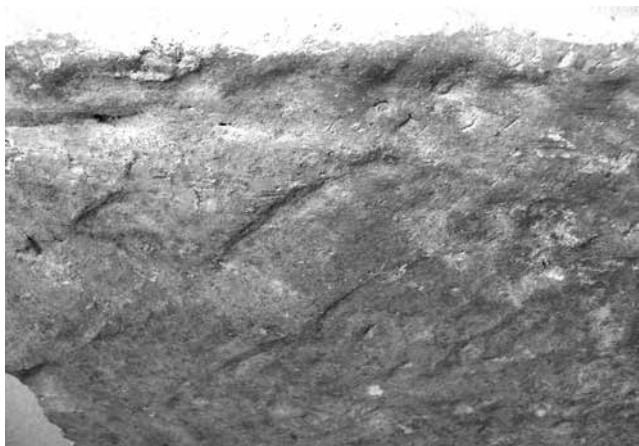


図 118 赤田5号墓 北陶棺 身体部内面の板押え痕跡



図 119 赤田5号墓 北陶棺 身口縁部内面の木目圧痕



図 120 赤田5号墓 北陶棺 身底部内面外周の木目圧痕



図 121 赤田5号墓 北陶棺 身底部内面の脚形状に沿う圧痕

をヨコナデ調整して仕上げる。そして、円筒の底に粘土を充填し丁寧になでて塞ぐ。底部外面の外周にも粘土を二重にやや方形となるようにめぐらせて貼付ける(図115)。この作業を作業台上で行うことによって、隅丸方形の平坦面を有する粘土板(底部の土台)が脚の底に貼り付いた形状ができる。これに透孔を穿孔すると、底部製作の最小単位ができあがる(第1次底部成形)。次にこれを3つ並べて接合し、底部の接合単位を製作したと思われる(第2次底部成形)。これが脚部1行に相当する(図111)。この接合単位を倒立し、長軸方向に10行分接合して底部の外形ができる。これらの接合に際しては、粘土を下から補充しつつ行われている(図110)。その後、底部上面全体に粘土を薄く貼り付け、ハケ調整で平滑に仕上げて底部ができあがる(第3次底部成形)。この際、底部外周を少しつまみ上げるようになでて皿状にし、体部成形の土台とする。

最後に底部外周に沿って粘土帯を積み上げ体部を成形し、蓋受けを接合した後に突帯を貼り付けて完成させる。以上の工程を模式的に示したのが図117である。

高さは、脚部が12～14cm、底部から口縁部が46cm前後である。

なお、口縁部内面と底部内面外周に横方向の板あるいは木目圧痕が残る箇所があり(図119・120)、内側に板を当てて乾燥時の形持たせを組んでいた痕跡ではないかと思われる。また、脚接合部上の底部内面には、脚の形状におおよそ沿って小豆ほどの大きさの圧痕が連続する箇所が幾つか認められた(図121)。これをナデ消そうとした箇所もある。これも何らかの製作痕跡と思われるが、判然としない。

陶栓(図122) 2が北陶棺身東側の短側面透孔に挿入された状態で出土した以外は、北陶棺と奥壁の間から2点(4・6)、南陶棺の周囲から4点(1・3・5・7)の出土である。ただし、南陶棺の棺蓋透孔は概ね4cm×3cmの方形で小さく、この陶栓を挿入できない。したがって、陶栓はすべて北陶棺に挿入されていたと推定できる。南陶棺を追葬する時点ですでに北陶棺に挿入されていた陶栓のほとんどがはずれて落下していたため、南陶棺の周囲へ一部片付けられた可能性が高い。陶栓は7点出土

しているが、北陶棺の透孔は蓋身合わせて10個あり、数が足りない。

陶栓はすべて円柱形で、透孔内に挿入する方を細く、露出する外面の方を太くして製作する。内外面はほぼ平坦である。大きさは最大径4.7～5.2cm前後、長さ4.4～5.7cmで概ね形状がまとまる。基本的に手づくね成形であるが、内面にケズリを認めるもの(3)が1点ある。外面や側面の一部に木目が残るもの(1・3・5・6)が4点あり、板の上で成形した際の痕跡と思われる。1には径1.0mm・深さ3.0mmの小孔が1つ側面にある。6・7の側面に赤色顔料が付着する。黒斑は4以外の6点にみられる。

(2) 南陶棺 (図123～141)

棺身は完形に復原できたものの、棺蓋は片側の半分以上を欠損していた。棺内の副葬品が未盗掘の状態に残されていた点から考えると、追葬時に棺蓋が破損してそれを取り除いたが、一部はそのまま放置された可能性が推測できる。

棺蓋 全長212cm前後・幅80cm・高さ46.5cmに復原できる。内法寸法は全長205cm前後・幅74cm・高さ42cmとなる。外面全体に赤色顔料が丁寧に塗布されるが、内面にはその痕跡がみられない。天井部と口縁部端面に沿って黒斑がみられる。

稜線突帯と口縁部突帯を貼り付け、両突帯の中間に横位突帯を2条めぐらせて外面全体を上中下3段に区画する。稜線突帯は、稜線を三角形に尖らせるようにして天井部にのみ貼り付けており、短側面の縦位突帯とは連

続しない。

長側面縦位突帯は片面に11条と推定でき、上段から下段まで一直線に貼り付けて上中下段ともに左右10区画の方格をつくる。短側面には中段から下段にまっすぐのびる縦位突帯が3条、下段にのみ貼り付く縦位突帯1条がある。これによって、中段に左右4区画、下段に5区画の方格をつくる。

突帯の貼り付けは横先縦後で、上面を板で押圧した痕跡が多く残る。突帯は幅1～1.5cmである。口縁部突帯が口縁端部に接して幅広く貼り付けられており、全体の形状を整える目的で稜線突帯とともに最初に貼り付けられたと思われる。

棺蓋の断面形状は半円形に復原できる。左右の長側面に4つずつ短側面に2つずつ合計12個の方形透孔を下段上寄りにあけると考えられる。

調整は内外面ともに指ナデである。外面はヨコナデ調整が全面にみられる。内面は口縁部から体部下半を左上がりのナメナデ調整した後、体部上半から天井部を短側内面上端の閉塞箇所に向かってヨコナデ調整する。切断面にはヘラ切り痕跡が残っている。天井部を鍵形に切断する。

口縁部端面には葉脈が重なる圧痕(図123)が残り、木葉を敷いた作業台上で蓋をつくったことがわかる。

高さ4cm前後の粘土帯を隅丸方形にめぐらせて、平面形の外周をつくる。その上に幅4cm前後の粘土帯を積み上げ体部を成形する。この際、少なくとも長側面1箇所(長側面中央から少し片側に寄るため、欠損部分にもう

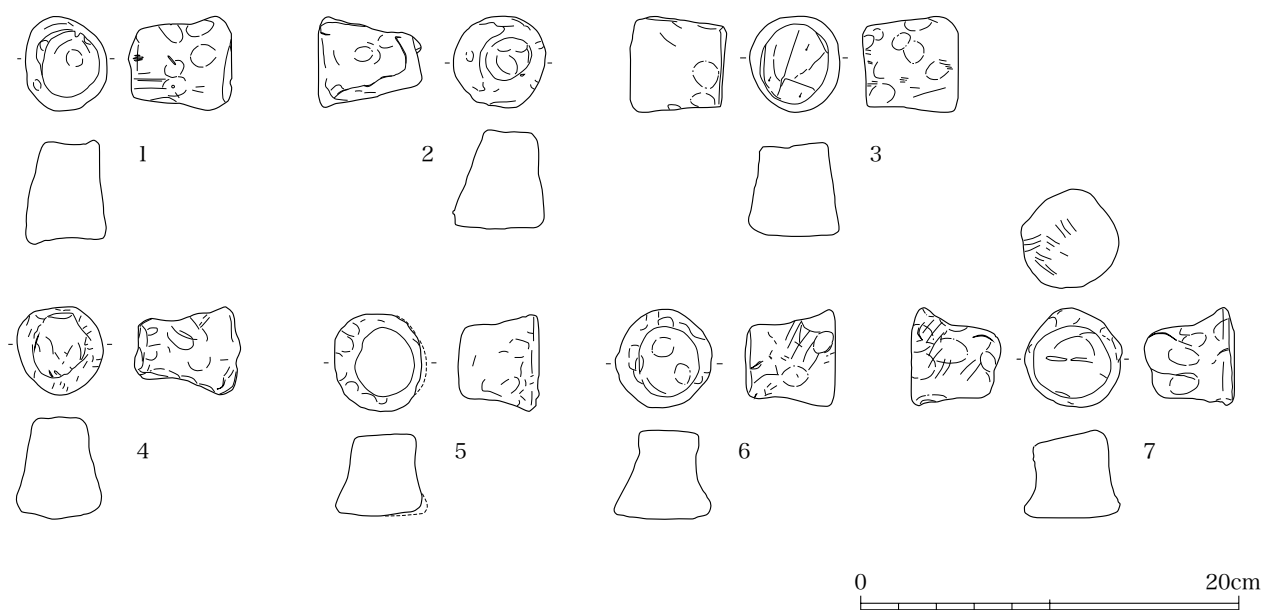


図122 赤田5号墓 北陶棺 玄室出土陶栓 (1/4)

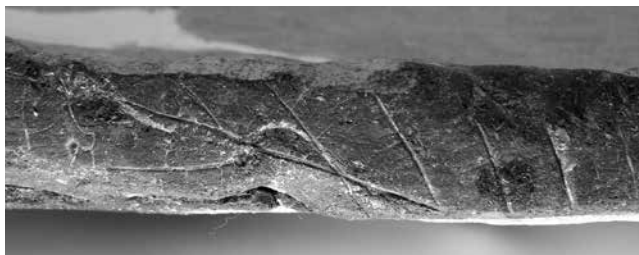


図 123 赤田 5 号墓 南陶棺 蓋口縁端面の葉脈圧痕



図 124 赤田 5 号墓 南陶棺 蓋天井部内面の痕跡



図 125 赤田 5 号墓 南陶棺 蓋長側面の木板はめ込み孔閉塞痕跡 (外面)



図 126 赤田 5 号墓 南陶棺 蓋長側面の木板はめ込み孔閉塞痕跡 (内面)

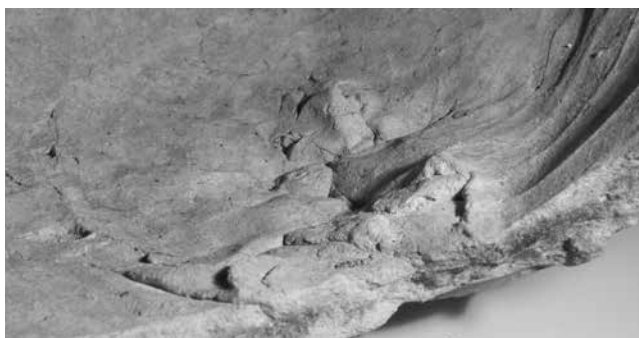


図 127 赤田 5 号墓 南陶棺 短側内面の閉塞痕跡

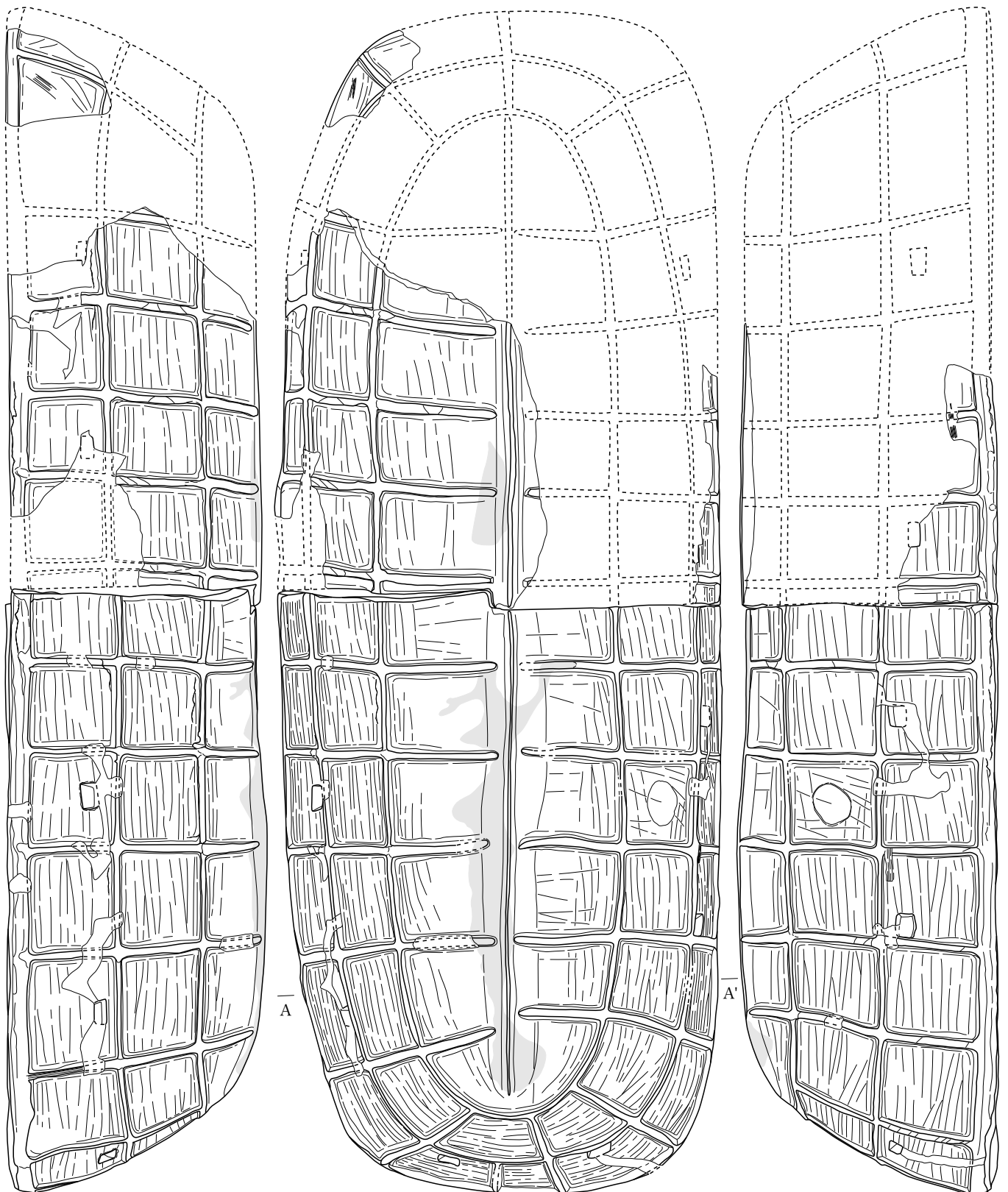
一つあった可能性もある)に木製円板(直径約7cm)をはめ込み、円板の取り外し可能な穴を設ける。穴の側面に顕著な木目が重複して残るのはこのためと推測できる(図125・126)。この穴は一連の内外面ナデ調整で痕跡が消されており、最終の閉塞前に塞がれている。おそらく天井成形時にこの穴から手を入れて粘土を支持したもののと思われ、穴の下方のみ腕があたったためか木目が消えている。

最終の閉塞痕跡が片側の短側内面上端に認められ(図127)、そこへ向かって反対側の短側面から指ナデしながら仕上げていった過程が観察できる。この際、粘土は内側へ重ねて成形する。また、天井部内面に藁や木の圧痕・刺突痕が不規則に認められ(図124)、乾燥時の形持たせに関連する痕跡かとも思われるが判然としない。

棺身 全長219cm・幅77.5cm・高さ64cmの完形品である。内法寸法は全長200cm・幅60cm・高さ44cmとなる。体部～底部の内外面に赤色顔料を塗布するが、脚が取り付く底部裏面には認められない。脚部については外周に配置された脚外面の一部見える範囲のみで、ほとんど塗布されていない。底部内面の一部と脚底部に黒斑がつく。底部外面に沿って周底突帯、これと蓋受けの中間に横位突帯を1条めぐらせ外面全体を上下2段に区画する。そして、蓋受け直下から周底突帯へ33条の縦位突帯を貼り付け、片側の長側面に左右12区画、もう片側の長側面に左右13区画、短側面に左右4区画の方格をつくる。なお、上下段で縦位突帯の位置が一直線に揃うよう貼り付けているが、若干異なる部分も2箇所ある。突帯の貼り付けは横先縦後で、上面を板で押圧した痕跡が多く残る。突帯は幅3cm前後で幅広く、棺蓋に比べて扁平につぶれた形状をしている。

体部は隅丸方形の箱形で、長側面が全体にやや歪んで傾いている。口縁端部から下へ4cm前後の位置に粘土帯を貼り付け、その下に補充粘土を加えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。蓋受けの上面は、平滑になでて仕上げている。口縁部の高さは2～3cmで、蓋受け上面の幅6～7cm、端面の厚さ2cmである。

蓋受け下辺の接合箇所寄りに沿って刺突孔列がめぐる(図132)。下から上へ扁平な棒を突き刺したような孔で、ほとんどが貫通していない。孔の大きさは1cm前後×0.3～0.4cmである。刺突方向と合致する位置で横位突帯上に圧痕が残る箇所が認められるので(図133)、突き刺した棒が長く下方へ延びていたことがわかる。刺突孔は14～18cm前後の間隔で概ね1区画に1つずつ認められ、合計31本の棒を周囲に突き刺した状況を想定できる。



黒斑

0 50cm

图128 赤田5号墓 南陶棺 盖外面平面·立面图 (1/10)



图129 赤田5号墓 南陶棺 蓋内面平面・立面图 (1/10)

この点から、刺突孔列は乾燥時に体部器壁が外側へ倒れないように棒を密に突き刺して支持した痕跡と推測している。

体部の調整は外面がヨコハケで、内面は下半がナメナデ、上半がヨコナデである。底部外面の脚との接合箇所では、2次調整のタテハケを行なった後にヨコハケ調整している。内面調整が上下で変化するのは、大きく2度の工程を経て体部が成形されたことを示している。切断面には糸切り痕跡が明瞭に認められる。糸切り痕跡の観察から、まず底部中央に糸を通すための小孔をあけ、そこを始点にして左右を切り分けたことがわかる(図130)。

脚部には8行3列、合計24本の脚が取り付く。調整は、外面タテハケ、内面タテ方向の指ナデである。脚端部はヨコナデ調整されており、外面タテハケの方向が上から下へと進んでいるため、脚は成形後に倒立されていることがわかる。2個1対の円形透孔があり、それを正面に見て時計回りに穿孔する。外面側に透孔を向けない脚もあり、穿孔方向が不規則となる場所が多く統一感を欠く。埋葬時に北面を向いていた長側面へ配列された脚の外側へ向く透孔の周囲にだけ3～10本のヘラ描き沈線が認められる(図140)。ヘラ描き沈線は、底部貼付け時のナデで一部消される。

底面には、脚との接合箇所に1孔ずつ合計24の小穿孔が認められる。小穿孔は径0.5cmの棒を上から下へ突き刺してあけられており、底部を貫通する(図139)。

脚部から底部にかけての製作は幾つかの工程を経て一体的に行われている。まず、脚となる規格的な円筒(直径16cm前後・高さ19cm前後)を24個つくり、口縁部をヨコナデ調整して仕上げる。そして、円筒の底に粘土を充填し丁寧になでて塞ぐ。底部外面の外周にも粘土をめぐらせて貼り付ける。この作業を作業台上で行うこと

によって、平坦面を有する粘土板(底部の土台)が脚の底に貼り付いた形状ができる。これを倒立して透孔を穿孔すると、底部製作の最小単位ができあがる(第1次底部成形、図131)。次にこれを3つ並べて接合し、底部製作の接合単位を製作したと思われる(第2次底部成形)。これが脚部1行に相当する。この接合単位を長軸方向に8行分接合して底部の外形ができる。これらの接合に際しては、粘土を下から補充しつつ行われている。その後、底部上面全体に粘土を貼り付け、ナデ調整で平滑に仕上げ底部ができあがる(第3次底部成形)。この際、底部外周を少しつまみ上げるようになでて皿状にし、体部成形の土台とする。

次に底部外周に沿って粘土帯を積み上げ体部を成形する。この際、脚部に接する箇所は下から上へタテハケ調整して形を整え、その上から外面全体をヨコハケ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整である。

蓋受けを接合した後、突帯を貼り付けて完成する。高さは、脚部が16～17cm、底部から口縁部が46cm前後



図130 赤田5号墓 南陶棺 底部中央の糸通し孔と糸切り痕跡



図131 赤田5号墓 南陶棺 第1次底部成形時の貼付け粘土



図132 赤田5号墓 南陶棺 蓋受け下辺の刺突孔列



図133 赤田5号墓 南陶棺 刺突孔と横位突帯上の圧痕

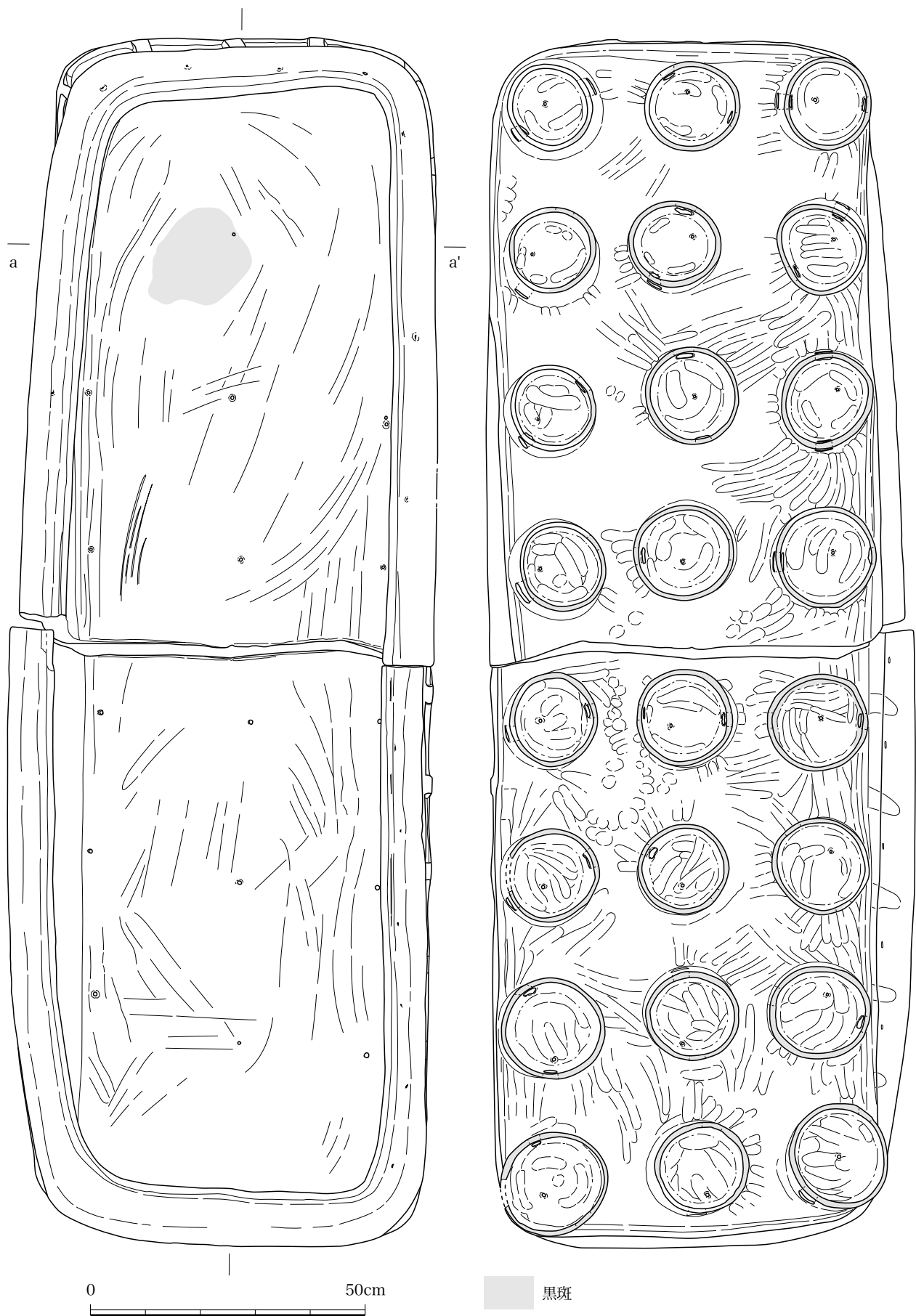


図 134 赤田5号墓 南陶棺 身表面・裏面平面図 (1/10)

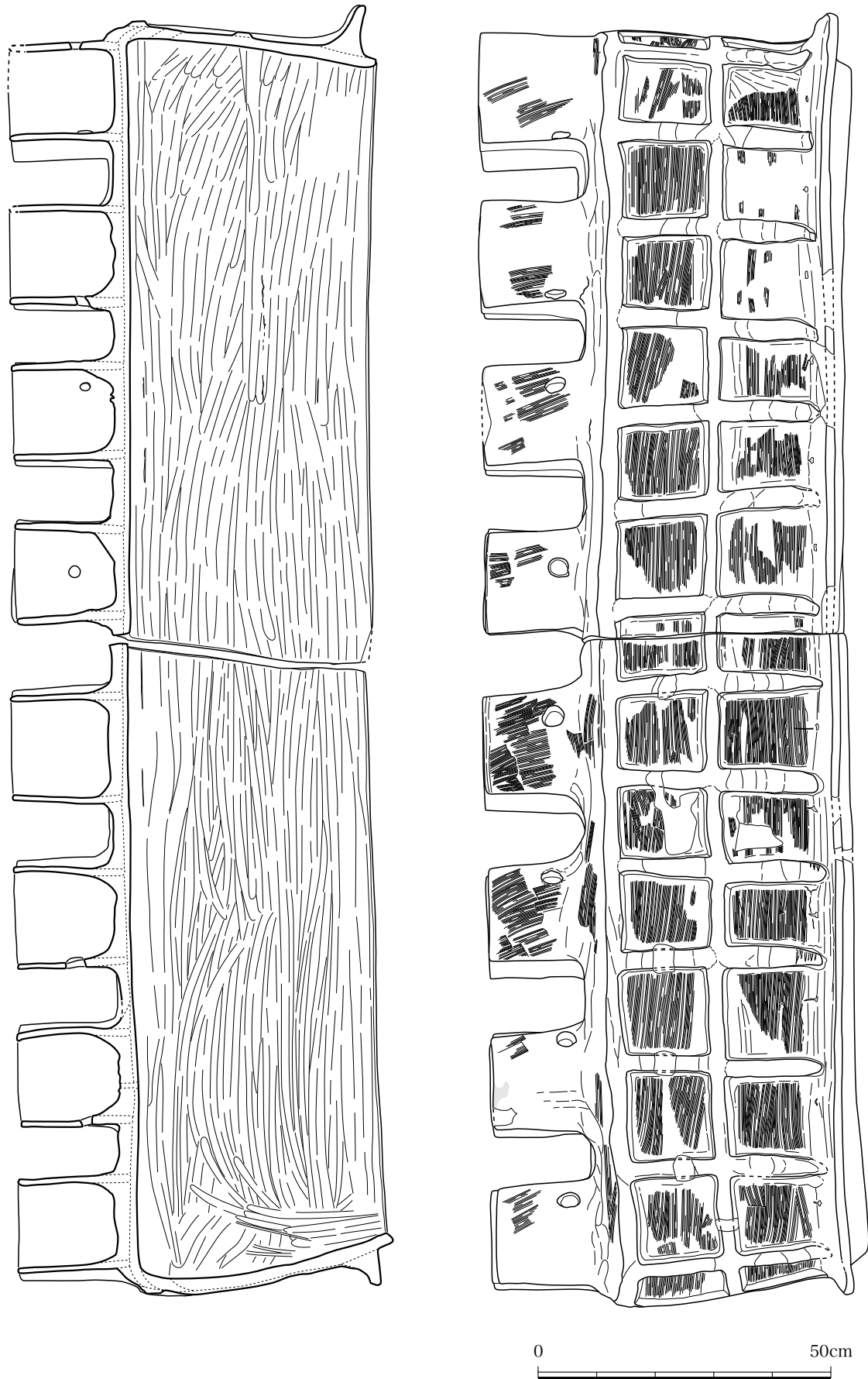


图 135 赤田5号墓 南陶棺 身長側内外面立面图 1 (1/10)

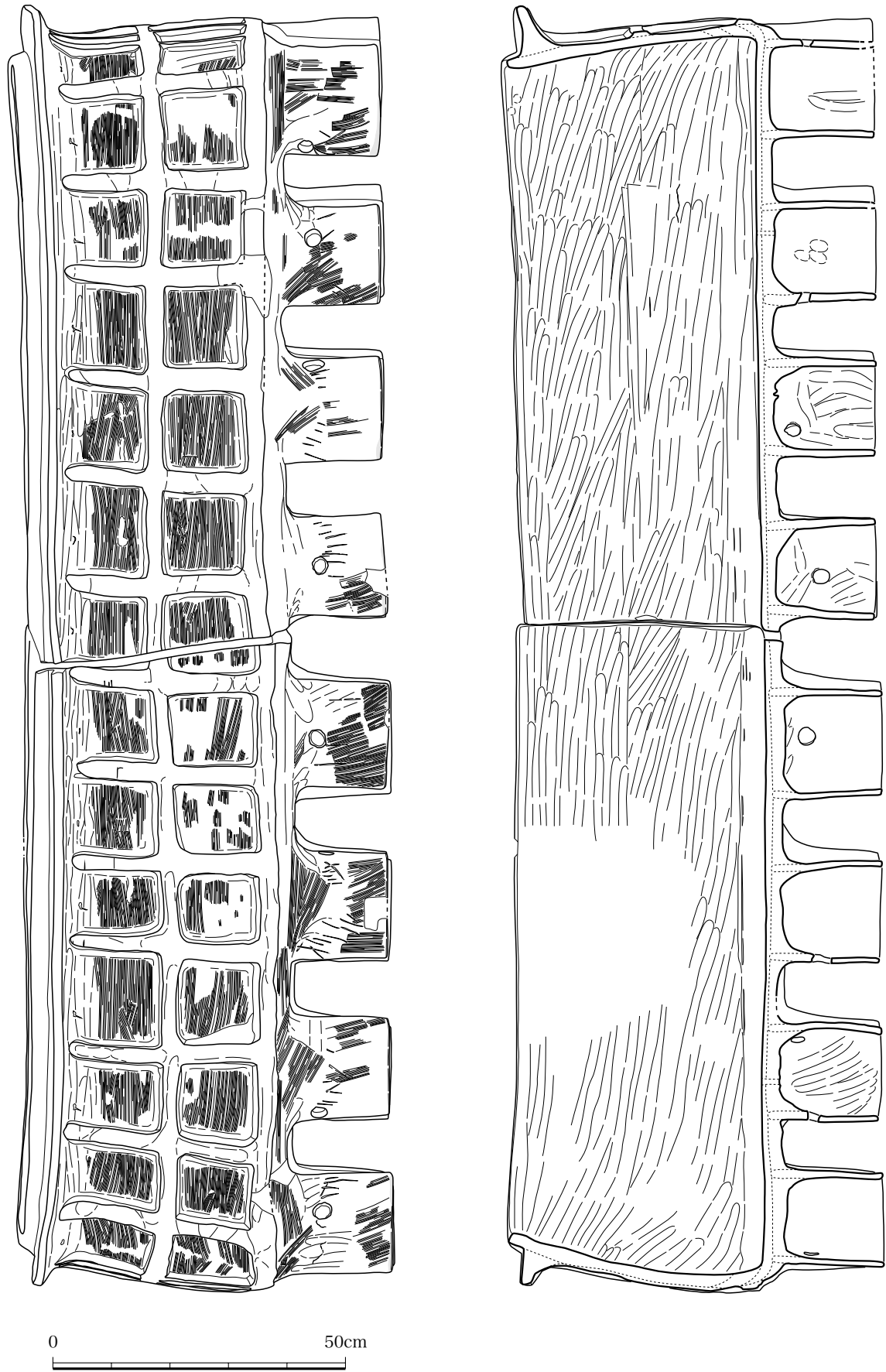


図136 赤田5号墓 南陶棺 身長側内外面立面図2 (1/10)

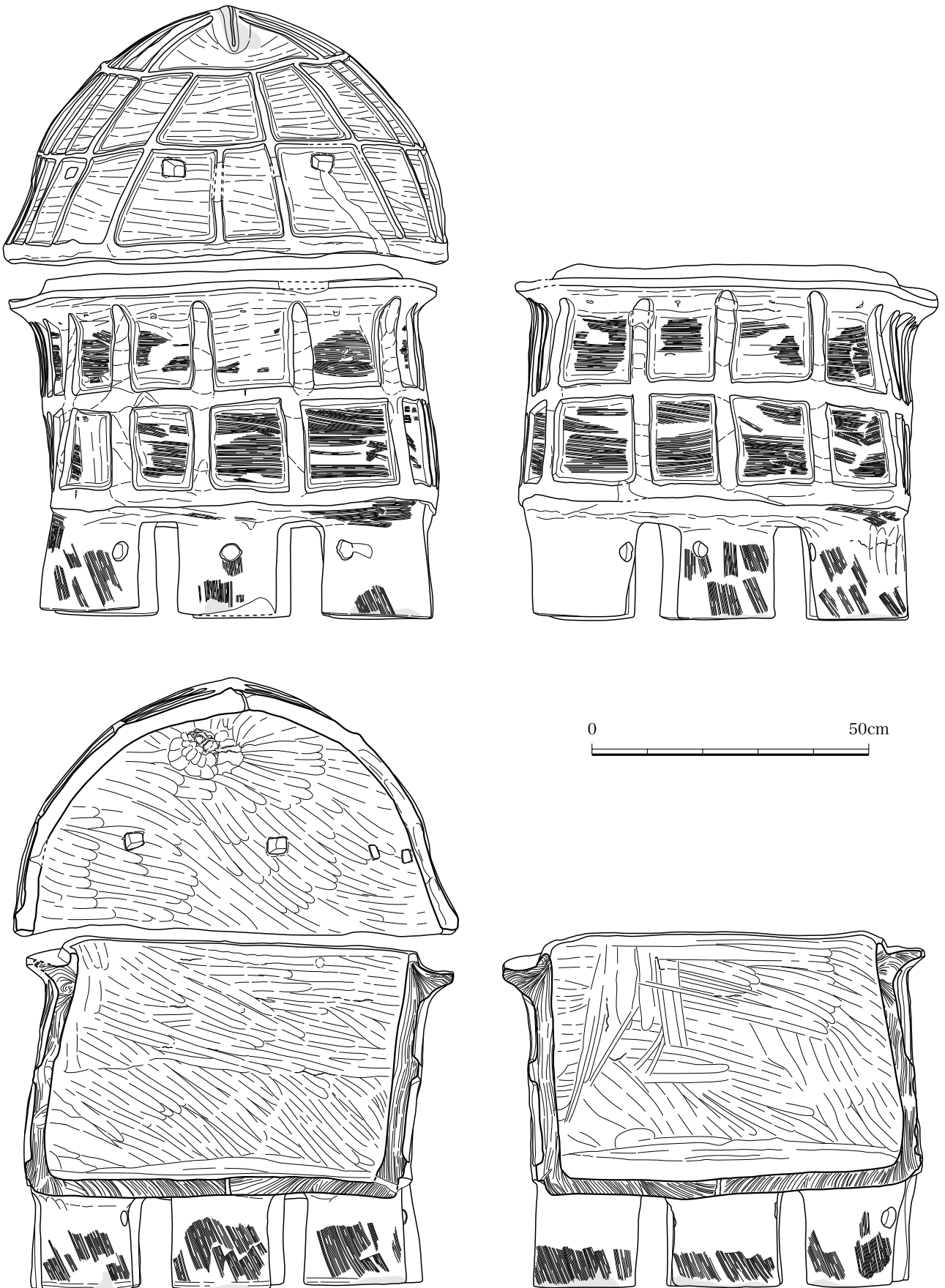


图137 赤田5号墓 南陶棺 短侧内外面立面图 (1/10)

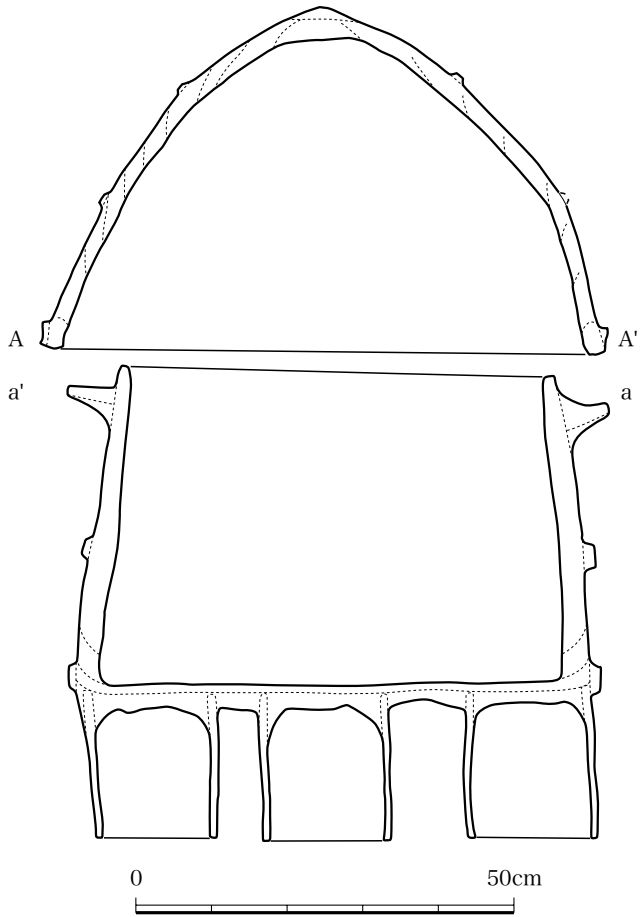


図 138 赤田 5 号墓 南陶棺 横断面図 (1/10)



図 139 赤田 5 号墓 南陶棺 脚内面からみた小穿孔と透孔



図 140 赤田 5 号墓 南陶棺 長側面脚部透孔周囲にみられるヘラ描き沈線

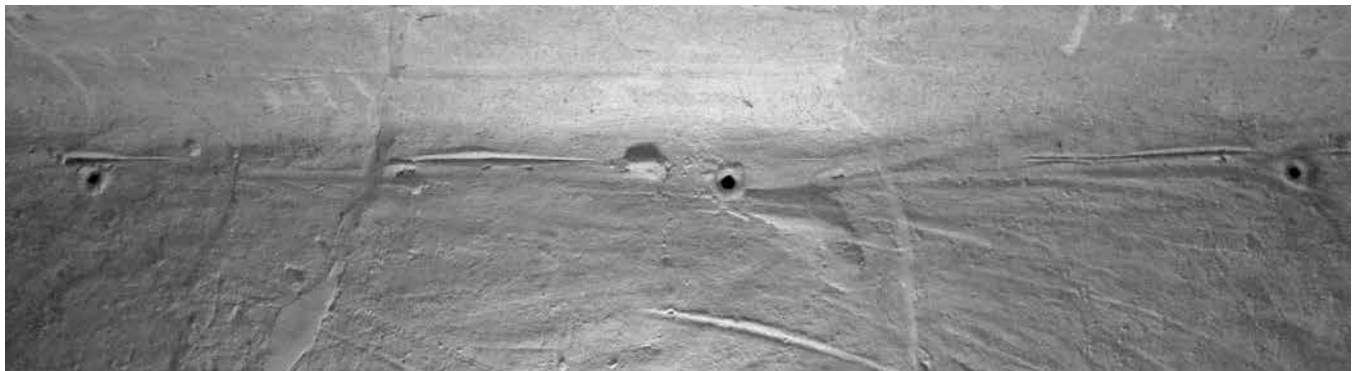


図 141 赤田 5 号墓 南陶棺 底部内面の長側縁に沿う横方向の板圧痕

である。

なお、底部内面の長側縁に沿って横方向の板圧痕が残る箇所があり（図141）、内側に板を当てて乾燥時の形持たせを組んでいた痕跡ではないかと思われる。

（鐘方正樹）

2. 玉類、金属器

(1) 北陶棺の副葬品（図147）

玉類（1～24）玉類には、ガラス玉13点（図11、13・14）、土玉1点（12）、琥珀玉1点（15）、管玉9点（図16～24）がある。そして、ガラス玉には大小があり、小玉11点（1～11）と丸玉2点（13・14）に分けられる。ガラス小玉の色調は、10が青緑色である以外、すべて青色である。ガラス丸玉と土玉の大きさは似ており、琥珀玉はそれらよりも大きい。管玉は直径1.1～1.5cm・長さ3.5～4.3cmで概ね大きさが揃っており、18が両面穿孔である以外はすべて片面穿孔である。

耳環（25・26）25は銅芯に金銀の合金板を巻く耳環である。開口部の接面には板のたたみ込みが認められる。板巻の銅芯を曲げて製作した際にできたと思われる皺が内側面の一部に残る。開口部の両端付近では、外側面が平らに潰れ、内側面に二つの凹みがついている。これは製作時に鉗子状工具で挟んだ痕跡と考えられる。平面はやや横長の楕円形で、外径2.752cm×2.513cm、内径1.71cm×1.505cm。断面はほぼ円形で、厚さ0.525cm×0.54cm。26は銅芯に金銀の合金板を巻く耳環であ



図142 赤田5号墓 北陶棺出土耳環（25）開口部外側面



図144 赤田5号墓 北陶棺出土耳環（26）開口部外側面



図143 赤田5号墓 北陶棺出土耳環（25）開口部内側面



図145 赤田5号墓 北陶棺出土耳環（26）開口部内側面

る。開口部の接面には板のたたみ込みが認められる。板巻の銅芯を曲げて製作した際にできたと思われる皺が内側面の一部に残る。開口部の両端付近では、外側面が平らに潰れ、内側面に二つの凹みがついている。これは製作時に鉗子状工具で挟んだ痕跡と考えられる。平面はやや横長の楕円形で、外径2.74cm×2.48cm、内径1.68cm×1.495cm。断面はほぼ円形で、厚さ0.54cm×0.53cm。2点の耳環は製作手法と大きさが同じであり、同一工人がセットで製作した可能性が高いと推測できる。

表2 赤田5号墓 北陶棺出土玉類観察表

番号	種類	材質	色調	直径/長さ		孔径 (mm)		重量 (g)	備考
				(mm)	(mm)	最大径	最小径		
図147-1	ガラス玉	ガラス	青	3.85	2.15	0.96	0.90	0.043	
図147-2	ガラス玉	ガラス	青	3.78	2.34	0.94	0.72	0.048	
図147-3	ガラス玉	ガラス	青	4.14	2.50	0.94	0.75	0.059	
図147-4	ガラス玉	ガラス	青	3.82	2.29	1.08	0.78	0.039	
図147-5	ガラス玉	ガラス	青	3.82	2.06	1.06	0.92	0.039	
図147-6	ガラス玉	ガラス	青	3.78	2.66	0.96	0.95	0.046	
図147-7	ガラス玉	ガラス	青	4.11	2.27	1.20	0.89	0.053	
図147-8	ガラス玉	ガラス	青	3.77	2.78	1.03	0.83	0.051	3片接合、一部欠損
図147-9	ガラス玉	ガラス	青	3.49	2.84	0.74		0.045	
図147-10	ガラス玉	ガラス	青緑	4.05	3.10	0.45	0.26	0.66	
図147-11	ガラス玉	ガラス	青	3.70	2.44	0.84	0.82	0.047	
図147-12	土玉	粘土	暗褐色	5.59	4.12	1.00	0.84	0.133	
図147-13	ガラス玉	ガラス	淡緑色	6.65	5.04	1.44	0.98	0.300	
図147-14	ガラス玉	ガラス	淡緑色	6.72	5.19	0.84		0.278	2片接合、一部欠損
図147-15	琥珀玉	琥珀	赤褐色	10.16	9.99	3.77	3.33	0.646	
図147-16	管玉	碧玉	濃緑色	7.97	17.24	2.58	1.18	1.945	片面穿孔
図147-17	管玉	碧玉	濃緑色	5.84	17.89	2.32	1.34	1.060	片面穿孔
図147-18	管玉	碧玉	濃緑色	6.19	18.78	1.88	1.82	1.347	両面穿孔
図147-19	管玉	碧玉	濃緑色	6.83	19.87	2.13	0.99	1.648	片面穿孔
図147-20	管玉	碧玉	濃緑色	6.19	20.65	1.98	0.84	1.459	片面穿孔
図147-21	管玉	碧玉	濃緑色	6.78	20.20	2.54	0.88	1.727	片面穿孔
図147-22	管玉	碧玉	濃緑色	6.56	21.03	2.59	0.95	1.632	片面穿孔
図147-23	管玉	碧玉	濃緑色	6.61	21.38	2.39	1.32	1.673	片面穿孔
図147-24	管玉	碧玉	濃緑色	6.81	20.26	2.05	0.63	1.758	片面穿孔

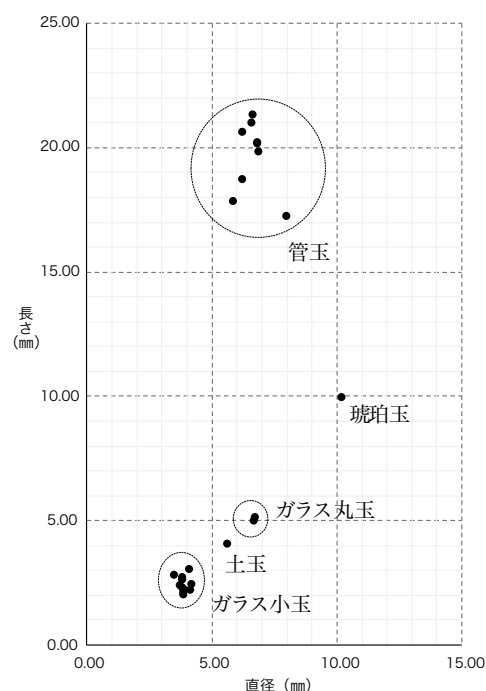


図146 赤田5号墓 玉類法量分布

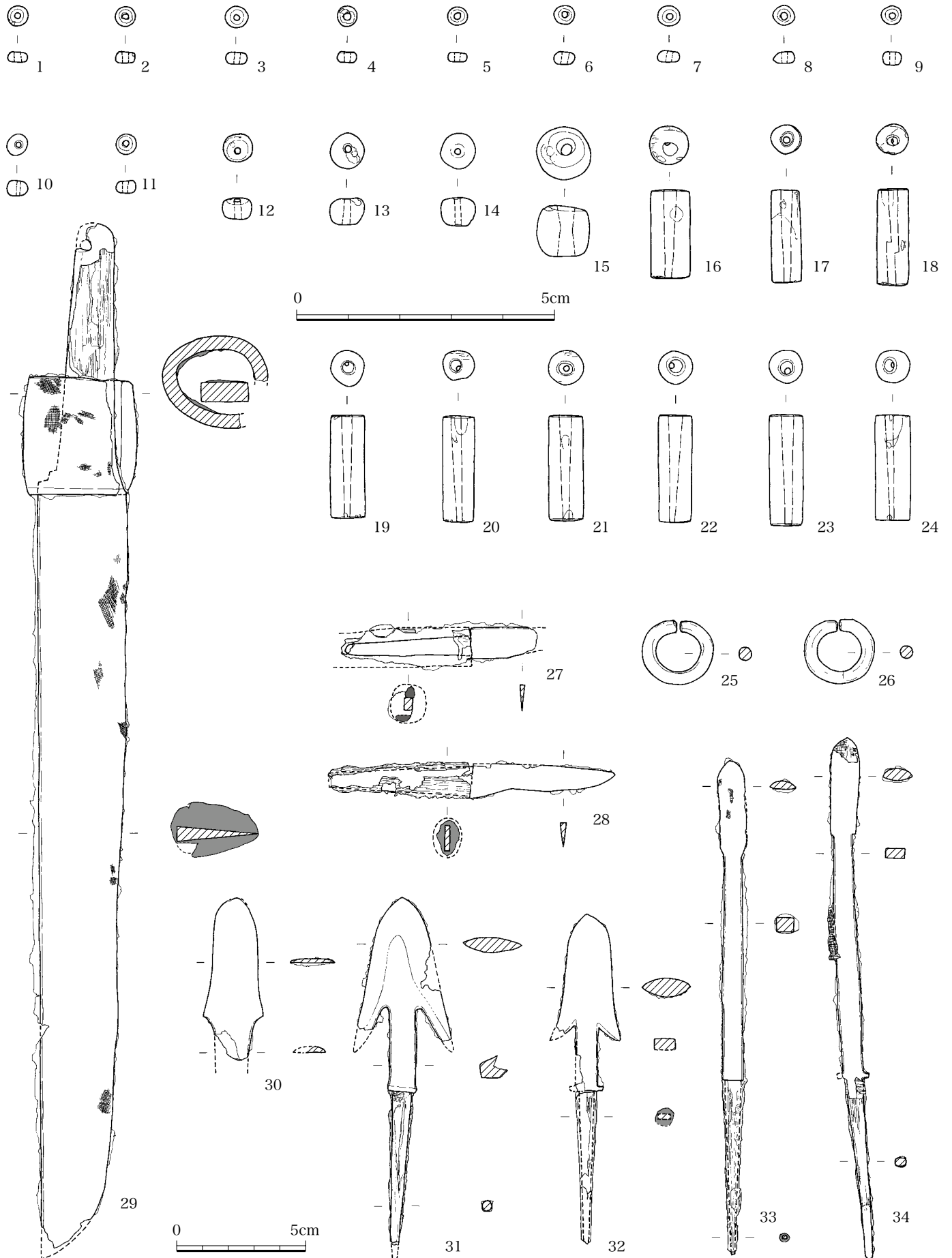


図 147 赤田 5 号墓 北陶棺出土遺物 (1 ~ 24 は実大、25 ~ 34 は 1/2)

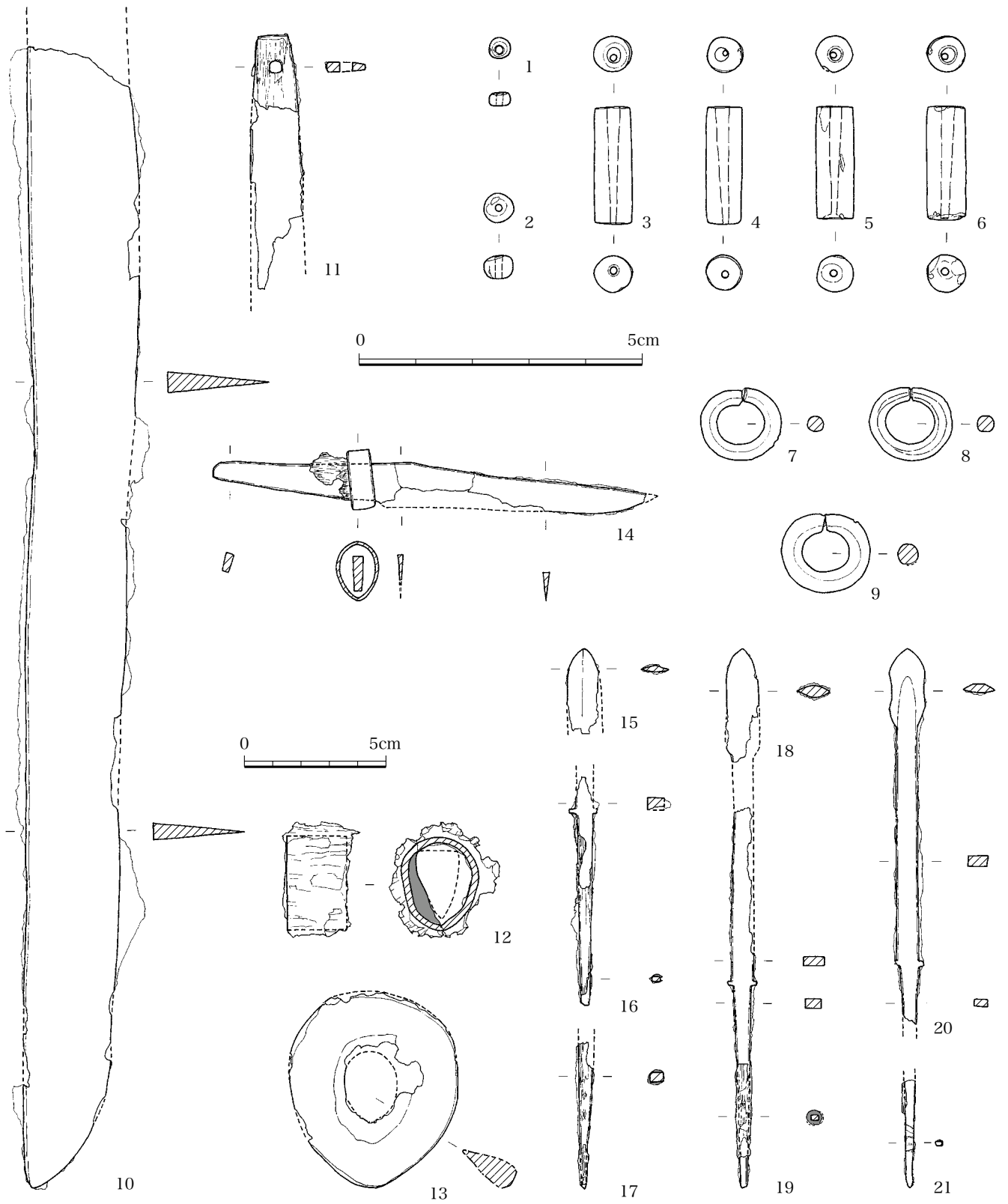


图 148 赤田5号墓 南陶棺出土遺物 (1~6は実大、7~21は1/2)

鉄刀子 (27・28) 27 は鹿角装刀子で、刃先を欠失する。残存長 7.45cm・莖部長 4.9cm、最大幅は刃部で 1.25cm・莖部で 0.8cm。厚さは刃部で 0.2cm・莖部で 0.35cm であり、莖部の方が厚くなっている。鹿角片の多くが莖部に付着するが、刃部にも付着しており、柄のみならず鞘も鹿角装であった可能性がある。28 は完形の鉄刀子で、全長 11.1cm である。刃部は長さ 5.6cm・最大幅 1.35cm・厚さ 0.25cm、莖部は長さ 5.5cm・最大幅 1.15cm・厚さ 0.2cm。莖部に木柄の木質と鹿角の一部かと思われるものが付着し、木芯鹿角装の柄がついていた可能性がある。

鉄刀 (29) 29 は切先と莖尻の一部を欠失するものの全長 40.2cm の直刀に復原できる。刃部の長さ 29.7cm・最大幅 3.4cm・厚さ 0.6cm、莖部の長さ 10.5cm・最大幅 2.3cm・厚さ 0.75cm である。莖尻は丸く、その背側に寄せて径 0.4cm の目釘穴があく。関の形状は、背側に段をつける背側二段両関である。関から莖部に向かって鉄製釧を装着する。釧は長さ 4.5cm・幅 4.4cm・厚さ 0.5cm で、ひずみによって破面が開きうまく接合できない。莖部には木質、刃部には布目が全体的に付着している。

鉄鏃 (31～34) 腸挟三角形鏃 (31・32) と長頸鏃 (33・34) がある。31 と 32 はほぼ同大の腸挟三角形鏃であるが、鏃身部が片面に稜のある片切刃造 (31) と両丸造 (32)、関部が角関 (31) と棘状関 (32) であり、形状が異なる。31 は鏃身部の一部と莖部先端を欠失し、残存長 13.55cm・頸部長 3.25cm。32 は全長 12.85cm・鏃身部長 4.9cm・頸部長 2.5cm・莖部長 5.95cm。33 と 34 はほぼ同大の柳葉形長頸鏃であるが、鏃身関部がナゲ関 (33) と角関 (34)、関部が角関 (33) と棘状関 (34) であり、形状が異なる。33・34 は、それぞれ全長 19.3cm・20.4cm、鏃身長 3.7cm・3.8cm、頸部長 8.8cm・9.5cm、莖部長 6.8cm・7.1cm。いずれも莖部に木質が付着し、31・34 には樹皮巻きの一部が残っている。また、33・34 には布の付着が認められる。

(2) 南陶棺の副葬品 (図 148)

玉類 (1～6) 玉類にはガラス玉 2 点、管玉 4 点がある。ガラス玉には大小があり、北陶棺内出土玉類と対

比すると、1 はガラス小玉、2 はガラス丸玉となる。管玉はすべて片面穿孔である。

耳環 (7～9) 7 は銅芯銀板巻鍍金の耳環である。開口部の接面どうしが銹着しているためによく観察できないが、板のたたみ込みがわずかに認められる。表面が荒れて残り具合がよくはないものの、銀板の表面にわずかながら金を認める部分がある。平面はやや横長の楕円形で、外径 2.81cm × 2.5cm、内径 1.68cm × 1.49cm。断面はほぼ円形で、厚さ 0.56cm × 0.57cm。

8 は銅芯銀板巻鍍金の耳環である。開口部の接面どうしが銹着しており、板のたたみ込みを観察するのが難しい。表面が荒れて残り具合がよくないものの、銀板表面にわずかながら鍍金を認める部分がある。平面はやや横長の楕円形で、外径 2.865cm × 2.6cm、内径 1.71cm × 1.51cm。断面はほぼ円形で、厚さ 0.59cm × 0.6cm。

9 は銅芯銀板巻鍍金の耳環である。接面の一部に板のたたみ込みが認められる。表面が荒れて銀板の一部が破損し、銅芯の一部が露出する箇所がある。内側面に鍍金を認める部分が残る。平面はやや横長の楕円形で、外径 3.07cm × 2.78cm、内径 1.65cm × 1.4cm。断面はほぼ円形で、厚さ 0.72cm × 0.75cm。

鉄刀 (10～13) 陶棺蓋が棺内へ落ち込んだ衝撃で大破したためか、刀身部 (10) と莖部 (11) に分かれている。関部周辺を欠失し接合しないので全長は不明。10 は残存長 40.3cm・最大幅 3.9cm・厚さ 0.6cm の直刀である。11 は残存長 9.0cm・最大幅 1.85cm・厚さ 0.4cm で、莖尻を直線的に作る。莖尻から約 1cm の位置に径 0.4cm の目釘穴があり、表面には木質が付着する。

鉄刀の刀装具として鉄製の釧 (12) と鏢 (13) がある。釧は長径 3.3cm・短径 2.75cm・幅 2.1cm・厚さ 0.25cm で、内面に木質が付着する。本来倒卵形であった断面形が、ひずんで楕円形を呈している。鏢は平面が倒卵形で、長径 7.0cm・短径 6.0cm である。内孔は長径 2.5cm・短径 1.8cm 前後に復原できる。厚さは外縁部が 0.9cm で厚く、内孔に向かって先細りとなる。

鉄刀子 (4) 14 は刃部の一部を欠失するが、全長 15.8cm 前後に復原できる。莖口に鉄製釧が遺存し、木質が付着する。刃部は長さ 9.9cm 前後・最大幅 1.6cm 前後・厚さ 0.25cm、莖部は長さ 5.9cm・最大幅 1.3cm・厚さ 0.35cm である。鉄製釧は倒卵形で、長径 2.1cm・短径 1.5cm・幅 0.85cm・厚さ 0.1cm。

鉄鏃 (15～21) 莖部の数からみて、4 本の鉄鏃が存在したと考えられる。そのうち、鏃身部が残る 3 点は柳葉形長頸鏃と考えられるが、断面形態が 15 は片鑄造、

表3 赤田5号墓 南陶棺出土玉類観察表

番号	種類	材質	色調	直径		孔径 (mm)		重量 (g)	備考
				(mm)	厚さ/長さ (mm)	最大径	最小径		
図 148-1	ガラス小玉	ガラス	青	3.64	2.42	0.92	0.97	0.045	
図 148-2	ガラス丸玉	ガラス	青黒	5.19	4.10	0.90		0.115	
図 148-3	管玉	碧玉	濃緑色	6.49	20.79	2.34	0.83	1.663	片面穿孔
図 148-4	管玉	碧玉	濃緑色	6.29	20.75	2.36	0.86	1.484	片面穿孔
図 148-5	管玉	碧玉	濃緑色	6.58	19.71	2.10	0.93	1.594	片面穿孔
図 148-6	管玉	碧玉	濃緑色	6.87	20.18	2.25	1.13	1.648	片面穿孔

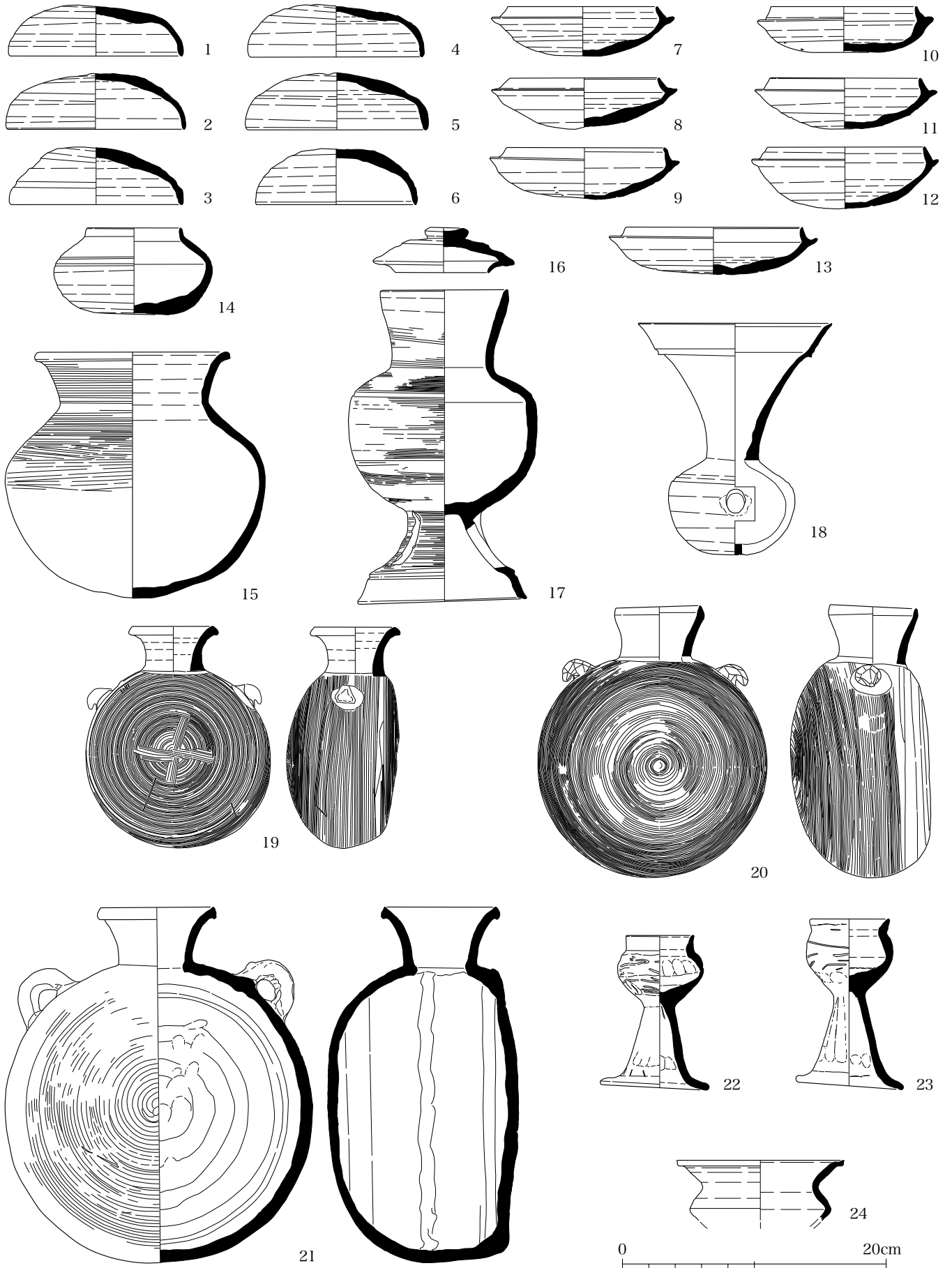


图 149 赤田5号墓 女室出土土器 (1/4)

18 は両丸造、20 は片切刃造であり、それぞれ異なる点が注意される。ただし、関の形状はすべて棘状関で共通している。全体の形状が概ね判明するのは20のみで、残存長13.3cm・鎌身部長2.8cm・頸部長8.5cmである。接合しないものの21は20の茎部先端である可能性が高い。18は復原できる頸部の幅から19と同一個体になると思われる。15の鎌身部が16・17どちらの茎部と同一個体になるかはわからない。茎部には木質が付着している。

(3) 玄室出土鉄器 (図147-30)

鉄鎌 奥壁と北陶棺の間から出土した。柳葉鎌で、扁平な鎌身部から山形関を経て片丸造の頸部となる。頸部下半から茎部を欠失する。残存長6.35cm。(鐘方正樹)

3. 土器

(1) 玄室出土土器 (図149)

玄室から出土した土器には土師器脚付壺(22・23)、須恵器杯H蓋(1~6)・身(7~13)、短頸壺(14・15)、壺蓋(16)、台付長頸壺(17)、甕(18)、提瓶(19~21)、壺H(24)がある。

土師器脚付壺(22・23)はいずれも口縁から体部上半をヨコナデし、その後体部上半に手持ちによるヘラミガキを加えている。外面の体部下半には指頭圧痕がみら

れる。脚部はナデによる調整で、端部をヨコナデする。須恵器は杯H蓋・身とも、胎土中に1mm程度の白色砂粒を含み、黒色微粒子がロクロケズリにより滲んだようにみえる。口径は杯蓋6が12.3cmである以外は13cm台、杯身は13が16.0cmである以外は13.6~14.4cmである。12は灰白色に焼き上がり、胎土が砂質で、焼成、胎土も他の杯H身とは異なり、器高も若干深い。他のものとは産地が異なるのかもしれない。蓋1・3の頂部内面、身10・11の底部内面には同心円のスタンプ痕跡が、蓋2・4の頂部外面、身8の底部外面には「-」の線刻がある。短頸壺(14・15)の14は胎土が非常に精良で、外面に自然釉が降下する。頸部に残る焼成痕跡から蓋を被せて焼いたことがわかる。15は体部下半がロクロケズリ、体部上半から口縁部をカキメにより調整する。壺蓋(16)はつまみ縁部上面に丸味をもたせて仕上げる。台付長頸壺(17)はやや角ばった肩に一条の沈線が入る。台部の透かしは2方である。甕(18)は焼成がやや甘く、灰白色で軟質の焼き上がりである。提瓶は大きさから小(19・20)と大(21)とに分けることができる。19は口縁端部を外反させ、体部の平坦側に同心円のカキメ調整の後、「十」字状のカキメがみられる。20は口縁端部を若干内湾させている。21は肩部に環状の把手が付き、口縁端部に縁帯をつくる。外面に濃灰緑色の自然釉がかかる。

壺H(24)は内外面ともロクロナデである。

壺Hを除き、これらの土器は2つの陶棺に伴うものではあるが、いずれもMT85~TK43型式の特徴をもつもので、6世紀中頃から後半に位置づけられよう。壺Hは8世紀のものである。小破片で、意図的に持ち込んだかどうかはわからないが、4・9号墓の玄室からも壺Hが出土しており、関わりがあるのかもしれない。

(2) 墓道出土土器 (図150)

墓道から出土した土器には須恵器壺底部片(25)、短頸壺(26)、甕(27)がある。

須恵器壺底部片(25)、短頸壺(26)とも胎土中に1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。26は肩部から底部にかけて縦方向の直線の線刻がある。肩部にみられる焼成痕跡から蓋を被せて焼成したことがわかる。甕(27)は口縁部に鋭い稜がめぐる。調整は外面が平行タタキで、底部が横方向、体部が縦方向である。内面には同心円の当て具痕が残る。底部外面に火櫛がみられる。

墓道から出土した器種は時期を特定することが難しいが、玄室から出土したのと同じ時期と考えてよいと思われる。(池田裕英)

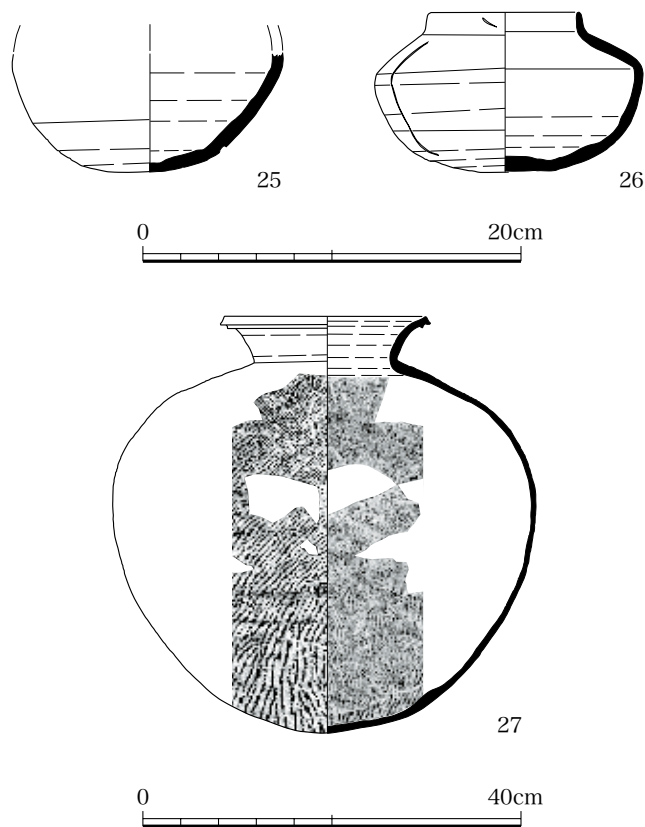


図150 赤田5号墓 墓道出土土器 (1/4, 27は1/8)

第10節 赤田6号墓

全長14.2m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。玄室の主軸はN-18°-Eである。玄室は5号墓の玄室と一部重複し、玄室を構築する際に5号墓を壊している。そのためか、6号墓は玄室に埋葬を行っていない。

I. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図151)

玄室から墓道は黄色の砂礫層の地山(基本層序:VII-4層)を掘削して造られ、その埋土は、造墓に関連する土層とその他の土層に大別できる。

(1) 造墓に関連する土層

層序と層の様相から、下記の2層(A・C層)が識別できる。

A層(1層) 玄室の玄門寄り1.4mから墓道において形成された床面の整地土層。灰黄色の砂質シルト・粘土層で、厚さ0.1m。硬くしまる。

C層(2~4層) 玄門の閉塞土層で、高さ1.2m。地山破砕物や黄色のシルト混じり砂礫の層からなる。墓道の玄門寄りに高まりを作った後、玄室側に土を積み上げる。

(2) その他の土層

a. 墓道 層序と層の様相から、下記の3層(D~F層)が識別できる。

D層(8層) A層の上面から墓道の両側面に沿って形成された埋土層で、明黄褐色のシルト質砂層。

E層(9~18層) 前述したD層の形成後に生じた墓道中央部の窪みにおいて、3~5号墓の盗掘までに形成された埋土層。

厚さは1.1m前後。C層上を覆う下部(9~14層)と中部(15~17層)は主に黄色や黄褐色のシルトを含む砂層や砂礫層からなる。上部の18層は基本層序のV層に対応する埋没土層。この層から8世紀の須恵器ミニチュア三耳壺が出土した。

F層(19層) E層上に形成された埋土層で、黄色のシルト質砂礫層。

b. 玄室 層序と層の様相から、下記の2層(G・H層)が識別できる。

G層(5・6層) 閉塞後に形成された玄室内の埋土層の下部。主に黄色のシルトを含む砂礫層からなり、厚さ0.5m。前述した5号墓のG層と一連の層で、5層が5号墓の21層、6層が同22層と対応する。

H層(7層) 玄室内の埋土の上部。主に地山破砕物からなり、厚さ0.7m以上。前述した5号墓のH層最

下部の27層と一連の層である。

c. 層の成因 地山の破砕物を主とするH層の7層は、位置関係から玄室内部の崩・剥落土と推察する。黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のIV層と様相が似ることから、斜面崩落土及び羨門付近からの流入土と考える。

2. 横穴墓の規模と形態 (図151)

玄室 長さ5.0m、奥壁幅1.5mで、平面形態は若干側壁が張る長方形である。埋葬の痕跡はなく、出土遺物もない。おそらく、玄室を構築中に5号墓の玄室を破壊した時点で埋葬することを断念し、墓として使用しなかったと思われる。ただし、埋葬は行っていないが、玄室を開けたままにはしておかず、玄門部を土で閉塞していることは上述のとおりである。玄室奥壁での地山上面の標高は85.8mである。

玄門 6号墓は羨道がない。玄門は幅1.1mで、側壁の残存状況から高さ1.2m程度であったと考えられる。

墓道 長さ9.0m以上で、上面幅が1.5~2.9m、底部幅が1.5~1.6m、深さ1.4~2.3mの断面逆台形である。床面はほぼ水平で、地山上面の標高は85.8mである。玄室の奥壁部とほとんど差がない。

II. 副葬品の配置

1. 墓道土器出土状態 (図152)

墓道から須恵器高杯脚部片(図1531)、ミニチュア三耳壺(2)、甕(3)が出土した。玄室への埋葬は行われていないが、墓道から横穴墓の時期の甕が出土している。閉塞の際に何らかの行為が行われたことを示しているのであろう。甕は三耳壺と同じ18層や17層から出土したが、7号墓の20層から出土したものと接合する。出土した層位からみると、9世紀頃までの間に動かされたようである。京都府八幡市に所在する女谷・荒坂横穴墓でも異なる横穴墓の墓道から出土した土器片が接合した例が報告されており(京都府埋蔵文化財調査研究センター2004)、同様の行為が他にも行われていることが知られる。

三耳壺は18層から、高杯脚部は17層から出土した。三耳壺は8世紀末~9世紀初頭のもので、他の横穴墓と同様にその頃に祭祀が行われたとみられる。

III. 出土遺物

1. 墓道出土土器 (図153)

1は高杯脚部で、2段で2方向以上の透かしがある。2はミニチュアの三耳壺である。口径3.1cm、器高7.6cm。肩部に2箇所、体部下半に1箇所把手が付く。底部外面に糸切り痕がみられる。灰白色で硬質に焼き上

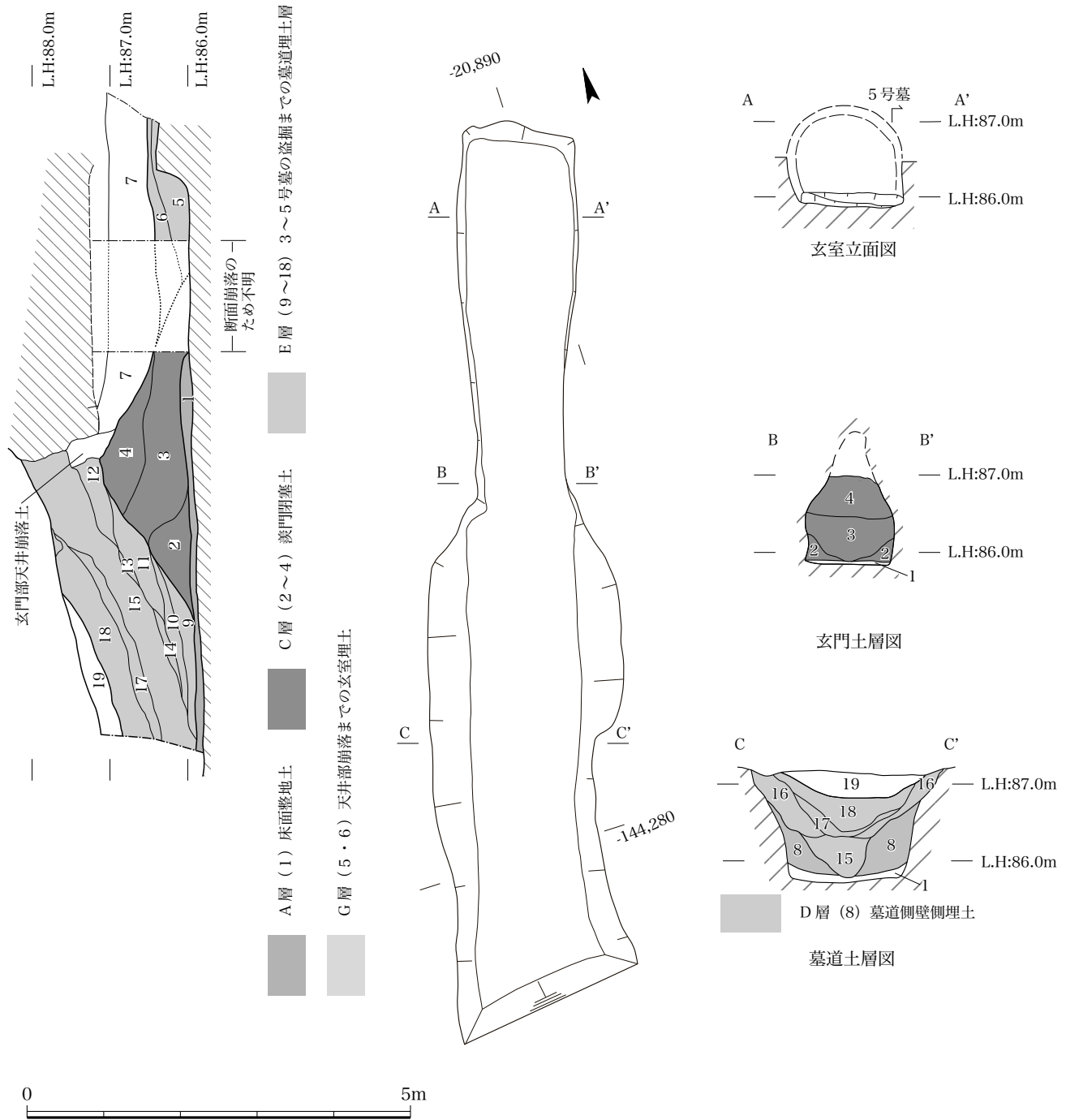


図 151 赤田6号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)

A層	1 2.5Y6/2 (灰黄) 砂質シルト・粘土	6 2.5Y7/2 (灰黄) シルト混じり砂礫に地山破	11 地山破砕物
C層	2 地山破砕物を含む2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂礫	7 地山破砕物に2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂礫が混合	12 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂礫
G層	3 地山破砕物の薄層と2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂礫層の薄層の互層	8 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂	13 2.5Y5/3 (黄褐) シルト混じり砂
	4 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂礫	9 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	14 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂礫
	5 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土質砂礫	10 2.5Y5/4 (黄褐) シルト混じり砂礫	15 2.5Y5/3 (黄褐) シルト混じり砂
			16 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂礫
			17 2.5Y5/3 (黄褐) シルト混じり砂
			18 2.5Y3/2 (黒褐) シルト質砂礫
			19 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫

赤田6号墓 遺構図 堆積土層名

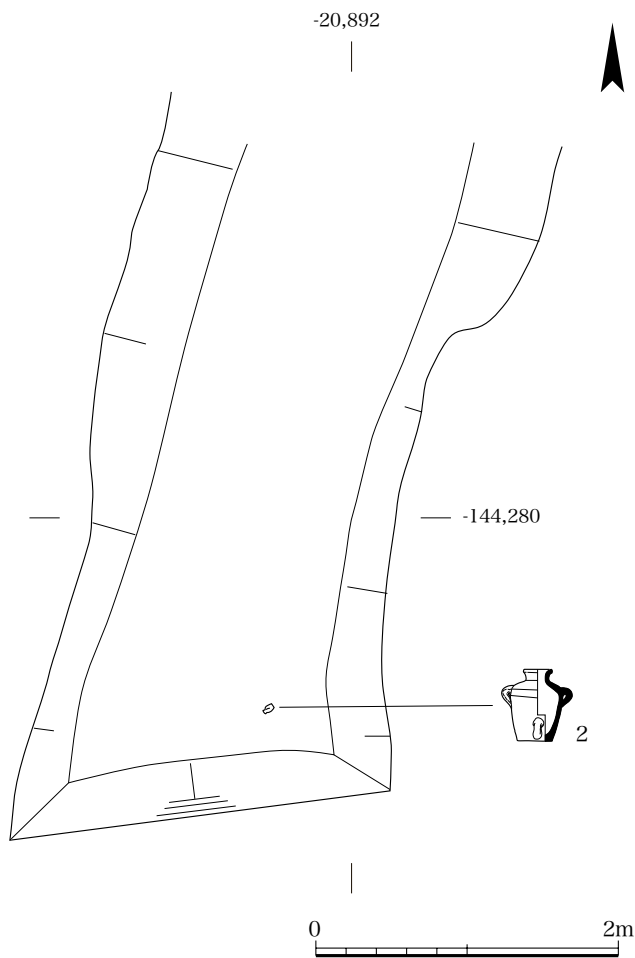


図152 赤田6号墓 墓道土器出土状態 (1/50)

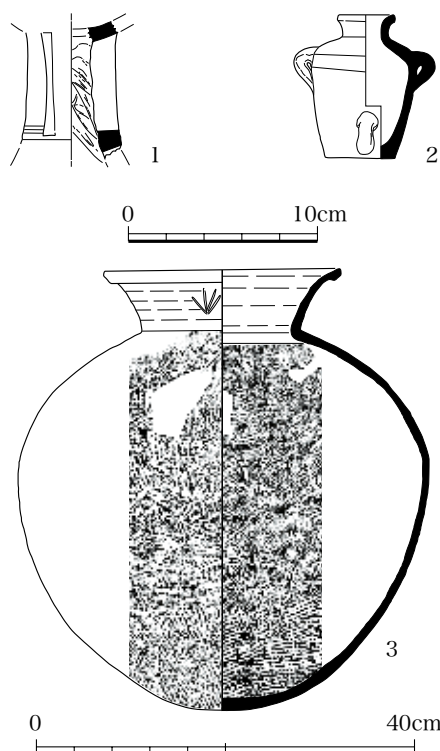


図153 赤田6号墓 墓道出土須恵器 (1/4、3は1/8)

がり、外面に淡灰緑色の自然釉がかかる。形態や胎土などの点から尾張産のものと考えられる。3の須恵器甕は外面が格子目タタキ、内面は上半に同心円当て具痕、下半に横方向の平行の当て具痕がみられる。

高杯と甕は横穴墓の時期のものであろうが、詳細な時期は不明である。ミニチュア三耳壺は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられよう。(池田裕英)



図154 赤田6号墓 墓道土器出土状態 (南から)

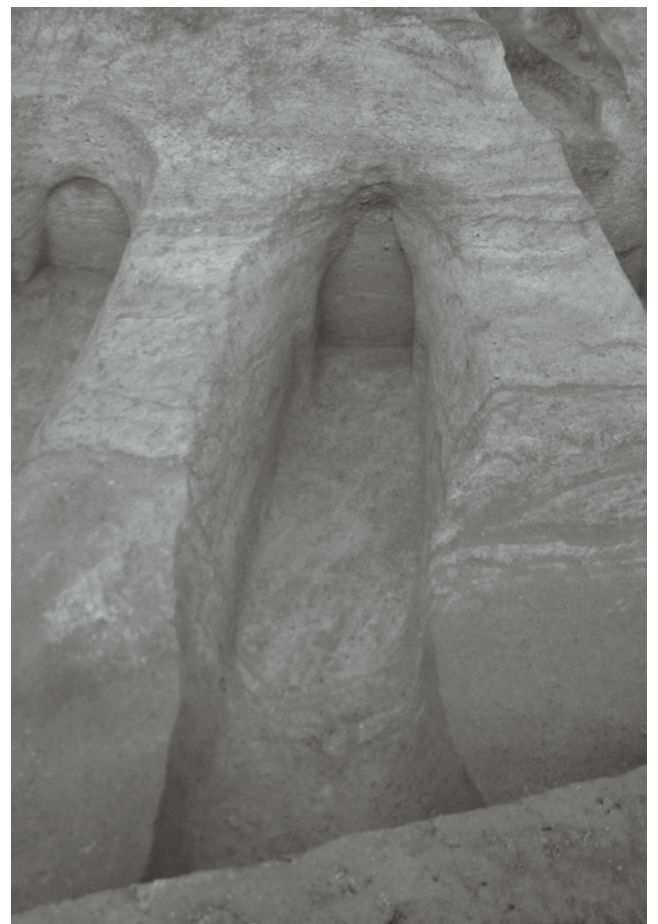


図155 赤田6号墓 墓道完掘状態 (南から)

第11節 赤田7号墓

全長は15.2 m以上で、墓道は発掘区外南に続く。羨門土層の観察から玄室は少なくとも2度閉塞されたと思われる。玄室の主軸はN-24°-Eである。玄室内では、木棺1基、土師質亀甲形陶棺2基を検出した。玄室内玄門寄り東側で副葬された土器が集中して出土した。陶棺や土器の遺存状態から未盗掘の横穴墓と考えられる。

1. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図156)

玄室から羨道は灰白色の砂礫層の地山(基本層序: VII-4層)、墓道は灰白色の砂礫層及び黄色の粘土層の地山(同: VII-1層)を掘削して造られ、その埋土は、埋葬に関連する土層とその他の土層に大別できる。

(1) 埋葬に関連する土層

層序と層の様相から、下記の2層(A・C層)が識別できる。

A層(1~7層) 玄室から羨道及び墓道において、初葬時に形成された床面の整地土層。

厚さ0.1~0.3 mで、硬くしまる。墓道(1~4層)は黄色の砂質シルト層やシルトを含む砂層、玄室・羨道(5~7層)は主に黄色のシルトを含む砂礫層。7層上面に陶棺2基・木棺1基と副葬品の土器が置かれていた。

C層(8~17層) 最終埋葬時の墓道の床面の構成層(8~10層)と羨門の閉塞土層(11~17層)。

墓道の床面の構成層はA層上に形成され、厚さ0.2 m。主に黄色のシルト混じり砂層からなる。8層は羨門前で高まりをなすことから、直前の埋葬時に形成された閉塞土層の基底部の可能性がある。9・10層は後述するE層の性格をもつ。

閉塞土層は羨道及び羨門の3.5 m南までの墓道に形成されている。高さ1.0 mで、主に黄色のシルトを含む砂礫層からなる。墓道の羨門寄りに高まりを作った後に羨道側に土を積み上げる。各層の層理は床面にほぼ沿う。上部に侵食箇所がある。

(2) その他の土層

a. 墓道 層序、層の様相や3~5号墓との対応関係から、下記の3層(D~F層)が識別できる。

D層(18・19層) 前述したA層の上面から墓道の両側面に沿って形成された埋土層。

断面観察箇所での厚さは0.5 m。黄褐色のシルト質砂層と黄色の砂質シルト・粘土層からなる。

E層(20~22層) 前述したC・D層の形成後に生じた墓道中央部の窪みにおいて、3~5号墓の盗掘前ま

で形成された埋土層。

厚さ0.5 m前後。下部(20・21層)は黄色や暗灰黄色のシルト質砂層からなる。上部の黒褐色シルト質砂層(22層)は基本層序のV層に対応する埋没土層である。最下位で8世紀の須恵器杯B・壺が出土した。

F層(27~29層) E層上に形成された埋土層で、黄色や黄褐色のシルト質砂層。

b. 玄室・羨道 層序と層の様相から、下記の2層(G・H層)が識別できる。

G層(23層) 最終埋葬の閉塞土層であるC層の形成後から9世紀までに形成された埋土層。

厚さ0.3~0.4 mで、地山破砕物に黄褐色のシルト・粘土混じり砂が混じる。A層及びC層の閉塞土層裾部の上面を覆い、土師質亀甲形陶棺を押し潰している。玄室中央部付近のやや高まった上面で、9世紀の土師器皿・須恵器壺Mと8世紀末の隆平永宝が出土した。

H層(24~26層) 9世紀以降にC層の閉塞土層やG層上に形成された埋土層。

24・25層は黄色のシルト質砂・砂礫の薄層の互層で、玄室の玄門寄り及び羨道の閉塞土層の上面を覆い、閉塞土層上部の侵食箇所を埋める。26層は地山破砕物からなり、玄室・羨道を広く覆う。

c. 層の成因 G・H層でみられる地山の破砕物を主とする層は、位置関係から玄室・羨道の天井部の崩・剥落土と推察する。D~F・H層でみられる黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のIV層と様相が似ることから、斜面崩落土及び羨門付近からの流入土と考えられる。(安井宣也)

2. 横穴墓の規模と形態 (図156)

玄室 玄室は長さ4.2 m、奥壁幅2.4 mである。平面形態は西側壁が直線的であるが、東側壁は奥壁から玄室中程までは直線的で、そこから玄門に向かって狭まる羽子板形である。側壁は上方に向かって広がる逆台形の断面形である。玄室の高さは奥壁の残存状況から1.4 m以上のドーム状と推定される。玄室床面は地山の北端1/4程度を一段高く削り残し、その後高く削り残した部分を含めて玄室全体を整地している。地山上面を一段低く削った部分はほぼ平らである。標高は奥壁で86.9 m、玄門付近で86.8 mである。

羨道 長さ1 m程度に復原できる。羨門は幅1.2 m、高さ1.4 mである。後世の進入坑により上部が一部壊されている。羨門と墓道との境にあたる側面を削って羨門幅を墓道幅より狭めており(PL.22-6)、閉塞の際、この部分に板を当てて前面に土を盛ったのであろう。床

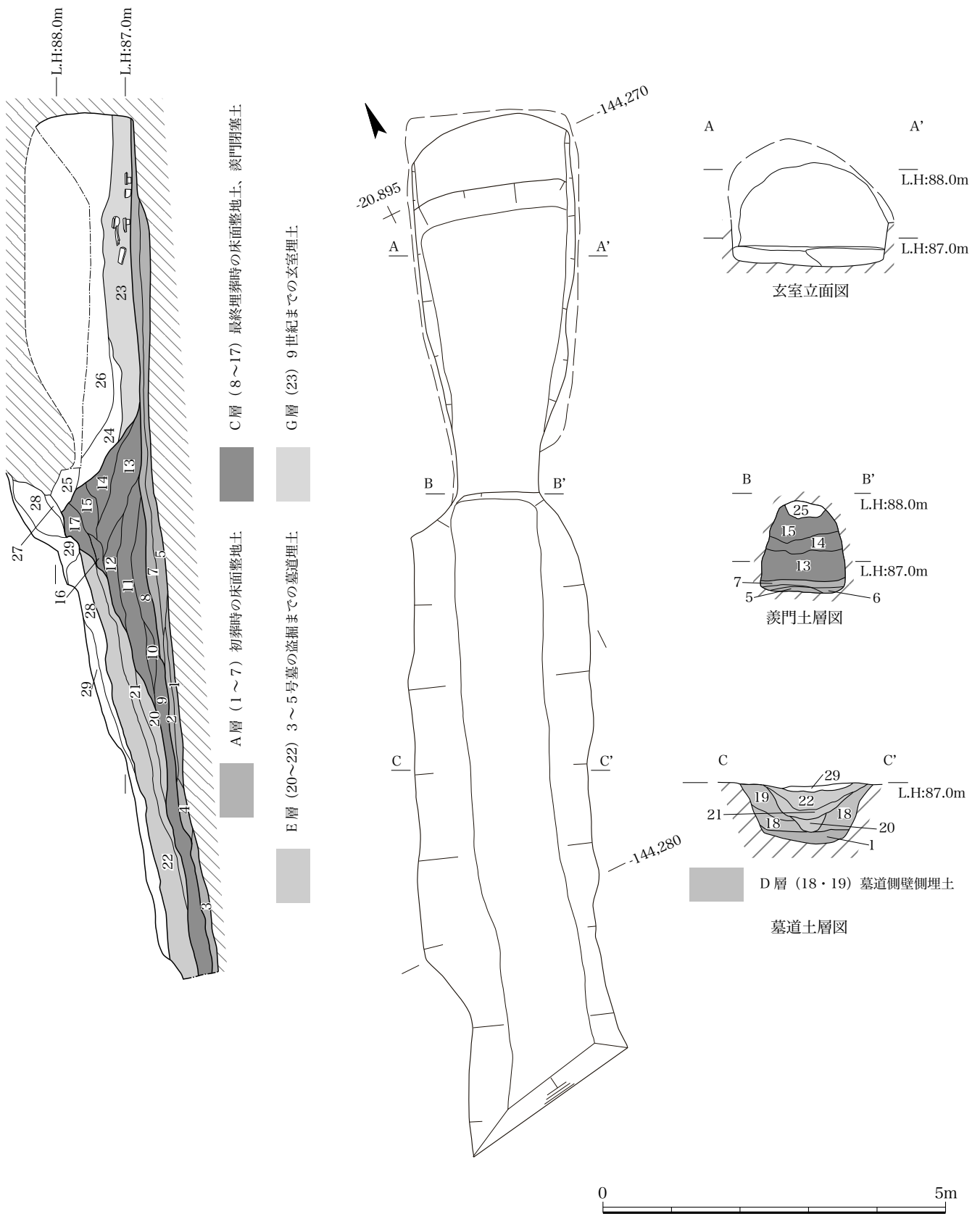


図 156 赤田 7 号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)

A層	12 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂礫	G層
1 2.5Y7/3 (浅黄) 砂質シルト・粘土	13 地山の破砕物と2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト質砂礫の混合	23 地山破砕物に10YR6/3 (にぶい黄橙) シルト・粘土混じり砂の混合
2 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂		H層
3 2.5Y7/3 (浅黄) 砂と2.5 Y 6/4 (黄褐) 砂質シルト・粘土ブロックの混合	14 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂礫	24 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂の薄層と砂礫層の互層
4 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂	15 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	25 2.5Y6/3 (黄褐) 地山破砕物を含むシルト質砂層と2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂の薄層の互層
5 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト質砂	16 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	26 地山破砕物
6 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	17 2.5Y5/2 (暗灰黄) シルト質砂	F層
7 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫	D層	27 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂
C層	18 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト質砂	28 2.5Y3.5/2 (暗灰黄) シルト質砂
8 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂	19 2.5Y7/4 (浅黄) 砂質シルト・粘土	29 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
9 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土ブロックと2.5 Y 6/3 (にぶい黄) シルト質砂混合	E層	
10 2.5Y7/4 (浅黄) シルト混じり砂	20 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂	
11 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	21 2.5Y5/2 (暗灰黄) シルト質砂	
	22 2.5Y3/2 (黒褐) シルト質砂	

赤田7号墓 堆積土層名

面に板の痕跡はなく、立てかけるように置いたとみられる。また、玄室の床面はほぼ平らであるが、玄門から南は、墓道南端に向かって緩やかに下っていく。

墓道 長さ10.0 m以上で、底部幅が1.5～1.6 m、上面幅が2.4～2.7 m、深さ0.5～1.6 mの断面逆台形である。土層の堆積状態から追葬の際に墓道内を掘削して通路を作っていることがわかる。地山上面の標高は墓道北端で86.6 m、南端で86.5 mである。墓道南端は緩やかに南東方向に曲がっていく。後述する8・9号墓の墓道南端も同様の形態であり、この横穴墓群に至る道のようなものが調査地の南側にあったと考えられる。

III. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図157・158)

玄室奥壁寄りの中央には土師質亀甲形陶棺が置かれていた(東陶棺)。出土した層位は7層上面である。棺の南半は壊れた破片の状態であったが、北端1/4程度が天井の崩落土等で埋まっていたためか原位置を保った状態で遺存していた。その他の棺身の脚部もほぼ置かれた位置で倒れたような状態で検出している(PL.24-4～6、26-3)。陶棺片の大部分がこの位置で出土しており、天井の崩落による大量の土砂で陶棺が押しつぶされたと考えられる。

東陶棺の西で奥壁に接するように小形の土師質亀甲形陶棺が置かれていた(西陶棺)。出土層位は東陶棺と同じ7層上面である。この西陶棺は身が一体で、蓋は二分割で作られている。蓋が被せられた状態で検出したが、棺内には棺身内部がほぼ埋まる程度の土砂が流入していた。棺蓋・棺身ともほぼ完存している。東陶棺と残存状態が異なっており、北西隅にあったため、天井崩落土の影響が少なかつたと思われる。西陶棺の南西部の下に

は円筒埴輪片(図190)が敷かれ、その埴輪片の上に脚部がのっている状態であった(PL.26-1)。玄室床面が南に下っているため、埴輪を敷いて棺の安定を保ったのであろう。

東陶棺、西陶棺とも棺の主軸は玄室の主軸と合致する。

東陶棺を取り上げた後、ほぼ重複する位置で鉄釘が6点出土した(図158)。このことから東陶棺が置かれる以前に木棺があったことがわかる。出土層位は陶棺と同じであり、木棺の埋葬後、陶棺を追葬する際には床面を整地することはなかったようである。釘の形態と陶棺の出土位置の関係をみると、後述するように木棺は陶棺出土位置よりも若干北東にあったと想定できる。木棺は長さ1.3 m、幅0.45 m程度に復原できる。木棺の主軸は玄室の主軸に対して西偏する。

2. 副葬品の配置

(1) 玄室遺物出土状態 (図158～160)

玄室から出土した遺物には木棺・陶棺の埋葬に伴う遺物(埴輪・土器・鉄刀子・鉄釘・棗玉)とそれらとは時期を隔てた後世の祭祀に伴う遺物(土器・銭貨)がある。

木棺・陶棺の埋葬に伴う遺物は、玄室前方の空間と玄室西北隅の西陶棺に近接する場所の2箇所から出土した。出土層位はいずれも2～4・7層の床面上面である。

西陶棺の南西から須恵器短頸壺(図191-15)と長頸壺(16)が出土した。いずれも完形の状態であった。西陶棺は蓋・身とも完存しており、これらの土器も天井の崩落より以前に埋没していたことで損壊を免れたのであろう。円筒埴輪は西陶棺の西南隅の脚部の下に敷かれていた(図157、PL.26-1・2)。円筒埴輪の中には21層から出土した破片と接合したものがあつた(図190-3)。

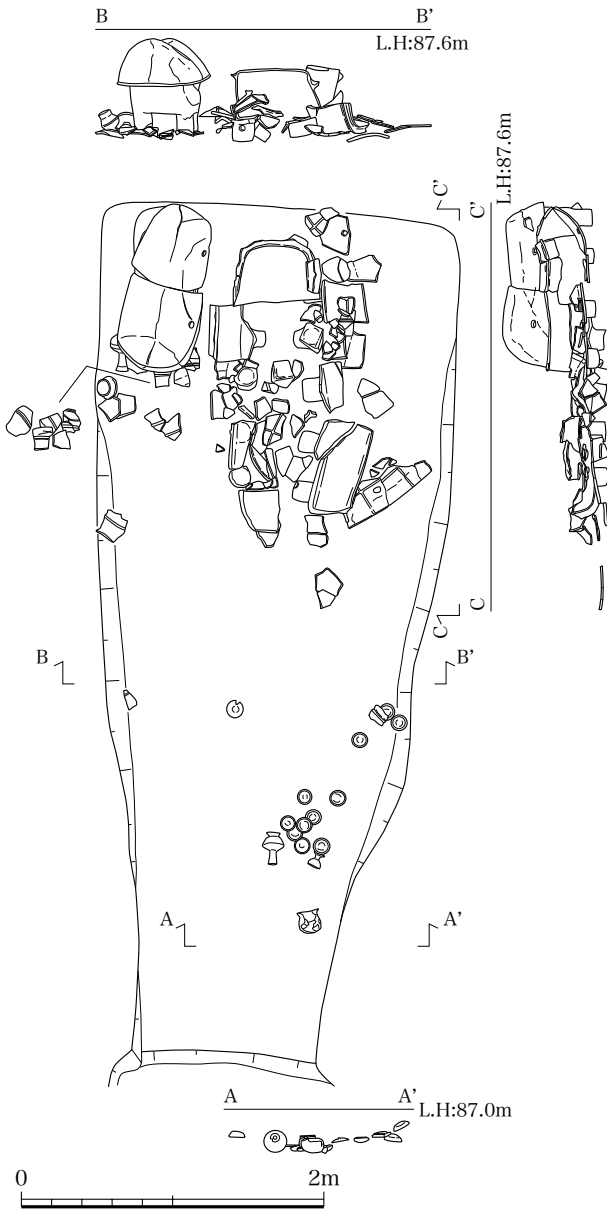


図 157 赤田 7 号墓 玄室陶棺出土状態 (1/50)

もう一群の土器は玄門寄りの東に寄せた位置でまともに出てきた。出土した器種には、須恵器杯 H 蓋 4 点 (1~3・5)・身 5 点 (6~10)、杯 G 蓋 3 点 (11~13)、無蓋高杯 (14)、台付長頸壺 (17)、土師器甕 (18) 各 1 点がある。杯 H 蓋は 1・2 は逆位で出土しており、蓋ではなく杯 G の身として利用されたのかもしれない。杯 H 身はいずれも正位で出土している。杯 G 蓋は 11 が逆位で、2・3 が正位で出土した。

玄門寄りの位置から出土した土器については、当初からこの位置にあったのか、追葬時に動かされたのか、あるいは土器群の西側には埋葬が可能な空間があることから追葬があり、それに伴うのかといった可能性が考えら

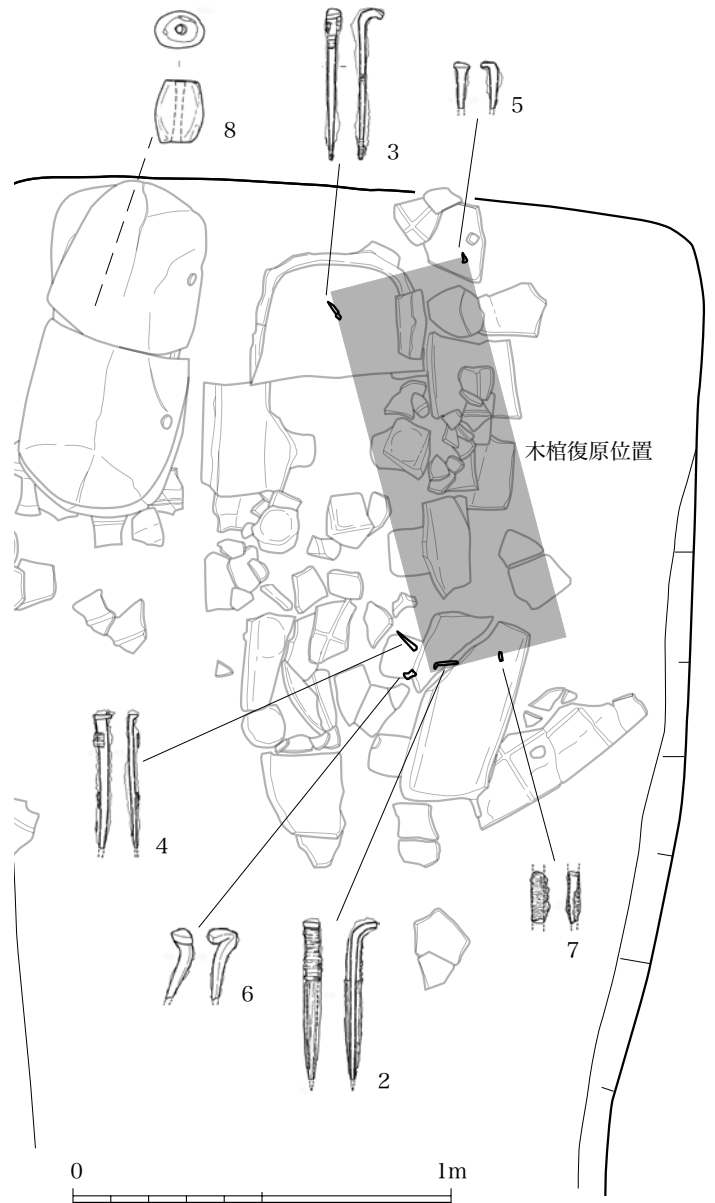


図 158 赤田 7 号墓 玄室鉄釘・棗玉出土状態 (1/20)

れる。この点に関しては、3・5 の杯 H 蓋に接して円筒埴輪片が出土しており、西陶棺近くにあった土器が動かされたことを示唆する。

これらとはやや離れた玄室のほぼ中央で須恵器杯 H 蓋 (4) が 1 点出土しているが、杯 H 身が 5 点あることからみると、同じ土器群の中の土器の一つとしてよいかもしれない。出土状態は正位であった。

これらの土器は、出土した場所が離れているものがあるが、西陶棺に伴うものとみてよからう。土師器甕を除いた他の土器はほぼ完形の状態で出土しており、離れた位置での接合関係はない。

玄室中央西寄り、23 層上面から 9 世紀後半の土師器

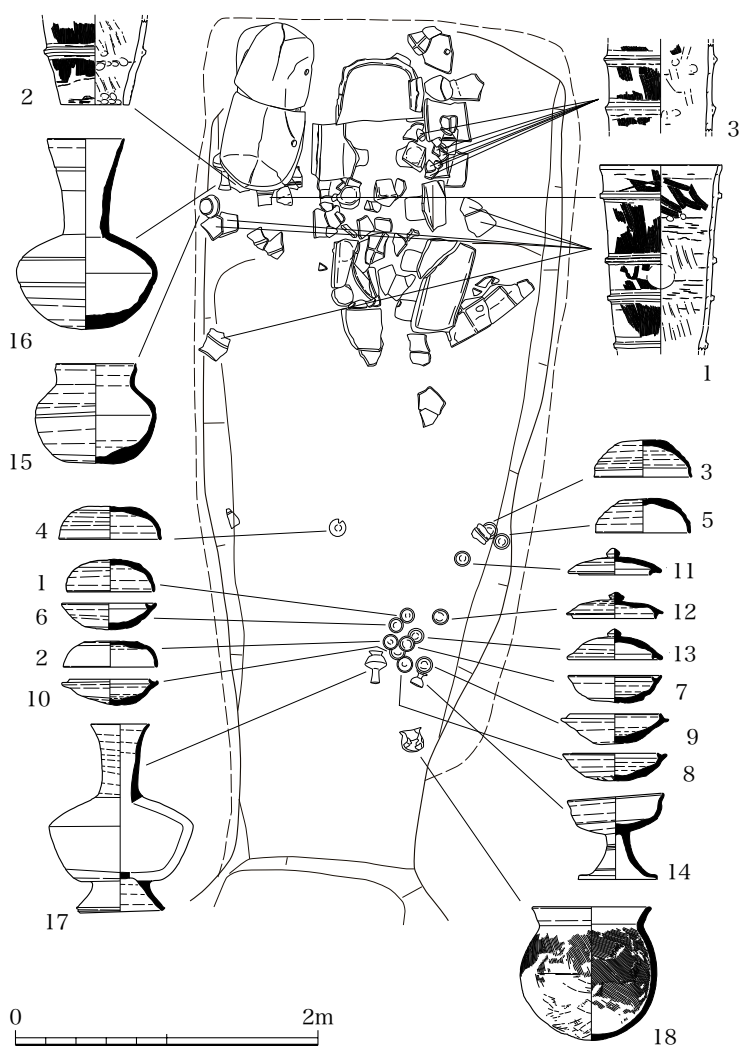


図 159 赤田7号墓 玄室土器・埴輪出土状態 (1/50)

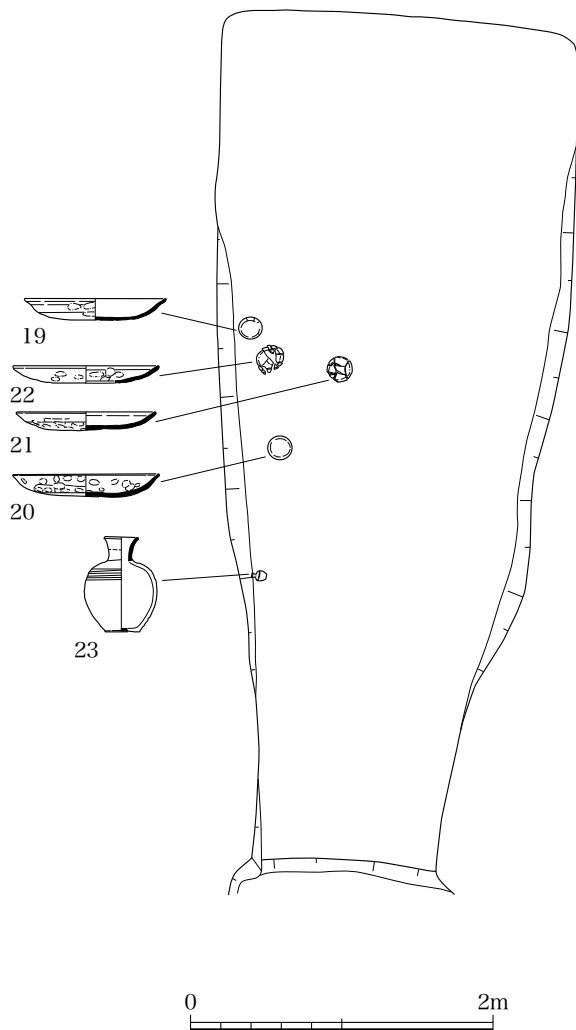


図 160 赤田7号墓 玄室土器（平安時代）出土状態 (1/50)

皿 A 4点 (19～22)、須恵器壺 M (23)、銭貨 (隆平永宝) 各1点が出土した (図 160)。陶棺に伴う古墳時代の土器とは出土した層位も異なり、古墳時代の土器群はこの時期には埋まっているので偶然かもしれないが、陶棺や古墳時代の土器とは重ならない位置で出土しているとみることできる。何か意識されるような状態であったのかもしれない。19・20 は逆位で、21・22 は正位で出土した。土器はほぼ完形で、置かれた時の状態を保っているとみられる。銭貨はそれのみで出土しているが、有機質の容器や布のようなものに入れられていた可能性はあるかもしれない。平安時代に玄室内に入ったことがわかる資料である。

陶棺内から出土した遺物には東陶棺に伴って出土した鉄刀子1点 (図 1891) と西陶棺内からみつかった棗玉 (図 1898) 1点とがある。東陶棺で見つかった鉄

刀子は破損した陶棺片の中から出土したものであるが、出土状態から棺内に副葬されていたものと考えられる。棗玉は棺内に堆積していた流入土からの出土であるが、副葬品とみて間違いなかろう。

(2) 墓道土器出土状態 (図 161)

墓道からは、土師器碗 (33) が4層上面から、須恵器杯 H 身 (28～32)、杯 G 蓋 (24～26)・身 (27) が6層上面から出土した。24・25・31 は逆位、29・30・33 は正位の状態であった。須恵器甕 (37) はほとんどのものが6層上面から出土したが、20層から出土した破片もある。また、6号墓の項で記したとおり、この甕は6号墓の17・18層から出土した甕片と接合した。

22層からは8世紀の須恵器杯 B (34)、壺 (35・36) が出土している。いずれも小片である。

(池田裕英)

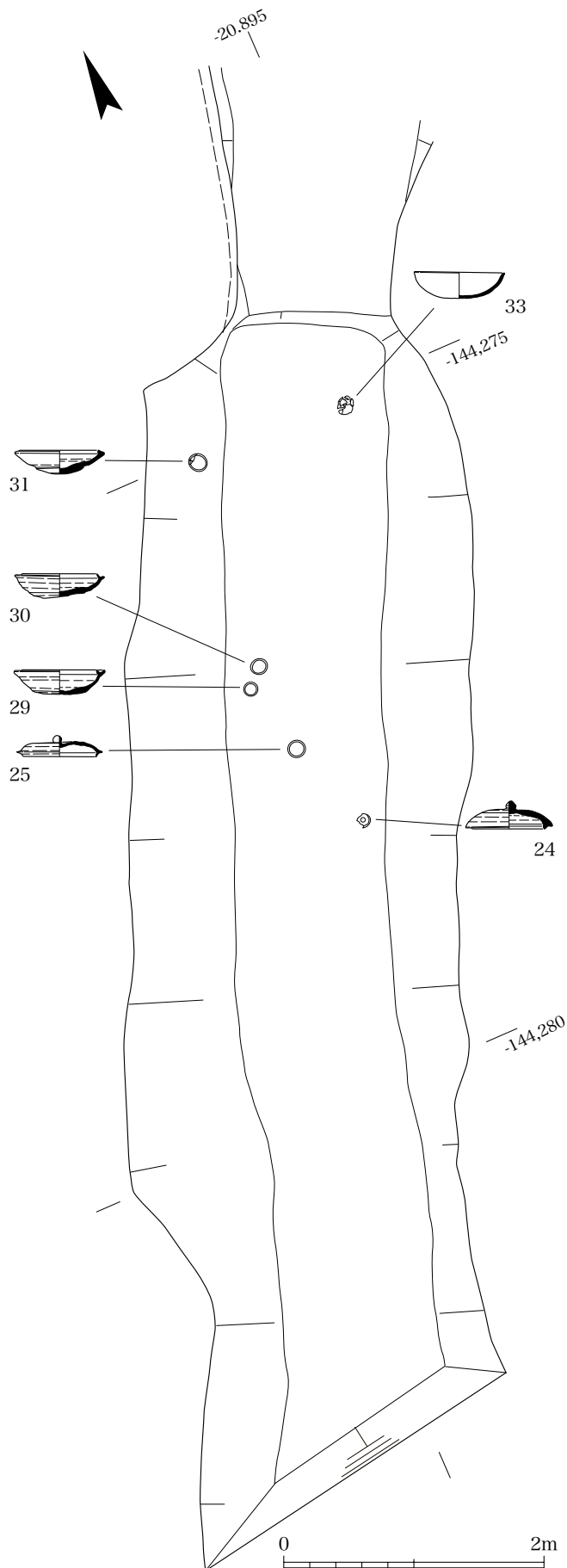


図161 赤田7号墓 墓道土器出土状態 (1/50)

III. 出土遺物

1. 陶棺

大小2基の土師質亀甲形陶棺がある。玄室内の配置に従い、大型品を東陶棺、小型品を西陶棺として報告する。棺蓋・棺身ともに2分割して焼成し再度組み合わせで使用するのが通例であるが、東陶棺の棺蓋は別つくりの製品を組み合わせ、西陶棺は棺身のみ分割せずにそのまま焼成している。

(1) 7号墓東陶棺 (図162～図176)

天井崩落土によって上から押しつぶされた状態で出土したが、棺蓋・棺身はいずれも完形に復原できた。遺存状態も良好である。

棺蓋 全長177cm・幅58cm・高さ27cmの完形品である。内法寸法は全長174cm・幅55.5cm・高さ24cmとなる。分割焼成された二つの棺蓋は、突帯の貼付け位置や器壁の厚さに差異が認められるため、同一品を分割焼成したものではない。しかし、つくり方や突帯配置などの特徴がよく似ており、同一工人の製品とみてよいだろう。製作時に一部欠損したために作り直したものか、使用時に別の類似品を取り違えて組み合わせたものかは直ちに判断できない。そこで、以下では必要に応じて便宜的に蓋Aと蓋Bに分けて記述する。

外面に赤色顔料が塗布されている。口縁部と天井部に沿って黒斑がみられる。

稜線突帯を貼り付けた後、長側面縦位突帯を6条貼り付けて外面全体を左右7つに区画する。次に、口縁部との中間に横位突帯を1条巡らせて上下2段に区画する。

口縁部突帯は省略される。最後に、稜線突帯を挟んで左右に1条ずつの短側面縦位突帯を下段にのみ貼り付けて、下段に18区画、上段に14区画をつくる。長側面は上下段ともに5区画、短側面では下段4区画・上段2区画となる。

突帯は幅1cm未満で細く、稜線突帯が他より高く突出する。貼付順序の一部が縦先横後に変化している。

横断面形状は直線的で屋根形を呈するが、短側面は逆に丸くなっている。器壁は厚さ1cm前後で、他例と比べて相対的に薄いつくりである。左右の長側面に4つずつ合計8つの透孔を下段上方に寄せてあける。形状は円形を主体とするが、蓋Aの片側だけ方形となっている。また、透孔は左右両側の隣接する2区画に穿孔するのが基本であるが、蓋Aの片側のみ1区画あけて穿孔する。

調整は内外面ともにヨコナデを基調とするが、短側内面はナナメナデである。外面全体に板の押圧痕が残るため、成形時に板押さえが多用されたことがうかがえる(図



図 162 赤田7号墓 東陶棺 蓋外面切断面付近に残る接合痕跡



図 163 赤田7号墓 東陶棺 蓋口縁部外面に残る板の押圧痕



図 164 赤田7号墓 東陶棺 蓋口縁部端面と内面の藁縄状圧痕

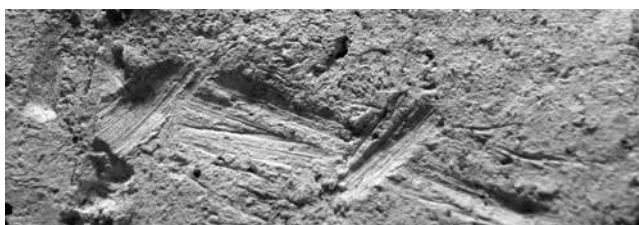


図 165 赤田7号墓 東陶棺 蓋内面の藁縄状圧痕



図 166 赤田7号墓 東陶棺 蓋内面の藁縄状圧痕

163)。切断面を観察すると、蓋Aに糸切り痕跡が認められるのに対して、蓋Bはへら切りが行われている。

口縁部端面には葉脈圧痕が認められない。高さ5cm・厚さ1cm前後の粘土帯を接いで口縁部をつくり、端部をヨコナデ調整する。その上に幅5cm前後の粘土帯を積み上げ体部を成形する。明瞭な閉塞痕跡は確認できないが、蓋Bの長側面中央上半の切断面付近で左斜め方向にはずれる接合痕跡があり（図162）、この右側あたりで閉塞していた可能性も想定できる。なお、この部分の内面はきれいにタテナデ調整されており、外見的に閉塞痕跡を見出すのは困難である。内面全体に藁縄状圧痕が認められ（図164～166）、乾燥時における形持たせの存在を想定させる。

棺身 全長180cm・幅63cm・高さ42cmの完形品である。内法寸法は全長159cm・幅47cm・高さ28cmとなる。切断された二つの棺身は同一品を2等分したものである。

内外面に赤色顔料を塗布し、脚底部に黒斑がつく。

両側の長側面に6条ずつ、短側面に1条ずつ合計14条の縦位突帯を蓋受け下方から底部へまっすぐ貼り付け、長側面に左右5区画、短側面に左右2区画をつくる。周底突帯は省略される。長側面の縦位突帯は脚の位置と揃えられ、脚上端まで一部及んでいる。突帯は、幅1cm未満で細い。

体部は隅丸方形の箱形で、器壁はほぼ直立している。口縁端部から下4cm前後の位置に粘土帯を貼り付け、補充粘土を少量加えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。蓋受けの上面は、平滑になでて仕上げている。口縁部の高さは3cm、蓋受け上面の幅6～7cm、端面厚さ1cm未満で、薄いつくりである。

体部の調整は、内外面ともにナナメナデを基調とする。外面全体に板の押圧痕が残るため、成形時に板押さえが多用されたことがうかがえる。特に長側外面の底部と脚の接合箇所周辺で板押さえが顕著にみられ、横に張り出した底部の粘土が脚上端に垂れ下がるような形状を呈する（図175）。

脚部には6行2列、合計12本の脚が取り付く。各脚の外面側にのみ円形透孔を1つずつ穿孔する。四隅の脚は短側外面、その他の脚は長側外面に透孔を配置し、四方から見えるように配慮されている。

脚部の調整は外面タテハケを基調とする。内面をみると、タテハケ調整を認める9脚とタテナデを認める3脚がある。脚端部はヨコナデ調整されており、外面タテハケの方向が上から下へと進んでいるため（図173・

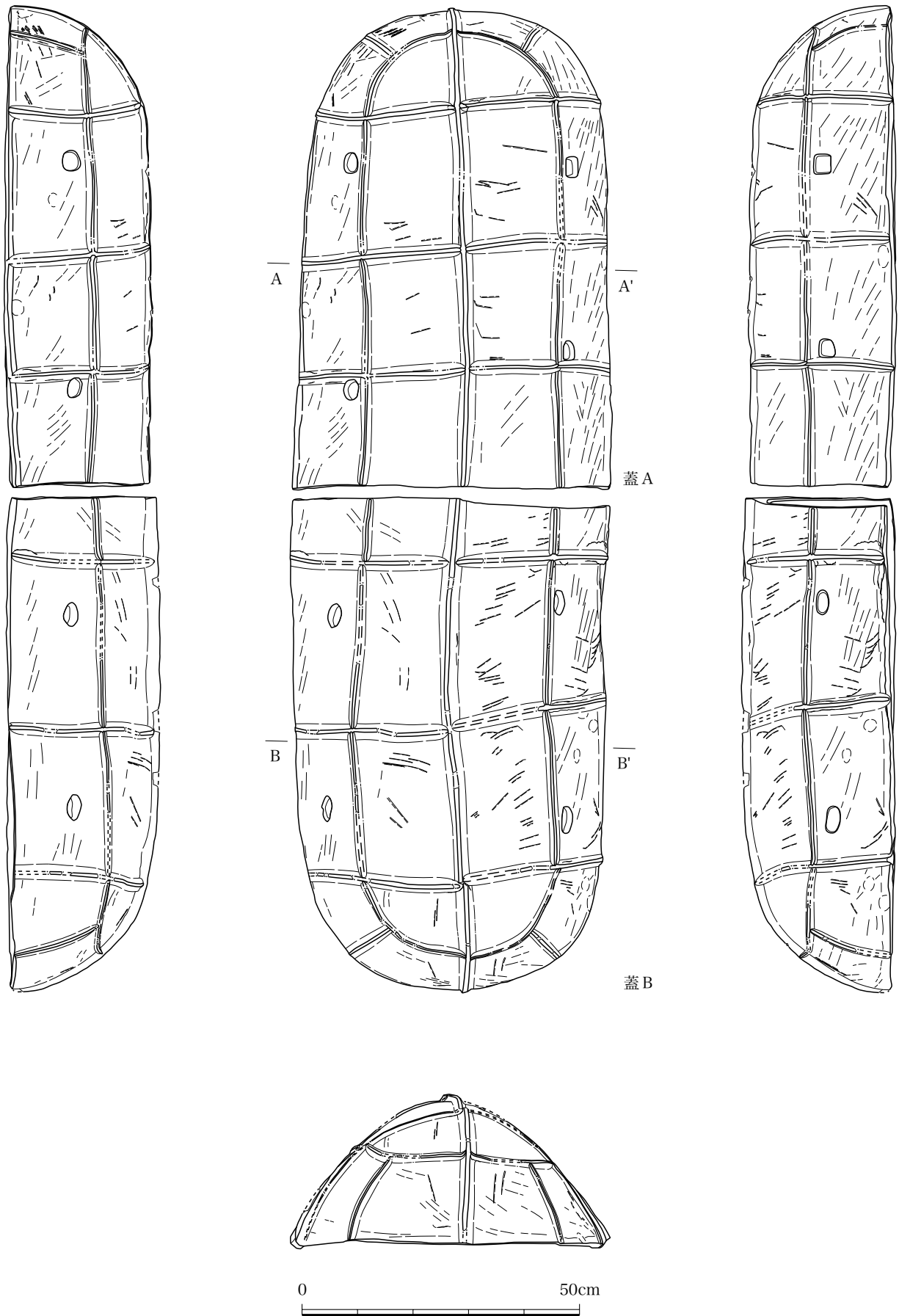


图 167 赤田7号墓 東陶棺 蓋外面平面・立面图 (1/10)

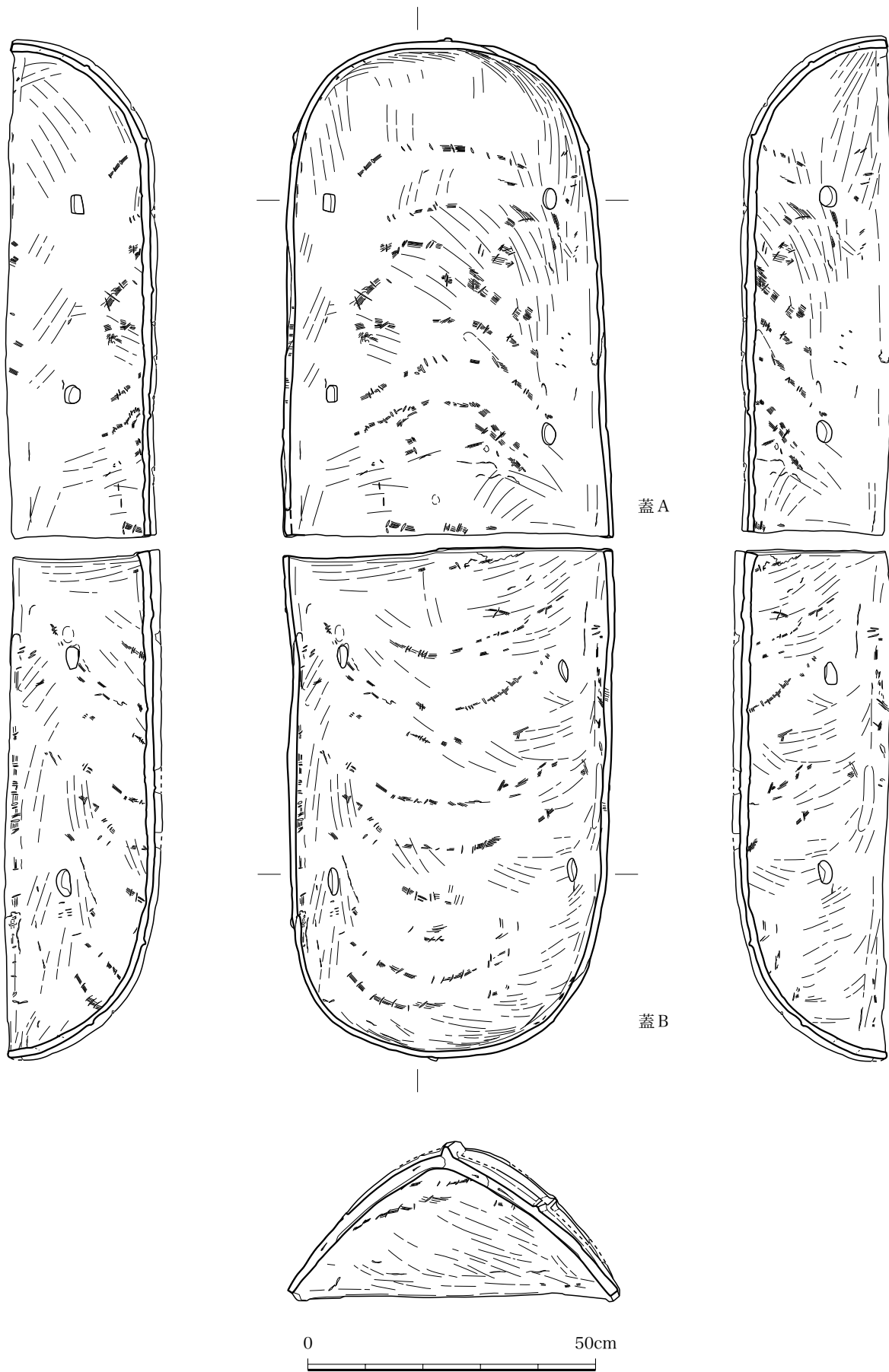


図168 赤田7号墓 東陶棺 蓋内面平面・立面図 (1/10)

175)、脚は成形後に倒立されていることがわかる。

脚部から底部にかけての製作は幾つかの工程を経て一体的に行われている。まず、脚となる規格的な円筒（直径13～14cm前後・高さ13cm前後）を12個つくり、口縁部をヨコナデ調整して仕上げる。そして、円筒の底に厚さ1cm前後の粘土を充填しなでて塞ぐ。この際に底部外面を指で押さえて調整したためか指頭圧痕がついている（図173）。そして、底部外面の外周にも粘土を幅4cm前後めぐらせて貼付ける。この作業を作業台上で行

うことによって、平坦面のある粘土板（底部の核）が脚の底に貼り付いた形状ができる（図172）。これに透孔を穿孔すると、底部製作の最小単位ができあがる（第1次底部成形）。これを順次接合して脚付の底部を製作したと思われる（第2次底部成形）。底部上面全体に粘土を敷く工程は認められない。第2次底部成形面がナデ調整を経てそのまま底部表面となる点から考えて、第2次成形も倒立状態のまま作業台上で行われた可能性が高い。ただし、この接合過程の詳細はよくわからなかった。

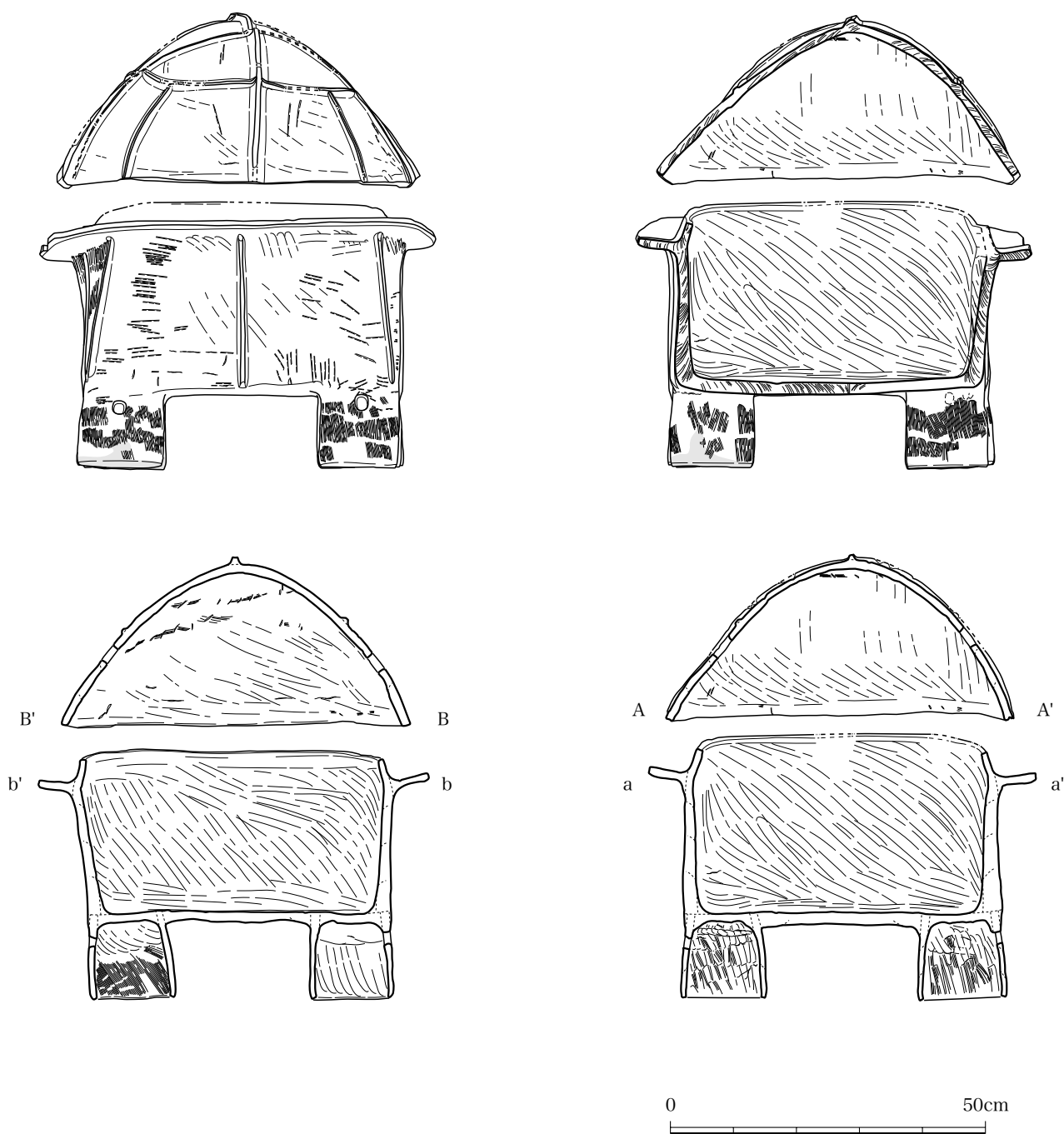


図169 赤田7号墓 東陶棺 身短側内外面立面図 (1/10)

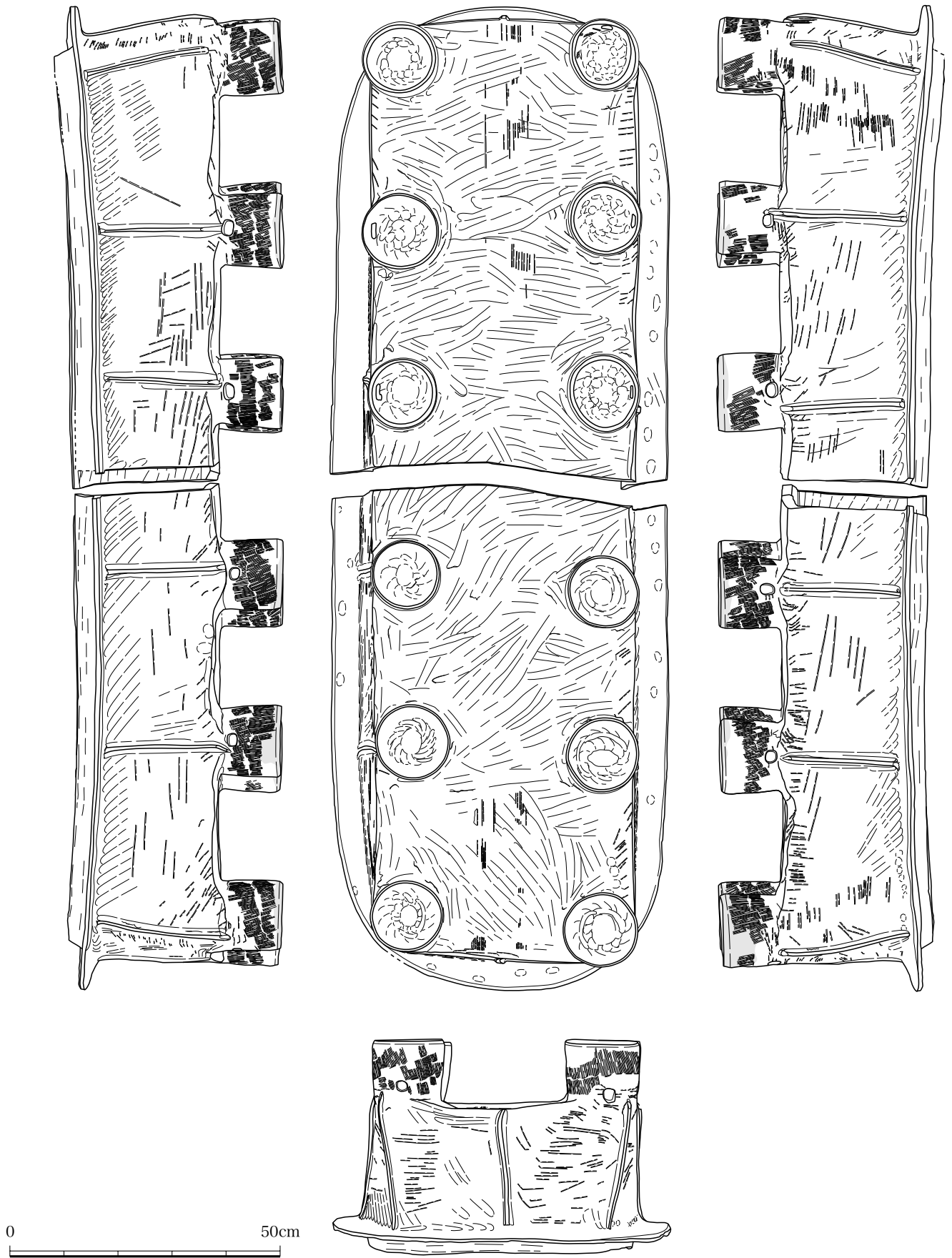


図170 赤田7号墓 東陶棺 身外面平面・立面図 (1/10)

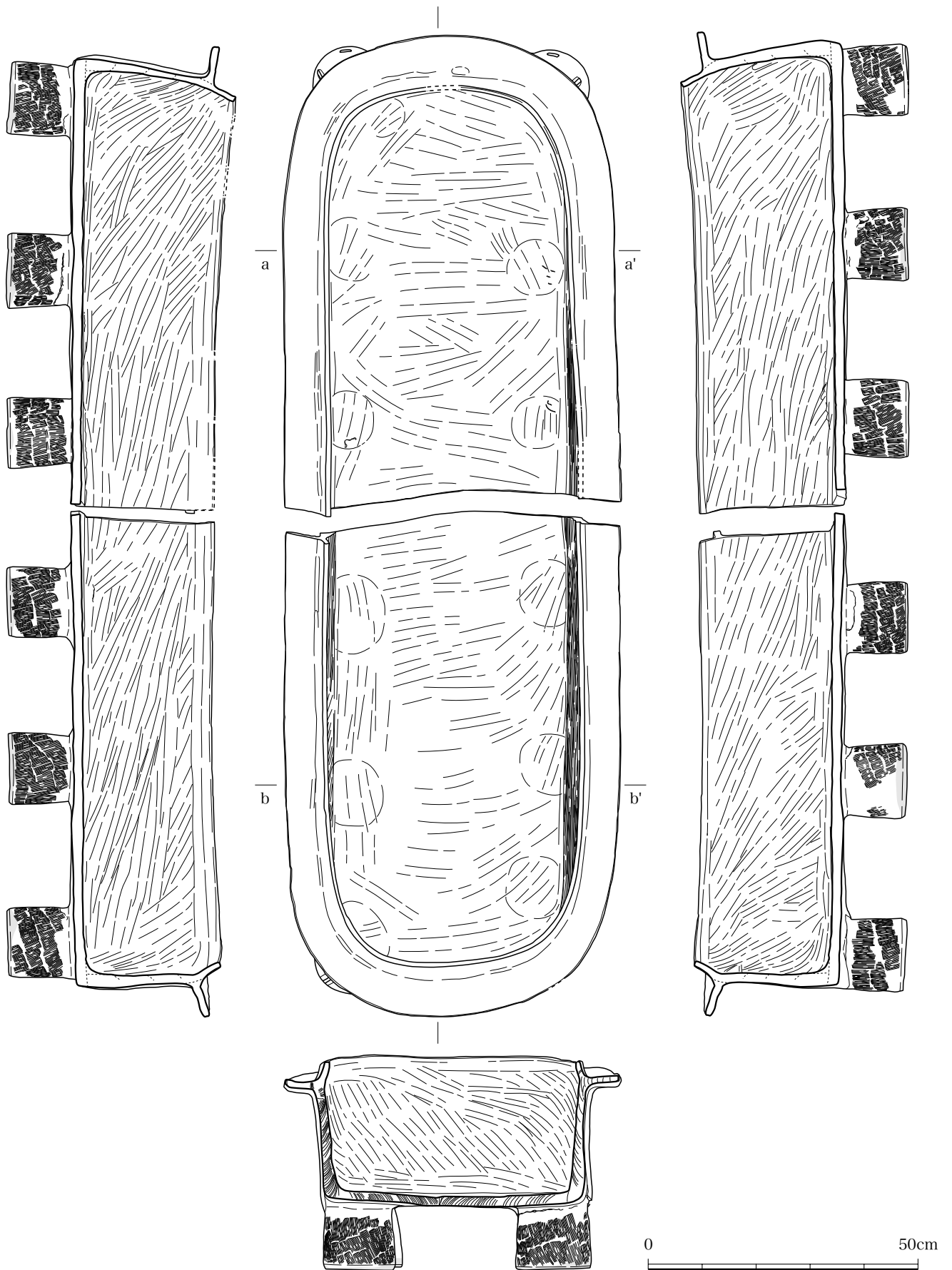


图 171 赤田 7 号墓 東陶棺 身内面平面・立面图 (1/10)



図 172 赤田7号墓 東陶棺 身底部と脚の接合状態

次に、底部外周に沿って高さ5cm前後の粘土帯を積み上げて体部を成形する。この際に板押さえを多用するが、第1次底部成形で脚外周に貼り付けた粘土が外方へ張り出すのを主に押さえ付けたと考えられる。また、底部と体部の接合箇所には、内面側に補充粘土を加えてヨコナデし補強している。蓋受けを接合した後に縦位突帯を貼り付けて完成する。高さは、脚部が12cm、底部から口縁部が30cm前後である。

なお、両方の短側面の底部裏面中央に長軸方向へ延びる木目の圧痕が認められる(図176)。両側の木目方向が一致し、まっすぐ延びる同じ板状痕跡と考えられる。



図 173 赤田7号墓 東陶棺 身底部からはずれた脚



図 175 赤田7号墓 東陶棺 身底部と脚部の外面調整



図 174 赤田7号墓 東陶棺 身口縁部内面の板状圧痕



図 176 赤田7号墓 東陶棺 身底部裏面に残る板状圧痕

板の長さは170cm以上、幅9cm程度に復原できる。乾燥時に底部中央の粘土が窪むのを防ぐため、長軸方向に沿って脚の間に板を外側からあてていたと想定できる。また、口縁部内面に横方向の板状圧痕が残る箇所があり(図174)、内側に板を当てて乾燥時の形持たせを組んでいた痕跡ではないかと思われる。

(2) 7号墓西陶棺

玄室西北隅から蓋をした完全な状態で出土した。蓋受けと脚底部の一部を欠失するが、残存状態は良好である。

棺蓋 全長103cm・幅55cm・高さ32cmの完形品である。内法寸法は全長99cm・幅49.5cm・高さ30cmとなる。切断された二つの棺蓋は同一品を2分割したものである。

赤色顔料は、天井部外面の一部で認められる。天井部から体部にかけてと口縁端部の一部に黒斑がみられる。

外面に突帯の貼付けが認められず、全体的に丸く平滑に仕上がっている。横断面形状は概ね半円形を呈する。両方の長側面に2つずつ合計4つの円形透孔を体部中央やや下寄りにあける。

調整は、外面の長側面をヨコナデし、短側面はナナメナデする。内面はナナメナデ・タテナデを行い、切断後に一部をヘラケズりする。

切断はヘラ切りで行われている。切断面のヘラ切り痕跡から、天井部に切込みを入れた後、両端部を下から上へ切り込んで切断したことがわかる。

口縁部端面には葉脈圧痕が認められない。高さ約6cmの粘土帯を4枚接合して口縁部をつくり、外面に藁を三重に巻いて外へ広がらないように固定する。

その上に幅3cm前後の粘土紐を大きく2回に分けて積み上げ、体部下半をつくる。片方の短側面からもう片方の短側面に向けて、数度に分け体部上半～天井部を徐々につくっていく。粘土は内側へ重ねて成形する。片方の短側面の天井部に手が入るだけの穴が最後に残る。

最後に、口縁部外面に巻いた藁の上から粘土を重ねて、口縁の外面調整を行う。そのため、口縁部外面の剥離箇所には藁圧痕が残る(図177・178)。透孔を外側から穿孔し、孔内面は無調整のまま放置される。

内面には藁縄状圧痕を認めるが(図180)、2分割後の内面ケズリでその圧痕が一部消されている。乾燥時の内側に藁等で作られた形持たせが存在したことをうかがわせる。

2分割した後、短側面天井部に残る穴に内面側から粘土をあてて上から指押えし閉塞する(図181)。その後、上から粘土をかぶせて丁寧にナデ調整する。閉塞箇所や

口縁部周辺の内面にはみ出た粘土を最後にヘラケズリして仕上げたと推測される。

棺身 全長109cm・幅54cm・高さ42cmの完形品である。内法寸法は全長94.5cm・幅43cm・高さ27cmとなる。2分割せずにそのままの形状で焼成されている。

赤色顔料の塗布は、内外面ともに認められない。脚底部の一部に黒斑がみられる。

外面に突帯の貼付けが認められない。体部は隅丸方形の箱形であるが、口縁部の平面形は楕円形を呈している。短側面の器壁が大きく内傾する。口縁端部から下へ5cm前後の位置に粘土帯を貼り付け、下に補充粘土を少し加えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。蓋受けの上面は、平滑になでて仕上げている。口縁部の高さは2～3cm、蓋受け上面の幅3～5cm、厚さは端部1cm未満で薄い。

体部の調整は内外面ともにナナメナデを基調とし、外面はさらにヨコナデを行う。また、口縁部内面のヨコナデが蓋受け裏面にまで一部及んでいる。

脚部には4行2列、合計8本の脚が取り付く。透孔は認められない。

脚部の調整は、外面タテハケ、内面タテナデである。底部はヨコナデ調整されており、外面タテハケの方向が



図177 赤田7号墓 西陶棺
蓋口縁部外面に塗り込められた藁の痕跡



図178 赤田7号墓 西陶棺
蓋口縁部外面に塗り込められた藁の痕跡

上から下へと進んでいるため、脚は成形後に倒立されていることがわかる。

脚部から底部にかけての製作は幾つかの工程を経て一体的に行われている。まず、脚となる規格的な円筒（直

径11～13cm・高さ13～14cm）を8個つくり、口縁部をヨコナデ調整して仕上げる。この円筒を脚径よりもう少し大きい粘土板の上のにせ、内外面に補充粘土を加えてヨコナデし接合する。ただし、内面に補充粘土を認め

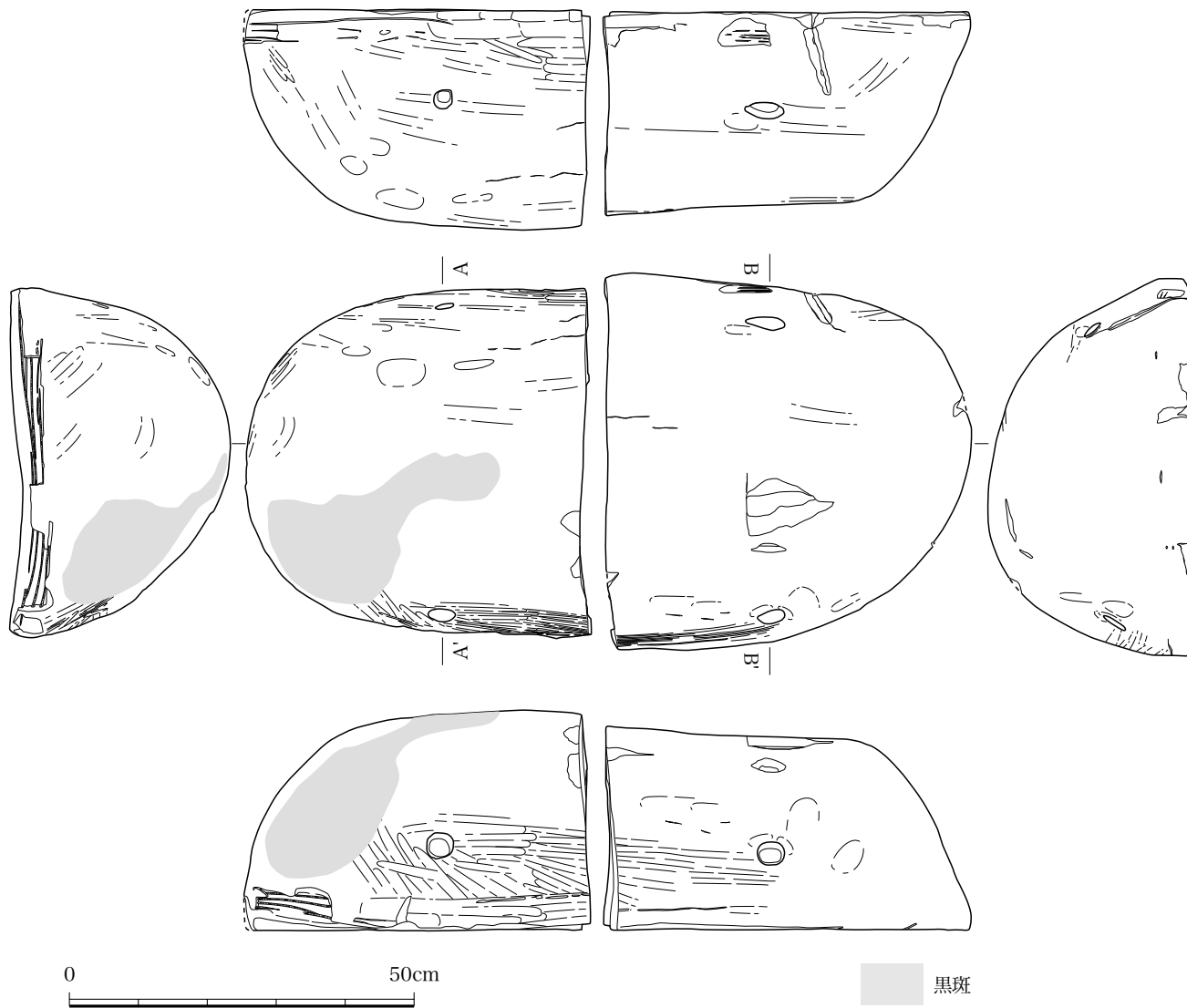


図179 赤田7号墓 西陶棺 蓋外面平面・立面図 (1/10)



図180 赤田7号墓 西陶棺 蓋内面の縄状痕

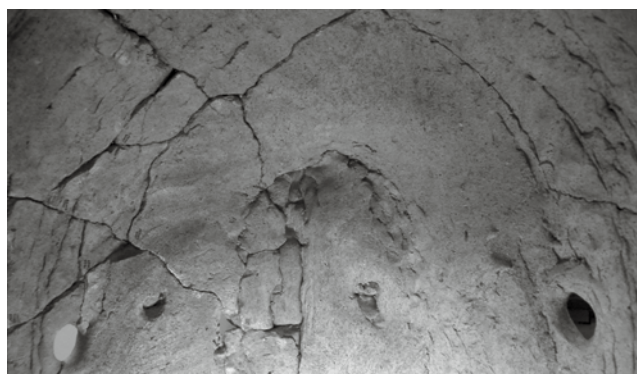


図181 赤田7号墓 西陶棺 蓋内面の閉塞痕跡

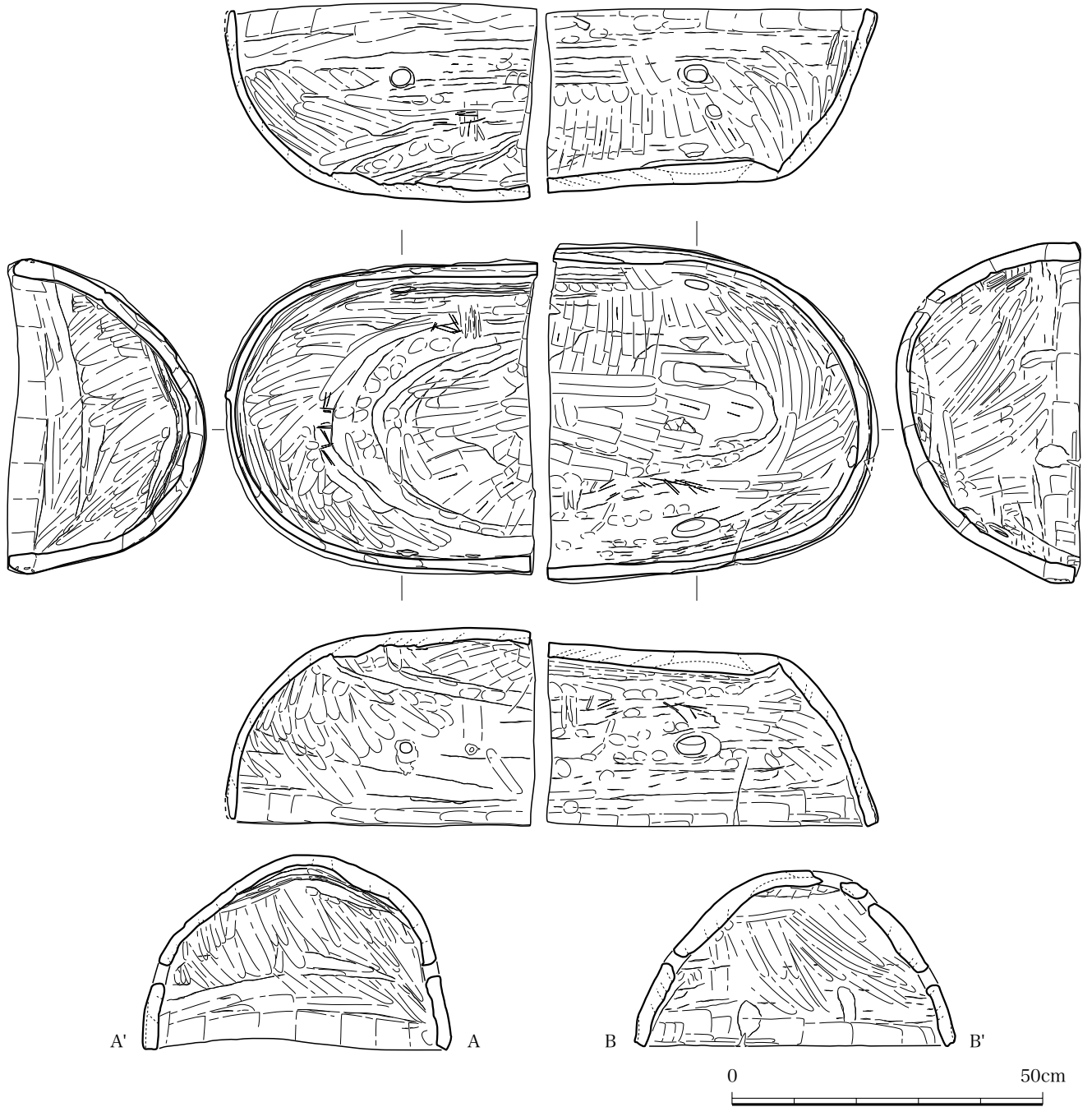


図182 赤田7号墓 西陶棺 蓋内面平面・立面図 (1/10)



図183 赤田7号墓 西陶棺 身口縁部内面の板状圧痕



図184 赤田7号墓 西陶棺 身底部と脚の接合状態

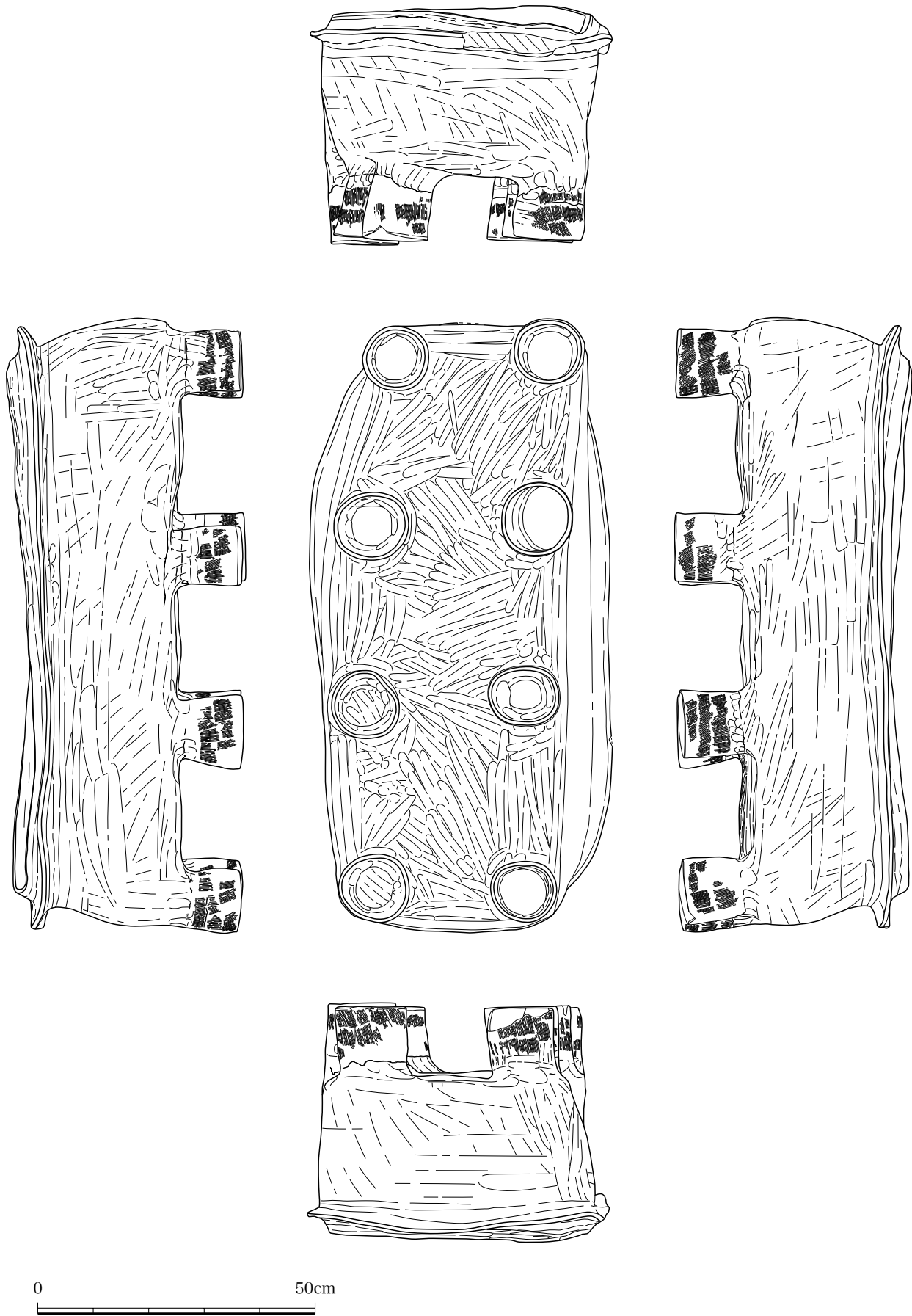


図185 赤田7号墓 西陶棺 身外面平面・立面図 (1/10)

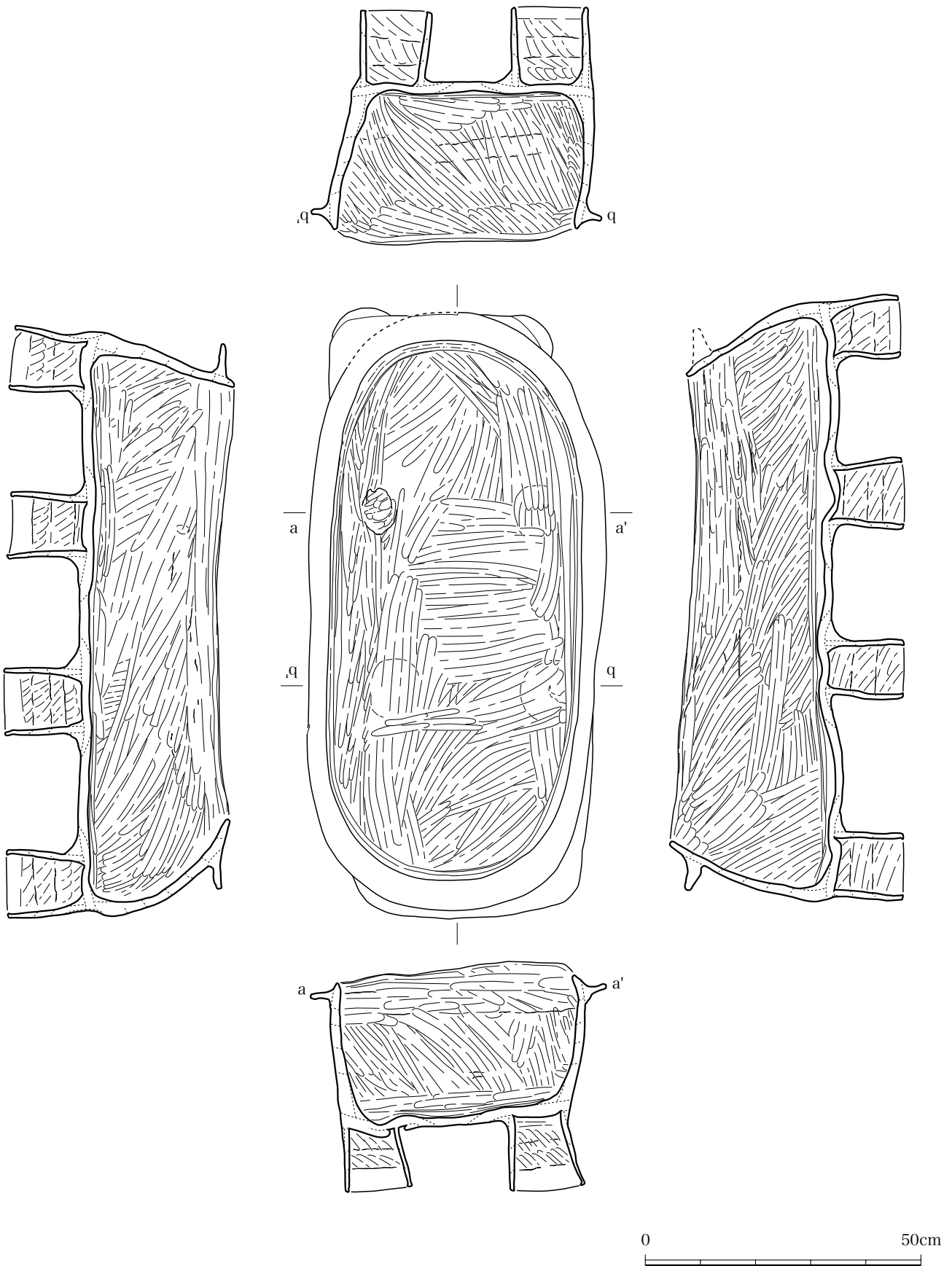


图 186 赤田 7 号墓 西陶棺 身内面平面·立面图 (1/10)

ない脚もいくつかあり、省力化が一部で行われている。この作業を作業台上で行うことによって、平坦面のある粘土板(底部の核)が脚の底に貼り付いた形状ができる。これを倒立して底部製作の最小単位ができあがる(第1次底部成形)。これに粘土板を付加しつつ順次接合(図187)して脚付の底部を製作したと思われる(第2次底



図187 赤田7号墓 西陶棺 身底部と脚の接合状態



図188 赤田7号墓 西陶棺 身脚内面の粘土板落ち込み状態

部成形)。底部上面全体に粘土を敷く工程は認められない。第1次底部成形時の粘土板の一部が脚内面に落ち込んだ状態を1箇所確認できる(図188)。この状態を調整した痕跡がみられないので、第2次底部成形は正位のまま行われたと推測できる。ただし、この接合過程の詳細はよくわからなかった。

次に、底部外周に沿って粘土帯を積み上げ体部を成形する。底部と体部の接合箇所には、内面側に補充粘土を加えてヨコナデし補強している(図184)。高さは、脚部が11~12cm、底部から口縁部が30cm前後である。

また、長側面の口縁部内面に横方向の板状圧痕が残る箇所があり、内側に板を当てて乾燥時の形持たせを組んでいた痕跡ではないかと思われる(図183)。

2. 鉄器(図189)

鉄刀子(1) 1は全長10.0cm、刃部の長さ6.2cm・幅1.0cm、茎部の長さ3.8cm・幅0.45cmの鉄刀子である。茎部には黒漆塗り木柄の一部が付着して残る。また、刃部にも木質の一部が付着する。東陶棺内出土。

鉄釘(2~7) 鉄釘は6点ある。すべて頭部を折り曲げる折曲型の鉄釘で、丸く折り曲げる2・3と直角に折り曲げる4・5・6がある。長さは3が8.0cm、先端部を欠失する2・4はそれぞれ8.9cm前後・8.3cm前後とみられる。5・6の長さはこれらより少し短い可能性がある。幅は頭部で0.8~0.9cm・体部で0.5~0.7cm、厚さは0.3~0.5cm。4号墓の鉄釘分類に準拠すると、2・4がA1類、3がC1類であり、6はA2類となる可能性がある。5・7は類型不明。

A1・A2類は長側板と短側板を四隅で結合したと推定できるが、2・4・6は出土位置が近接しており、いくつかは2次的に移動していると考えられる。この点

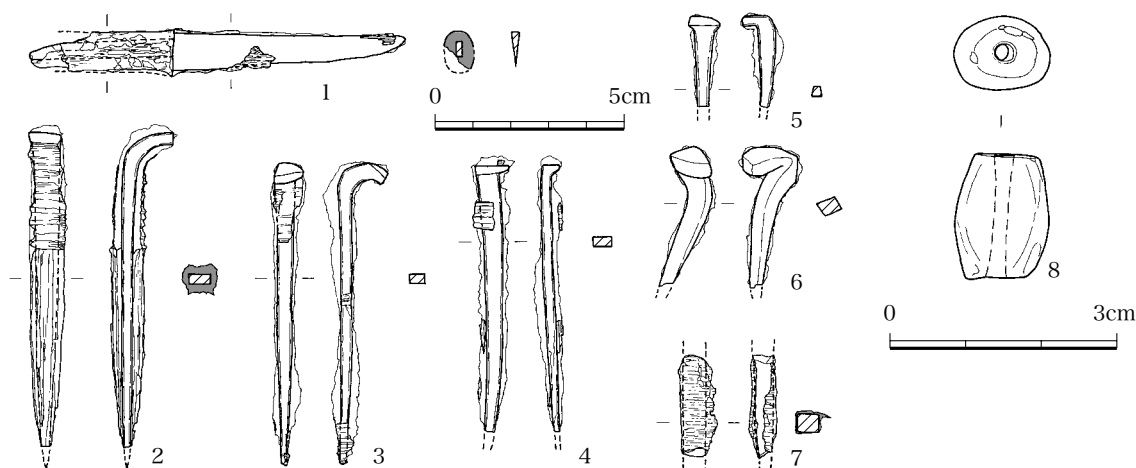


図189 赤田7号墓 玄室出土鉄器(1/2)・棗玉(実大)

は、鉄釘が東陶棺の直下で重複する位置から出土したとと整合する。しかし、3・5の位置を勘案すると、長さ127cm前後・幅45cm前後の長方形範囲に接するように鉄釘が分布している。5がA類であれば、2と対角線上にA類が位置することになり、ここに木棺が存在したと推測できることになる。この推測を前提として他の鉄釘の出土位置を考えると、7は底板と短側板を結合したC類となる可能性を想定でき、C1類の3は木棺推定範囲の北西隅付近まで西へ移動したとみられる。以上のように考えてよければ、初葬の木棺がかなり腐朽した頃にそれを南西方向へ片づけて、その上に東陶棺を配置したような状況を想定できるように思われる。

なお、2・3の表面に残る木質痕跡から、側板・底板ともに厚さは2.8cm前後であったと思われる。B類の存在を確認できない点から、長側板と底板は鉄釘で結合していなかったと推測できる。

棗玉 (8) 8は長さ1.67cmの瑪瑙製の棗玉で、西陶棺内埋土を篩がけして出土した。断面楕円形(1.25×0.95cm)の扁平な製品で、両面から穿孔されている。孔径0.28cmで、色調は赤褐色を呈する。(鐘方正樹)

3. 埴輪 (図190)

西陶棺下に敷いた埴輪片で、すべて円筒埴輪である。いずれも製作技法などから埴輪編年V期に位置づけることができる。

1は、4条突帯5段構成の円筒埴輪で、図上復原できた個体である。口径25.6cm、高さ50.3cmに復原できる。外面は、1次調整タテハケ(14～16条/cm)、口縁部付近をヨコナデ、第1突帯以下の底部を板押圧で調整する。重複関係から、下方から上方の順にタテハケ調整を施す。内面は口縁部付近をヨコナデ、第4突帯以上を斜め方向のハケ(10～12条/cm)、第4突帯以下を上下方向のナデ、底部を指オサエで調整する。3段目に円形の透孔が配置され、口縁部には×状のヘラ記号が施される。突帯は断面M字状を呈し、突帯間隔は不揃いである。底部高約11.5cm、第1～2突帯間10.5cm(復原)、第2～3突帯間8.0cm、第3～4突帯間13.5cm、口縁部高6.5cmである。突帯の上下でハケが連続していることから、ハケ調整後に突帯を貼りつけたことがわかる。接合しないが同一個体である底部片で観察すると、高さ9cmの粘土帯を底部に用い、幅約2cmの粘土紐をその上に積み上げている。2は1と胎土・色調が類似することから同一個体と考えられる。

3は2条の突帯が残存する。内径は20.2cmに復原できる。調整は、外面1次調整タテハケ(10条/cm)、

内面上下方向のナデまたは部分的にハケ(10条/cm)である。重複関係から下方から上方の順でハケ調整を施す。突帯は断面三角形を呈し、突帯間隔は10.3cmである。突帯の上下でハケが連続していることから、ハケ調整後に突帯を貼りつけたことがわかる。胎土に金雲母を含む。

4は底部片で第2突帯まで残存する。調整は、外面1次調整タテハケ(10条/cm)、底部は板押圧を行なう。内面は上下方向のナデで、底部はやや幅広のナデおよび指オサエである。突帯は台形状を呈し、突帯間隔は10.5cmである。断続ナデ技法は確認できていないが、突帯は非直線的に貼りつけられているため、突帯間隔設定技法は用いていないと推測される。突帯の上下でハケが連続していることから、ハケ調整後に突帯を貼りつけたことがわかる。2段目に円形透孔がある。(村瀬 陸)

4. 土器 (図191)

(1) 玄室出土土器 (1～23)

玄室から出土した土器には須恵器杯H蓋(1～5)・身(6～10)、杯G蓋(11～13)、無蓋高杯(14)、短頸壺(15)、長頸壺(16)、台付長頸壺(17)、壺M(23)、土師器皿A(19～22)、甕(18)がある。

須恵器杯H蓋(1～5)は1が口径9.25cmである以外は10.0(2)～10.8(4)cmで、調整はいずれも頂部外面へラ切り後未調整。杯H身(6～10)は立ち上がり上端が受け部より低い位置にあるもの(6・7)と受け部より上に出るもの(8～10)とがある。杯G蓋(11～13)はかえりが口縁端部より下に出るもの(11・12)と上に収まるもの(13)とがみられる。杯G身が出土していないので、杯H蓋を逆位で身として使用したか、杯H身の蓋あるいは高杯や壺の蓋として使われた可能性も考えられる。短頸壺(15)は底部外面を手持ちによるヘラケズリで調整している。口縁端部をナデにより内傾させる。肩部に灰白色の自然釉がかかる。長頸壺(16)は底部・肩部ともやや丸味を帯びる形態。体部・肩部・頸部に一条の沈線を巡らせる。土師器甕(18)は底部外面をヘラケズリし、体部内外面をハケメ、口縁部をヨコナデで調整する。口縁部の形態は斜め上方に直線的に開く。

土師器皿(19～23)は23層から出土したものである。いずれも薄手で、器表面の風化が激しいが、底部外面をヘラケズリ、口縁部をヨコナデにより調整する。内外面に指頭圧痕がみられる。須恵器壺M(23)は底部外面に糸切りの痕跡がある。

これらの土器は杯H・杯Gの法量、技法から1～18

が7世紀中頃、19～23は土師器皿、須恵器壺Mの形態から9世紀後半に位置づけられよう。

(2) 墓道出土土器 (24～37)

墓道から出土した土器には須恵器杯H身 (28～32)、杯G蓋 (24～26)・身 (27)、杯B (34)、壺 (35・

36)、甕 (37)、土師器碗 (33) がある。

須恵器では、杯Gの24・26が笠形の器形で、頂部外面をロクロケズリするが、25は頂部がやや平たい扁平な形態で、頂部外面の調整はロクロナデである。27は壺蓋の可能性もあるが、口縁部が外反し、26の蓋の径と合うことから杯G身としておく。杯H身は口径9.2 (30)～10.4 (28) cm。32は31と底部外面の調整、焼成が似ており、杯H身底部と考えておきたい。甕(37)は底部外面が格子目タタキ、体部は平行タタキで、内面に同心円当て具痕がある。

34～36は墓道出土の8世紀の須恵器である。杯B (34)は内外面ともロクロナデ。壺 (35)は頸部と胴部との接合が2段接合とみられる。壺底部 (36)は底部～体部外面・高台接地面に淡灰緑色の自然釉がかかる。

土師器碗 (33)は風化が激しいが、口縁部はヨコナデである。口縁部外面に黒斑がある。

これらの土器は24～33・37が玄室出土の1～18と同じく7世紀中頃、34～36は須恵器杯Bの形態や

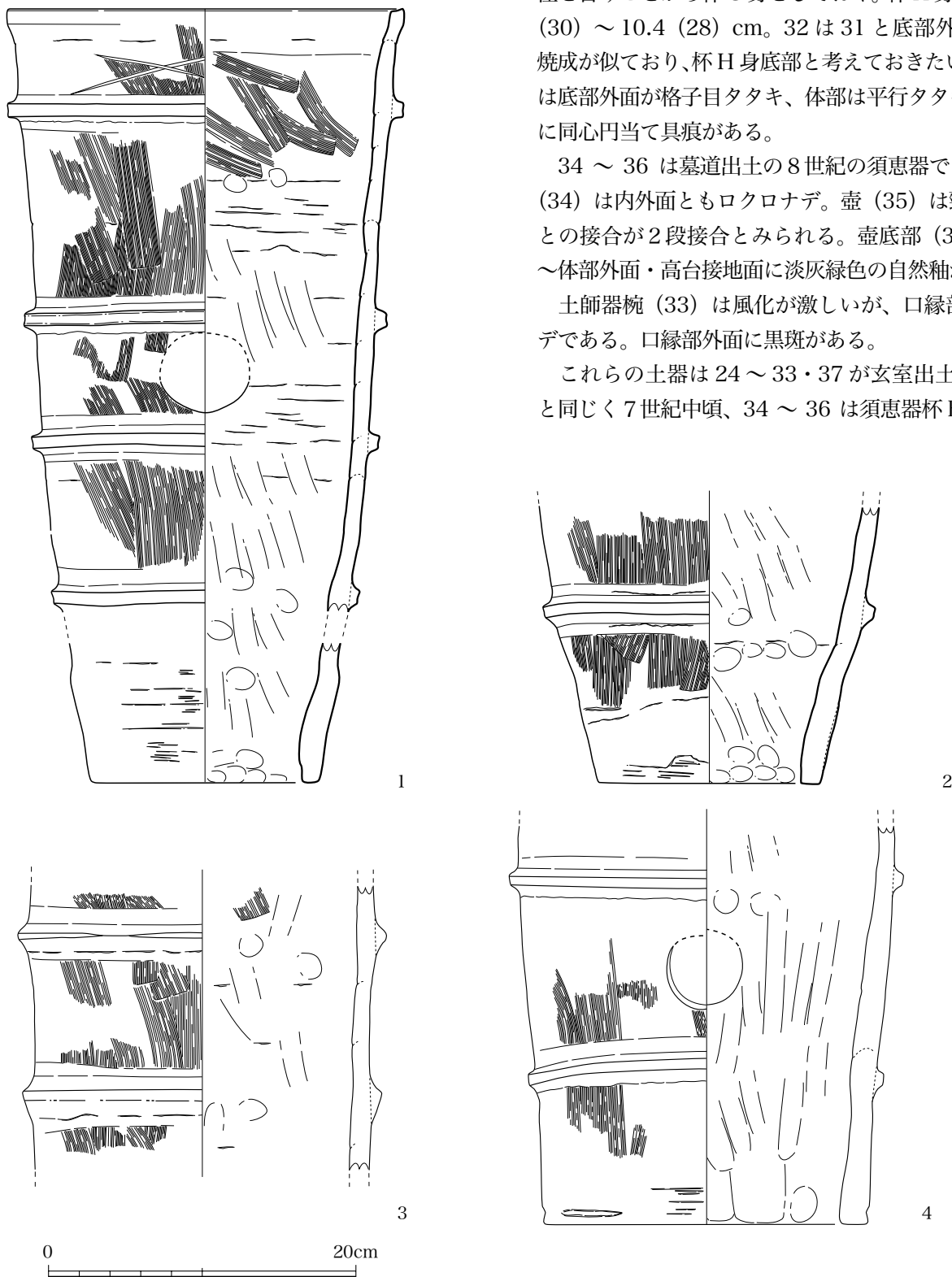


図190 赤田7号墓 玄室出土土筒埴輪 (1/4)

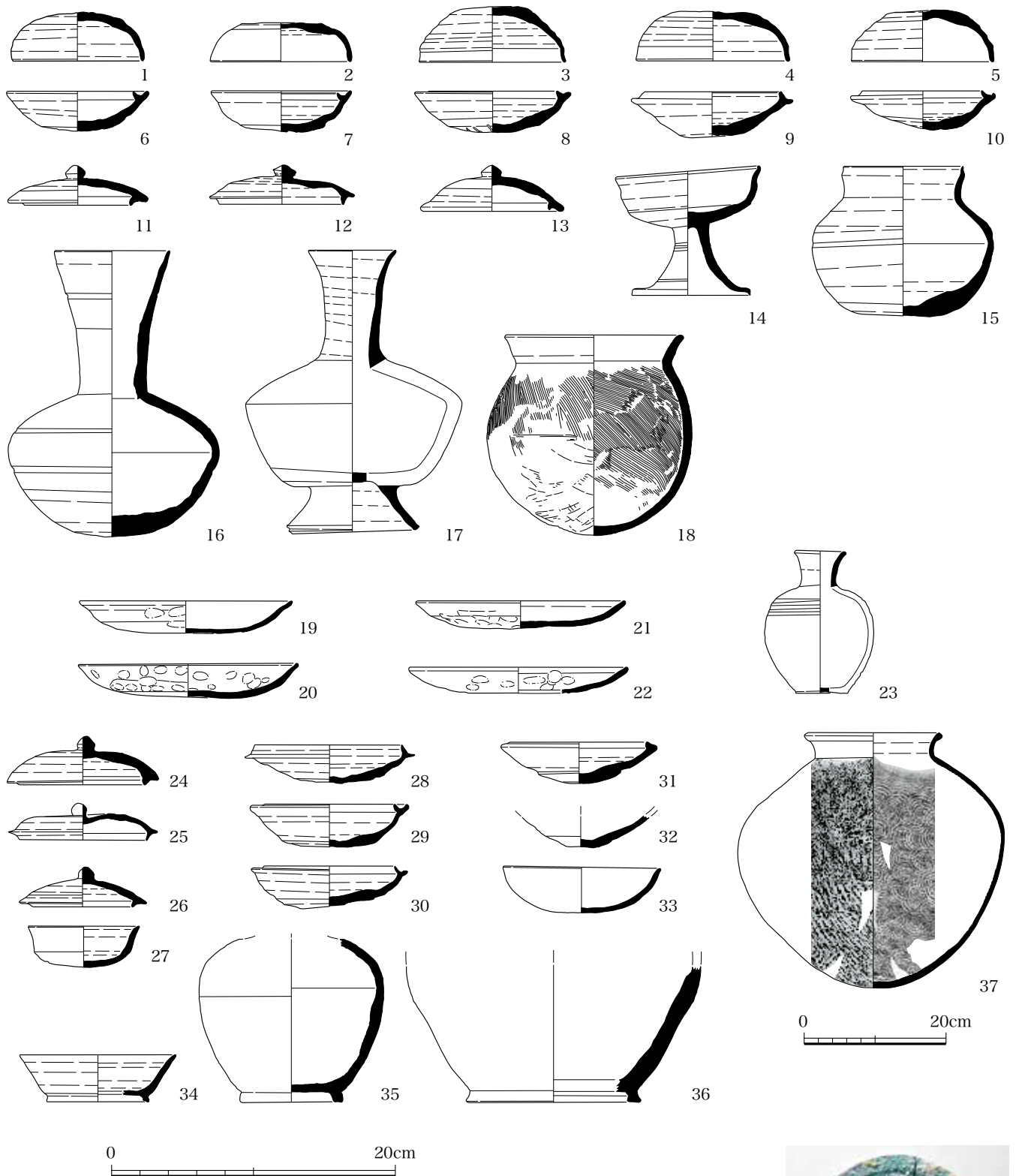


図191 赤田7号墓 出土土器 (1/4, 37は1/8)

壺の頸部の接合方法が2段構成と考えられることから8世紀末頃～9世紀初頭に位置づけられよう。(池田裕英)

6. 銭貨 (図192)

隆平永寶で延暦15年(796)初鑄。銹化が著しく、一部細片化している。脆弱なため、拓影をとることがで

きない。外縁外径2.40～2.45cm、外縁内径2.0～2.1cmで、一辺0.65cmの方形孔があく。厚さ0.15cm。(鐘方正樹)



図192 赤田7号墓 玄室出土隆平永寶 (鐘方正樹)

第12節 赤田8号墓

全長は14.8 m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。玄室の主軸はN-22°-Eである。発掘調査を行った横穴墓中、玄室の規模が最も小さい横穴墓である。玄門の土層観察から玄室の閉塞は1度のみであったようである。玄室中央で土師質亀甲形陶棺1基を検出した。

I. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図193)

玄室・羨道は灰白色の砂礫層の地山(基本層序:VII-4層)、墓道は灰白色の砂礫層及び黄色の粘土層の地山(同:VII-1層)を掘削して造られ、その埋土は、埋葬に関連する土層とその他の土層に大別できる。

(1) 埋葬に関連する土層

層序と層の様相から、下記の2層(A・C層)が識別できる。

A層(1~5層) 玄室・羨道及び羨門から4.2 m南までの墓道の床面の整地土層(1・2層)及び墓道内東側壁沿いの溝の埋立て土層(3~5層)。

床面の整地土層(1・2層)は厚さ0.2 m前後で、硬くしまる。黄色の砂質シルト・粘土ブロックからなる2層が玄室から墓道に及ぶ床面を形成し、玄室では上面に陶棺1基が置かれる。溝の埋立て土層(3~5層)は黄色や黄褐色の砂質シルト・粘土ブロックからなる。

C層(6~16層) 羨道及び羨門から2.8 m南までの墓道のA層上面に形成された、羨門の閉塞土層。高さ1.5 mで、主に黄色や黄褐色のシルトを含む砂層や砂礫層からなる。墓道の羨門寄りに高まりを作った後に羨道側に土を積み上げる。各層の層理は床面に沿う。羨門付近では上部に盗掘坑が掘削されている。

(2) その他の土層

a. 墓道 層序と層の様相から、下記の3層(D~F層)が識別できる。

D層(17層) 墓道の床面と両側面に沿って形成された埋土層。断面観察箇所での厚さは0.3 m。黄色の砂質シルト・粘土からなる。

E層(18~22層) C・D層の形成後に生じた墓道中央部の窪み内で盗掘前に形成された埋土層。

厚さ0.3~0.8 m。下部(18~21層)は主に黄色や黄褐色の砂質シルト・粘土層やシルト質砂層からなる。上部の黒褐色シルト質砂層(22層)は基本層序のV層に対応する埋没土層。上面から盗掘坑が掘削されている。最下位で8世紀の須恵器杯もしくは椀が出土した。

F層(30~34層) E層上に形成された埋土層(30・

31層)及びそれを浸食して形成された旧流路の埋土層(32~34層)。前者は黄褐色の砂質シルト・粘土層や黄色のシルト質砂層からなる。後者は主に黄灰色の砂礫層やシルト層。33層はE層の22層の再堆積層。

b. 玄室・羨道 層序と層の様相から、下記の2層(G・H層)が識別できる。

G層(断面図23~25層) C層による羨門の閉塞後から盗掘までに形成された埋土層。

厚さ0.15~0.6 mで、玄室の奥壁寄りが厚い。A・C層の上面を覆う23・24層は灰白色や黄色のシルトを含む砂礫層。玄室の奥壁寄りの25層は地山破砕物の層。最上面には盗掘時に破壊された陶棺の破片が散布する。

H層(26~29層) 盗掘後に前述したG層上に形成された埋土層。27・28層は黄色の砂質シルト・粘土の薄層とシルトを含む砂の互層。盗掘坑内の29層は黄褐色の砂礫質シルト・粘土からなる。

c. 層の成因 地山の破砕物を主とするG層の25層は、位置関係から玄室内の崩・剥落土と推察する。黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のIV層と様相が似ることから、斜面崩落土及び羨門付近からの流入土と考える。(安井宣也)

2. 横穴墓の規模と形態 (図193)

玄室 長さ3.0 m、奥壁幅1.8 mで、奥壁の高さは1.8 mである。1~9号墓の中では最も玄室の規模が小さい。奥壁から玄室中程までは長方形を呈するが、中程から玄門に向かって狭まる羽子板形の平面形態である。側壁は上方に向かって広がる逆台形の断面形である。奥壁の残存状態から玄室の高さは2.0 m程度のドーム状と推定される。床面は南に向かってわずかに下る。奥壁側の北端約1/4が0.1 m程度南に比べて高く削り残されているが、その部分を覆うように床面全体を整地している。床面の地山上面の標高は奥壁で86.6 m、玄門付近で86.5 mである。

羨道 長さ1.3 m程度に復原できる。幅は1.2 mで、側壁は内傾しながら上方に向かう。盗掘坑により上部が壊されているが、高さ1.4 m程度のドーム状に復原できる。

墓道 長さ10.5 m以上で、底部幅が1.2~1.5 m、上面幅が2.4~2.7 m、深さは最も深い部分で2.7 mある。断面は逆台形である。南端は後世に調査地の南を流れる河川の氾濫により侵食され、削られている。床面は南に向かって緩やかに下り、墓道南端は東に向かってほぼ直角に曲がる。旧地形に沿って掘られ、7号墓と同じく横穴墓に至る道に繋がるのであろう。

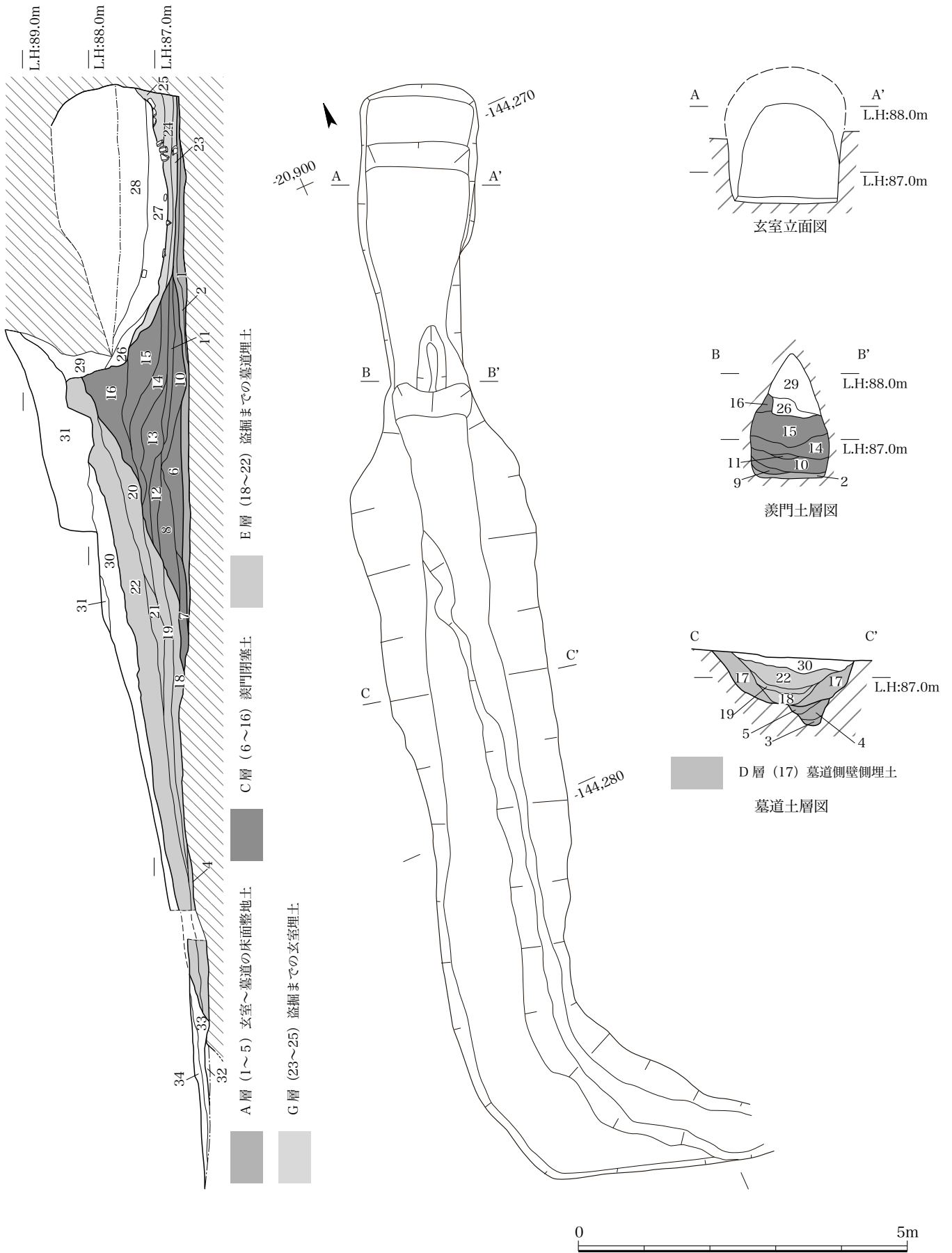


図193 赤田8号墓 土層図・遺構平面・立面図 (1/80)

A層	9 2.5Y7/3 (浅黄) シルト混じり砂礫	G層
1 地山破砕物に2.5Y7/2 (灰白) シルト混じり砂が混合	10 地山破砕物に2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂が混合	23 2.5Y7/2 (灰白) シルト混じり砂礫
2 2.5Y7/2 (灰白) 砂質シルト・粘土ブロックに2.5 Y 7/3 (浅黄) シルト混じり砂が混合	11 2.5Y5/3 (にぶい黄) シルト質砂	24 2.5Y7/4 (浅褐) シルト・粘土混じり砂礫
3 2.5Y6/2 (灰黄) 砂質シルト・粘土	12 2.5Y5/4 (黄褐) シルト質砂	25 地山破砕物
4 2.5Y6/6 (明黄褐) 砂質シルト・粘土ブロックに2.5Y7/2 (灰白) シルト・粘質砂が混合	13 2.5Y7/4 (浅黄) シルト質砂礫	H層
5 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土ブロックを含む2.5Y5/3 (黄褐) 砂質シルト	14 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂礫	26 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
C層	15 2.5Y5/4 (黄褐) シルト質砂礫	27 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土とシルト質砂の薄層と地山破砕物の薄層の混じり砂礫
6 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂礫・シルト質砂の薄層の互層	16 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト混じり砂	28 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土とシルト質砂の薄層の互層
7 2.5Y7/2 (灰白) 砂質シルト・粘土ブロックを含む2.5Y7/3 (浅黄) シルト質砂	D層	29 2.5Y5/4 (黄褐) 砂礫質シルト・粘土
8 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土ブロックを含む2.5Y6/6 (明黄褐) シルト混じり砂	17 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土	F層
	E層	30 2.5Y5/4 (黄褐) 砂質シルト・粘土
	18 2.5Y5/4 (黄褐) 砂礫質シルト・粘土	31 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂
	19 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト質砂	32 2.5Y4.5/1 (黄灰) シルト・粘土質砂礫
	20 2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土	33 2.5Y3/2 (黒褐) 砂質シルト
	21 2.5Y5/2 (暗灰黄) シルト質砂礫	34 2.5Y5/1 (黄灰) 砂質シルト、砂薄層含む
	22 2.5Y3/2 (黒褐) シルト質砂	

赤田8号墓 堆積土層名

墓道東壁に沿って床面に幅0.3 m、深さ0.2 mの溝がある。溝は地山上面で検出した。他の横穴墓には意図的に掘られた排水溝がなく、この溝は墓道を水が流れたために形成されたものと思われる。墓道末端の標高は86.0mである。

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図194)

奥壁寄りの玄室中央やや西よりに土師質亀甲形陶棺が1基置かれていた。検出した陶棺は天井の崩落や盗掘により壊されていたが、棺身西側の脚部の2本が据えられた状態で出土した。棺の主軸は玄室の主軸に合致する。陶棺は2層上面に置かれ、この層の上面では陶棺脚部が置かれていた痕跡も検出し、陶棺の位置と大きさを復原することができる(図194)。また、陶棺周辺からは棺蓋の透孔を塞いだ陶栓も出土している。玄室内に埋葬された棺はこの陶棺のみで、玄室の大きさと関わりと考えられる。

盗掘坑や24層、25層からも陶棺片が多数出土している。盗掘の際に破壊され、動かされたものであろう。

2. 副葬品の配置

(1) 玄室遺物出土状況(図194)

玄室から出土した遺物には鉄器と土器とがある。

原位置を保っていた陶棺身の底に不明鉄器(図2103)が残存していた。

土器には土師器甕(図2121)、須恵器杯B(2)・長頸壺(3)、土馬(4)がある。

土師器甕は2層の床面直上から出土した。墓道からもこの土器の小片が出土している。出土位置や層位からみて陶棺に伴うのはこの土器のみである。

須恵器杯B・長頸壺とも25層から出土した8世紀以降のものである。いずれも小片で、意図的に玄室内に持ち込まれたものかどうかは判断が難しい。土馬も8世紀のものと思われるが、玄室奥壁近くの床面上から出土している。半身程の破片で、奥壁近くからこの土馬片が出土したことだけで8世紀に玄室内へ入っているかどうかは判断し難い。

盗掘後の流入土である27層からは8世紀のものと思われる磚の破片が数点出土している。

この8号墓は他の横穴墓に比べて玄室から出土した土器の数が少ないことが特徴的である。

円筒埴輪片(図2111~7)が埋葬後の堆積層や盗掘坑から出土している。床面から出土したものはない。

羨門に穿たれた盗掘坑から土師器皿(10)、羽釜(11)が出土しており、盗掘の時期をうかがうことができる。

(2) 墓道遺物出土状況(図195)

墓道埋土22層から須恵器杯もしくは椀(7)、19層から須恵器甕(6)、第20層から土師器甕(8)が出土した。土師器甕(8)は墓道南半で出土した。この甕の一部は玄室からも出土しており、本来は玄室にあったのかもしれない。須恵器甕(6)は横穴墓に埋葬が行われた時期のもの、杯もしくは椀(7)はそれとはやや時期を隔てた8世紀頃のものと思われるが、いずれも小破片である。須恵器甕(5)は18層から出土した。小片で出土したものが接合・復原できたもので、出土状態からみて出土位置で意図的に砕かれたもののように思われた。墓道で何らかの祭祀が行われたと考えられる。

この他、石見型埴輪片(図2118)が21層から出土している。(池田裕英)

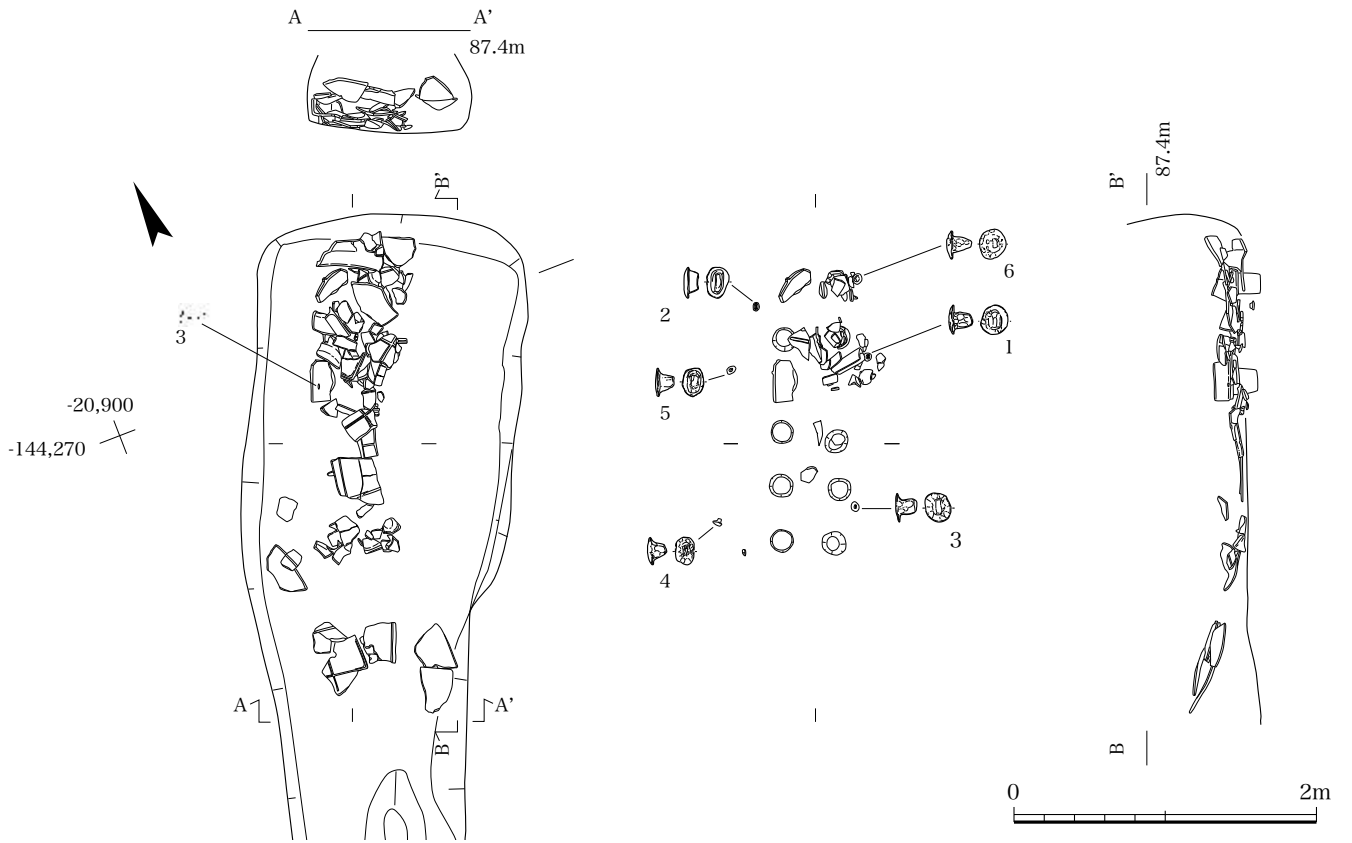


图194 赤田8号墓 女室陶棺(左)・陶栓(右)出土状态(1/50)

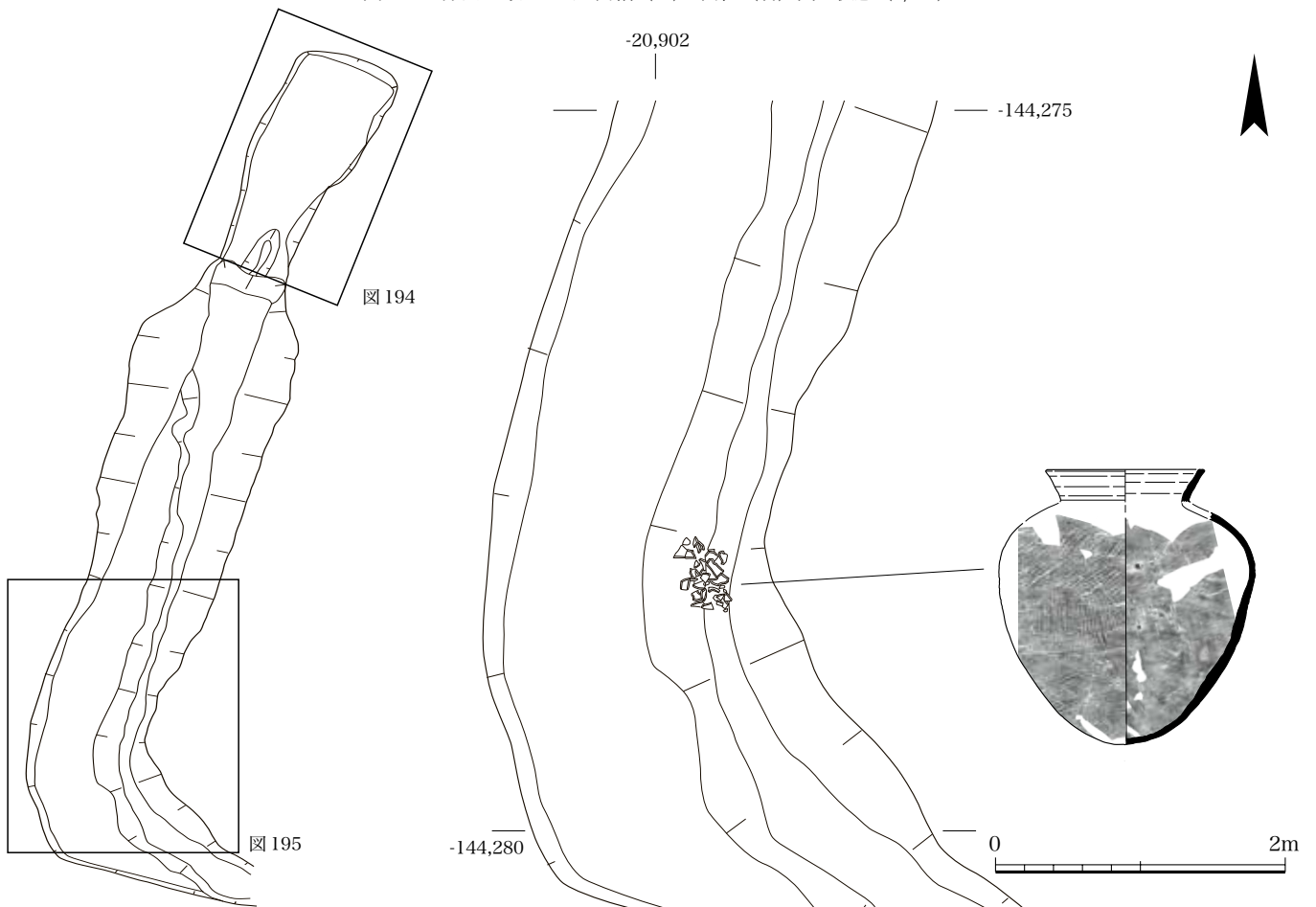


图195 赤田8号墓 墓道土器出土状态(1/50)

III. 出土遺物

1. 陶棺 (図 196 ~ 207)

土師質亀甲形陶棺で、棺蓋と棺身ともにほぼ二等分に切断して焼成し、再度組み合わせて使用する。盗掘時に壊され、小片化して出土した。欠損部分も多いが、全体の形状は概ね推定復原できる。

棺蓋 中央部分が著しく欠損するため、正確な全長は不明である。しかし、復原できる身の長さから考えて、おおよそ 180cm 前後となろう。残存部分で幅 62cm・高さ 38cm である。したがって、内法寸法は全長 178cm 前後・幅 59cm・高さ 35.5cm となる。

外面の一部に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。口縁部と天井部の一部に黒斑がみられる。

稜線突帯と口縁部突帯を貼り付け、両突帯の中間に横位突帯を 1 条巡らせて外面全体を上下 2 段に区画する。

そして 6 条の長側面縦位突帯を貼り付け、長側面に左右 5 つの区画を上下につくる。一方、短側面には縦位突帯を貼り付けず、上下左右 2 区画ずつである。突帯の貼り付けは縦先横後で、形状は幅 1cm 前後である。稜線突帯が他の突帯よりも若干太くて高く突出する。

断面形状はやや丸みのない半円である。左右の長側面に 4 つずつ合計 8 つの円形透孔を下段上寄りにあけると

推定できる。透孔は中央 1 区画を除く左右 2 区画に穿孔する。陶棺周囲から出土した陶栓は、この透孔を塞ぐために差し込まれていたと考えられる。

調整は内外面ともに指ナデを基調とする。外面全体に板の押圧痕が残るため、成形時に板押さえが多用されたことがうかがえる。

切断面が残る破片には糸切り痕跡がられる。その観察から、まず天井部の稜線突帯横に糸を通すための小孔をあけ、それを境にして左右を切り分けたことがわかる。

口縁部端面には広葉樹の葉脈が重なる圧痕が一面に残り、木葉を敷いた作業台上で蓋をつくったことがわかる。高さ 4cm の粘土帯を 3 枚以上接いで口縁部をつくり、その上に幅 5cm 前後の粘土帯を積み上げて成形する。最終の閉塞箇所的位置を想定できるような痕跡が現存部分に認められず、その位置は不明である。

内面には、長軸方向と直交する藁縄状圧痕が 7~8cm 間隔で明瞭に残っている。藁縄状圧痕は、束ねた藁が平行する痕跡とそれを概ね 3~4cm 間隔で結束した直交する 3~4 条ほどの藁痕跡から成る (図 196・197)。これらの痕跡から、棺蓋の形状を乾燥時に内面から支持し維持するための形持たせの存在を推定できる。

棺身 片側の棺身が概ね復原でき、その全長は約 95

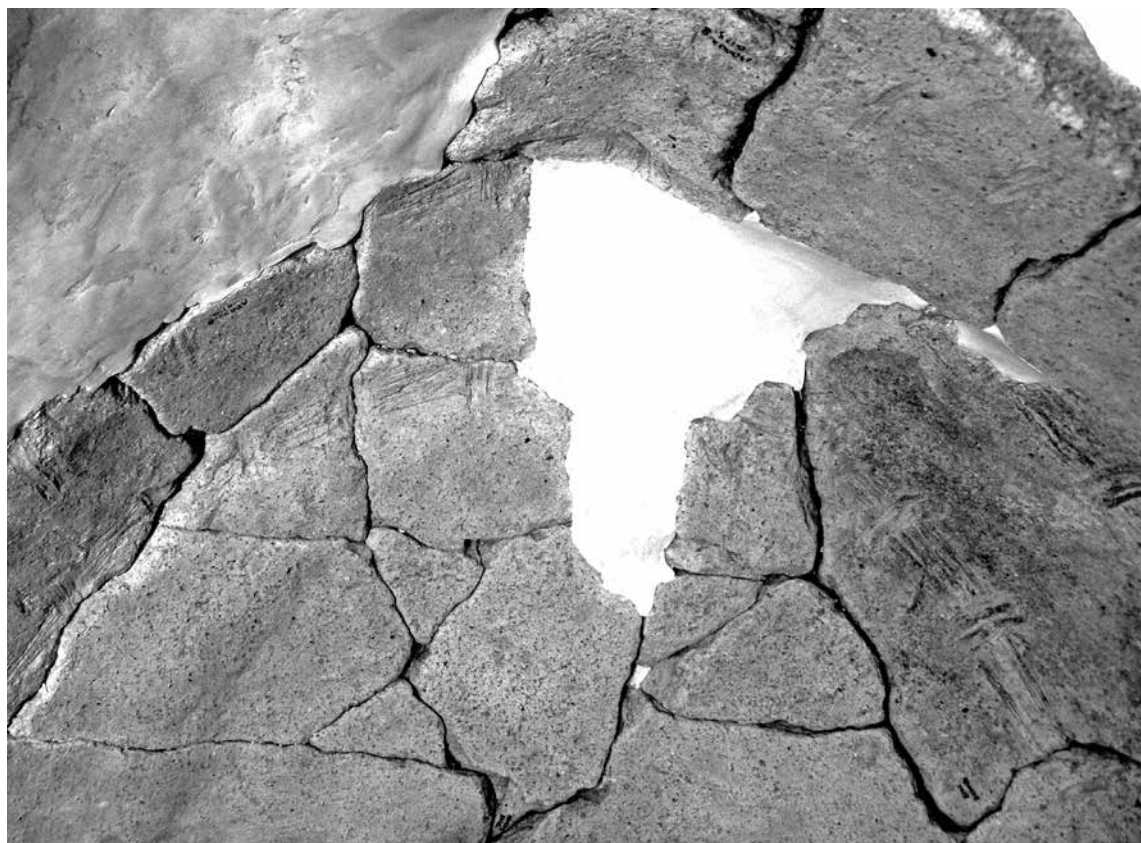


図 196 赤田 8 号墓 陶棺蓋内面の藁縄状圧痕



図 197 同圧痕

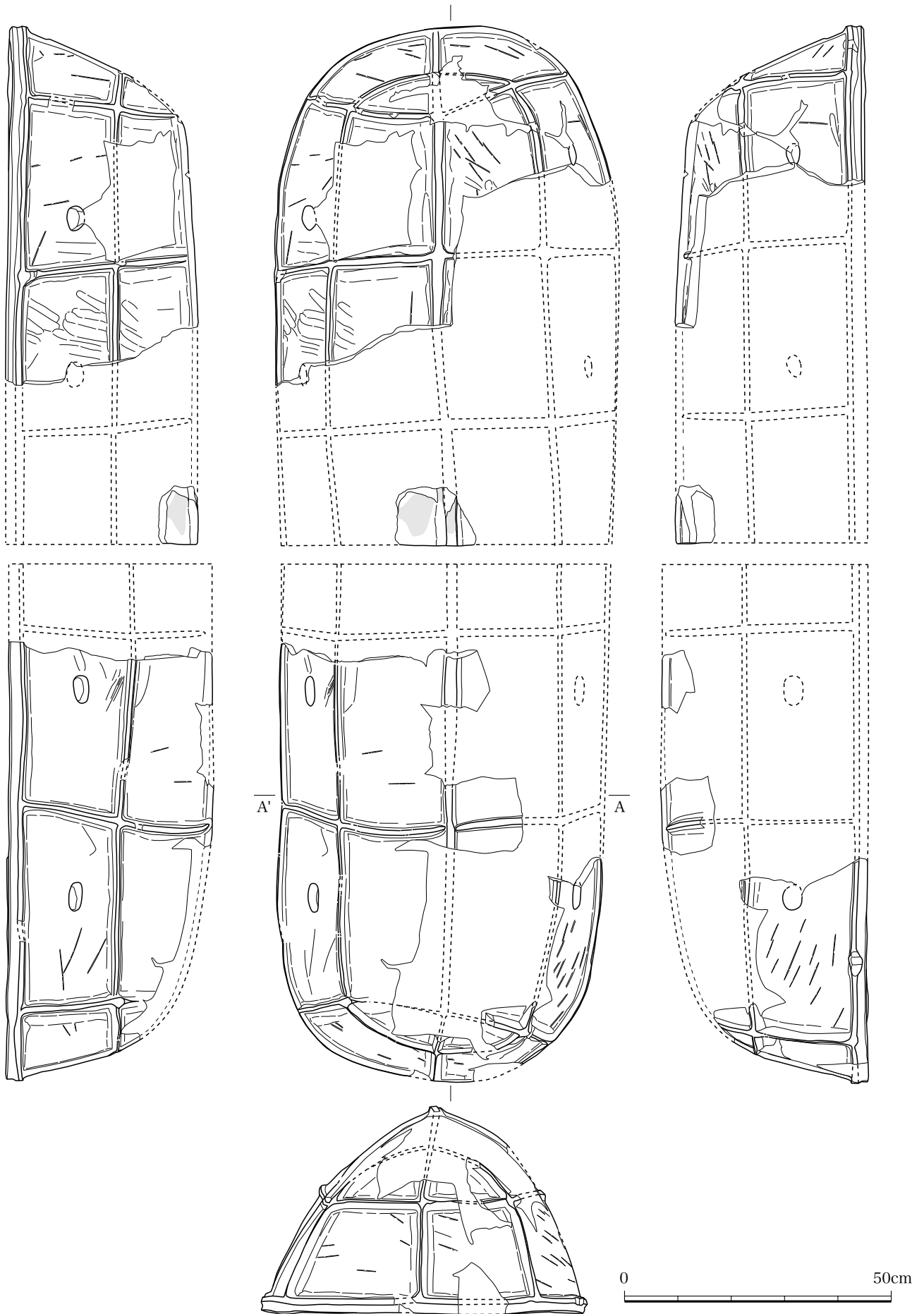


图 198 赤田 8 号墓 陶棺盖外面平面・立面图 (1/10)

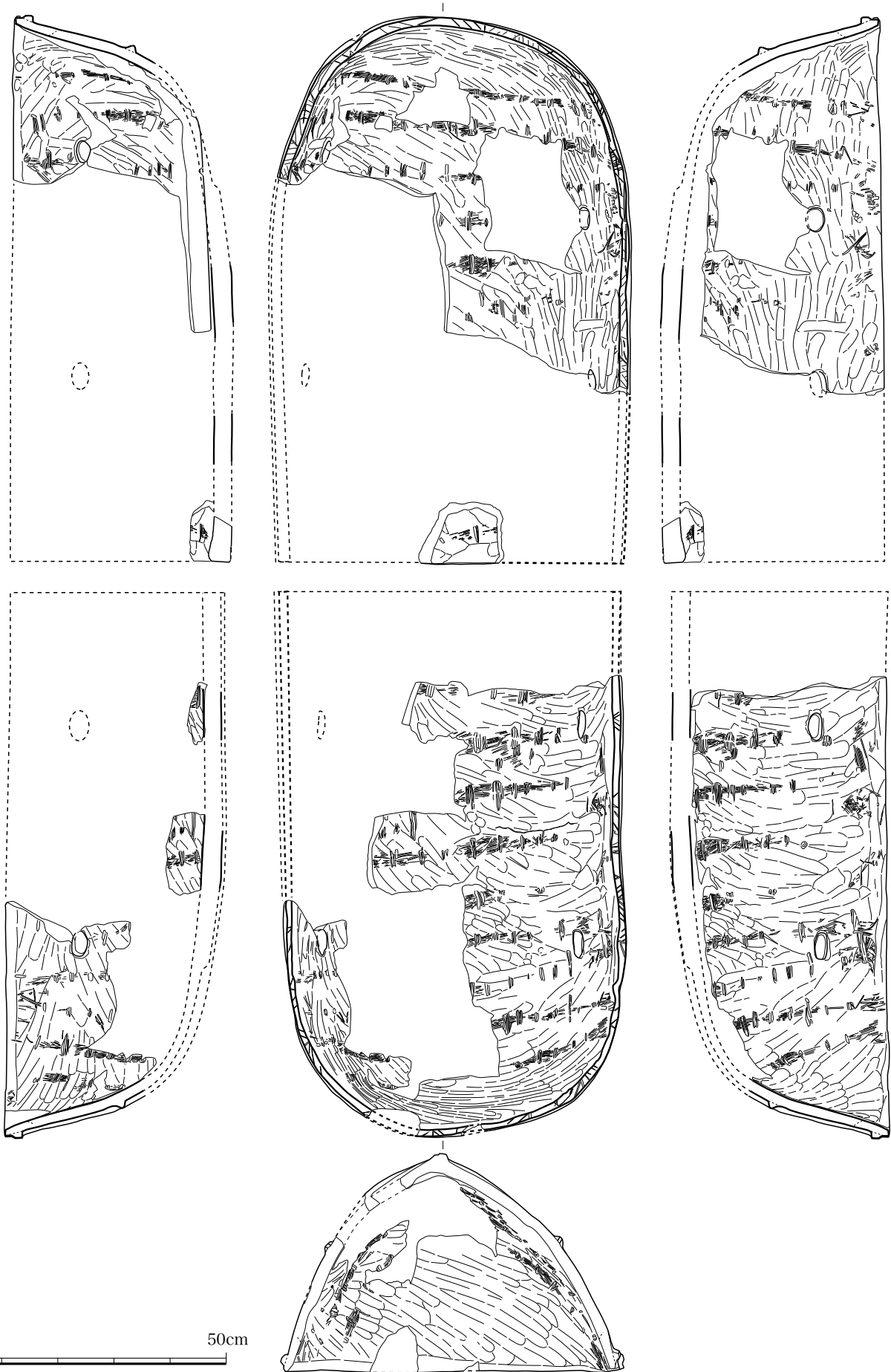


图 199 赤田8号墓 陶棺蓋内面平面・立面图 (1/10)

cmである。等分されたと推測できるので、全長は190cm前後と推定される。幅は62cm、高さは46cmである。したがって、内法寸法は全長170cm前後で、幅46cm・高さ27cmとなる。以下の内容は、切断された両側の特

徴が概ね同じであったという前提で記述を進める。

片側の長側面に6条、短側面に1条の縦位突帯を貼り付け、長側面に左右5区画、短側面に左右2区画をつくる。周底突帯は認められない。突帯形状は幅1.5cm前後

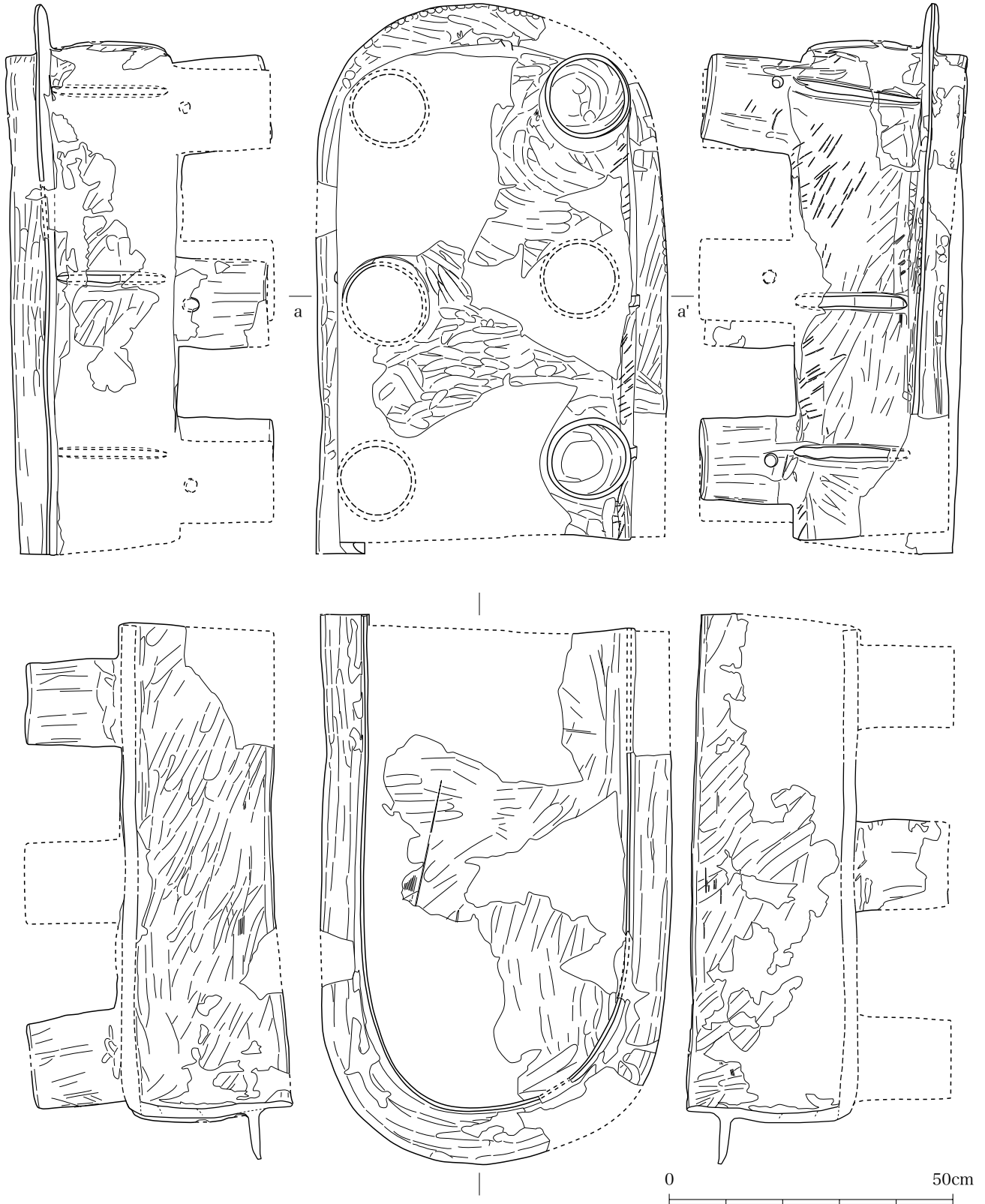


図200 赤田8号墓 陶棺身内外面平面・立面図 (1/10)

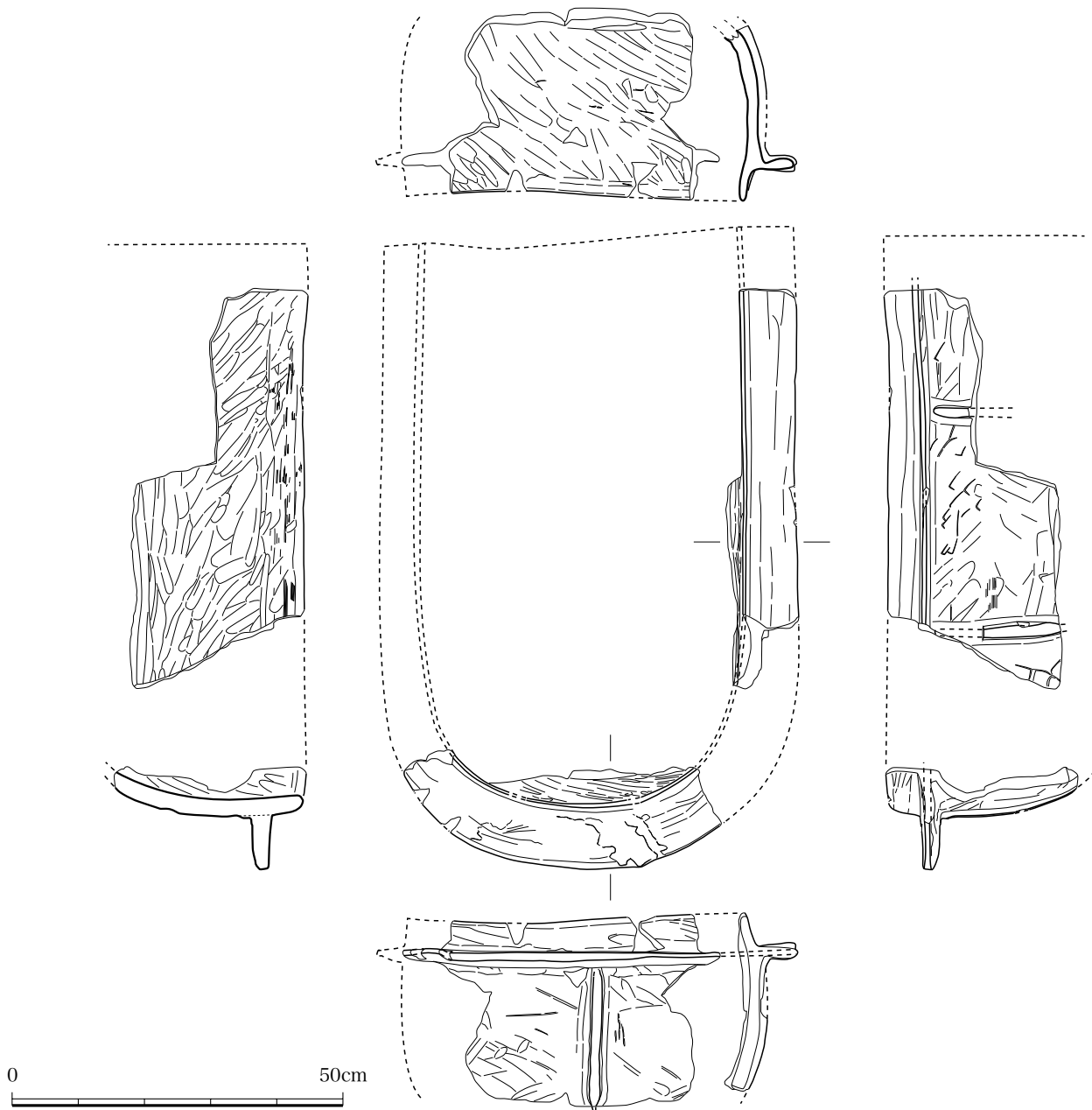


図 201 赤田 8 号墓 陶棺身内外面平面・立面図 (1/10)



図 202 赤田 8 号墓 脚と底部の接合状態

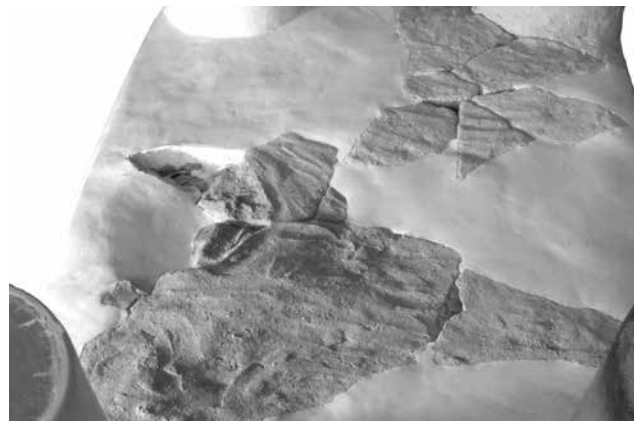


図 203 赤田 8 号墓 底部外面の調整

で、上面を板で押圧するためやや扁平となる。

体部は隅丸方形の箱形で、器壁はやや内傾している。粘土帯を口縁端部から下7～8cmの位置に貼り付け、補充粘土を加えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。口縁部

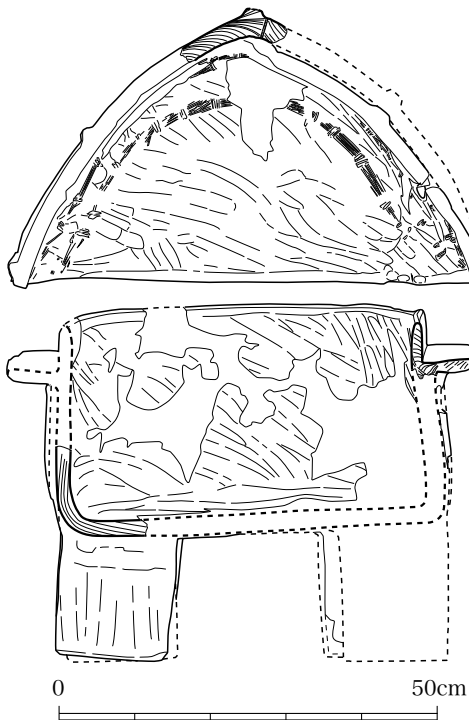
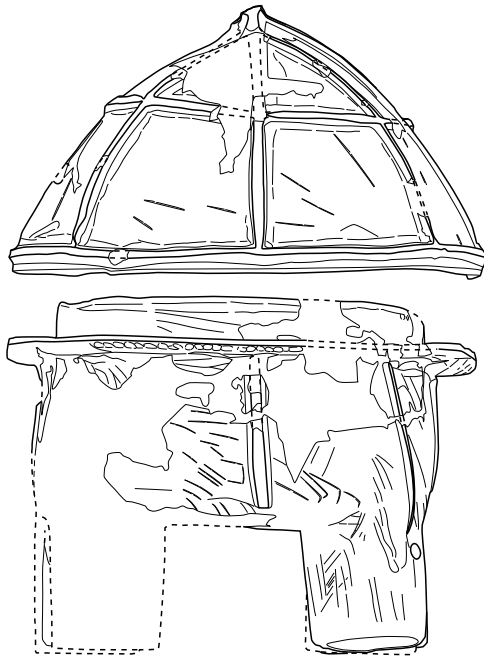


図204 赤田8号墓 陶棺身短側面立面図 (1/10)

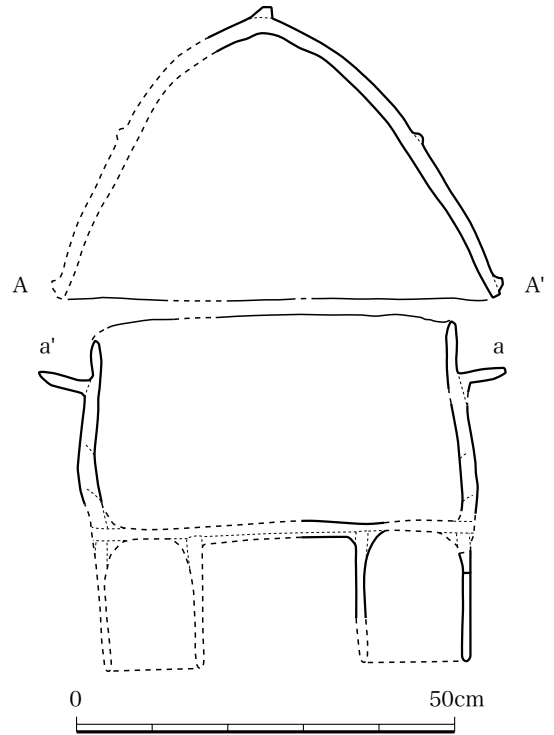


図205 赤田8号墓 陶棺身短側面断面図 (1/10)

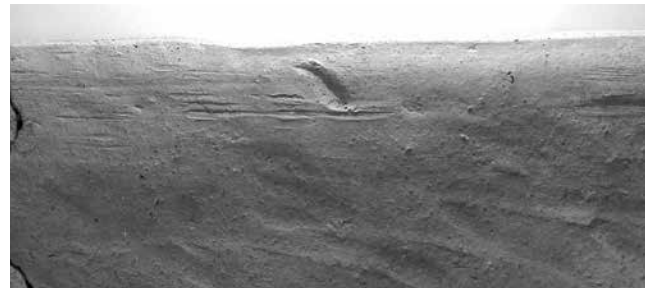


図206 赤田8号墓 陶棺身口縁部内面の木目圧痕



図207 赤田8号墳 陶棺身脚と底部の接合箇所の板押え痕跡

の高さは6～7cmで直立する。蓋受け上面の幅は6～8cmで広く、端面に指頭圧痕が残る。底部から口縁部の調整は内外面ともに指ナデを基調とする。外面全体に板の押圧痕が残るため、成形時に板押さえが多用されたことがうかがえる。特に底部外面で板押さえが顕著にみられ、横に張り出し気味の底部形状を懸命に整形したことがうかがえる。切断面には糸切り痕跡が認められる。赤色顔料を塗布した痕跡は内外面ともにみられない。

脚部には6行2列、合計12本の脚が取り付けると推定できる。脚の透孔は円形で、すべて長側外面方向に1孔ずつ穿孔されたと推測できる。調整は、内外面ともにタテ方向の指ナデである。脚端部はヨコナデ調整されており、脚は成形後に倒立されていることがわかる。

2脚1行の短軸方向に沿って底部の粘土接合痕跡を確認できる箇所がある。そして、底部を形成する粘土板に脚を接合していることも観察できる。ただし、その粘土板は、脚接合箇所以外の底部の厚さ(2cm前後)よりも薄い。これらの点から、棺底幅である長さ50cm前後・幅30cm前後・厚さ1cm前後の粘土板の両端に脚2本を並べ、その外側に厚さ1cm前後の粘土を足して接合固定したと考えられる。これをひっくり返して底部製作の接合単位(2脚1行)としたことが推察できる。この接合単位を長軸方向に6行分接合し、上面を平滑に仕上げた棺身底部を製作した可能性がある。この際、外周の端部を上になじり上げて粘土帯積上げの土台をつくっている。

次にこの外周に沿って高さ7cmほどの粘土帯を積み上げて体部を成形し、蓋受けを接合した後に縦位突帯を貼り付けて完成する。底部から口縁部までの高さは33cmである。

また、長側面の口縁部内面に幅5cm以上の横方向の木目圧痕が局所的に残っている。同じような痕跡が体部内面下端にも少し認められる。これらは、内側に板を当てて乾燥時の形持たせを組んでいた痕跡ではないかと思われる。

陶栓(図208・209) 陶棺の長側面に沿った位置から陶栓が7点出土した。棺蓋の透孔に装着されていたと考えられ、早くに落下し埋没したものだけが盗掘時の攪乱を免れたと思われる。本来は8点あったのだろう。

陶栓はすべてキノコ形で、外面に露出する笠部と透孔内に挿入する軸部を接合して製作する。大きさに大中小がみられ、全長3.1～3.3cm(2・7)が2点、3.95～4.4cmが3点(2・3・4)、5.1～5.4cmが2点(1・6)ある。笠部は不整な円形あるいは楕円形を呈し、大きさは概ね5～6.5cm前後である。表面を丸く曲面につくり、周縁に向かって薄くなる。笠部表面に藁圧痕を残す淡黄色粘土が付着するものが4点(1・3・4・6)あり、陶栓装着後に表面を粘土で塗り込めていた可能性を想定させる(図206)。軸部は方柱形である。基本的に手づくね成形であるが、1点(7)のみ側面をケズリで成形している。黒斑は、笠部にあるもの3点(2・3・7)、軸部にあるもの2点(1・5)である。

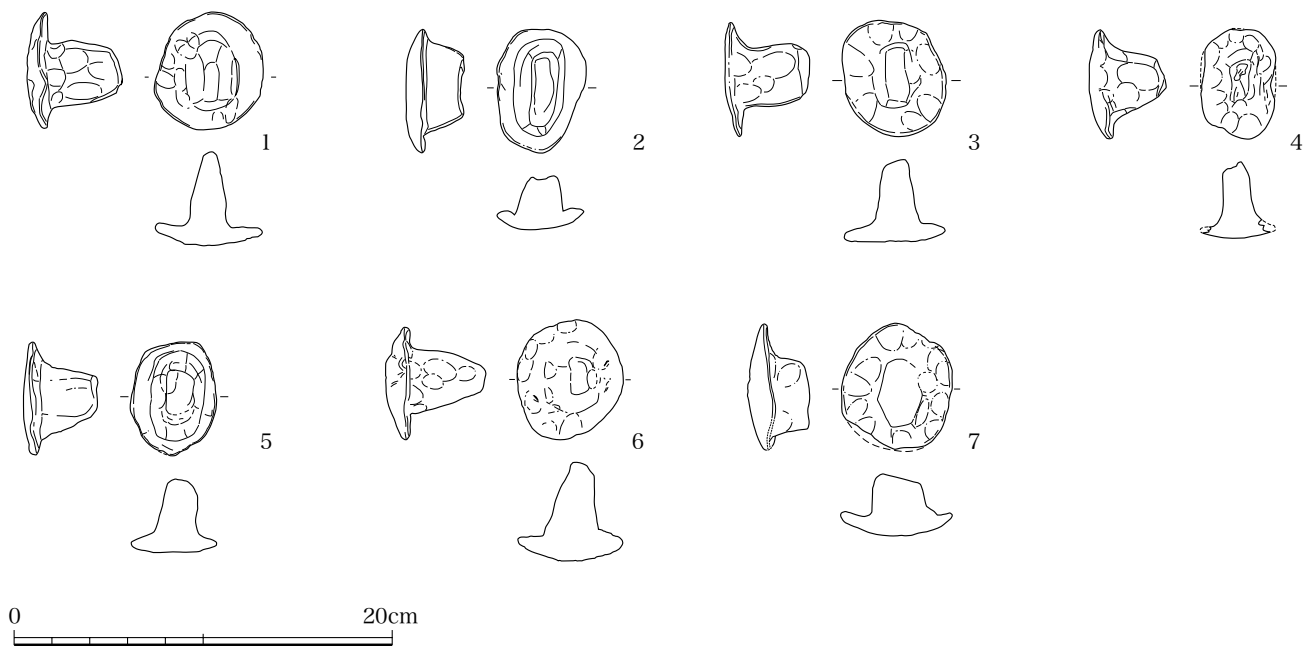


図208 赤田8号墓 玄室出土陶栓(1/4)

2. 鉄器 (図 210)

鉄刀子 (1) 1 は残存長 6.3cm の鉄刀子で、刃先と茎尻を欠失する。刃部は最大幅 1.5cm・厚さ 0.35cm、茎部は最大幅 0.9cm・厚さ 0.2cm である。茎部に木質が付着している。

鉄鏃 (2) 2 は残存長 5.3cm の長頸鏃で、頸部から鏃身部にかけての一部だけが残る。頸部は最大幅 0.45cm・厚さ 0.3cm である。

不明鉄器 (3) 残存長 2.35cm・残存幅 0.95cm・厚さ 0.2cm の鉄板で、器種は不明である。(鐘方正樹)

3. 埴輪 (図 211)

円筒埴輪と形象埴輪とがある。8 のみ墓道の 21 層からの出土で、他は羨門閉塞後の堆積土や盗掘坑からの出土である。

円筒埴輪 (1~7) 調整の確認できるものはすべて外面 1 次調整タテハケ (8~10 条/cm)、内面ナデおよび部分的にハケを基調とするもので、埴輪編年 V 期に位置づけられる。1 は口縁部片で、外反し端部に面をもつ。内面は端部のみヨコナデを施し、以下はヨコハケ (8 条/cm) である。2~5 は突帯が残存する胴部片である。2 は、突帯上端の幅が狭く、断面三角形に近い台形状を呈する。円形透孔が確認できる。透孔は突帯の下端にかかることから、突帯貼りつけ後に穿孔したと考えられる。3・4 は、断続ナデ技法 A による突帯貼りつけである。6 は、底部片である。内外面ともに風化して不明瞭である。



図 209 赤田 8 号墓 粘土が付着する陶栓 (右: 1・左: 6)

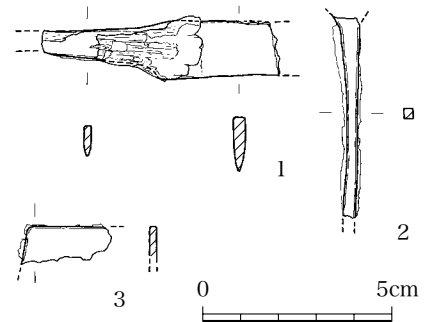


図 210 赤田 8 号墓 玄室出土鉄器 (1/2)

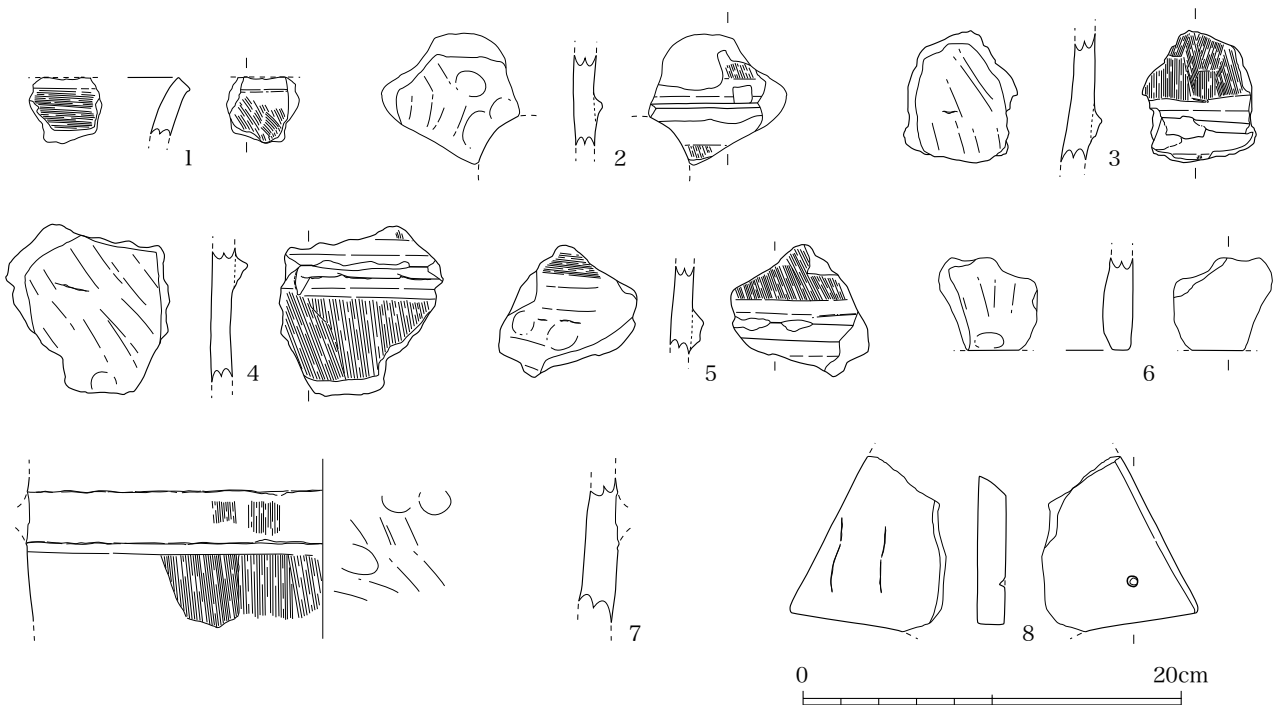


図 211 赤田 8 号墓 玄室出土埴輪 (1/4)

るが、端部のオサエが確認できる。

形象埴輪 (8) 石見型埴輪の鱗部で、最も下部に位置する部分と推測できる。色調は灰白色で、内外面ともにナデ調整である。裏面には上下方向に接合痕が確認でき、内側から外側に向かって粘土を接合したことがわかる。外面には、貫通しない穿孔が1つある。線刻などはなく無文である。(村瀬 陸)

4. 土器・土製品 (図 212)

(1) 玄室出土土器・土製品 (1~4)

玄室から出土した土器・土製品には土師器甕 (1)、須恵器杯 B (2)、長頸壺 (3)、土馬 (4) がある。いずれも小破片である。土師器甕は直線的な口縁部と体部で、長胴甕と思われる。外面の口縁から体部を縦方向の、口縁部内面を横方向のハケメで調整する。2~4は羨門閉塞後の流入土層から出土したものである。須恵器杯 B は底部外面がロクロケズリ、口縁部内外面がロクロナデである。長頸壺は頸部外面に明灰緑色の自然釉がかかる。頸部の接合方法は2段接合である。土馬は頸部から胴部にかけての小片である。

これらの土器は時期を決めがたいが、土師器甕が横穴墓に伴う時期のもの、須恵器杯 B・長頸壺、土馬は8世紀のものであろう。

(2) 墓道出土土器 (5~8)

墓道から出土した土器には土師器甕 (8)、須恵器甕 (5・6)、須恵器杯もしくは碗 (7) がある。土師器甕は口縁部を受け口状につくっている。外面の口縁部下半から肩部にかけての部分と内面の胴部上半をハケメ調整しているが、風化が激しい。5の須恵器甕は口縁端部を平坦につくり、内側に少し肥厚させる。口縁部から肩部にかけて暗灰緑色の自然釉がかかる。体部外面は平行タタキで、内面には同心円の当て具痕がみられる。口縁部と体部は接合しないが、釉調や焼き上がりの色調などが類似し、同一個体と考えられる。7は口縁部の1/12程度しか残存しない。杯もしくは碗の口縁部と思われる。調整は内外面ともロクロナデである。

これらの土器は玄室から出土した土器と同様に時期を決め難い。形態等からみて、5・6・8が横穴墓に伴うもの、7は8世紀頃のものと考えられる。

(3) 盗掘坑出土土器 (9・10)

土師器皿 (9) と羽釜 (10) は盗掘坑から出土した小片である。土師器皿の調整は内外面ともヨコナデである。羽釜は口縁部を内側に折り曲げる H 型。内外面ともヨコナデである。4号墓などと同じく14~15世紀のものであろう。(池田裕英)

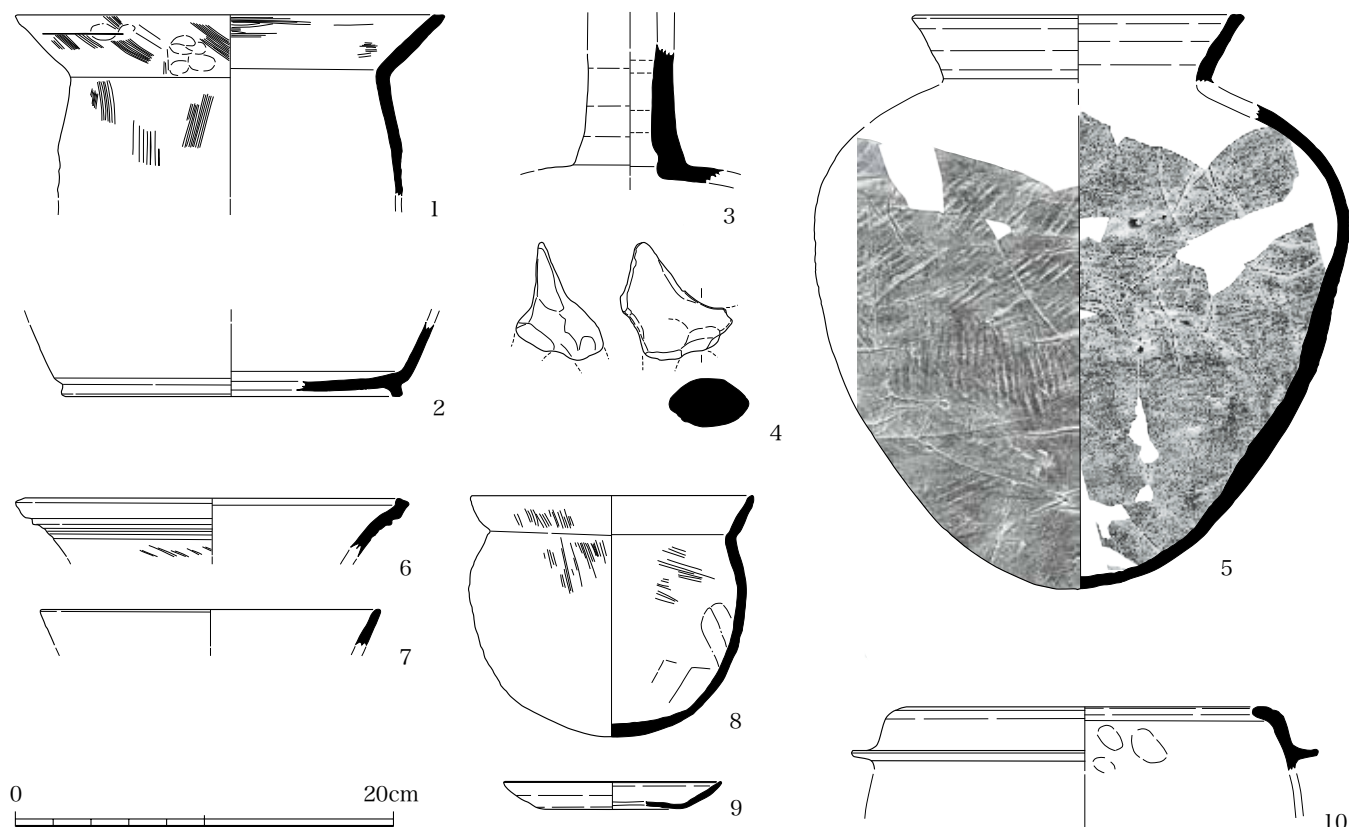


図 212 赤田 8 号墓 出土土器・土製品 (1/4)

第13節 赤田9号墓

全長は24.7 m以上で、玄室の主軸はN-32°-Eである。墓道南端は調査地南側を流れる河川の氾濫で後世に削平をうけている。玄室床面の標高は1～8号墓が概ね86～87 mであるのに比して、9号墓は88.1 mと約1 m程度高い。墓道と玄室の調査の時期が異なったこともあり、玄門部の土層観察に不明な点はあるが、玄室内の陶棺数からみても玄室の閉塞は2回以上度行われたようである。玄室には小型の亀甲形陶棺1基、円筒形陶棺2基があった。円筒形陶棺は平底で口縁部に羽釜の鏝のような形態の蓋受けが付く。このような土師質陶棺は全国的にみても珍しい。

1. 埋葬施設

1. 埋土の様相 (図213)

玄室は灰白色の砂礫層の地山（基本層序：Ⅶ-4層）、墓道は黄色の粘土層の地山（同：Ⅶ-1層）を掘削して造られ、その埋土は、下記の2層に大別できる。

(1) 埋葬に関連する土層

層序と層の様相から、A・Cの2層が識別できる。

A層（1・2層）玄室の玄門寄りに形成された床面の整地土層。厚さ0.1～0.2 m。黄色のシルトを含む砂礫層や砂層からなり、硬くしまる。

C層（3・4層）最終埋葬時の玄門の閉塞土層で、上部は盗掘坑の掘削で破壊される。黄色や灰白色の砂質シルト・粘土ブロックを多く含む層からなる。

(2) その他の土層

層序と層の様相から、墓道でD～F層、玄室でH層が識別できる。概要は以下の通り。

D層（5～8層）墓道の両側面に沿って形成された埋土層。黄色のシルト・粘土を含む砂層からなる。

E層（9・10層）墓道中央部のD層間の窪みにおいて、玄門の閉塞後から盗掘までの間に形成された埋土層。厚さは0.2～0.5 m。10層は基本層序のV層に対応する埋没土壌である。9層から8世紀以降の須恵器短頸壺、10層の最下位から8世紀以降の土馬片が出土。

F層（11層）盗掘後に形成された埋土層で、黄色の砂質シルト・粘土層。

H層（12～16層）玄門付近の盗掘坑内及び玄室内で盗掘後に形成された埋土層。主に黄色の砂やシルトの層からなる。16層上面で陶棺の棺身が出土。

層の成因 黄色や黄褐色のシルト・砂を主とする層は、基本層序のⅣ層と様相が似ることから、斜面崩落土及び玄門付近からの流入土と考える。（安井宣也）

2. 横穴墓の規模と形態 (図213)

玄室 長さ5.7 m、奥壁幅2.0 mである。玄室の平面形は奥壁から玄室中央付近までは長方形で、そこから玄門に向かって狭まっていく。玄室床面はほぼ平坦で、玄門から墓道南端に向かって緩やかに下っていく。床面の標高は奥壁で88.1 m、玄門で88.0 mである。検出時の断面観察から天井の高さは2 m以上あったことがわかる。玄室では床面整地土2層上面で陶棺を3基検出した。

玄門 9号墓には羨道がない。玄門は幅1.3 mで、上部は盗掘坑により壊されているが、側壁の残存状況から高さは1.4 m程度に復原できる。

墓道 長さ19.0 m以上で、底部幅は0.6 m、上面幅が2.2～2.5 m、深さは最も深い部分で0.6 mである。断面形はU字形に近く、底部がやや丸味をおび、側壁は斜め上方へ開く形態である。床面は南に向かって緩やかに下る。検出部分での墓道南端の標高は87.6 mで、奥壁から墓道までの比高差は0.5 mである。中央部に流水で抉られたような幅0.3 m、深さ0.05 mの溝状遺構がある。墓道の南端は東南に向かって曲がる。また、3～8号墓は玄室から玄門に至るところで狭まり、墓道になると再び広がるが、9号墓は玄門と墓道の境の幅に違いはない。

II. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置 (図214)

玄室中央やや東寄りの位置で亀甲形陶棺1基、西側壁沿いと奥壁沿いで円筒形陶棺それぞれ1基を整地土（2層）上面で検出した。

亀甲形陶棺は棺身・棺蓋とも2分割でつくられている。棺身南側は盗掘の際に動かされ、玄門付近で出土した。しかし、棺身北側は出土状態からみて埋葬時の位置を保っていると思われる。この陶棺の下からは土師器椀が3点出土し、うち2点は上下に重ねられた状態で出土した（PL.348）。棺蓋は玄門付近や玄室埋土13層から出土したものが多く、亀甲形陶棺が玄室東寄りに位置するのは、西側に円筒形陶棺が置かれていることと関係するであろう。

円筒形陶棺B1基は、西側壁に沿うように、斜めに倒れた状態で出土した（PL.32）。出土状態や棺底の形態が平底であることからみて、埋葬された当初は蓋をして立てて置かれていたと考えられる。棺蓋はやや離れた玄室東半の堆積土中から出土した。

もう1基の円筒形陶棺Aは奥壁に沿った位置で検出した。この陶棺も平底で、ほぼ奥壁に平行した向きで東

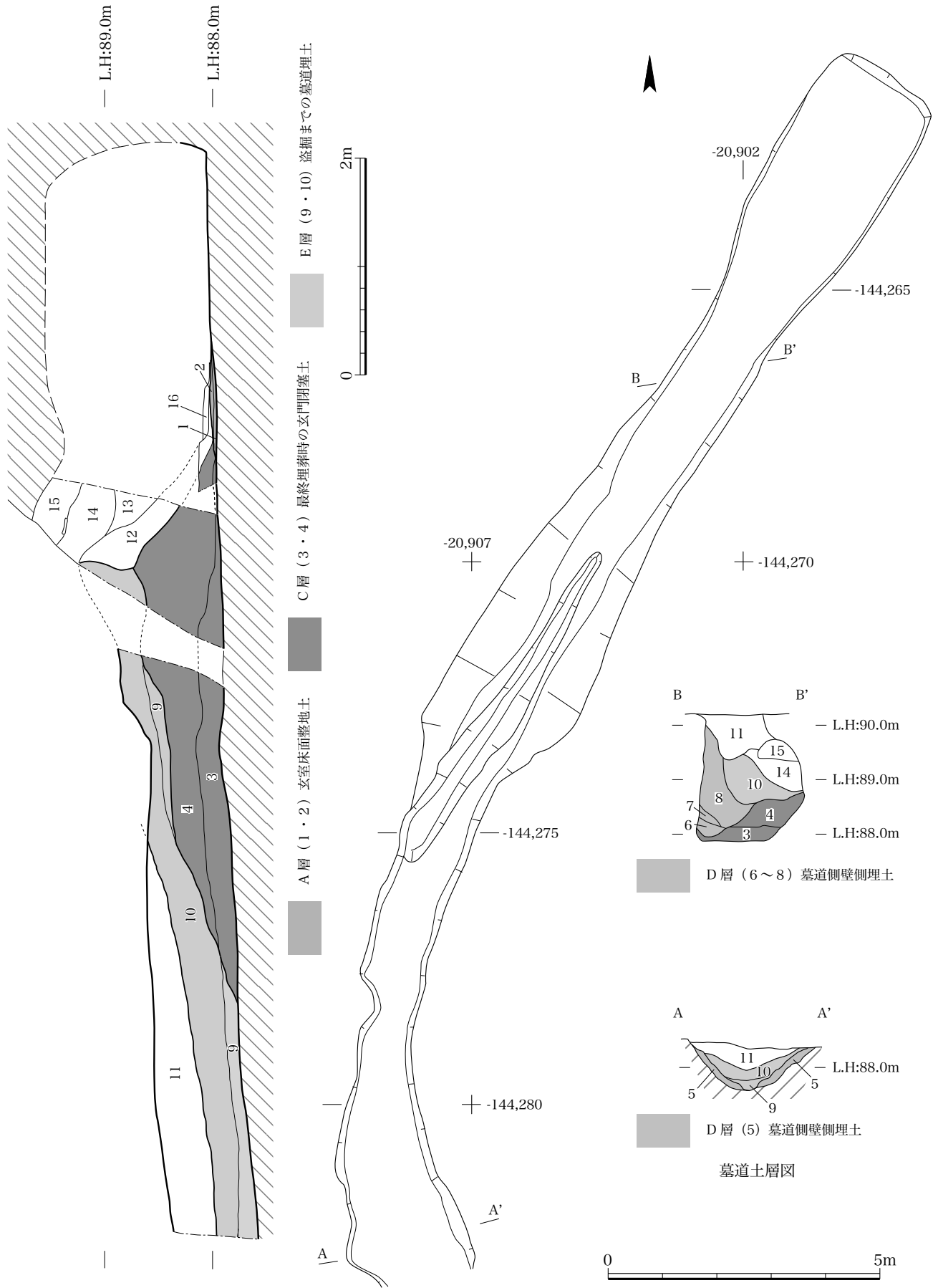


図213 赤田9号墓 土層横断面図 (1/50)・遺構平面図・土層縦断面図 (1/100)

A層	6 地山礫層物に2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂か混合	H層
1 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土混じり砂礫	7 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂	12 2.5Y5/3 (黄褐) シルト・粘土質砂薄層と2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土薄層の互層
2 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂	8 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土質砂	13 地山礫層物と2.5Y5/3 (黄褐) シルト・粘土質薄層の互層
C層	E層	14 2.5Y5/4 (黄褐) 砂質シルト・粘土
3 2.5Y8/2 (灰白) 砂質シルト・粘土ブロックと2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト混じり砂か混合	9 2.5Y6/2 (にぶい黄) シルト混じり砂礫	15 2.5Y6/4 (にぶい黄) シルト・粘土質砂
4 2.5Y7/3 (灰黄) 砂質シルト・粘土ブロックと2.5Y6/4 (にぶい黄) 砂質シルトか混合	10 2.5Y3/3 (暗オリブ褐) 砂質シルト・粘土	16 2.5Y6/3 (にぶい黄) シルト混じり砂
D層	F層	
5 2.5Y7/4 (浅黄) シルト・粘土混じり砂	11 2.5Y6/2 (にぶい黄) 砂質シルト・粘土	

赤田9号墓 堆積土層名

に倒れて出土している。蓋は口縁部付近とやや離れた位置とから三箇所に分かれて出土している。埋葬時に立てて置かれたのか、寝かせて置かれたのかの判断は難しいが、平底であることを考えると、本来は立てて置かれていたのではなかろうか。

東に倒れた口縁部の傍から亀甲形陶棺の蓋片と土師器甕が逆位で置かれた状態で出土している (PL.34-4~6)。この位置に亀甲形陶棺の蓋があること、土師器甕が逆位で置かれていること理由はいくつかの可能性が考えられるが、この円筒形陶棺には蓋が付くことや8世紀に玄室に入った痕跡があることを考慮すれば、8世紀に玄室に入った際、亀甲形陶棺蓋や土師器甕を2次的に動かして、この位置に置いた可能性が高いと思われる。後世に玄室に入った際、玄室内で行われた行為の一端をうかがうことができる事例である。

2. 副葬品の配置 (図 215)

(1) 玄室遺物出土状態

玄室から出土した遺物には耳環1点、土器10点、土馬2点がある。

耳環 (図 235-1) は亀甲形陶棺北側棺身の棺床直上から出土した (PL.34-7)。出土した位置からみると棺のほぼ中央にあったことになるが、盗掘の際に動いているかもしれない。

土器には土師器杯C (図 236-5)、碗 (1~4)、甕 (7・8)、甗 (6)、須恵器無蓋高杯がある (9)。土師器碗、杯Cは亀甲形陶棺周辺から出土している。特に、1・2の土師器碗は北側棺身の下に1を上、2を下に正位で重ねて置かれていた (PL.34-8)。4の碗も同じ棺身の下に正位で置かれた状態であった (PL.34-7)。3の碗、5の杯Cは亀甲形陶棺北東の位置で出土した。3は正位で、5は逆位の状態であった。甗 (6) は北側棺身の南側の破片群の中から出土したもので、大半が破片の状態である。出土状態からみると南側棺身の傍に置かれていたよ

うである。長胴甕 (8) は奥壁沿いに置かれた円筒形陶棺Aの口縁部側 (玄室北東隅) に逆位で置かれていた (PL.35-4~6)。土師器甕 (7) と須恵器無蓋高杯 (9) は奥壁に近い位置で出土した。

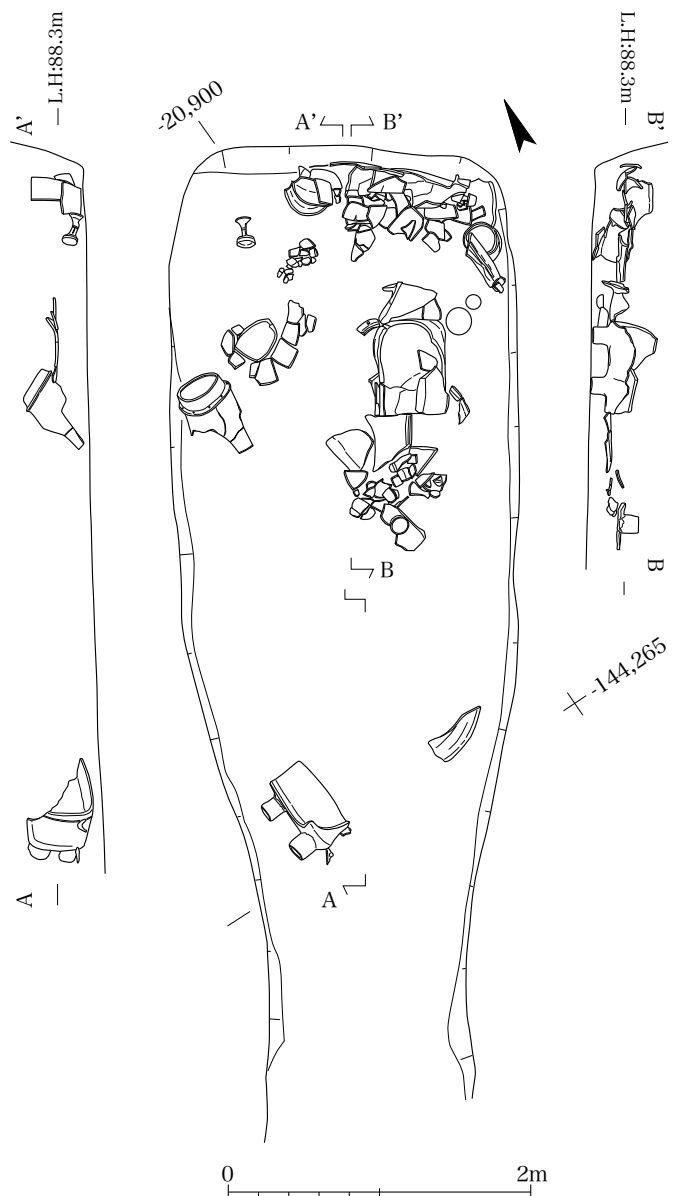


図 214 赤田9号墓 陶棺・土器出土状態 (1/50)

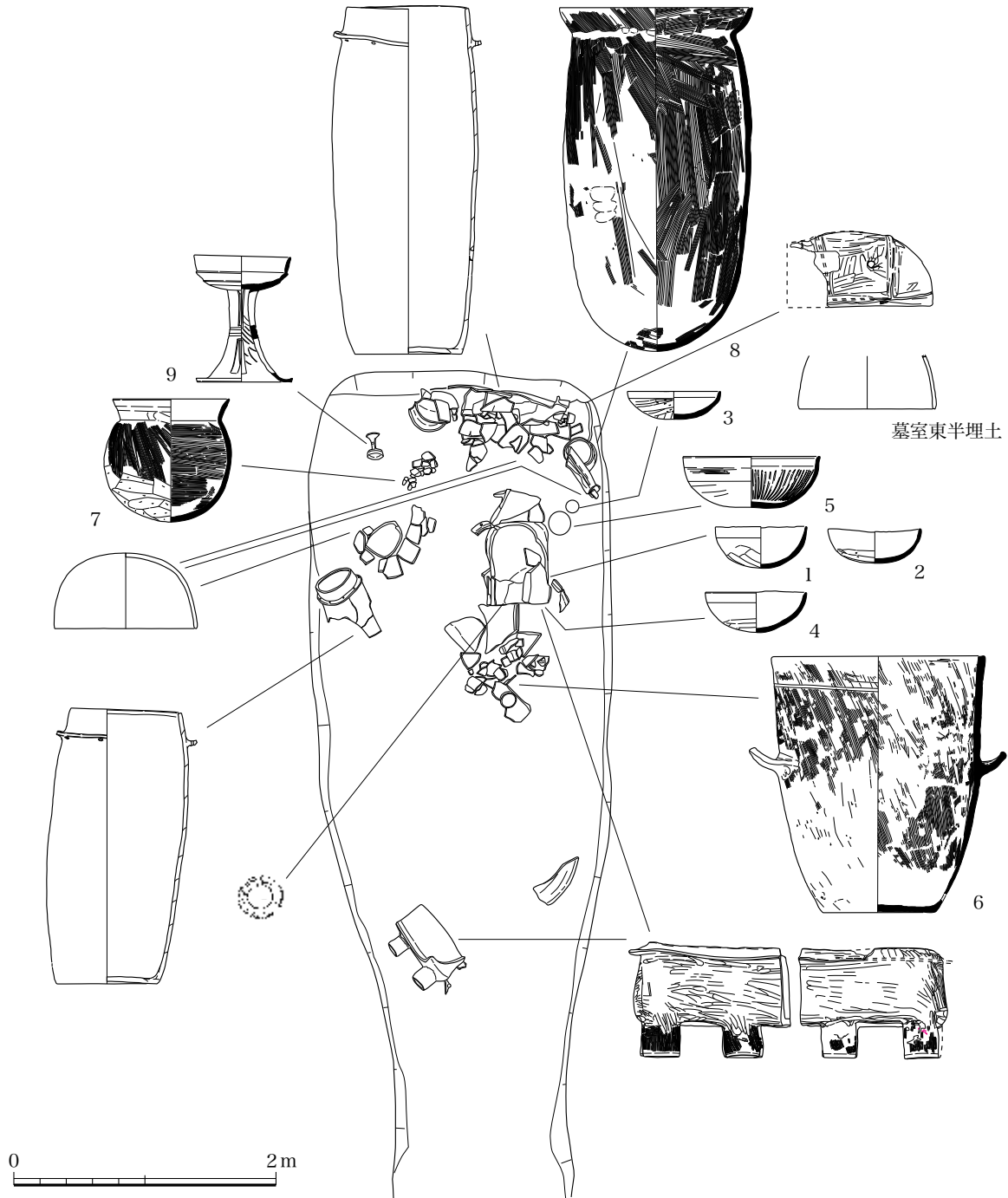


図215 赤田9号墓 陶棺・土器の平面分布 (1/50)

この他、玄室東半の天井崩落土中からは8世紀の須恵器壺H (10)、土馬 (11) が出土した。土馬は玄室前方に動かされた亀甲形陶棺の傍から出土しており (PL.32-4)、奈良時代の土器、土馬も盗掘の際に動かされているようである。

土師器杯Cは径高指数が37.1で、調整・器形からみて7世紀前半～中頃のものと思われ、須恵器壺H・土馬を除くその他の土器も土師器杯Cと同時期としてよいと考える。

(2) 墓道土器出土状態

墓道埋土6層から須恵器杯H身 (図237-12～14)、土師器鉢 (16)、甕 (17) が出土している。

9層から出土した須恵器短頸壺 (15)、10層から出土した土馬は8世紀のものであろう。短頸壺 (15) は完形である。土馬は玄門付近からも出土している (PL.30-3・4)。玄室からも8世紀の須恵器壺Hや土馬が出土しており、それらと同時期のものと考えられる。

(池田裕英)

III. 出土遺物

1. 陶棺

(1) 亀甲形陶棺 (図216～図227)

土師質亀甲形陶棺で、棺身はほぼ二等分に切断して焼成し、再度組み合わせて使用する。棺蓋も2分割して製作されているが、これまでにない特徴を有しており、つくり方も異なる可能性がある。

棺蓋 欠損部分が多く、片側(図219)だけを概ね復原できた。切断面が残っておらず、長さは55cm以上である。幅47cm・高さ29cm。内法寸法は幅42cm・高さ27cmとなる。

赤色顔料の塗布は認められない。天井部中央に小さな黒斑が1つみられる。

稜線突帯と口縁部突帯を1条貼り付けた後、残存部分に2条の長側面縦位突帯を貼り付けている。これによって、長側面と短側面に左右2区画ができる。突帯は上面幅1cm未満で細く、断面三角形を呈する部分も少ない。突帯の剥落が多くみられる。

全体的に丸く仕上がっており、横断面形状はややいびつな半円形である。両方の長側面に1つずつ円柱状突起があるだけで、透孔はない。突起は、器壁に孔をあけ円柱状の粘土を挿入してつくる(図216)。突起の出は最大5cm、端部は径2.5cm前後である。片方の突起の根元には、長さ1.5cm・幅0.5cmの切り込みを上から入れている。

調整は、外面をタテナデ後に長側面をヨコナデする。内面はナナメナデ・タテナデである。

切断面は残存しないが、棺身の片側の長さから考えてその近くまで残っていると推測できる。切断面近くの天井部が緩く段をつけて4cmほど下がる点は、これまでにない特徴である。そして、この部分の外面は表面剥離が著しく、稜線突帯がここまで延びていたのかどうかは不明である。短側面から2条目の縦位突帯で稜線突帯が途切れていた可能性も想定できる。

口縁部端面には葉脈圧痕が認められない。高さ7cm前後の粘土帯を楕円形に接合して口縁部をつくり(図218)、その上に幅4cm前後の粘土帯を積み上げて体部をつくる。その後、短側方向から徐々に粘土帯を重ねて天井部を成形し、天井部中央付近で閉塞する(図217)。

突起挿入箇所の内面をみると、ナデ調整後に穿孔し突起を付加した状態で放置されている(図217)。この点から、突起は蓋の形状ができあがった後につくられたことがわかる。突帯の貼り付けは、ナデ調整の重複関係から突起付加後である。

内面の一部に不明瞭ながら藁縄状圧痕がみとめられるので、棺蓋の形状を乾燥時に内面から支持し維持するための形持たせの存在を推定できる。

もう片側(図219-2)の棺蓋は破片しかなく、全体の形状を復原するのは難しい。ただし、口縁部と切断面の一部がわずかに残るため、長側面の一部であることが



図216 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋突起の接合状態



図217 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋内面の調整と閉塞箇所



図218 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋口縁部の粘土帯断面

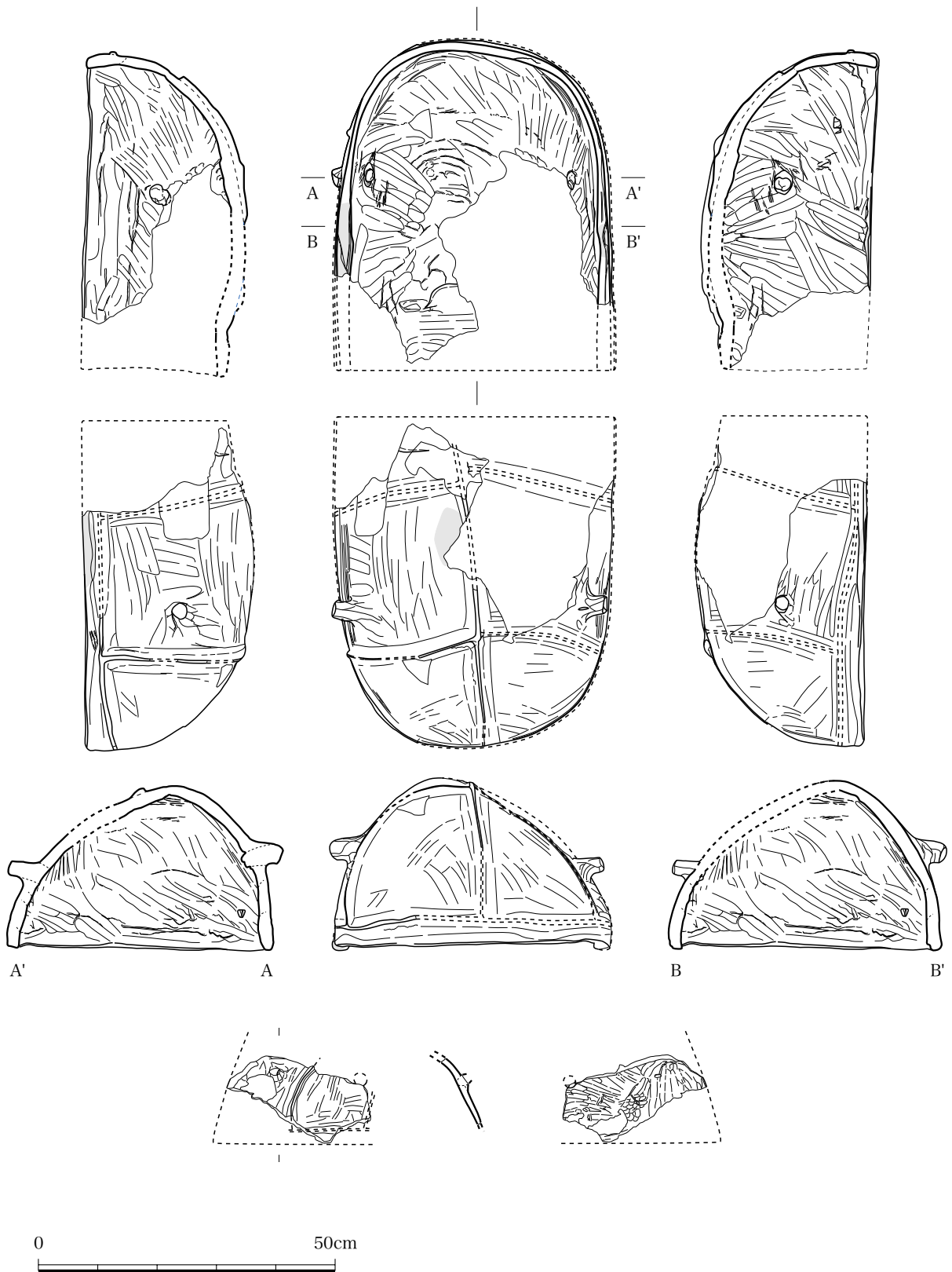


図219 赤田9号墓 亀甲形陶棺 蓋内外面平面・立面図 (1/10)

わかる。1条の口縁部突帯と2条の長側面縦位突帯を貼り付け、長側面の左区画上方に突起、右区画上方に円形透孔を1つずつ設けている。短側面側の縦位突帯は剥離して残らないが、もう1条の縦位突帯は断面三角形を呈する。突起は欠損して根元部分しか残っていないが、下から切り込みを入れているのを確認できる。この突起挿入箇所の内面をみると、体部のナデ調整が挿入後に行なわれているので、突起の製作は天井部閉塞前に行なわれたと考えられる。切断面はヘラ切りらしい。

調整は、内外面ともにタテ方向のナデである。口縁部

外面の近くにヨコナデがみられる。内面の一部に藁縄状圧痕に似た痕跡を認めるが、判然としない。

棺身 全長117cm・幅48cm・高さ44cmで蓋受け・底部・脚の一部を欠失する。内法寸法は長さ101cm・幅38cm・高さ28cmとなる。赤色顔料の塗布は認められない。底部内面に大きな黒斑がみられる。

外面に突帯の貼付けが認められない。体部は隅丸方形の箱形であるが、口縁部の平面形は楕円形を呈している。短側面の器壁が大きく内傾する。口縁端部から下へ4cm前後の位置に粘土帯を貼り付け、下に補充粘土を少し加

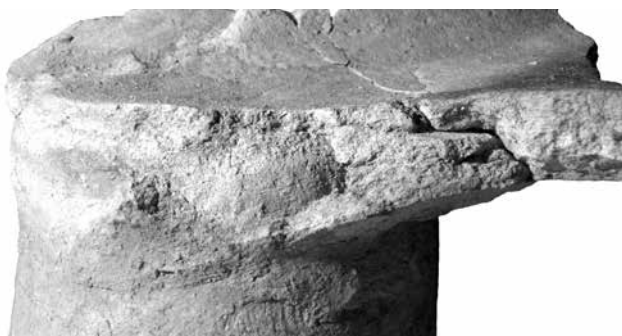


図220 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態1

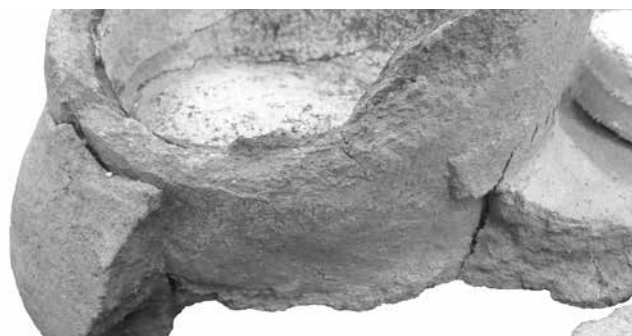


図223 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態

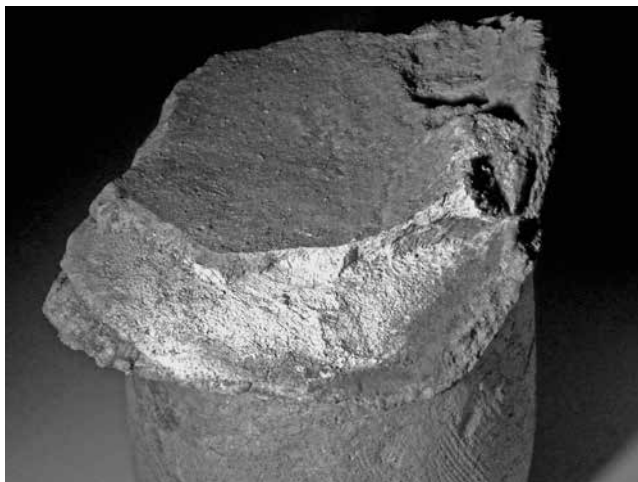


図221 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態2



図224 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚外面のタテハケ調整と板押圧痕跡

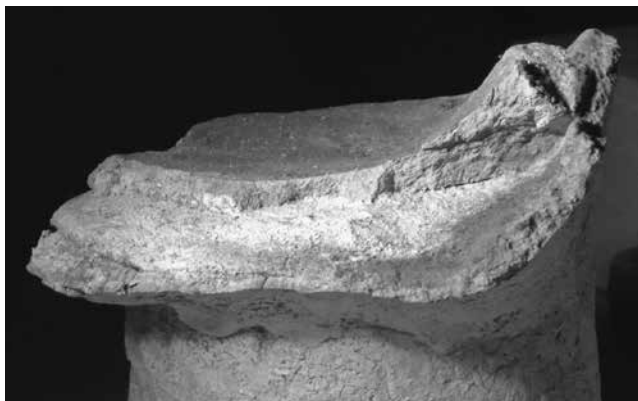


図222 赤田9号墓 亀甲形陶棺 脚と底部の接合状態3

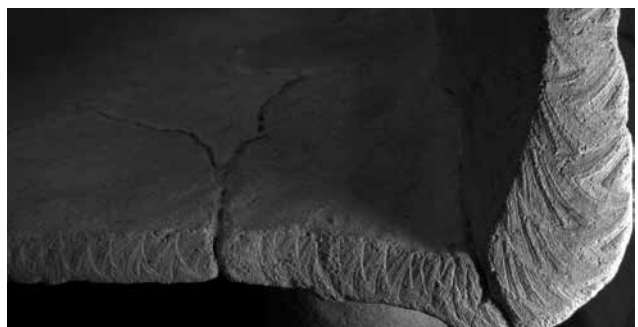


図225 赤田9号墓 亀甲形陶棺 切断面の糸切り痕跡

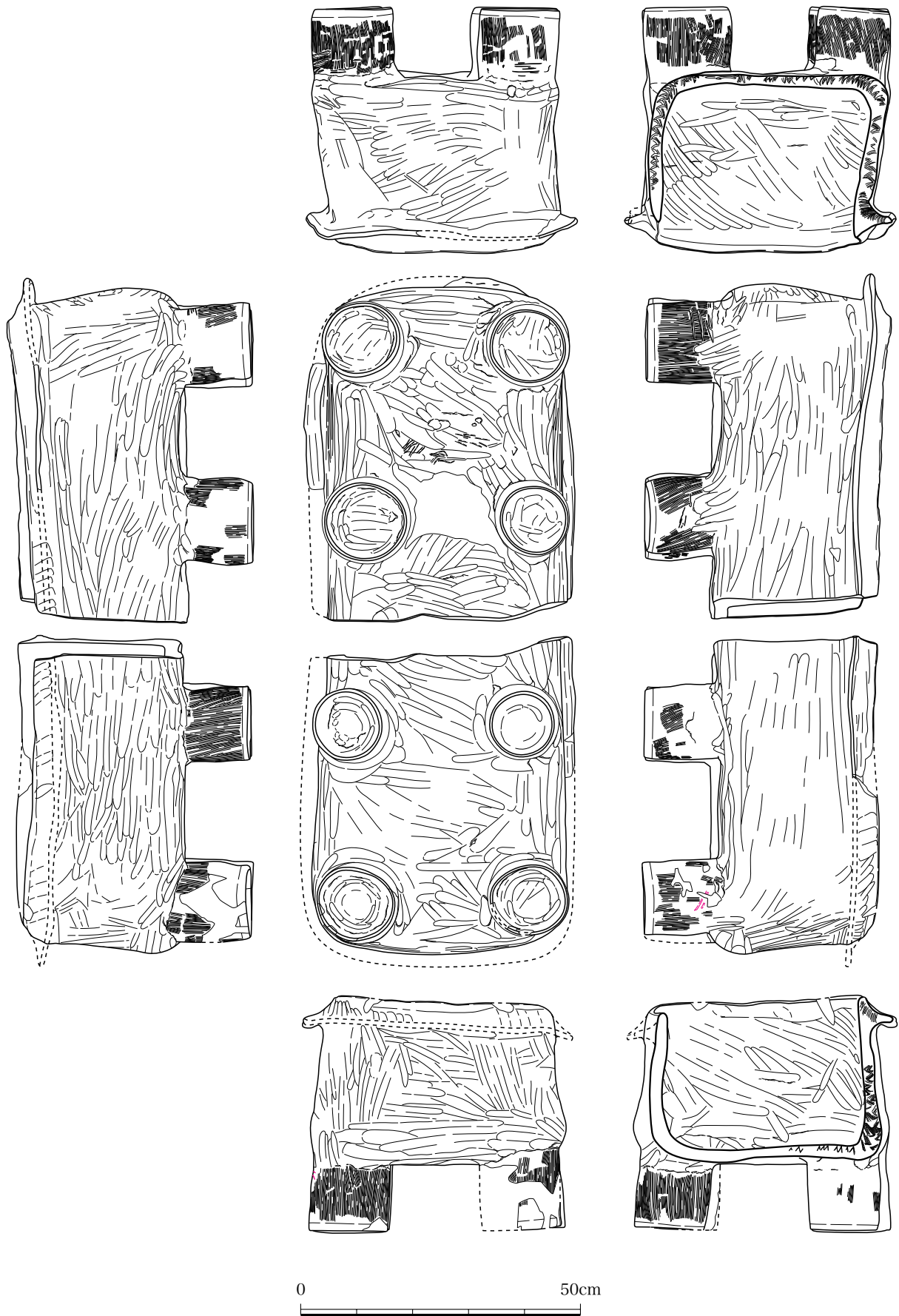


図 226 赤田9号墓 亀甲形陶棺 身外面平面・立面図 (1/10)

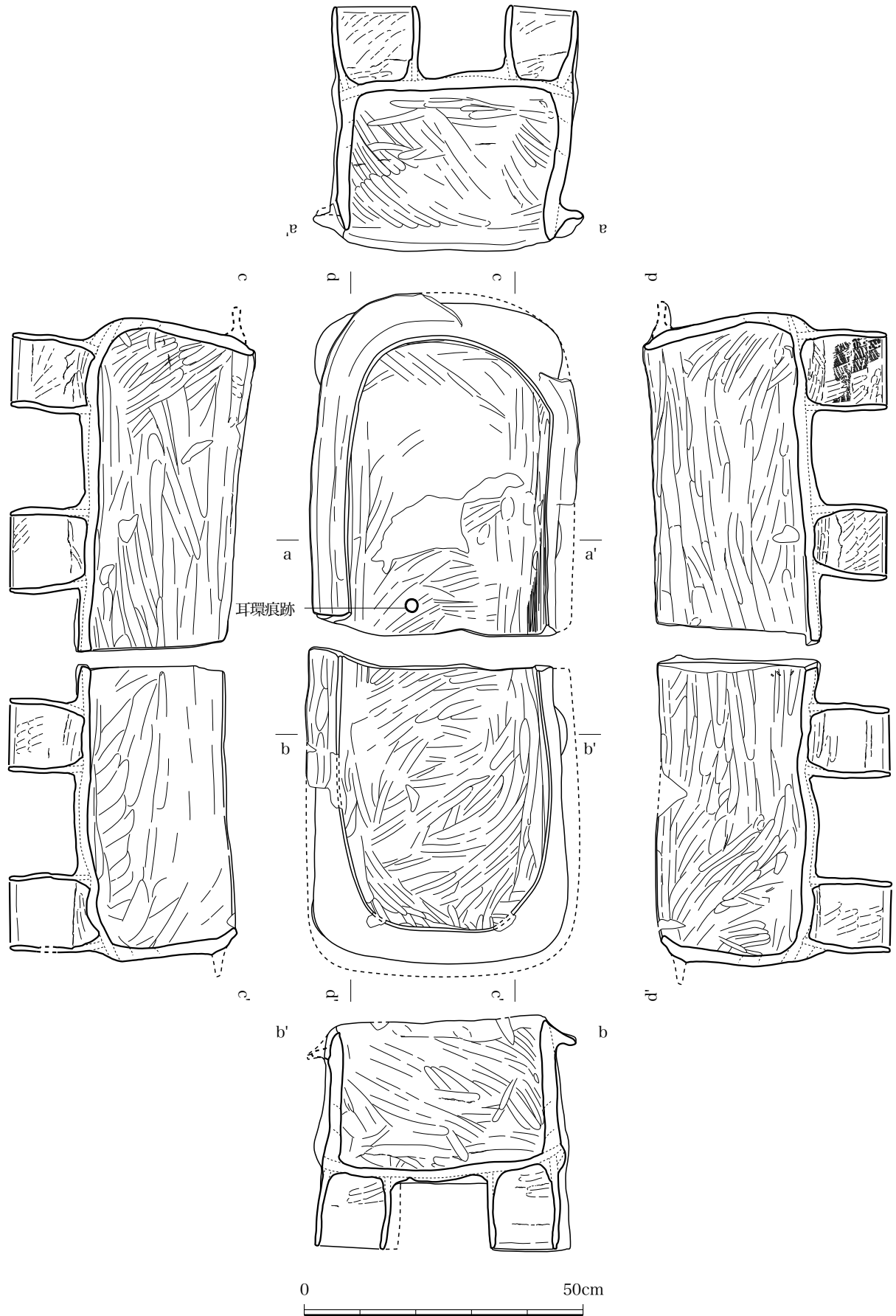


图227 赤田9号墓 龟甲形陶棺 身内面平面·立面图 (1/10)



図 228 赤田9号墓 円筒形陶棺 A 棺蓋外面の2次調整ケズリ



図 229 赤田9号墓 円筒形陶棺 A 棺身底部の2次調整ケズリ



図 230 赤田9号墓 円筒形陶棺 A 棺身底部の断面

えてヨコナデ調整し蓋受けをつくる。蓋受けの上面は、ナデ調整によって内湾気味になる。口縁部の高さは2cm前後、蓋受け上面の幅4～6cm、厚さは1cmほどである。体部の調整は外面でヨコナデを基調とし、四隅へさらにタテナデを加える。内面はナナメナデ・タテナデを基調とし、長側底面にヨコナデを加える。底部内面もナデ調整で、耳環の痕跡が錆付いて残っている。

切断面には鋸歯状に細かく刻まれた糸切り痕跡(図225)が明瞭に残り、一部にケズリがみられる。糸切りは底部中央付近に切り込みを入れて糸を通し、ここを始点に左右を切断している。乾燥が進み硬化した状態で切断したのだろう。

脚部には4行2列、合計8本の脚が取り付く。透孔は認められない。脚の調整は、外面タテハケ、内面タテナデである。底部はヨコナデ調整されており、外面タテハケの方向が上から下へと進んでいるため、脚は成形後に倒立されていることがわかる。

脚部から底部にかけての製作は幾つかの工程を経て一体的に行われている。まず、脚となる規格的な円筒(直径12～15cm・高さ15cm)を8個つくり、口縁部をヨコナデ調整して仕上げる。そして、作業台上で円筒底部外面の外周に幅4cm・厚さ2cmの粘土をめぐらせて貼り付ける(下面に平坦面ができる)。これを粘土板の上に置いて接合する(図220～223)。円筒内側の接合はこの時点で行なわれたと考えられる。粘土板の大きさはわからないが、他例との関連で考えると2脚1行単位の大きさであった可能性がある。これを倒立して長軸方向に順次接合し、脚付の底部を製作したと思われる。底部外周の粘土を板押さえで上方へ折り曲げて体部成形の土台とする。脚外面の板押圧痕跡(図224)はこの際にできたもので、底部側面のナデで一部が消される。

次に、粘土帯を底部外周に沿って積み上げ体部を成形し、口縁部外面を指押さえして端部を薄くつくる。蓋受けを接合して完成する。

(2) 円筒形陶棺

土器棺の形状に似ているものの、これまでに例のない形態であるため土師質円筒形陶棺と呼ぶ。細長く高い棺身に半球形の棺蓋を載せる構造である。棺身は平底の円筒形で、口縁部の少し下に蓋受けを貼り付ける。大小二つの円筒形陶棺があるため、大型品を円筒形陶棺A、小型品を円筒形陶棺Bとして以下に報告する。

a. 円筒形陶棺A(図228～230・233)

玄室奥壁に沿って東へ倒れた状態で出土した円筒形陶棺。棺身に棺蓋を載せた形状は砲弾形に似ており、その

高さは95.7cm前後である。

棺身 高さ85.1cm・口径29.5cm・蓋受け直径36.0cm・底径26.0cmの完形品に復原できた。内法寸法は、高さ83.3cm・口径28.3cmである。赤色顔料の塗布は認められない。底部から蓋受けへ延びる帯状の黒斑が1つみられる。

直径27cm・厚さ1.2cmほどの粘土円盤をつくって底部とし、その外周に高さ5cm前後の粘土帯を積み上げて成形している(図230)。内外面タテハケ調整で、下から約35cm、その上約30cmで2回の積み上げ休止を行うためにハケ調整の重複が認められる。口縁部はヨコナデ調整である。蓋受け貼り付け後の2次調整として、底部外面のケズリ(図229)と体部上方の内面タテハケが行なわれている。

口縁端部から下へ7.5～8.5cmの位置に蓋受けが貼り付けられる。口縁部の高さ7～8cm、蓋受けの幅1.5cm前後・厚さ1cm前後である。蓋受けには径0.5cm前後の穴が10～20cm間隔で7つあいており、載せた蓋がはずれないよう紐で緊縛するための紐穴ではないかと考えられる。

底部外面に「×」のヘラ描きがある。

棺蓋 高さ18.4cm・口径34.5cmの完形品に復原できた。内法寸法は、高さ17.4cm・口径33.9cmである。赤色顔料の塗布や黒斑は認められない。

半球形を呈し、逆位で製作されている。内外面をハケ調整し口縁部をヨコナデする。外面上半をケズリで2次調整するが(図228)、天井部に指頭圧痕が残る。

b. 円筒形陶棺B(図231～233)

玄室西側壁近くで出土した円筒形陶棺。棺身に棺蓋を載せた形状は円筒形陶棺Aと同じく砲弾形に似ると推定され、その高さは80cm前後と思われる。

棺身 高さ67.4cm・口径26.6cm・蓋受け直径34.0cm・底径24.4cmの完形品に復原できた。内法寸法は、高さ65.7cm・口径25.6cmである。赤色顔料の塗布は認められない。体部下半に黒斑が1つみられる。

直径26cm・厚さ1.2cmほどの粘土円盤をつくって底部とし、その外周に高さ5cm前後の粘土帯を積み上げて成形している。内外面タテハケ調整で、下から約45cmで一度積み上げ休止を行うためにハケ調整の重複が認められる。口縁部はヨコナデ調整である。蓋受け貼り付け後の2次調整として、底部外面のケズリと体部上方の内面にタテハケが行なわれている(図231・232)。

口縁端部から下へ6.5～7cmの位置に蓋受けが貼り付けられる。口縁部の高さ6～6.5cm、蓋受けの幅2cm

前後・厚さ1cm前後である。蓋受けには径0.5cm前後の穴が7～16.5cm間隔で9つあいており、載せた蓋がはずれないよう紐で緊縛するための紐穴ではないかと考えられる。

棺蓋 口縁部の約1/4程度しか残存していないが、円筒形陶棺A蓋と同様の形状になると考えられる。

高さ13cm以上・口径33.0cmの大きさに復原できる。本来の高さは20cm程度であったと思われる。内法寸法は、復原口径32.2cmである。赤色顔料の塗布や黒斑は認められない。

半球形を呈すると推定され、逆位で製作されている。内外面をハケ調整し口縁部をヨコナデする。外面上半はケズリで2次調整されている。

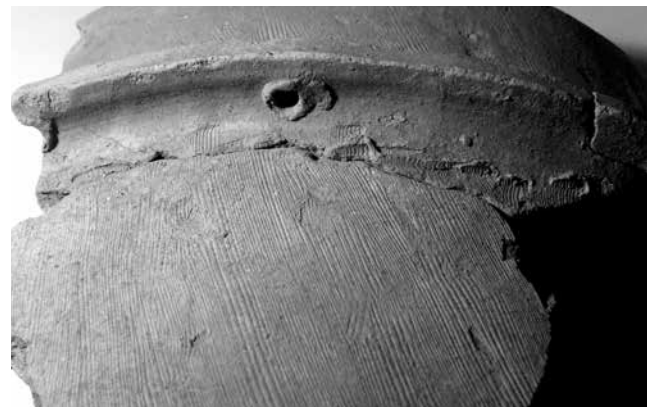


図231 赤田9号墓 円筒形陶棺B 棺身外面上半の2次調整タテハケ



図232 赤田9号墓 円筒形陶棺B 棺身内面上半のタテハケ調整

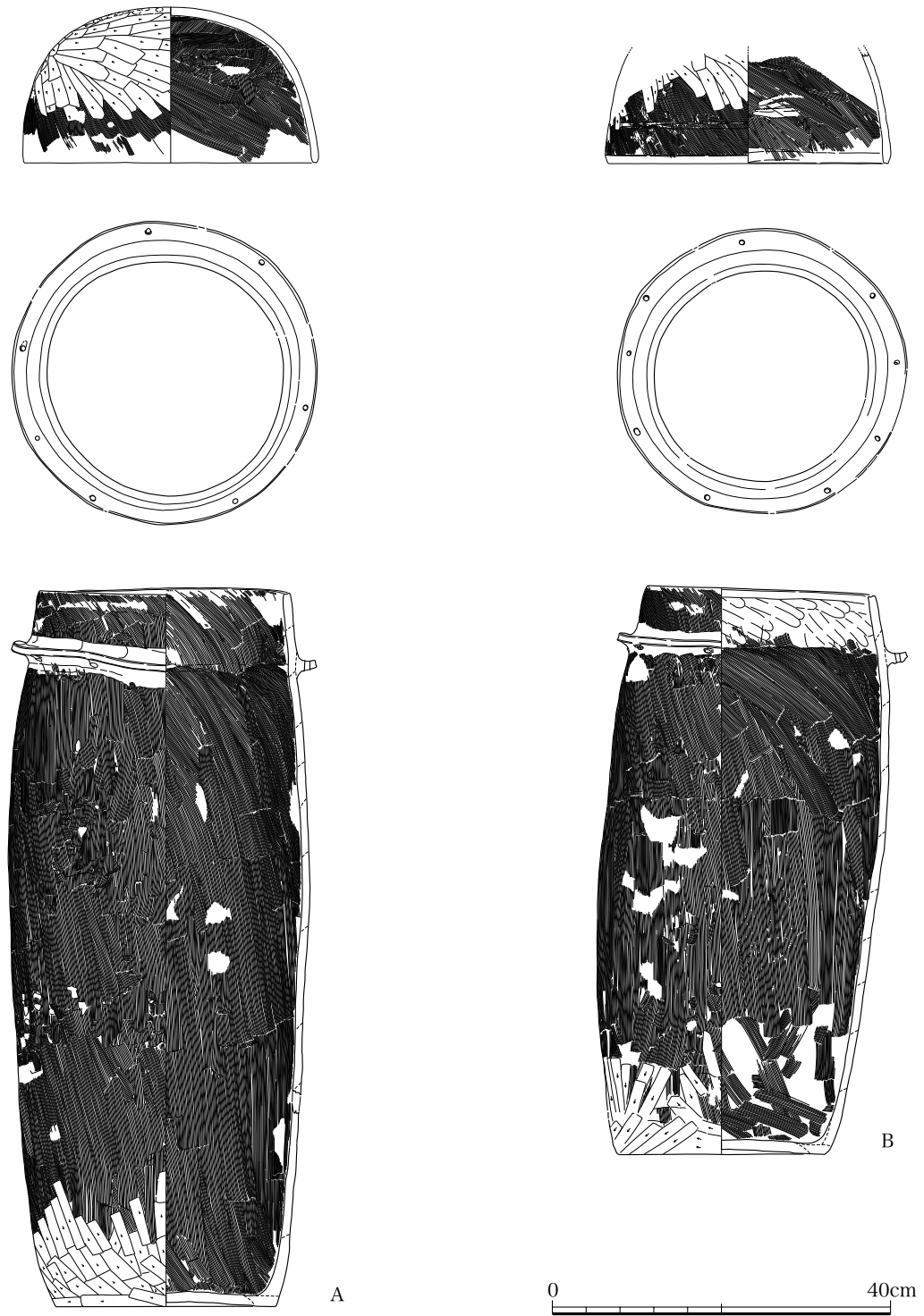


図233 赤田9号墓 円筒形陶棺 (1/8)

2. 金属器 (図234・235)

耳環 (1) 銅芯鍍金の耳環である。接面に板のたたみ込みが認められない。鍍金の剥落が外側面を中心にみられ、銅芯が露出する。平面はやや横長の楕円形で、外径2.6cm×2.39cm(復元)、内径1.52cm×1.41cm。断面はやや縦長の楕円形で、厚さ0.55cm×0.71cm。

(鐘方正樹)

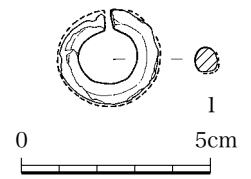
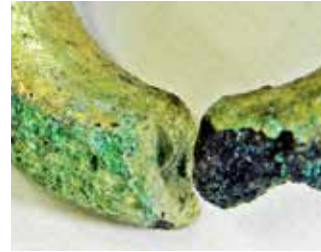


図234 赤田9号墓 陶棺内出土耳環接面

図235 赤田9号墓 陶棺内出土耳環 (1/2)

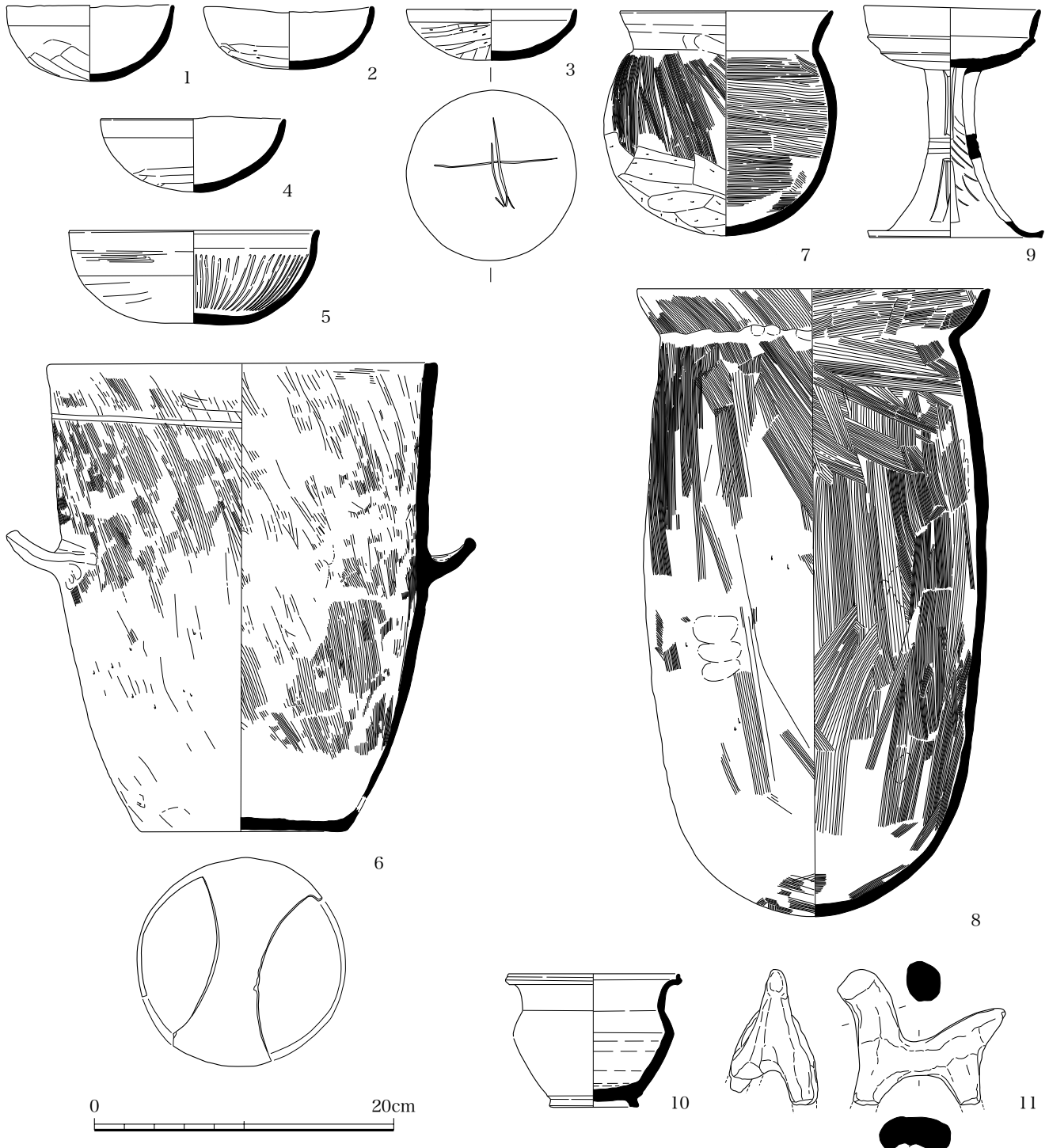


図236 赤田9号墓 玄室出土土器・土製品 (1/4)

3. 土器・土製品

(1) 玄室出土土器・土製品 (図 236)

玄室出土の土器・土製品には土師器碗 (1~4)、杯 C (5)、甗 (6)、甕 (7・8)、須恵器無蓋高杯 (9)、壺 H (10)、土馬 (11) がある。

土師器碗は1~3が口径 11.2~11.4cm、4が口径 12.4cm で、2種に分けることができる。2は口縁端部内面をやや強いヨコナデにより受口状に作っている。いずれも口縁部をヨコナデし、底部外面を手持ちによるヘラケズリで調整する。3は底部外面に「×」の線刻があり、1・3は口縁部に黒斑がある。杯 C (5) は精良な胎土で、赤褐色に焼き上がっている。口縁端部内面は沈線状に凹み、内面に一段の放射状暗文がある。底部外面と口縁部下半をヘラケズリし、口縁部外面にヘラミガキを加える。甗 (6) は体部中程に2方向の把手が付き、底部には木の葉形の孔が二箇所を開けられている。内外面をハケメで調整する。口縁部外面のやや下方に棒状工具によるとみられる沈線が一条巡る。甕は7が球形の体部から口縁部が直線的に外方にのびる形態で、体部下半外面をヘラケズリし、上半をハケメにより調整する。体部内面の調整は横方向のハケメである。8は長胴で、口縁部が受口状である。調整は内外面ともハケメである。

須恵器無蓋高杯 (9) は脚部に2段2方の透かしがある。透かしと透かしの間には2条の沈線が巡る。杯部にも2段の鋭い稜がみられる。脚部内面には成形時の絞り痕跡がある。調整は内外面ともロクロナデである。

壺 H (10) は灰白色を呈し、やや軟質の焼き上がり。調整は内外面ともロクロナデである。

土馬 (11) は頭部、尻尾を欠く。墓道から出土したものと比べるとやや小ぶり、玄室出土のものは胴部・尻尾の断面形態が丸味を帯びる。

これらの土器は、土師器、須恵器無蓋高杯は7世紀前半~中頃、須恵器壺 H、土馬は8世紀のものと考えられる。

(2) 墓道出土土器・土製品 (図 237)

墓道から出土した土器・土製品には土師器鉢 (16)・甕 (17)、須恵器杯 H 身 (12~14)・短頸壺 (15)・土馬 (18・19) がある。

土師器鉢 (16) は口縁部をやや内湾させる。内面の調整はハケメであるが、外面は剝落が激しく調整は不明である。甕 (17) は口縁部を受口状に内湾させる形態。調整は外面体部下半がヘラケズリ、上半がハケメである。内面は体部が斜め方向のハケメ、口縁部は横方向のハケメである。外面には黒斑がある。

須恵器杯 H 身は12が底部外面をロクロナデし、丸底風の形態、13はヘラ切り後未調整で平底の形態で、受け部に重ね焼きの痕跡がある。短頸壺 (15) は底部外面はヘラ切り後未調整、体部・口縁部内面をロクロナデにより調整する。

土馬はいずれもやや幅広の胴部と尻尾で、耳を粘土紐を貼り付けて表現している。二点の大きさ、形態が類似しており、製作者が同一である可能性が考えられる。

これらの土器は、土師器鉢・甕、須恵器杯 H が7世紀前半~中頃のもの、短頸壺 (15) は肩が張り、平底であることから、8世紀以降のものと考えておきたい。土馬も8世紀のものである。 (池田裕英)

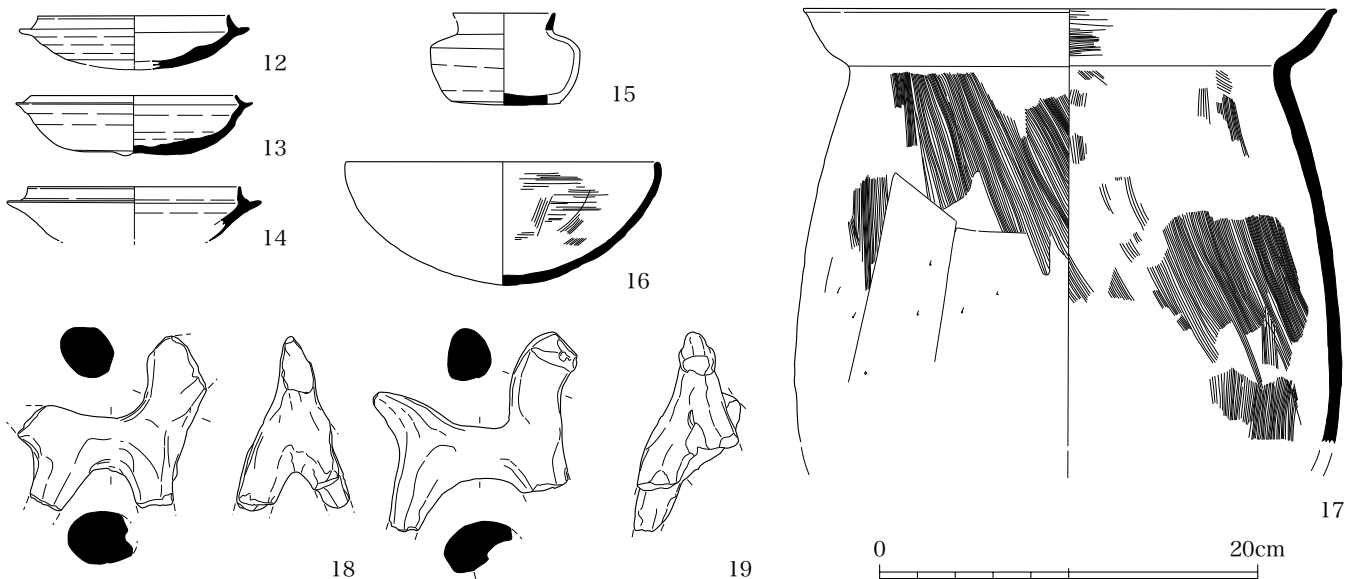


図 237 赤田9号墓 墓道出土土器・土製品 (1/4)

第14節 赤田1号墳

I. 調査の方法

赤田横穴墓群と同じ丘陵の尾根上に位置する赤田1号墳は、工事中に不時発見された古墳である。発見に至る詳細な経緯は第1章の通りである。

現地へ赴いた際の状況は、長さ約8.3m、幅約3.0mの掘方のなかに、陶棺の身が約半分遺存した状態で残存していた。当初はこれを、赤田横穴墓群と同様の横穴墓と考えて、調査を進めた。結果的に、横穴墓ではなく周溝をもつ横穴式石室の古墳であることが判明し、「赤田1号墳」と命名した。『奈良県遺跡地図』には赤田1号墳の西に6基の古墳が示されている。これらの古墳は未調査で消滅したものもあるため、赤田1号墳や赤田横穴墓群と関連するかは不明である。しかし、同じ尾根上に位置する6基が赤田1号墳と合わせて古墳群を形成している可能性があるため、号数を付けた。

不時発見のため、調査は工事範囲内に残存する遺構に対して行った。埋葬施設は主軸とそれに直交するセク

ションを設定して掘り下げを行った。主軸に直交するセクションは周溝まで延長し、墳丘との関係を追った。平面図は、独立行政法人奈良文化財研究所埋蔵文化財センター金田明大氏の協力でオルソ画像を作成し、それをもとに製図した。

II. 墳丘と埋葬施設の形態

赤田1号墳は、横穴式石室に陶棺を安置し、墳丘の周囲に周溝がめぐる古墳である。検出した遺構は、埋葬施設（横穴式石室・陶棺）、周溝、ピット（SP01）である。丘陵の基本層序は、表土下で地山となり、地山は上から丘陵の崩落土層、シルト層と堆積する。工事前の現地は山林であり、墳丘の盛土は認められなかった。調査開始時には西側がすでに大きく切土され、陶棺より東および北側のみが残されていた。

1. 墳丘と周溝 埋葬施設の北東側で、幅1.4m、深さ0.75mの溝を長さ14.3m分検出した。埋葬施設を囲うように円弧状に溝がめぐることから、これを古墳の周溝と推定した。北西へ地山が高くなるにつれて周溝は浅くなって途切れ、南東側でも地山が下がるとともに途切

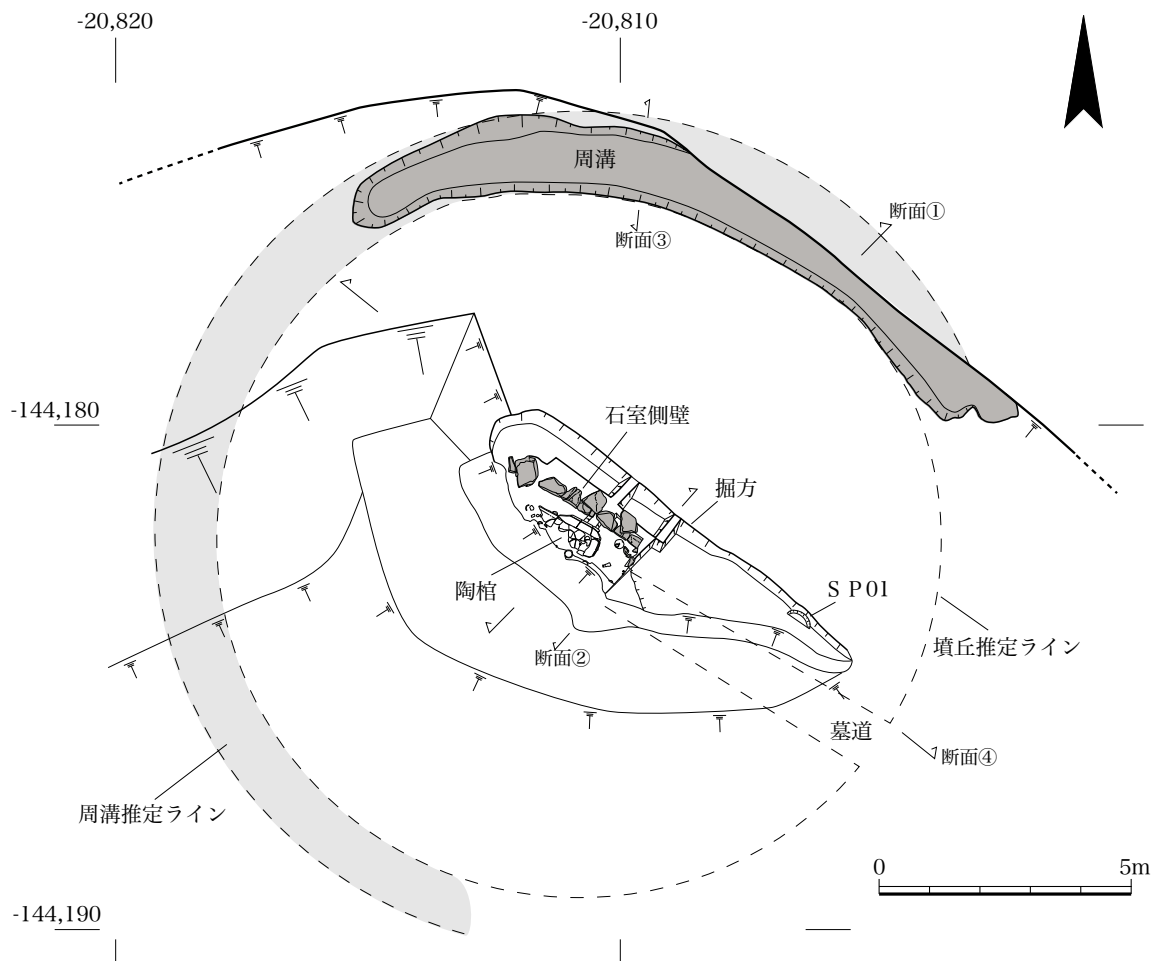


図238 赤田1号墳 遺構平面図 (1/150)

れる。埋土は上から暗褐色土（約0.5m）、黄褐色土（約0.25m）である。主に上層の暗褐色土層から8世紀の土師器皿、須恵器杯B、土馬、丸瓦が出土した。墳丘部分を断割調査(図239)したが、盛土は確認できなかった。

2. 埋葬施設 埋葬施設は横穴式石室で、玄室の左側壁と墓道の一部を検出した。残存した埋葬施設（玄室と墓道）の掘方は、北西-南東方向に主軸を向け、規模は長さ8.3m以上、幅3.0m以上である。

玄室 掘方内に玄室の左側壁が長さ3.1m、最大3段分で高さ0.75mが残存していた。ただし、残存する最も奥の側石は工事の際に動いており、原位置を保たない。奥壁と右側壁は工事中に失われ残存しない。左側壁は割石積みで、各段の上端を揃えて積んでおり、最下段は黄褐色土の整地土を加えて高さを調節している。奥壁に近い部分では、下2段分を大きめの一石を用いて高さを合わせている。側壁は約75度に傾斜する。

明確な袖石は存在しないが、左袖部に拳大の石材が埋め込まれ、左側壁裏込め土がここまで張り出して、袖部を形成するのを土層断面（図240）で確認した。これを積極的に評価すれば、長さ約0.4mの左袖部を有する

片袖式、あるいは両袖式石室となる可能性が高い。袖石の抜き取り痕はなく、当初から袖石はなかったと考えられる。

石室材 川原石のような滑らかな石でなく、山地に点在するような凹凸が表面にあるもの、割れている面をもつものがある。石材の石種は片麻状細粒黒雲母花崗岩（A）と中粒黒雲母花崗岩（B）である。AとBの記号は図244の石室材に記す記号と同じである。石種の岩相についての観察結果は以下の通りである。

A) 片麻状細粒黒雲母花崗岩：暗灰色で、顕著な片麻状を呈する。片麻状構造に並行して脈状あるいはレンズ状に中粒黒雲母花崗岩が含まれる。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.3～0.5mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が0.3～0.5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状、粒径が0.3～0.5mm、量が多い。

B) 中粒黒雲母花崗岩：色は灰白色である。片麻状細粒黒雲母花崗岩がレンズ状に含まれる。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～8mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3～8mm、

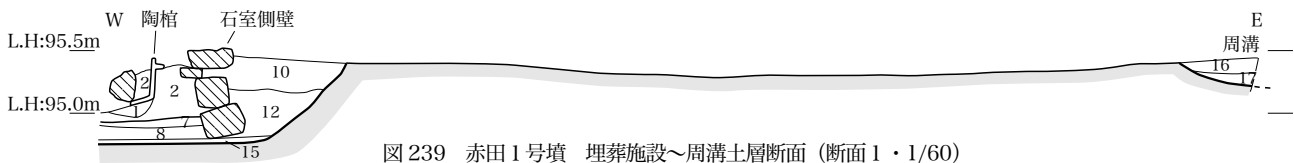


図239 赤田1号墳 埋葬施設～周溝土層断面 (断面1・1/60)

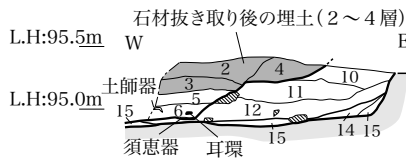


図240 赤田1号墳 玄関部土層断面 (断面2・1/60)

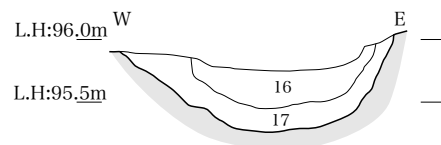


図241 赤田1号墳 周溝土層断面図 (断面3・1/60)

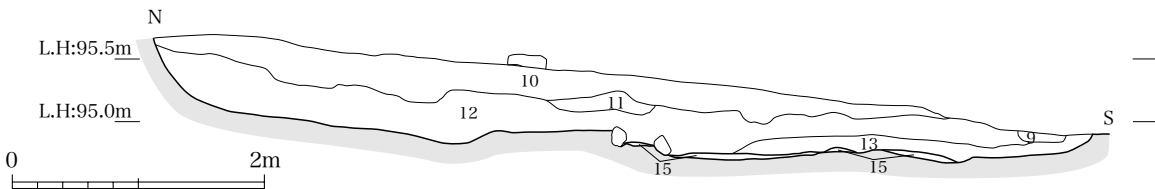


図242 赤田1号墳 石室裏込め～墓道土層断面 (断面4・1/60)

- | | | |
|-----------------------|-------------------------|--------------------|
| 1 腐植土 | 7 暗黄褐色土 | 13 黄褐色土 (鉄分含む) |
| 2 淡灰色土 (白色土ブロック多く含む) | 8 淡灰黄褐色土 | 14 オリーブ褐色土 |
| 3 黄褐色土 (白色土ブロック多く含む) | (7・8は玄室内整地土) | 15 明黄褐色土 (埋葬施設整地土) |
| (2・3は天井崩落土) | 9 暗褐色土 (SP01埋土) | 16 暗褐色土 |
| 4 黄褐色土 (石室側石抜き取り痕跡) | 10 淡黄褐色土 (黄褐・白色土ブロック含む) | 17 黄褐色土 |
| 5 明黄褐色砂土 (灰白色土ブロック含む) | 11 淡黄褐色土 | (周溝埋土) |
| 6 明灰褐色砂土 (灰白色土ブロック含む) | 12 淡オリーブ褐色土 | |

赤田1号墳 堆積土層名

量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～4mm、量が中である。

玄門・墓道 通常の横穴式石室は玄室より高さの低い側壁と天井石をもち、外部と玄室を繋ぐ羨道が伴う。赤田1号墳では羨道の機能を有する施設が確認できなかったが、玄室と外部を繋ぐ通路は、盛土で構築されていた。

玄門に設定した主軸と直交する土層断面(図240)では、下から淡オリブ褐色土(12層)、淡黄褐色土(11層)、黄褐色土・白色土ブロックを含む淡黄褐色土(10層)と堆積し、この上から掘り込んで左側壁の石材抜き取り痕跡に由来する黄褐色土(4層)の堆積を確認した。また、10・11・12層は、主軸上に設定したセクションの土層断面(図242)から、石室裏込め、および玄門付近より南東側へ続くことを確認した。また、墓道には盛土中に拳大の石材が混じるが、羨道を示すような石材はもろん、その抜き取り痕跡もない。したがって、石室構築と同時に築成土を玄門前面にまで一連で積み上げて墓道を構築したと推定できる。

玄門付近で10・11・12層が途切れ、玄門中央付近には最下層に耳環2点や土器を覆う、灰白色土ブロックを含む黄灰褐色砂土(6層)と、同ブロックを含む明黄

褐色砂土(5層)が堆積する。この上に、白色土ブロックを多く含む黄褐色土(3層)、同質の淡灰色土(2層)の順で堆積するが、2・3層は陶棺内にも堆積を確認でき、側石抜き取り後の堆積層であると判断できる。最下層(6層)で耳環2点が並んで出土したことから、陶棺とは異なる埋葬が玄門付近で行われた可能性が高い。玄室と墓道を仕切る玄門の構造や閉塞方法の確認は調査開始時に大部分が切土されていたためできなかった。

また、墓道の築成土を切り込んで、径約0.5m、深さ約0.1mのSP01がある。すでに半分が削られていて、出土遺物もなく時期不明である。

III. 棺と副葬品の配置

1. 棺の配置

玄室左側壁から0.13mあけて、土師質亀甲形陶棺が玄室と主軸をほぼ揃えて安置されていた。棺内には、白色土ブロックを多く含む淡灰色土(2層)とともに石室石材・棺蓋片が落ち込んでいた。

2. 副葬品の配置

陶棺内からは底面南側中央で耳環1点(図249-9)が出土したが、その他の副葬品はなかった。

玄室内では陶棺と左側壁の間の床面から須恵器無蓋高

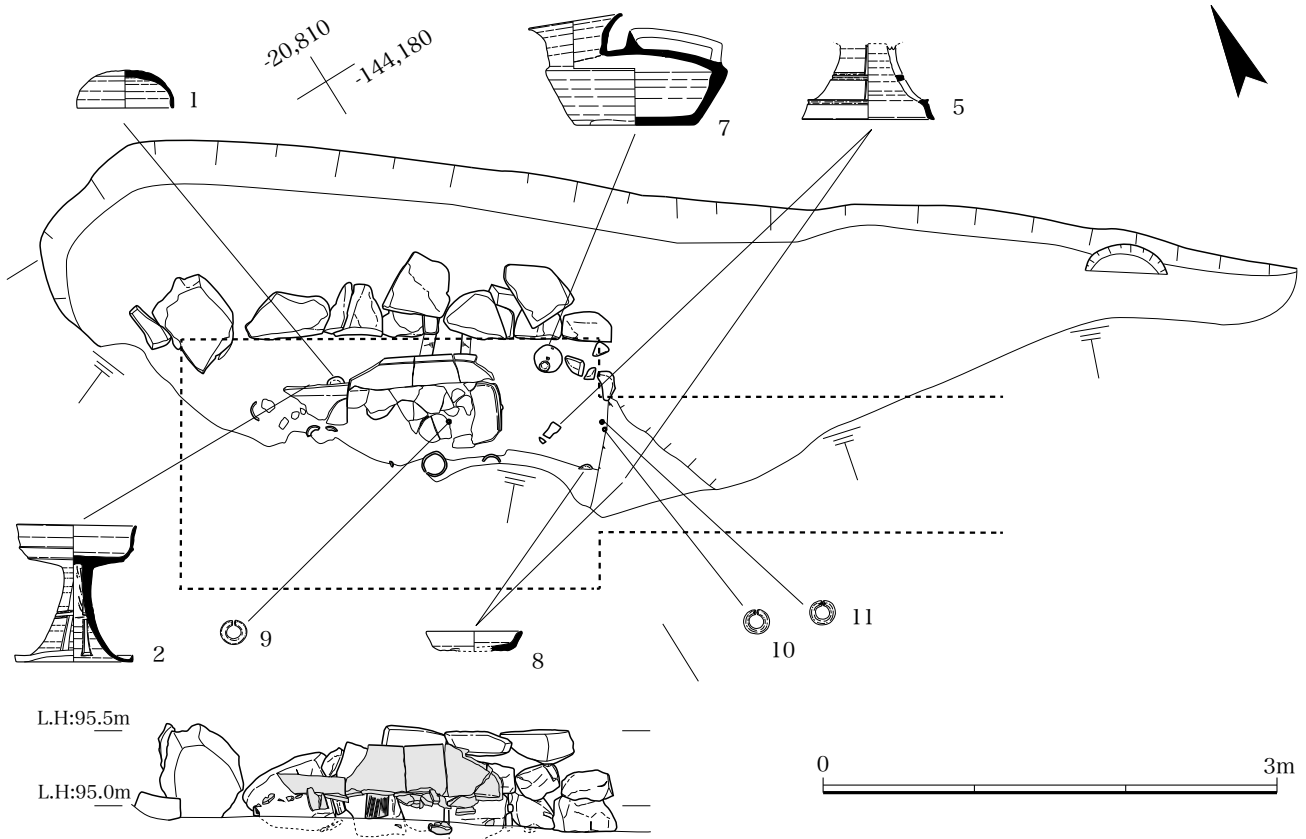


図243 赤田1号墳 陶棺・遺物出土状態 (1/50)

杯1点・杯蓋1点、同位置の崩落土中から瓦細片1点が出土した。玄室左袖隅の床面で平瓶1点が出土した。

玄門付近にあたる位置からは、床面からやや浮いた位置に近接して耳環2点(図249-10・11)、耳環の下付近から須恵器甕片1点、耳環の西側で土師器皿片1点・須恵器台付壺片1点が出土した。玄門近くの墓道側では、灰白色土ブロックを含む黄灰褐色砂土から、玄門付近で出土したのと同一体であると考えられる土師器皿片数点と、須恵器台付壺片1点が出土した。なお、不時発見された際に、埋葬施設上面で須恵器高杯(図249-4)を表採している。

III. 出土遺物

出土遺物には、陶棺、鉄釘、土器、耳環、瓦、土馬がある。出土位置は、埋葬施設内と周溝内である。

1. 陶棺

土師質亀甲形陶棺である。棺蓋・身は別作りで、切断して焼成し、再度組合せて使用する。身の約半分が残存し、概ね片身の形状が復原できた。

棺蓋 確実に蓋と認定できる破片は5点と少量で、全

体の復原はできない。口縁部・体部・天井部の部位がある。断片的な情報から復原すると、棺蓋は口縁部突帯と稜線突帯間に1条の横位突帯をめぐらせて上下2段に区画し、縦位突帯を貼りつけて、いくつかの方格が表現されていたと推測できる。1は天井部片で、縦位突帯が稜線突帯に接続する。2は体部片で、縦位突帯と横位突帯が直交する。5は口縁部片で、端部から2.5cm上方に口縁部突帯がめぐり、縦位突帯が接続する。

断面は、復原すると半円形である。厚さは口縁・体部で1.6cm、天井部で1.5cmである。突帯は、台形を呈し上面には板押圧が認められ、幅1.0cm、高さ1.5cmである。なお、短側面付近の突帯は、板押圧がより強く、突帯幅が2.5cmとなる。透孔の残存する破片がなく、その有無は不明である。

外面には、区画内や突帯上に緑色と赤色の彩色が確認できる。赤田3号墓出土陶棺と同様に、区画内を赤と緑に塗り分けていたと推測できる。内面に彩色は確認できない。

調整は、内外面ともに指ナデである。口縁部端面には

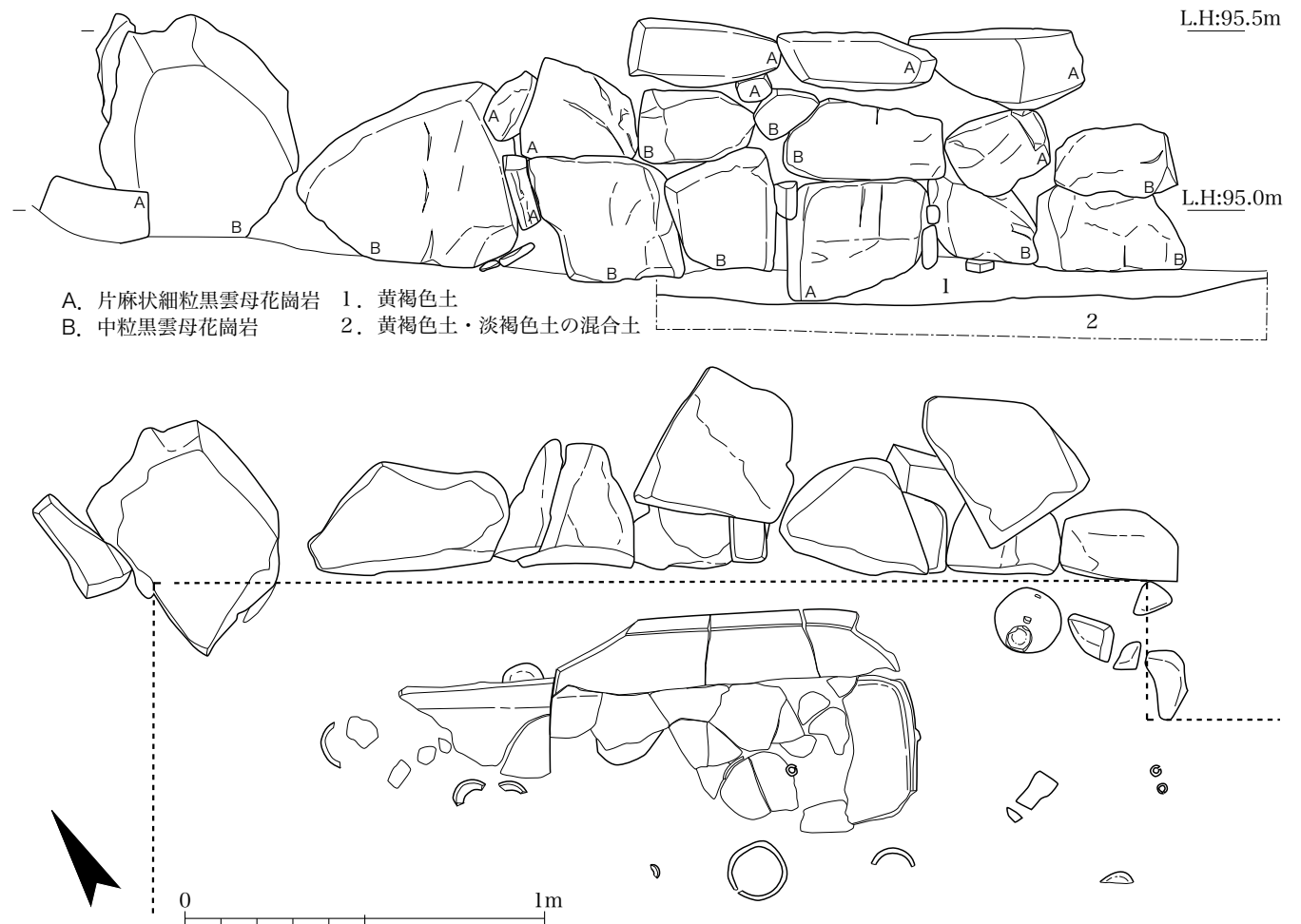


図244 赤田1号墳 玄室平面・立面図 (1/20)

広葉樹の葉脈圧痕が残り、木葉を敷いた上で製作したことがわかる。内面にはわずかに藁縄状圧痕が認められ、乾燥時に支持具を用いた工程が想定できる。残存する切断面には糸切り痕が見られず、丁寧にナデ消している。

棺身 概ね復原できた片身の大きさは全長107cm、高さ55cm、幅70cmである。ほぼ二等分されたと考えれば、全長は206cmとなる。棺の内法は、全長196cm、高さ33cm、幅60cmと推測できる。もう一方の片身は、1本の完全な脚と半分以下の体部が残存するにすぎない。

底部外面に沿って周底突帯をめぐらせ、長側面に10条、短側面に2条の縦位突帯を貼りつけて、長側面に9区画、短側面に3区画をつくと想定できる。突帯は台形を呈し上面には板押圧が認められる。突帯の幅

2.0cm、高さ1.0cmである。

体部は隅丸方形の箱型で、器壁はほぼ直立する。粘土帯を口縁端部から下2.0cmの位置に貼りつけ、その下部に補充粘土を加えてヨコナデ調整し、蓋受けをつくる。蓋受け上面の幅は4.5cm、厚さ1.5cmである。

調整は、内外面ともに指ナデである。切断面には糸切り痕が確認でき、糸を通すための貫通孔が底面切断部の中央付近に確認できる。底部外面は丁寧に指ナデが施されるが、合わせ口付近には板オサエが目立ち、それに重複して支持具に起因するとみられる板状・藁状圧痕に似た痕跡が残る(図247)。体部上半～口縁部の内面に横方向の細長い板あるいは木目圧痕があり、前述の圧痕と合わせて乾燥時に支持具を用いた可能性を想定できる。

脚部には、片身で3行3列、全体で6行3列、合計

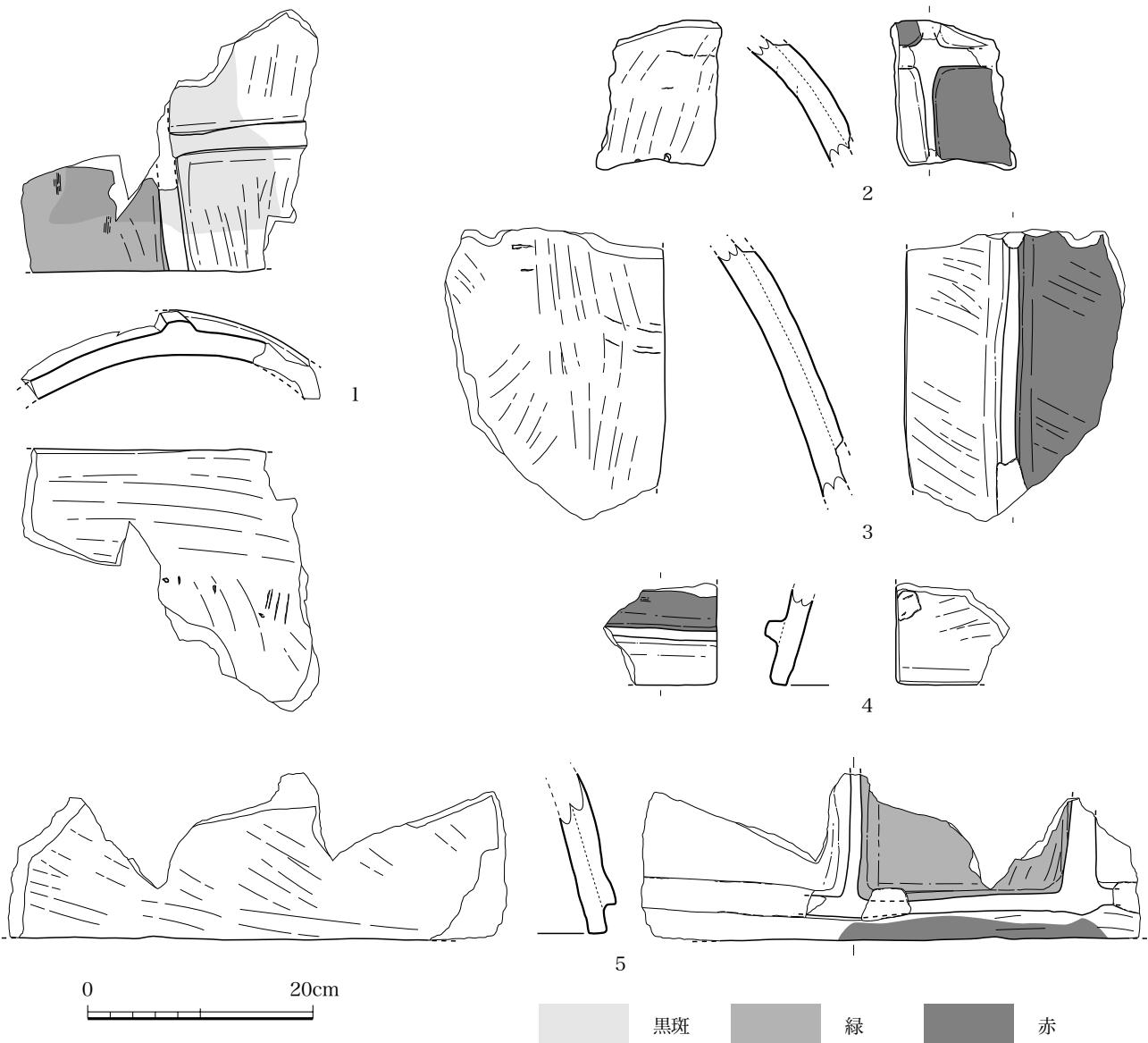


図245 赤田1号墳 陶棺蓋平面・立面図 (1/6)

18本（8本残存）の脚が身の底に取りつく。透孔はない。調整は、外面タテハケ、内面タテ方向の指ナデである。脚端部はヨコナデされている。脚下半と内面に黒斑

を認めるものがある。

内外面に赤色顔料の塗布が認められる。内面に多く残り、外面にはわずかにみられる程度である。

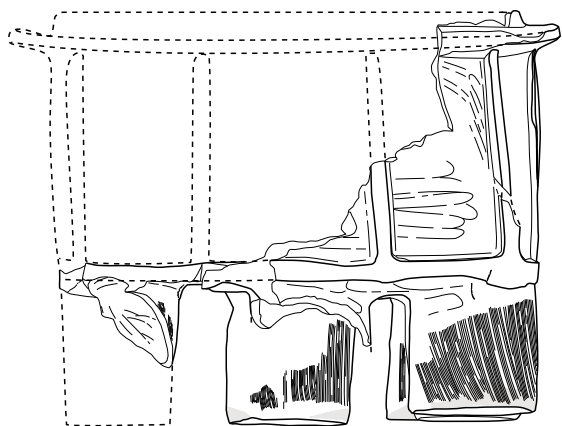


図247 赤田1号墳 陶棺裏面板状・藁状圧痕

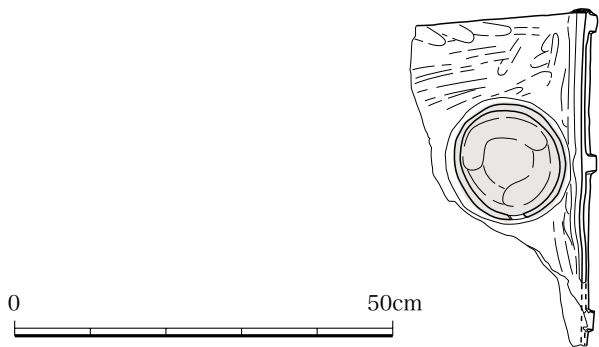
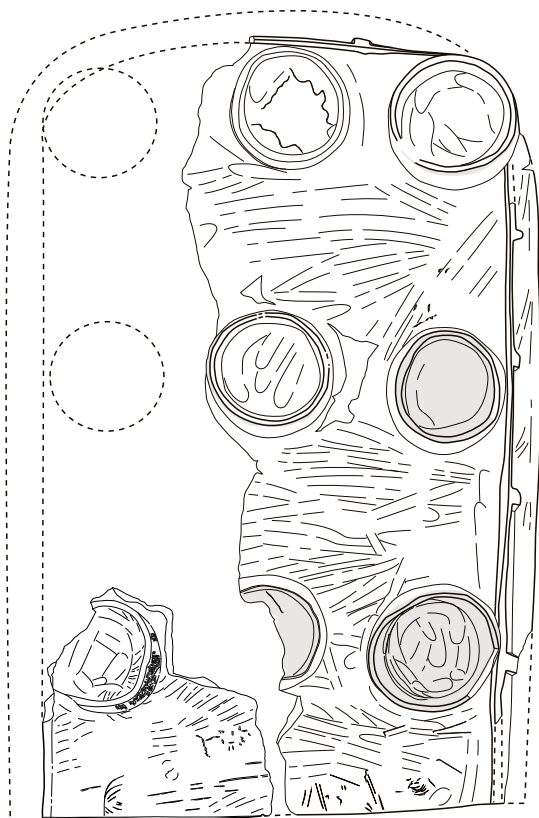


図246 赤田1号墳 陶棺身外面平面・立面図(1/10)



图248 赤田1号墳 陶棺身内面平面・立面图 (1/10)

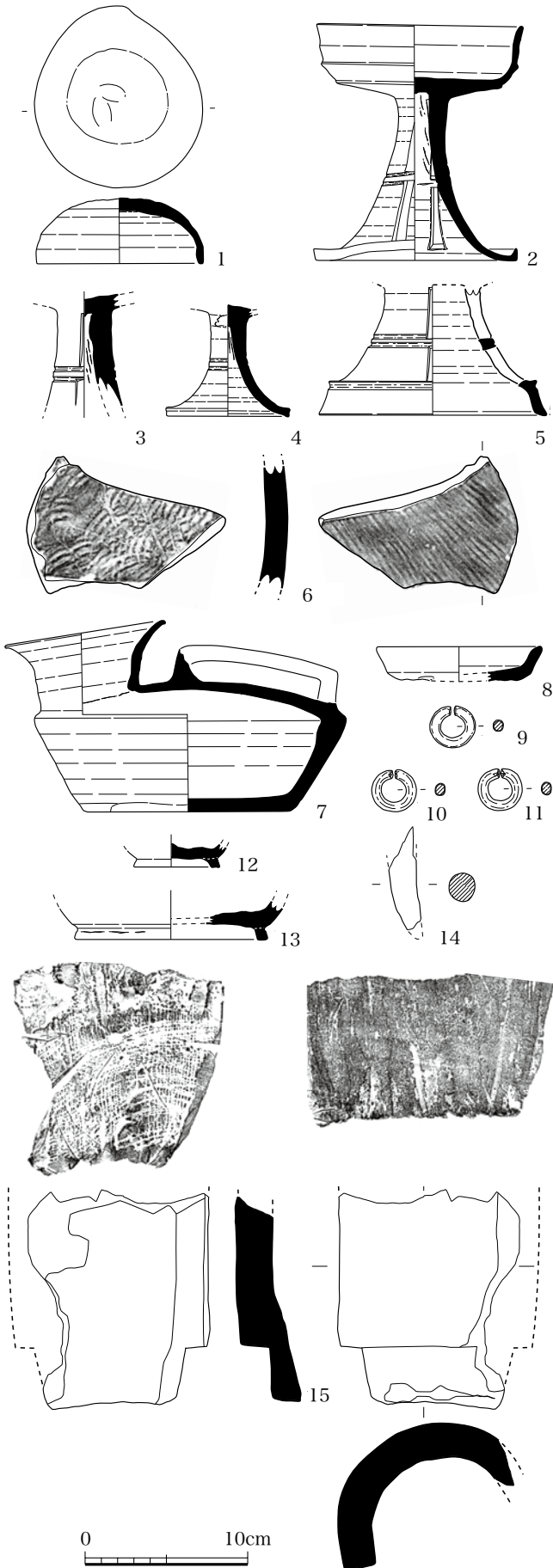


図 249 赤田1号墳 出土遺物 (1/4)

2. 金属製品 (図 249)

耳環 (7~9) 科学分析の結果、3点ともに銅芯に金銀合金板を巻き付けていることが判明した。ただし、陶棺内出土の9はやや銀の比率が多く、10・11に比べて見た目が白っぽい。開口部にはたたみ込みの痕跡が残り、表面には全体的に磨いた痕跡がみえる。

法量は9が外形2.6~2.8cm、内径1.4~1.5cm、厚さ0.6~0.7cm、10が外形2.6~2.8cm、内径約1.5cm、厚さ0.6~0.8cm、11が外形2.6~2.7cm、内径約1.5cm、厚さ0.6~0.8cmである。

3. 土器

(1) 石室内出土土器 (図 249)

土師器は玄門付近と墓道で同一個体と見られる皿(8)が出土した。摩滅し不明瞭であるが、内外面ともにナデで調整する。内面にはわずかに炭が付着する。形態から8世紀に位置づけられる。

須恵器杯蓋(1)は、焼け歪みが生じている。天井部から全体の1/5をロクロケズリ、以下をロクロナデ調整する。蓋に伴う身は出土しておらず、蓋を身として使用した可能性もある。高杯(2・3)は、2段で2方向透かしがある。ほぼ完形の2は、内外面ともにロクロナデで調整する。口縁部はやや外反し、受部には2条の稜がある。稜間は無文である。脚部の上下の透かし間に2条の沈線がある。脚端部は立ち上がり、断面三角形状を呈する。形態からTK 209型式に位置づけられる。高杯(4)は、調査開始前に埋葬施設上面で表採した脚部片で、上述の2点とは形態が異なる。小型で、透かしがなく、脚部中央には2条の沈線がある。形態からTK 217型式以降に位置づけられる。台付壺(5)は、土師器皿(8)と同様、玄門付近と墓道で同一個体とみられるものが出土した。いずれも脚台部片で、内外面ともにロクロナデで調整する。脚端部を区別する明瞭な屈曲で段をつくり、脚台中央には2条の沈線と、その上下に推定で四方向の長方形透かしがある。甕(6)は、体部片で、外面にタタキ、内面に当て具痕跡がある。玄門付近出土の耳環下方から1片のみ出土した。平瓶(7)は、把手と口縁部の一部が欠損するもののほぼ完形である。全体をロクロナデで調整する。口縁部はゆるやかに外反する。肩部は比較的強く屈曲し、明瞭な稜をもつ。形態から8世紀に位置づけられる。

(2) 周溝出土遺物 (図 249)

土師器には皿があるが、いずれも小片で図化できない。色調、焼成は玄門付近出土品(8)に似る。

須恵器杯B(13)は内外面ともにロクロナデで調整

する。底部は高台から中心に向けてやや上げ底となり中心付近でほぼ水平となる。壺(12)は、底部片で約1/2残存する。内外面ともにロクロナデで調整する。底部はほぼ水平であるが、内面中心が凸状を呈する。

これらの他に土馬(14)の脚部片、丸瓦(15)、鉄釘3片がある。15はやや軟質焼成で、内外面ともに黒褐色を呈する。外面ナデ、内面に布目が残る。

IV. 赤田1号墳の復原(図250)

赤田1号墳は不時発見のため、構造について不明な点が多いが、得られた情報から推定できる復原案を示す。

墳丘は、盛土が確認できず高さは不明である。残存した周溝の形状から復原すると、直径約14.5mの円墳と想定できる。古墳は丘陵頂部から若干下った南斜面地に作られ、周溝は古墳の背後を半周程度めぐっていたと推定できる。古墳時代後期～終末期(6世紀後半～7世紀)の丘陵上に築造される古墳は、墳丘背面に高まりを残して丘陵をカットし、南面する墳丘を築造することが多い。赤田1号墳も背面カットによって周溝を掘削し、削り出した地山に盛土して墳丘を構築したと考えられる。

玄室は、左側壁のみ残存しており、全体の復原は困難である。仮に復原を試みるとすれば、片側の袖部が約0.4m、陶棺の幅が約0.7mで、同時期の赤田横穴3・4号墓の墓道の幅が約0.9mであることから、この幅があれば陶棺の搬入が可能である。これを考慮し、主軸で折り返して玄室規模を復原すると、長さ約2.8m、幅約1.7mとなる。この場合、陶棺は玄室主軸に平行し

て北寄りに安置したことになる。

墓道は、石室構築と同時に盛土で構築する。玄門との接続箇所に石材の遺存や抜き取り痕跡が認められないため、羨道は当初からなかった可能性が高い。

以上の点から、埋葬施設および墳丘の構築は、①丘陵尾根の南斜面を削り込んで周溝を掘削し、墳丘の基底をつくる、②掘方を掘削し玄室石材を積みながら裏込め土をいれる、③裏込め作業と同時に玄室前面に墓道を盛土で構築する、④側壁の上に天井石をのせて、盛土で墳丘を構築する、という工程を復原できる。

埋葬は副葬品の配置と内容からみて2度行われた可能性が高い。初葬は陶棺の埋葬で、陶棺に接する位置から出土した須恵器がTK209型式であることから、7世紀初頭に位置づけられる。追葬の可能性を示すのは、玄門付近で出土した耳環2点である。陶棺内からも1点出土しているが、これとはつくりには差異がある。2点の耳環は形状等を含めて酷似するため、1対のものだと判断できる。また、表採ではあるが、埋葬施設上面から、7世紀前半～中頃に位置づけられる須恵器高杯(4)が出土しているため、陶棺埋葬後に追葬が1度行われたと考えられる。

また、玄室内からは8世紀の平瓶・土師器皿が出土しており、埋葬終了後にも先祖を祀る祭祀行為が行われていた可能性が高い。時期の判別できる周溝出土遺物は全て8世紀のもので、上層の暗褐色土から出土した。墳丘周辺でも祭祀が行われたことを示唆する。(村瀬 陸)

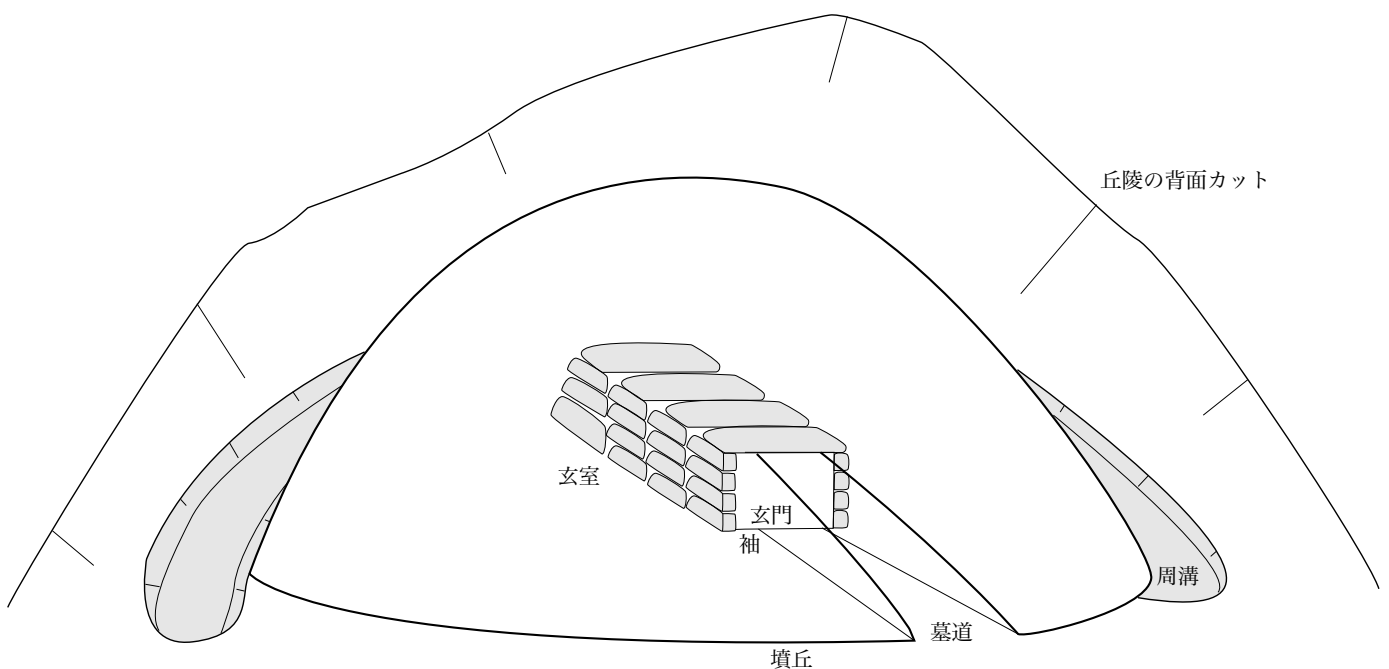


図250 赤田1号墳 復原模式図

第V章 科学分析と資料調査

第1節 赤田横穴墓群・赤田1号墳出土耳環の材質および構造調査

I. はじめに

平成22・23年実施の赤田横穴墓群、平成26年実施の赤田1号墳における発掘調査から11点の耳環が出土した。主に金属製である古墳時代の耳環では、用いられている材質が多様であり、無垢の材質からなるものや複雑な層構造による装飾が施されるものが存在する。

ここでは、赤田横穴墓群・赤田1号墳から出土した耳環に対してデジタルマイクロスコープ、X線透過撮影を用いた観察的手法および蛍光X線分析(XRF)による分析的手法による非破壊での調査をおこない、耳環の材質と構造について検討した結果について報告する。

II. 対象資料および調査方法

1. 対象資料

調査対象とした資料は奈良市赤田横穴墓群・赤田1号墳から出土した11点の耳環である(PL.60-1)。PL.60-1にはXRFによる測定箇所も記載した。資料の識別番号は奈良市教育委員会が設定している遺物番号に準拠し、表4にそれぞれの資料の遺構番号、遺物番号および出土位置を記載した。

2. 調査方法

耳環の表面状態を肉眼で観察し、さらに細部の状態についてデジタルマイクロスコープ(HIROX社製KH-7700)を用いて観察した。観察では遺物の表面の状態、表層および下層との色調の差異などに着目した。また、耳環の内部構造を確認するためX線透過撮影を実施した。X線透過撮影装置はYXLON社製MGC41を用い、画像化は富士フィルム社製AC-7 HR systemを用いた。また、XRFには日本電子社製JSX-3100R IIを使用した。X線透過撮影およびXRFの測定条件を表5に示す。X線の測定箇所は観察結果に基づいて、色調および表面状態が異なる箇所を設定した(PL.60-1)。

III. 結果および考察

各資料のX線透過撮影像、ならびに各資料の状態と測定箇所から検出された元素の一覧をそれぞれPL.60-2、表4に示す。これらの結果から考えられる各資料の特徴を材質、構造が類似した資料ごとに以下に記す。なお、近年、耳環の材質、構造に関する自然科学的な研究が蓄積されており、耳環の構造は無垢、芯を持つもの(中実)、芯を持たないもの(中空)に分類され、さらにその表面には鍍金などの装飾を施す場合があることが報告

されている^{1) 2)}。本稿において耳環の各部位は1997年に渡辺智恵美により提唱された名称に準拠した¹⁾。

1号墳出土 No.62、63、64、3号墓出土 No. 7、5号墓北陶棺 No. 1、9 これらの資料は材質および構造の観点において類似した特徴が認められた。ただし、5号墓北陶棺 No. 1、No. 9は芯の径がやや細い特徴を有する。これらの資料では芯と考えられる緑色の物質の上部に金色あるいは白銀色を呈した厚みがある層が観察された(PL.61-1)。X線透過撮影像では、耳環内部においてもX線の透過性が極めて低いこと、表面においては透過性が高い薄い層が認められた。XRFでは金色部において、金(Au)および銀(Ag)、下層の緑色部においては銅(Cu)が顕著に検出された。したがって、耳環は中実に分類され、芯の材質は主に銅から成る物質であり、その上層に金および銀からなる合金の層が存在すると考えられる。黄色みの強いNo.63などにおいては金の検出強度が高いのに対し、白銀色を帯びたNo.62においては金に加えて銀が顕著に検出されることから、色調の差異は金と銀の比率に由来すると考えられる。これらの資料の接面では、金色層がたたみ込まれていることが観察されており(PL.61-2)、芯に対して厚みを持った金色層が巻かれていると考えられる。表面の金色部において水銀が検出されないことから、金アマルガムによる鍍金が施されている可能性は低いと考えられる。

5号墓南陶棺出土 No.56、57、58 5号墓南陶棺より出土したNo.56、No.58は芯と考えられる緑色物質の上部に厚みを有する銀色層が存在し、さらにその上層に金色を呈する極めて薄い層が存在する3層の構造を有することが観察された(PL.61-3)。また、接面においては観察できる部分で折りたたんだ痕跡は認められず、平坦な状態であることが観察された。X線透過撮影像では、耳環内部においても密度が高いこと、表層にX線の透過性が低い極めて薄い層が存在することが観察された。したがって、耳環は中実であり、表面の密度の高い層は銀色層に由来すると考えられる。XRFでは緑色部において銅、銀色層においては銀が顕著に検出され、金色層においては銀に加えて金および水銀が検出される傾向が認められた(PL.61-4、PL.61-5)。したがって、銅からなる芯の上層に、銀から構成される厚みのある層

表4 各資料の特徴およびXRF測定結果

遺構番号	遺物番号	出土位置	観察的手法による所見	XRF 測定箇所	測定箇所の特徴	検出元素										
						P	Cl	Ca	Fe	Cu	As	Br	Ag	Au	Hg	Pb
1号墳	No.62 (図 249-9)	陶棺内	緑色の芯に銀色の板が巻かれている。 接面はたたみ込んだ状態。	No.62_1	金色を呈する箇所	-	-	-	-	+	-	-	++	++	-	-
				No.62_2	金色を呈する箇所	-	-	-	-	+	-	-	++	++	-	-
1号墳	No.63 (図 249-11)	玄門東側	緑色の芯に金色の板が巻かれている。 接面はたたみ込んだ状態。	No.63_1	金色を呈する箇所	-	-	-	+	+	-	-	+	++	-	-
				No.63_2	金色層の下層で緑色を呈する箇所	-	-	-	+	++	-	-	+	++	-	-
1号墳	No.64 (図 249-10)	玄門西側	緑色の芯に金色の板が巻かれている。 接面はたたみ込んだ状態。	No.64_1	金色を呈する箇所	-	-	-	+	+	-	-	+	++	-	-
				No.64_2	金色層の下層の緑色を呈する箇所	-	+	+	+	++	-	-	+	++	-	-
3号墓	No. 7 (図 69-1)	陶棺脚内	緑色の芯に金色の板が巻かれている。 接面はたたみ込んだ状態。	No.7_1	金色を呈する箇所	-	+	+	+	+	-	+	+	++	-	-
				No.7_2	金色層が剥離した緑色部	-	+	-	+	++	-	-	-	-	-	-
4号墓	No. 9 (図 87-1)	玄室床面直上	緑色の芯の上層に金色の装飾が認められる。接面は平坦。	No.9_1	金色を呈する箇所	-	+	-	+	+	-	-	++	++	+	-
				No.9_2	金色層が剥離した緑色部	-	+	-	+	++	+	-	-	-	-	-
5号墓	No. 1 (図 147-25)	北陶棺内	緑色の芯に金色の板が巻かれている。 接面はたたみ込んだ状態。	No.1_1	金色を呈する箇所	-	+	-	+	+	-	-	+	++	-	-
				No.1_2	金色を呈する箇所	-	+	-	+	+	-	-	+	++	-	-
5号墓	No. 9 (図 147-26)	北陶棺内	緑色の芯に金色の板が巻かれている。 接面はたたみ込んだ状態。	No.9_1	金色を呈する箇所	-	+	-	-	+	-	-	+	++	-	-
				No.9_2	やや黒みを帯びた金色を呈する箇所	-	-	-	+	+	-	+	+	++	-	-
5号墓	No.56 (図 148-7)	南陶棺内	芯に銀色の板が中間層として存在し、 その上層に極めて薄い金色層が存在。 接面は観察できる部分で平坦。	No.56_1	やや黒みを帯びた金色を呈する箇所	-	-	-	-	+	-	-	++	++	+	-
				No.56_2	金色層が剥離した灰色部	-	+	-	-	-	-	+	++	+	+	-
				No.56_3	金色を呈する箇所	-	+	-	-	-	-	-	++	++	+	-
				No.56_4	金色層の剥離箇所	-	+	-	-	-	-	+	++	+	+	-
5号墓	No.57 (図 148-9)	南陶前棺内	芯に銀色の板が中間層として存在し、 その上層に極めて薄い金色層が存在。 接面の状態は不明	No.57_1	銀色を呈する箇所	-	+	-	-	+	+	++	++	+	+	+
				No.57_2	黒色を呈する箇所	-	+	-	-	+	+	++	++	-	-	-
				No.57_3	表層の銀色層が剥離した箇所	-	+	-	+	+	+	-	-	-	-	+
				No.57_4	緑色を呈した箇所	-	+	-	-	++	-	++	++	+	+	+
5号墓	No.58 (図 148-8)	南陶棺内	芯に銀色の板が中間層として存在し、 その上層に極めて薄い金色層が存在。 接面は観察できる部分で平坦。	No.58_1	銀色を呈する箇所	-	-	-	-	+	-	-	++	-	-	-
				No.58_2	やや黒みを帯びた金色を呈する箇所	-	+	-	-	+	-	-	++	+	+	-
				No.58_3	金色を呈する箇所	-	+	-	-	+	-	+	++	-	-	-
				No.58_4	薄い金色層が剥離した箇所	-	+	-	-	+	-	-	++	+	+	-
9号墓	No. 2 (図 235-1)	陶棺内	銅芯の表面に金色の装飾が施されている。 接面は平坦。	No.2_1	金色層の上部の緑色の箇所	+	+	+	+	++	+	-	+	+	+	-
				No.2_2	金色層が剥離した黒色の箇所	-	+	+	+	++	+	-	+	+	-	-

-は検出限界以下、+は検出、++は顕著に検出したことを示す。

表5 X線透過撮影およびXRFの測定条件

分析法	X線透過撮影	蛍光X線分析
管球	タングステン (W)	ロジウム (Rh)
管電圧および管電流	220 kV, 3mA	50 kV, 自動 (デッドタイムが最適な値)
X線照射径	φ 1 mm	φ 1 mm
測定時間	60 秒	100 秒

が存在し、その表面に金アマルガムによる鍍金が施されていると推察される。

また、5号墓南陶棺より出土したNo.57においても同様に芯となる緑色部の上層に、銀板層、さらにその上層に金アマルガムによる鍍金層が観察された。ただし、XRFの結果、芯部においては銅に加えてわずかにヒ素(As)および鉛(Pb)が検出されており、芯の材質はNo.56およびNo.58と異なる特徴を有する。なお、接

面の状態については腐食生成物の影響のため、観察出来なかった。

4号墓出土No. 9、9号墓出土No. 2 観察およびX線透過撮影の結果から、これらの資料は中実であり、表層に金色の層が存在すると考えられる。また、接面は平坦であり、折りたたんだ痕跡は認められなかった(PL.61-8)。XRFでは、No. 2およびNo. 9ともに芯部分は銅およびヒ素が検出されており、ヒ素を含む銅が

芯材と考えられる。金色部において銀、金および水銀が検出されていることを考慮すると、耳環の表層において金アマルガムによる鍍金が施されているものと考えられる。ただし、5号墓南陶棺出土のNo.56、57、58のように金メッキ層の下層に銀の板からなる層が存在するかについては、資料の腐食の影響により特定出来なかった。

4. まとめ

赤田横穴墓群・赤田1号墳より出土した耳環に対し、X線透過撮影およびXRFを用いて、その材質および構造について検討をおこなった。その結果、調査資料には下記の特徴が認められた。

- (1) 調査対象資料はすべて中実である。
- (2) 1号墳出土No.62、63、64、3号墓出土No.7、5号墓北陶棺出土No.1、9は不純物の少ない銅芯に対して金および銀の合金から成る板を巻きつけた資料であり、界面は折り曲げた状態を示す。
- (3) 5号墓南陶棺出土No.56、57、58は不純物の少

ない銅芯の上層に銀製の板が存在し、さらに金アマルガムによる鍍金が施された三層構造である。ただし、No.57の芯はヒ素および鉛をわずかに含んだ銅が用いられている。これらの資料の界面は観察できる部分が平坦である。

- (4) 4号墓出土No.9、9号墓出土No.2はヒ素を含む銅芯が用いられており、表層には金アマルガムによる鍍金が施されている。ただし、中間層の存在については腐食の影響により判断が困難であった。これらの資料は界面が平坦である。

(柳田明進 奥山誠義)

引用文献

- 1) 渡辺智恵美 (1997) - 耳環小考察—制作技法、材質からみた分類 -、元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌、pp.73-83
- 2) 渡辺智恵美、鳥越俊行 (2010) 自然科学的手法を応用した耳環の調査、平成21年度保存科学研究集要旨集、奈良文化財研究所、pp.73-74

第2節 赤田横穴墓群・赤田1号墳出土陶棺片彩色顔料の調査

1. はじめに

赤田横穴墓群・赤田1号墳は、奈良市西大寺赤田町に所在する。平成22年度以降の調査により複数の陶棺が出土した。そのうち、赤田横穴墓群3号墓ならびに5号墓、7号墓、9号墓、赤田1号墳出土陶棺それぞれには、赤・黒・緑など顔料を用いた彩色が施されている可能性が考えられた。赤田横穴墓群・赤田1号墳が作られた当時利用されていた顔料には、赤色はベンガラや朱、緑色は緑青や緑土、黒色は墨やマンガンなどが知られている¹⁾。本稿では、これらの陶棺に彩色された材料を調査した結果を報告する。

II. 資料

調査の対象とした資料は、赤田横穴墓群3号墓、5号墓、7号墓、9号墓、ならびに赤田1号墳から出土した陶棺片である。資料と彩色については、表6に記載した。

III. 方法

調査の方法は、観察と科学分析であった。観察は、実体顕微鏡またはデジタルマイクロスコープ (HIROX KH-7700)、走査電子顕微鏡 (SEM ; JEOL JSM-5400LV) を用いた。科学分析は、SEM付帯の元素分析装置 (SEM-EDS) による元素分析、粉末X線回折 (XRD)、赤外分光分析 (FT-IR) を行った。文化財の科学分析において、蛍光X線分析 (XRF) は、非破壊分析が可能で

あることから有用であるが、元素情報しか得られないというデメリットがあり、顔料の同定にはXRFのみでは限界がある。そのため赤田横穴墓群出土資料については、奈良市埋蔵文化財調査センターの了解を得て、若干の試料採取を行い、各種の分析を行った。したがって、分析手法によっては測定試料が不足し、実施できなかった方法があったことをあらかじめお断りしておく。

粉末X線回折は、卓上粉末X線回折装置 (Rigaku MiniFlex II、以下DT-XRD) と全自動水平X線回折装置 (Rigaku SmartLab、以下ND-XRD) を用いた。赤外分光分析は、FT-IR ATR (PerkinElmer Spectrum100+Universal ATR、以下ATR)、光音響赤外分光分析 (PerkinElmer Spectrum100 + Gasera PA-301、以下PA-FT-IR) を用いた。各測定の条件は表7、8のとおりである。

IV. 結果

1. 観察結果

肉眼観察及び実体顕微鏡あるいはデジタルマイクロスコープによる観察を行った。3号墓資料Aにおいては赤色と緑色、黒色の色彩が確認でき、3号墓資料Bには赤色と緑色の色彩が確認できた。3号墓資料Cにおいては緑色のみの色彩が確認できた。赤色部分において、金属光沢を持つ鮮血色の粒子の集合が観察され、緑色部

表6 調査資料と彩色

資料	彩色	備考
3号墓陶棺 A	赤色、緑色、黒色	
3号墓陶棺 B	緑色	4号墓から出土
3号墓陶棺 C	緑色	8号墓から出土
5号墓陶棺 (北・南棺)	赤色	
7号墓陶棺	赤色	
9号墓陶棺	黒色	
1号墳陶棺	緑色	

表7 XRD 測定条件

	管電圧・管電流	走査軸	走査範囲	走査速度
DT-XRD	30kV-15mA	2θ / θ	最大 0-90°	0.5deg/min または、1deg/min
ND-XRD	40KV-40mA	2θ / θ	5-90°	2deg/min

表8 FT-IR 測定条件

	測定波長領域 (cm ⁻¹)	分解能 (cm ⁻¹)	積算回数 (回)
ATR	4000-380	4	64
PA FT-IR	4000-450	8	64

分においては光沢のない淡い色彩の微細粒子の集合が観察された。また、黒色の色彩らしき部分も観察されたが、粒子などは確認できず非常に細かな物質が一様に分布しており、顔料であるか明確な判断はできなかった。

5号墓資料は赤色の色彩が確認され、金属光沢を持つ鮮血色の粒子の集合が観察された。7号墓資料は赤色の色彩が確認できた。実体顕微鏡による観察において、赤色部分では金属光沢を持つ粒子の集合が確認された。9号墓資料では、黒色の色彩らしき部分が確認されたが、3号墓の資料同様に、顔料が塗布されている様子は確認できず、非常に細かな物質が一様に分布している状態であった。1号墳資料では緑色の色彩が確認でき、光沢のない淡い色彩の微細粒子の分布が観察された。

さらに一部の資料について、SEM 観察および SEM-EDS を行った。SEM 写真を図 251 に示し、SEM-EDS の結果を PL.62-1 に示す。SEM 観察の結果、3号墓資料 A・B の赤色部分は、長さ 10 μm 前後、径 2 μm ほどの管状 (パイプ状) 粒子が確認された。一方、5号墓資料及び 7号墓資料の赤色部分では、管状 (パイプ状) 粒子は確認できず、1 μm ~ 10 μm の大きさの不定形粒子が確認された。3号墓資料 (A-C) の緑色

は、襞状あるいは層状の構造が観察された。SEM-EDS の結果、陶棺に彩色された顔料は、色彩ごとに共通した傾向を示した。赤色 (3号墓資料 A 及び 5号墓資料、7号墓資料) は、鉄 (Fe)、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) を検出した。Fe が顕著であったことから、Fe を主成分とする酸化鉄系の顔料、いわゆるベンガラと考えられる。さらに、3号墓資料 A・B の赤色顔料には管状 (パイプ状) の粒子が確認できたことから、パイプ状ベンガラと呼ばれる種類のベンガラと考えられる。緑色部分は、鉄 (Fe)、カリウム (K)、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg) を検出し、Fe と K が顕著であった。緑色の顔料には、銅 (Cu) を主成分とする緑青等と Cu を含まない緑土が挙げられる。赤田横穴墓群陶棺の緑色部分から、Cu は検出されなかった。このことから、赤田横穴墓群陶棺の緑色は銅を含まない「緑土」である可能性を示唆する結果が得られた。非銅系の緑色顔料である緑土を構成する鉱物は、主にセラドナイト (Celadonite; $K(Mg, Fe^{2+})(Fe^{3+}, Al)Si_4O_{10}(OH)_2$) や海緑石 (Glauconite; $K_{0.85}(Fe^{3+}, Al, Mg, Fe^{2+})_2(Si, Al)_4O_{10}(OH)_2$) である^{2),3)}。本資料は緑土である可能性が考えられるが、SEM-EDS のみからセラドナイトあるいは

海緑石のいずれかは同定できない。黒色部分（3号墓資料A及び9号墓資料）は顔料であるか定かではないが、鉄(Fe)、マンガン(Mn)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)を検出した。黒色部分は、胎土の分析結果と差異がなく、鉱物とは異なる物質である可能性が考えられる。

2. XRDの結果

観察及びSEM-EDSの結果を基に、XRDをおこなった。XRDの結果をPL.62-2・PL.63に示した。3号墓資料A・Bおよび5号（北棺）墓資料の赤色部分は、石英(Quartz)と赤鉄鉱(α -Fe₂O₃)の回折パターンに一致した。3号墓資料A・Bおよび1号墳資料の緑色部分は、セラドナイトまたは海緑石に類似した回折パターンを得た。全資料のX線回折プロファイルは得ていないが、赤色顔料は、SEM観察やSEM-EDS結果およびXRDの結果から、酸化鉄を主成分とするベンガラである。また、緑色顔料はセラドナイトまたは海緑石と考えられる。

3. FT-IRの結果

先述の分析で同定が困難であった緑土について、FT-IRを用いて鉱物の同定を試みた。ATRでは、採取試料からさらに顕微鏡下で緑色粒子を選別し、それらを測定に供した。一方、PA FT-IRは緑色顔料が付着した小片(1~2mm大)を、粉碎など前処理せずそのまま測定した。測定結果をPL.64-1及び-2に示す。参考のため、セラドナイトと海緑石のIRスペクトルを併記した。ATRでは、3号墓資料A・B・Cの緑色顔料は、ほぼ同様なIRスペクトルを示し、同一の鉱物構成であると考えられる。これらのIRスペクトルにおいては、海緑石に見られる836cm⁻¹のピークが存在せず、セラドナイトとほぼ同様な傾向を示した。さらに非破壊測定が可能であるPA FT-IRの結果(PL.64-2)によれば、3号墓資料A・B・Cの緑色顔料は、ATR同様、ほぼ同じIRスペクトルを示し、同一の鉱物構成であると考えられる。Ligia Maria Morettoらの研究⁴⁾によれば、セラドナイトと海緑石はSi-Oに帰属される1000cm⁻¹付近のピークに差異が見られ、セラドナイトはピークが4本ほどに分離されるのに対し、海緑石はブロードになる、と指摘している。しかしながら、本試料ではATRおよびPA FT-IRいずれにおいても、セラドナイトあるいは海緑石と判断できる明確な差異は現れていない。ATRにおいて僅かに認められる差異より、3号墓A・B・Cおよび1号墳資料の緑色顔料は、セラドナイトである可能性が考えられる。

V. まとめ

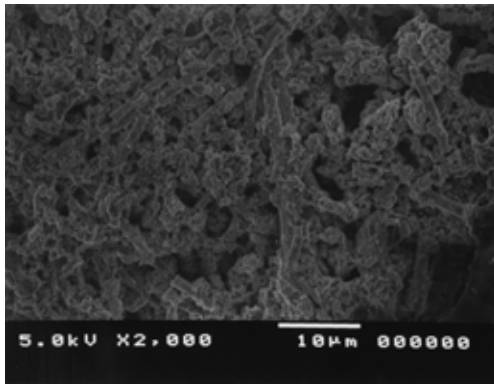
本調査により以下のことが明らかになった。

- (1) 3号墓資料A・Bの赤色部分は、長さ10 μ m前後、径2 μ m程度の管状(パイプ状)粒子が確認された。一方、5号墓資料および7号墓資料の赤色部分では、管状(パイプ状)粒子は確認できず、1 μ m~10 μ mの大きさの不定形粒子が確認された。
- (2) 赤色部分(3号墓資料Aならびに5号墓資料、7号墓資料)は、鉄(Fe)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)を検出し、XRDにおいて石英(Quartz)と赤鉄鉱(α -Fe₂O₃)のX線回折プロファイルを得た。赤色顔料は、Feを主成分とする酸化鉄系の顔料、いわゆるベンガラと考えられる。
- (3) 緑色部分はいずれの陶棺においても襞状あるいは層状の構造が観察された。
- (4) 緑色部分から、Cuは検出されなかった。緑色部分は銅を含まない緑土である可能性が示唆され、XRDにおいてセラドナイトまたは海緑石と考えられるX線回折プロファイルが得られた。
- (5) 緑色部分は、FT-IRの測定結果からセラドナイトあるいは海緑石と判断できる明確な差異は得られなかった。しかし、ATRにおいて僅かに認められる差異から、緑色顔料はセラドナイトである可能性が考えられる。
- (6) 黒色部分(3号墓資料Aおよび9号墓資料)では、鉄(Fe)、マンガン(Mn)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)を検出した。黒色部分の分析結果は、胎土部分の分析結果と差異がなく、鉱物とは異なる物質で煤などの可能性が考えられる。

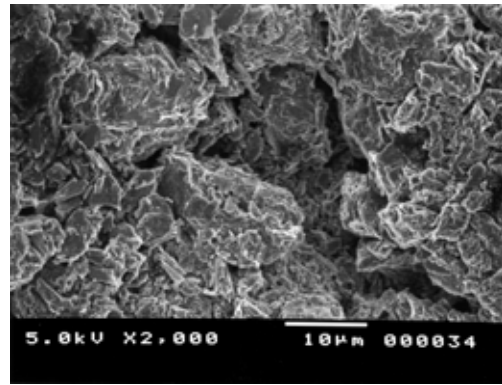
(奥山誠義 鶴 真美)

参考文献

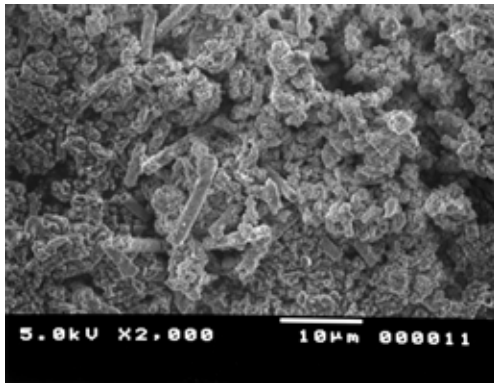
- 1) 成瀬正和、第2章文化財の素材と技法 第9節 顔料、文化財のための保存科学入門、角川書店(2002)
- 2) 成瀬正和、青谷上寺地遺跡出土の緑色顔料について、鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要3(2010) 1-6
- 3) 白水晴雄 粘土鉱物学-粘土科学の基礎- 朝倉書店(2012)
- 4) Ligia Maria Moretto, Emilio Francesco Orsega, Gian Antonio Mazzocchin, Spectroscopic methods for the analysis of celadonite and glauconite in Roman green wall paintings, Journal of Cultural Heritage 12(2011) 384-391



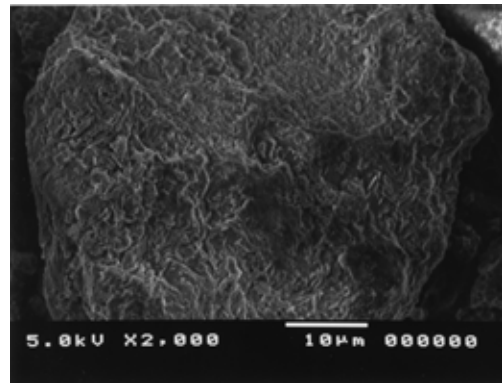
3号墓資料 A 赤色



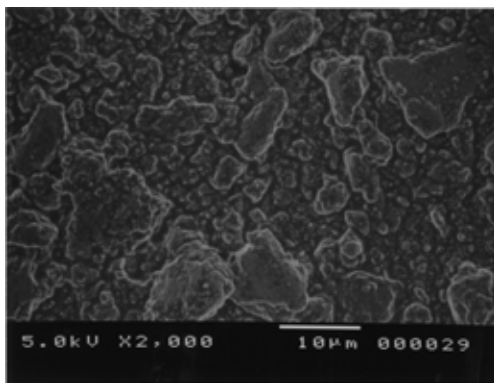
3号墓資料 A 緑色



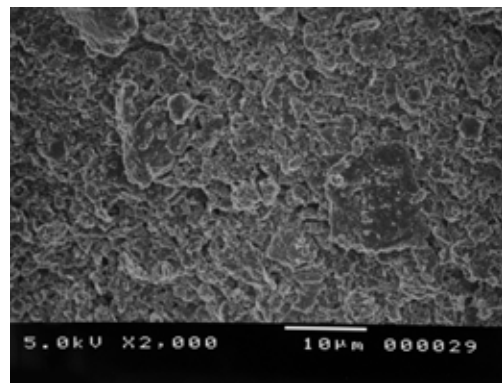
3号墓資料 B 赤色



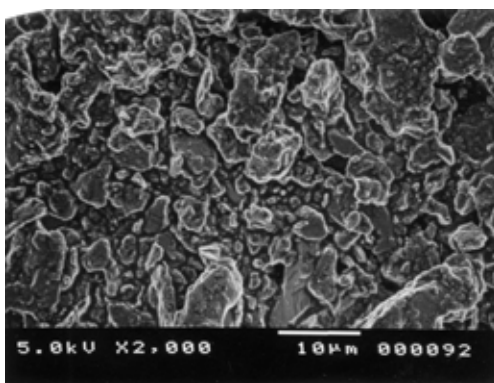
3号墓資料 B 緑色



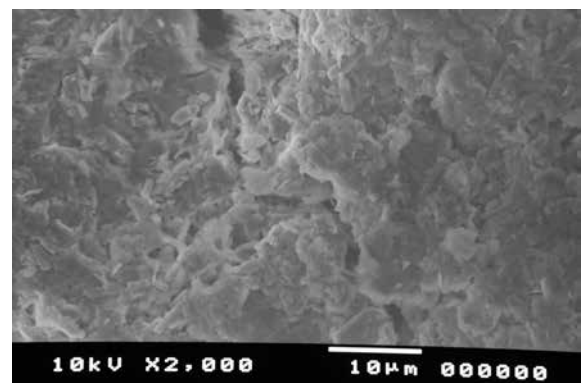
5号墓資料 (南陶棺) 赤色



5号墓資料 (北陶棺) 赤色



7号墓資料赤色



1号墳資料緑色

図 251 彩色部分の SEM 画像

第3節 赤田横穴墓群周辺出土の土師質陶棺資料

1. はじめに

明治の終わりから昭和の初めにかけて、奈良盆地の北西を画する低丘陵の一带から陶棺が多く出土し、報告された。奈良県内で昭和10年までに出土した陶棺を集める田村の一覧表(田村1935)をみると、18例のうち13例が現在の奈良市域から出土しており、赤田横穴墓群の周辺域に分布が集まる。この頃には、この地域が土師質陶棺の主要な分布域の一つであることがすでに周知されるようになっていた。現在知られる陶棺の出土場所は19地点を数え、合計49基以上の陶棺が出土している(表9)。概ね南北4.4km・東西3.2kmの範囲に分布し、赤田横穴墓群はその中央付近に位置する(図252)。秋篠・菅原の地名を残し土師氏の本拠地の一つと想定できる地域がこの範囲内に重複する点は、陶棺の製作集団や横穴墓の被葬者を考える上で重要な論拠を与えている。

ただし、これらの陶棺出土地については場所が不明瞭であったり、錯誤がみられたりして、十分な検討が行われていないのが現状である。また、ほとんど周知されていない出土資料も存在する。そこで、赤田横穴墓群の周辺域における詳細不明な陶棺出土地点や出土陶棺をいくつか追跡調査し、遺跡の位置や陶棺の概要を把握して今後の調査研究資料の一助としたい。

II. 出土地点と資料の調査

1. 新堂寺合葬古墳(図252-4)

小丘陵の先端を利用した直径16m・高さ2.7m前後の円墳と報告されている。しかし、調査時の写真図版をみると、南東方向に延びていく副葬土器群を追いかけて横掘りした様子がうかがえるので、横穴墓であった可能性は高いように思われる。

棺身がほぼ完形で出土した陶棺(A)と著しく破損し

表9 赤田横穴墓群周辺出土の陶棺(番号は図252と対応)

番号	遺跡名等	所在地	出土遺構等	出土数	保管施設等	文献		
1	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目556-1	1号墓	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			3号墓	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			4号墓	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			5号墓	2	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			7号墓	2	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			8号墓	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			9号墓	3	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
			西大寺新堂(赤田横穴墓群)	西大寺赤田町一丁目556-1	横穴墓	1	奈良国立博物館	『考古界』5-5
			西大寺赤田(赤田横穴墓群)	西大寺赤田町一丁目556-1	横穴墓	1	奈良国立博物館	『考古学雑誌』14-11
2	赤田1号墳	西大寺赤田町一丁目921	古墳	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	本報告書		
	秋篠三和町2丁目採集地	秋篠三和町2丁目	赤田1号墳?	1	行方不明	『東大阪市協会ニュース』5-3		
3	敷島町2丁目採集地	敷島町2丁目	不明	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市紀要1993		
4	新堂寺合葬古墳	あやめ池北3丁目	横穴墓?	2	橿原考古学研究所付属博物館	『奈良県抄報』2		
5	敷島町1丁目採集地	敷島町1丁目	不明	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	平成22年11月24日採集		
6	秋篠東山1180-20ほか	秋篠町1181付近	不明	3	行方不明	『大和考古学』5		
7	中山横穴墓	中山町1483、1482-7	横穴墓	3?	橿原考古学研究所	平成14年6月8日不時発見		
8	秋篠・山陵遺跡	奈良市秋篠町・山陵町	集落	2	奈良大学	奈良大学考古学研究室1998		
9	山陵孤塚1099-4	山陵町1099-4	横穴墓?	1	行方不明	『大和考古学』5		
10	津風呂陶棺古墳	津風呂町	横穴墓?	1	橿原考古学研究所付属博物館	『古墳調査集報』1		
11	山陵孤塚横穴墓群	山陵町孤塚1227-1	1号横穴	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市報告(昭和59年度)		
			2号横穴	2	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市報告(昭和59年度)		
			3号横穴	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市報告(昭和59年度)		
	山陵孤塚1227-2	山陵町孤塚1227-2	横穴墓?	1	行方不明	『大和考古学』5		
12	御陵前陶棺出土地	山陵町御陵前	横穴墓?	1	橿原考古学研究所付属博物館	『大和考古学』5		
			横穴墓?	1	行方不明	『考古学雑誌』14-11		
13	上畑陶棺出土地	山陵町上畑635番地	秋頭5号墳	1	行方不明	『考古学研究』2-2		
14	歌姫赤井谷横穴墓群	歌姫町赤井谷986-2	1号横穴墓	2	橿原考古学研究所付属博物館	『奈良県抄報』12		
15	平城京跡第207次調査地	西大寺栄町240-1	条坊側溝	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市報告(平成2年度)		
16	菅原東遺跡	横領町413ほか	集落・窯跡	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市紀要1993		
				1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市報告(平成12年度)		
17	平城京跡86年度-23調査地	宝来町94-1・95-1	整地層	1	奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市紀要1993		
18	宝来(中尾)横穴墓群	宝来4丁目31	横穴墓	2	橿原考古学研究所付属博物館	『大和考古資料目録』1		
				1	郡山高校(行方不明)	伏見町史・『考古学雑誌』14-5		
				1	行方不明	『考古学雑誌』14-5		
19	中町陶棺出土地	中町4992-12付近	横穴墓?	2	宗教法人大倭大本宮	『すきのお』第20号		

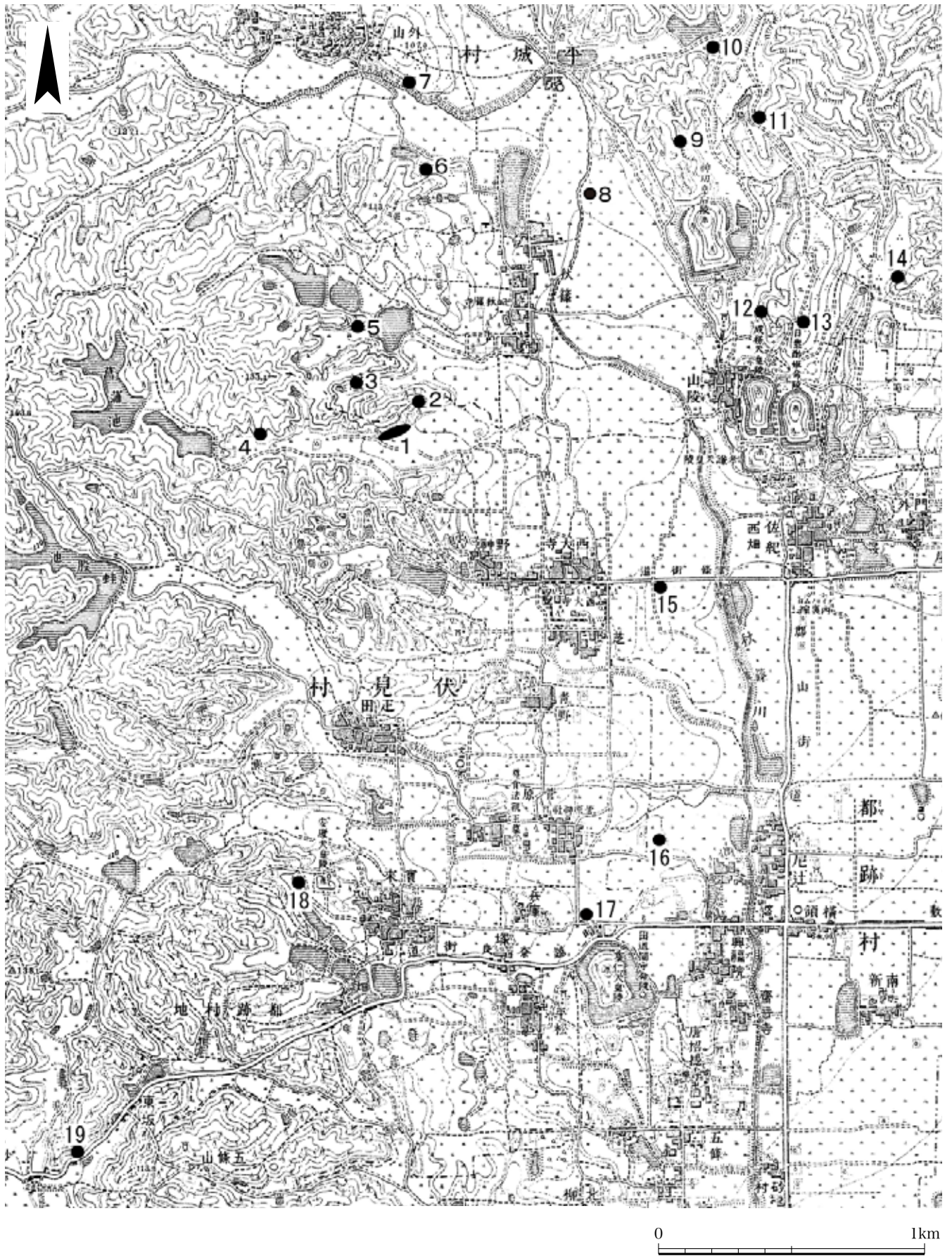


図 252 赤田横穴墓群周辺の陶棺出土地 (1/20,000)

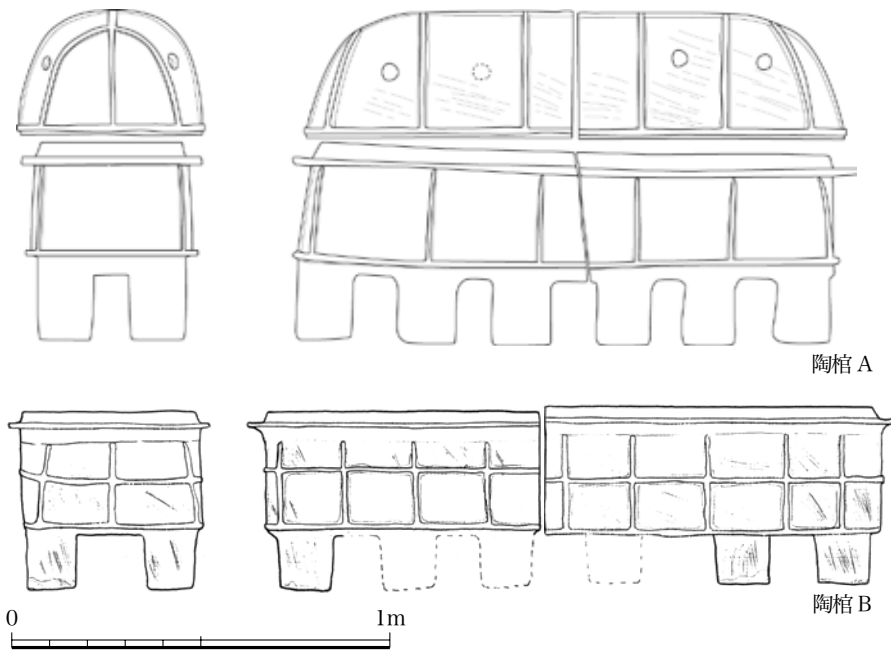


図 253 新堂寺合葬古墳出土陶棺 (1/20)

た陶棺 (B) の 2 基が埋葬されていた。ただし、報告されたのは陶棺 A のみで、陶棺 B の詳細は不明であった。そこで、榎原考古学研究所附属博物館でその資料を実見し、小片化した陶棺を接合して形状の確認を試みた。その結果、陶棺 A 棺蓋と陶棺 B 棺身の形状がほぼ判明したのでここにその概要を述べておきたい。ただし、陶棺 A 棺身は若干の破片資料しか実見できなかったため、その内容については発掘調査報告に基づく推定である。

新堂寺陶棺 A (図 253 上)

棺蓋 おおよその大きさは、全長 142cm、幅 50cm、高さ 33cm である。内法寸法は全長 138cm・幅 46cm・高さ 31cm ほどとなろう。外面の一部に赤色顔料を塗布した痕跡が残り、口縁部の一部に黒斑がみられる。

稜線突帯と口縁部突帯を貼り付けた後、長側面縦位突帯を 6 条貼り付けて長側面に左右 5 区画、短側面に左右 2 区画をつくる。両方の長側面に 4 つずつ合計 8 つの円形透孔をあける。透孔は長側面中央の区画を除いて配される。なお、透孔にはキノコ形の陶栓を装着したらしい。

切断面は糸切り後に一部ナデが行われている。口縁部端面に葉脈圧痕は認められない。内外面はナデ調整である。内面に藁縄状圧痕を確認できる。

棺身 おおよその大きさは、全長 152cm、幅 50cm、高さ 43cm 程度と推測される。周底突帯をめぐらせた後、両方の長側面に 6 条ずつの縦位突帯を貼り付けて長側面に左右 5 区画をつくる。出土状態の写真を見る限り、短側面には縦位突帯がない。内外面はナデ調整である。口

縁部の高さ 3～4 cm、蓋受けの幅 6 cm。口縁部内面に横方向の木目圧痕が認められる。

脚部には 6 行 2 列、合計 12 本の脚が取り付く。透孔はない。外面タテハケ調整、内面ナデ調整である。脚の大きさは底径 15cm・高さ 13cm。

新堂寺陶棺 B (図 253 下)

陶棺 A の棺蓋しか認められないので、陶棺 B には当初から棺蓋がなかったと思われる。

棺身 おおよその大きさは、全長 172cm、幅 54cm、高さ 47cm である。内法寸法は全長 157cm・幅 44cm・高さ 30cm ほどとなろう。やや偏った位置で 2 分割されており、それぞれの長さは 78cm と 94

cm である。内外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。口縁部の一部と脚底部に黒斑がみられる。

周底突帯と蓋受けの中間に横位突帯を 1 条めぐらせ、外面全体を上下 2 段に区画する。そして 20 条の縦位突帯を貼り付けて長側面に左右 8 列の区画、短側面に左右 2 列の区画をつくる。突帯は幅 1.5cm 前後で、板で押圧するためやや扁平となっている。内外面ともにナメハケ調整である。口縁部の高さ 3cm、蓋受けの幅 4～5cm。口縁部内面に横方向の木目圧痕が認められる。

脚部には 6 行 2 列、合計 12 本の脚が取り付く。透孔はない。内外面ともにタテハケ調整である。脚の大きさは底径 14cm 前後・高さ 13～15cm。

2. 敷島町 1 丁目採集地 (図 252 - 5)

平成 22 年 11 月 24 日に大和中央道建設予定地内を遺跡有無確認踏査したところ、東西方向の尾根南斜面地で土師質陶棺片 1 点を採集し

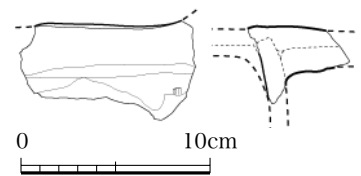


図 254 敷島町 1 丁目採集陶棺 (1/4)

た (図 254)。棺身の底部と脚の接合部分の一部である。残存長 9.1cm で、燈茶褐色を呈する。現在のところ未調査のみであり、遺跡の有無は不明。

3. 中山横穴墓 (図 252 - 7)

県道奈良精華線工事中の平成 14 年 6 月 8 日 (土) に遺物の発見があり、6 月 10 日 (月) にその通報があった。

奈良市埋蔵文化財調査センターと橿原考古学研究所の職員が現地へ赴き、多数の陶棺片と土器が寄せられた状態で放置してあるのを確認した(図255～260)。出土場所は中山町1483、1482-7で、東西方向に延びる丘陵の南斜面地にあたる。工事による切土面に横穴墓奥壁の一部とみられる痕跡が残っていたため、南に開口する横穴墓内に陶棺を埋葬したものと推定された。

出土品は橿原考古学研究所で保管することになり、平成14年6月17日付け奈土第172号で奈良県奈良土木事務所から遺跡発見通知が提出された。

出土品には土師質亀甲形陶棺と須恵器があり、橿原考

古学研究所で現在整理中である。須恵器はMT 85～TK 43型式の資料とみられる。

4. 秋篠町東山1180番地の20(図252-6)

この地番の土地は昭和28年に法務局が買収し、奈良少年院敷地に合筆されたため現在残っていない。その位置は少年院の北端である。院外北側には平城中学校との間に南北方向の丘陵西斜面地が今も認められ、竹林となっている(図263)。大正8年にこの地を開墾していたところ、亀甲形陶棺が須恵器埴1個と共に出土した。陶棺は身だけで、蓋を欠いていたという。「石室等を認めない土中から偶然発見」したという点から、横穴墓で



図255 中山横穴発見時の状況(南から)



図256 中山横穴発見時の状況(南東から)



図257 中山横穴の奥壁(南から)



図258 中山横穴出土遺物の状態(西から)



図259 中山横穴出土遺物の状態(北西から)



図260 中山横穴出土遺物の状態(南東から)

あった可能性が考えられる。なお、この周辺からは他に2つの陶棺が出土したという。1つはこの出土地点に続く場所、もう1つはここから東南へ1町（約109m）余りの場所であるが、詳細な位置はわからない。前者の陶棺の一部は平城尋常高等小学校に保存されていると田村は記すが、現在行方不明。後者の陶棺は身だけで中から直刀が出土したと言い、発見後直ちに奈良の古物商へ売られてしまった。

一つの丘陵地近辺から複数の陶棺が場所を違えて出土している点から考えれば、これらは一連の横穴墓群を形成していたのではないかと推測することもできよう。

5. 山陵町狐塚 1099 番地の4 (図252-9)

神功皇后陵の北方に連なる丘陵の東側斜面地で、同陵から北へ約250mの山林を畑地に開墾し耕作中の大正5・6年頃に亀甲形陶棺が出土した（田村1933）。地表下3・4尺から発掘され、須恵器高杯らしきものが1点あった。陶棺は土中に埋もれていただけで、周囲には何らの施設も認められなかったという。開墾前の山林には「何等の封土」も認められなかった点からすると、横穴墓であった可能性が推測できる。現在、出土地の丘陵裾の際まで宅地化されていて、本来の景観が著しく損なわれている（図261）。

6. 山陵町狐塚 1227 番地の2 (図252-11)

前述（5）の陶棺出土地から谷を挟んで東側の丘陵西斜面地で、大正5・6年頃に亀甲形陶棺が出土した（田村1933）。陶棺周囲には何らの施設も認められなかったらしく、これも横穴墓であった可能性が高い。なお、この陶棺は出土時に破壊された。

この出土地点は昭和59年に奈良市が調査したエバンズ邸（山陵町1227番地の1）の北北西約65mに位置する西向きの丘陵斜面地（図262）で、狐塚横穴墓群と一連の遺跡である可能性が考えられる。現在、出土地

の北隣まで宅地化している。

7. 山陵町御陵前 (図252-12)

後藤の陶棺集成（後藤1924）の中に、現在の奈良市山陵町御陵前から明治43年8月27日に陶棺が出土したという報告がある。地方廳報告と奈良帝室博物館（現在の奈良国立博物館）陳列品の実見に基づいて記載したものである。また、その前後に作成されたと思われる発掘地調査報告（東京帝室博物館1911）が東京国立博物館に残されている。

この明治43年出土陶棺（御陵前M43陶棺）は亀甲形陶棺で、棺蓋・棺身とも比較的よく残っている（図266）。棺蓋は全長200cm・幅65cm・高さ40.5cmである。稜線突帯と口縁部突帯を貼り付け、横位突帯を上寄りに1条めぐらせて外面全体を上下2段に区画する。そして、8条の長側面縦位突帯を貼り付けて長側面に左右7列の区画をつくる。短側面では下段にのみ短側面縦位突帯を貼り付け、左右4つの区画をさらにつくる。断面形状は半円形で、両方の長側面に4つずつ合計8つの方形透孔をあけている。切断面は糸切り後にナデている。内外面ナデ調整である。内面に藁縄状圧痕がよく残っている。外面には、赤色顔料の塗布と天井部の一部に黒斑が認められる。

棺身は、全長198cm・幅67.5cm・高さ54cmである。内法は、全長180cm・幅60cm・高さ33cm。周底突帯をめぐらせた後に縦位突帯を長側面に10条・短側面に2条貼り付けて、長側面に左右9区画・短側面に左右3区画をつくる。底部を鋸形に切断しており、切断面には糸切り痕跡が残る。6行3列合計18個の脚が取り付けが、欠損補修箇所が少なからず認められる。脚に透孔はない。脚外面をタテハケ調整する以外は、すべてナデ調整である。体部外面下半の隅に板押さえの痕跡がみえる。内外面に赤色顔料の塗布が認められる。



図261 山陵町1099番地4（北東から）



図262 山陵町1227番地2（南西から）



図263 秋篠町1180番地20の北側付近（西から）

後藤報告によれば、出土地点は「大字山陵より舊奈良街道字石畑に通ずる道を進むこと二三町（およそ 200～300 m）を横切り西北に神功皇后陵を望むところにある畑地」である。後に田村は「成務天皇陵の後方で大字山陵の氏神神社の前から奈良電鉄線路を超えて東行する道路を横切つて東行すると約一町（およそ 100 m）で阪道にかかるこの邊をナツタニと稱し左側は小さな谷間の小池で右側には丘陵の西麓を開墾した竹藪があ



図 264 山陵町御陵前の陶棺出土地

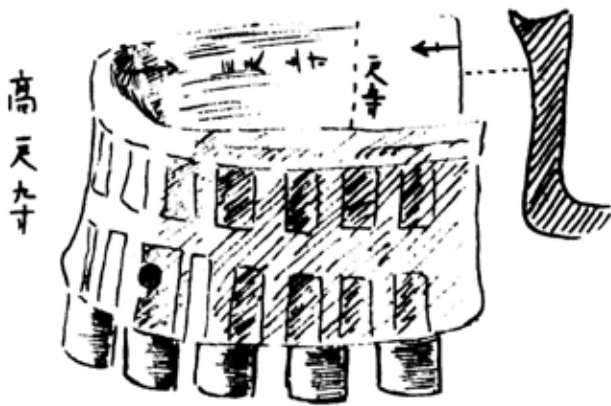


図 265 明治 44 年出土の御陵前陶棺絵図

る。この竹藪の邊を開墾中出土したもので現在ではただこのあたりと云うに過ぎない」と現状を述べる（田村 1933）。その位置は、図 252 に示した付近であり、発掘地調査報告には「西口虎吉所有地内字上畑」と記されている。

墳丘や石室の有無は伝えられていない。発掘地調査報告によれば、出土場所は「上部ヨリ約九尺許ハ砂利ト粘土トノ混合層ニシテ地質学上ノ所謂第三紀砂質壤土ト称スルモノナラム。其下六寸許ハ粘土ノミニシテ粘土ノ下一尺許砂利層アリ其下二寸許又砂利ト粘土ノ混合セル地層アリテ陶棺ハ其下ヨリ出タル」（図 264）という。周辺での陶棺出土遺跡例や出土地点の地形から推察すれば、横穴墓であったと考えて大過ないだろう。

さらに、ここからわずか 1 間（約 1.8 m）を隔てるだけの近接した場所から明治 44 年 2 月 30 日にもう 1 基の亀甲形陶棺（御陵前 M 44 陶棺）が出土した。発掘者の庭中に大破しつつも保存してあったが、後藤報告の時点ですでに所在不明となっていたようである。蓋を欠失し、身は長さ 7 尺 2 寸（約 216 cm）・幅 2 尺 2 寸（約 66 cm）・高さ 1 尺 9 寸（約 57 cm）で 10 行 3 列の脚が取り付いていたという。この陶棺の絵図が発掘地調査報告に描かれており、身短側面に円形透孔があるなどの点で赤田 5 号墓奥棺に形状がよく似ているように思われる（図 265）。

奈良国立博物館蔵品の資料調査に伺ったところ、御陵前 M43 陶棺は奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で公借され、秋篠町出土陶棺として現在保管されていることが判明した。御陵前は山陵町地内にあり秋篠町ではないため、現在誤った出土地点の名称が付与されていることになる。奈良国立博物館の館蔵品カードに「採取地明治四十三年八月二十七日奈良縣生駒郡平城村大字秋篠字御陵前」という記載があり、出土年月日は合致している

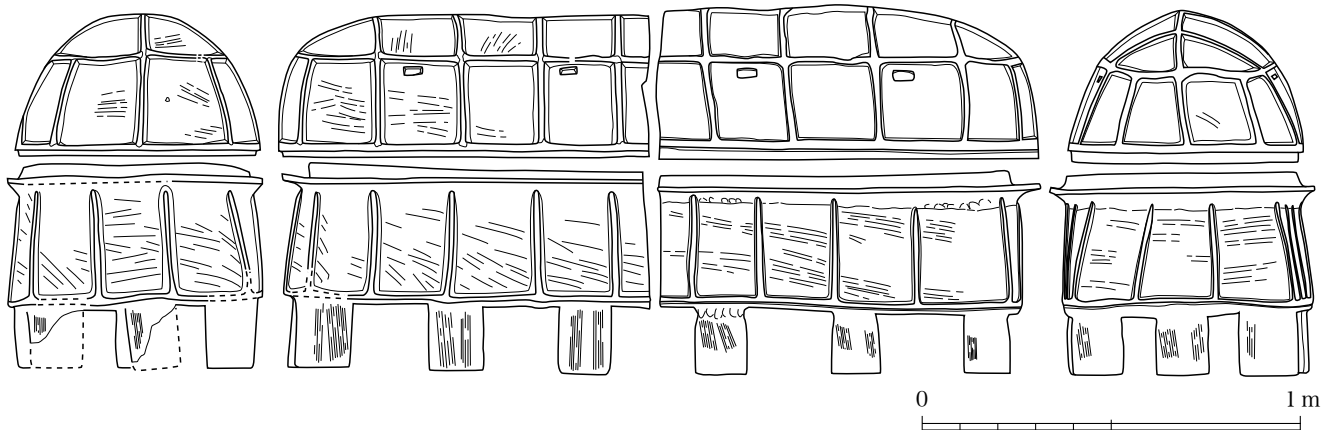


図 266 御陵前 M43 陶棺 (1/20)

から、大字山陵を秋篠に誤記しているとみて間違いない。また、同じ内容の誤記が森本六爾関係資料集の野帳1の中にも認められる。御陵前 M43 陶棺を赤田 M 37 陶棺とともに実見し、簡単な図 (No. 223 ~ 226) と出土した場所・年月 (No. 227) を付記した内容のページがある。ここに「秋篠字御陵前」と記されている。御陵前陶棺の蓋身ともに短側面の突帯数に誤りがある点から、短側面が見えにくいような環境で博物館展示品をメモした可能性があり、この時点 (大正 13 年頃) で出土地情報が誤っていたことがわかる。

以上の点から考えて、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館へ貸し出す際に、この誤記が原因で秋篠町出土にすり替わった可能性が高いと思われる。

なお、御陵前 M43 陶棺には、陶器 60 余個の副葬品が伴出したというが、現在は須恵器壺 2 点・杯蓋 2 点と陶棺脚部 3 点 (脚部高 16 ~ 17cm・底径 13 ~ 13.5cm) が合わせて収蔵されているにすぎない。

8. 上畑陶棺出土地 (図 252 - 13)

昭和 2 年 10 月中旬、畑地の開墾中に発見され、大高常彦が「大和國平城村出土の陶棺」として報告 (大高 1928) し、出土地の地番 (平城村大字山陵小字上畑 635 番地) は田村が後に記した (田村 1933)。亀甲形陶棺の身 1 基が南北方向に位置し、その南端に置かれた 1 個の石材上から須恵器杯蓋 2 個が出土したという。陶棺身には縦方向の突帯を長側面に 7 条、短側面に 1 条貼付け、6 行 2 列の脚が取り付く。全長約 170cm、高さ約 42.6cm (脚部高約 12.6cm を含む) で、脚部に透孔を認めない。昭和 8 年の時点ですでに売却され、行方不明となっている。

出土地は、佐紀石塚山古墳 (現成務天皇陵) の後円部から東北へ向かう道路を 250 m ほど上った畑地である。大高の報告には陶棺出土地の丘陵東南部から家形埴輪と円筒埴輪が昭和 2 年に出土したことが付記されている。この丘陵上にかつて幾つかの古墳が存在したことを示すと推測できる。そこで関連性を想定できるのが、同丘陵

上に存在する秋頭古墳群である。奈良県全域の古墳を検分し明治 26 年に完成した『大和國古墳墓取調書』には、字秋頭に 10 基、字上畑に 3 基の古墳があったことが図示されているが、奈良大学考古学研究会が行った 1999 年の分布調査で確認できたのはわずか 4 基に過ぎない。多くの古墳が現在消滅しているが、『大和國古墳墓取調書』に記された各古墳の地番からおおよその位置は復元できる。それによると、字上畑所在の第 48 号古墳 (遺跡地図記載の秋頭 5 号墳) が 636 番地にあり、その規模は高さ 4 尺・根廻り 24 間である。現在 636 番地は消滅しているが、旧土地台帳によれば、昭和 6 年に無届開墾成功のため地目が山林から畑に変更され、同年 6 月 25 日に 635 番地へ合筆されたことがわかる。地籍図をみると、合筆前の 636 番地の位置は現在の 635 番地の北東隅に相当し、そこに第 48 号古墳がかつて存在したと推定できる。したがって、田村が陶棺出土地として記した 635 番地が昭和 8 年の時点で第 48 号古墳所在地であったことが判明する。昭和 2 年の畑地開墾中に陶棺を発見したという点は、旧土地台帳に記載された土地の履歴とも矛盾しないので、この陶棺は第 48 号古墳から出土したと考えて間違いないだろう。地表下約 5・6 寸という非常に浅い地点で見つかっているため、すでに墳丘の上部はかなり削平を受けていたと考えられる。この時点で大きな石材の露出も認められていないから、陶棺直葬ではなかったかと推察される。

陶棺と共伴して出土した須恵器は径 3 寸ほどの杯蓋 2 個で、径 5 分のつまみを有する点から 7 世紀前半 ~ 中頃の古墳とみられる。陶棺を埋葬する古墳の確認例は市内でも少なく、他に赤田 1 号墳を挙げ得るに過ぎない。

9. 歌姫赤井谷横穴 1 号墓 (図 252 - 14)

有蓋の陶棺 (A) と無蓋の陶棺 (B) の 2 基が出土したと報告されており、両者の棺身はほぼ同形同大である。今回、陶棺 B の熟覧と略測図の作成を行なった。一方、陶棺 A は橿原考古学研究所附属博物館に常設展示されているため、簡単な観察にとどめた。

陶棺 A

棺蓋 全長 214cm・幅 71cm・高さ 48cm である。稜線突帯と口縁部突帯を貼り付け、その間に 2 条の横位突帯をめぐらせて外面全体を上中下 3 段に区画する。長側面縦位突帯は中段から下段を一連の位置で貼り付けるが、上段では少しずれた位置に違えて一部が配

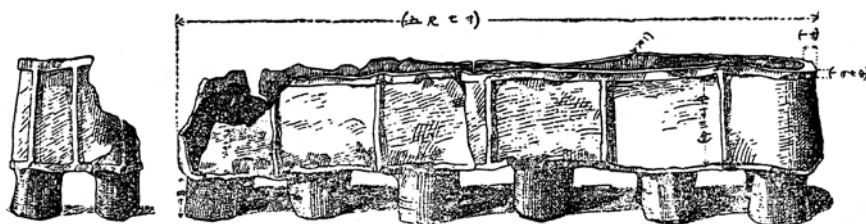


図 267 山陵町上畑陶棺 (1/20)

されている。長側面には縦位突帯を中段から下段に13条、上段に12条貼り付けてそれぞれ左右に12区画と11区画をつくる。短側面では上段に縦位突帯がなく、中～下段にのみ縦位突帯を貼り付ける。その縦位突帯と区画の数をみると、稜線突帯を挟んで左右に1条ずつ貼り付け各段は合計4区画となる。突帯は上面が板で押圧され、扁平な形状をなす。外面調整はナデである。

切断面が直線で、鍵形にならない。長側面の中段に4つつ合わせて8つの透孔がある。透孔は段をつけて穿孔され、上段が円形、下段が方形となっている。この形状は、おそらくキノコ形陶栓の形状に合致させるための工夫であろう。とすれば、この時点でキノコ形陶栓の製作を推認できる。

棺身 全長218cm・幅77cm・高さ60cmである。周底突帯と蓋受けの間に横位突帯を1条めぐらせ、外面全体を上下2段に区画する。長側面に14条の縦位突帯を貼り付けて各段に左右13区画をつくる。短側面には3条の縦位突帯を貼り付けて各段に左右4区画をつくる。突帯は上面が板で押圧され、扁平な形状をなす。外面調整はナデである。

蓋受け下部に沿って刺突孔列があり、その穿孔方向にある突帯上で棒状の圧痕が残る箇所がいくつか認められる。これは、長い棒のようなものを突き刺して刺突孔列が付けられたことを示している。また、刺突孔列のすぐ下に沿うような位置に横方向の木目圧痕が一部に残って

おり、これも製作時の痕跡と思われる。

脚は8行3列で円形透孔が2個一対あり、長側面外周に並ぶ脚の透孔の多くが長軸方向を向いて穿孔されている。また、蓋が載るために身内面全体を観察できないものの、破損した脚部内面で身底部に穿孔があるのを確認できたので、身底面の脚貼付位置に規則的な穿孔が行われていると思われる。

陶棺B (図268)

無蓋の陶棺と報告されているが、蓋の一部が出土していたことを今回確認できた。

棺蓋 短側面の破片がないため全形を復原できないが、概ね陶棺Aと同じ形状であったと思われる。口縁部突帯と2条の横位突帯で上中下3段に区画し、15～20cm間隔で縦位突帯を貼り付けて方格をつくる。下段の方格の上端隅に1区画あけて穿孔する2つの方形透孔がある。突帯は板による押圧のため扁平な形状となっている。

特徴的なのは、口縁部突帯の上下に2孔1対の小穿孔があり、40cmほどの間隔をあけて認められる点である。1対の小穿孔の間隔は3cm前後で、この間におさまるような横方向の細い板状圧痕が縦位突帯下端に残っている箇所がある。また、小穿孔には紐を通したような跡もみられる。このような痕跡から、口縁部外周に薄くて細い板状のものを巻き付けて紐で固定し、乾燥時に口縁部が自重などで広がり変形するのを防止していたのではないと思われる。赤田7号墓西陶棺蓋の口縁部外周に埋め

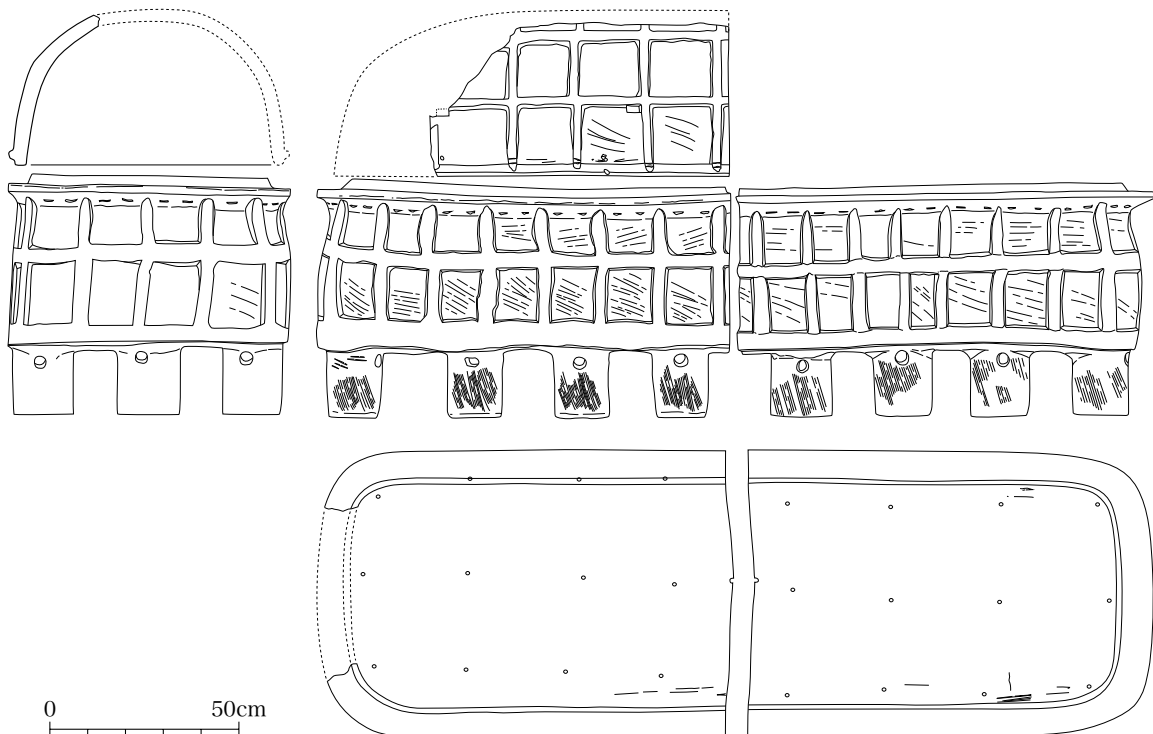


図268 歌姫赤井谷横穴出土の陶棺B (1/20)

込まれた藁も同様の目的で行われたと推測できるので、このような変形防止対策が他例にも行われていた可能性があり、今後注意を要する。

棺身 全長 217cm・幅 76cm・高さ 63cmである。内法寸法は全長 197cm・幅 59cm・高さ 40cmとなる。周底突帯と蓋受けの間に横位突帯を1条めぐらせ、外面全体を上下2段に区画する。長側面に16条の縦位突帯を貼り付けて各段に左右15区画をつくる。上下段で縦位突帯の位置を少し違える箇所がある。短側面には3条の縦位突帯を貼り付けて各段に左右4区画をつくる。突帯は上面が板で押圧され、扁平な形状をなす。外面調整はナデである。

蓋受け下部に沿って刺突孔列がある。突帯1区画に概ね2孔ずつ認められ、孔数が多い。身底面には、脚との接合箇所に1孔ずつ合計24の小穿孔が認められる。小穿孔は底部を貫通する。切断面には糸切り痕跡が明瞭に認められる。底部中央に糸を通すための小孔があり、そこを始点にして左右を切り分けたことがわかる。

脚は8行3列で、2個一対の円形透孔があく。短側面に面する脚は長軸方向、その他の長側面に面する脚は短軸方向に透孔を穿孔する。外から見えない中央列の脚はすべて長軸方向に穿孔している。

10. 平城京跡第207次調査地 (図252-15)

近鉄西大寺駅北出口前で実施した平城京跡第207次調査で、条坊側溝内から奈良時代の遺物とともに土師質陶棺片1点(図269)が出土している。口縁部から蓋受け部分にかけての棺身片で、残存長24.1cm・残存高13.7cmである。蓋受けの先端を欠失する。2条の縦位突帯が残る。器厚が2.6cm前後で厚く、赤田5号墓南棺例に似た大型の亀甲形陶棺の一部とみられる。

11. 宝来横穴墓 (図252-18)

大正13年の森本報告(森本1924)によれば、横穴墓中から4基並んで出土したいわゆる砲弾形陶棺のうち

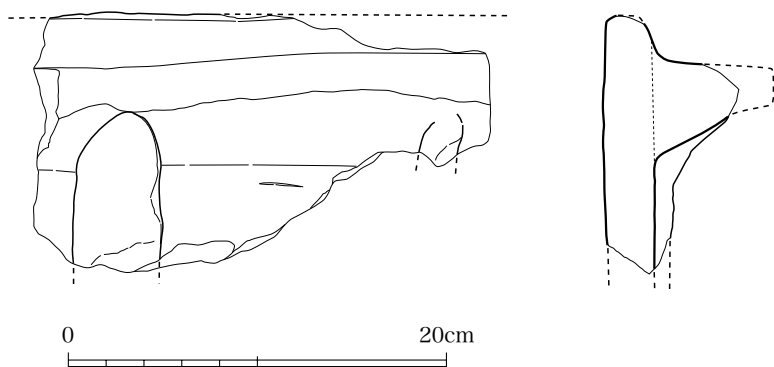


図269 平城京第207次調査出土陶棺(1/4)

郡山中学校(現郡山高校)所蔵品と木田榑吉所蔵品の2基の所在を確認できたが、残りの2基はすでに所在不明となっていた。そして、1981年発行の伏見町史編纂時には郡山高校所蔵品の再資料化が行われたのみで、木田榑吉所蔵品も所在不明であった。そのため、森本報告資料の2点以外は現存せず、橿原考古学研究所附属博物館収蔵品は郡山高校所蔵品とよく似ているために同一資料であると思い込んでいた。しかし、橿原考古学研究所附属博物館収蔵品を資料調査したところ、郡山高校所蔵品とは異なる資料であることがわかったとともに、木田榑吉所蔵品も森本六爾関係資料の中に現存し同博物館に保管されていることをご教示いただいた。

したがって、宝来横穴出土陶棺は現在3基が現存することになるが、残念ながら郡山高校所蔵品は行方不明となっていて今回実見することができなかった。そこで、これらの資料を・陶棺A(旧木田榑吉所蔵品)・陶棺B(郡山高校所蔵品)・陶棺C(橿原考古学研究所附属博物館収蔵品)と呼び分けて、その概要を次に記述する。

陶棺A (図270左)

森本の報告後に所在不明となっていたが、森本家で保管されていたことが判明した。陶棺を含む森本六爾関係資料が発見された際の経緯については、菅谷文則が『森本六爾関係資料集I』(財団法人由良大和古代文化研究協会ほか2011)の中で付記している。

全長81.5cm・底径及び最大径25cmの砲弾形を呈し、内外面はタテハケ調整である。中央上寄りに18cm四方の方形孔をへう切りであける。粘土円盤をつかって平底の底部とし、その外周に粘土を積み上げて上窄まりの円筒をつかっていき、頭頂部を最後に絞って閉塞したと推測できる。正面に1条の黒斑がある。

陶棺B (図270中央)

森本が報告し、伏見町史(伏見町史刊行委員会1981)編纂時に田辺征夫が再調査して詳しい写真と実測図が掲載された資料である。全長80cm・底径29cm・最大径35cmの砲弾形を呈し、内外面はタテハケ調整である。中央に31cm×20cmの方形孔がある。方形孔を塞ぐ蓋には中央に小孔が1つあり、表面にはへう描きがあったが、その後欠損して1/4ほどしか残っていない。

製作方法については、「大きな漸次一方に向かって縮小する圓筒形の土管をつくり、狭い方を窄めて他の土をも補ひB端をなし終ると共に、他の太い一方には、其の徑に相當する板状の同質同厚の土をもつて填」ぐと森本は想定した。

しかし、陶棺A・Cの観察結果から推測すると、粘土円盤の周縁に粘土を積み上げて上窄まりの円筒をつくっていき、頭頂部で最後に閉塞した可能性が高いように思われる。

陶棺C (図270右)

1971年発行の『大和考古資料目録』第1集に集録された資料で、もともと畝傍考古館が収集所蔵していた資料の一つと考えられる。収集された経緯は不明であるが、陶棺Aと同じ特徴を有する点からみて宝来横穴出土の所在不明陶棺2基の中の1基とみて間違いないだろう。

全長74cm・底径23cm・最大径29cmの砲弾形を呈する。外面はタテハケ調整、内面は下半がタテハケ、上半がヨコハケ調整である。中央に23cm×19cmの方形孔がある。粘土円盤をつくって平底の底部とし、その外周に粘土を積み上げて上窄まりの円筒をつくっていき、頭頂部を最後に絞って閉塞したと推測できる。突帯の剥離箇所には、貼付位置を示すための1条のヨコナデが認められる。正面と裏面に黒斑がある。なお、内部は針金と石膏で補強しており、方形孔下辺の延長線上にある突帯1条は後補されたもので、製作時に貼り付けられた突帯ではない。陶棺Cには方形孔を塞ぐ蓋が伴っている。蓋は24cm×22.5cmの方形板で、身と合致する曲面をなす。内外面タテハケ調整で、外面の一部にケズリ調整を行なう。よくみると、本来23cm×19cmの方形版であったものに、片方の長辺及び短辺に幅1cm前後の粘土を補足して仕上げている。長辺の補足粘土部分には板押さえ痕跡が残る。本来の方形板と陶棺の方形孔の大きさが合致し、黒斑が一連の位置で認められるので、方形孔を切り抜いて得た粘土板を加工して蓋に再利用したことがわかる。

12. 中町陶棺出土地 (図252-19)

『富雄町史』に菅谷出土品として陶棺・車輪石・須恵器があり、矢追日聖保存と記されているが、図や写真などの掲載もなく詳細不明であった。そこで、宗教法人大

倭大本宮の倉庫等に現在保管されている考古資料を杉本順一の案内で実見し、陶棺の簡易な記録を作成した。

陶棺には、亀甲形陶棺1基と円筒形陶棺1基があることを確認した。亀甲形陶棺は、ほぼ完存する棺身と破砕した棺蓋を棚に並べて収納されている。円筒形陶棺の破片はその傍らにまとめてあった。なお、他に弥生土器・須恵器・瓦・石器・車輪石・土馬等の資料を所蔵されており、詳細な資料調査をさらに実施する必要がある。

亀甲形陶棺 (図271-2) 棺身ともに2分割焼成されており、棺蓋は接合確認によって片側のみをほぼ復原できた。棺蓋片側の長さ56cm・幅50cm・高さ33cmで、天井部に黒斑がついている。外面に突帯の貼付は認められない。長側面に1つずつ径5cm前後の円形透孔があり、もう片側を含めておそらく合計4つの透孔が本来あっていたと推定できる。口縁部は高さ8cm前後の粘土帯でつくられ、端面に葉脈圧痕はない。ヘラ切りで切断し、天井部の切断面近くに小孔が1つあく。内外面ともにハケ後ナデ調整である。

棺身は全長126cm、幅47cm、高さ46cmで、ほぼ完存する。内法は長さ111cm・幅33cm・高さ25～27cmである。外面に突帯の貼付は認められない。口縁部高4cm・蓋受け幅6～7cmである。底に高さ14cm前後・径16cm前後の脚が4行2列合計8個取り付け。脚に透孔はない。脚が取り付け部分の底部には穴があいている(図272)。この穴は後からあけられたものではなく、製作工程の中で意図的につくられている。底部～体部の外面は、板押さえした後にタテハケ調整する。脚は内外面ともにタテハケ調整である。

また、底部外面中央には2個1行の脚の中間を長軸方向に沿って延びる幅8.3cmの板圧痕が明瞭に残っている(図273)。乾燥時に底部が凹むのを防ぐため、下から板をあてて支持した痕跡と考えられる。

円筒形陶棺 (図271-1) 今回初めて存在を確認できたが、亀甲形陶棺と一緒に出土したものであるかは

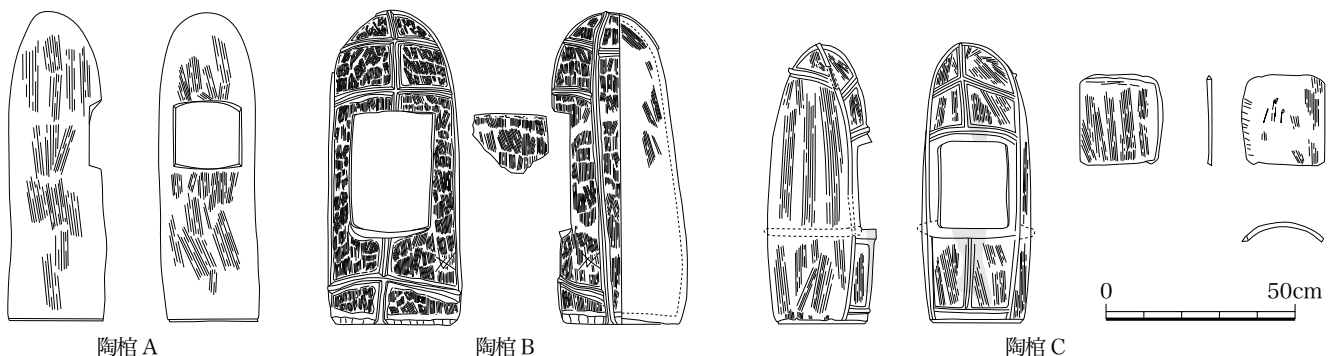


図270 宝来横穴出土の陶棺 (1/20)

明である。しかし、よく似た土が付着する点や赤田9号墓における亀甲形陶棺との共伴事例からすると、本例も亀甲形陶棺と共に出土した可能性が高いように思われる。

全体を復原するには破片数が全く足りないが、口縁部片と底部～体部下半の資料からおおよその形状を知るこ

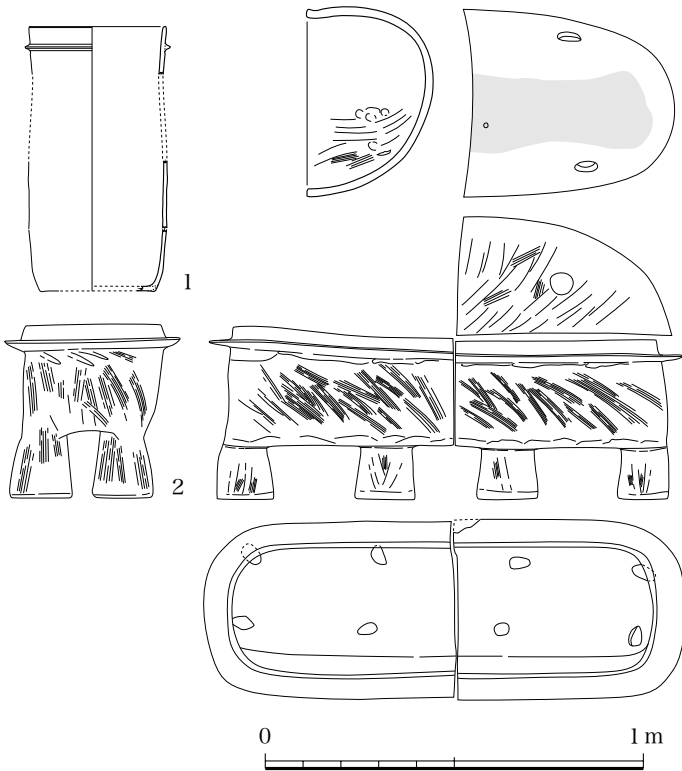


図271 大倭大本宮所蔵の陶棺 (1/20)

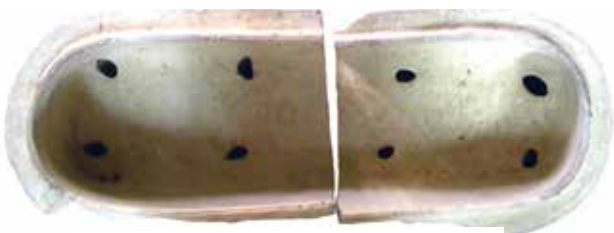


図272 脚接合箇所での棺底に並ぶ穴



図273 底部外面中央に残る板圧痕

とができた。底部～体部下半が35cm以上、口縁部～体部上半が13cm以上あり、赤田9号墓例を参考にすると高さ70cmほどではなかったかと思われる。復原口径35cm・復原底径32cmである。口縁部は高さ4.5cmで、直立する。蓋受けは幅1.4cmで、ほとんど突出しないため、ここに蓋を載せるのは難しい。おそらく実際は口縁端部で蓋を支持したものと思われる。穿孔もなく、赤田9号墓例よりも退化した蓋受けの形状を示しているのだろう。粘土円盤をつかって平底の底部とし、その外周に粘土を積み上げて成形する。口縁部は内外面ナデ調整、体部は内外面タテハケ調整である。底部外面にヘラケズリは認められない。

亀甲形陶棺の出土状況を伝える記事が、昭和43年5月23日発行の『すさのお』第20号に掲載されている。表紙には大きく陶棺出土状態の写真(図274)が載り、その解説として以下のような記述がある。

むかし土師製の土棺ありき

この種のもは普通に陶棺と呼ばれている。近畿地方及びその以西の吉備の地方から多く発見されていて、原史時代の末期から奈良時代までの間に使用されたものではないかと学者はいつている。形は種々様々なものがあって、一定しない。

この写真(図274)に出ているものは「はにわ」と同じ焼の土棺で、全長が約四尺、胴横巾が一尺二寸、高さが一尺四寸、うち脚の高さが五寸である。更に蓋受けの所で一寸五分巾の薄い帯状のものがつけてある。脚は八個あって胴が中央で切断されているが、両者を合わせて埋葬している。蓋は片方だけだったが、鯨の頭のような形で丸い穴がある。八個の脚の下には七寸程度の扁平な薄い石を選んで敷いてあった。副葬品は少数の須恵器の外は何もない実に簡素なお墓である。河内枚岡から暗



図274 陶棺出土状態(『すさのお』第20号1968年)

越奈良街道を東へ進む富雄川のほとりに砂茶屋がある。更に一キロ程ゆけば左に丘陵が続き熊取という。この丘の麓で千有余年の長き歲月この土棺は静かにねむり続けてきた。土棺は何も云わない。しかし、埋葬時に参画した多くの古き人々の想念が今の我々に何かを知らせている。

また、2ページ目にもこれと関連する矢追日聖の記述がある。

庶民の生活に深く根ざした土着信仰（七）
法主 矢追日聖

「さわり（障）」とか、「たたり（祟）」とか、田舎などでは「かまい」とかいう言葉を日常私達は聞くことが多い。つまりそれは人間以外の何かに、例えば怨霊とか邪神とかといった種類のものに取りつかれて、人間が苦しんだり、不幸になるような場合に使う言葉のようである。こうしたことに無関心である人達は、この文明の世の中で・・・、そんなことがあつてはたまものかと、極めて軽く押流してしまうことだろう。

史蹟破壊の禍根

所がこうしたことの実在を信じている人もかなり多いことは事実である。

大倭の教域の中に今も畑の隅に小さい塚が残っている。耕作する者にとっては垂かった方が好都合であるのだが、それには次のような理由があった。

数十年前、この畑の作人が、この盛土を引きならして畑を拓げるために鋤を入れ始めたところ、急に腹痛が起り、その場で七転八倒の苦しみとなった。

命だけはかろうじて助かったという。こんな場合にこれを頭から「たたり」と決定づけるのは早計かも知れない。或はこの時刻に腹痛が起きるべき肉体の条件になっていたのかも知れない。またこんな場合もあった。



図 275 中町陶棺出土地点（南から）

もう三十年程前だが、私の所有地に新道をつけさせた。土師（はち）の破片が見えたので注意すると、奈良朝頃の陶棺の埋まっているのが見えた。工事を停止して家の出入りの人足を連れ写真機や実測の道具を用意して現場へ赴いた。この人足というのは、百姓で土方仕事もやっている田舎では珍しい屈強で器用な男である。

その男が私の指示に従ってゆるゆるとシャベルを入れ始めると急に顔色蒼白になり地べたに転んでしまった。海老のようにちぢんでうんうんと呻いていた。腹痛のようだった。暫くするとじっとおさまるのだが、発掘させるとまた同じ状態になる。

二人の弟を手伝わせて私が掘ったのであるが、こんな場合は一概に偶然だと片付ける訳には行かない。この陶棺は今も私の手許に割れたまま置いてあるが、これと何のかかわりがあるのかは知れないが、この棺からかつての怪僧、道鏡の姿が現われた。

（以下、略）

矢追日聖は、昭和 20 年 8 月 15 日（終戦の日）に大倭教の「立教開宣」をしたといい、昭和 29 年 12 月 1 日印刷の『富雄町史』に陶棺に関する記述があるので、出土時期は昭和 20 年代と推定できる。

出土地点は、国道 308 号線から北へ上る坂道の途中で、平井池の北側にあたる。中町 4992 - 12 の石垣のすぐ南側、マンホールが埋設してある付近であるという。周辺は現在宅地化していて、旧状をほとんどとどめないが、大きな山の南向き斜面地の裾近くに位置し、横穴を構築するにはよい立地環境にある。市内出土の多くの陶棺が横穴から出土している点、石材などが出たという伝聞もない点から考えて、本例も横穴に埋葬されていた可能性が高いと推測できる。

III. おわりに

以上、赤田横穴墓群周辺に分布する 12 地点の陶棺や出土場所について調査検討し、現地の特定や詳細不明陶棺に限って概要の把握に努めた。これらに従来の報告資料を加えれば、市内出土の陶棺を概ね網羅できるだろう。また、陶棺出土地点の分布傾向から発見が難しい横穴墓の存在予測を一層進展させ得ると考えている。

今回の資料調査では、再度観察を必要とする陶棺が多くあるにもかかわらず、陶棺が大型品であるために細部の観察が容易でないことを改めて実感した。陶棺の移動や観察場所の確保には所蔵保管機関の協力と人手が必要となる場合も多かった。ご協力いただいた関係機関に、改めて感謝申し上げます。（鐘方正樹）

第VI章 総括

第1節 横穴墓の特徴と変遷

1～9号墓は、発掘調査の結果、6世紀中頃～7世紀中頃に築造され、様相や築造場所が時期により異なることがわかった。その特徴と変遷を考察する。

1. 形状の特徴と変遷・時期区分

1. 着目した属性

下記の4つの部位等の属性を検討の対象とした。

- 1) 玄室・羨道（以下、墓室とする）
 - a. 規模：全長、羨道長、奥壁幅、床面での羨門玄門幅
 - b. 比率：奥壁幅と全長、羨門・玄門幅との比率
 - c. 平面形態 d. 板による閉塞の有無（初葬）
- 2) 墓道
 - a. 形態：羨門・玄門との接続形態
 - b. 規模等：検出面での最大幅、側壁の傾斜角度（ともに羨門・玄門近くの部位）
- 3) 埋葬関連の土層
 - a. 初葬時の床面の整地土層〈報告－A層〉
：墓室内で施された範囲（全面・部分）
 - b. 追葬時に付加した床面の整地土層〈同一－B層〉
：有無
 - c. 最終埋葬時の閉塞土層〈同一－C層〉
：断面形態、形成した床面の構成層
- 4) 棺
 - a. 種別 b. 数 c. 玄・羨門から見た向き
 そのうち、下記の属性については分類を行った。
 - ・1)－c 墓室の平面形態
 - ・2)－a 羨門・玄門との接続形態
 - ・3)－c 最終埋葬時の閉塞土層の断面形態
(以上の分類の内容は、図276参照)
 - ・4)－a 土師質亀甲形陶棺
 - A種：長さ2m以上で、脚部3列のもの
 - B種：長さ1.8m程度で、脚部2列のもの
 - C種：長さ1.1m程度で、脚部2列のもの
 各横穴墓の諸属性の内訳は、表1のとおりである。

2. 分類と特徴

墓室の規模からI・IIの2群に大別し、墓室の平面形態、墓道の形態・規模、土層や棺の様相から、I群で1・2類、II群で3・4類の4類型に分類した。

(1) I群：3～5号墓

墓室の全長6.5～8.3m、奥壁幅2.5～2.8m、羨

門幅0.7～1mで、全長が奥壁幅の2倍以上、羨門幅が奥壁幅の約1/3のもの。

1類（5号墓） 墓室の平面形態はA形態。初葬時に羨門を板で閉塞する。墓道は検出面での最大幅3m程度、側壁の傾斜角度が60～70°で、羨門との接続形態はA形態。初葬時の床面の整地土層は奥壁寄りにはない。棺は亀甲形陶棺A種の2基で、ともに横向き。

なお、5号墓の最終埋葬時の閉塞土層は後述する3類と同様のB形態である。

2類（3・4号墓） 墓室の平面形態はB形態。4号墓は初葬時に羨門を板で閉塞する。墓道の規模・形態は1類と同じ。初葬時の床面の整地土層は墓室内全面に及ぶ。最終埋葬時の閉塞土層はA形態で、追葬時に付加した床面の整地土層上に形成される。棺は亀甲形陶棺A種と追葬の木棺の組合せとなる。4号墓の陶棺が横向きで、他は縦向き。

(2) II群：1・2・6～9号墓

墓室の規模が全長4.3～5.7m、奥壁幅2.4m程度、羨・玄門幅1.2m程度で、全長が奥壁幅の2倍前後、羨門幅が奥壁幅の1/2前後のもの。

3類（6～8号墓） 墓室の平面形態はB形態。墓道は、検出面での最大幅2.7m程度、側壁の傾斜角度が70～80°で、羨門との接続形態はB形態。初葬時の床面の整地土層は墓室内全面に及ぶ。最終埋葬時の閉塞土層はB形態。棺は亀甲形陶棺B・C種と木棺で、すべて縦向き。同C種と木棺は7号墓でみられる。

なお、埋葬の形跡がない6号墓についても、玄門の形状・規模と閉塞土層の形態が同様であることから、この類型に含め、未完成のものとする。

4類（1・2・9号墓） 墓室の平面形態はC形態。墓道は、玄門との接続形態がA形態で、他は3類と同様。埋葬関連の土層は、初葬時の床面の整地土層は、1号墓では墓室内全面に及ぶと推察でき、9号墓では玄門寄りのみ。9号墓の最終埋葬時の閉塞土層はA形態。棺は、1号墓が亀甲形陶棺B種、9号墓が同C種と円筒形陶棺。亀甲形は縦向き。

3. 変遷と時期区分

(1) 変遷 I群の3～5号墓の墓室内の土器は6世紀中頃～末の特徴を示すが、2類の3・4号墓の方が様相は新しい。II群の墓室内の土器は、3類の7号墓が7世紀中頃、4類の1号墓が7世紀初頭～前半の特徴を示す。このことから、6世紀後半～末に1類から2類に変遷し、

表10 横穴墓諸属性一覧

		5号墓	3号墓	4号墓	7号墓	8号墓	1号墓	2号墓	9号墓	6号墓	
玄室・羨道	規模等	全長(玄室長+羨道長)	8.2 m	8.3 m	6.6 m	5.2 m	4.3 m	4.3 m	4.5 m	5.7 m	5.0 m
		羨道長	3.3 m	1.4 m	1.3 m	1.0 m	1.3 m				
		奥壁幅	2.8 m	2.5 m	2.8 m	2.4 m	1.8 m	2.4 m	2.4 m	2.0 m	1.5 m
		玄・羨門幅(床面)	1.0 m	1.0 m	0.7 m	1.2 m	1.2 m	1.3 m	1.2 m	1.3 m	1.1 m
		奥壁幅:全長	1:2.9	1:3.3	1:2.4	1:2.2	1:2.4	1:1.8	1:1.6	1:2.85	1:4.5
		奥壁幅:玄・羨門幅	1:0.4	1:0.4	1:0.3	1:0.5	1:0.7	1:0.5	1:0.5	1:0.65	1:0.7
	大別群	I群				II群					
形態	平面形	A	B	B	B	B	C	C	C		
	板による閉塞(初葬)	有		有							
墓道	形態	開口部との接続部	A	A	A	B	B	A	A	A	B
	規模等	最大幅(検出面)	2.7 m	3.3 m	3.1 m	2.7 m	2.7 m	2.4 m	2.8 m	2.5 m	2.9 m
		側壁の傾斜角度	約60°	約70°	約65°	約70°	約70°	約70°	約75°	(50°以上)	約80°
土層	床面の整地	初葬:墓室での範囲	部分	全面	全面	全面	全面	(全面)	(不明)	部分	部分
	土層	追葬時の追加:有・無	有	有	有			(不明)	(不明)		
	最終埋葬時	断面形態	B	A	A	B	B	(不明)	(不明)	A	B
	の閉塞土層	床面構成層	墓室内埋土	整地(追葬)	整地(追葬)	墓道内埋土	整地(初葬)	(不明)	(不明)	整地(初葬)	整地(初葬)
棺	土師質陶棺 (種別・数/ 向き)	亀甲形A・B(大型)	A 2基/横	A 1基/縦	A 1基/横	B 1基/縦	B 1基/縦	B 1基/縦	(不明)		無
		亀甲形C(小型)				1基/縦					1基/縦
		円筒形									2基
	木棺		1基/縦	2基/縦	1基/縦						
副葬された土器の時期		6 C中~後半	6 C後半~末	6 C後半~末	7 C中頃	(不詳)	7 C初~前半	(不詳)	7 C初~前半	無	
埋葬施設の類型		1類	2類		3類		4類			3類(未完)	
時期区分		第1期	第2期		第3期						

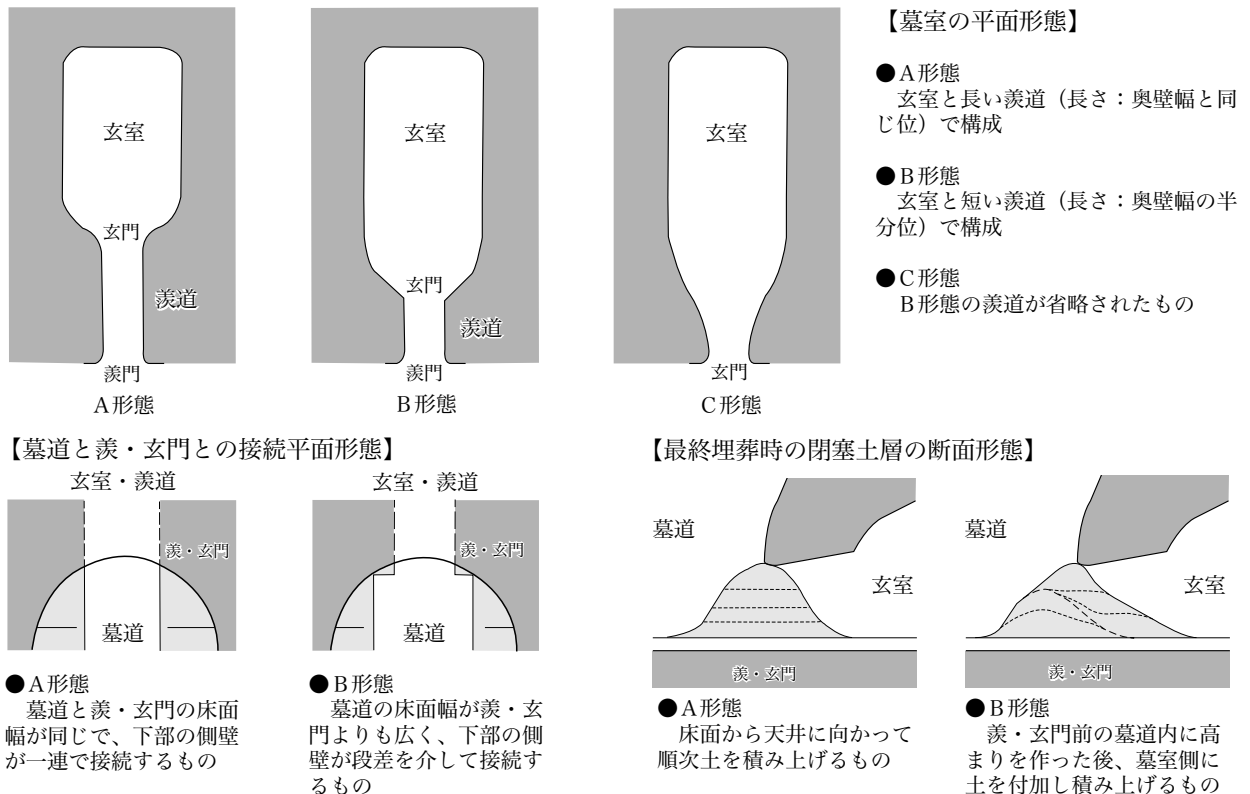


図276 各部形態の分類

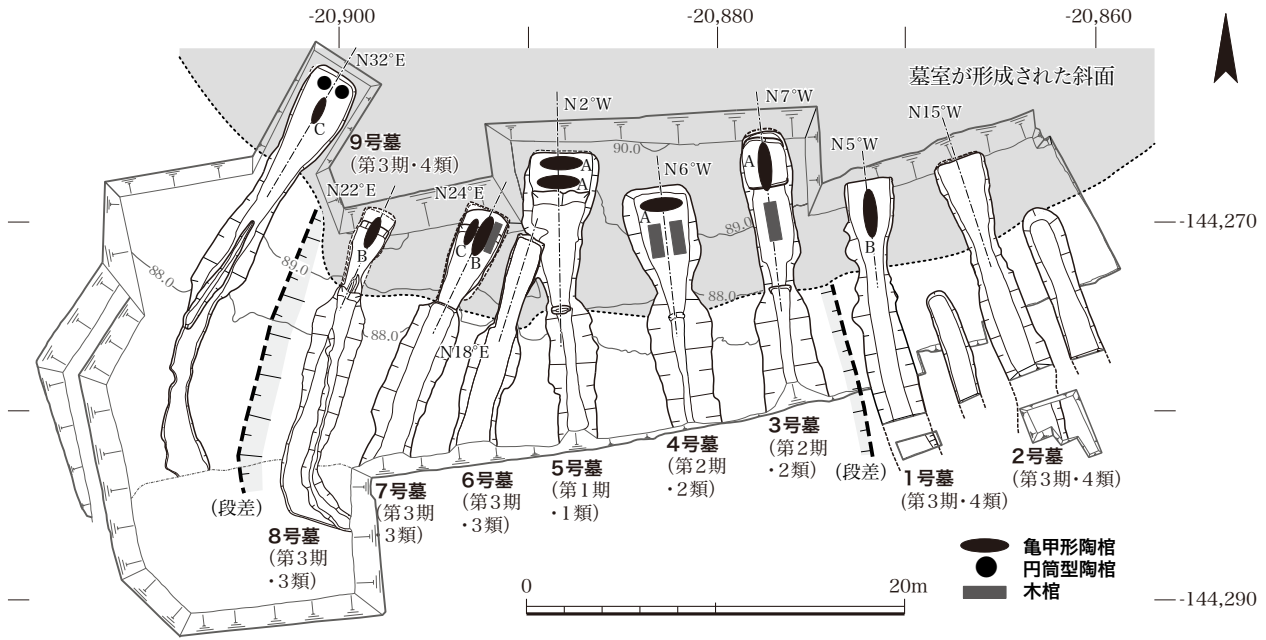


図 277 1～9号墓の分布と玄室の主軸方向・斜面の区分 (1/400)

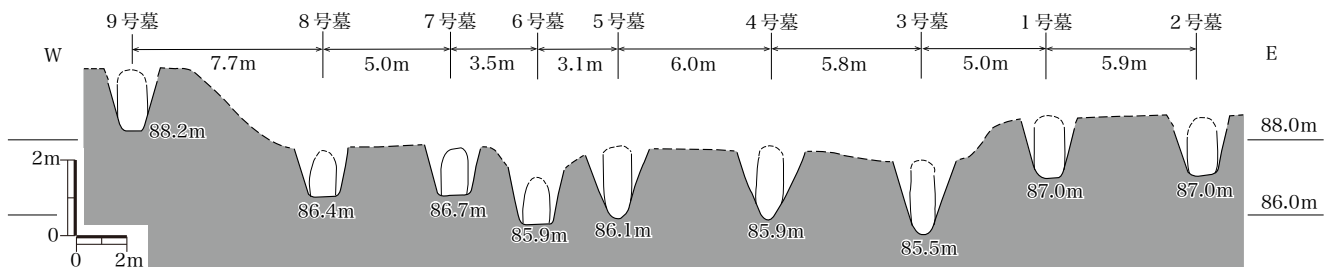


図 278 1～9号墓の玄・羨門及び墓道の断面模式図 (縦 1/200、横 1/300、玄・羨門での主軸間隔で展開)

7世紀初頭～中頃には3・4類が併存したと考える。

3・4類は、墓室の平面形態や初葬と追葬での棺種の差別化の点で2類と通じる特徴をもつ。このことは、ともに2類が原型で、異なる造墓集団による受容の違いを示すと考える。1類の5号墓の最終埋葬(南陶棺内の追葬)の時期は、閉塞土層の特徴から7世紀に下る可能性がある。

(2) 時期区分 II群は、墓室の規模や陶棺の法量がI群よりも縮小する。ただし、I群の2類は、1類と通じる属性とII群の3・4類と通じる属性が混在し、両者の中間的な様相を示す。このことから、過渡期を認めて3時期に区分し、I群の1類を指標に第1期、2類を指標に第2期、II群を指標に第3期を設定する。

II. 墓域と造営

1. 着目した内容・属性

分布とともに、墓室・墓道の主軸方向や位置関係に着目した。その様相は図277・278に示すとおりである。

2. 分布と位置関係の特徴

(1) 分布 発掘区の中央部に第1・2期の3～5号墓、その東側に第3期の1・2号墓、西側に第3期の6～9号墓があり、3つの小群に分かれる。これらを中央群、東群、西群と便宜的に呼称する。

(2) 墓室 中軸線の方向は等高線の走向と概ね直交し、小群ごとに揃う。墓道との接続部の位置は、隣り合う横穴墓や小群どうしで揃う。墓道との接続部における中軸線間の水平距離は概ね5～6mであるが、6号墓と5・7号墓との間は3m程度と狭い。

床面の位置は、東群、中央群と西群の7・8号墓が各々揃うが、東群は中央群より約1m高く、西群の9号墓は8号墓より1.5m高い。中央群の床面の位置は西群の7・8号墓より約0.5m床面が低いが、羨門の高さが約0.5m高いため、天井の位置が揃うことになる。

(3) 墓道 墓室寄りの6～7m分は、墓室の中軸線の延長上で直線的。墓室と墓道との接続部付近の肩部の位

置は羨門・玄門の天井とほぼ合う。従って、前述の中央群と西群の7・8号墓は肩部の位置が揃うことになる。

3. 推察される様相

墓室と墓道の接続部の位置関係から、墓室と墓道の形成場所は明確に区分されていたことがわかる。

墓道については、形状と位置関係から、墓室寄りの形成場所が3つに区画され、3～8号墓の墓道が平らかに造成された同じ区画内に造られ、西落ちの段差を介して東側に1・2号墓、東落ちの段差を介して西側に9号墓の各墓道が造られたことが推察できる。

同じ区画の3～8号墓は、第1期に中央の5号墓、第2期に東寄りの3・4号墓、第3期に西寄りの6～8号墓の順で造られ、6号墓は場所が制約される。造墓が計画・継続的で制約を伴う点を踏まえれば、この区画は規制に従って特定の系譜の被葬者に割り当てられた墓域を反映すると考える。

第3期の6～8号墓は3類、区画が異なる1・2・9号墓は4類である。類型の違いが造墓集団の違いを示すと考えれば、墓域ごとに造墓集団が定まっていた可能性がある。(安井宣也)

第2節 陶棺

1. はじめに

明治37年に現在の西大寺赤田町内で土師質亀甲形陶棺が発見されて以来、その特異な棺形式が注目されるようになり、後藤守一や田村吉永らの集成よって戦前にはすでに奈良市内から陶棺16基の出土が確認できる。その後、歌姫赤井谷横穴墓・赤田横穴墓・狐塚横穴墓・津風呂陶棺古墳・赤田1号墳の調査によって19基、集落・都城遺跡の調査で6基、採集及び不時発見資料8基が加わり、少なくとも49基以上の土師質陶棺が奈良市内で出土したことになる。その内訳は、亀甲形陶棺42基・円筒形陶棺3基・砲弾形陶棺4基である。ここが近畿地方における土師質陶棺の分布の密集地域であることは疑いようがなく、その大半は亀甲形陶棺で占められている。

近年の陶棺研究は、分布の集まる近畿地方と吉備地方(岡山県域)の資料を総合的に扱い相対化して検討されることが多い。しかし、吉備地方に比べて近畿地方の陶棺研究は低調で、詳細な検討もしばらく進展していないのが現状である。そこで近隣地域出土例も参考としつつ、奈良市内出土例を中心に土師質亀甲形陶棺を改めて検討し、その変遷と製作についての理解を深めたい。また合わせて、円筒形陶棺と砲弾形陶棺にも言及する。

II. 研究史抄

近畿地方の土師質亀甲形陶棺を中心に言及した研究の中から、その変遷と製作に関する幾つかの論点を抽出してみよう。

山城地方出土の陶棺集成を行った木村泰彦は、近畿地方出土の陶棺と比較検討する中で土師質亀甲形陶棺の特徴が奈良盆地北部や滋賀県南部出土例と類似することを述べた。そして、突帯が幅広く多い例から細く少ない例へと変化し、横位突帯を省略して縦位突帯のみになる例がつくられると考えた。そして、土師質亀甲形陶棺の特徴を模倣した豊中市中井山3号墳出土例を経て須恵質四注式陶棺が現れ、陶棺の主体がそれへ移行すると理解した(木村・吉岡1979)。

1983・1984年に奈良市内で赤田横穴墓・狐塚横穴墓の調査が相次いで実施され、陶棺資料が増加したことを契機として行われた森下浩行・藤田忠彦の考察が次に挙げられる。森下は、棺身脚部の本数に突帯区画の段数を加えて棺蓋・棺身の組合せで土師質亀甲形陶棺を型式分類し、小型化に伴い突帯の簡略化が進む方向でその変遷を考察した(森下1994)。藤田も森下の型式分類とほぼ同じ視点で考察するが、津風呂陶棺例を挙げて棺身の突帯区画の段数差は時間差でなく、製作集団の系統差に起因する可能性を示した(藤田1994)。

近畿地方出土の土師質陶棺を総合的に検討した白石耕治は、奈良盆地北部域を中心に分布する土師質亀甲形陶棺を突帯区画形状の特徴を重視し北大和系と呼んで分類した。そして、大型品から小型品へと変化する過程でその形態変遷を最も反映するのが棺身脚部の本数であることを述べている(白石1995)。

1994・1995年の時点で、変遷に関する主要な見解がすでに論じられており、その後に大きな変更は認められていない。北大和系として一括できる陶棺群は基本的に同じ特徴を共有し、奈良市域を中心として分布が広がる点からみて同系統の資料と考えることができる。藤田が示した装飾表現の差異は、むしろ製作系列の違いを反映していると推測するのが妥当であろう。

III. 分類と編年

以上の研究から、土師質亀甲形陶棺は突帯の簡略化とその条数の省略化、棺身脚部数の減少を伴って小型化すること、その製作集団に複数の系列が存在する可能性があることが判明している。これらの理解に基づいて出土資料の形状を見直してみると、突帯貼付の規則性・棺蓋透孔の形状・脚部における透穴の有無などの特徴によって棺蓋・棺身ともに大きく2系列の製品群を確認できる。

そして、各系列を超えて共通する棺身脚部数との相関関係から5つの型式に分類できる¹⁾。

1. 系列群の認定

(1) 棺蓋

突起の有無から大きく2系統の資料群に区分できる。

A群：突起がなく、透孔だけを認める一群。市内出土資料のほとんどを占めている。

B群：突起がある一群で、鉤状突起を短側面に付ける赤田M 37 棺蓋と円柱状突起を長側面に付ける赤田9号墓棺蓋の2例のみである。両者は突帯配置などの点でも大きく異なっており、形態的な親縁性は認められない。ただし、鉤状突起が円柱状突起よりも古い資料に認められる点は、吉備地方の突起の変化と合致している。外部からの影響を受けて、単発的に製作されたものかもしれない。

次に、出土例の大勢を占めるA群は、棺蓋外面の突帯配置によってa・bの2系列に分類できる。

a系列 短側面縦位突帯を貼付する系列群で、その配置性から3つの小系列に細分できる。透孔はほとんどが方形である。突帯を板で押圧する例が目立つ。

a 1 系列；短側面縦位突帯を中段・下段に貼付する。赤田5号墓南棺・歌姫赤井谷1号墓陶棺A・敷島町2丁目出土陶棺(片側)がある。

a 2 系列；短側面縦位突帯を下段にのみ貼付する。赤田5号墓北棺・赤田M 44 陶棺・敷島町2丁目出土陶棺(片側)・御陵前M 43 陶棺・赤田1号墓陶棺・赤田7号墓東棺がある。

a 3 系列；短側面縦位突帯を下段にのみ貼付し、長側面では上下段で位置を違えて突帯を貼付する。赤田4号墓陶棺1例を認めるのみである。赤田5号墓北棺では上中段と下段で突帯の位置を違えており、その特徴が顕在化した系列ではないかとも思われる。歌姫赤井谷1号墓陶棺Aの上段と中下段でも同じ特徴を一部看取できる。

b系列 短側面縦位突帯を貼付しない系列群。透孔は、平山古墳(京都府綴喜郡井手町)例を除いて円形である。平山古墳陶棺・赤田3号墓陶棺・赤田8号墓陶棺・狐塚1号墓陶棺・狐塚2号墓陶棺・狐塚3号墓陶棺・新堂寺合葬古墳陶棺Aがある。また、突帯を全く貼付しない一群も後述する理由からb系列の製品と考えられる。赤田7号墓西棺・中町出土陶棺がある。

(2) 棺身

棺蓋と違って、1系統の資料群から成っている。棺身外面に貼付する突帯の配置と脚部における透孔の有無からa・bの2系列に分類できる。

表 11 棺蓋と棺身の組合せ

	資料名	棺蓋系列	棺身系列	型式
1	赤田1号墓	a 2	a 1	IV
2	赤田3号墓	b	b	II
3	赤田4号墓	a 3	b	III
4	赤田5号墓(北棺)	a 2	a 1	I
5	赤田5号墓(南棺)	a 1	a 1	II
6	赤田7号墓(東棺)	a 2	a 1	IV
7	赤田7号墓(西棺)	b	b	V
8	赤田8号墓	b	a 1	IV
9	赤田M 4 4	a 2	a 2	II
10	狐塚1号墓	b	b	IV
11	狐塚2号墓	b	b	IV
12	狐塚3号墓	b	b	IV
13	敷島町出土陶棺	a 1・a 2	a 1	III
14	御陵前 M43 陶棺	a 2	b	IV
15	歌姫赤井谷1号墓(A)	a 1	a 1	II
16	歌姫赤井谷1号墓(B)	a 1?	a 1	II
18	新堂寺合葬古墳(A)	b	b	IV
19	中町出土陶棺	b	b	V

a系列 横位突帯を貼付して上下2段に区画を設ける系列群で、3つの小系列に細分できる。突帯を板で押圧する例が目立つ。

a 1 系列；脚部に透孔を穿孔し、a系列の主体を占める。歌姫赤井谷1号墓陶棺A・B・赤田5号墓北棺・南棺・津風呂陶棺(片身)・敷島町2丁目出土陶棺・赤田1号墓陶棺がある。なお、新しくなると横位突帯と周底突帯を省略する赤田7号墓東棺・赤田8号墓陶棺が現れる。

a 2 系列；脚部に透孔がなく、客体的な存在である。赤田M 44 陶棺、天理大学図書館裏出土陶棺・狐塚1号墓陶棺・新堂寺合葬古墳陶棺Bがある。

a 3 系列；赤田4号墓陶棺蓋の存在から、棺身にも縦位突帯を段違いに貼り付ける小系列の存在を想定しておく。京都府宇治市の菟道門ノ前古墳陶棺B a・B bがこれに相当する可能性がある(宇治市教育委員会1988)。赤田5号墓北棺にこのような特徴が一部みられるため、a 1系列との関連性が考えられる。

b系列 横位突帯がなく周底突帯と縦位突帯で1段のみの区画を設ける系列群で、2つの小系列に細分できる。

b 1 系列；脚部に透孔がなく、b系列の主体を占める。平山古墳陶棺・狐塚2号墓陶棺・津風呂陶棺(片身)・御陵前M 43 陶棺・赤田1号墳陶棺・狐塚3号墓陶棺・山陵町上畑陶棺・新堂寺合葬古墳陶棺Aがある。新堂寺合葬古墳陶棺Aからみて周底突帯をa系列よりも遅くまで貼りつける。

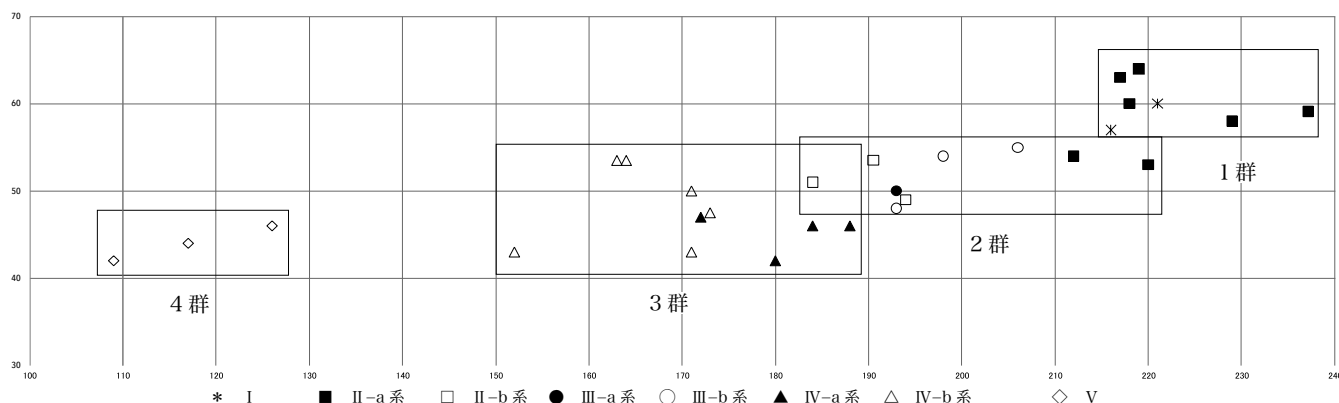


図 279 土師質亀甲形陶棺(身)の法量分布

なお、突帯を貼り付けない小型品の一群も脚部に透孔を穿孔しない点や後述する理由から b 1 系列の製品と考えられる。赤田 7 号墓西棺、赤田 9 号墓陶棺、中町出土陶棺がある。

b 2 系列；脚部に透孔を穿孔し、客体的な存在である。今のところ、M 37 陶棺 1 例しかない。

(3) 棺蓋・棺身の組合せ

製作系統が異なる棺蓋 B 群を除いて、系列が異なる蓋と身がどのように組合うかを検討する。

組合せ関係を表 11 で通観してわかる通り、棺蓋 a 系列は棺身 a 系列、棺蓋 b 系列は棺身 b 系列と組合う例が多く、その割合は組合せが判明した 18 資料のうち 15 資料で 83% である。一方、別系列の棺蓋と棺身が組合う例が 3 資料 (17%) あり、棺身の片方ずつが別系列である津風呂陶棺古墳例の存在からみて、同じ系列の製品が必ず組み合って使用されるとは限らない。ただし、別系列の製品を組み合わせて使用できるぐらいには大きさの規格性が共通しており、ある程度の互換性を有していたと推定できる。この点から、これらの製作系列は親縁な関係を維持しつつ存続したことが推察できる。

また、赤田横穴墓群では a 系列、狐塚横穴墓群では b 系列の陶棺が使用される傾向があり、横穴墓群あるいはその支群ごとに陶棺製作集団と関わっていた可能性が考えられる。

2. 型式分類

a・b 系列ともに、小型化する方向で変遷する。そして、小型化傾向は棺身脚部数との相関関係が認められる。そこで、棺身脚部数を指標として、陶棺を型式分類する。棺蓋の型式については、棺身各型式との相伴関係と大きさで判断する。

I 型式 棺身脚部数が 30 脚で、10 行 3 列の配置となる例を標準とする。大きさは全長 216cm を超え、高さ 57～60cm である。

II 型式 棺身脚部数が 24 脚で、8 行 3 列の配置となる例を標準とする。大きさは全長 190.5～219cm・高さ 49～64cm である。

III 型式 棺身脚部数が 18 脚で、6 行 3 列の配置となる例を標準とする。大きさは全長 193～206cm・高さ 48～55cm である。

IV 型式 棺身脚部数が 12 脚で、6 行 2 列の配置となる例を標準とする。大きさは全長 152～188cm・高さ 42～53.5cm である。

V 型式 棺身脚部数が 8 脚で、4 行 2 列の配置となる例を標準とする。大きさは全長 109～126cm・高さ 42～46cm である。

なお、9 行 3 列の赤田 M 44 陶棺と 7 行 2 列の赤田 M 37 陶棺が奇数行の脚が取り付く少例として存在する。赤田 M 44 陶棺は I から II 型式への過渡的様相を示すが、突帯の配列が定式化していて II 型式との親縁性を有している。赤田 M 37 陶棺は 7 行配置の点で II 型式との関連も想定されるが、全長 171cm の大きさと 2 列配置の特徴からみれば IV 型式との親縁性を考慮できる資料である。これらの点から、ここでは赤田 M 44 陶棺を II 型式、赤田 M 37 陶棺を IV 型式の範疇に含めて考えることとしたい。

3. 大きさと系列・型式の相関

各系列に共通して存在したと思われる大きさの規格性と各系列及び型式との相関について、市内出土の亀甲形陶棺を中心に言及しておく。蓋の大きさは身のそれに規定されるから、身の大きさを全長と高さの法量分布 (図 279) に基づいて検討したい。なお、これらの資料には一部推定値を含んでいる。このグラフをみてわかるように、棺身の大きさと型式差に基づいて概ね 1～4 群に分けることができる。1 群は全長 216～236cm・高さ 54～64cm、2 群は全長 184～220cm・高さ 48～55cm、3 群は全長 152～188cm・高さ 42～53.5cm、4 群は

全長109～126cm・高さ42～46cmの範囲にそれぞれ分布する。1～3群は一部重複しながら小型化していく傾向が読み取れる。1群はI型式とII型式の一部で構成され、a・b両系列の存在を確認できる。2群はII型式の一部とIII型式、3群はIV型式のみで構成され、同じくa・b両系列の存在を確認できる。4群はV型式のみで構成され、すべてb系列である。

この検討でまず判明するのは、II型式が1・2両群に分かれて存在する点である。1群のII型式b系列は今のところ平山古墳陶棺のみであるが、市内にも未知の1群b系列の製品が存在すると考えて大過ないだろう。I型式が1群にのみ認められる点から、1群が2群より先行して製作されたことは間違いない。一方、2群のII型式a系列とII型式b系列が津風呂陶棺で片身ずつ組み合わせられているので、両者は同時期に使用されたことが判明する。a系列は全長が1群に近く大きい、b系列は全長の縮小化が顕著である。高さはa系列が53cm、b系列が51cmで大差ないが、1群中のII型式と比較すると高さは相対的に低くなっており、両系列とも新相を示している。また、2群にはIII型式も含まれており、II型式新相はIII型式とも併存した可能性が高い。以上の点を総合的に考えると、2群においてII型式a系列は1群とほぼ同じ全長を維持したのに対し、II型式b系列は小型化する傾向が現れている。b系列ではII型式の小型化に合わせてIII型式の製作が始まり、a系列ではII型式新相の後にIII型式が製作されたと推定できる。

次に、3群の中で系列ごとにIV型式の分布がまとまる傾向を看守できる。a系列の4例は全長172～188cmの間に分布して、相対的にb系列よりも大きい例が多い。IV型式になると、170cm以上の大きさを維持したa系列と150cm前後まで小型化が進むb系列の差異が明確化することがわかる。このような変遷の違いが認められる点から考えて、4群のV型式はb系列のIV型式がさらに小型化したものであり、a系列はIV型式を最後に姿を消すと推定するのが妥当であろう。

IV. 編年

以上の検討より、1群から4群へと時期的に陶棺が変遷したと想定して編年を考える。

第1期 I型式とII型式古相が製作される時期で、すべて全長216cm以上の大型品である。a系列の棺身には、I型式の赤田5号墓北棺・御陵前M44陶棺（行方不明）とII型式古相の赤田5号墓南棺例・歌姫赤井谷1号墓陶棺A・Bがあり、赤田M44陶棺は両型式の過渡的特徴を認める資料である。a系列の棺蓋にはa1系列の歌姫

赤井谷1号墓陶棺A蓋・赤田5号墓南棺蓋とa2系列の赤田5号墓北棺蓋・赤田M44陶棺蓋がある。赤田5号墓北棺蓋のみ透孔が円形で、他の透孔は方形である。棺身の脚部に透孔がないa2系列もII型式古相から現れている。b系列は蓋・身ともに今のところII型式古相の平山古墳陶棺を認めるに過ぎない。b系列がa系列よりも遅れて現れた可能性はあるが、両系列が当初から独立的に存在した可能性も否定できず出現期の様相は判然としない。赤田5号墓北棺の蓋をみると、上中段の突帯配置がb系列と共通し、a系列の特徴は下段にのみ表れている。ここに両系列の特徴を併せ持つような祖形の存在を読み取ることも不可能ではないように思える。

I型式の蓋受けの形状を観察すると、赤田5号墓北棺は口縁端部と同一面か若干下へ蓋受けが貼り付く。御陵前M44陶棺も同様の特徴を示しているように絵図からはみえる。一方、II型式の蓋受けは口縁端部から大きく下がりが、以後それが定式化する。

蓋の天井部を鍵形に切断する例がほとんどで、稜線突帯や口縁部突帯を他より太くつくり、身の体部短側面に円形透孔を設ける例が認められるのも第1期の大きな特徴である。

棺身II型式古相の短側面縦位突帯数は、a系列が2～3条、b系列が2条である。脚の透孔は2孔1対で穿孔され、I型式では棒状工具を差し込んで穿孔している。赤田M44陶棺・平山古墳陶棺で認められる脚底部の低い突帯は、形象埴輪の底部突帯と共通する形状であり、それとの関連性が注意されるとともにII型式古相の1つの特徴でもある。

高さ60cm以上の棺身II型式3例（赤田5号墓南棺・歌姫赤井谷1号墓陶棺A・B）は、大きさがほぼ同じで蓋受け下部に刺突孔列、底部に規則的な穿孔を認めるなど強い共通点を有しており、同一の製作者が関与したII型式a系列古相の陶棺群とみてよいだろう。

第2期 II型式新相とIII型式が製作される時期で、小型化傾向が現れる。棺身II型式新相の津風呂陶棺はa・b系列の共伴関係がうかがえる資料として重要である。a系列はIII型式になってから全長が大きく縮小し始めるが、b系列はII型式新相から小型化傾向が表面化している。この時期以降、両系列ともに高さは55cm以下となり、体部において粘土の積上げが省力化された。b系列ではIII型式の方が全長で勝る例もみられ、小型化と脚の減少が必ずしも対応していないため、それらは双方向的に進行したように思われる。

棺蓋ではa1系列とa2系列が敷島町2丁目出土陶棺

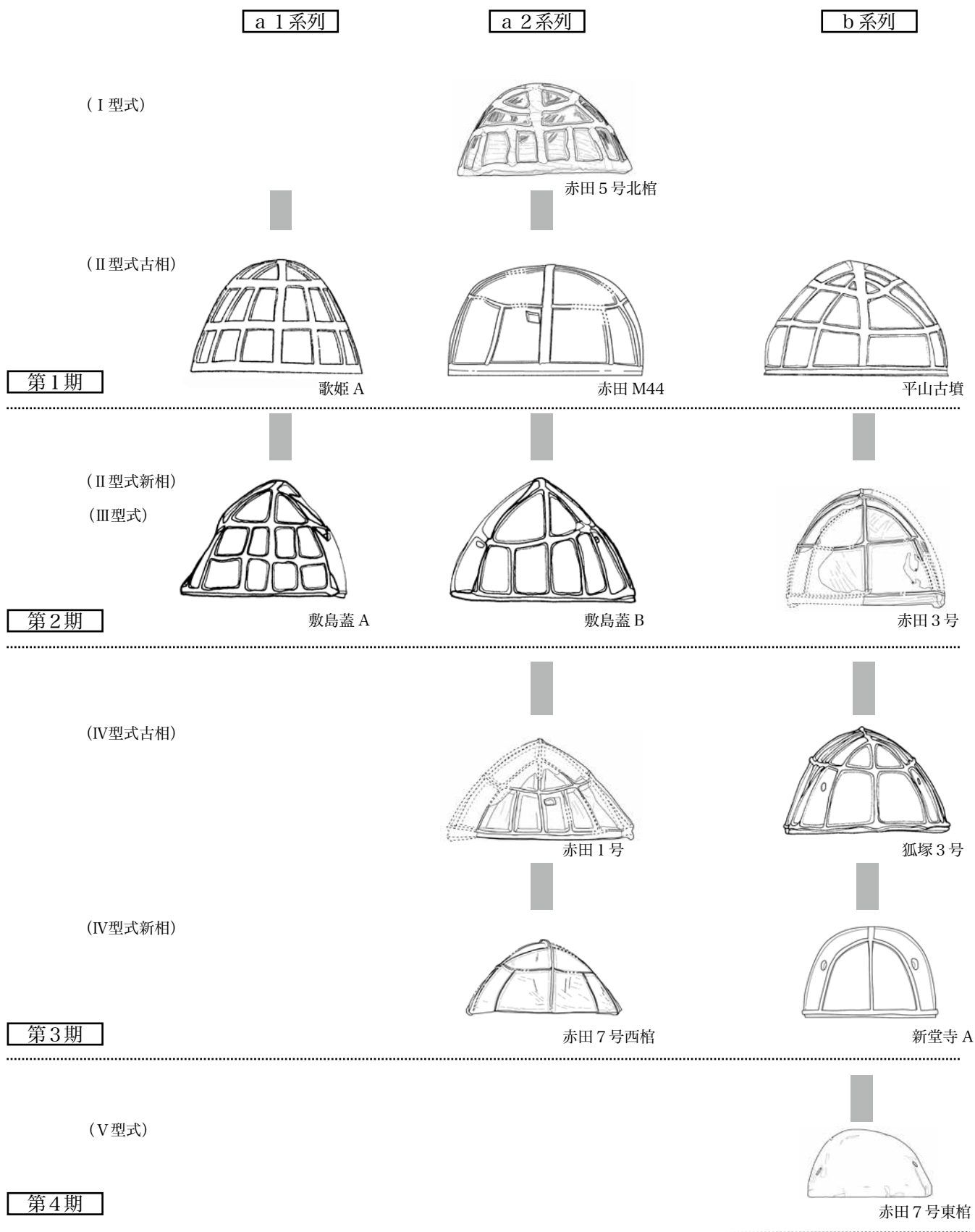


図 280 棺蓋の系列的变化

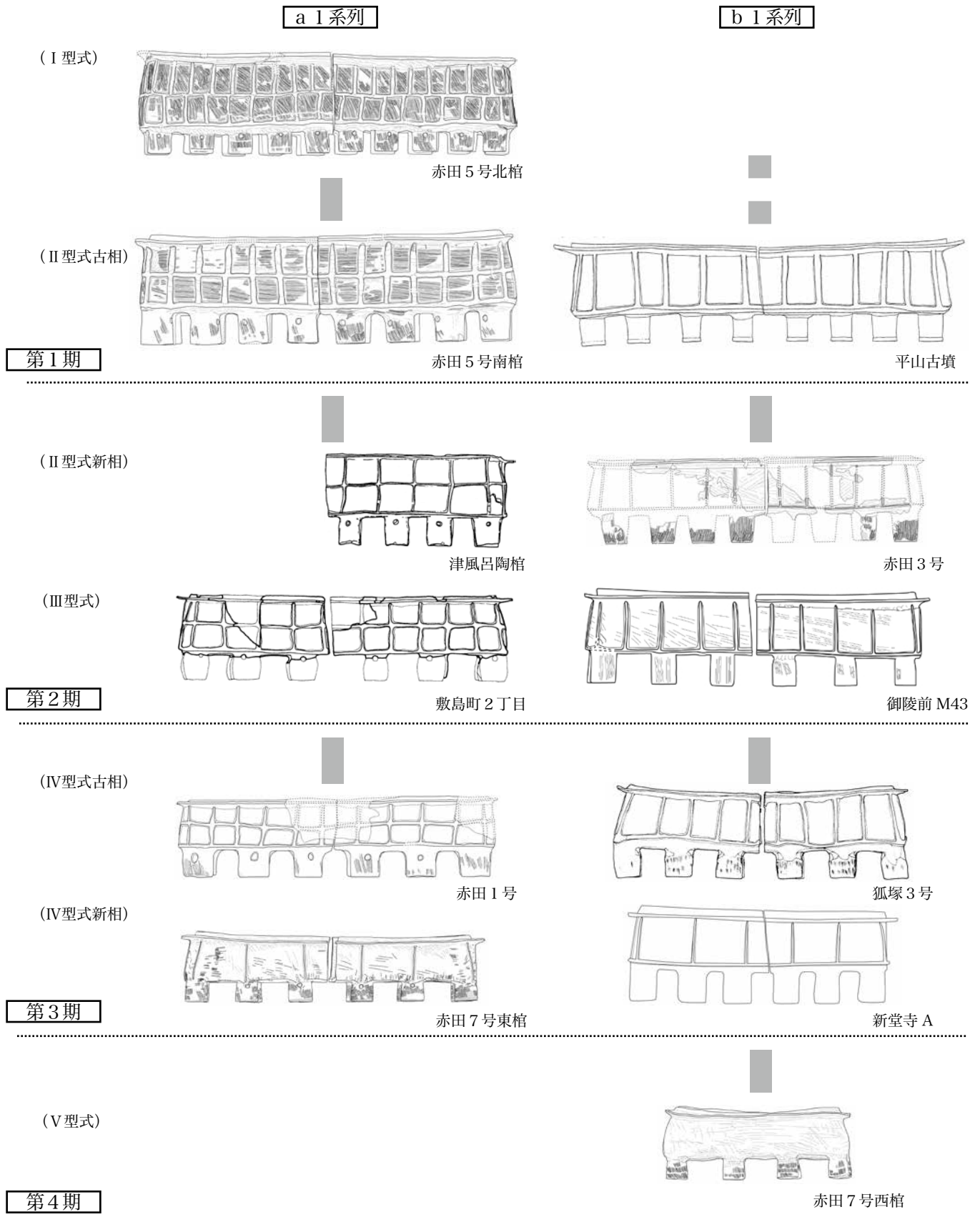


図281 棺身長側面の系列的変化

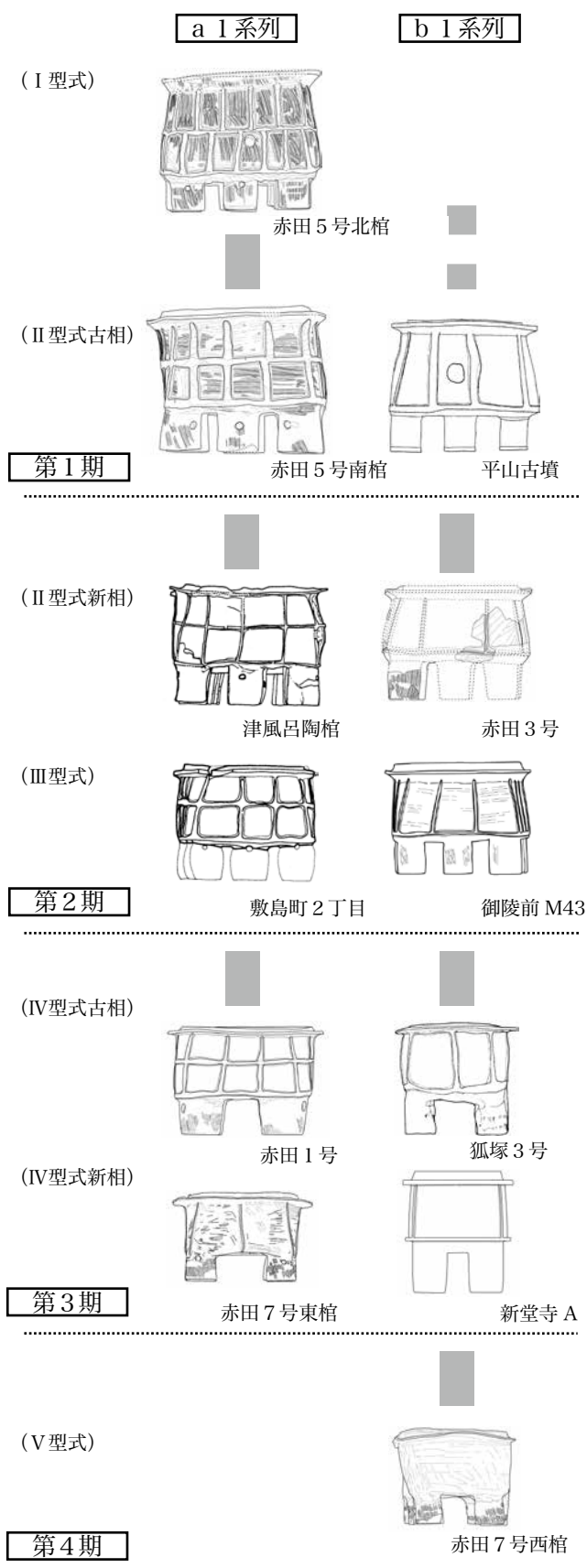


図 282 棺身短側面の系列的变化

で片側ずつ使用されて共存する。その断面形態は三角形に近くなり、屋根形化し始める。蓋を鍵形に切断する例がII型式新相の赤田3号墓陶棺まで残るが、小さく形骸化した形状である。また、III型式の御陵前M43陶棺では身底部を鍵形に切断している。鍵形切断が一部で残存するが、第3期には認められなくなる。棺身の短側面縦位突帯数は、a・b系列ともに2条である。脚の透孔が外面側1孔となり、第3期まで続く。

第3期 IV型式が製作される時期で、小型化が加速する。系列ごとに大きさの差異が明確化し、a系列は170cm以上の大きさを維持するが、b系列は伸展葬の限界となる150cm前後まで小型化する。棺蓋ではa1系列が姿を消し、a2系列とb系列のみとなる。棺蓋の形状でも差異が明確化し、a2系列が屋根形となるのに対して、b系列は半球形を維持し続ける。突帯数の減少化も顕著となり、棺蓋a2系列で口縁部突帯、棺身a1系列で横位突帯と周底突帯を省略する赤田7号墓東棺、同8号墓棺身がIV型式新相例として現れる。棺身a2系列はIV型式古相の新堂寺合葬古墳陶棺Bを最後に姿がみえなくなる。一方、b系列では棺蓋の口縁部突帯、棺身の周底突帯を最後まで省略せず、縦位突帯数のみを減少させた新堂寺合葬古墳陶棺AがIV型式新相例である。これらの新相例は長側面縦位突帯が6条となって脚の数と合致し、a系列の棺身では周底突帯を省略したことで縦位突帯が脚上端まで延びてくる。棺身の短側面縦位突帯数は、IV型式a系列が古相2条から新相1条に減少し、IV型式b系列が古相1条から新相で貼り付けなくなる。

第4期 遺骸を伸展状態で納棺できない大きさまで著しく小型化したV型式が製作される時期で、b系列のみが再葬容器へと機能変化しつつも製作を継続した。赤田7号墓西棺・赤田9号墓棺身・中町出土陶棺がこれに相当する。一方、遺骸の納棺に必要な大きさに固執したa系列の製作は第3期を最後に途絶えている。

また、赤田9号墓・中町陶棺出土地で円筒形陶棺の存在を確認できるので、第4期になって新たな再葬容器として円筒形陶棺の製作が始まったと推定できる。これは、土器棺の形状を模倣しながら縦置き型の陶棺につくり変えたものと考えられる。

IV. 陶棺の製作方法と特徴

陶棺を整理・復原する過程で製作方法といくつかの特徴に関する知見を得たので、ここにまとめておきたい。

1. 棺底の製作方法

陶棺を製作するうえで最も複雑な工程が必要となるのは、棺身の底部と脚部の接合箇所の造作であろう。須恵

質陶棺の中には、底部となる大きな方形粘土板の上に脚を並べて接合し、それをひっくり返すだけの単純なつくり方もみられるが、亀甲形陶棺の場合は異なっている。

赤田横穴墓群出土陶棺の底部の製作方法には、推定を含めて2つの類型が認められ、それぞれさらに2分できる。それを断面図で模式的に示すと、図283のようになる。

底部A類

A 1類 倒立した脚の下端内部と周囲に厚く粘土を充填もしくは貼り付けて底部製作の最小単位をつくり、それを接合した後に上面へ粘土を貼って底部を仕上げる。I型式の赤田5号墓北棺、II型式の赤田5号墓南棺・3号墓陶棺・平山古墳陶棺で確認できる。

A 2類 倒立した脚の下端内部と周囲に粘土を貼り付けた後、これを核にして底部をつくり、上面を調整して仕上げる。A 1を簡略化したつくり方とみられる。IV型式の7号墓東棺で認められる。底部の脚内部に相当する位置にあらかじめ穴を設ける中町出土陶棺もA 2類の可能性が考えられる。

底部B類

B 1類 脚部1行分に相当する長さで厚さ1.5～2cmの粘土板の上に脚を倒立して配置し、脚の下端内部と周囲に粘土を貼り付けて粘土板と接合する。これが底部製作の単位となり、必要分を接合して底部をつくる。III型式の赤田4号墓陶棺・赤田1号墳陶棺で認められる。

B 2類 B 1類のつくり方を省力化しただけで基本的には同じである。粘土板の厚さが1～1.5cmと薄くなり、脚との接合粘土も少量化し省略する箇所もみられるようになる。IV型式の赤田8号墓陶棺・V型式の赤田9号墓陶棺で認められる。なお、脚数の減少によって脚ごとに粘土板と接合する赤田7号墓西棺（V型式）もここに含

めておく。

底部A類の製作方法が先に行われ、遅れて底部B類でも製作するようになったとみられる。両類型の製作方法はa・b系列の陶棺どちらにも認められるので、技術の共有を看取できる。

確認できた亀甲形陶棺の底部製作方法と他地域の同製作方法との関連性をうかがうことができる資料が若干あるので、少し言及しておこう。陶棺が数多く出土する地域の一つとして知られる岡山県美作地方の亀甲形陶棺を詳細に観察した村上・橋本は、その製作工程を復原した(村上・橋本1979)。それによれば、脚の上部に円形の底部土台をつくり底部製作の最小単位とすること、脚1行分をブロック状に接合して底部の接合単位とするらしいこと、底部上面に粘土を貼ることなどの共通点が複数ある。他にも底部裏面から脚の間に板を当てて底部の沈下を防止するなど同じ痕跡が認められるようである。外見は違えども、基本的な製作方法を共有するような強い関係性が両者の間に潜在していた可能性は高いと考えられる。

そして、底部製作方法の関連性は須恵器技法を認める陶棺の一部にも及んでいる。岡山県釜田2号墳出土の切妻式屋根形陶棺の棺底は、「各行の脚をつないで1ブロックとし、計4ブロックを合わせて一方の棺底を形づくっている」(村上・橋本1979)ことが観察されている。また、京都府向日市長野岡田古墳出土の須恵質四注式家形陶棺を詳細に観察した中塚良は、棺底の成形技法について「短側面の延びに長辺を併行させる6枚ないし7枚の長方形の粘土板」を接合して成形されていること、脚をその粘土板に接着させてその周縁部に粘土を付加するので「底板が内・外2枚の粘土板接合の構造」となることを述べている(財団法人向日市埋蔵文化財センターほか1998)。ほかにも兵庫県東山12号墳出土の陶棺で「それぞれの脚に蓋をするように粘土をつけてからその周辺に粘土を足して成形している状態」を底部で観察できるという報告がある(中町教育委員会ほか2001)。

以上のように、陶棺の形式を越えて底部の製作方法が関連する資料群が存在していると考えられ、その分析は形式相互の系統関係を整理するうえで重要な視点となる可能性がありそうである。

2. 棺底の小穿孔

赤田5号墓南陶棺、歌姫赤井谷1号墓陶棺A・B、秋篠・山陵遺跡出土陶棺に棺底の小穿孔が認められた。穿孔の配置をみると、秋篠・山陵遺跡出土陶棺では不規則であり、その他は各脚の中央付近へ1孔ずつ規則的に行われている。孔の大きさは、径0.5cm前後で小さい。いずれ

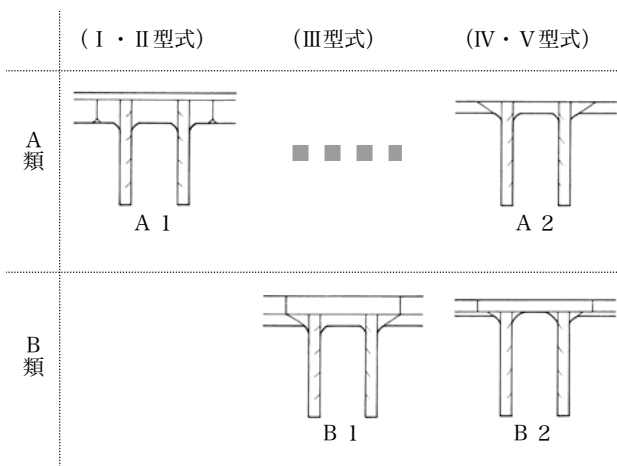


図283 底部製作方法の分類(模式図)

も棒状工具を内側から突き刺して穿孔する。今のところ、II型式までの陶棺にみられるようである。規則的な穿孔を認める赤田5号墓南棺、歌姫赤井谷1号墓陶棺A・Bには、蓋受け下辺に沿って刺突孔列が共通して残っている。したがって、棺底の穿孔配置が規則的であるか否かは関与した製作者の異同を示す可能性が考えられる。また、中町出土陶棺には製作過程で底部の脚内部に相当する位置にあらかじめ3cm×6cmほどの楕円形の穴を設けている。V型式まで棺底に穴を設ける例が存続したことを示しており、III～IV型式にも棺底穿孔例が今後見つかる可能性は十分にある。

旧国の北播磨地域で出土している須恵質亀甲形陶棺あるいはその影響を認める陶棺の中に、棺底の小穿孔を確認できる例が幾つかある(中村2001)。これらの製作時期は第1期よりも遅れるようであり、奈良北部からの影響を考えてもよいのではなかろうか。

棺底の小穿孔が行なわれた理由は判然としない。しかし、底部の表面調整が完了してから最後に穿孔されており、脚部透孔と同じ工具で穿孔する例の存在からみると、焼成時の火回りを考慮した可能性が高いように思われる。

3. 棺蓋口縁部端面に残る葉脈圧痕

I～IV型式古相の棺蓋口縁部端面には、一部を除いて葉脈圧痕が残っている。かつて村上・橋本が美作地方出土亀甲形陶棺の製作工程を復原した中で蓋身の一体製作を確認し、それとの関連性を想定して近畿地方の亀甲形陶棺では身の蓋受けの上に木葉を敷いて蓋をつくると考えた(村上・橋本1979)。しかし、蓋受け上で蓋を製作したとすると、糸切りで切断する際に身の口縁部が障害となるし、実際に身の口縁部から蓋受けにかけて蓋切断に関わるような痕跡は認められない。したがって、作業台の上に裏向けた木葉を敷いて棺蓋を製作したと考えるのが妥当であり、この方法が奈良北部では定式化していたことを示している。IV型式新相～V型式になると葉脈圧痕はみられなくなってくるが、作業台上で製作したことを示唆する木目や平坦面は残る。小型軽量化したことで、比較的容易に作業台から蓋を移動させることができるようになったためであろうか。

赤田1号墓棺蓋の良好に残る葉脈圧痕の観察から木葉を採集した樹種を検討してみたところ、ブナ科コナラ属ナラガシワの葉によく似ている。兵庫県東山12号墳出土陶棺に残る葉脈圧痕もナラガシワと推定されており(藤浦2001)、利用する木葉の樹種に共通性が認められる点は興味深い。

4. 板押さえの多用

陶棺の製作工程で板押さえが多用されているのも大きな特徴である。多用される箇所は蓋身ともに体部と突帯で、外面に行なわれる場合が多い。体部の板押さえは、外側へ張り出し気味の形状を整形するために行なわれる。突帯の板押さえは、高さを調整するために行なわれているように見え、扁平につぶれた形状となる例も少ない。a系列の突帯に目立って認められる。板押さえを多用する背景に、円筒植輪で観察できる底部調整や突帯の板による押圧技法との関連性を想定させる。

5. 乾燥時の形持たせに関わる痕跡

大型品であるため、乾燥時の変形にも細心の注意を払ったに違いない。ひび割れた箇所を補修した痕跡も少なからず認められた。そうした中で、変形防止のために形持たせで支持した痕跡を蓋身ともにいくつか観察することができた。

蓋の形持たせ痕跡として、①内面の藁縄状圧痕、②口縁外面の藁巻痕跡がある。①は、内側から蓋全体を支持した器具の表面に藁縄のようなものを緩衝材として複数並べ置いたことを示す痕跡と推定できる。III型式の赤田4号墓陶棺・赤田1号墳陶棺・御陵前M43陶棺、IV型式の赤田1号墓陶棺・赤田7号墓東棺・赤田8号墓陶棺、V型式の7号墓西棺、突起を有するB群の赤田9号墓陶棺で確認でき、第2期以降の蓋で顕在化する。一方、②は口縁部の変形防止を目的にして行われた痕跡と考えられる。赤田7号墓西棺1例で確認できるだけであり、臨時的に行なわれた方法の可能性がある。歌姫赤井谷1号墓陶棺B蓋の口縁部に認められる穿孔と板状圧痕も同様の目的で行われたものだろう。

身の形持たせ痕跡としては、①口縁部及び底部の長側内面に平行して残る板・木目圧痕、②蓋受け下辺に沿う刺突孔列、③底部裏面の板圧痕がある。

①は、長側面の変形を防止するために内側から板をあてた痕跡とみられる。I～V型式の陶棺で認められるため、定式化した方法であったと考えられる。

②は、①と逆に外側から器壁の変形を防止するために棒のような支持具を複数差し込んだ痕跡と推定できる。II型式古相の5号墓南棺・歌姫赤井谷横穴墓陶棺A・Bの3例にのみ認められる。器壁が高さ40cm以上もあるため、特にこのような支持具を必要としたのだろう。

③は、底部の沈下を防止するために裏面から脚の間に板をあてた痕跡である。IV型式新相の7号墓東棺、V型式の中町出土陶棺で認められる。脚間が開き厚みが薄くなる第3期以降の陶棺の一部で行なわれた方法とみられ

る。先述したように、岡山県美作地方の陶棺の一部でも同様の痕跡が確認されている。

なお、山城地方の須恵質四注式陶棺の長側面に認められる2孔1対の小穿孔について検討した木村は、2つの小孔の間に当て木をして紐を通し、内側から上方へ引っ張って長側面の変形を防止したと推考している（木村・吉岡 1979）。方法は異なるものの長側面で形持たせの行為を行なう点では①と共通する。乾燥工程において形持たせが一般化していた可能性を示しており、今後注意が必要である。

6. 緑彩色の陶棺

内外面に赤色顔料（朱）を塗布する例は土師質陶棺に多く認められるが、緑色を彩色する例は数少ない。赤田3号墓例（蓋身）・赤田1号墳例（蓋のみ）と天理大学図書館裏出土陶棺（村上・橋本 1979）の3例で緑の彩色を確認できるが、いずれも突帯区画の中を赤色と千鳥風に塗り分けている。赤田の2例には彩色しない区画も交えてあり、規則的な色の配置が行なわれているようにはみえない。緑色顔料の素材は、分析結果からセラドナイトの可能性が高い（第V章第2節）。今のところ第2期の陶棺にのみ認められるため、緑彩色の系譜や動向については今後の検討課題である。

7. 陶栓

陶栓には、円柱形とキノコ形が認められた（図284）。他に、透孔を切り抜いてできた粘土円板を焼成してそのまま栓に利用した平山古墳例もある。

円柱形陶栓は、I型式の赤田5号墓北棺から円形透孔に挿入された状態で発見された。キノコ形陶栓は、IV型式の赤田8号墓陶棺・赤田M37陶棺・新堂寺合葬古墳陶棺Aと共伴し、秋篠・山陵遺跡からも出土している。透孔の形状がわかる例はすべて円形である。方形透孔に

伴って陶栓が出土した事例は今のところないようであるが、今後確認される可能性はあるだろう。

陶棺との共伴関係からみて、円柱形陶栓が古く、キノコ形陶栓が遅れて現れると想定できる。そして、キノコ形陶栓には重厚で大きなもの

（秋篠・山陵遺跡例）と軽薄で小さいもの（赤田8号墓例など）があり、前者から後者へと陶棺の小型化に対応して変化したとみられる。

円柱形陶栓は片側（頭部）を透孔より大きく、もう片側（脚部）をそれより小さく作り、陶栓が棺内へ落下するのを防いでいる。この場合、透孔の形と大きさに合わせて頭部をつくらなければならない。また、円形透孔にしか装着できないため、方形透孔には方柱形陶栓を別につくる必要性が生じる。

一方、キノコ形陶栓は透孔より大きい笠部が頭部に代わり、小さめの軸部をそれに貼り付けてつくるので、多様な透孔に対応可能となる点で製作が容易になる。赤田8号墓陶棺のキノコ形陶栓の軸部は方柱形となっているが、蓋の透孔は円形である。この点を考慮すると、透孔の形状に合わせて軸部の形をつくり分けていた可能性があるものの、実際の使用時には円形・方形どちらでも装着できる柔軟性を有していたと思われる。

なお、陶栓を共伴しない例が多いため、実際には木栓が一般的に使用されていた可能性が高い。そして、歌姫赤井谷1号墓陶棺A蓋の透孔形状をみると、キノコ形木栓の存在も想定できる。陶栓にみられる形状の違いは、模倣した木栓の違いを反映しているとも考えられる。

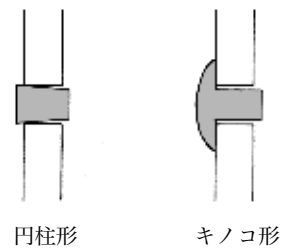


図284 陶栓の分類

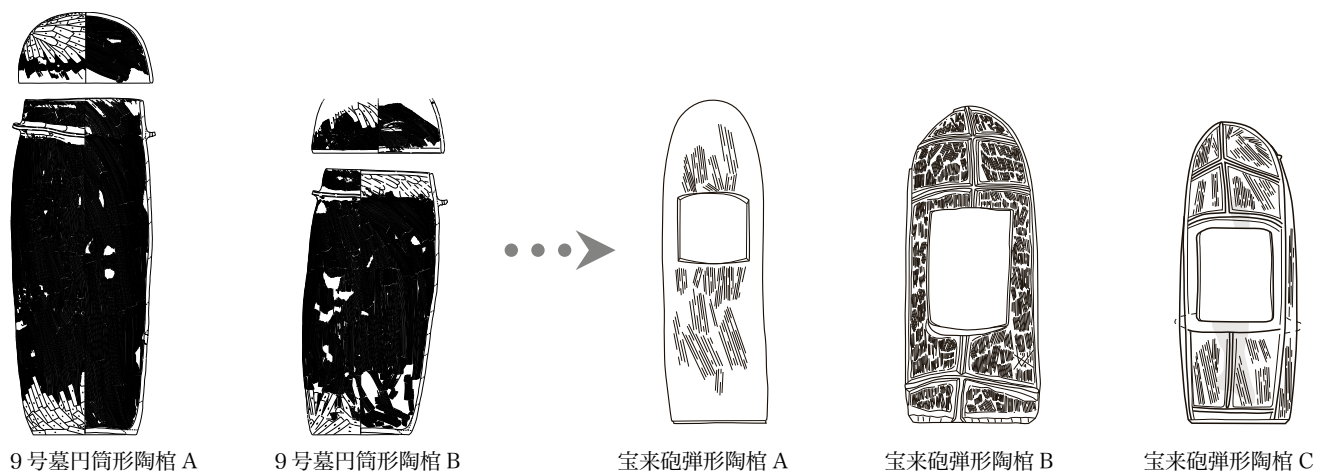


図285 円筒形陶棺から砲弾形陶棺へ

V. 円筒形陶棺と砲弾形陶棺

宝来横穴墓から出土したいわゆる砲弾形陶棺を観察する機会を得て、その製作方法を第V章第3節で検討した。その結果、粘土円盤の周縁に粘土を積み上げて内外面をタテハケ調整し製作する点で円筒形陶棺と共通することが判明した。大きく異なるのは上部をそのまま閉塞するか、閉塞せずに別作りの蓋で覆うかである。そのために、蓋をした円筒形陶棺と立て置きした砲弾形陶棺の形状はよく似ているわけである。

両者の大きさを比較すると、蓋をした円筒形陶棺の方が砲弾形陶棺よりも高い。しかし、底径は円筒形陶棺Aが26cm、Bが24.4cm、砲弾形陶棺Aが25cm、Bが29cm、Cが23cmであり大差がない。両者の大きさの違いは高さに反映されている。9号墓での棺配置からみて円筒形陶棺はAがBよりも古いと考えられ、高さが低くなる傾向を看取できる。この傾向を砲弾形陶棺にも適用すれば、A→B→Cの順で少しずつ低くなる。Aには外面に突帯がないので、円筒形陶棺の口縁をつくらずにそのまま上で閉塞した形状となる。この形状は、円筒形陶棺の身と蓋を一体化させた新たな形態の創出を示している。一方、中町出土の円筒形陶棺は高さが不明であるものの、もはや蓋を直接載せることができないほど蓋受けが退化し、紐孔はなくなっている。底部外面のヘラケズリも行なわれていない点で、砲弾形陶棺への過渡期的な製品として理解するのが妥当であろう。このような点から、円筒形陶棺が砲弾形陶棺へと形態を変化させていった可能性を推測することができる。

身と蓋の一体化によって、再葬骨の納入口を新たに設ける必要性が生じる。この場合、側面にそれを設けざるを得ないので、砲弾形陶棺Aでは上方に寄せて納入口が設けられた。その後、納入口を側面中央に大きくあける砲弾形陶棺B・Cが現れるため、この時点で高さに対して底が小さく安定性が悪いという欠点の解消が横置きにより図られたと考えられる。突帯貼付箇所に差異がみられる点は側面に上下の区別ができたことを示している。

このように円筒形陶棺が砲弾形陶棺へと変遷したとすれば、宝来横穴墓から亀甲形陶棺が出土していない点とも整合し、その製作時期は第4期よりも遅れる。陶棺の編年的観点からすれば、砲弾形陶棺の製作時期を第5期として設定することも可能であろう。(鐘方正樹)

1) なお、横位突帯間に三角形に突帯を貼り付ける宝来町出土例があるが、小片のためにその全容がわからない(森下1994)。森下が指摘するように後期の陶棺例と断定することが現状では難しいので、これについては言及しないでおく。

第3節 土器

I. はじめに

ここでは各横穴墓から出土した埋葬に伴う土器について、法量の変化や器種構成、個々の器種の形態変化を検討し、編年的位置について述べる。また、赤田1号墳から出土した土器についても適宜ふれることとする。使用する須恵器の編年、型式名、年代観は基本的に田辺1981に拠るが、一部の土器については奈良文化財研究所2014を参考にしている。

II. 法量・調整手法の変化

今回調査した横穴墓の中で比較的多く出土し、横穴墓どうしの比較が可能な器種の一つは須恵器杯Hである。この杯Hの法量の変化をみると、大きく3・4・5号墓から7・9号墓へ口径・器高とも縮小していることがみてとれる。(図286・287)。

3～5号墓の杯H身は口径がほぼ同じような数値を示しているが、5号墓からは杯H身の立ち上がり径が11cm台のものと12～13cmのものが出土しているのに対して、3・4号墓では10～11cm台で、12～13cmのものはない。調整手法でも違いがあり、身・蓋外面のロクロケズリをみると、5号墓のものは体部中程まで施されているが、3・4号墓からは1/3程度とケズリの範囲が狭くなったものが出土している。この点からみれば、5号墓の杯Hは3・4号墓に比べてやや古相を示しているように思われる。

7号墓や9号墓になると、口径の縮小化が進み、9号墓の墓道出土のものは10cm台、7号墓の玄室出土のものは7～9cm台である。器高は3.5cmを越えるものはみられない。頂部、底部外面の調整は7号墓や9号墓ではヘラ切り後未調整のものが多くなっている。

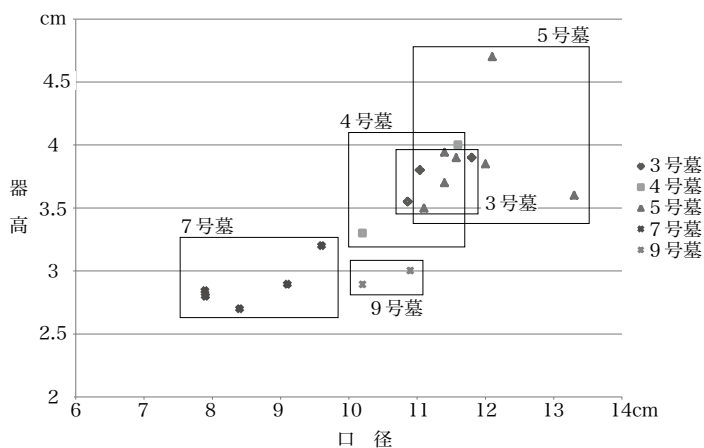


図286 須恵器杯H身の法量分布
(3～5・7号墓：玄室、9号墓：墓道)

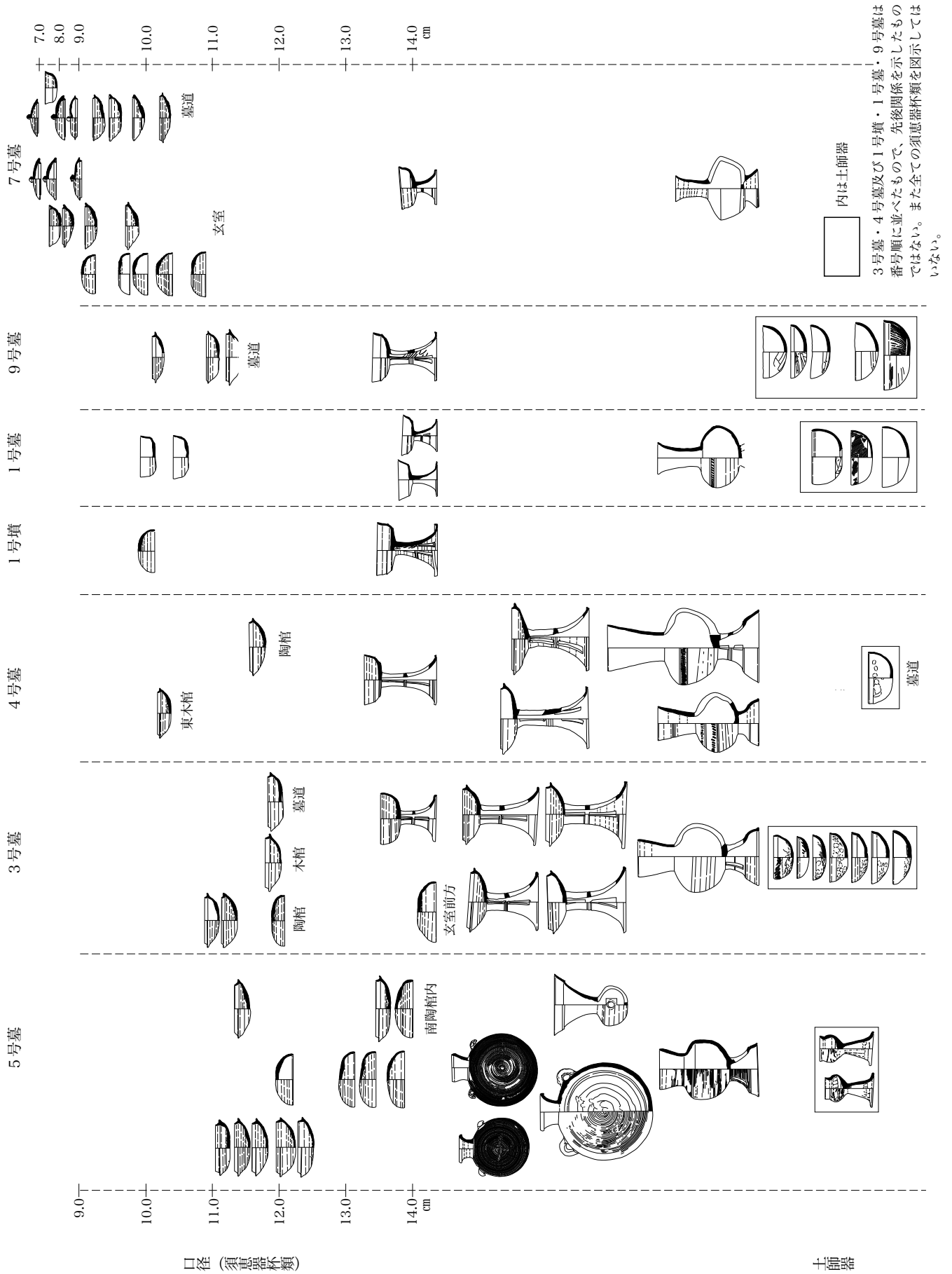


図 287 赤田横穴墓群・赤田1号墳出土の主な土器と器種の変遷

表12 赤田1～9号墓出土土器一覧（奈良・平安時代除く）

	須 恵 器										土 師 器			
	杯H	杯G	有蓋高杯	無蓋高杯	台付長頸壺	長頸壺	短頸壺	甕	提瓶	甗	椀	甕	甗	脚付壺
1号墓		○	○(蓋4)	○	○						○	○		
2号墓												○		
3号墓	○		○	○	○	○	○	○			○	○		
4号墓	○		○	○	○			○			○			
5号墓	○				○		○	○	○	○				○
6号墓				○				○						
7号墓	○	○		○	○	○	○	○				○		
8号墓								○				○		
9号墓				○							○	○	○	
1号墳	○			○	○			○						
奈良博	○		○		○			○			○	○	○	

このように、杯Hは法量の縮小化・調整手法の簡略化という流れをたどることができる。

III. 器種構成の変遷

器種構成に関しては、盗掘を受けている横穴墓もあるので副葬された土器が全て残っているとは限らないし、複数の棺が埋葬されている場合は追葬の際に加えられた土器もあろう。逆に1号墓や3号墓の陶棺のように他の横穴墓に持ちだされたものもあるかもしれない。しかし、一つの横穴墓から出土した土器は、人為的に他の横穴墓から動かされたとみられるもの、明らかに時期の異なる奈良時代～平安時代、室町時代の土器を除くと明確な時期（型式）差がないと考えていることは、各横穴墓の項で述べたとおりである。ただし、このことは初葬から追葬までが必ずしも1型式の時間幅の中で行われたと限定するものではない。土器の副葬を伴わない埋葬があったかもしれないからである。このことを前提とした上で記述を進めていくこととする。また、土師器甕のみの出土であった2号墓、玄室への埋葬がなく土器が出土していない6号墓、比較できる器種が少ない8号墓については基本的に除く。

各土器群の器種構成とその時間的な変遷については、先に述べた須恵器杯Hの法量の縮小化、技法の簡略化を基準に器種の消長などを勘案し、以下のように考える。

まず、1～9号墓から出土した土器群の中で最も古く位置づけられるのは5号墓出土の土器群であろう。その中には須恵器甗、提瓶、土師器脚付壺がみられ、これらの器種は他の横穴墓にはない。杯H以外で他の横穴墓と比較できるのは須恵器台付長頸壺である（図289）。杯Hの流れで台付長頸壺をみていくと、5号墓のものは頸部が体部に比して短く、口縁部が内湾気味である。体部は肩部が緩やかではあるがやや角張っている。3号

墓玄室、4号墓玄室から出土したものは頸部が直線的にのび、体部は丸味を帯びる。頸部と体部の比率は1：1に近い。1号墓玄室、7号墓玄室から出土したものは体部に比してやや頸部が長く、上方に向かって外反しており、7号墓のものは体部肩部が角張っている。台付長頸壺については、大阪府河南町一須賀古墳群出土品を対象にして分類とその時間的な変遷が検討されているが（飯田2012）、赤田横穴墓でみられる上述のような流れはそれとも概ね合致するとみてよさそうである。

赤田横穴墓群の関連資料として調査した奈良国立博物館所蔵の赤田横穴墓明治37年出土土器、奈良県立橿原考古学研究所所蔵の中山横穴出土土器については詳しい出土状態が不明であったり、工事中の不時発見であることから全容は不明とせざるを得ない。しかし、採取された土器や発見時の写真をみると、赤田横穴墓資料には須恵器杯Hや提瓶があり、無蓋高杯を欠くこと、中山横穴墓資料には須恵器甗・提瓶があることは赤田5号墓出土土器と類似する。陶棺のII型式古相に分類される平山古墳出土土器の中にも甗や頸部の短い台付長頸壺があり、陶棺の型式と副葬される土器の器種に共通性が伺える。

杯Hの法量だけでなく、台付長頸壺の形態、環状把手の付く提瓶や甗を含むという器種構成の点からも5号墓は3・4号墓よりも古相を示すと考えられる。

3号墓・4号墓は5号墓に次ぎ、5号墓にはない須恵器有蓋高杯・無蓋高杯、土師器椀など、共通する器種も多くみられる。須恵器無蓋高杯、土師器椀はこれ以後の横穴墓からも出土している器種である。3・4号墓の先後関係は土器のみでは不明である。

3・4号墓に次ぐのが1号墓・7号墓・9号墓である。須恵器杯、無蓋高杯、台付長頸壺が前段階から続く器種であるが、新たな器種として乳頭状のつまみがつく蓋と

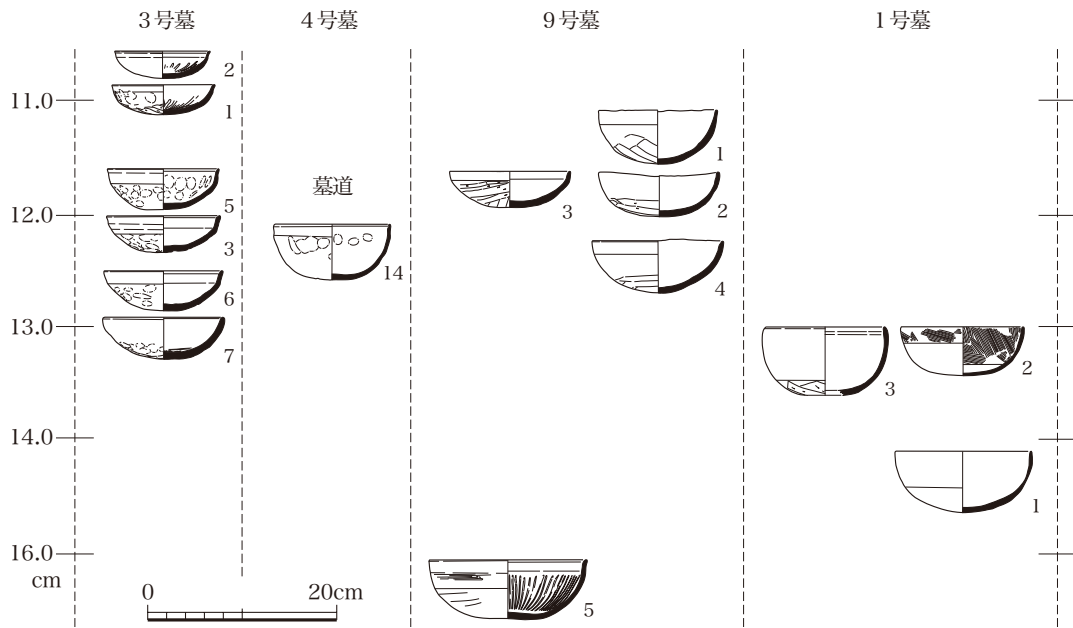


図288 赤田横穴墓群出土の土師器杯・碗 (1/8)

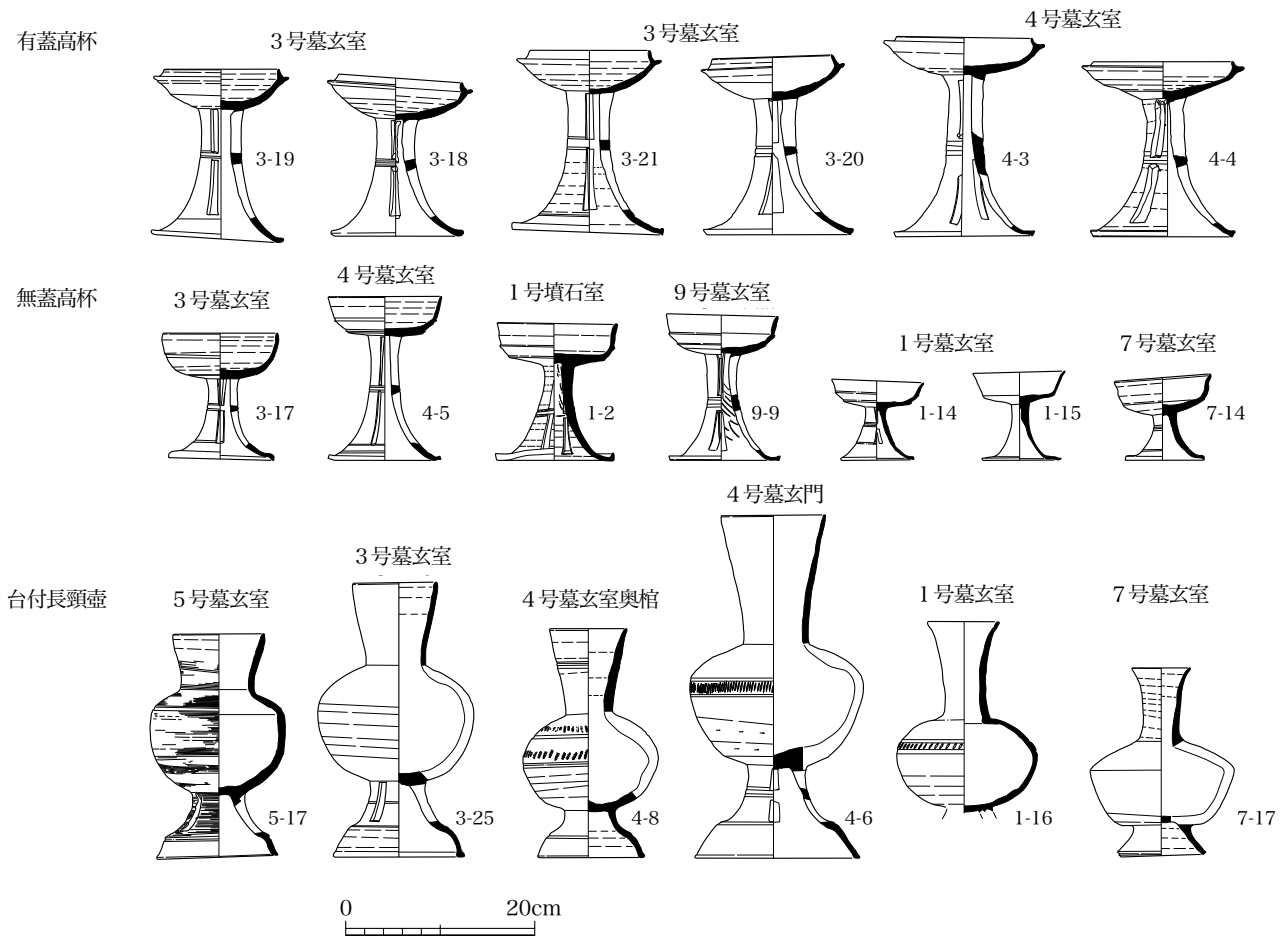


図289 赤田横穴墓群出土の有蓋高杯・無蓋高杯・台付長頸壺 (1/8)

表13 赤田横穴墓群から出土した土器の編年的位置づけ

須恵器型式	赤田横穴墓群・1号墳出土土器	参考資料
MT85 TK43	5号墓出土土器	中山横穴墓出土土器 赤田横穴墓出土土器
TK209 TK217	3号墓出土土器	1号墳出土土器
	4号墓出土土器	
	1号墓出土土器 9号墓出土土器	
	7号墓出土土器	

※ 各期の横穴墓名は番号順に表記しており、先後関係を示すものではない。

箱形の杯とがセットになる須恵器杯G、あるいは外面にヘラミガキ、内面に放射状暗文を施す土師器杯Cが出土している。有蓋高杯はみられない。

器種構成の違いは、被葬者の階層性の反映（寺前2005）や葬送儀礼の規範の差異（森本2012）といった観点もあり、特に5号墓と3・4号墓とをそういった違いとみることもできるかもしれない。しかし、杯Hの法量や台付長頸壺の形態が明確に異なるなど、そのことを考慮したとしても時間的な差はあるだろう。

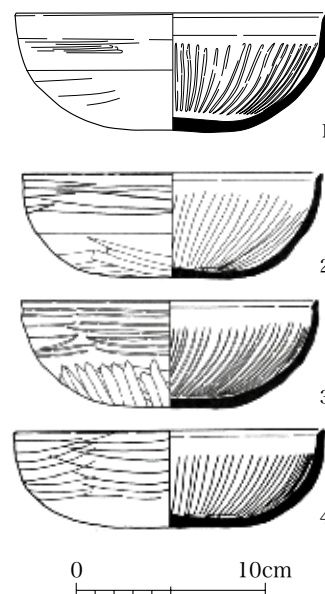
IV. 編年的位置づけ

最後に出土土器の編年的位置づけについて述べる。

これまで述べてきた杯Hの法量、器種構成、個々の器種の特徴などから、5号墓出土土器はMT85～TK43型式に属し、6世紀中頃～後半にかけての時期、3・4号墓出土土器はTK43型式に属し、6世紀後半に位置づけられよう。

赤田横穴墓群に近接して発見された赤田1号墳は須恵器杯H蓋・無蓋高杯が各々1点で難しい面があるが、無蓋高杯はTK209型式に位置づけられ、7世紀初頭のものと考えられる。短脚の高杯はTK217型式以降で、追葬時のものであろう。

1・7・9号墓出土土器はTK217型式以降で、7世紀前半から中頃に位置づけられよう。この1・7・9号墓の先後関係については、3つの横穴墓に共通する器種が無蓋高杯のみである。9号墓の無蓋高杯は長脚で2段2方透かしが施されている。1号墓、7号墓は短脚である。1号墓からは透かしのあるものとないものが出土し、7号墓のものには透かしがない。このような違いはあるが、これをそのまま時期差と考えてよいかは出土点数が少なくもあり、判断し難い。そこで、9号墓から出土した土師器杯Cをみると、この杯Cは径高指数（器高/口径×100）が37.1である。土師器杯Cの径高指数は飛鳥Iが41前後、飛鳥IIが32前後で（奈良国立文化財研究所1995）、9号墓の杯Cはその中間の数値を示している。器高がやや深く底部が平底で、底部外面



1 赤田9号墓 2 飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層
3 甘樫丘東麓遺跡 SK184 4 坂田寺 SG100

図290 土師器杯Cの比較 (1/4)

から口縁部下半までヘラケズリしている点は飛鳥Iに位置づけられている飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土土器や甘樫丘東麓遺跡SK184出土土器に類似すると考えたい(図290)。同じく飛鳥Iの甘樫丘東麓遺跡SX037からは長脚2段2方透かしの無蓋高杯も出土している。また、1号墓の2点の杯Gの口径はそれぞれ9.8cm・10.4cmで飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土土器に近い。こういったことから、1・9号墓の土器は飛鳥Iに並行し、7世紀初頭～前半のものと考えられる。

1号墓と7号墓からは台付長頸壺が出土している。1号墓のものは頸部が長く、体部は丸味を帯びるが、7号墓のものは頸部が1号墓よりは短く、肩が鋭く張り、脚部は短く透かしがない。7号墓は立ち上り径8cm台の須恵器杯Hが出土しており、台付長頸壺の形態も考慮すると7号墓出土土器は1号墓よりも新しく位置づけてよかろう。杯H身・蓋の法量、形態は飛鳥IIに位置づけられている坂田寺SG100に近いことから¹⁾、7号墓の土器は飛鳥IIに並行し、7世紀中頃のものと考えられる。

以上のことから、各横穴墓出土土器の編年的位置づけを表13のようにまとめておきたい。ただし、これは出土した土器を位置づけたものであり、必ずしも横穴墓が造られた時期や順序を示すものではないことを付記しておく。

(池田裕英)

1) 奈良文化財研究所の杯H身の口径は蓋を受ける接触位置で計測されているため、報告書に掲載されている図面にスケールを用いて立ち上り径を計測して比較した。

第4節 赤田1号墳

I. はじめに

ここでは、赤田1号墳の調査成果をもとに、陶棺を埋葬する墳墓形態の差異とその意義について検討する。

大和北西部は古墳時代後期以降、横穴墓に陶棺を埋葬する墳墓形態が主体となる地域として周知されてきた。しかし、赤田1号墳は横穴式石室に陶棺を埋葬する「古墳」であることが判明し、当地域の陶棺を埋葬する墳墓形態にも多様性があることを示した。したがって、陶棺埋葬を行う墳墓形態の差異の要因を明らかにすることで、赤田1号墳の意義を提示したい。

II. 赤田1号墳と赤田横穴墓群の関係性

赤田1号墳は、赤田横穴墓群のある丘陵尾根の頂部に位置し、両者の密接な関係を示唆する。よって、各々を構成する要素の関係を表14にまとめた。

共通点は、棺と出土遺物が類似し築造時期も並行する。なかでも棺は土師質亀甲形陶棺で、製作技法・形態の特徴が同じであり、同一集団の製作である可能性が高い。そして、両者とも8世紀に祭祀を行っていたことが出土遺物から分かっており、奈良時代にまで祭祀を継続していたことが共通する。

相異点は、立地・墳丘の有無・埋葬施設である。墳丘盛土や横穴式石室の構築は、横穴墓を築造するより多くの労働力を必要とすることが容易に想定できる。

また、赤田1号墳の西側には6基の古墳が確認されており、須恵器・埴輪の出土が伝わる¹⁾。現在は消滅し、詳細は確認できない。しかし、赤田4号墓などでV期の円筒・形象埴輪が流入土から出土しており、赤田横穴墓群の上方に6世紀前半～中頃を下限とする古墳が存在したことを暗示する。赤田1号墳は、これらの消滅した古墳群と近接しており、同じ古墳群に含まれる可能性がある。本稿ではこれを考慮して、「赤田古墳群」と仮称する。この場合、赤田横穴墓群は最古の5号墓が6世紀中頃～後半であるため、古墳群が先行して築造されたと考えられる。

したがって、赤田1号墳を含むと推定する赤田古墳群と赤田横穴墓群は、同じ丘陵尾根で墓域を共有していた

と考えることができる。そして、同一の墓域内に古墳群と横穴墓群が併存して築造されていた可能性が高いことが明らかになった。

III. 秋頭古墳群と御陵前陶棺例との関連性

赤田古墳群・横穴墓群と同様の事例は、同じ奈良市北西部に位置する秋頭古墳群と御陵前陶棺出土地で確認できる。

秋頭古墳群は、赤田1号墳の北東約1.5kmに位置し、南へのびる尾根上に立地する。明治時代には約13基の古墳が確認できたが、現存するのは4基である。前方後円墳と円墳からなり、最北の1号墳で横ハケの円筒埴輪が確認されたが、それ以外で埴輪が出土する古墳はいずれも埴輪編年V期に位置づけられる(奈良大学考古学研究会2001)。また、第V章第3節にあるように、開墾中に発見された上畑陶棺は、秋頭古墳群の最南に位置する5号墳から出土したものであることが明らかとなった。石室等の存在は確認されておらず、陶棺直葬古墳であったと考えられる。陶棺の形態や共伴した須恵器杯G蓋から7世紀の築造と推定できる。したがって、秋頭古墳群は5世紀末～7世紀にかけて築造された古墳群であり、陶棺を埋葬する古墳を含む。

一方、秋頭古墳群のある丘陵西側斜面地では、明治時代に御陵前M43・44陶棺が出土しており、ここに横穴墓群の存在が想定できる。ここでは、「御陵前横穴墓群」と仮称する。陶棺の形態から6世紀後半～7世紀初頭の横穴墓群と考えられる。つまり、尾根頂部に秋頭古墳群、西側斜面地に御陵前横穴墓群が築造されている。

秋頭古墳群と御陵前横穴墓群は、赤田古墳群・横穴墓群の関係と非常によく似る。つまり、これらふたつの事例は陶棺埋葬という特徴と墓域を共有し、墳墓形態は異なるもののそこに同一集団性を見出すことができる。また、いずれの例も古墳群が先行して築造された可能性が高く、横穴墓群はそれに遅れて築造が始まるが、両者の築造時期は並行する。よって、古墳から横穴墓に墓制が変化したという可能性は排除できる。

IV. 大和北西部における陶棺埋葬の墳墓形態と階層差

上述した2例の古墳と横穴墓の差異は立地、墳丘の有

表14 古墳と横穴墓の関係と比較

	赤田古墳群	赤田横穴墓群	秋頭古墳群	御陵前横穴墓群
立地	丘陵尾根頂部	丘陵尾根斜面	丘陵尾根頂部	丘陵尾根斜面
墳丘の有無	有(消失)	無	有(円・前方後円)	無
埋葬施設	横穴式石室ほか	横穴	直葬ほか	横穴
棺	土師質亀甲形陶棺ほか	土師質亀甲形陶棺	土師質亀甲形陶棺ほか	土師質亀甲形陶棺ほか
出土遺物	耳環、須恵器ほか	耳環、鉄器、須恵器ほか	須恵器、埴輪	須恵器
群形成期間	6世紀前半～7世紀初頭	6世紀中頃～7世紀前半	5世紀末～7世紀前半	6世紀後半～7世紀前半

無、埋葬施設のみである。仮に副葬品に大きな差があれば、両者の階層差を明示するが、両事例では副葬品が不明確であることも合わせて、明確な差が表れていない。

そこで、赤田1号墳が横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが大きな意義をもつ。大和北西部の地質は、石材を採取することが困難な大阪層群に由来する砂礫層で形成されており、横穴式石室が未確認の地域であった。そのため、赤田1号墳の石材は遠方から搬入されたことが容易に想定でき、奥田尚による石室石材の観察結果もそれを裏付けるものである²⁾。仮に、奈良市大和田付近が赤田1号墳石室石材の産出地とすれば、陸路での2地点間距離は、崖等を迂回し谷筋を通るルートで約10kmである。石材を運搬するには、この距離を幾度か往復しなければならず、労働力の確保が必要となる。

つまり、赤田1号墳を築造するには、横穴墓と比べて多くの労働力の確保が必要で、それを可能にするだけの権力を保持した被葬者が想定できる。横穴墓群を見下ろし、大和盆地を見渡せる尾根頂部に古墳を築造しているのも、社会的地位の高さを反映している。したがって、赤田1号墳と赤田横穴墓群の関係からみた墳墓形態の差異は、階層差に起因すると考えることができ、秋頭古墳群でも同様のケースを推定することができる。

V. 陶棺をもつ菅原・秋篠土師氏の墓域と赤田1号墳

赤田1号墳の石材が、石材産出推定地付近から運ばれた可能性のあることは、土師氏の墓域を考える上でも興味深い意義をもつ。埴輪の製作と類似する技法で作られた陶棺が土師氏に関連することは、大和北西部で陶棺が多く出土し、当地が菅原・秋篠土師氏の本拠地である可能性と合わせて、すでに論じられてきた(丸山1973)。さらに菅原東遺跡から陶棺片が出土したことで、この可能性が一層高まった。

そこで、改めて大和北西部の陶棺分布をみると(図252)、菅原東遺跡を囲う北・西側丘陵尾根に散在し、とくに北側丘陵に多い。一方、分布の南限は中町陶棺出土地であり、そのやや北東には宝来横穴も存在し、西ノ京丘陵の南へも分布が広がる。ただし、陶棺を埋葬する横穴墓は、富雄川を越えた西側の矢田丘陵では確認できない。

また、中町出土陶棺はV型式と円筒形が共伴した可能性が高く、赤田9号墓と様相が共通する。

このように、大和北西部で出土する陶棺は細部の差異はあるものの、製作技法、形態変化の推移がおおよそ一致した同じ製作系列の製品であることがわかる。また、それを埋葬する墳墓で8～9世紀の追祭祀が確認できる

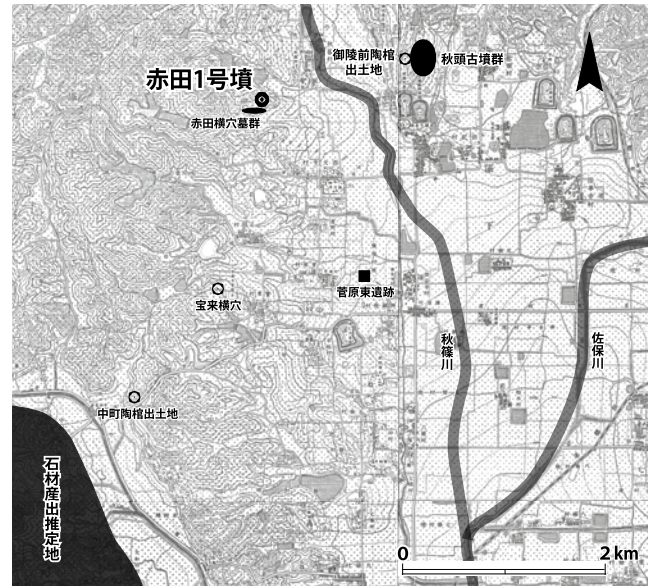


図291 石材産出推定地と赤田1号墳

などの特徴があり、陶棺埋葬墳墓の分布域は同一集団性が窺える一つの墓域としてまとまる可能性がある。

この可能性は、赤田1号墳の石材産出推定地と、陶棺を埋葬する墳墓が富雄川流域にまで及ぶことが相互に関係することで裏付けることができる。つまり、赤田1号墳の石材産出推定地は、陶棺埋葬を主とする集団の墓域南限に近接することで、その妥当性が高まる。また、散在する小群が陶棺の共有によってまとまる傾向、そのなかに古墳を伴う規模の大きな墓域が形成されている点からみて、相応の氏族集団の存在が想定できる。当地周辺が菅原・秋篠土師氏の本拠地であることや、埴輪製作技術を基本とした陶棺が共有され埋葬棺として採用されることから、従来通り被葬者像として、菅原・秋篠土師氏を推定するのが妥当であろう。

赤田横穴墓群・赤田1号墳の調査によって、土師氏の墓域の妥当性を高めるとともに、陶棺埋葬の墳墓形態に重層性がみられる可能性を示すことができた点で、重要な成果と言えるだろう。(村瀬 陸)

註

- 1) 「奈良県遺跡地図 web」 <http://www.pref.nara.jp/16771.html>
- 2) 「石材の中粒黒雲母花崗岩と片麻状細粒黒雲母花崗岩は石室の石に互いにレンズ状に含まれており、同じ場所で採石された石材であると推定される。片麻状細粒黒雲母花崗岩が分布する地で、レンズ状に優白質の中粒黒雲母花崗岩をレンズ状や脈状に含む石は、矢田丘陵の北東部に位置する奈良市大和田から大和郡山市矢田付近に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。当付近の山地に露出する石を剥がして、あるいは点在する石を採石して運搬したと推定される。」(奥田観察所見)

第5節 結語

これまで実施した発掘調査によって、赤田横穴墓群は15基以上で構成されていることが判明した。そして、玄室内を調査した1号墓から9号墓については、6世紀中頃～後半から7世紀の中頃にかけて埋葬が続き、8～9世紀頃まで何らかの祭祀が断続的に行われていた。第VI章第1節から第3節でみたように、各横穴墓の形態と閉塞方法、出土した陶棺や土器から横穴墓群の変遷をうかがうことができ、総括すると以下のように大きく4時期に区分してその変遷を理解できる。その内容について以下に記すとともに表15にまとめて示した¹⁾。

1. 横穴墓の変遷

赤田1期 (6世紀中頃～後半)

出土した土器、陶棺からみると、赤田横穴墓群(東群)は6世紀中頃～後半に5号墓の築造から始まったと考えられる。

5号墓は丘陵南斜面の中央部につくられている。この位置は東の1・2号墓が存在する場所や西の9号墓とは段差で画された平らな造成面の中央にあたる。玄室は長さ4.9m、奥壁幅2.8mと調査した横穴墓中では最大の規模である。羨道が長く、板と土を用いて羨道を閉塞する。玄室内には2基の陶棺が玄室の主軸に対して横向きに置かれていた。陶棺の脚数は北陶棺が10行3列、南陶棺が8行3列で、全長2mを越える大型の陶棺である(I型式・II型式)。玄室は未盗掘で、埋葬時の状態を知ることができた。両棺内には玉類、耳環、鉄刀、鉄鏃などが副葬され、その出土状態から遺骸は頭を西に向けていたことがわかる。同時期の横穴式石室の副葬品と比べるとやや質素であることは否めない。耳環や枕に用いられた須恵器の数から南陶棺内には追葬があったとみられる。出土した土器には杯Hや台付長頸壺の他、臛、提瓶、土師器脚付壺が含まれ、これらの器種の存在は他の横穴墓より古い要素とみることができる。

赤田2期 (6世紀後半～7世紀初頭)

5号墓に次ぐのは3・4号墓で、5号墓と同じ平坦面の東隣に、玄室の主軸をほぼ揃えてつくられる。

3号墓の玄室の平面形態は南北に細長く、陶棺の主軸も南北方向である一方、4号墓はやや幅広で、陶棺の主軸が東西方向である。玄室の規模と棺の主軸には相関があると考えられるとともに、玄室と棺の主軸の関係も横向きと縦向きの両者が並存する。3・4号墓とも陶棺の前方(南側)に陶棺とは材質が異なる木棺が追葬される。

3・4号墓は5号墓に比べて羨道は短いが、閉塞は板

と土を用いて行っている。陶棺の脚数は3号墓が8行3列、4号墓の陶棺が推定で6行3列である。いずれの棺身も横位突帯がないb系のII型式新相・III型式で、2系列が顕在化する時期でもある。両横穴墓とも盗掘され、副葬品の全容は不明であるが、耳環や鉄製品が出土しており、5号墓とそれほど違わなかったように思われる。土器の器種構成では杯H、台付長頸壺があることは5号墓と変わらないが、臛、提瓶がみられなくなり、有蓋高杯が副葬されるようになることがこの2期の特徴といえる。

赤田1号墳は横穴墓群の北東の尾根上に位置する。大きく改変を受けた土地での工事中の不時発見のため周囲の状況がよくわからないのは残念であるが、赤田横穴墓群の西北に円墳群があったのと同じく、1号墳の周囲にも同様の古墳があった可能性は考えられよう。出土している陶棺や須恵器から赤田2期に築造されたと考えられる。横穴墓群と古墳群が近接して存在する点については第VI章第4節で詳しく述べているので繰り返さないが、同じ奈良市内の秋頭古墳群と御陵前陶棺出土地の例もあり、墳墓形態の差異は階層差に起因すると考えられる。

赤田3期 (7世紀初頭～前半)

6～8号墓は3～5号墓の西隣に玄室の主軸を違えてつくられる。また、1号墓は3号墓の東の一段高い位置につくられる。

玄室の規模はそれまでの横穴墓に比べるとやや小さくなり、閉塞の方法も基本的には土のみで行うようになる。7号墓は板を用いたとみられるが、墓道に板を立てるための掘り込みはみられず、閉塞方法も簡略化していくのであろう。6～8号墓は羨門幅が墓道幅より狭くなっている。7・8号墓は玄室の主軸と陶棺の向きは一致している。陶棺は脚数が6行2列で、全長も1.5～1.8m程度と一段と小型化が進む(IV型式古相・新相)。8号墓は玄室から出土した土器が少なく時期を決めがたいが、陶棺の型式からみて3期につくられたと考えられる。土器の器種構成は前段階から引き続き杯H、台付長頸壺、無蓋高杯が副葬されるが、有蓋高杯がみられなくなる。

7号墓には陶棺が置かれる以前に初葬の木棺があった。7号墓から出土した埋葬に伴う土器は7世紀中頃のものと考えられるが、7号墓の東陶棺は型式からこの土器よりも時期が遡り、1号墓と同じ頃のものともみられる。そうすると、7号墓出土の土器は西陶棺に伴うもので、木棺・東陶棺には土器が伴っていないことになる。

遺物が少なく、時期を決めがたい2号墓、6号墓については横穴墓の位置や玄室の主軸の方向がそれぞれ隣接

表 15 赤田横穴墓群の変遷

須恵器型式	時期	期	墓室	陶棺	副葬土器	造墓順	横穴墓の特徴
MT85 TK43	6 世紀	赤田 1 期	1 期	第 1 期	5 号墓	5 号墓	羨道が長い。墓室（玄室＋羨道）全長は奥壁幅の 2 倍以上。初葬時、羨門を板で閉塞する。陶棺 2 基を埋葬。陶棺は玄室主軸に対し横向き。
		赤田 2 期	2 期	第 2 期	3 号・4 号墓	3 号・4 号墓	
TK209	7 世紀	赤田 3 期	3 期	第 2 期	1 号墳	1 号墳	羨道が短い。墓室全長は奥壁幅の 2 倍以上。初葬時、羨門を板で閉塞する。初葬は陶棺、追葬は木棺。陶棺の向きは横向きと縦向きが併存。
第 3 期				1 号墓			
TK217		赤田 4 期		第 4 期	9 号墓 7 号墓	9 号墓	9 号墓を最後に新たな横穴墓がつくられなくなり、既存の横穴墓に追葬。円筒形陶棺が使用される。

※ 各期の横穴墓名は番号順に表記しており、先後関係を示すものではない。

する 1 号墓や 7・8 号墓と近いことから 3 期に属すると考えておきたい。

赤田 4 期（7 世紀中頃）

9 号墓を最後に横穴墓がつくられなくなる。9 号墓は 8 号墓より西の一段高い場所につくられる。羨道が省略されていることも新しく位置づけられる要素の一つであろう。9 号墓亀甲形陶棺の蓋には突起があり、大和北部の陶棺とは形状が異なる。円筒形陶棺は 4 期になって新たな再葬容器として製作が始まったと推定できる。

7 号墓から出土した土器は 7 世紀中頃（飛鳥Ⅱ）のもので、7 号墓西陶棺がこの期に該当する（V 型式）。

赤田横穴墓群への埋葬は 7 世紀中頃で終了する。

いくつかの横穴墓に共通することとして、3～8 号墓の墓道から須恵器甕が出土していることがあげられる。穿孔のあるものや意図的に砕かれたとみられるものがあるなど、墓道で何らかの祭祀が行われていたことを物語る資料である。また、6 号墓の墓道と 7 号墓の墓道から出土した須恵器甕、3・4 号墓の台付長頸壺が接合し、副葬品が動かされていることも知られる。1 号墓から出土した有蓋高杯蓋が別の墓から持ち込まれた可能性を考えたのはこのような現象があることにもよる。

II. 埋葬終了後の祭祀

玄室や墓道から 8 世紀～9 世紀後半にかけての土器・土製品が出土している例が少なからずあり、この頃まで何らかの祭祀が行われていたことがわかる。4・5・9 号墓からは 8 世紀の須恵器壺 H が、1・7 号墓からは壺 M が、2・4・8・9 号墓からは土馬が、7 号墓から

は 9 世紀の銭、土師器皿が出土し、1 号墳からも土師器皿、須恵器平瓶が出土している。小片のものもあり、全てが意図的に持ち込まれたものかどうかはわからないが、壺 H や土馬は 8 世紀、平城京で祭祀に用いられたと考えられているものでもあり、持ち込まれる土器が選ばれているようにも思われる。

その後、横穴墓の存在は忘れ去られてしまったのか、遺物は 14～15 世紀になるまでみられない。丘陵斜面や墓道内に堆積した埋土の状態から、調査地周辺は 8 世紀以降に森林化が進んだが、14～15 世紀頃にその森林が伐採されて地山が露出したようである。この頃に盗掘が行われている。陶棺が破壊され、副葬品が持ち去られている。3 号墓では盗掘で壊された陶棺片の中から 1 号墓の陶棺片が出土しており、盗掘の際に壊した陶棺片を他の横穴墓に持ち運んでいることもわかった。

III. まとめ

今回の発掘調査では工事中の不時発見による調査事例が多い横穴墓を計画的に調査することができた。その結果、横穴墓の造営過程や構造、土器や陶棺の変遷、埋葬後の儀礼を併せて考えることができる良好な資料を得ることができたといえよう。秋篠や菅原にほど近い土地に横穴墓や古墳を造り陶棺を用いるといった要素からは、被葬者像として土師氏を想定できる可能性を高めたように思われる。

（池田裕英）

1) 本節は担当者で討議した内容を池田がまとめた。

引用・参考文献一覧

あ

- 飯田浩光 2012「一須賀古墳群出土脚付壺の基礎的検討」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 16』
- 井手町教育委員会 1987『平山古墳発掘調査概報』
- 宇治市教育委員会 1988『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』
- 大高常彦 1928「大和國平城村出土の陶棺」『考古学研究』第2年第2号
- 尾崎正紀他 2000「奈良地域の地質」『地域地質調査研究報告(5万分の1図副)』地質調査所

か

- 鐘方正樹・中島和彦・根上直子 1995「奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究(上)」『古代文化』47-5 古代学協会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
- 木村泰彦・吉岡博之 1979「付載 山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004『京都府遺跡調査報告書 第34冊 女谷・荒坂横穴群』
- 考古学会 1905「彙報 大和西大寺発見陶棺の出所」『考古界』第5篇第10号
- 後藤守一 1924「甕棺陶棺に就て(三)」『考古学雑誌』第14巻第11号

さ

- 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1998「長野丙古墳群第2次～長野岡田古墳～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第46集
- 財団法人由良大和古代文化研究協会・奈良県立橿原考古学研究所 2011『森本六爾関係資料集I』
- 白石耕治 1995「畿内における陶棺研究序説」『西谷眞治先生古稀記念論文集』
- 宗教法人大倭教教務本庁 1968『すさのお』第20号
- 末永雅雄 1941「生駒郡西大寺村字新堂寺合葬古墳」『奈良県史蹟名称天然記念物調査抄報』第2輯
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

た

- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田村吉永 1933「大和に於ける陶棺出土遺蹟」『大和考古学』3・5
- 田村吉永 1935「大和に於ける陶棺出土遺蹟一覧表」『大和志』第2巻第11号
- 寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷山古墳の研究』大阪大学考古学研究報告 第三冊 大阪大学考古学研究室
- 東京帝室博物館 1911「大和國生駒郡平城村大字山陵及西大寺字赤田陶棺発掘地調査」『出張調査報告書綴』

な

- 中島和彦 1991「断続ナデ技法」の再評価」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1991』
- 中西克宏 1991「奈良市秋篠三和町採集の陶棺」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.5, No.3
- 中町教育委員会 1999『東山古墳群I』
- 中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室 2001『東山古墳群II』
- 中村展子 2001「東山12号墳出土の陶棺」『東山古墳群II』
- 奈良県教育委員会 1995 奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1992「奈良市宝来横穴群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1991年度(第1分冊)』
- 奈良国立文化財研究所 1975「IV 平城京の遺物 3 土器」『平城宮発掘調査報告VI』
- 奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告VII』
- 奈良国立文化財研究所 1981『平城宮発掘調査報告X』(奈良国立文化財研究所学報 第39冊)
- 奈良国立文化財研究所 1994「東院地区出土の埴輪窯 第243・245-1次」『1993年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1995「第V章 遺物 5 小結」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV 一飛鳥水落遺跡の調査一』
- 奈良市 1968『奈良市史 考古編』
- 奈良市教育委員会 1984「赤田横穴群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』
- 奈良市教育委員会 1985「山陵町狐塚横穴群の調査」

『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和 59 年度』
奈良市教育委員会 1992「菅原東遺跡の調査 第 200 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』
奈良市教育委員会 1994a「平城京右京三条三坊六坪・菅原東遺跡の調査 第 257 - 4 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 5 年度』
奈良市教育委員会 1994b「平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査 第 257 - 3 次」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
奈良市教育委員会 1996「平城京右京二条三坊六坪・菅原東遺跡の調査 第 310・326 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 7 年度』
奈良市教育委員会 1999「平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査 第 386 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 10 年度』
奈良市教育委員会 2007「西大寺東遺跡・西隆寺跡の調査 第 8 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 16 年度』
奈良市教育委員会 2008「歌姫赤井谷第 3 号横穴の調査 第 1～3 次」『奈良市埋蔵文化財年報 平成 17 (2005) 年度』
奈良市教育委員会 2013「西大寺旧境内の調査 第 28 - 1・2 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 22 (2010) 年度』
奈良文化財研究所 2014 奈良文化財研究所学報第 93 冊『奈良山発掘調査報告Ⅱ - 歌姫西須恵器窯跡の調査 -』
奈良大学 1998『秋篠・山陵遺跡』(奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書 第 17 集)
奈良大学考古学研究会 2001「奈良山丘陵踏査報告」『盾列』11

は

花田勝広 1990「畿内横穴墓の特徴」『古文化談叢』22 九州古文化研究会
東影 悠 2010「形象埴輪の製作技術 - 形象埴輪倒立技法の研究 -」『待兼山考古学論集Ⅱ - 大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集 -』
藤浦 薫 2001「東山 12 号墳出土陶棺の植物痕跡」『東山古墳群Ⅱ』
藤田忠彦 1994「土師質陶棺の粗考 - 畿内及びその周辺を中心に -」『文化財学論集』
伏見町史刊行委員会 1981『伏見町史』

ま

丸山竜平 1973「土師氏の基礎的研究 - 土師質陶棺の被葬者をめぐって -」『日本史論叢』第 2 輯 日本史論叢会
村上幸雄・橋本惣司 1979「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第 26 巻第 2 号
森口奈良吉 1905「大和西大寺発見の陶棺」『考古界』第 5 篇第 5 号
森下恵介・立石堅志 1986「大和における中近世土器の様相 - 奈良市内出土資料を中心として -」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』
森下浩行 1994「土師質亀甲形陶棺小考 - 北大和・南山城を中心に -」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1993』
森本 徹 2012「儀礼からみた畿内横穴式石室の特質」『ヒストリア』第 235 号 大阪歴史学会
森本六爾 1924「異形の陶棺を發見したる大和國生駒郡伏見村寶來字中尾の遺跡について」『考古学雑誌』第 14 巻 第 5 号

わ

渡辺智恵美 2012「一須賀古墳群出土耳環の自然科学的調査」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報 16』

Summary

Akoda Tunnel Tomb Group

The Akoda Tunnel Tomb Group is a group of tunnel tombs located in Saidaiji Akoda-chō in Nara city, dating from the Late Kofun to Asuka periods. A tunnel tomb is a type of burial of the Kofun period in which an approach path is cut into the slope of a hillside, from which a tunnel-shaped passageway and burial chamber are dug and the deceased interred in the latter. The northwest portion of the city of Nara is known as a region where tunnel tombs in which burials were made in ceramic coffins are found in great numbers.

Tunnel tombs were discovered in 1983 during construction for the expansion of Yoshida Hospital, and a salvage excavation was conducted. The Akoda No. 1 and No. 2 tombs were investigated (Excavation No. 1), with ceramic coffins and Sue ware recovered.

Construction for another expansion of the hospital was planned for 2010. When a test excavation was conducted beforehand, the presence of six additional tunnel tombs was confirmed for the western side, plus another six on the eastern side (apart from Nos. 1 and 2). It was decided to preserve the six tombs on the western side *in situ*, but as those on the eastern side were to be destroyed by construction, the excavation of Tombs Nos. 1–9 (including a subsequently discovered item) was carried out in 2011–12.

As a result of the excavation, ceramic coffins were recovered from each tomb, and the order of construction of the tombs and their scales, plus the transitions of ceramic coffins and pottery became clear.

The Akoda Tunnel Tomb Group (eastern group) began in the mid to latter sixth century with the construction of Tomb No. 5. This tomb was built in the center of the eastern group. The burial chamber is 4.9 m long by 2.8 m wide, the largest in scale among the tunnel tombs that were investigated. The burial chamber was sealed off with wooden boards and dirt. There were two ceramic coffins, placed north–south in a row within the burial chamber. Both were more than 2 m in length. The recovered pottery included Sue ware *hasō* (wine servers) and *sagebe* (hanging jugs), indicating an older phase.

Following Tomb No. 5, Nos. 3 and 4 were built in the latter half of the sixth century. The burial chamber of Tomb No. 3 is long in the north–south direction, and the ceramic coffin was placed with its long axis running north–south. By contrast, Tomb No. 4 was wide in the east–west direction, and its ceramic coffin had the long axis running east–west. Corresponding differences were thus seen in the scales of the burial chambers and orientations of the coffins. Like Tomb No. 5, the chambers were sealed with boards and dirt. The ceramic coffins had become somewhat smaller, at 1.8–1.9 m in length. That the ceramic coffin of Tomb No. 3 was painted red and green is worth special mention. The recovered pottery included neither *hasō* nor *sagebe*, but vessels such as lidded pedestaled dishes are seen, indicating a newer phase compared with Tomb No. 5.

Tombs Nos. 6–8, to the west of Nos. 3–5, are thought to have been built in the first half of the seventh century. The burial chambers were sealed off with dirt only, showing a simplification in the sealing technique. The orientations of the ceramic coffins were in line with the main axis of the burial chambers. The decrease in size of the coffins had progressed, with their lengths around 1.5 m. Lidded pedestaled dishes had disappeared from the pottery, and the dishes had decreased in size.

Tombs Nos. 1–2 to the east of Tomb No. 3 are tunnel tombs thought to have been built around the same time as Tombs Nos. 6–8.

With Tomb No. 9 as the final item built in the mid-seventh century, construction of the Akoda Tunnel Tomb Group ceased, and only subsequent burials in previously built tombs were conducted. The ceramic coffin placed in the center of the burial chamber of Tomb No. 9 was a small item of about 1 m, and apart from this there were burials made in cylindrical ceramic coffins. Judging from the size and other factors, the cylindrical ceramic coffins are thought to have been for secondary burials.

Also, artifacts from the eighth and ninth centuries, somewhat postdating the construction of the tunnel tombs, were recovered from the burial chambers and approach paths, indicating that memorial services for the interred were held at a later time.

Tunnel tombs are commonly discovered unexpectedly during activities such as construction, but in the current investigation it was possible to excavate an entire subgroup in planned fashion. As a result, this has become a precious example of an excavation from which much knowledge was gained about the construction of a tunnel tomb group.

Akoda No. 1 Tomb

This is a round mound of about 14.5 m diameter, with an encircling moat, located in close proximity northeast of the Akoda Tunnel Tomb Group, and discovered during construction. It is the first find in Nara city of a horizontal stone chamber having a ceramic coffin. From the recovered ceramic coffin and pottery, it is thought to have been built slightly later than Tombs Nos. 3–4, in the latter sixth or early seventh centuries.

中文要旨

赤田横穴墓群

赤田横穴墓群位于奈良市西大寺赤田町，乃古坟时代晚期至飞鸟时代的横穴墓群。横穴墓为古坟时代的一种墓制，在丘陵的斜坡上开凿出隧道状的“墓道”，通过“羨道”后于“玄室”埋葬死者。奈良市西北部地区多见使用陶制棺槨的横穴墓。

1983年，在医院的扩建工程中发现横穴墓，由此展开了紧急的发掘调查。发掘了赤田1号墓和2号墓，出土了陶棺和须惠器（第1次调查）。

2010年，医院再次计划了扩建工程。在事前进行的试掘中，新确认了西侧6座和东侧6座横穴墓的存在（除1号墓和2号墓以外）。西侧的6座决定就地保护，而东侧的6座由于在扩建工程中会遭到破坏，于2011～2012年进行了1～9号墓的发掘调查。

经过发掘调查，从各横穴墓中出土了陶棺和土器，查明了横穴墓的筑造顺序、规模以及陶棺和土器的变迁等。

赤田横穴墓群（东群）是6世纪中晚期开始由5号墓开始建造。5号墓建于东群的中央位置，玄室长4.9m，宽2.8m，为此次调查中规模最大的横穴墓。玄室用木板和泥土予以密封，玄室中南北方向并列放置2具长2m以上的陶棺。出土的土器中有甗和提瓶，呈现出一种古风。

3号墓和4号墓较5号墓稍晚，建造于6世纪晚期。3号墓的玄室南北方向较长，陶棺的主轴也呈南北方向。而4号墓则是东西方向较长，陶棺的主轴呈东西方向。由此可见，玄室的规模与棺的主轴密切相关。与5号墓相同，玄室以木板和泥土密封。陶棺的长度在1.8m～1.9m前后，略显小型化。此外，3号墓的陶棺上可见绿色和红色的彩绘，值得关注。出土的陶器中不见甗和提瓶，而见有盖高杯，与5号墓相比，时代较新。

6～8号墓位于3～5号墓的西侧，推测建造于7世纪前中期。玄室只以泥土密封，方法呈现出简略化的趋势。陶棺放置的方向与玄室的主轴一致，长度皆在1.5m左右，小型化更加明显。土器中不见有盖高杯，杯类也呈小型化。

1号墓和2号墓位于3号墓东侧，建造时期约与6～8号墓相同。

至7世纪中期建造的9号墓为止，赤田横穴墓群停止了建造，此后只见合葬。放置于9号墓玄室中央的陶棺长度只有1m左右，此外还埋葬有圆筒形陶棺。从陶棺的形制和规模等可见这些陶棺乃是二次葬使用。

另外，玄室和墓道中也出土有较横穴墓建造时期稍晚的8～9世纪的遗物，可知直至8～9世纪时期，也有进行合葬的祭祀。

横穴墓在基建工程中虽时有发现，此次则是对横穴墓的一个支群进行了有计划的发掘调查，得以对横穴墓群的建造有了更深入的了解，是非常重要的调查事例。

赤田1号坟

赤田1号坟位于赤田横穴墓的东北部，是在扩建工程中发现的带环濠的古坟，直径约14.5m。古坟的横穴式石室中埋葬有陶棺，这种做法在奈良市内是首次被发现。分析从中出土的陶棺和土器可知，其建造年代略晚与3号墓和4号墓，约在6世纪中晚期至7世纪初。

遺物観察表

- ここでは、本書に報告した赤田横穴墓群から出土した埴輪と土器の観察表を掲げる。なお、5号墓から出土した玉類については本文中に観察表を掲げている。
- 埴輪の観察表については、本文中の図番号、名称、法量、色調、胎土、焼成、備考について記述している。
土器の観察表については、本文中の図番号、種類、器種、口径、器高、底部径（土器によっては高台径）、技法の特徴、色調、備考について記述している。
- 土器の口径について、須恵器杯H身・杯G蓋の口径はそれぞれ立ち上がりの径、かえりの径を、杯G身は最大径を口径としている。
- 土器の口径、底径のうち（ ）で示したのは復原径である。
- 観察表中における数値の単位は特に断りのない場合を除き cm である。
- 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。

I 埴輪観察表

表 16 試掘 2010-4 次調査 出土埴輪観察表

No	出土地点	名称	法量	色調	胎土	備考	
1	12号墓	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	5.5 6.3 1.2	外) 7.5YR7/6 橙 内) 7.5YR7/6 橙 断) 7.5YR7/6 橙	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	口縁部が残存する。外面斜め方向のハケ (11 条/cm)、内面は口縁端部はヨコナデ、以下斜め方向のハケ (11 条/cm)。口縁部は外傾し、端部はやや外側に張り出す。端面はヨコナデによりやや窪む。
2	12号墓	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	12.3 8.9 1.2	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y8/4 淡黄	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	外面タテハケ (6~7 条/cm)、内面ナデ。突帯は断面M字状を呈し、突帯高は約 0.6cm。
3	14号墓	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	10.0 8.2 1.0	外) 10YR7/4 にぶい黄橙 内) 10YR8/3 にぶい黄橙 断) 10YR4/6 褐	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	外面タテハケ (8 条/cm)、内面は上部がヨコハケ (7 条/cm)、下部が上下方向のナデ。突帯は上辺上端が張り出す台形を呈し、突帯高は約 0.7cm。円形に復原できる透孔あり。

表 17 赤田 4 号墓 出土埴輪観察表

No	出土場所	名称	法量	色調	胎土	備考	
1	玄室	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	6.2 5.8 0.8	外) 10YR8/4 浅黄橙 内) 10YR8/6 黄橙 断) 10YR8/4 浅黄橙	やや粗、2mm 以下の砂粒含む。	外面タテハケ (10 条/cm)、内面ナデ。突帯は上辺上端が張り出す。断続ナデ技法 A により貼り付け。突帯高約 0.7cm。透孔は円形で約 1/5 遺存。
2	玄室	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	6.0 6.2 1.1	外) 10YR8/6 黄橙 内) 10YR8/4 浅黄橙 断) 10YR8/4 浅黄橙	粗、3mm 以下の砂粒を多く含み、赤褐色粒含む。	外面タテハケ (8 条/cm)、内面ナデ。突帯は上辺上端が張り出す。突帯高約 0.6cm。透孔は円形で約 1/6 遺存。3 番と色調・胎土等が似るため同一個体か。
3	玄室	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	8.8 7.5 1.0	外) 10YR8/6 黄橙 内) 10YR8/4 浅黄橙 断) 10YR8/4 浅黄橙	粗、3mm 以下の砂粒を多く含み、赤褐色粒含む。	外面タテハケ (8 条/cm)、内面ナデ。突帯はM字状を呈する。突帯高約 0.6cm。2 番と色調・胎土等が似るため同一個体か。
4	玄室	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	6.5 6.2 1.0	外) 2.5Y8/4 浅黄 内) 2.5Y8/4 浅黄 断) 2.5Y8/4 浅黄	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	外面タテハケ (10 条/cm)、内面ナデ。突帯はM字状を呈する。突帯高約 0.6cm。7・8 番と色調・胎土等が似るため同一個体か。
5	玄室	円筒埴輪	高さ 幅 厚さ	6.8 5.3	外) 10YR5/4 黄褐 内) 10YR8/6 黄橙 断) 10YR4/1 褐灰	やや粗、2mm 以下の砂粒含む。	外面タテハケ (8 条/cm)、内面ナデ。突帯の上部片で、突帯上方のヨコナデが確認できる。断続ナデ技法 A に伴うとされる斜め方向の圧痕あり。
6	玄室	円筒埴輪	内径 残高 厚さ	(17.2~19.2) 7.9 0.8	外) 10YR8/4 浅黄橙 内) 10YR8/6 黄橙 断) 10YR8/6 黄橙	やや粗、2mm 以下の砂粒含む。	外面タテハケ (9~10 条/cm)、内面ナデ。突帯は台形状を呈す。断続ナデ技法 A により貼り付け。突帯高約 0.65cm。約 1/5 遺存。
7	玄室	円筒埴輪	内径 残高 厚さ	(25.2~26.8) 6.7 1.2	外) 2.5Y8/6 黄 内) 2.5Y8/4 浅黄 断) 2.5Y8/4 浅黄	粗、5mm 以下の砂粒多く含む。	内外面ともに摩滅し不明瞭。突帯は上辺が突出する。突帯高約 0.6cm。4・8 番と色調・胎土等が似るため同一個体か。
8	玄室	円筒埴輪	底径 残高 厚さ	25.4 9.2 1.2	外) 2.5Y8/4 浅黄 内) 2.5Y8/6 黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	外面摩滅、内面ナデ。破片上部は突帯に繋がる湾曲を呈し、底部高は約 9.2cm と推定。4・7 番と色調・胎土等が似るため同一個体か。
9	玄室	鞍形埴輪	高さ 幅 厚さ	5.4 5.4 1.1	外) 2.5Y8/3 淡黄 内) 10YR8/4 浅黄橙 断) 10YR4/1 褐灰	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	鞍形埴輪の端部で詳細な部位は不明。内外面ともにナデ。端部は円弧状に屈曲する。2 条の線刻のうちの内側の 1 本に直交する線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。
10	玄室	鞍形埴輪	高さ 幅 厚さ	8.3 5.8 1.1	外) 2.5Y8/3 淡黄 内) 2.5Y8/3 淡黄 断) 10YR4/1 褐灰	粗、2mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	鞍形埴輪の鱗部。内外面ともに調整不明瞭。端部に沿って 2 条の線刻あり。
11	墓道	鞍形埴輪	高さ 幅 厚さ	3.8 3.8 1.6	外) 2.5Y8/4 浅黄 内) 2.5Y8/4 浅黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	鞍形埴輪の鱗部。外面ナデ、内面摩滅。1 条の線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。
12	玄室	鞍形埴輪	高さ 幅 厚さ	8.5 5.1 1.5	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒含む。	鞍形埴輪の円筒~鱗部。内外面ナデ。横方向に 3 条の線刻と綾杉文状の線刻が入る。鱗端部の残る 13 番の綾杉文と比較して、鱗は 13 番と反対側のものと推定。綾杉線刻下方に 1 条の線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。

No	出土場所	名称	法量		色調	胎土	備考
			高さ	幅厚さ			
13	玄室	靱形埴輪	高さ 幅厚さ	11.3 6.3 1.3	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y3/1 黒褐	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	靱形埴輪の円筒～鱗部。内外面ともにナデ。鱗部は端部が残存し、鱗幅は約 4.0cm。円筒～鱗部にかけて破片中央に横方向に 3 条の線刻と、そこに綾杉文状の線刻が入る。これが線刻を横方向に区画する帯となる。綾杉線刻の上には鱗部に 2 条の線刻、円筒部に 1 条の線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。
14	玄室	靱形埴輪	高さ 幅厚さ	11.0 5.4 1.1	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	靱形埴輪の円筒～鱗部。内外面ともに調整不明瞭。鱗部に近い円筒部に直弧文状の線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。
15	玄室	靱形埴輪	高さ 幅厚さ	8.8 5.7 1.9	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y3/1 黒褐	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	靱形埴輪の円筒～鱗部。内外面ともにナデ。鱗部にわずかに線刻残る。線刻部分の面に赤色顔料付着。
16	玄室	靱形埴輪	高さ 幅厚さ	13.2 10.1 0.9	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	靱形埴輪の円筒～鱗部。内外面ともにナデ。外面に 2 条の線刻あり。
17	玄室	靱形埴輪	高さ 幅厚さ	16.1 7.4 1.6	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	靱形埴輪の円筒～鱗部。内外面ともにナデ。鱗部下端辺に沿って 2 条の線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。鱗部に近い円筒部に円形に復元できる透孔あり。
18	玄室	靱形埴輪	高さ 幅厚さ	10.1 3.3 1.4	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y4/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒含み、赤褐色粒含む。	靱形埴輪の円筒～鱗部。内外面ともにナデ。鱗部下端辺に沿って 2 条の線刻あり。線刻部分の面に赤色顔料付着。

表 18 赤田 7 号墓 出土埴輪観察表

No	出土場所	名称	法量		色調	胎土	備考
			口径器高厚さ				
1	西陶棺下	円筒埴輪	口径器高厚さ	(25.6) (50.3) 0.9	外) 7.5YR7/6 橙 内) 7.5YR7/6 橙 断) 2.5Y8/2 灰白	粗、5mm 以下の砂粒含み、黒色粒含む。	接点のない破片を含めて復元すると、4 条突帯 5 段構成である。調整は、外面タテハケ (14～16 条/cm)、内面は口縁部をヨコナデ、以下第 4 突帯付近までを斜め方向のハケ (10～12 条/cm)、以下縦方向のナデ。突帯の上下面でハケが連続することから、ハケ後に突帯貼り付け。突帯は台形・M 字状を呈する。突帯高約 0.8cm。5 段目外面に×状の線刻あり。突帯間隔は不揃いで、底部高約 11.5cm、第 1～2 突帯間約 10.5cm、第 2～3 突帯間約 8.0cm、第 3～4 突帯間約 13.5cm、口縁部高約 6.5cm。3 段目に円形の透孔あり。底部は板押圧により調整する。粘土紐を巻き上げて成形し、粘土紐の単位は約 2.0cm。
3	西陶棺下	円筒埴輪	内径残高厚さ	(20.2) 18.5 1.2	外) 2.5Y8/4 浅黄 内) 10YR7/6 明黄褐 断) 2.5Y8/4 淡黄	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。金雲母含む。	2 条突帯 3 段構成以上で構成される。調整は、外面タテハケ (10 条/cm)、内面ナデ・ハケ (10 条/cm)。残存する突帯は三角形を呈する。突帯高約 0.7cm。突帯間隔は 10.3cm。
4	西陶棺下	円筒埴輪	底径残高厚さ	(20.7) 25.9 1.5	外) 2.5Y8/3 浅黄 内) 2.5Y8/4 浅黄 断) 2.5Y6/1 黄灰	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	底部から第 2 突帯まで残存し、2 条突帯 3 段以上で構成される。調整は外面タテハケ (10 条/cm)、内面ナデ。内面底部付近は幅広のナデであり、底部の粘土板成形時に起因するものと推定。円形の透孔が 2 段目に推定二方向であり。突帯は台形状を呈する。突帯高約 0.65cm。底部高約 10.5cm、第 1～2 突帯間 11.7cm。底部外面は板押圧により調整する。

表 19 赤田 8 号墓 出土埴輪観察表

No	出土場所	名称	法量		色調	胎土	備考
			高さ 幅厚さ				
1	玄室	円筒埴輪	高さ 幅厚さ	3.5 3.9 1.0	外) 5YR6/6 橙 内) 5YR6/6 橙 断) 7.5Y4/1 灰	粗、2mm 以下の砂粒含む。	口縁部片。外面タテハケ (8～10 条/cm)、内面ヨコハケ (8 条/cm)。口縁部は外反し、端部は平坦にナデ。
2	玄室	円筒埴輪	高さ 幅厚さ	7.0 7.3 1.1	外) 2.5Y8/4 淡黄 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y8/4 淡黄	やや粗、3mm 以下の砂粒含む。	外面タテハケ (8～9 条/cm)、内面ナデ。突帯は上端面が狭く山形を呈する。突帯高約 0.6cm。透孔は円形で、約 1/5 遺存。
3	玄室	円筒埴輪	高さ 幅厚さ	7.0 6.0 1.0	外) 7.5YR7/6 橙 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2.5Y8/4 淡黄	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	外面タテハケ (10 条/cm)、内面ナデ。突帯は上辺が張り出す。突帯高約 0.5cm。断続ナデ技法 A により突帯貼り付け。
4	玄室	円筒埴輪	高さ 幅厚さ	9.0 8.6 1.0	外) 5Y7/2 灰白 内) 2.5Y8/4 淡黄 断) 2/5Y8/4 淡黄	やや粗、2mm 以下の砂粒含む。	外面タテハケ (9 条/cm)、内面ナデ。突帯は上辺が張り出し三角形に近い形状を呈する。突帯高約 0.4cm。突帯は粘土の単位に起因するような接合痕が確認でき、断続ナデ技法 A であると推定。
5	玄室	円筒埴輪	高さ 幅厚さ	7.0 7.3 1.1	外) 2.5Y8/6 黄 内) 2.5Y8/6 黄 断) 2.5Y8/6 黄	粗、3mm 以下の砂粒、赤褐色粒含む。	外面タテハケ (10 条/cm)、内面ナデ・ハケ (10 条/cm)。突帯は M 字状を呈する。突帯高約 0.5cm。
6	玄室	円筒埴輪	高さ 幅厚さ	4.9 5.2 1.5	外) 7.5YR7/6 橙 内) 7.5YR7/6 橙 断) 2.5Y8/4 淡黄	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。	底部片。内外面ともに摩滅し不明瞭。底部内面をオサエ。底面に明瞭な底部調整は認められない。

出土遺物観察表

No	出土場所	名称	法量		色調	胎土	備考
7	盗掘坑	円筒埴輪	復原内径 残高 厚さ	27.0 7.6 1.7	外) 橙色 内) 黄橙色 断) 黄橙色	粗、10mm 程の礫含み、5mm 以下の砂粒多く含む。赤褐色粒含む。	外面タテハケ（8～10条/cm）、内面ナデ。突帯は剥離し、剥離面にタテハケ残る。
8	墓道	石見型埴輪	高さ 幅 厚さ	9.3 8.3 1.4	外) 灰白色 内) 灰白色 断) 灰白色	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。石英、長石が目立つ。	内外面ともに摩滅し不明瞭。端面はヘラケズリ。石見型埴輪の轄下半部で、直径約5mmの貫通しない円孔あり。裏面に縦方向の粘土接合痕あり。

II 土器観察表

表 20 試掘 2010-4 次調査 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	須恵器	杯 H 蓋	13.2	3.9	—	頂部外面ヘラ切り後未調整	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	5P5/1 紫灰	口縁部 1/9 残存

表 21 赤田 1 号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	土師器	椀	14.2	6.4	—	底部外面手持ちヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
2	土師器	椀	13.0	5.0	—	底部外面手持ちヘラケズリ、口縁部外面ハケメ、内面ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
3	土師器	椀	(13.0)	—	—	底部外面手持ちヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	
4	土師器	甕	12.7	13.0	—	口縁部内外面ヨコナデ、外面体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	
5	土師器	甕	13.4	13.1	—	口縁部外面ヨコナデ、外面体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	外面に黒斑
6	須恵器	有蓋高杯蓋	13.2	5.0	—	内外面ロクロナデ	中心部 N8/ 灰白、外側 N5/ 灰	N8/ 灰白	—	完形
7	須恵器	有蓋高杯蓋	12.8	5.2	—	内外面ロクロナデ	中心部 N8/ 灰白、外側 N5/ 灰	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
8	須恵器	有蓋高杯蓋	13.9	5.1	—	内外面ロクロナデ	中心部 N8/ 灰白、外側 N5/ 灰	N7/ 灰白	—	完形
9	須恵器	有蓋高杯蓋	13.1	4.9	—	内外面ロクロナデ	中心部 N8/ 灰白、外側 N5/ 灰	N7/ 灰白	—	完形
10	須恵器	杯 B	9.2	3.4	6.7	口縁部内外面ロクロナデ、底部外面ヘラキリ後未調整	N7/ 灰白	N7/ 灰白	—	完形
11	須恵器	杯 G 身	10.4	3.6	—	口縁部内外面ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ後ロクロナデ	N7/6 灰	N7/ 6 灰	—	完形
12	須恵器	杯 G 身	9.8	3.7	—	口縁部内外面ロクロナデ、底部外面中心部ヘラキリ後未調整、外側ロクロケズリ	N7/5 灰 ~ N7/6 灰	N7/6 灰	—	完形
13	須恵器	壺 M	—	—	4.7	内外面ロクロナデ、底部外面ヘラキリ後未調整	N6/ 灰	—	N6/ 灰	
14	須恵器	無蓋高杯	9.7	8.3	7.8	内外面ロクロナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	7.5R5/3 にぶい赤褐	
15	須恵器	無蓋高杯	9.8	9.3	8.2	内外面ロクロナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	10R6/2 灰赤	
16	須恵器	台付長頸壺	7.7	—	—	体部内外面ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ後ロクロナデ	N4/ 灰	N7/ 灰白	N7/ 灰白	

表 22 赤田 2 号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	土師器	甕	—	—	—	内外面ともハケメ	10YR8/1 灰白	N2/ 黒	10YR8/1 灰白	外面剥落激しい

表 23 赤田 3 号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	土師器	椀	10.9	3.2	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	7.5YR7/6 橙、2.5Y8/3 淡黄	7.5YR7/6 橙、2.5Y8/4 淡黄	7.5YR7/6 橙	完形、内面に 1 段の斜放射暗文
2	土師器	椀	(10.1)	2.9	—	外面摩滅のため不明、内面ヨコナデ	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	内面に 1 段の斜放射暗文

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
3	土師器	椀	12.0	3.9	—	底部～口縁部下半ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデ	5Y6/6 橙	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	
4	土師器	椀	(10.2)	4.75	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/4 淡黄	
5	土師器	椀	11.8	4.2	—	底部～体部内外面ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデ	7.5YR5/8 明褐	7.5YR6/8 橙	—	完形
6	土師器	椀	12.6	4.2	—	外面ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデ	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	—	完形
7	土師器	椀	(12.9)	4.45	—	底部外面板ナデ、口縁部内外面ヨコナデ	10YR8/4 浅黄橙、5YR8/4 淡橙	2.5YR7/6 橙～6/6 橙、5/8 明赤褐	10YR8/4 浅黄橙	内面赤色塗布
8	土師器	甕	(9.3)	9.4	—	外面体部上半ハケメ、下半ヘラケズリののちナデ	2.5Y8/4 淡黄～8/6 黄	2.5Y8/3 淡黄～8/6 黄	2.5Y8/2 灰白～8/3 淡黄	口縁部内面に線刻
9	須恵器	杯H蓋	12.1	3.1	—	頂部外面ヘラキリ、口縁部内外面ロクロナデ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	
10	須恵器	杯H蓋	14.4	4.5	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
11	須恵器	杯H身	11.05	3.8	—	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰～5/ 灰	N5/ 灰～6/ 灰	N5/ 灰	
12	須恵器	杯H身	10.9	3.55	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	2.5GY6/0 オリーブ灰～5/0 オリーブ灰	2.5GY6/0 オリーブ～5/0 オリーブ灰	2.5GY5/0 オリーブ灰	
13	須恵器	杯H身	11.8	3.9	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	
14	須恵器	有蓋高杯蓋	13.9	5.2	—	頂部外面カキメ、口縁部内外面ロクロナデ	5YR5/2 灰褐、N4/ 灰	N 5/ 灰	—	完形
15	須恵器	有蓋高杯蓋	14.8	4.95	—	内外面ともロクロナデ	N6/0 灰	N6/ 灰	—	完形
16	須恵器	有蓋高杯蓋	14.1	4.85	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	—	完形
17	須恵器	無蓋高杯	12.2	13.3	13.2	内外面ともロクロナデ	10YR5/1 褐灰、5Y8/2 灰白	10YR5/1 灰白	5Y6/1 灰	2方透かし
18	須恵器	有蓋高杯	13.1	16.7	14.0	杯部体部下半ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ、脚部内外面ロクロナデ	N6/ 灰～7/ 灰白	N 6/ 灰～7/ 灰白	N6/ 灰	2方透かし
19	須恵器	有蓋高杯	12.2	17.9	14.0	内外面ロクロナデ	10GY5/1 暗緑灰	10GY5/1 暗緑灰	10GY5/1 暗緑灰	3方透かし
20	須恵器	有蓋高杯	12.8	18.8	15.8	杯部底部外面ロクロケズリ、脚部、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	N7/ 灰	N6/ 灰	2方透かし
21	須恵器	有蓋高杯	12.65	19.2	15.7	内外面ロクロナデ	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	2方透かし
22	須恵器	短頸壺	(11.0)	17.1	—	底部ロクロナデ、体部下半ロクロケズリ、口縁部・体部上半ロクロナデ	N5/ 灰	5GY5/1 オリーブ灰	2.5Y8/1 灰白	肩部に暗灰緑の自然釉かかる
23	須恵器	短頸壺	6.5	9.85	—	底部～体部下半ロクロケズリ、体部上半～口縁部内外面ロクロナデ	N7/ 灰白、2.5YR5/2 灰赤、5PB6/1 青灰	N7/ 灰白	—	完形
24	須恵器	短頸壺	9.1	10.0	—	外面カキメ、口縁部内外面・内面ヨコナデ	2.5Y7/1 明オリーブ灰～6/1 オリーブ灰	N7/ 灰白～6/ 灰白	N8/ 灰白～7/ 灰白	口縁部焼け歪大
25	須恵器	台付壺	9.0	29.2	14.0	胴部下半ロクロケズリ、口縁部・脚部内外面ロクロナデ	10YR6/1 褐灰、5YR5/2 灰褐	10YR6/1 褐は	10YR6/1 褐灰	2方透かし
26	須恵器	長頸壺	(7.6)	21.0	—	体部下半ロクロケズリ、口縁部・体部上半ロクロナデ	10YR5/1 褐灰、N7/ 灰白	5PB7/1 明青灰	10Y5/1 灰	
27	須恵器	短頸壺	5.0	12.65	—	底部～体部下半ロクロケズリ、体部上半～口縁部内外面ロクロナデ	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	
28	須恵器	短頸壺	5.35	11.6	—	底部ヘラキリ後ナデ、体部下半ヘラケズリ、体部上半～口縁部内外面ロクロナデ	5Y4/1 灰～6/1 灰、8/2 灰白	N5/ 灰～7/ 灰	5Y5/1 灰	
29	須恵器	短頸壺	4.85	10.1	—	底部～体部下半ヘラケズリ、体部上半～口縁部内外面ロクロナデ	5P6/1 暗青灰、N7/ 灰白	5P6/1 紫灰	—	
30	須恵器	短頸壺	6.75	12.4	—	底部外面ヘラケズリ、体部・口縁部内外面ロクロナデ	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	
31	須恵器	甕	14.2	20.25	—	頸部ハケメ、体部外面カキメ、体部下半ロクロケズリ	N8/ 灰白	N5/ 灰	—	
32	須恵器	甕	16.0	27.35	—	外面タタキ、口縁部ロクロナデ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	N8/ 灰白	体部中程に穿孔
33	須恵器	杯H身	11.9	3.6	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	5PB6/1 青灰	N6/ 灰白	5PB6/1 青灰	完形
34	須恵器	有蓋高杯蓋	15.0	5.3	—	頂部外面カキメ、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
35	須恵器	短頸壺	7.3	7.7	—	底部外面カキメ、体部中位ロクロケズリ、体部上半・口縁部・内面ロクロナデ	N7/ 灰白、5Y4/2 灰オリーブ	N6/ 灰白～7/ 灰	5Y8/1 灰白	

出土遺物観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
36	須恵器	甕	21.7	51.35	—	外面平行タタキ、内面同心円当て具痕跡	N4/ 灰 ~ N7/ 灰白	N6/ 灰 ~ N7/ 灰白	N6/ 灰	口縁部外面に「 」の線刻
37	土師器	羽釜	(18.6)	—	—	内外面ヨコナデ	2.5Y8/4 淡黄	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	

表 24 赤田4号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	須恵器	杯H身	11.6	4.0	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	5B4/1 暗青灰	5B4/1 暗青灰、N8/ 灰白	—	完形
2	須恵器	杯H身	10.2	3.3	—	内外面ロクロナデ	5PB6/1 青灰、5GY3/1 暗オリーブ灰	5PB6/1 青灰	—	完形、底部外面に線刻
3	須恵器	有蓋高杯	14.4	21.0	14.9	内外面ロクロナデ	5B3/1 暗青灰	5B3/1 暗青灰	5B3/1 暗青灰	完形、2方透かし
4	須恵器	有蓋高杯	14.8	18.5	15.4	杯部下半ロクロケズリ、脚部～口縁部内外面ロクロナデ	5PB4/1 暗青灰～5/1 青灰	5PB5/1 青灰	5PB6/1 青灰	2方透かし
5	須恵器	無蓋高杯	12.0	17.4	12.0	内外面ロクロナデ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	5R5/1 赤灰	3方透かし
6	須恵器	台付長頸壺	11.1	36.5	17.6	体部下半ロクロケズリ、台部・口縁部ロクロナデ	2.5Y8/1 灰白、N7/ 灰白	N7/ 灰白	2.5Y8/1 灰白、N7/ 灰白	
7	須恵器	台付長頸壺	—	—	—	体部外面ロクロケズリの後カキメ	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	3方透かし
8	須恵器	台付長頸壺	8.05	24.2	11.4	体部下半ロクロケズリ、脚部・体部上半～口縁部ロクロナデ	N6/ 灰～N8/ 灰白	N5/ 灰～N6/ 灰	N8 灰白	体部上半に刺突による列点文
9	須恵器	壺H	10.3	7.9	7.0	内外面ロクロナデ	10Y6/1 青灰	5PB6/1 灰	—	完形
12	土師器	羽釜	(17.5)	—	—	内外面ヨコナデ	7.5YR5/8 明褐	10YR5/8 黄褐	2.5Y8/4 淡黄	
13	瓦質土器	蓋	(28.5)	—	—	内外面ヨコナデ	N4/ 灰～5/ (灰)	N4/ 灰～5/ (灰)	7.5Y8/1 灰白	
14	土師器	椀	12.4	5.9	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面～底部内面ヨコナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	ほぼ完形
15	須恵器	甕	23.7	—	—	外面平行タタキ、内面同心円当て具	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
16	須恵器	甕	18.0	—	—	外面平行タタキ後カキメ、内面同心円当て具	5PB7/1 明紫灰～9/1 暗青灰	5PB6/1 紫灰	5PB7/1 明紫灰	肩部4方向に耳が付く
17	須恵器	甕	33.8	—	—	外面平行タタキ後カキメ、内面同心円当て具	5Y6/1 灰、5PB6/1 紫灰	5PB6/1 紫灰、5P6/1 灰	5Y7/1 灰、N5/ 灰	

表 25 赤田5号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	須恵器	杯H蓋	13.3	3.8	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面・頂部内面ロクロナデ	N6/ 灰	N6/ 灰、7.5YR7/0 褐	—	完形
2	須恵器	杯H蓋	13.65	4.25	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	—	完形、頂部外面に「-」の線刻
3	須恵器	杯H蓋	13.2	4.3	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面～頂部内面ロクロナデ	N5/ 灰	5PB4/1 暗青灰	—	完形、頂部内面に当て具痕跡
4	須恵器	杯H蓋	13.4	3.85	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面～頂部内面ロクロナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	—	完形、頂部外面に「-」線刻
5	須恵器	杯H蓋	13.9	4.3	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ、頂部内面ヨコナデ	N7/ 灰白	N5/ 灰	—	完形、底部外面に線刻
6	須恵器	杯H蓋	12.25	4.2	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、口縁部外面～頂部内面ロクロナデ	N7/ 灰白～8/ 灰白	2.5Y8/1 灰白	N7/ 灰白～8/ 灰白	完形
7	須恵器	杯H身	11.35	3.75	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	5PB5/1 青灰～6/1 青灰、10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	完形、頂部内面に当て具痕跡
8	須恵器	杯H身	11.5	3.9	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	—	完形
9	須恵器	杯H身	12.05	3.85	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面～底部内面ロクロナデ	N6/ 灰	5PB5/1 青灰	N5/ 灰	完形、底部外面に線刻
10	須恵器	杯H身	11.05	3.5	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面～底部内面ロクロナデ	N5/ 灰	5YR4/1 褐灰	—	完形、底部内面に当て具痕跡
11	須恵器	杯H身	11.35	3.95	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N6/ 灰、2.5Y4/1 暗オリーブ灰～6/1 オリーブ灰	N4/ 灰～6/ 灰	N5/ 灰	完形、底部内面に当て具痕跡
12	須恵器	杯H身	12.1	4.7	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面～底部内面ロクロナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	—	完形
13	須恵器	杯H身	13.45	3.55	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N6/ 灰～7/ 灰白	N6/ 灰	N6/ 灰～7/ 灰白	完形

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
14	須恵器	短頸壺	7.2	6.5	—	底部外面ロクロケズリ、体部内外面～口縁部内外面ロクロナデ	10YR4/1 褐灰～5/1 褐灰	5PB6/1 青灰～7/1 青灰	5R7/1 明赤灰	完形
15	須恵器	短頸壺	14.8	18.6	—	外面体部下～底部ロクロケズリ、口縁部～体部上半カキメ	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	完形
16	須恵器	壺蓋	7.1	3.4	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面～頂部内面ロクロナデ	5PB4/1 暗青灰～5/1 青灰	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	完形
17	須恵器	台付長頸壺	9.7	23.6	13.0	外面カキメ、脚部下半～内面ロクロナデ、体部下半ロクロケズリ後カキメ	N3/ 暗灰～7/ 灰白	5PB6/1 青灰	N5/ 灰	完形
18	須恵器	甕	14.7	17.6	—	体部外面下半ロクロケズリ、体部上半～内面ロクロナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	N8/ 灰白	
19	須恵器	提瓶	6.8	16.9	—	外面カキメ、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰、2.5Y2/5 灰赤	完形
20	須恵器	提瓶	6.8	20.5	—	外面カキメ、口縁部内外面ロクロナデ	5PB5/1 青灰～7/1 明青灰	N7/ 灰白、5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	完形
21	須恵器	提瓶	9.0	26.8	—	外面カキメ、口縁部内外面ロクロナデ	N8/0 灰白、2.5Y4/1 黄灰	5PB6/1 青灰	N8/ 灰白、5PB6/1 青灰	完形
22	土師器	脚付壺	5.2	11.55	8.3	口縁部～体部上半ヨコナデ、体部上半ヨコナデ後ヘラミガキ、脚部ナデ	7.5YR7/8 黄橙	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙～7/8 黄橙	完形
23	土師器	脚付壺	6.05	12.65	8.2	口縁部～体部上半ヨコナデ、体部上半ヨコナデ後ヘラミガキ、脚部ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	完形
24	須恵器	壺 H	(12.6)	—	—	内外面ロクロナデ	7.5Y7/1 灰白	N8/ 灰白	7.5Y7/1 灰白	
25	須恵器	壺	—	—	—	底部外面ロクロケズリ、体部下半～底部内面ロクロナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
26	須恵器	短頸壺	8.1	8.5	—	底部外面ロクロケズリ、体部上半～口縁部内外面・体部内面ロクロナデ	N6/ 灰	5PB5/1 青灰	N6/ 灰	完形、体部外面に線刻
27	須恵器	甕	22.1	44.1	—	口縁部内外面ロクロナデ、外面格子目タタキ、内面同心円状当て具	N4/ 灰～N7/ 灰白	N5/1 青灰	2.5YR5/2 灰赤	底部外面に火襴

表 26 赤田 6号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	須恵器	高杯	—	—	—	内外面ロクロナデ	N5/8 灰白	N5/8 灰白	2.5Y8/2 灰白	
2	須恵器	三耳壺	3.05	7.6	3.6	体部下半ロクロケズリの後ロクロナデ、底部外面糸切り後ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	外面に灰緑色の自然釉かかる、V群土器
3	須恵器	甕	25.85	46.5	—	外面格子目タタキ後カキメ、内面当て具	N8/ 灰白、7.5GY3/1 暗紫灰	N6/ 灰～8/ 灰白	N7/ 灰白	

表 27 赤田 7号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	須恵器	杯 H 蓋	9.25	3.4	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	—	完形
2	須恵器	杯 H 蓋	10.0	2.75	—	頂部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N3/ 暗灰	5Y4/1 灰	—	完形
3	須恵器	杯 H 蓋	10.4	3.9	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y5/1 灰白	—	完形
4	須恵器	杯 H 蓋	10.95	3.45	—	頂部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	—	完形
5	須恵器	杯 H 蓋	10.05	3.6	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、頂部下半ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	—	完形
6	須恵器	杯 H 身	7.9	2.8	—	底部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰～5/ 灰	5PB4/1 暗青灰～5/1 青灰	—	完形
7	須恵器	杯 H 身	7.9	2.85	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	N5/ 灰～7/ 灰白	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰～6/1 青灰	ほぼ完形
8	須恵器	杯 H 身	9.05	2.9	—	底部外面ヘラキリ後未調整、口縁部下半ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロケズリ	N6/ 灰～7/ 灰白	5PB6/1 青灰～7/1 明青灰	N6/ 灰	ほぼ完形、底部外面に線刻
9	須恵器	杯 H 身	9.65	3.2	—	底部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰～7/ 灰白	N6/ 灰	N7/ 灰白	ほぼ完形
10	須恵器	杯 H 身	8.45	2.65	—	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ	5P5/1 紫灰～6/1 紫灰、10YR7/1 灰白	5P7/1 明紫灰	5RP7/1 明紫灰	ほぼ完形
11	須恵器	杯 G 蓋	7.3	2.8	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰～7/ 灰白	N6/ 灰	N6/ 灰	外面に灰緑色の自然釉かかる、ほぼ完形

出土遺物観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
12	須恵器	杯 G 蓋	8.7	2.8	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、頂部下半ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N4/ 灰～6/ 灰	N5/ 灰～6/ 灰	N6/ 灰	ほぼ完形
13	須恵器	杯 G 蓋	8.1	3.25	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N5/ 灰～6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	ほぼ完形
14	須恵器	無蓋高杯	10.25	8.35	9.4	杯部下半ロクロケズリ、口縁部・脚部ロクロナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	ほぼ完形
15	須恵器	短頸壺	8.5	10.6	—	底部外面ロクロケズリ、体部～口縁部ヨコナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	—	完形
16	須恵器	長頸壺	8.15	20.2	—	底部外面ロクロケズリ、体部下半～頸部下半ロクロナデ、頸部上半カキメ	N3/ 暗灰～5/ 灰	7.5YR6/1 褐灰	2.5Y8/2 灰白、7.5YR6/1 褐灰	完形
17	須恵器	台付長頸壺	6.2	19.85	(9.3)	体部下半ロクロケズリ、脚部・体部上半・口縁部ロクロナデ	N3/ 灰～5/ 灰	N5/ 灰	N3/ 灰～5/ 灰	完形
18	土師器	甕	(12.6)	14.15	—	体部下半ヘラケズリ、体部上半・体部内面ハケメ、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/3 淡黄～8/4 淡黄、7/4 浅黄、5/2 暗灰黄	2.5Y8/3 淡黄～8/4 淡黄	2.5Y8/3 淡黄～8/4 淡黄	ほぼ完形
19	土師器	皿 A	15.0	2.3	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	7.5YR7/6 橙～7/8 橙	7.5YR7/6 橙～7/8 橙	10YR8/4 浅黄橙	完形
20	土師器	皿 A	15.5	2.4	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部外面ユビオサエ、内面ヨコナデ	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR6/8 橙	完形
21	土師器	皿 A	(14.8)	1.95	—	底部外面ユビオサエ、口縁部内外面ヨコナデ	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	口縁部 1/4 欠損
22	土師器	皿 A	(15.4)	1.85	—	内外面ヨコナデ後ユビオサエ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	残存 1/3
23	須恵器	壺 M	3.6	10.1	3.6	底部外面糸切り、体部～口縁部ロクロナデ	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	—	完形
24	須恵器	杯 G 蓋	8.8	3.35	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N8/ 灰白～7/ 灰白	N8/ 灰白～7/ 灰白	5Y7/3 浅黄	
25	須恵器	杯 G 蓋	8.9	2.5	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	5B1.7/1 青黒	5PB4/1 暗青灰	5B1.7/1 青黒	完形
26	須恵器	杯 G 蓋	7.0	2.8	—	頂部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	10YR6/1 褐灰、5Y8/2 灰白	5Y8/3 淡黄	10YR6/1 褐灰、5Y8/3 淡黄	残存 3/4
27	須恵器	杯 G 身	7.85	2.9	—	頂部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	残存 1/2
28	須恵器	杯 H 身	(10.4)	2.6	—	底部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	5PB6/1 青灰	10YR6/2 灰黄褐	残存 1/2
29	須恵器	杯 H 身	9.2	3.0	—	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	N5/ 灰～6/ 灰	ほぼ完形
30	須恵器	杯 H 身	9.2	2.95	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	—	完形
31	須恵器	杯 H 身	9.6	2.95	—	底部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	7.5Y7/1 灰白～8/1 灰白	5Y8/3 淡黄	7.5Y8/1 灰白	完形
32	須恵器	杯 H 身	—	—	—	底部外面未調整、体部下半ヨコナデ	5Y8/4 淡黄	5Y8/3 淡黄	5Y8/3 淡黄	
33	土師器	椀	(11.1)	3.3	—	風化のため調整不明	7.5YR6/8 橙、10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/0 橙～8/4 浅黄橙	7.5YR5/8 明褐～6/8 橙	外面に黒斑
34	須恵器	杯 B	(11.0)	3.3	(7.25)	底部～口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	N7/ 灰白	残存 1/4
35	須恵器	壺	—	—	7.2	底部～体部ロクロナデ	5P5/1 紫灰	5PB6/1 青灰～7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	
36	須恵器	壺	—	—	(12.3)	体部下半ロクロナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白～8/ 灰白	2.5Y8/2 灰白	
37	須恵器	甕	19.6	36.0	—	外面平行タタキ後カキメ	5R3/1 暗赤灰～7/1 明赤灰	5P6/1 紫灰	5R7/1 明赤灰	

表 28 赤田 8 号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	土師器	甕	(22.8)	—	—	口縁部～体部ハケメ	10YR7/4 黄橙	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	残存 1/4
2	須恵器	杯 B	—	—	(18.0)	底部外面ロクロケズリ、体部ロクロナデ	N8/ 灰白	5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	残存高台 1/12
3	須恵器	壺	—	—	—	頸部ロクロナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
5	須恵器	甕	(17.4)	—	—	内外面ロクロナデ、外面格子目タタキ、内面同心円当て具	10Y5/2 オリーブ灰	10Y7/2 灰白	5R6/1 紫灰	6 と同一個体カ
6	須恵器	甕	(20.8)	—	—	口縁部ロクロナデ	10Y4/1 灰～5/1 灰	N7/ 灰白	2.5GY7/1 明オリーブ灰	残存口縁部 1/10
7	須恵器	杯カ椀	(18.0)	—	—	口縁部ロクロナデ	7.5Y6/0 灰～7/1 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	残存口縁部 1/12

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
8	土師器	甕	15.0	12.8	—	体部外面ハケメ、口縁部内外面ヨコナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ほぼ完形
9	土師器	皿	(11.4)	1.45	—	内外面ヨコナデ	2.5Y8/8 黄	2.5Y8/8 黄	2.5Y8/8 黄	
10	土師器	羽釜	(19.0)	—	—	内外面ヨコナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	

表 29 赤田9号墓 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	土師器	椀	11.2	5.1	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	—	完形、口縁部焼け歪
2	土師器	椀	11.4	3.8	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白～8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	口縁部焼け歪大
3	土師器	椀	11.4	3.4	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/4 浅黄	2.5Y8/3 淡黄	—	底部外面に線刻
4	土師器	椀	12.4	4.9	—	底部外面未調整、口縁部下半ロクロケズリ、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄橙	—	完形
5	土師器	杯 C	16.7	6.2	—	底部外面ヘラケズリ、口縁部外面下半ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/4 浅黄	2.5Y8/3 淡黄	—	完形、内面に1段の斜放射暗文
6	土師器	甑	26.0	31.4	13.7	体部下半ヘラケズリ、体部上半～内面ハケメ	10YR7/6 明黄褐、7.5YR5/6 橙	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	
7	土師器	甕	14.2	15.0	—	底部外面ヘラケズリ、体部外面上半ハケメ、口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ハケメ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	
8	土師器	甕	23.5	41.8	—	内外面ハケメ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
9	須恵器	無蓋高杯	11.8	15.4	(11.5)	杯部～脚部内外面ロクロナデ	N7/ 灰白～6/0 灰	N6/ 灰	5PB4/1 暗青灰～5/1 青灰	
10	須恵器	壺 H	(11.8)	8.9	5.9	口縁部～底部内外面ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	5Y8/2 灰白	口縁部残存 1/6
12	須恵器	杯 H 身	10.2	2.9	—	底部外面ロクロケズリ、口縁部内外面ロクロナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
13	須恵器	杯 H 身	10.9	3.0	—	底部外面ヘラキリ後未調整、口縁部内外面ロクロナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	N8/ 灰白	
14	須恵器	杯 H 身	(11.1)	—	—	内外面ロクロナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
15	須恵器	短頸壺	(5.4)	4.9	(5.8)	底部外面未調整、体部～口縁部内外面ロクロナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	N8/ 灰白	
16	土師器	鉢	16.8	6.5	—	外面剥落のため調整不明、内面ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
17	土師器	甕	(28.0)	—	—	体部下半ヘラケズリ、体部上半・内面ハケメ、口縁部ヨコナデ	5Y8/3 浅黄	5Y8/4 浅黄	5Y8/3 浅黄	

表 30 赤田1号墳 出土土器観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	技法の特徴	色調			備考
							外面	内面	断面	
1	須恵器	杯 H 蓋	10.1	4.0	—	外面天井部のみロクロケズリ、その他内外面ともロクロナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	完形、焼け歪みあり
2	須恵器	無蓋高杯	12.4	14.6	—	内外面ともロクロナデ、口縁端部はやや反し丸くおさめる	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	ほぼ完形、長脚2段、透孔2方向
3	須恵器	高杯	—	—	—	内外面ともロクロナデ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	N6/ 灰	約 1/2 残存、長脚2段、透孔2方向
4	須恵器	高杯	—	—	—	内外面ともにロクロナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	脚部片で完存、透孔はない
5	須恵器	台付壺	—	—	—	内外面ともロクロナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	脚台片で約 1/4 残存、透孔を2段、復原4方向
6	須恵器	甕	—	—	—	外面はタタキ調整、内面には当て具痕が残る	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	7.5Y8/2 灰白	
7	須恵器	平瓶	10.2	11.8	—	内外面ともロクロナデ、外面底部および底面のみヘラケズリ	N5/ 灰	N5/ 灰	N7/ 灰白	ほぼ完形
8	土師器	皿	(5.0)	—	—	内外面ともに摩擦し不明瞭	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	
12	須恵器	壺	—	—	(5.4)	内外面ロクロナデ	N6/ 灰	N7/ 灰	N4/ 灰	底部約 1/2 残存
12	須恵器	杯 B	—	—	(11.8)	内外面ロクロナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	2.5YR5/2 灰赤	底部片 1/4 残存

圖 版



1 試掘調査 西区 調査前現況 (南東から)



2 試掘調査 東区 調査前現況 (南西から)



3 試掘調査 西区 横穴墓検出状態 (南東から)



4 試掘調査 東区 横穴墓検出状態 (東から)



5 試掘調査 西区 赤田11・12号墓検出状態 (南から)



6 試掘調査 東区 赤田3号墓検出状態 (南から)



1 発掘区全景（上が北）



2 墓道完掘状態（右から赤田4～8号墓・南から）



1 墓道埋土堆積状態 (左から赤田5～7号墓・北から)



2 発掘区西壁土層と河川による土壌化の様子 (南から)



1 玄室完掘状態 (手前から赤田3～8号墓・南東から)



2 玄室完掘状態 (手前から赤田3～8号墓・北東から)



1 AD 第01次調査 赤田1・2号墓完掘状態（南から）



2 AD 第02次調査 赤田1号墓完掘状態（南から）



1 赤田2号墓 完掘状態 (南から)



2 赤田2号墓 玄室 奥壁検出状態 (南から)



3 赤田2号墓 玄室 土器出土状態 (南から)



1 赤田3号墓 墓道 土層堆積状態 (北から)



2 赤田3号墓 羨門 土層堆積状態 (南東から)



3 赤田3号墓 墓道 土器出土状態 (北から)



4 赤田3号墓 墓道 土器出土状態 (南西から)



5 赤田3号墓 墓道 完掘状態 (南から)



1 赤田3号墓 玄室 陶棺出土状態 (南西から)



2 赤田3号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南東から)



1 赤田3号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から)



2 赤田3号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から)



3 赤田3号墓 玄室 土器出土状態 (南東から)



4 赤田3号墓 玄室 耳環出土状態 (西から)



5 赤田3号墓 玄室 耳環出土状態 (西から)



6 赤田3号墓 玄室 第4層赤色顔料の広がり (南から)



7 赤田3号墓 玄室 第4層鉄鎌出土状態 (南から)



1 赤田3号墓 玄門から玄室前方土器出土状態 (南から)



2 赤田3号墓 玄室 完掘状態 (南から)



1 赤田4号墓 墓道 土層堆積状態 (南東から)



2 赤田4号墓 墓道 土器出土状態 (南から)



3 赤田4号墓 羨門から玄室土層堆積状態 (南西から)



4 赤田4号墓 墓道 土器出土状態 (南西から)



5 赤田4号墓 玄門 土層と土器出土状態 (南から)



6 赤田4号墓 羨門 板による閉塞の痕跡 (南西から)



7 赤田4号墓 玄門 土器出土状態 (南から)



1 赤田4号墓 墓道 完掘状態 (南から)



2 赤田4号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から)



1 赤田4号墓 玄室 西木棺棺台・鉄釘出土状態(南から)



2 赤田4号墓 玄室 東木棺棺台・土器出土状態(南から)



3 赤田4号墓 玄室内全景(南から)



1 赤田4号墓 玄室 土器出土状態 (南から)



2 赤田4号墓 玄室 陶棺脚部出土状態 (南から)



3 赤田4号墓 玄室 平面・断面検出状態 (南から)



4 赤田4号墓 玄室 完掘状態 (南から)



1 赤田5号墓 墓道 土層堆積状態 (南から)



2 赤田5号墓 羨門 板による閉塞の痕跡 (南から)



3 赤田5号墓 墓道 土器出土状態 (南から)



4 赤田5号墓 墓道 土器出土状態 (南から)



5 赤田5号墓 墓道 完掘状態 (南から)



6 赤田5号墓 玄室 平面・断面検出状態 (南から)



1 赤田5号墓 玄室 埋没状態 (西から)



2 赤田5号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (北東から)



1 赤田5号墓 玄室 南陶棺南西側土器出土状態 (南東から)



2 赤田5号墓 玄室 南陶棺西側土器出土状態 (南から)



3 赤田5号墓 玄室 北陶棺東側土器出土状態 (南東から)



4 赤田5号墓 玄室 北陶棺東側土器出土状態 (東から)



5 赤田5号墓 玄室 北陶棺と陶栓 (東から)



6 赤田5号墓 陶栓がはめられた状態 (北陶棺内側から)



7 赤田5号墓 玄室 北陶棺西側面 (西から)



8 赤田5号墓 玄室 北陶棺北側土器出土状態 (西から)



1 赤田5号墓 玄室 全景 (東から)



2 赤田5号墓 陶棺内遺物出土状態 (東から)



1 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南東から)



2 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南から)



3 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南から)



4 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南から)



5 赤田5号墓 南陶棺内遺物出土状態 (南東から)



6 赤田5号墓 北陶棺内遺物出土状態 (東から)



7 赤田5号墓 北陶棺内遺物出土状態 (南から)



8 赤田5号墓 北陶棺内遺物出土状態 (南から)



1 赤田5号墓 玄室 完掘状態 (南から)



2 赤田5号墓 玄室 完掘状態 (北から)



1 赤田5号墓・6号墓 玄室 重複状態 (南から)



2 赤田6号墓 墓道 完掘状態 (南から)



3 赤田6号墓 玄室 完掘状態 (北から)



1 赤田7号墓 墓道 土層堆積状態 (南西から)



2 赤田7号墓 墓道 土器出土状態 (南西から)



3 赤田7号墓 墓道 土器出土状態 (南西から)



4 赤田7号墓 羨門 床面 (南西から)



5 赤田7号墓 墓道完掘状態 (南から)



6 赤田7号墓 羨門 (南から)



1 赤田7号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南西から)



2 赤田7号墓 玄室 陶棺出土状態 (南西から)



1 赤田7号墓 玄室 平面・断面検出状態 (南から)



2 赤田7号墓 玄室 陶棺出土状態 (東から)



3 赤田7号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南東から)



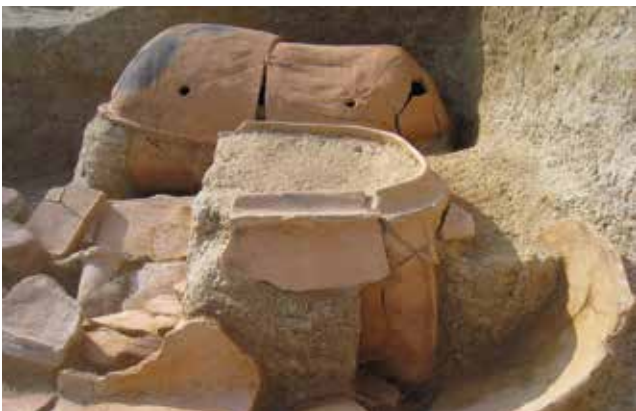
4 赤田7号墓 玄室 陶棺出土状態 (西から)



5 赤田7号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南西から)



6 赤田7号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南東から)



7 赤田7号墓 玄室 陶棺出土状態 (東から)



8 赤田7号墓 玄室 西陶棺出土状態 (東から)



1 赤田7号墓 玄室 土器出土状態 (南東から)



2 赤田7号墓 玄室 土器出土状態 (北東から)



3 赤田7号墓 玄室 土器出土状態 (西から)



4 赤田7号墓 玄室 土器出土状態 (西から)



5 赤田7号墓 玄室 陶棺・土器出土状態 (南から)



6 赤田7号墓 玄室 土器出土状態 (北から)



7 赤田7号墓 玄室 土器出土状態 (南から)



1 赤田7号墓 玄室 西陶棺と脚下の埴輪 (南西から)



2 赤田7号墓 玄室 西陶棺脚下の埴輪 (南西から)



3 赤田7号墓 玄室 陶棺出土状態 (南西から)



4 赤田7号墓 完掘状態 (南西から)



1 赤田8号墓 墓道 土層堆積状態 (南東から)



2 赤田8号墓 墓道 土器出土状態 (東から)



3 赤田8号墓 墓道 土器出土状態 (南東から)



4 赤田8号墓 羨門 検出状態 (南から)



5 赤田8号墓 墓道 完掘状態 (南から)



6 赤田8号墓 羨門 (南から)



1 赤田8号墓 玄室 土層堆積状態(東北から)



2 赤田8号墓 玄室 陶棺出土状態(西から)



3 赤田8号墓 玄室 陶棺内鉄器出土状態(東から)



4 赤田8号墓 玄室 陶棺出土状態(南から)



5 赤田8号墓 玄室 陶棺出土状態(東から)



1 赤田8号墓 羨門・玄室 (南から)



2 赤田7号墓・8号墓 完掘状態 (南から)



1 赤田9号墓 墓道 土層堆積状態 (北東から)



2 赤田9号墓 墓道 土器出土状態 (西から)



3 赤田9号墓 墓道 遺物出土状態 (南東から)



4 赤田9号墓 墓道 土馬出土状態 (南東から)



5 赤田9号墓 墓道 完掘状態 (南から)



6 赤田9号墓 玄門 断面 (南東から)



1 赤田9号墓 玄室 検出状態 (南から)



2 赤田9号墓 玄室 陶棺出土状態 (南から)



1 赤田9号墓 玄室 陶棺出土状態(北東から)



2 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺出土状態(南から)



3 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺出土状態(北から)



4 赤田9号墓 玄室 土馬出土状態(南から)



5 赤田9号墓 玄室 陶棺出土状態(東から)



6 赤田9号墓 玄室 円筒形陶棺B出土状態(南から)



7 赤田9号墓 玄室 円筒形陶棺B出土状態(北から)



1 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺・円筒形陶棺A出土状態 (南西から)



2 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺・円筒形陶棺A出土状態 (西から)



1 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺出土状態(西から)



2 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺・土器出土状態(北から)



3 赤田9号墓 玄室 円筒形陶棺A出土状態(西から)



4 赤田9号墓 玄室 土器出土状態(西から)



5 赤田9号墓 玄室 円筒形陶棺A出土状態(南西から)



6 赤田9号墓 玄室 円筒形陶棺A・土器出土状態(南西から)



7 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺・耳環・土器出土状態(南から)



8 赤田9号墓 玄室 亀甲形陶棺下土器出土状態(南から)



1 赤田9号墓 玄室 完掘状態 (南から)



2 赤田9号墓 玄室 完掘状態 (北東から)



1 赤田1号墓 陶棺 (長側面)



2 赤田1号墓 陶棺



3 赤田1号墓 陶棺 (短側面)



4 赤田1号墓 陶棺蓋



5 赤田1号墓
棺蓋内面の藁縄状圧痕



6 赤田1号墓 鉄鏃



1 赤田1号墓 玄室出土土師器甕



2 赤田1号墓 玄室出土土器



1 赤田3号墓 陶棺



2 赤田3号墓 陶棺 (長側面)



3 赤田3号墓 陶棺 (短側面)



4 赤田3号墓 陶棺蓋 (長側面)



5 赤田3号墓 陶棺身



6 赤田3号墓 耳環・鉄鎌・鉄鏃



1 赤田3号墓 玄室出土土器 (陶棺)



2 赤田3号墓 玄室・羨道出土須恵器 (木棺)



3 赤田3号墓 羨門出土須恵器短頸壺



4 赤田3号墓 墓道出土須恵器



1 赤田4号墓 陶棺蓋



2 赤田4号墓 陶棺蓋



3 赤田4号墓 陶棺蓋



4 赤田4号墓 陶棺身



5 赤田4号墓 陶棺身 (底部裏面)



1 赤田4号墓 陶棺身(長側面)



2 赤田4号墓 耳環・鉄鏃・鉄釘



3 赤田4号墓 円筒埴輪



4 赤田4号墓 形象埴輪



5 赤田4号墓 玄室出土須恵器(陶棺)



6 赤田4号墓 玄室出土須恵器(東木棺)



1 赤田4号墓 玄室出土須恵器台付長頸壺 (西木棺)



2 赤田4号墓 玄室出土須恵器壺H



3 赤田4号墓 羨門閉塞土出土土師器碗



4 赤田4号墓 玄室・墓道出土土馬



5 赤田4号墓 玄門出土須恵器台付長頸壺



6 赤田4号墓 墓道出土須恵器壺



1 赤田5号墓 北陶棺 (長側面)



2 赤田5号墓 北陶棺



3 赤田5号墓 北陶棺 (短側面)



4 赤田5号墓 北陶棺蓋の切断形態



5 赤田5号墓 陶栓



1 赤田5号墓 南陶棺（長側面）



2 赤田5号墓 南陶棺



3 赤田5号墓 南陶棺（短側面）



4 赤田5号墓 南陶棺蓋の切断形態



5 赤田5号墓 南陶棺蓋



1 赤田5号墓 北陶棺出土玉類



2 赤田5号墓 南陶棺出土玉類



3 赤田5号墓 北陶棺出土耳環・鉄器



4 赤田5号墓 南陶棺出土耳環・鉄器



1 赤田5号墓 玄室出土土器



2 赤田5号墓 南陶棺内出土須恵器



3 赤田5号墓 墓道出土須恵器



4 赤田6号墓 墓道出土須恵器甕



5 赤田6号墓 墓道出土須恵器三耳壺



1 赤田7号墓 東陶棺 (長側面)



2 赤田7号墓 東陶棺



3 赤田7号墓 東陶棺 (短側面)



4 赤田7号墓 西陶棺 (長側面)



5 赤田7号墓 西陶棺蓋 (長側面)



1 赤田7号墓 西陶棺



2 赤田7号墓 西陶棺 (短側面)



3 赤田7号墓 鉄刀子・鉄釘



4 赤田7号墓 西陶棺内出土褒玉



5 赤田7号墓 西陶棺下に敷かれた円筒埴輪



2 赤田7号墓 玄室出土須恵器 (西陶棺)



1 赤田7号墓 玄室出土土器



3 赤田7号墓 玄室出土土器 (平安時代)



4 赤田7号墓 墓道出土須恵器甕



5 赤田7号墓 墓道出土土器



1 赤田8号墓 陶棺蓋長側面（中央）と短側面（両端）



2 赤田8号墓 陶棺身（長側面）



3 赤田8号墓 陶棺身（短側面）



4 赤田8号墓 陶棺身（長側面）



5 赤田8号墓 陶棺身（短側面）



6 赤田8号墓 陶栓



7 赤田8号墓 陶棺蓋の陶栓装着状態（復原）



1 赤田8号墓 鉄鏃・鉄刀子



2 赤田8号墓 墓道出土須恵器甕



3 赤田9号墓 亀甲形陶棺 (長側面)



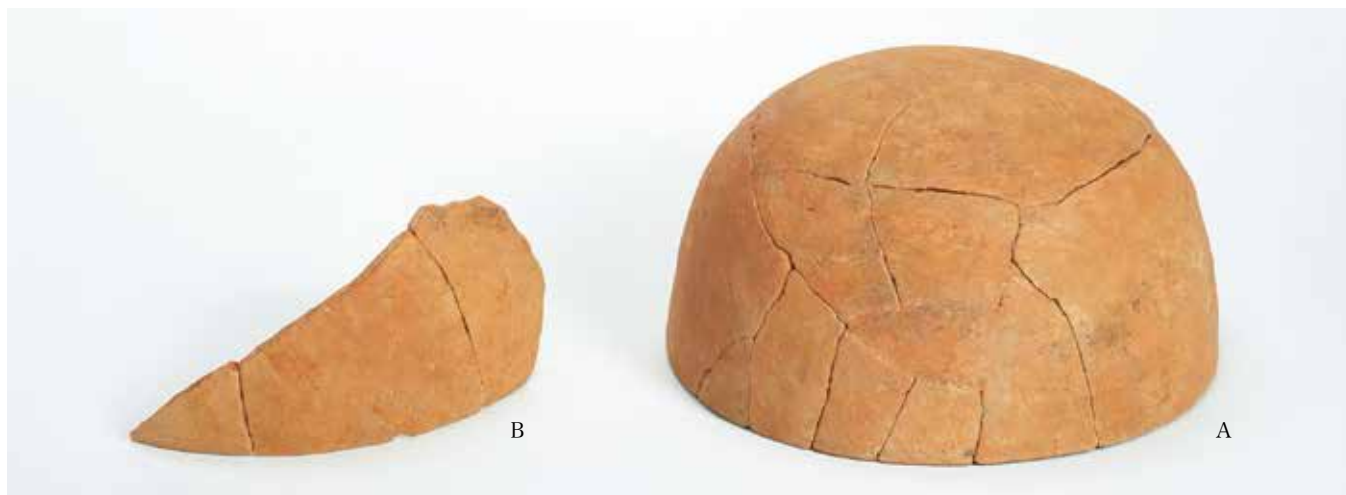
4 赤田9号墓 亀甲形陶棺蓋



5 赤田9号墓 亀甲形陶棺



6 赤田9号墓 亀甲形陶棺 (短側面)



1 赤田9号墓 円筒形陶棺蓋



2 赤田9号墓 円筒形陶棺 A



3 赤田9号墓 円筒形陶棺 A (蓋なし)



4 赤田9号墓 円筒形陶棺 B



1 赤田9号墓 耳環



2 赤田9号墓 玄室出土土師器碗 (陶棺下)



3 赤田9号墓 玄室出土土器



5 赤田9号墓 玄室出土
須惠器壺 H



4 赤田9号墓 玄室出土土師器



6 赤田9号墓 玄室出土土師器



7 赤田9号墓 墓道出土土器・土馬



1 赤田1号墳 垂直写真（上が北）



2 赤田1号墳 不時発見時の状態（南西から）



1 赤田1号墳 埋葬施設（北西から）



2 赤田1号墳 埋葬施設（南西から）



1 赤田1号墳 埋葬施設 (南から)



2 赤田1号墳 埋葬施設 (上方から)



1 赤田1号墳 陶棺内耳環出土状態 (南西から)



2 赤田1号墳 土器出土状態 (北西から)



1 赤田1号墳 耳環・平瓶出土状態（南東から）



2 赤田1号墳 石室全景（南西から）



1 赤田1号墳 玄門付近 耳環出土状態 (南から)



2 赤田1号墳 陶棺脚部 土層堆積状態 (北西から)



3 赤田1号墳 玄門付近 土層堆積状態 (南東から)



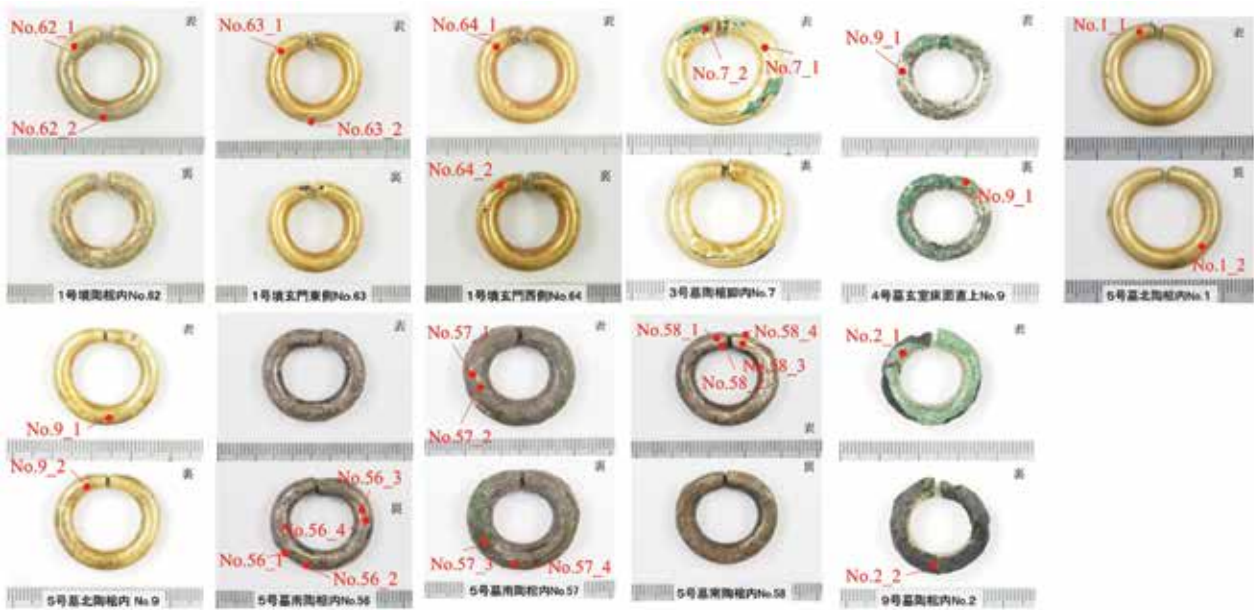
4 赤田1号墳 周溝 土層堆積状態 (南東から)



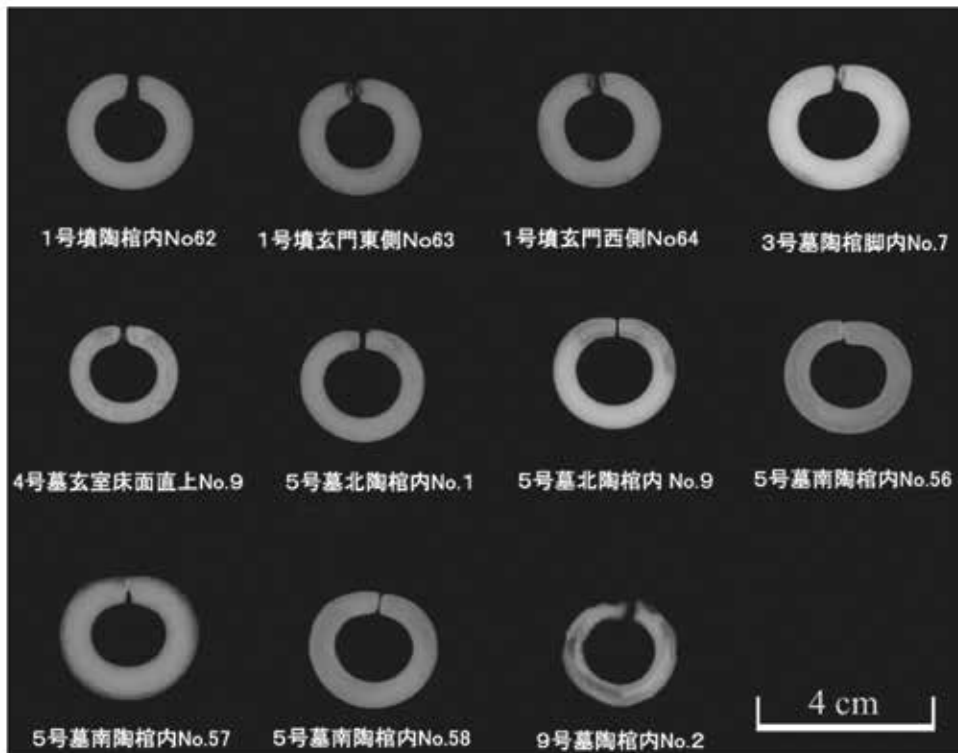
5 赤田1号墳 玄室出土土器・耳環



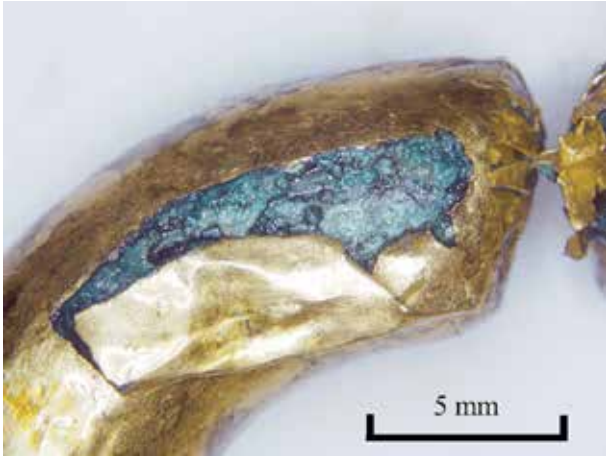
6 赤田1号墳 陶棺蓋



1 調査対象資料および XRF の測定箇所



2 X線透過撮影像



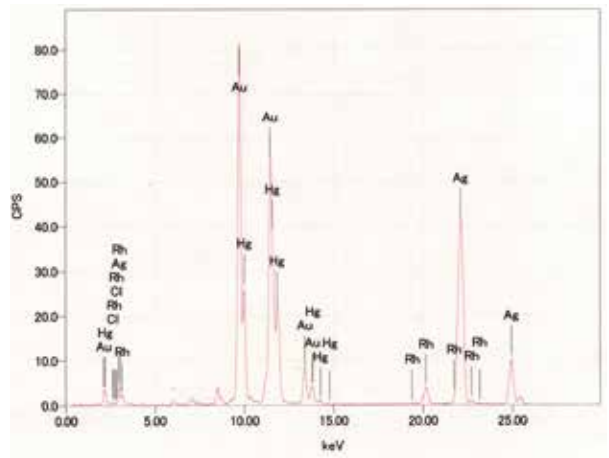
1 3号墓 No.7の金色層の剥離状態



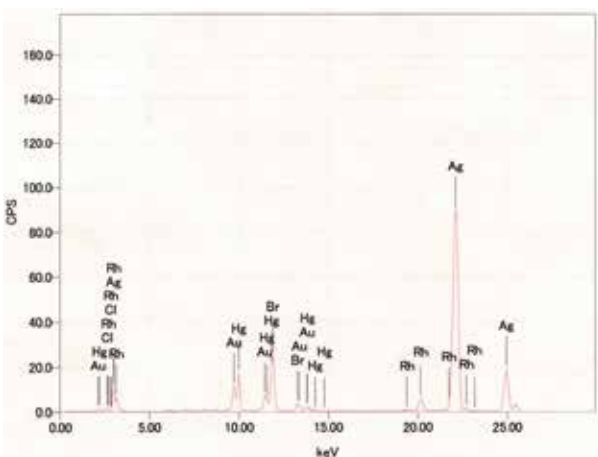
2 1号墳 No.62の接部の状態
(接部はたたみ込んだ状態を示す。)



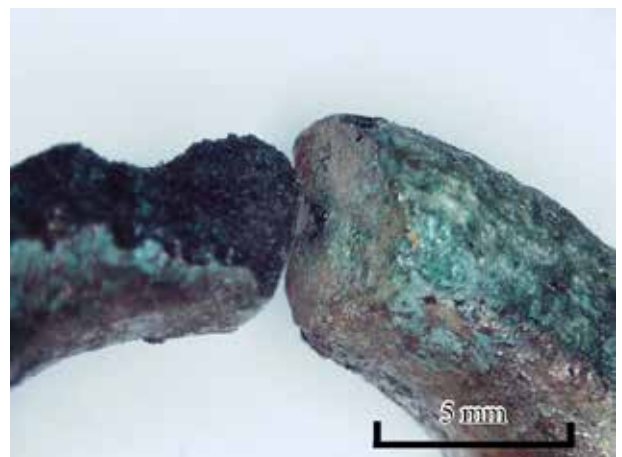
3 5号墓 No.58の最表面の金色層の剥離部
(表層の金色層が剥離し、下層の銀色層が露出)



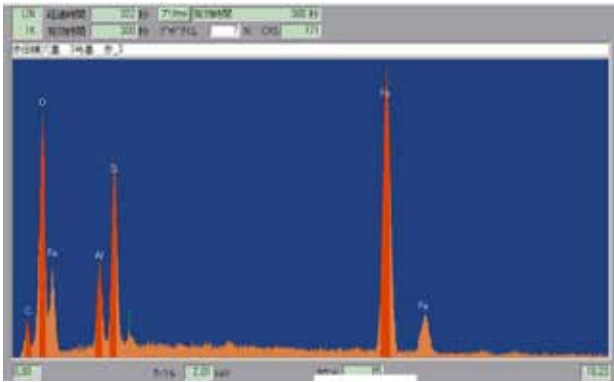
4 5号墓 No.56_3の蛍光X線スペクトル
(表層の金色層では金および水銀を検出)



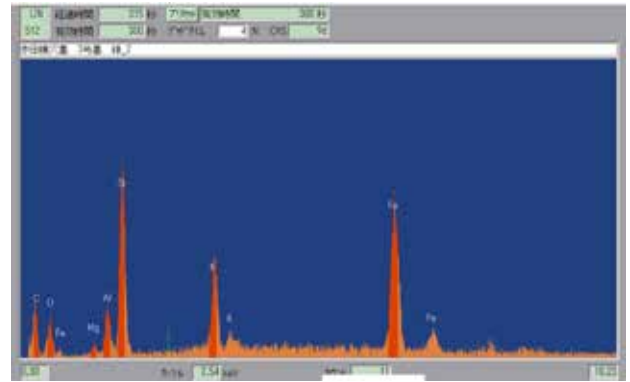
5 5号墓 No.56_4の蛍光X線スペクトル
(下層の銀色部では銀のみが顕著に検出)



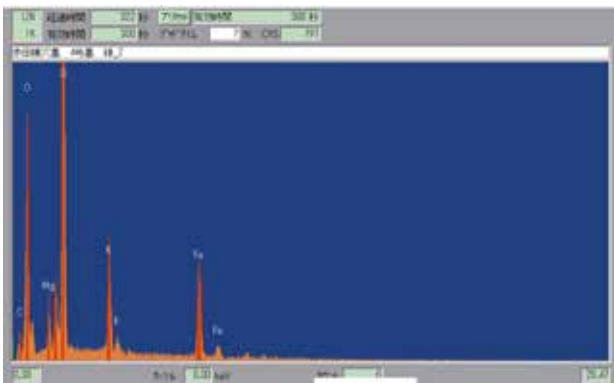
6 9号墓 No. 2の接部の状態
(端部は平坦な状態を示す。)



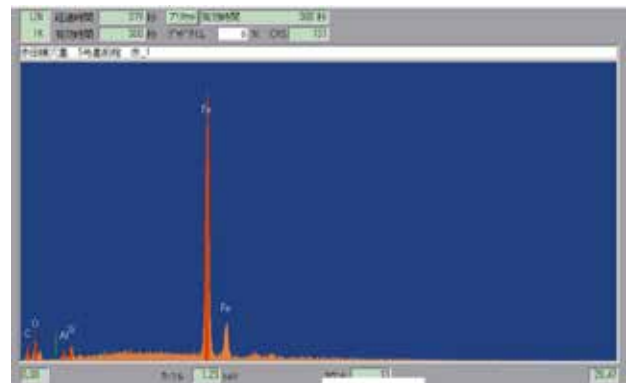
3号墓資料 A 赤色



3号墓資料 A 緑色

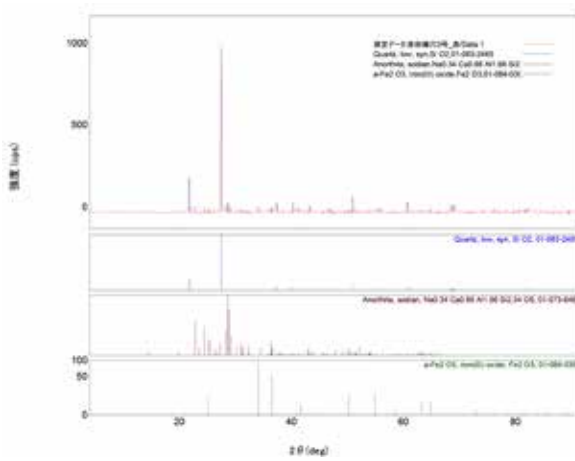


3号墓資料 B 緑色

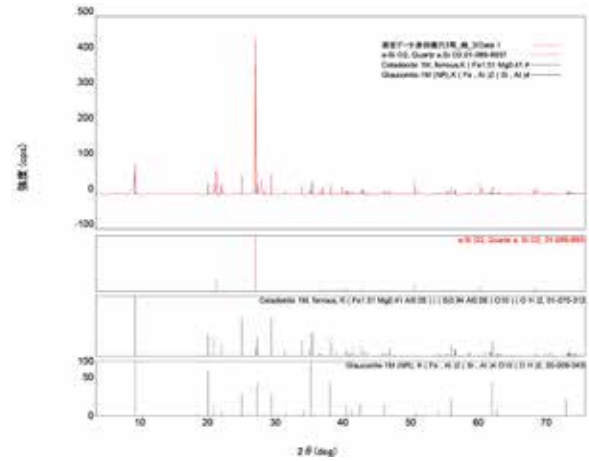


5号墓資料 (北陶棺) 赤色

1 SEM-EDSの結果

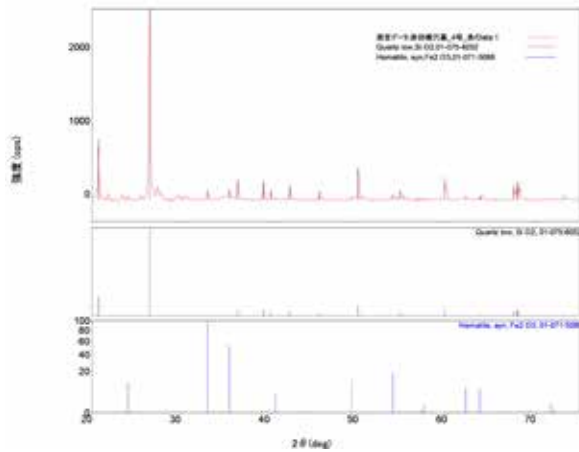


3号墓資料 A 赤色 (DT-XRD)

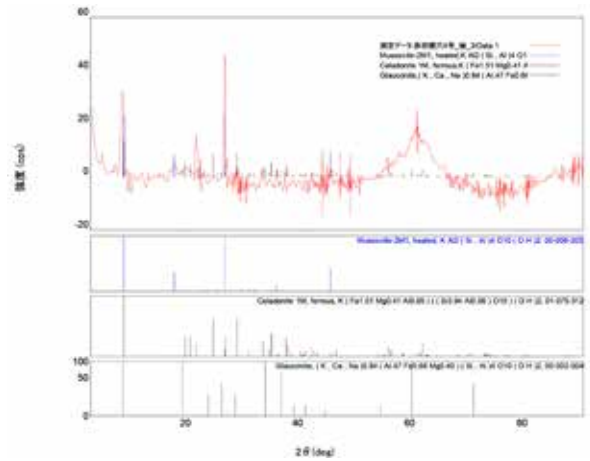


3号墓資料 A 緑色 (DT-XRD)

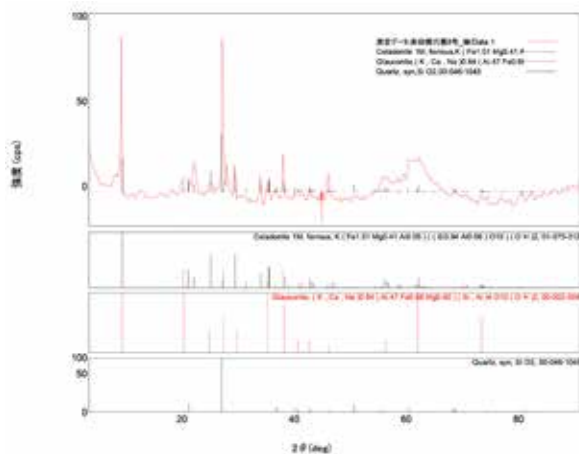
2 XRD スペクトル (1)



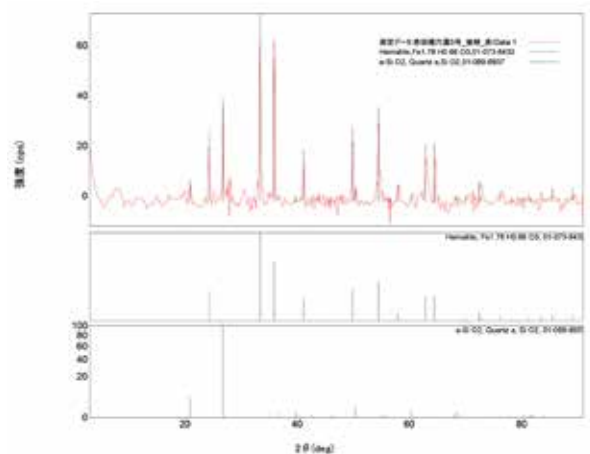
3号墓資料B 赤色 (DT-XRD)



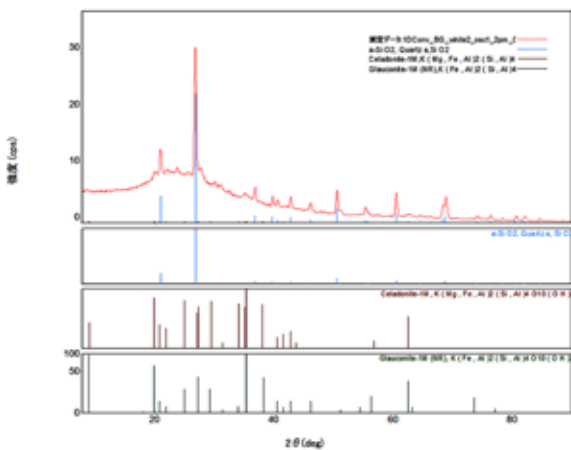
3号墓資料B 緑色 (DT-XRD)



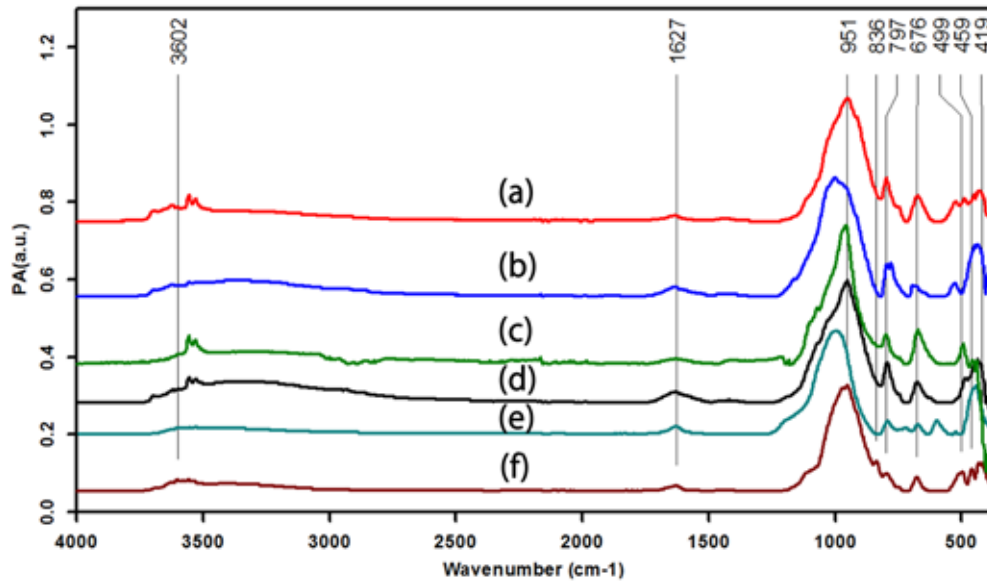
3号墓資料C 緑色 (DT-XRD)



5号墓資料 (北陶棺) 赤色 (DT-XRD)



1号墳資料緑色 (DT-XRD)



1 陶棺の緑色の IR スペクトル (ATR)

(a) 1号墳、(b) 3号墓A、(c) 3号墓B、(d) 3号墓C、(e) セラドナイト (神奈川県)、(f) 海緑石 (山形県)



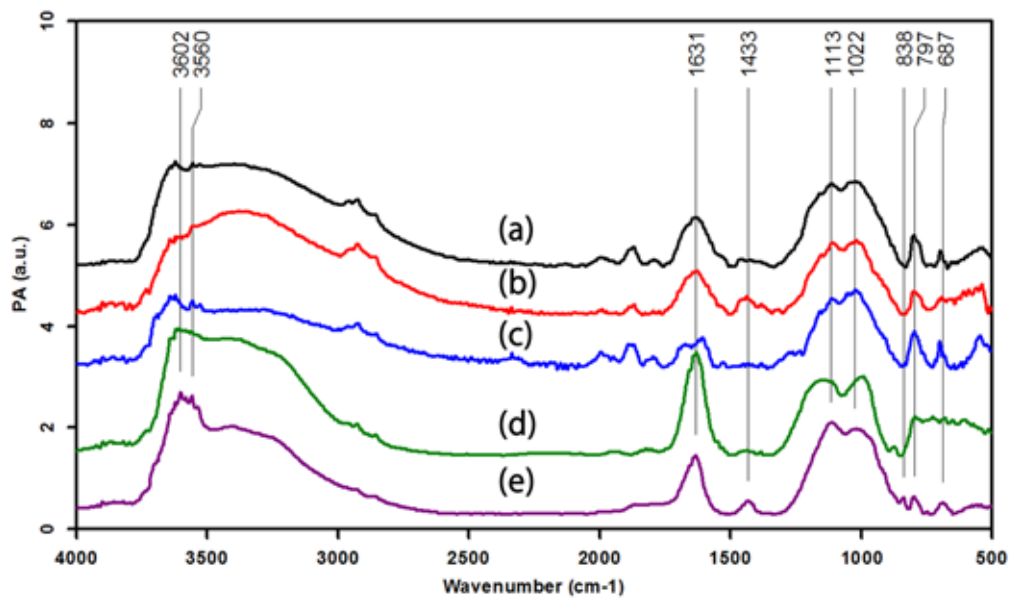
3号墓資料 A



3号墓資料 B



3号墓資料 C



2 3号墓の緑色 (PA FT-IR)

(a) 3号墓A、(b) 3号墓B、(c) 3号墓C、(d) セラドナイト (神奈川県)、(e) 海緑石 (山形県)
目盛り間隔は 0.5mm

報告書抄録

ふりがな	あこだおうけつぼぐん・あこだいちごうふん							
書名	赤田横穴墓群・赤田1号墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	奈良市埋蔵文化財調査研究報告							
シリーズ番号	第4冊							
編著者名	池田裕英 鐘方正樹 安井宣也 村瀬 陸 奥山誠義 柳田明進 鶴 真美 Walter Edwards 周 吟							
編集機関	奈良市教育委員会 教育総務部 埋蔵文化財調査センター							
所在地	奈良市大安寺西二丁目 281 番地							
発行年月日	平成 28 年 3 月 18 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤田横穴墓群・ 赤田1号墳	奈良市西大 寺赤田町	29201	-	34°41'59.2"	135°46'21"	第1次 1983.5.26～ 1983.6.15	150㎡	病院建替
						試掘 2010-4次 2010.11.17～ 2010.12.28	1,050㎡	遺跡有無確認
						第2次 2011.1.7～ 2011.3.28	1,050㎡	病棟増築
						第3次 2011.9.9～ 2011.9.16	60㎡	遺跡範囲確認
						1号墳 2014.8.11～ 2014.8.20	160㎡	有料老人ホー ム新築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
赤田横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	土師器、須恵器、金属器、銭貨、土製品、陶棺				
赤田1号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	土師器、須恵器、耳環、陶棺				

奈良市埋蔵文化財調査研究報告第4冊
赤田横穴墓群・赤田1号墳

印刷日 平成28年(2016)年3月10日

発行日 平成28年(2016)年3月18日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
〒630-8135 奈良市大安寺西二丁目281
TEL 0742-33-1821
FAX 0742-33-1822
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会
〒630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1
TEL 0742-34-1111(代)

印刷 関西美術印刷株式会社
〒630-8325 奈良市西木辻町153-1

